

異世界に転移したと思ったら転生者？
世界転生～～

～～幼女で鍛冶師な異

銀鈴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、なんの前触れもなくクラスごと異世界に召喚されてしまった主人公 白沢 蒼矢。しかし、彼は神の目に止まり幼女に姿を変えられ、異世界に転生させられてしまう。文句を言っても仕方ないので、蒼矢もといオリは「ステータス制の世界ならなんとかなるよね！」と、異世界生活を満喫しようと決意した。

そんな見た目に似つかわしくない力を持った幼女が、なんやかんやで世界を平和にしちやったりするかもしれない話。

この小説は、作者が勢いで書き始めた物です。テンプレ、どこかで見た展開？超展開などの成分が含まれています。

2016年11月1日日本編完結しました。ひとえに読者様のおかげです、本当にありがとうございます。

F a t e 編は別小説になりました

目次

番外編

イオリのメモ | 1

番外編 | クリスマス | 7

番外編 | クリスマスⅡ (1/2) | 10

番外編 | クリスマスⅡ (2/2) | 16

番外編 | ハロウィン | 21

第1章 異世界転移? いいえ、転生です

第1話 転生したら幼女になってたんだが | 25

第2話 初めての戦闘 | 30

第3話 冒険者、仕事しろよ: | 34

第4話 ちよこつと説明&テンプレとの遭遇 | 37

第5話 テンプレ戦 | 43

第6話 ランクアップ | 46

第7話 初めての鍛冶……へ? | 49

第8話 お久しぶり! でもないか | 53

第9話 買い物、そして宿屋 | 57

第10話 初めてのクエスト! | 61

第11話 騒がしいギルド | 65

閑話 | 1 プロログ (勇者サイド) | 68

閑話 | 2 勇者召喚 | 71

閑話 | 3 ステータス (勇者) | 75

第12話 唐突なレベル上げ……終わり | 78

第13話 お祭りと新たな武器と | 1 | 83

第14話 お祭りと新たな武器と | 2 | 87

第15話	隣町からの冒険者	92
第16話	父さんにもぶたれたことないのに！	95
第17話	出陣！	98
第18話	私の戦い方	102
閑話―4	天上院の今	105
第19話	作戦会議です！	109
第20話	討伐開始！	113
第21話	悪寒の正体	117
第22話	オークエンペラー	121
第23話	一章エピローグ	124
閑話―5	勇者サイドの後日談	128
第1章登場人物紹介		132
第2章	もう一人の転生者	
第1話	プロローグ	137
第2話	もう1人の転生者	140
第3話	初めての仲間？	144
第4話	夏だ祭りだ	149
第5話	ミスコンとロリコンと	153
第6話	ミスコンとロリコンと―2	158
第7話	ミスコンとロリコンと―3	161
第8話	関所の通過	165
第9話	黒い悪魔	168
第10話	目的地	173
第11話	ヴォダン到着！	176
第12話	事件です！	180

第13話	武技と精霊術	183
第14話	武器の改造タイム!	186
閑話―6	イオリの行方	191
第15話	偵察	194
第16話	vsオリハルコンティラノ	198
第17話	決着	201
第18話	お祭り	205
第19話	第2章エピローグ	209
閑話―7	ユニークモンスターの討伐(勇者)	213
閑話―8	変わる勇者達	216
第2章登場人物紹介		219
第3章 激動の獣人界		
第1話	プロローグ	228
第2話	事情を話そう	232
第3話	ドラゴン(ティラノ)ステーキ	237
第4話	ギムレー	242
第5話	ギルドにて	245
第6話	獣王国・シャルフ	250
第7話	修羅の巷	254
第8話	幼女2人	258
第9話	強襲!!	261
第10話	瀕死なイオリ	266
第11話	そう、リユートの師匠は	270
第12話	全治一週間	273
閑話―9	獣王国会議	277

閑話―10	銀狼の獣人(幼)	280
第13話	目が覚めた!	284
第14話	りよーよーちゅー	288
第15話	りよーよーちゅー その2!	292
第16話	りよーよーちゅー その3!	296
第17話	ノーロリータ・ノーライフ	300
第18話	リユートさん今何してますか?忙しいですか?助けてもらっていいですか?(切実)	304
第19話	やはり私の貧乏生活は間違っている	309
第20話	鬼畜!ロリコン!鬼!悪魔!匂いフェチ!	313
第21話	風呂、そこは戦場	317
第22話	第二の大イベント	321
第23話	カードキャプターイオリ	325
第24話	この男は駄目だ	330
第25話	改めて考えると	334
第26話	セーフ	337
第27話	鍛冶キチ	341
閑話―11	独断専行、そして	345
閑話―12	始まる戦争	349
閑話―13	勇者vs獣王	353
第28話	隠し事	359
第29話	誰がそうであるか、薄々気づいてはいたよ	364
第30話	鍛冶キチ×ガチロリコン!!?	368
第31話	ランクアップ!エクS(削除されました)	372
第32話	舞台裏	377

第33話	お酒は二十歳になってから	381
第34話	タバコも二十歳になってから	385
第35話	第3章エピローグ	388
第3章登場人物紹介		392
第4章 出会いと再会の魔界		
第1話	プロローグ	402
第2話	橋の街	406
第3話	暇を持て余した	411
第4話	鉱石生成の真の力	415
閑話―14	人間界の今	419
第5話	魔界突入!	424
第6話	ダンジョン攻略の敵	428
第7話	ダンジョン行こうぜ!	432
第8話	電波少女と苦労男	436
第9話	ダンジョンに出会いを (ry	440
第10話	やっぱりだよ!!	444
第11話	ダンジョンコア涙目	448
第12話	広がる悪意	451
第13話	いい雰囲気?	455
第14話	いい雰囲気?そのに	459
第15話	懲りないイオリ	463
第16話	まともじゃなかった系義手	466
第17話	次の目的地は?	471
第18話	出発!	475
第19話	カオスなパーティーの日常	480

閑話―15	人間界の今②	483
第20話	ダンジョンからの呼び声	486
第21話	CRS	490
第22話	あつ(察し)	495
第23話	シヨゴスは犠牲になったんだ	500
第24話	場違いな水着回 ぜんぺん	504
第25話	場違いな水着回 こーへん	508
第26話	TRPGじゃ無くても詰んでる件	513
第27話	思い：だした	518
第28話	大惨事	524
第29話	幼女のおこには天変地異が宿っている	529
第30話	全く小学生はs(殴三)	533
第31話	初めての	538
第32話	何故どうして広い世界の中で	546
第33話	私は抱き枕じゃないよ	552
第34話	ルガーランスは魔法の杖	556
第35話	第4章エピソード	560
第4章登場人物紹介		564
第5章 平和溢れる地球		
第1話	ぷろろーぐ	577
第2話	地球に転移だー	582
第3話	次元の狭間にて	587
第4話	私がかああえってきたああ!	592
第5話	姉との遭遇	596
第6話	私は僕で僕は私	600

第7話	将来、ねえ…	605
第8話	転移事件	609
第9話	転生者達	614
第10話	無事に済むとでも思ってたの？	618
第11話	お風呂でピンチ	622
第12話	帰還までのカウントダウン	626
第13話	再び異世界へ	630
第14話	異世界に帰還	634
第15話	危険なスキル達	638
第16話	どこにだって七光りは居る	643
第17話	ダなんとかさんは玩具	647
第18話	ようやく人間界へ	652
第19話	人間界は衰退してました	657
第20話	勇者P T V s 幼女達	661
第21話	中途半端な決着	666
第22話	いらいらイオリちゃん	670
第23話	人間界の今③	675
第24話	再会	679
第25話	第5章エピローグ	684
第5章登場人物紹介		688
第6章 滅びの人間界		
第1話	プロローグ	703
第2話	勇者側の鍛冶師	707
第3話	やっぱりこのお店おかしい	711
第4話	フラ（イン）グ（ゲット）	715

第5話	ラブフラゲ	719
第6話	蹴り上げは痛い	723
第7話	今回私は悪くない	728
第8話	外堀なんて埋まっていた	732
第9話	速さが足りてた	736
第10話	現状の再確認	741
第11話	魔改造	746
第12話	魔改造魔改造	751
第13話	精霊として	755
閑話―16	勇者として	759
第14話	迫る刻限	764
第15話	しにがみと魔女っこ	769
第16話	清算	773
閑話―17	営倉の中で	778
第17話	「私」として	781
第18話	最初で最後	785
第19話	終わりの始まり	789
第6章登場人物紹介		794
最終章 幼女で鍛冶師な異世界転生		
第1話	ぷろろーぐ	803
第2話	なんで私ばかり	807
第3話	現状は最悪	811
第4話	【流星群】	816
第5話	恋する乙女	821
第6話	一先ずの収束	825

第7話	戦力集結待機中	829
第8話	ねえどんな気持ち	833
第9話	開戦の号砲	838
第10話	王都突撃	842
第11話	双剣士と鍛冶師	847
第12話	勇者と邪神、時々…	851
第13話	v s 強欲	856
第14話	あなたはそこにいますか？	860
第15話	暴走	864
第16話	いあ！いあ！	868
第17話	継承	872
第18話	全部ティア様が悪い	876
第19話	強欲討滅	880
第20話	ちよつと訳わかんないです	884
第21話	ラストバトル前	888
第22話	ロボットつてロマンだよね	892
第23話	降り立てなかった墮天使○	896
第24話	墮天使○を墮とそう	900
第25話	先行した者達	904
第26話	激突	908
第27話	ミンチより酷えや	913
第28話	ラスボスが復活はテンプレ	917
第29話	龍明姉さんリスペクト	921
第30話	魔神、死すべし	924
第31話	風に乗りて歩む者	928

番外編

イオリのメモ

《ステータスについて》

HP……そのまま体力。普通に生活してても……というか、疲れたりと減る。勿論休めば回復する。ポーションや光系の魔法でも回復できるけど、それだと疲れは回復しない。光魔法《リフレッシュ》は別。

MP……魔力。主に魔法を使うと減る。無くなると気絶する。魔力切れで気絶すると、少しかMP総量が増える現象を確認。まあ、やらないよりはマシな程度。

STR……筋力とか攻撃力(物理)。いくらこれがあっても、筋肉モリモリのマッチョマンになる訳では無いみたい。あと、いつでも力を入れるかは制御できるっぽい。スタミナにも少しだけ関わってるような感じがする。

DEF……防御力(物理)。STRと同じく、いくらこれがあっても皮膚が硬くなったりはしないっぽい。それと、スタミナにも少しだけ関わってるような感じがする。

追記 : 幾らこれがあっても怪我はするし血は出るみたい。ただ入るダメージの量が変わるだけみたい。

AGL……素早さ。走ったりする以外にも、全体的な速さに関わってるっぽい。因みに、幾らこれがあってもスタミナが無ければ持続は出来ない。

DEX……器用さ。私のはぶっ飛んでるからあっているのか微妙だけど、全体的な器用さと技術の習得のしやすさに関わってるっぽい。ミシン並みに針で縫えるってどうなのさ……

MIND……精神力とか防御力(魔法)。いくら高くても、本人の精神が強くなる訳では無いみたい。この弱い涙腺をどうにかしたかったのに……

INT……賢さとか攻撃力(魔法)。DEXと同じように、これが高

いと技術の習得が楽になる……らしい。あと、魔法の威力とか制御力が上がる。これがマイナスまで落ちると、発狂したり狂っちゃうっぽい。

LUK……幸運値。レベルアップしても、あんまり上がらないステータス。これがマイナスまで落ちると、ありとあらゆる不運が襲ってくるって説明欄に書いてあった。

えっと、ステータスの最大値は99999で、LUKを除けば年齢で変動するみたい。LUKはその時々で変動するっぽい。因みに、INTが下がるのは呪いの武器に触ったりした時だつてさ。幸運のみ最大999。

《スキルについて》

職業スキル……職業のレベルと一致してるスキル。あればそれ相応の事が出来るようになるスキル。

EXスキル……レベルを持っていないスキル。大体が通常スキルの上位互換の効果っぽい。レベルは無いが、代わりに進化はあるみたい。

通常スキル……星の教程もあると言われるスキル。戦闘的な《剣術》や《槍術》のような物から、《鍛冶》や果てには《盆栽》なんて物まであるらしい。一定のレベルまで上がると、《鎌術》↓《大鎌術》のように成長していくらしい。EXスキルまで成長した記録もあった。該当するスキルを持っていなくても、剣を振ったりすることはできるが、ある人と比べると雲泥の差。スキルがある人でも、それだけの人と持っていて練習している人とはレベルが違う。

《魔法スキルについて》

持っているら、MPさえあれば魔法を使えるようになるスキル。レベルに応じて魔法が覚えられるが、応用出来れば更にレパトリーが広がっていくらしい。そこはDEFやINTが関係しているらしいので、これからも積極的に取っていききたい。

《職業について》

個人個人で違った素養があるので、それに沿って手に入れる物。レ

ベル25刻みで取ることができ、ステータスが上昇する。一定条件を満たすと変化していくらしいけど、私のヘーパイストスやドヴェルグは最初から最終形態。あ、最大で10個だけらしいよ。

《レベルについて》

RPGとかのゲームで良くあるもの。上がれば上がるほどステータスが上昇していく。最高レベルは300なんだって。

《加護について》

その人が神から受けている加護。神から注目されたりすると増え、様々な効果を持っているらしいよ。

+はその加護の強さ。勇者は全員が世界神の加護++を持っているって言った。

《称号について》

条件を満たすと入手できる物。これも様々な効果を持っている。あればあるだけ有利！みんな何かしら行動起こそうぜ！

【幼女】のように全く効果がなく、ただ単に見た目などを表している物も多いみたい。

《属性》

火・水・風・土・光・闇 の基本的な6属性に加えて、無・木・氷・雷・空間・呪…などの属性。他にもあるみたいだけど、そっちはよく分からないかな。

・強弱について

基本的には、ポケモンとかFFとかのゲーム的に考えていけば問題が無いみたい。

光↓闇・呪い。闇↓光。空間・無は強弱無しらしいよ。

・成長

火↓爆炎↓業火↓劫火魔導

水↓流水↓蒼海↓海淵魔導

風↓旋風↓暴風↓颶風魔導

土↓鉱石↓大地↓豊穰魔導

光↓聖光↓神聖↓星光魔導

闇↓暗黒↓漆黒↓星雲魔導

木↓大樹↓森林↓樹界魔導
氷↓冷凍↓氷結↓零度魔導
雷↓迅雷↓雷光↓霹靂魔導
空間↓次元↓時空魔導
呪↓呪怨↓怨嗟↓魔導・禁呪
竜↓龍↓龍皇魔導

無

生活

調べられたのはここまでだったけど、勇者とかの一部の人にはユニーク魔法っていう魔法が使えるみたい。

《種族》

人族……普通に人。ステータスは、全部が平均的に伸びるらしい。特に何かに特化する訳ではない代わりに、オールラウンダーかな？
いや、器用貧乏かも。

・ 武技

HPを削って使う必殺技的なものらしい。流水加速……なんだろう、書いてて悲しくなった。

獣人族……獣人、ケモミミモフモフ。身体能力が人族より高い代わりに、一部の種族を除き魔法関連の能力が低い。魔法が使える種族は、獅子族・銀狼族・栗鼠族・黒猫族・狐族・亀族？ らしい。統一どころ？

・ 精霊術

精霊のパワーを借りて……いや、使って？ 発動する必殺技的なものだよ！ byリユート。精霊の刻印が出来たりする訳じゃないらしい。

契約には、腕輪とか指輪とかネックレスとかのアイテムが必要らしい。

魔族……何やら人間界と対立しているらしい。魔法関連の能力が人族より高い？ そうだ。鬼人や動く鎧みたいな人がメジャーだが、九尾の狐はこっちに分類されるらしい。謎だ。

一応書いておいた必殺技欄。なんかあるのかな？

《七大罪スキルについて》

壺『傲慢』（所持者 柊）

・極大の単発攻撃

・理性侵食（段々と慢心に囚われた思考に染まってゆく）

式『嫉妬』（所持者 海堂）

・スキルキャンセラー

・理性侵食（段々と妬みに囚われた思考に染まってゆく）

参『色欲』（所持者 海堂）

・完全洗脳

・理性侵食（段々と情欲に囚われた思考に染まってゆく）

肆『暴食』（所持者 イオリ&ティア）

・消費ステータスストック

・理性侵食（段々と飢餓に囚われた思考に染まってゆく）

伍『強欲』（所持者 藻部島）

・スキル強奪

・理性侵食（段々と欲深さに囚われた思考に染まってゆく）

陸『憤怒』（所持者 海堂）

・一時的な全ステータスの極大化

・理性侵食（段々と怒りに囚われた思考に染まってゆく）

漆『怠惰』（所持者 騎士団長&フェニ）

・恒久的なデバフ

・理性侵食（段々と無精に囚われた思考に染まってゆく）

・ただ、所持者に合わせて少し変質するって話だから注意。

《七元徳スキルについて》

壺『忠実』（所持者 天上院）

・最上位防御スキル

・カウンター

式『節制』（所持者 先生）

・拠点設置スキル

- ・自身のステータスの再分配
- 参 『慈愛』（所持者 クラネル）
 - ・最上位回復スキル
 - ・最上位バフスキル
- 肆 『勇氣』（所持者 ロイド）
 - ・最上位補助スキル
 - ・能力底上げスキル
- 伍 『叡智』（所持者 イオリ&ティア）
 - ・最上位鑑定スキル
 - ・最上位情報系スキル
- 陸 『正義』（所持者 アルデイト）
 - ・最上位攻勢スキル
 - ・特殊攻撃スキル
- 漆 『忍耐』（所持者 天上院）
 - ・最上位耐性スキル
 - ・オート回復スキル

番外編―クリスマス

「メリークリスマスッ!!」

パアーンと、朝起こされたばかりの僕にクラッカーが放たれる。こんな事をしてくるのはイオリさんしか居ない筈なのだが、目の前に立っているのは、ミニスカサントアの格好をした、白い大きな袋を背負う黒髪ロングの美少女だった。

「誰?」

「ひつどいなあ! 私だよ私! イオリちゃんですよ! 謎パワーで、転生前の身体に戻ったのですよ!」

そう言いながらイオリさん? は一旦白い大きな袋を置き、左手を腰に当て右手で裏ピースというアイドルのようなポーズを取る。それは何故か雪の降りしきる森の中にとてもフィットして……

「じゃなくて! いきなり何なの!?! とうか今は夏だよね!?! とうか元男って話じゃなかった!?!」

「少し過ぎたけど、リアルなタイムがクリスマスなんだよ! それ用の番外編をやるしかないでしょ!! あの駄女神が性別だけは元に戻さなかったんだよチキショーッ!!」

最後の言葉を言った辺りで袋を拾い、言い切った直後に白い大きな袋を振り回し僕に叩きつけてくる。

「あばっ!?!」

たかが大きな袋と思っていた僕は、思いもよらない強烈な衝撃を受けて吹き飛ばされた。

「いった! 何が入ってるのさその袋!」

「夢と希望と愛と金属塊だ!」

「何その最後のやつ!?! 痛い訳だよ!」

と、そこまで言った時に、周囲のどこにもレーナが見当たらないことに気がつく。そういえばサントアの袋とは、本来はプレゼントが入っているものではなかったか? そんな事が頭によぎり、まさかと思いイオリさんの顔を見ると、案の定口をニヤリと歪めていた。

「そしてこれが! 私とレーナさん合同の! リュートさんへの!

クリスマスプレゼントだあああつ!!」

そう言つて白い袋から、明らかにサイズの合っていない大きさの箱を取り出して僕の目の前に置く。綺麗に包装されたそれは、ちょうど人が一人入れる程の大きさで……

「……………」

僕が無言でビリビリと包装を破き、蓋を取り払うとそこには……

「わ、私自身が、リユートくんへの、く、クリスマスプレゼントです……にゃん？」

ダボダボのワイシャツに、ずれたメガネをして、顔を真っ赤にしてニヤンとしか表現のしようのないポーズをとったレーナが座っていた。その頭では、猫耳と大きなピンクのリボンが揺れている。

「こ、これでいいの？ イオリちゃん？」

「そりやあもう勿論ね！ リユートさんならこれでイチコロよ！」

誇らしげに、清々しい笑顔でサムズアップするイオリさん。そしてそのまま僕の方を向き、サムズアップも向けたまま言ってくる。

「このまま聖なる夜を性なる夜でレッツぱーりいー？」

「それを狙っていたのか貴様あああつ!!」

そう言つて逃げるイオリさんを追いかけるが、明らかに向こうは手を抜いているようなのに追いつけない。

「リユートさん、忘れてるかもしれないけれど私は鍛冶師！ それはこの身体この番外編になっても変わる事はない！ しかもここでは諸々の制限も何もないから何でもかんでも作り放題！ という訳で私が作り私が足に装備しているのはラァァアディカルグウウウドスピイイイイドツ!!」

元のキャラのロールプレイを意識しているのか、かなりの早口で言いながら、更に加速して遠ざかっていくイオリさん。そっちこそ、こちらがアレを持つている事を忘れてるんじゃないか？

「天の鎖よおおお！」

僕がそう叫んだ瞬間、まだ視界内にいたイオリさんに金色の鎖が殺到しこちらに引き寄せてくる。

「そっちこそ、僕が王の財宝を持つてること忘れてたんじゃない？」

それに、ここまでやってお咎め無しにはならないって、分かってるよね？」

そう言っただけは、何故か取り出すことの出来た剣を、両手両足を拘束されたイオリさんに向ける。その剣は、三段階に連なった円柱と、その切っ先には螺旋状に捻くれた鈍い刃、三つの円柱は挽き白のようによつくりと、交互に回転を続けている。まあ、所謂『エア』だ。

しかし、最もAUOさんの武器で有名で、凄まじい力を持つその剣を向けられても、ニタニタした笑みを止めないでいた。

「ふふふ……、私の真の姿は幼女という事を忘れたかあ！ 女神様！
今こそ私の変身の解除を！」

イオリさんがその声をあげると、天空から眩い閃光が降り注ぎみるみるうちにイオリさんの身体が縮んでいった。

「そして！ 出ろオオオオオツ！ 天つ、じよおおおいイイイイインツ!!」

「蒼矢の呼ぶ声が、聞こえたっ!!」

僕が呆気にとられている内に、イオリさんが指を弾き、閃光の収まらないその場の空間が歪み、黒髪黒眼の人物が現れる。

「天上院！ 緊急テレポートツ!!」

「了解だよ蒼矢！」

そう言っただけはイオリ達は何処かへ消え去り、この場には僕とレーナだけが残った……

◇

「なんて夢を見たんだけど、どう思う？ イオリさん」

「よくもまあ、こんな夏にそんな夢を見たよね……まあ、今度チキンとケーキくらいは作ってもいいかな？」

「リユートくん、こうかな？ にゃんっ」

「グハアツ！」

現実では、普通の夏の朝。にゃんとポーズをとったレーナを見て、転生者二人から赤い花が咲いた。

番外編―クリスマスⅡ（1／2）

「ねえティア、全然見つからないけど本当にいるの？」

「いるはず、かなりの高確率で。リンネットは、相手もいないの今日には休暇を取る。無様」

その空間を一言で表すならば、白。ただただ白のみが広がるこか聖域じみた世界。そんな場所で幼い2人の少女の声が響いている。

おそらく地表と思われる濃い白の面から離れた空中に浮かぶ幼龍に引かれる櫂せりの上で話し込む幼女達は、ここでリンネットと呼ばれる者を待っているようだった。

それだけならば、多少現実離れしているだけの微笑ましい光景だっただろう。ただし今回に限ってそれは当てはまらない。櫂には機関銃と思しき物体やら謎の刃やらが装着され戦車と化しており、それに乗る2人も片や死神を彷彿とさせる戦装束、片や有り余る神威を全解放している加減を捨てた本気の姿。それらを引く幼龍すら全身に鎧を纏い意気軒昂とした様子で、まるでこれから決戦にでも出撃するかの様だ。

「マスター、探知に感あり。8秒後、500m手前の地表に出現する」

「了解ティア！ 思いつきり突進する、やっちゃえフロー！」

「きゆるあつ!!」

何者かの出現予測を聞いたイオリが櫂を引く幼龍に突撃する命令を下し、それを受けて櫂が炎を迸らせ出現予測地点に突撃する。今更ながら、全員幼すぎである。

「つたく、はあー疲れた。こんな時にまで残業させるんじゃないわよ」

クリスマス・エクस्पugnナティア
「聖夜の蹂躪制覇!!!」

「えっ、ちょー！ 防げ！」

現れたのは、煌びやかな服を纏う黒い長髪のスレンダーな美女。そう、奴こそが（駄）女神リンネットである。

だが、どんなに駄目でも腐っついても女神は女神。自身の神域に帰還した直後の襲撃出会ったのにも関わらず、幼女達の突撃を直撃寸前で行使した力により停止させた。

「熱っ、冬なのに熱い！　というかいきなり誰よあんた達い！」

「じんぐるべーる、じんぐるべーる、鈴がーなるー」

駄女神の言葉を見無視する様に、燃え盛る焰の塊の中からそんな歌声が聞こえてくる。それは本来ならばクリスマスに楽しんで歌われる物であるが、響く声からはその様な気配は一切感じ取ることが出来ない。むしろ、溢れ出る敵意と殺意で徹底的に全てが歪められていた。

「女神様の首を欲しがる、ギロチンの鈴の音がサア!!」

「あっ」

文句を垂れつつもしつかりと突撃を防ぐ駄女神の喉元に、焰の中から横薙ぎに振るわれたヒビ割れた大鎌が迫る。常人であれば防ぎ事など出来ず、頭と身体が泣き別れする殺意に満ちた一撃であった。

「ほうわあっ!?!」

だかしかしそれすらも、素頓狂な悲鳴を上げて駄女神は回避する。が、ブリッジじみた回避方法のせいか戦車を拘束していた不可視の力が解除された様で、呆気なく戦車の突撃をその身に受けて打ち上げられてしまった。

「フローもうOK、だから続いてアレに全力でファイアブレス！」

「ティアもお願い」

その掛け声で戦車の周囲を燃やしていた焰が掻き消え、更に某格ゲーのヒルドルの超信地旋回じみた動きで戦車の向きが反転した。それにより幼龍の顔、戦車に搭載された様々な重火器が一斉に撥ねられた女神に照準を合わせ……爆音を伴い火を噴いた。

「承知した」

「砲門完全解放、フルツバーストオオ！」

それだけでは飽き足らず、御者であった2人の少女も攻勢を開始する。同時展開された合計68の半透明の門から顔を出す、銃火器の数々がそれぞれ絶叫し、それを遙かに上回る数展開された魔法陣から炎、氷、雷、水……等様々な魔法が駄女神に殺到する。

「もう一丁!!」

「了解」

少女の抱いた恨みは、この程度の事では消えることはなかった。

瞬間、天から光が落ちてきた。否、それは光ではなく物質。衛星軌道上から叩きつけられた金属の棒、運動エネルギー弾である。本来の世界で言うならば成層圏付近から落下した神ロックス・フロム・ゴッドの杖が計20本、女神が居たであろう座標に直撃した。

「破道はどうの九十、『黒棺くろくわん』」

そしてダメ押しに黒い立方体状の超重力の檻、OSR値高めの全てを圧殺する術が展開された。半端な神であったら既に死んでいるであろう桁違いの廃火力、やりすぎとも言える攻撃に駄女神の生存は絶望的となった。

「まだだあつ!!」

だがまだ怒りと恨みに些かの衰えもありはしない。

自身の精霊が使った魔法の制御を、マスターであるイオリが貰い受け出力を更にも上昇させ続けていく。周囲に散らばっていた物質を凝縮し、圧縮し、収束させてクリスマス特有の謎の力が働いた結果、それは天体現象に至ってしまった。

「創世フュージョン、収縮フュージョン、融合フュージョン、装填フュージョン!」

桁違いの魔力が溢れ渦を巻き、しかして誰もそれを止める事なく、神域に星の暴威が齎された。

「灰燼滅却、極ハイパーノヴァ・超新星ツ!」

「防衛術式展開、ニロケラス」

臨界を迎えた魔法が爆発し超新星爆発を起こす寸前、戦車が黒い球体に包まれ、放たれた魔法に神域は蹂躪された。

◇

「ねえティア、女神様どうなったと思う?」

ティアが使ってくれた防衛魔法の中、息を切らして私はティアに尋ねる。魔神と戦った時より力を入れたから、これならもしや……

「残念ながら反応は健在。けど、その反応はかなり弱くなってる」
「よしきた」

倒せなかったのは残念だけど、それだけの成果があったなら満足だ。MPを馬鹿みたいに消費したんだから、積年の恨みも含めてこれくらいは許されるはず。

「空間の安定を確認、ニロケラス解除」

ティアが魔法を解除した時、広がっていたのはやはりなんの変化もない真っ白な空間。だけど非常に嬉しい事に、そこには焼け焦げズタボロになった女神様が倒れていた。

「めーがみー様ー？ 勿論、分かってますよねえ？」
「げっ」

そう言いながら私は、笑顔で女神様の首の横に大鎌を突き立てる。ほんと、なんでクリスマスにこんな事しなきゃいけないのか……完全にプツチーンで、激おこを通り越して怒りで真顔になるレベルである。

「リインネット、流石にアレはやり過ぎ。大人気ない、あれでも神か。情けない」

「な、なんでティアヨグさんも神威全開で怒ってるんですか!？」

「当然、マスターと契約してるから」

「勿論、今日の事に弁明はあるんですよね？ 女神様いき遅れ様？」

女神様には触れず、重力の魔法で押さえつけながら少し鎌を引く。ちよつと首筋に冷たい感触を与えてあげれば、素直に話してくれるだろう。

「べ、別に私は何もしてないぞ☆」

「嘘おつしやい！ どう考えても偶然であんな事起こりませんよ!!」

クリスマスだからロイドとデートしようとして外に出たのは良いけど、手を繋ごうと思ったたら暴れ馬が突撃してきたり、拳大の隕石が降ってきたり、晴天だったのにいきなり雹が降り出したり、お店が無くなっていたり。挙げ句の果てには盗賊団が滞在してた街を襲撃するし、撃退したと思ったらギルドから緊急で誘拐されたミーニヤちゃんの救出依頼が回ってくるしまつ。それは絶対にありえない偶然、原因は女神様だと簡単に予測できる。だから、もう許さないからここまで来た。人の恋路を邪魔する奴は、地獄に落ちるが良いんだよ。具体的には馬王ヘラクあたりの蹴りで。

「か、神に刃向かった相手には何も教えません」

「………武器接続。呪え、凶スベル・エラー剣」

みんなが異世界を巡った時にコピーした武器の力を憑依、解放する。すると大鎌のヒビから溢れた黒い何かが女神様の首に染み込み、呪いが浸透していく。

「え、嘘？ 私神様なのに呪われちゃってるんですけど!？」

「嫌なら、いい加減答えてくれませんか？ 女神様」

せつかくのクリスマスを台無しにされたんだ、それ相応のやつに追加で積年の恨みも込めた反撃を受けるがいい。

「ロ、ロイド君はどうしたのかな？ ☆」

「流石にロイドに、自分のいる世界の神様を斬らせる訳にはいきませんから待ってもらってますよ？ で、理由はなんですか？」

「……………」

顔を伏せて女神様は黙ってしまう。なんで答えないのかわからないけど、あと一押しな気がする。

「このままだんまりだと、壊毒流し込みますよ？」

「あーもう、言えばいいんでしょう言えば！ あなた達があんまりにもイチャイチャしてたのが目障りでしたあ！ いーですよ、私は所詮いき遅れですよ」

言い切った女神様が、小さな子供みたいに手足をジタバタさせ始めてしまった。やり過ぎ？ ううん、いい気味だ！

「神は、下半身で物を考える奴も多い。どんまい、リインネット」

「憐れまないで下さいよヨグ様!!」

ティアの本体はヨグ様で、ヨグ様の逸話は……………あつ（察し）

「うう……………ぐす、どうせ私は処女神ですよ……………クリぼっちですよ……………」
幼児退行してしまってる女神様を見て、滾っていた気持ち急が急に冷めていく。というか、むしろ可哀想になってきた。不思議だ。

「……………ここまでやっちゃってなんだけど……………強く、生きてね女神様。後、いいお相手見つけられるよう祈ってます!!」

「なんなら、私の本体にでも頼む」

「帰れえ！ しばらく私は引き籠もるから帰れえ！」

私は大鎌を引き抜いて、諸々の魔法も解除して背負う。うん、もう……………帰るかな。見てて悲しい。

「ティア、帰ろ？」

「待って、マスター。杖を経由して、今私の本体に連絡中」

いつのまにか怪我が治ってきている女神様の啜り泣きが聞こえるから、もうやめたげてよお……

「む、分かった」

「それじゃあ帰るよ、せーのっ！」

ティアと感覚を同調、転移用の門を開く。うん、よくよく考えればロイドと合わせてくれた大恩もあるし……

「コミケで買った本、少しあるんで置いていきますね」

「じゃあね、ラインネット。また来る」

「もう来るなあ！」

帰りがてら、レーナさんとかミーニヤちゃんとかにプレゼント渡して行こうかなあ……折角だし。

番外編―クリスマスⅡ（2／2）

「けほっ、けほっ。うう……」

女神様の所に突撃してから大体半日、私は見事に体調を崩してしまっていた。普通に体調不良なのか魔力が枯渇しかけてたから抵抗力が下がったのか、はたまた神罰か。まあそのどれが原因だとしても、多分これは風邪だろう。熱は38度、頭はぐわんぐわんするし身体も怠い。

「イオリ、入るぞー」

「ん、どーぞー」

ぼうつとする頭で生返事をしてドアの方を見ると、手に何かを持ったロイドが部屋に入ってきて来た。寝転がったままなのは良くない気がするから、ベッドの上でとりあえず起き上がる。

「……いい匂いがする」

「お腹空いてるだろうし、一応お粥を作って見たんだけど……食べれるか？」

「うん」

コクリと頷きつつも、そんなロイドの言葉に私は目を丸くしたと思う。だって、今まで料理のりの字も知らなかったと思うロイドが、私の為に作ってくれたとか……なんか熱上がっちゃいそう。

「ちよっ、本当に大丈夫か？ 顔真っ赤だぞー」

「うん、へーきへーき。それよりごめんね？ 折角クリスマスなのに風邪引いちゃって。折角邪魔されないような女神様懲らしめてきたのに」

頑張って笑顔を作って私はそう言う。というか折角久々にイチャイチャできると思ったのに、体調崩すなんて不覚だった。女神様の嫌がらせでずつと戦いばかりだったから、本当に楽しみにしてたのに。

「ばーか。病気なんだから気なんて使わなくて良いっての」

手に持ってたお粥をサイドテーブルに置いて、いつもはデコピンとか軽いチョップだけど頭を軽く撫でてくれた。くすぐったいけど温

かい、気持ちいいし安心する。ともすれば、ずっとこのままでいたいと思っちゃうくらいに。

「うん。それじゃあ、少しだけ我が儘言っちゃおうかな」

パジャマが汗で気持ち悪いから身体を拭いて……なんてことは流石に言わない。流石にティアに頼むもん、恥ずかしいし。そう言うのは、その、結婚してからが良いなあとか思ってた……

だからまあ頼むのは、

「お粥、食べさせて欲しいな」

そう、それに尽きる。頭は痛いし手も動かしたくはない。でもお腹は空いてるからお願ひする。後は自前の冷えピタの交換くらいだけど、それよりもご飯ご飯。食べればどうにかなる筈だもん。

小さく口を開けて、速く速くと急かしてみる。

「分かったよ。ふうふう、ほら」

「いただきます」

粥を掬ったレンゲを、溢れてもいいように下に手を添えて差し出してくれた。空腹のおかげか普段よりも格段に美味しそうに見えるそれに、小さく口を開けて食べに行く。

「どうだ？」

「ん、美味しい」

実際の所味はわからなかったけど、好きな人に食べさせてもらってるからか、なんだか胸の奥がポカポカしてきて幸せな気分になるのだ。だから、美味しい。

「あ〜ん」

運ばれたお粥を食べる。

「ん」

運んで貰ったお粥を食べる。ちよつと熱かったから涙が滲む。

「んう」

レンゲの上のお粥を食べる。なんだろう、これってなんか親鳥にエサを運んでもらう小鳥の気分。

「ロイド、もつと……もつとお」

「ごめんイオリ、凄くイケナイ事してる気分になってくる。出来れ

ば、その、静かに食べてくれないか？」

そう言うロイドの顔は赤く染まっている。私も恥ずかしいけど、こういうやり取りは楽しくって、嬉しくってクスクスと笑ってしまう。「えっと、俺なんか変な事でも言ったか？」

「ううん。デートには行けなかったけど、幸せだなあって思ってる」

こんな気持ちと日常を一言で表すなら、結局その一言に収束するだろう。女神様は懲らしめた結果引き籠もったから無駄なちよつかいはされないし、ティアも外を警戒してるから物理的な邪魔が入る事も無い。

「ほらロイド、続きお願い」

「いや、だからその言い方をだな……」

そう文句を言いながらも、ちゃんとお粥を食べさせてくれる私の彼氏。ほら、やっぱり私は幸せだ。これ以上ないくらいに。

今宵は聖夜。少し趣は違うけど、これも立派なクリスマスプレゼントの1つになるだろう。

・
・
・

「ごちそうさまでした」

「お粗末さまでした」

お粥を食べ終わった後、日本式でご飯を締める。まだ体調は良くないけど少しは元気になれたと思う。これならちよつと頑張ってみた成果も出せるかな？

「あ、ちよつと待ってロイド」

「ん？」

私はお粥の入っていた鍋とレンゲをどこかに持っていこうとするロイドを呼び止める。そしてどうにか門を開いて、今までの少ない時間からどうにか捻出した時間で作っていたものを取り出す。

「持って帰る前に、これも一緒に食べよ？」

取り出したのは、私とロイドの分の2ピースのショートケーキ。勿論フォークとお皿も忘れてない。

「それも俺があくんするか？」

「さつきは甘えたかったからそうしたけど、自分でそれくらいはできませんー」

なんだかおかしくて2人して笑ってしまう。再び席に着いたロイドと一緒に、自分で作ったケーキを食べる。うん、私の感覚なら味は良し。

「どう？ 美味しい？」

「ああ、美味しいよ」

多分、こんな立場だけが変わった問答を繰り返してしまうのは風邪のせいだろう。でも、偶にはこういうのも嫌いじゃない。

まだお昼だけど、今日はクリスマス。例えこつちの世界にそんな文化が無くても、特別な日には違いないんだ。

◇

「やっと寝てくれたか？」

目の前でスヤスヤと寝息を立てる自分の彼女を見て、ようやく俺は気を抜く。楽しい時間ではあったけど、少しだけ無理させてるみたいで申し訳なかったのだ。

「さて、後は食器を片付けて……」

「んう……」

そう思い手を伸ばそうとした時に気づいた。小さな手が自分の左手をぎゅっと握っていた。そして、多分これはどうあっても離してくれない。安心しきって気持ちよさそうな顔で寝てるイオリを見ただけで、まあいいかと思ってしまうあたり俺も相当だろう。

「でも、そうすると食器はどうしよう」

そう思い再びサイドテーブルに目を向けると、食器は全て消え去り代わりに1枚の文字の書かれた紙が置いてあった。

|||||

片付けはやっておく。今日1日はマスターの

隣にいてあげて。

ティア

|||||

|| ||

書いてあったのはただそれだけ。けれど内容は単純にして明確。

「特にやる事も無いし、偶にはこういう日があつてもいいか」

そう思い、自分も少し眠くなつていく事に気がついた。外は既に暗い、なら少し休んでもいいか。

「おやすみ、イオリ」

そう言いながら俺も、優しい眠りの中に沈んでいくのだった。繋いだ手の、小さく大切な温もりを感じながら。

番外編―ハロウィン

ゾワリと何か予感を感じて、僕ことリユート・カンザキは立ち上がった。どこか既知感を感じるこの感覚、確かあればクリスマス……
「リユートくん、どうかしたの？」

そう言つて、エプロン姿のまま可愛らしく首を傾げるのはレーナ・カンザキ。愛すべき僕の嫁さんだ。そして今僕たちが居る場所は所謂新居だ。地球みたいにも二階建てとかではないけど、僕にとつて幸せを一番感じる事のできる場所である事に違いはない。

もし何時ぞやの夢みたいなき事が起きるなら、ここに居るのは確実にマズイ。

「なんか凄く嫌な予感がしてね……」

冷や汗をかきながら、このよくわからない悪寒について説明しようとした瞬間、懐かしい災厄の音が耳に届いた。いや、届いてしまった。

視界が一瞬だけグニヤリも歪む。けどそんな事は気にしていられない。来るか、来るか来るか来るか来るか……来い！

「スープああ、イナズマ、キイイック!!」

――雷を撒き散らして下降

――お菓子の香りを充満させて強襲

天井を突き破り突入して来た事によって材木や瓦などの破片が……否。なぜかクツキーやチョコレートが飛び散り、小麦粉の煙が立ち込める中、こんな事をしでかした犯人が姿を現わす。

「ダイナミック☆ハッピーハロウィン!!」

まず見えたのはいかにも魔女らしいトンガリ帽子。そして声を聞いた時点で分かってしまった。半ば予想がついていたとはいえ、やっぱりあの人がやらかした。

「魔女っ娘イオリちゃん参上！ トリック・オア・トリートなんだよ！」

かぼちやパンツに手には箒。左右紅蒼色が違う瞳に、セミロングで揃えられた輝く銀髪。間違えようもない。いかにも魔女な格好をしてはいるけど、元旅の同行者のイオリさんがそこには堂々と立っ

た。

「アンハッピーだよこのお馬鹿！」

「ふっ、見切った！」

不意打ち気味に振り抜いたハリセンは、物の見事に打ち払われてしまった。くっ、ツツコミすら許さないだなんて……

「お菓子をくれなきやイタズラしちゃうぞ！　がおー」

「そんな事よりも、どうしてくれるのさこの惨状は!!」

顔文字で表すなら（「・ω・」）がおーという感じのポーズをしているイオリさんの顔を掴み、自分が引き起こした被害に目を向けさせる。

レーナは何か悟った様な顔をしてるけど、まあ一旦置いておく。

「お菓子の如く甘いよりユートさん。一体いつから、私が幻術を使っていないと錯覚していた？」

見事なドヤ顔のイオリさんの紅い方の瞳には、いつの間にか勾玉の様な文様が3つ浮かんでいる。まさか、これは……

「イザナギだ」

「なん……だと」

見渡せば、広がるのはいつもと変わらないリビング。破壊の後も、小麦粉の煙も一切ない。ただ1つ違うとしたら、目の前に立つイオリさんのみ。一体いつから幻術を掛けられてたんだ……？

「いやー、やっぱりリユートさんは反応が良くて楽しいね！」

「僕で遊ぶのはやめてよ……で、ロイド君はどこにいるの？」

「留守番してもらってる！　ティアはいるけどね！」

「ワタクシ　オマエ　マルカジリ」

元気に手を上げてそう答えてるけど、それで良いのかおい。ジャックオーランタンの被り物をしたティアさんも実体化したけど、なんでこうもお巫山戯が過ぎるのか……まあいいか。

「レーナ、何かお菓子ってあったっけ？」

「どこかに和菓子があったから取ってくるね！」

パタパタと走っていくレーナの姿は、この混沌とした状況の中じや唯一の癒しだ。年に何度か、これからもこうやって押しかけられるん

だろうと思うと頭が痛くなってくる。

「やっぱりコンタクトなんてするもんじゃないね」

「ドウイ」

ああ、あれは写輪眼じゃなくてコンタクトだったのね。多分地球で買って来ただろう。ティアさんのかぼちやは……うん、見なかった事にしよう。あんなのがユニーク装備だなんて僕は見なかった。知らぬ知らぬ聞こえぬ見えん。

「それとリユートさん、はいご祝儀！ 結局まだ渡せてなかったから。多分売ると白金貨10枚くらいになるやつ」

「コンゴトモヨロシク」

そう言っつて白木の鞘に収められ、多分水引で結びきりがされている日本刀を手渡してくる。ティアさんもティアさんだし……あーもうメチャクチャだよ！

そんなもう頭痛のタネにしかならない状況に、スリッパの足音と共に天使が戻って来た。

「はい、イオリちゃんにティアちゃん。今度からはちゃんとドアから入って来てね？」

「うん！ 分かった！」

「アイアイサー」

多分ドアからは入ってくるけど、マトモなことはしないだろうなあ」と諦めながら、平穩の戻って来た空間で1人ため息を吐く。

「それで、ハロウィンって色んな所を回るって聞いたけど他にも行くの？」

「一応最後にお姉ちゃんの所に行くかな？」

「ハウコク、カネル」

ハロウィンの為に次元を超えるのか（驚愕）

「それじゃあまたね！」

「バイバイキン」

そう言っつて2人は、おそらく転移でどこかに消えて行った。それと同時に、視界が霞み始めて……

『ジャスト1分、良い夢見れたかな？』

「間違いなく悪夢だよ!!」
頭の中で響いたそんな声に、
ついつい怒鳴ってしまうのだった。

第1章 異世界転移? いいえ、転生です

第1話 転生したら幼女になってたんだが

異世界転移という物を知っているだろうか?

それは、ネット小説ではありふれたタイトル。異世界からの勇者召喚のような物や神様の不注意が原因の物などを始めに、似たような物は探せば探すだけ無数にある。

帰り道、家の中、事故にあった後。様々な場面で現れるそれは、世の年頃の男子なら一度は憧れる物だ。

何故いきなりこんな話をしてるのかって? 今まさに、目の前で読んだことのあるようなことが起きているからだ。

目の前には光り輝く魔法陣、慌てる教師にクラスメイト達。そんな状況に追いつけず、口を開けたまま固まってしまっていた僕は、目の前で炸裂する光に飲まれた。

目を開けると、そこには大草原が広がっていた。

「あれ?」

ふと疑問に思った。異世界召喚なら、それ相応の場所に呼ばれるはず。

とりあえず起きて現状を確認しようとして起き上がった。どの方向にも、近くに池のようなものはあるものの、建造物らしき物は……あ、なんか城壁みたいなのがあった。しかしそれだけだ。

「……なにこー?」

そう呟いたところで、ふとおかしい事に気がついた。声が高い……というか俗に言うアニメ声になってる。しかもロリい。

よく見れば自分の服装や体もおかしい。着ている服は自分の通っていた高校の物だが女物で(スカートから判断)、目線は低いし(体感だと120cmくらいかな?) 殆ど無いに等しいが、男なら持っていないはずの膨らみが……

「っつはこー?」

一応胸がある!? 僕が少しでも男らしくなろうと筋トレを続けて

いたのに、筋肉がまな板に!? 慌てて自分の胸以外の体を触りまくる。男らしいがっしりした腕が柔らかくなっている! 足もほっそりとして真っ白くなっている……僕の日焼けしまくり(大嘘)の男らしい足が……すね毛は元々なかったけど。というか全体的にプニプニした感じになってる!! そして髪は腰まであり、サラサラした銀髪。

うん、完璧に女になってしまっている。しかも幼女。

男らしくなろう! そう決意して色々としていたのに何故か女になっっている自分の体にテンションが下がっていると、足元に手紙が落ちてることに気づく。なにになに?

|||||

どうも、あなたの女神だよ☆ いや〜……なんかあまりにも顔が可愛かったから、勇者召喚だったんだけど、女の子に転生させちゃいました☆ ごめんね♪

それとクラスのみんなどは違う場所に転移させたから頑張れ!

その分チートで強化してあげたから、どうにか頑張つてね☆

PS:通行証と武器はアイテムボックスの中にあるし、ステータスは《ステータスオープン》って言えば開けるからね♪ ☆

|||||

気がつけば、僕は手紙をビリビリに破り捨てていた。フーツフーツ落ち着こう、そう、まずは水でも飲んで落ち着こう。そう思い、僕は池らしきものに向かって歩き出した。

僕の名前は白沢蒼矢。高校1年生の15歳だ。いまさら自己紹介してもやや遅い気がするがしておこう。僕は生まれつき顔が女らしかった。そのせいで男子にはからかわれ続け、時にはイジメられ、女子に「かわいい」なんて言われてしまうような男だ。

中学生の頃からは、ゲームをやり始めてのめり込んだ事で男友達も増えたが、相変わらず女子から話しかけられる事が多く、高校に

入ってもそれは変わらなかった。

こんな嫌な記憶をなんで僕は説明してるんだろう？ テンションが落ちてるせいで何かとナーバスになっているのかもしれない……そんな事を考えているうちに池に着いたようだ。

「なにこの女の子……」

水面に映っていたのは、非常に可愛らしい女の子だった。綺麗な蒼色の眼に、小さい子特有のプニプニしてそうなほっぺ、銀色の髪なんてファンタジーがとても似合っている。そんな女の子が、小さな口を開けてポカーンとしている。

「これが……僕？」

若干面影は残ってるけど本人にしか分からないレベルだろう。いや、姉ちゃんとかパ……お父さんとかお母さんなら分かるか。

「ハッ！ 水飲めるよね？」

確認できないまま飲んで、腹でも壊したら一大事だ（現実逃避）なんとか確認する方法が無いかと考えていると、先ほどの手紙に書いてあったことを思い出した。異世界転移ならあの有名なスキルがあっても不思議では無い筈！

「《ステータスオープン》」

そう言うと、目の前に半透明の青の画面が現れた。

イオリ・キリノ

種族 人族

性別 女

年齢 7

職業 ヘーパイストス

Lv 1

HP 31 / 31

MP 100 / 100

STR 25

DEF 20

AGL 15
DEX 200
MIND 10
INT 20
LUK 12

《スキル》

職業

ヘーパイストス LV1

EX

家事万能 無詠唱

通常

アイテムボックス LV5 隠蔽 LV5 鑑定 LV5

槌術 LV1 身体能力強化 LV1

火魔法 LV1 土魔法 LV1 生活魔法 LV —

《称号》

転生者・神の気紛れ・幼女

《加護》

世界神の加護++ (スキル成長補正)

鍛冶神の加護++ (DEX+150 +成長補正50)

《装備》

武器・初心者之槌

防具・制服 上下 靴下 白 運動靴

予想通り鑑定もある。どうやらチートで強化しといてあげたからというのは本当のようだ。けれど、名前も変わってるし年齢が下がってるとは……はあ……

それに、この世界の人の平均的ステータスくらい教えてくれてもいいじゃないか、女神様って言うならさあ……

「あ、そうだ。水！ 《鑑定》！」

独り言は止めだ止め。いらぬ事を考えてしまいそうだ。

第2話 初めての戦闘

「うげえ、やっぱりかよ」

そのオオカミは、こちらが啞然としていると、いきなり突進をかましてきた。急いで回避行動をとる。

スカッ

「グルルルッ！」

距離があつたのでなんとか回避できた。けれど……………

（うわぁ……………凄い怒ってるよあいつ……………どうしよう、マズイよなぁ……………）

なぜなら先ほど、このオオカミを鑑定した時、このように出ていたからだ。

|||||

フィールドウルフ ランクF

Lv 3

HP 50 / 50

MP 0 / 0

|||||

どうにかしないとオオカミの餌ルート一直線である。

（あ、そうだ！ こういう時こそ魔法だよ！）

そう思い、両手をかざしながら言う。

「えーとえーと、メラ！ ファイア！ ファイアボール！ 火球！

あ、出た」

《火球》と言った途端、手のひらに魔法陣が展開され、火球が飛び出していった。飛び出していった火球はまっすぐにオオカミに当たり、爆発した。が、しかし

|||||

フィールドウルフ ランクF

Lv 3
HP 34 / 50
MP 0 / 0

|||||

うん、倒せてない。けど今なら、使える魔法を確認できる！

えーとなになに？ 火魔法は《火球》と《炎壁》で土魔法は《石弾》と《マッドプール》か……よくある通りの意味なら最後のが今の状況だと一番使えそうだな。そこまで思った時、煙が晴れてオオカミが僕を捕捉した。

「グルルル……ガウツ！」

そう言つて僕に向かつて走ってくる。ええい！

「喰らえ！ 《マッドプール》！」

そう言つた途端、オオカミの足元が泥とかしオオカミの足がもつれ顔から泥沼に突っ込んでいった。

「ふう……怖かった。でも今なら倒せるかな？ 《石弾》 《石弾》 《石弾》！」

オオカミの頭に3発の《石弾》が殺到しHPが0になった。あ、ハンマー使つてなかった。まあいいや。

その時、頭の中にタラララタタターと、ドラクエのようなレベルアップ音が流れたので確認してみる。

イオリ・キリノ

職業 ヘーパイストス

Lv 2

HP 31 / 37

MP 74 / 110

STR 29

DEF 25

AGL 23

DEX 250
MIND 14
INT 24
LUK 14

《スキル》

NEW!!

ヘーパイストス LV2

火魔法 LV2 土魔法 LV2 危機察知 LV1

へエ〜と感心していると、頭にゴチンツと何かが当たり、何処からか紙が一枚ヒラヒラと落ちてきた。拾って読んでみる。

|||||

どうも☆あなたの女神だよん☆

もうレベルアップなんて早いね〜☆凄いい凄いいそういえばそのままじゃ街に入れないから入る分のお金を送っておいたよ〜☆

それと、倒した魔物はアイテムボックスに仕舞っておくことをお勧めするよん☆ナイフを買って、素材を剥ぎ取って、ギルドで換金してもらおうといいよ〜☆あ、いや、君なら作ったほうがいいかもね〜☆それじゃ、ばいばい

|||||

(ふーんまあ確かにその通りだね。とりあえず街を目指して行ってみるとするか……)

空き瓶に水を入れ、オオカミをアイテムボックスに仕舞う。そして僕は街に向かって歩き出した。

〜一時間後〜

「はあ……はあ……この身体で歩いて移動……するもんじゃ……ないな……」

小一時間ほど歩いたのだが、遠くに見える城門はまだまだ遠い。そ

の割には先程のようなオオカミは大量に襲ってくるので、本当に迷惑だった。いや、お蔭でレベルは上がっているのだが。

ゴクツゴクツ

三本目の水を飲み干した時、背後からガラガラゴトゴトという音と、聞き飽きたオオカミの声が聞こえてきた。ゲツと思い振り返ると、案の定馬車がオオカミの群れに襲われていて、逃げているところだった。

深くため息を吐いていると、馬車の御者台にいる人物から声を掛けられた。

「おい嬢ちゃん！ 逃げろ!!？ 後ろからフィールドウルフの群れが来ているんだ！ 食い殺されちまうぞー！」

(まあ普通の幼女にしか見えないからそう見えるわな……はあ……面倒くさいけどやるしかないか)

もうフィールドウルフ程度なら一発で倒せるのでそう決心し、御者台の人に声を掛ける。

「あの一！ 逃げ切れるとも思えないんで、私が足止めしててもいいですかー？ 一応これでも戦えるのでー」

「それはべつにいいが……死ぬなよ？ 寝覚めが悪くなる」

「ははは、死ぬわけじゃないじゃありませんかー！ 私には世界を見て回ってみるっていう目的があるんですからー」

この世界に来てからどうせならと思った目的を言う。この世界がステータス制の世界ならレベルさえあればそこその事はどうにかできる筈だ。

そこまで考えた時、馬車が通り過ぎ、僕はオオカミの群れと接敵した。

第3話 冒険者、仕事しろよ…

「ガルルルル」

フィールドウルフの群れが僕を取り囲む、しかし僕に対して攻撃は仕掛けてこない。

何故なら、僕を中心にしてかなりの広さと深さの落とし穴をレベル2の土魔法《ピット》で掘ったからだ。接近戦？ 群れ相手にそんな事したら、こんな身体じゃ即バッドエンドルートですよ。

そんな事を説明している間にも、何匹かは飛び越えようとする。無論死にたくないの僕がそんなことを許すはずもなく、距離が足りずに落ちたり、僕自身が撃ち落としたりしていつて僕の経験値と化した。

「はあ……面倒くさいなあ……」

そう言いながら僕は両手に魔法陣を展開し、《石弾》で周囲のオオカミの頭を撃ち抜いていつている。《スナイパー》なんて称号が手に入る程だ。

「よし、これで最後つと」

《石弾》が最後のフィールドウルフの頭を撃ち抜いた時、不意に立っていた状態の体から力が抜けて座り込んでしまった。

（あれ？ 体に力が入らない。なんで？）

ステータスを確認すると、MPが切れかけていた。どうやら全身に力が入らないのは魔力切れを起こしていたためらしい。小説だとよく描かれる問題だ。

「DEXだけ化物じみてるよなあ……いや、攻撃当てやすいからありがたんだけども」

なににせよこのままじゃろくに動けないので、僕は自分の立っていた場所に寝転んで休むことにした。

◇

しばらくするとガラガラゴトゴトと馬車の音がしてきた。

何だろうと思いきちらを見てみると、どうやら先程の馬車が戻ってきたようだ。

「嬢ちゃん、お前さんがこれをやったのか？」

御者台の人が頭に疑問符を浮かべて僕に聞いてくる。

「ああ、はい。そうですね。ところで、おじさんはなんで戻ってきたんですか？」

「なんとなく心配になってな……杞憂に終わったようだなによりだが……」

何この人？ 凄くいい人だったんですけど。

「ありがとうございます。おじさんっていい人ですね」

「はは、おじさんはやめてくれ。俺の名前はシイラだ。ちなみにまだ22だからな？」

聞いた年齢よりも、かなり老けているその人の顔を見て、戸惑いながらも聞く。

「えつと……シイラさん？ にひとつ頼みたいことがあるんですけど……」

「ん？ なんだ？ かわいい嬢ちゃんの頼みだ、できるだけのことなら聞くぞ？」

うくん……もう歩くのも疲れたし、とりあえずダメ元だけどきいてみるか。

「私、この通り戦闘はできるんですけど、今は移動のための脚がないんですよ。あそこの街に行く予定なら一緒に乗せてつてくれませんか？」

そう言っつて私は少し近くなった城門を指差して言う。近くなったとは言ったものの、このまま歩いて行ったら夜になってしまいそうだ。

「おう、別にいいぞ？ それくらいならお安い御用だ。その代わり、魔物が襲ってきたらちゃんと護衛してくれよ？」

「乗せてもらう以上勿論ですよ！」

そう言っつて僕は馬車に乗せてもらう代わりに護衛をすることになった。とりあえずこれで、街には着けそうだ。

〃〃一時間後〃〃

「なんでっ」

ズドン、ズドン、バチヤン

「こんなにっ」

ギヤン、キヤイン、プギヤー

「魔物が多いのさあああっ！」

頭の中でレベルアップ音が鳴り響く。さつきから何回目だろう？

なんかイライラしてきた。

「じよ、嬢ちゃん？ そうかつかすんなって。ほら、レベルは上がってるだろう？」

「それはっ、そうなんですけどねっ、数が多すぎるんですよー!!」

こういう会話をしている最中にも、どんどん魔物が襲ってくる。この馬車そういうアイテムでも積んでんじやないの!?!?

レベルアップしたお陰で、まだ魔力切れは起こしてはいないが、このままじゃそうなること間違いなしだ。

「嬢ちゃん、後大体10分くらいだから耐えてくれよ？」

「ふっざけんなあああああっ!!」

ズドドドドドドドンツ!!

爆発音を背に、ガラガラという音を響かせながら馬車は進んでいく。

◇

「はあ……やっど……着いたあ……」

なんで街の近くの草原にあんなに魔物がいるんだよ……冒険者仕事しやがれえええ! どうせいるだろうからねっ!!

「お疲れさん、護衛ありがとうな」

「いえ、こちらこそ運んでいただいてありがとうございます」

そんな感情は少しも出さずに受け答えをする。この辺、昔の経験が役に立っている気がする。

そんな事を考えているうちに、目の前にあつた馬車が城門を通り抜け、僕達の番となった。

第4話 ちよこつと説明&テンプレとの遭遇

「はい、次の方どうぞー」

そのやる気の無さげな声に促され、僕とシイラさんは乗っている馬車ごと進み出る。

「通行証見せてくださいー」

僕はポケットに手を入れて、（実際にはアイテムボックスから）通行証を取り出して見せた。

「はい、本物ですねー。通行料は銀貨一枚ですー」

僕とシイラさんはそれぞれ銀貨を取り出し渡す。この世界では、冒険者以外の人は街に入る時、税金？ として銀貨1枚を払わないといけないとのこと。

因みにギルドは7歳から登録できるらしい、ギリギリじゃん！ いや、そうなるように調整されたのか。

「はい、たしかにー。ようこそ《リフン》へー」

特に何も問題なく入ることができた。少し遅いかもしれないが、今僕が知っている限りでの、この世界のことを説明しようと思う。

この世界の名前は「アヴルム」 3つの大陸に分かれていて、それぞれの大陸を巨大な橋で繋いでいる。

3つの大陸はそれぞれ、《人族》《獣人族》《魔人族》が治めていて、それぞれの大陸は《人界》《獣人界》《魔界》と呼ばれている。

3つの種族はそれぞれ対立しており、最近では、人族が勇者を召喚したせいもあってか、まだ戦争が起きるほどでは無いらしいが各種族間の緊張は高まっているらしい。

金銭は、銅貨が10枚で大銅貨が1枚、大銅貨が10枚で銀貨が1枚、銀貨が10枚で大銀貨が1枚、大銀貨が10枚で金貨が1枚、金貨が10枚で白金貨が1枚となっている。現代の金銭に例えると、

銅貨 〓 10円

大銅貨 〓 100円

銀貨 〓 1000円

大銀貨 〓 1万円

金貨 Ⅱ 10万円

白金貨 Ⅱ 100万円 と言ったところだ。

ちなみに現在の僕の所持金は、女神が寄越した分の銀貨2枚だけだ。

「じゃあここで嬢ちゃんとはお別れだな。たしか冒険者になるんだろう？ 冒険者ギルドはこの道を真っ直ぐだぜ」

「色々とお世話になりました。短い間でしたがありがとうございます
た」

「おう、気にするな。俺はこの街で《シイラ商店》つう店を開いてるから、暇になったらでいいから来てくれよな」

「勿論です。じゃあまたいつか！」

「おう、またな」

そう言つて僕はシイラさんと別れ、冒険者ギルドに向かつて歩いていった。

こんな身体で食い扶持を稼ぐには、お使いでもなんでもいいからやるしかない。けれど僕みたいな子供に仕事を回す人なんていない。だから、多少の危険を犯しても冒険者になるしかないだろう。Q.

E・D.

落ち着いて物事が考えられる様になるまでは、生きねば（風立ちぬ並感）

◇

「ここが冒険者ギルドかあ……」

僕はThe・ファンタジーのギルドと言える建物を見上げて言う。
「さて、どんな場所なのかな」

ギイツと軋む扉を開けて建物の中に入る。そこで僕の目に入ってきたのは、予想とは少し違った光景だった。

荒くれ者が大勢集まり、好き勝手に酒を飲んで時には喧嘩をし、時には下品な程の大声で笑い声を上げている。……そんな光景を予想していた僕だったが、実際は簡単な酒や食べ物を出すスペースがあるものの、人は数人がポツポツといるだけで殆どの席は空いており、座っている人も一名を除き、昼食を取っているようだった。

「いらつしやいお嬢ちゃん、依頼かな？」

僕がギルドの中を物珍しそうに眺めていると唐突に声を掛けられる。声のした方へと視線を向けるとそこには受付らしき場所が複数あり、その中の1人が僕へと声を掛けていた。

数人いる受付嬢達は皆美形な人か、可愛いと思える容姿をしていた。その中で僕に声を掛けてきたのは、美人系の長い茶髪の女性だった。

「いえ、ギルドの登録を……」

そう僕が言った瞬間、昼食を取っていなかった若干一名が唐突に口を開いた。

「ぎやはははは！　ここはお前みたいなガキが来る場所じゃないぞ！

嬢ちゃんが行くのはママのスカートの中だろう？」

(うわあ……テンプレうぜえ……)

そう思ったがとりあえず無視しておく。

「とりあえず、今年7才になったので登録、できますよね？」

受付嬢へと(胸元のネームプレートにラナと書かれている)問いかける。

「え、ええ。でも、冒険者っていうのは危険な仕事よ？　それに、ああいう大人の人を無視したりしたらいけないよ？」

ラナさんは咎めるような声音でそう言ってくる。そういうことから、僕も手札を切ろうじゃないか。

「でも……頼れる人も居ないし、お金がないと、ご飯も食べられないからっ……グスッ」

嘘泣きをしながら私は答える。背が低いので、涙目+上目遣いを決める。そして今の僕の幼女力があれば……

「うん、うん。大変だったんだね！　じゃあこちらのカードに血を垂らしてくれる？　それで登録できるからね！」

この通り、どうにかなるみたいだ。魅了の魔法とかがかかってそうなレベルだな。そして、小さな針を渡されので、それを使い指に刺して血を流す。

血を流されたカードは、しばらくすると粒子状になり消えていく。

・ギルドカードにあるゴールドとは、お金をどれだけギルドカードに入れているかを示している。後、銅貨一枚が10ゴールドだそう。
・パーティーを組むと、メンバーのランクの平均がそのパーティーのランクになり、経験値が共有される。

・ギルドは冒険者同士のいざこざには、基本的には関与しない。
・依頼は、自分のランクの1つ上の物までしか受けることはできない

そのほかは、基本的には普通に（日本基準）で生活していれば、問題ないものだった。

いざこざには基本的には関与しないの下りで、先程の冒険者にチラリと視線をラナさんが向けたので視線を向けると、僕の登録が終わるのを今か今かと待っていた。ついでに鑑定を使うと、モーブ 男 戦士 LV 21 ランクD と出た。

今の僕のレベルは19なので、ほとんど変わらないようだ。酔ってるし、なんとか倒せるかな？

「これで質問は終わりでいいかな？」

「はい、ありがとうございます」

「これで登録は終わったよ。あの、今なら逃げても庇ってあげられるけど……」

「大丈夫、あんな酔っ払いに負けるつもりは毛頭ないよラナさん」

小声でそんな会話をしているとモーブが、怒り心頭といった表情で怒鳴ってくる。

「登録は終わったようだなあ。よくもさつきは無視かましてくれやがったな小娘！ 表に出ろ！ 身の程ってもんを教えてやる！」

僕は露骨に不機嫌そうな顔をしながら、振り向きモーブに言う。

「はいはいわかりましたって。だからちよつとまっててくださいって。えっと、たしか最初のランクアップは試験官の人が判断するんですよね？ それって今からやる決闘でも大丈夫ですかね？」

「大丈夫だけど……本当にやるの？」

「もちろん。その権限を持つてる人をギルドに連れてきてくれませんか？ Fランクへのランクアップを申請します」

「う、うん、分かったよ。けど、危ないと思ったたらすぐに降参してね？」
それに僕はニコツと笑顔で頷き、外へと歩いていく。
よーし、とつとと最下位のランクから上げてやる！

第5話 テンプレ戦

冒険者ギルドの建物の前。現在、僕はそこでモーブとかいう冒険者と向かい合っていた。

「へっ、今更泣いても腕の一本や二本じゃ許してなんざやらねえからな」

モーブが長剣を持ちながら僕を相手に凄みを利かせる。周りの人達曰く依頼の打ち上げをやっていたらしい。そのためか、武器はともかく防具は装備していなかったため普通の服のままのようだ。

一人で打ち上げ……ボツチなのか、可哀想に。

「はあ……なんでギルド登録に来ただけでこんなのに絡まれないといけないんだか……」

見た目は完全に幼女の僕と、いい歳したおっさんが向かい合っている状況に、何事かと距離を取りつつも街の住人が野次馬として群がっている。

「さて嬢ちゃん、さんざん俺をコケにしてくれたんだ。1つ賭けをしねえか？」

「しましたっけか？ まあいいです。賭けって何するんですか？」

全く、言いがかりをつけられた上に賭け事をやらされる羽目になるなんて……やれやれだよ。いや、煽ってるのは自覚してるよ？ それにこういう時の賭けって中々にテンプレじゃん？ やるしか無いでしょ。さっきのは言いたかっただけだから。

「もしもお前が俺に勝ったら、このマジックアイテムの剣と俺の全財産をくれてやる。その代わりに俺が勝ったらお前は俺の奴隷になる、どうだ？ お前が勝つ自信があるってんなら悪い条件じゃないだろう？」

周囲の野次馬からロリコン、ペド野郎と声上がる。僕の年齢だと、正確にはアリス・コンプレックスらしいよ。僕も最近初めて知ったんだけどね。

「うるせえ！ そもそもこいつが受けなけりやいいだけの話だろうが！」

「いいですよ？ 別に。こんな酔っ払いに負けるつもりはないですし。さあ、とつととやっちゃいましょうよ」

賭け事の内容が、シヨボイ物ならやる気なんて起きていなかったが、お金とマジックアイテムという物に目が眩んだ僕は、あっさりその賭けの内容を飲んでしまった。あいつ今奴隷とか言ってたような気がするんだけど……これ負けたらヤバイね、うん、本気で勝ちにいかう。

「小娘ええ馬鹿にしやがってええ……いくぞおらあああ！」

いらついた様子で己の長剣を抜き斬りかかってくる。

Dランクと出ていたのに繰り出された一撃は、剣閃がはっきりと見え、たやすく躲す事ができた。あれ？ 弱くない？ ああ、酔ってるからか。

「♪ ～♪♪ ～♪ ～」

もう安心しきって鼻歌混じりに攻撃を躲していると、モーブがキレた。そして相変わらずの怒鳴り声で叫んでくる。

「小娘ええ！ ふざけてんじゃねえええ!!」

「確かにそうですね。鼻歌を歌ってるのも飽きてきました」

今まで歌っていた鼻歌をやめ、一転真面目な表情をして僕は言う。

「じゃあこっちからも攻撃しますか。はあああっ！」

そう言っただけは、魔法の《ボム》を使いスピードと威力をブーストし、カウンター気味にハンマーを振りあげる。

草原でウルフと戦っている時に判明したのだが、この身体では振り下ろし以外のハンマーでの攻撃はロクなダメージにならないみたいなのだ。これはその問題をどうにかできないかと思っただけで開発した戦法である。制御が利き辛い事を無視すれば、結構使い勝手がいい方法である。将来的には制御出来るようにしたい

それは置いて。

振りあげたハンマーは身長差のせいで、向かう場所が下がり……モーブの大切な部分へと迫った。そして、ズドムツ という音と共に深くめり込む。ブチッと何かが潰れる音と共に、ハンマーの勢いでモーブは30cm程打ち上げられ……

「がふっ！」

べしやっ、とでも表現出来そうな音を立てて地面に倒れ込み、気絶したのか起きてくる事は無かった。ピクピク痙攣はしているみたいだが。

そんな様子を見た周りのにいた野次馬の人達は静まり返り、その中でも男たちはほぼ一斉に自分の大切な息子があるあたりを押さえた。

「あ、やばっ、痛そう。やり過ぎたね、これ」

この状況を作り出した僕はなんかやり過ぎた感が凄かった。合掌をしておく。地球にいた時の僕だったら、確実に死ねるけど……うん、まあ、死にはしないでしょう。異世界だし。

御冥福をお祈りします。

第6話 ランクアップ

おっさんの酔った勢いからでた言葉で始まった少女との決闘、それも今さつき登録した冒険者と素行こそ悪いものの、それなりの実力を持っていたDランク冒険者。

普通に考えればどちらが勝つのかは一目瞭然だったその戦いだったが、実際に始まってみれば新人がランクDの冒険者に勝つという結末に終わった。

あんなロリコンが負けてくれたので、誰も悪い気はしていなかったのだが、まだイオリが勝ったことに対して、まだ信じられない者は結構な数いるようだ。

そんな野次馬達の視線を浴びながら、僕は口を開いた。

「さて、回収回収♪」

その場のザワザワしている雰囲気をぶち壊すような、陽気な声である。仕方ないじゃん、嬉しいんだもの。

モーブのとなりに落ちている長剣を拾ってアイテムボックスに入れ、腰についている財布も同じようにしまおう。財布って分かったのは鑑定で調べたからだ。

え？ 財布まで奪うのは酷いつて？ 僕を奴隷にするとか言ってたからね、嫌がらせを兼ねた資金調達も出来るし、そういう手段としては最高じゃないか。

「さて、そろそろいいかな？」

そう声を掛けてきたのは、戦いが始まる前に気配を消してギルドから出てきた男だった。そろそろ頃合いと見て話し掛けたようだ。

「あ、はい。大丈夫です。えくとなんでしよう？」

なんだろう、やり過ぎたのかな？ やっぱり。そんなことを思い、疑問を込めて見つめる。

「そんな分かんないって顔されてもなあ……まあいいか。確認するまでもないのだが、一応規則なので確認させてもらう。お前がイオリだな？」

「はい」

「GランクからFランクへのランクアップを希望した」

「そうですね。最初のランクアップは審査が必要だつて聞いたので」

「そうだな。戦えもしないやつが勝手に魔物に挑んで死にでもしたら問題だからな」

なるほど、最初のランクアップの審査はそういう意味だったのか、あれ？ 僕は大丈夫……だよな？

「おいおい、そんな心配そんな顔すんなよ。さっきの戦いで嬢ちゃん
が十分に戦えるつてことは分かっている。ランクアップは問題なくで
きるよ」

本当によかった……ホッと胸をなでおろす。というかそんなに顔
に出てるのかな？

「まさかギルドに登録したばかりの新人が、いくら酔っているとはい
えランクDの冒険者を、あんなに余裕を持って倒すとはな……この目
で見てもちよつと信じられないが、自分の目で見たものを信じられな
い程に頭は固くないつもりなのでな」

困ったような笑みを浮かべる男にギルドの中へと入るように促さ
れ、見物は終わりだとばかりに散っていく野次馬を尻目に、僕は再び
ギルドの中に向かう。

「あの……今更なんですけど、あのモーブつて人あのまま放置してい
てもっ……」

「まあ、説明があつただろうが、ギルドはあれくらいの冒険者同士の争
いには介入しないからな。流石に殺し合いとかになれば介入するが
な？ まあ、今回はあの野次馬の中の誰かが治療はしてくれるだろ
う。それよりもランクアップだろ？ ギルドカードを出してくれ」

そんなことを言われ、忘れていたギルドカードを渡す。更新には少
しだけ時間がかかるようなので、ラナさんの方を見てみると泡を吹い
て気絶していた。

（うくん……やっぱり目立ち過ぎた？ テンプレ高ランクスタートと
かは止めてくれよ？ 無いだろうけど……）

そんなことを考えながらブーツとっていると、先程カードを持って

第7話 初めての鍛冶……へ？

(うくん……なくんかどれもイマイチなんだよなあ……)

現在、僕は武器屋でナイフとにらめっこしていた。流石に口に出しては言わないけどね。

ナイフを買う理由？ いい加減、このアイテムボックスの肥やしになってるウルフを売るためだよ。言われた通り解体して。

「おい嬢ちゃん、そろそろ決まったか？」

「すみませくんまだです」

ずっとさつきからこんな調子だ。なにか掘り出し物みたいなやつはないもんかなあ……

「つて、あああああ!!」

そうだよ！ 僕の職業って鍛冶系の最高峰ってなつてたじゃん！ 作ればいいんだよ！ 手紙にも書いてあった気がするし！

この時、僕の頭には数時間前の事が思い浮かんでいた。実は、ステータスをジックリ見ていたら何故か詳しい説明が浮かんできたのだ。

凄く便利です。

|||||

《へーパისტース》

神の名を冠する鍛冶系のスキルの最高峰。鍛冶系のスキルの多数が使用可能になり、制作する装備品の完成度に超大幅補正。炎や雷の魔法適性が上昇し、槌の適性が上昇する。

|||||

まあ流石のチートは置いておいて、こんな感じで詳しい説明が浮かんできたのだ。

「お、おい嬢ちゃん？ いきなり叫んでどうした？」

「ちよつといいことを思いつきました……鍛冶が出来る場所があれば貸していただけませんか？」

「お、おう。それは構わねえが、嬢ちゃんって鍛冶出来んのか？」

「はい、一応鍛冶師なので♪」

まだできるか分かんないけどね。

くく鍛冶場にてくく

「おおく、これが……」

僕は目の前にある、綺麗な緑色のインゴットを手にして言った。
あ、ちなみにこれは、モーブから奪い取った剣ね。

|||||

ミスリルインゴット

最高品質のミスリルのインゴット。

500g

聖属性

魔力付与 AGL

|||||

なかなかいいやつを使っていたみたいだ……因みに僕には長剣は振れなかった。本来はそう使おうとしてたんだけどね……ナイフに
してやる！

「うくん……まあとりあえず作ってみるか」

そう思いインゴットを炉にくべると、視界に左上の視界にタイマー
のようなものが浮かんできた。

(……なにこれ?)

そう思いそのタイマー(仮)を見てみると、説明文のようなものが
タイマー(仮)の下に現れた。

最適時間：このタイマーが0になった時に、炉からインゴットを出
すと良い。

チートですね、はい。今の状況だと凄くありがたいです。

そう考えているうちにタイマーが0になったので、インゴットを金
床の上に取り出す。そしてハンマーを構えたとき、赤々と熱されてい

るインゴットのいたるところに「」のようなカーソルが現れた。そこを叩けつてことですか……なんだろう、思ってた鍛冶となんか違う。

カーンカーンカーン……
シャツシャツシャツ……

「やつと完成くくくく」

僕はそう言つてその場にへたりこんだ。いくらチートスキルの補助があると言つても流石に7歳児の体じや鍛冶をするのは無理があつたのだ。いや、その分いいのができたけど。

|||||

ミスリルナイフ +7

STR +60

AGL +45

MP +100

属性 聖・風 重さ 300g

切れ味 鋭い 刃渡り 片刃30cm

耐久 丈夫

《スキル》

解体 LV5

切れ味強化 LV1

《備考》 魔力付与されたミスリルで作られたナイフ。製作者 イ

オリ

|||||

……チートスキルの力を改めて思い知つたよ。ん？ あんまり凄くなさそうって？ 店売の奴つてどれも+2くらいなんだよ？

そう思っていた矢先、頭の中に初めて聞く効果音と、アナウンスが響いた。そして、眼前にステータスプレートと酷似した画面が広がる。

《初回製作ボーナス!》

レベルアップ 19↓21

短剣術 LV 1 習得

聖魔法 LV 1 習得

風魔法 LV 1 習得

|| ||

.....ファツ!?

誰か説明してくれませんか?

こそぞ☆

|| || ||

とりあえず微妙に達筆な手紙は炉に放り込んで消し炭にした。最後の文？ 何それボクハミテナイヨ？

それにしてもヘーパイストスってスキル、予想よりずっとチートじゃん。

「さて、ステータスの確認しますか……」

そう思い僕は自分のステータスを開いてみた。

イオリ・キリノ

種族 人族

性別 女

年齢 7

職業 ヘーパイストス

Lv 21

HP 300 / 300

MP 653 / 653

STR 138

DEF 111

AGL 100

DEX 1280

MIND 106

INT 300

LUK 36

《スキル》

NEW!!

職業

ヘーパイストス Lv23

通常

アイテムボックス L V 6 隠蔽 L V 7 鑑定 L V 7
槌術 L V 7 危機察知 L V 5 短剣術 L V 1
身体能力強化 L V 6
火魔法 L V 9 土魔法 L V 9 聖魔法 L V 1
風魔法 L V 1

《称号》

NEW!!

覚醒者・神託を燃やす者

《加護》

世界神の加護＋＋ 鍛冶神の加護＋＋

《装備》

武器・初心者の槌・ミスリルナイフ ＋7
防具・制服 上下・靴下 白・運動靴

……はい？

うし。落ち着こう、色々と気になる所はあるがまずは落ち着こう。まずはおかしな点を挙げていくとしよう。

最初にこの《ステータス》の上がり具合だね。異常過ぎる。モーブからは経験値がゲットできずレベルは19のままだったので、一気に2も上がったのは嬉しい。嬉しいのだが、それだけではこんなに上昇はしない筈だ。

先程までHPは200もいかなかった。その他のステータスだって（DEXとそもそもほぼ上がらないLUKは除く）ほとんどが二ケタのままだったはずなのだ。それがいきなり2レベル上がったから、と言ったってこれは明らかに異常である。

（いや、こつちとしては嬉しいんだけど……何で？ DEXはもう突っ込まないでいいや）

他に原因が無いかと思ひ《称号》に目が行く。そこで《覚醒者》が気になった。何せ覚醒ってついてるんだもの。

《神託を燃やす者》はあの手紙を毎度毎度燃やしてるからだろう。（因

みに効果は獲得経験値上昇補正だった)

しかし前者の方は、ゲットした理由が分からない。とりあえず内容
を見てみる。

|||||

覚醒者

異世界人・転生者の魂を持つものが得ることのできる称号。レベル
20になるとLUKを除くステータスに大幅な補正がつく。これか
らはレベルが上がる度にほんの少しだけ補正がついていく。

|||||

やばいね、元々かなり高い方のステータスだった(らしい)のにな
んてチートなんだろう。

多分このくらいのステータスがあれば、いくら少女でも冒険者とし
てソコソコはやっていけるだろう。舐められるだろうけど。物理的
にじゃないよ。そんな事はさせないしたら叩き潰す、どこをとはい
わないけどね。

「うわあ……」

「嬢ちゃん、失敗でもしたのか?」

いつの間にか先程の店員さんが近くにいた。何この人、怖っ!

「いえ、予想よりいいのができたのでビックリしてただけですよ。
じゃあ私はそろそろ宿に行くので」

そう言つて僕は話題を無理やり切り替え、そそくさとお店から退散
していった。

あの店員さん、髑髏の仮面に黒タイツとか着たら、凄いい合いそう
だったな。

第9話 買い物、そして宿屋

武器屋から出た後、僕は宿に向かいながら街を歩いていた。

「流石にずっと制服のままって訳にはいかないしなあ……身バレしたくないし」

そう、今現在僕の着ている制服はこの世界ではとても目立つのだ。もう遅いかもしれないが、勇者の耳に届く前に服を変えようと思い、僕は服屋を探していた。

「服自体は姉ちゃんの買い物に付き合ってたから別にいいんだけど……」

僕は服屋に入りながらそんなことを言う。姉ちゃんによく女装させられてたつけ……はあっ……。

だが僕も男なので多少なりとも……と言うかかなり恥ずかしさはある。さっさと買って出たいものだ。

「いらっしやいませー何をお探でしょうか？」

「えくと、私のからだに合うサイズの服をにさんちやくと下着？ を買いにきました！」

勿論店員さんに丸投げだ。この意識しないと若干拙くなる言葉遣いでなら、多分いけるはず！

「わかりました。少々お待ちください」

とりあえず探してきてくれるようなので安心した。これで自分で探す羽目になっていたらと思うと……僕にセンスなんで求めるな！

(暇になった……何しよう?)

元が男なだけあって中を歩くのは気が引ける。が、他に出来る事もないので仕方なく普通の服の売っている場所を歩いてみる。

(でもなんにもすることないんだよなあ……あ、この服可愛……い……かも……僕は今何を!?)

自分がだんだん男じゃなくなっていくような気がしてきて、がつくりうなだれていると、先程の店員さんが戻ってきた。

「これらの商品はどうぞでしょう?」

そう言つて渡されたものは、まあ……年相応な感じのワンピースやらチュニツクやら。そして、なぜか現代風の下着だった。過去にも勇者が召喚されていたとかいう事だろうか?

「ありがとうございます。これにします」

「分かりました。では、合計で銀貨1枚と大銅貨5枚です」

………意外と高かったが、お金を払いお店を出て宿屋に向かった。いや、1500円ならかなり安い方なのか?

◇

「ここ、かな?」

そう呟いた僕は道に立ち止まり、看板を見上げる。その看板には魚の尻尾が描かれており、まさに宿の名前を表した看板と言えるだろう。なんでそんな名前なのかは分からないが。

宿の大きさ自体はイオリが服屋からここに辿り着くまで見てきた他の所と大して変わらない。1階が酒場兼食堂となっており、2階と3階が宿になっているというオーソドックスな作りとなっている。

ギイツと扉を開けると、そこには暗くなってくる時間ということもあつてそこそこ賑わっていた。

「いらつしやい。お食事ですか? それともお泊まりで?」

宿に入ったイオリを見た恰幅のいい中年の女の人がそう声を掛けてくる。こんな見た目なのに丁寧な事で……。

「宿でお願いします。それと、夕飯もお願いします」

イオリの声を聞いた女はニコリと人好きのする笑顔を浮かべながら頷く。

「はい、ありがとうございます。宿泊料金前払いとなつてまして、朝と夜の食事付きで1泊銀貨1枚となります」

今日一日だけで、大銅貨5枚になるとは……なかなかきついな。

「お食事の用意、できてますけどいまから食べます?」

「食べます!」

「ちよいと待つてね、すぐ用意するから」

2〜3分後に出てきたのは、肉の入ったシチューに、たっぷりのパ

ン。野菜サラダにチーズとお酒……………な訳はなくて何かのミルクだった。流石に未成年だしね。

くうううう……………

その美味しそうな匂いに思わず腹がなる。恥ずかしさに顔が赤くなつていくのを感じる。

それを誤魔化し、腹の鳴く音に負けたようにシチューの肉を一口、噛み締めた途端、肉の旨味が口の中に広がりながらほろりとほどけ、とても美味しかった。

結局2杯程おかわりをし、満足行くまで食べ食事を終えたのだった。成長期つて凄いな！

◇

「はあ……………今日一日で随分と色々あったなあ……………」

2階の角部屋。そこがイオリが借りた部屋だった。料金が高め？であっただけあり、部屋の中は小綺麗でベッドや布団も文句無しだった。特に布団は小まめに干しているのか日光の香りがする。今まで着ていた制服からワンピースに着替え、ベッドへと寝転がりながら呟く。

「そういうえば、この世界について調べる時は暦なんかも調べておいた方がいいんだろなあ。シイラさんの知識だけじゃあんまり分かんないところもあったし」

一人からの知識だけじゃ、分からないことも多いとイオリは考えていた。実際シイラさんに暦のことを聞いても、？としか返ってこなかったからだ。

「あとは、お金も稼がないとなあ……………今日の宿代でけっこうお金無くなっちゃったし……………」

そこまで呟き、ふとお金に関する一つのことを思い出した。そういえば、モーブだったっけか？そんなのからお金を奪ったような気がする……………

そう思い寝転がっていた状態から起き上がり、アイテムボックスから、お金の入った袋を取り出してベッドの上へとその中身を広げる。数えてみると金貨が1枚、銀貨15枚に銅貨9枚とかなりの金額が

入っていた。

「うわっ、凄い入ってる。何やったらこんなに稼げるんだろ？ これも要調べだな……」

とりあえず泊まる金ができて安心したので、僕は眠りについた。その財布がモーブの全財産だったことなど、イオリには知る由も無かった。

第10話 初めてのクエスト!

イオリがリフンの街へと着いた翌日。宿で朝食を食べ終わったイオリはギルドに来ていた。

「さて、初めてのクエストって言ったたらアレしかないよね」

そう言っって僕とある2つのクエストを探し始めた。目立つ場所にあつたので、簡単に見つかったそのクエストの紙をぼくは手に取り、レナさんの所に歩いていく。

「すみません、このクエストを受注してもらってもいいですか?」

僕が持ってきたのはこのクエストだ!

=====

=====

【薬草採集】

推奨ランク：F

概要：回復用ポーションの原料となる薬草を10束以上採集すること。

報酬：大銅貨5枚

=====

=====

【ゴブリン討伐】

推奨ランク：F

概要：【レナトークの森】でゴブリンを3体討伐すること。討伐した個体の耳を削いでくることによって討伐の確認ができる。

報酬：大銅貨2枚

=====

=====

【フィールドウルフの討伐】

推奨ランク：E

概要：街道周辺に出没するフィールドウルフを5体討伐すること。討伐した個体の牙を持つてくることによって討伐の確認ができ

流石に人型の生き物を殺すって言うのは気がひけるが……

「お金のためだからゴメンね?」

『ギギイッ!』

「《アースバインド》!」

よし、割り切ろう。殺すKAKUGOなんてものは、盗賊にでもあつてから考えればいい。

僕がそう言うとともに、今まさに僕に襲いかかろうとしていたゴ布林達の足に土が纏わり付き動きを止めた。ゴ布林は歯を噛み締めながら必死に動こうとしているが思い通りに動かせない。

え? 攻撃しに行くと思った? 攻撃は一応通るけど、囲まれたらゲームオーバーでお持ち帰り以最悪じゃないですかー。

「さて、後は……《石弾》」

綺麗にヘッドショットを決めた僕が耳を削いでいると、前からぞろぞろとゴ布林……ではなく恐らくオークが姿を現してきた。ブタ顔なデブなのでまあ確実にオークだろう。

「!? 何故にオーク?」

『ブヒイッ!!』

勿論オーク達が答えてくれる訳もなく、僕に対して襲いかかってくる。動きは遅いがなかなか怖い。やっぱりオークって、ゲームとかと同じような感じなのかな? 何か凄く臭いし。

「まあいいか、《ピット》!」

『ブヒイッ!』

頭はやっぱり足りないのか、簡単に僕の張った落とし穴に引っかかり行動不能に陥った。

穴の底から這い上がろうともがいているが全く出れる様子はない。

「うくん……やっぱり馬鹿なのかな? とりあえず《石弾》!」

ドンツという音と共にオークの頭にヘッドショットを決め、トドメを刺しておく。

「ふう……ッ!？」

気を抜いたところに僕の後ろから火球が叩きつけられた。その衝撃で僕は木に叩きつけられてしまう。あ、火球ってわかったのは熱かったからだよ。

「カハッ！」

混乱する僕の視界には、杖を構えたオークが映った。あれか？メイジか、魔法使いか！

オークメイジ ランクE

Lv 16

HP 265 / 265

MP 324 / 328

火魔法 Lv3

勘で言ったのが当たった。ラッキーだな？

「痛つつ……やりやがったな……。お返しだ!!」

《火弾嵐》！

ちなみに《火弾嵐》は簡単に言うと、某ドラクエのメラストームみたいな物だ。今回ののはいつもより魔力増量中。

『プギイツ!？』

ドンツドンツドンツ

そんな音と共にオークの体に火球が直撃し、思いつきり燃え上がった。またやり過ぎた感がする……

「ま、まあ、耳と牙は残ってるからいいか……あ、杖落ちてる。とりあえずこのことはギルドに報告かなあ……」

とりあえず耳と牙を剥ぎ取りアイテムボックスの中に入れておき、僕は街に戻っていった。

匂いが移らないとは言っても、あんまりこの臭いの入れておきたくないなあ……

「もしかして憧れてたり?」

「してませんって、絶対に無いですよ」

うん、元クラスメイトに憧れるとかは無いな。絶対無い。

「え〜……」

ラナさんが残念そうな顔で見ているけど、無いっただら無いですからね!

「それじゃあ私も準備があるので!」

そう言っただけはギルドを出ていった。

えくと、食べ物に水は必須でしょ? 装備を作る用の金床とか炉は魔法で作れば良いとして……炎も魔法でいいや。魔法ってほんと便利だな。あとは針と糸を買ってアレも買って……あれ? なんか迷走してる気が……

閑話――プロローグ（勇者サイド）

その日は、何の変哲も無い日になるはずだった。

学校に行き、いつも通りの生活をし、家に帰ったら授業の予習復習をし、ゲームをして、飯食って風呂入って寝る。

そんな、在り来たりな日になるはずだった。

学校に着き、欠伸を噛み殺しつつ教室に入る。

さて、俺の名前は天上院匠。そこらへんにいそうな高一だ。

身長は高めで、女子にはイケメンと言われる事が多い。自分ではそうは思わないのだが。

それと自慢ではないが、一応このクラスの委員長をやっている。勉強は平凡だが、リーダーシップはあると自負している。

教室の自分の席に座り、またも欠伸をする。

「おはよ………すごい眠そうだけど、どうしたの？」

俺に話しかけてきたのは中学時代、ゲームを通じて仲良くなった友人。

名前は白沢蒼矢。しらさわ そうや

腰まで届く長い黒髪、少し垂れ気味の大きな瞳。スつと通った鼻梁に小ぶりの鼻、そして薄い桜色の唇が完璧な配置で並んでいる………男だ。あり得ないと思うだろうが男だ。大事なことなので二回言った。

そのせいか、一緒に歩いているとよくそういう視線を感じる。最近筋トレを始めたと言っていたが、俺から見ても健康のために頑張る女子のようにしか見えない。勘違いしないでくれよ？

「おはよう、蒼矢。ちよつとゲームで徹夜しちゃつてね………」

「楽しいのは分かるけど程々にね………クラス委員が赤点なんて取ったら目も当てられないよ？」

「あはは………分かってるって」

そんならことを話していた時、チャイムが鳴った。

そのまま解散し、それぞれの席に着く。

「あれ？」

授業の準備を始めて、俺は筆箱を忘れていたことに気づいた。そういえば、ゲームのメモをするのに使ったような記憶がある。多分そのまま置いといてしまったのだろう。

「ありやりや……育成論メモってたからか……」

「どうしたの？」

俺の声に隣の席に座る、ひいらぎすずか 柊鈴華が反応した。

柊までが名字だ。

「筆箱忘れた」

「あちゃー……あんたが？ 珍しい。ふっふっふ、私のを貸してあげようではないか」

柊さんがそう言っつてシャーペンと消しゴムを渡してくる。

「ははー。悪い」

「良きに計らえ。お菓子一つで手を打ってやろうじゃないか」

「無償じゃないの!?!」

苦笑しつつ了承して手を振る。

が、その約束は結局果たされることはなかった。

◇

それは、2限目の数学の授業の時だった。

教壇には生徒から山ちゃんと呼ばれる背は低めの女性教師が、教科書片手に黒板に公式を書き込んでいる。どこぞの芸人とは何も関係は無い。先生は痩せてるし。

「で、こうなるから、ここの公式は……」

授業の内容をノートに写していると、黒板に何やら幾何学的な模様……。俺からすると、魔法陣にしか見えないものが浮かび上がっているのが目に入った。

「……………え？ なんで魔法陣？」

「な、なんですか!?!」

山ちゃんも事態の異常さに気づいて、黒板に浮かび上がる魔法陣？を消そうと黒板消しを滑らせる。

「い、一体なんだ!?!」

「誰かのイタズラ？」

「なんなの？」

蒼矢は口をポカンと開け、固まっていた。そんなことを観察している間にも、魔法陣はどんどん大きくなっていき、閃光を放った。

「うわー！」

「ま、まぶし!!」

「み、みんな落ち着いて！何かはわからないけど念のため外に——」

先生がそう言う前に、フツと俺の意識は途切れてしまった。

もしかしたら、本当に異世界に召喚されたりしてな

閑話―2 勇者召喚

俺が意識を取り戻した時、周りは明らかに日本とは違う風景となっていた。

床には見ただけで高価とわかるような赤い絨毯が敷かれており、左右には均等に柱が何柱もあり、天井が高く室内が広々として見える。そして魔法陣……

(これってまさか、テンプレ召喚?)

奥に見える大きな椅子には、トランプのキングのような格好をした王様。その隣にはティアラを頭に乗せたドレスを着た少女が座っている。多分王女だろう。

「委員長、大丈夫だった?」

そんな事を考えていると、柊さんが話しかけてきた。周りには、クラスの席順のままみんなが倒れていた。起きあがっている人はいるが。

「う、うん大丈夫。まさかこんなテンプレ小説みたいなのに巻き込まれるとは思ってなかったけどね……」

「そうだね……まさかテンプレ召喚とは……」

二人して感心していると、皆が目を覚ましたタイミングで奥に座っていたドレスを着た少女が、腰まである長いピンク色の髪を揺らしながら俺たちの前まで歩いてきた。

そして、満面の笑みを浮かべながらこう言った。

「ようこそ! 勇者様方!」

どうやらテンプレ召喚で間違っていないようだ。その言葉で僕はそう確信した。

「勇……者? それは、どういう事ですか? それに、あなたは誰なんですか?」

先生がそう尋ねる。そういう小説とかゲームとかを知らなければその反応が普通だろうね。

「申し遅れました。私の名前はリーシアⅡセントシュタイン。このセントシュタイン王国の第一王女です」

「セントシユタイン王国……ですか？」

山ちゃんが頭を捻らせながら問う。

「ここは、勇者様方からすると異世界にあたります」

「へえ、本当に異世界なんだね」

隣で柊さんが

「日本には帰れるのかしら？」

「風呂はあるんでしょうね？」

奥の方で女子達が騒ぎ始める。一方で男子はそういうテンプレ小説を読んだ事のある奴が多いのだろう、その言葉でガッツポーズをしている奴もいる。もう少し危機感つてもものを持つとせ……

「それで、どうして私達を召喚したのですか？」

山ちゃんが気を取り直すように、王女に質問する。

「その事も含め説明に入らせていただいてもよろしいでしょうか？」

と言って説明に入った。

国の名は先程も言った通り「セントシユタイン王国」。この世界「アヴルム」に存在する『人族』が統一する国である。大陸は三つに分かれており、それぞれの大陸でそれぞれの種族が国を作り治めている。『獣人族』は自然豊かな大陸に根付いており、その名の通り獣の特性を身に宿している。猫耳とかもあるそうだ。中心は「獣王国・シャルフ」『魔族』は 魔人 や 妖鬼 などの通称亜人と呼ばれる種族であり、危険度の高い常時薄暗い大陸を治めているらしい。中心は「魔国・スルエイ」

今この三種族間には、かつて無いほどの緊張が生まれているらしい。原因は魔族が世界の支配を目論む……というよく聞く話だ。いや、小説の中での話だよ？

そして、それを防ぐために古より伝わる勇者召喚をしようと思いついたという話だった。

過去に召喚された勇者は、山を削り海を割るような凄まじい力を持っていたり、様々な文化を広めたという。

「それって結局、この子達に戦争させようって事ですよ？ そんなの私、許しませんよ？」

ゾツとするような声音で山下先生が言った。平常時は小柄で可愛い先生と評判ののだが、怒らせるとヤバイ先生としても知られているこの先生の本気の怒りは、目の前に立っている王女が恐怖するには十分だった。

「お、お気持ちはお察しします。しかし……我々も必死なのです！それに、我々の知る勇者様方が帰還する方法は、魔王の討伐しか無いのです！」

何やら言わないといけない事を一気に言った感じだ。先生、怖いもんね。

「嘘だろ!？」

「そんなのありかよ！ 家に返せよ！」

「戦争とか冗談じゃない！ ふざけるな！」

「なんでさっ!？」

その言葉に周りの生徒達も口々に騒ぎ始めた。何かと騒ぐ事が多い生徒達である。

「あれだよね、十中八九嘘だよねあれ」

「だろうね、そうやっていいように利用するだけだろうね。まあ、奴隷化されるとかじゃない分マシだけど……」

「でもこのままじゃ収まりがつかない……か」

周りを見渡すと、パニックになっている生徒、歓喜故か謎の踊りをしている男子、相変わらずブチギレモードの山ちゃん。どう考えてもこのままじゃまともに進まない。

「そんじゃ、頑張りなよ委員長！」

「はあ……」

俺は深くため息を吐くと、渋々行動に移した。

「みんな静かに!!」

俺の出した大声にビクツとなり周りが静かになる。自分に注目が集まったのを確認すると、俺は喋りだした。

「皆、今ここで騒いでも全く意味が無いと思うんだ。今のところ判明している帰還方法は魔王を倒す事だけ、それでもかえれなかったならそれから探せばいいじゃないか。それに、今の僕達は身分も何も無

い。勇者になった方が無難だと思っただけ？ とりあえず俺は戦おうと思うよ、まずは弱くちや何も出来ないしね！」

横目でチラリと見てみると、王女や王様はニヤリとしていた。予想はしていたけど、やっぱりそういう話なのね。そして……

「そう……だよな」

「今こうしてる時間も、向こうにいないって事だもん……」

そんな声がチラホラと聞こえ始め、最終的に全員で戦争に参加する事になった。先生も「生徒を帰す責任がある」との事で参加するようだ。

「はあ……」

本日二度目の溜息を吐き、これからの方針は決定したのだった。何か、忘れていたような気がする。

閑話―3 スタータス（勇者）

「ふむ、方針が決まったようだな。まずはそなたらの誰が勇者なのか調べねばならぬ。お主ら、自分の能力を確認してみよ」

今まで沈黙を貫いていた国王が口を開くと、そんな事を言った。が、日本で暮らしていた俺たちにそんな事を言われても分からない。今までのテンプレ具合から予想はついてはいるのだが、それが合っているかはわからない。

「ん？ どうした？ まさか自分の能力を確認できないのか？」

その通りですと、皆を代表して俺が言った。スタータスって言えばいいんじゃないかとは思っているけどね。

「心の中、もしくは口で『スタータスオープン』と言ってみよ」

王の言葉通り俺も皆も行う。所々でポーズを取りながら口に出してる人がいるのはご愛嬌だ。俺は心の中で言ったただけだぞ？

と、話がずれたな。そう言うと、目の前にゲームのようなスタータス画面が広がった。

タクミ・テンジヨウイン

種族 人族

性別 男

年齢 16

職業 勇者

Lv 1

HP 150 / 150

MP 200 / 200

STR 100

DEF 100

AGL 100

DEX 100

MIND 100

INT 100
LUK 20

《スキル》

職業

勇者 LV1

EX

MP消費半減 全言語理解

通常

アイテムボックス LV1 鑑定 LV1

剣術 LV1 魔法剣 LV1 身体能力強化 LV1

聖光魔法 LV1 生活魔法 LV1

《称号》

異世界人・転移者・勇者・リーダー

《加護》

世界神の加護 ++ 聖神の加護 ++

う、うん、ツヨソウナスウチダナー。って、俺が勇者かよ!? なん
で!? なんで勇者? もしかしてクラス委員だったりしたから?

あ、ちなみにHPは体力。MPは魔力。STRは攻撃力とか筋力。
DEFは防御力。AGLは素早さ。DEXは器用さ。MINDは精
神力か? INTは賢さ。これはゲームでもよく利用されている表
現だったので、すぐに分かった。

「なあ、蒼矢。これどこのゲームだって話だよな……」

そういうものように呟いたところで気が付いた。何か忘れてい
るとおもったら、そういう事だ。こんな事態、蒼矢が飛びついてこない
わけが無い。が、どれだけ周りを見渡してもいない。その事に気が付
いたとき、王様が話しかけてきた。

「どうだ? 職業を見てくれればわかると思うが、勇者をもっている
者がいるはずだ」

とりあえず、こちらの質問を切り出したかったので答える。

「はい。俺が勇者の職業を持っています。それと、一つ聞きたい事があるのですが良いでしょうか？」

「よかろう、なんだ？」

「今回の勇者召喚で召喚されたのは、ここにいる40人だけでしょうか？」

「ふむ……どうなのだ？ リーシア」

王様がリーシアさんに聞く。召喚したのはリーシアさんでしたか。そんな事を考えているとその口から、聞きたくなかった事が紡ぎ出された。

「はい。ここにいる40人で全員です。それがどうかしたのですか？」

「1人、ここにいるはずの人物がいないんです。誰か、蒼矢を見てないか!？」

そう聞くも返事は無かった。やはり……いないか。あの範囲内にいたのだから、絶対こちらには来ているだろう。この世界のどこかに。

「ふむ……その人物を探す事も視野に入れておこう」

解散になって、各自に一室ずつ与えられた部屋にメイドっぽい人達にそれぞれ案内された。中に入り、天蓋付きベッドに愕然としたものの、蒼矢がないからかイマイチ調子が出ない。豪華な部屋に落ち着かない気持ちになりながら、ベッドにダイブすると共にその意識を落とした。

なんか、調子出ないよなあ……

第12話 唐突なレベル上げ……終わり

「ちよいやああっ!!」

バキツ、グシャアアア

飛び出してきた蛇の頭にハンマーを叩きつけると、悲鳴をあげることなく地面に崩れ落ち絶命する。ハンマーを振って血を落とし腰に止め直す。

「ふう……それにしても魔物が多いなあ。オークの集落が出来てるっていうし追われてるのかな？ 美味しいし」

そう言っただけを解体しているのはもちろんイオリだ。イオリは今、リフンから少し歩いた今回の依頼のあった森ではなく、それより少し遠い【常闇の森】という場所に来ている。この森の推奨ランクはCだ。『こんな時に来る勇者なんて、だいたい調子に乗ってるやつばかりだ！ ただでさえこんな見た目なんだからレベルくらいは上げとかないと!!』と偏見からくる気持ちで決心し、ギルドで依頼を手当たり次第うけ飛び出した。元クラスメイトといえど、豹変する事なんて小説ではよくあることだ。

「うーん……まだ半日くらいしかいないけど、そろそろ帰らないと。やっぱりお風呂は入りたいし」

何てことをつぶやいている間に解体が終わったので、アイテムボックスにしまい立ち上がる。

ガサツ……

「はあ、またかよ……って、こいつは……」

言葉を発しながら目の前に現れた者を見る。まあ、いまの身長なら大抵見上げることになるのだが。

「絶対ここら辺の主的な奴だよね……」

体長4メートルはある。それだけではなく、一振り私なんて吹き飛ばせるであろう脚がなんと八本。その中でも、前脚二本はどんなものでも切断してきそうな鎌になっている。蜘蛛とかまきり螳螂を足したような魔物だった。口には鋭い牙が生えている。

そんなことを観察しながら鑑定をかける。

「うひゃー……Bランクのシッケルスパイダーとか……強そうだなあ……」

「キシャアアアアアアッ!」

どうやら相当怒っているようだ。「東の森の主」って出てたし、自分の縄張りが荒らされたことに間違いなく憤慨している。

そんなことを思っていると、突然前触れもなく糸を吐き出した。

「ちよっつ、幼女に糸とか誰得だよっつ!」

糸を避けながら何人か心当たりが頭の中に思い浮かぶが、すぐに忘れ戦闘用の思考に移行していく。なにせ、回避した先に鎌が迫っていたからだ。

「ちっ、《ボム》!」

自分に爆発魔法を当て、さらに距離を取る。やっぱり地味に痛い。泣きたくたる。

「そう簡単には捕まらないよ、蜘蛛野郎」

イオリの行動と言動に増々怒りを募らせるシッケルスパイダー。もしかしたら言葉を理解できているのだろうか?

「キシャーッ!!」

両手? の鎌を縦横無尽に振り回してくる。鎌が通った後の木は綺麗に切断されている。全部躲してはいるが、当たったらと思うとゾツとする。

何度も振るってくる鎌を躲していると、突然大きくバックステップをしイオリと距離をとった。

「げっ、もしかして大技?」

イオリの予想通りにシッケルスパイダーは、凄まじい速度で突進をしてきた。

「この瞬間を待っていたんだああ。なんちやって」

私はその攻撃を余裕を持って避け、さっきまで立っていた場所をシッケルスパイダーが通過した。別にどこぞの宇宙海賊の少年とは、何の関係も無い。

と、それは置いといて。私はその時、仕掛けていた魔法を発動させ

た。風魔法で発生させた真空の刃が走り、蜘蛛の頭と鎌を分断した。「移動以外の魔法使わないって決めてたのに……まあいいか……」

未だピクピクと動いている蜘蛛を見ながらそう言う。ピクピク動いている姿を見て突っついて遊んでいると、だんだん動きが弱まっていき……止まった。

頭の中にレベルアップの音が鳴り響く。この4日でかなりレベルは上がっているのだが、またまだ上がりそうで本当に何よりだ。

「さて、街に帰るか」

そう言っ僕は森の外に向かって歩き出した。いやー、パワーレベルリングは疲れたよ。

イオリ・キリノ

種族 人族

性別 幼女

年齢 7

職業 ヘーパイストス

Lv 34

HP 254 / 521

MP 146 / 857

STR 259

DEF 213

AGL 195

DEX 2140

MIND 198

INT 510

LUK 45

《スキル》

NEW!!

職業

ヘーパイストス LV45

通常

異次元収納 LV 4 超隠蔽 LV 2 解析 LV 5

暗視 LV 8

戦鎚術 LV 4 短刀術 LV 2 気配感知 LV 5

身体能力強化 LV 9 罨術 LV 4 暗殺術 LV 3

打撃耐性 LV 5

爆炎魔法 LV 5 鉱石魔法 LV 6 旋風魔法 LV 2

聖光魔法 LV 2

《称号》

NEW!!

狩人・達人・野生児・暗殺者

魔物殺し・鍛冶師・装備制限解除

《装備》

武器・玉鋼のハンマー +7・ミスリルナイフ +8

ミスリルの長針 +7

防具・流水のワンピース +6・ミスリルの胸当て +7

風のリボン +6・暗闇の短パン +5・大地蛇のベルト +6

ミスリルの腕甲 +5・鍛冶師の手袋 +6・靴下《青》+5

ミスリルの脚甲 +5・運動靴・改 +5

|| || ||

名前 イオリ・キリノ

性別 女

年齢 7

生まれ 不明

ランク D

ゴールド 134650

|| || ||

買った簡易機織り機、針、糸が大活躍の四日間だった。

あ、蜘蛛回収しないと。

第13話 お祭りと新たな武器と――1

「これは、何が……起きてるの?」

通りには出店がズラリと並び、明るい音楽が流れている。

にやんぱすー、現場のイオリです。何時間かけて街に帰ってきたら、緊迫感が漂っているのだと思っていたのに、逆にとても賑やかです。ここの人達は頭大丈夫なんでしょうか?

とりあえず事情を確認するために、ギルドに向かうことにする。まあ、依頼達成の報告もしないといけないしね!

◇

「ラナさん、達成してきた依頼です。あと、こんな状況なお祭りなんてやっていいんですか?」

「はい、依頼達成ですね。これが報酬です。」

このお祭りは、勇者様が来ているのでそれが原因ですね。最後になるかもって話だったので盛大にやっています」

「まあ、それなら仕方ない……のかなあ? じゃあ行つてきますね」
もう、対応はこれで諦めます……。そういうことなら仕方がないと思うので、僕も楽しむ! とはならず、僕が向かったのはあの武器店だった。

「おじさくん、また鍛冶場貸してもらっていいですか?」

「……久しぶりだな嬢ちゃん。別にいいが、祭には行かなくていいのか?」

「鍛冶やつてる方が祭りに参加してるより楽しいですから」

そう言つて鍛冶場に進んでいく頭の中には、どんな武器を作るかということしかなかった。

あながち口から出まかせという訳でも無いみたいです。何てことを心の中で言いながら、前回鍛冶をした場所に座る。

「うくん……こんな立派な物があるんだから、作るとしたらやつぱり大鎌かな? でもなあ……」

目の前にある素材と睨めっこしながら私はそんなことを言う。そしてさんざん悩んだ挙句、大鎌と片手剣を作ると事にした。

「さて、作り始めますか！ 《鉱石生成》」

MPさえあれば、鉱石を作れるって便利だね！

くく1時間半後くく

「疲れたあああ……。だけどできたあああ！」

僕の目の前には、完成した二本の武器があった。

|||||

シックルスパイダーの大鎌 +7

STR +165

AGL +95

MIND +80

属性 旋風・闇 重さ 2.5kg

切れ味 とても鋭い 刃渡り 片刃 90cm

耐久 丈夫

《スキル》

切れ味強化 LV2 スイング速度強化 LV2 軽量化 LV

2

飛斬 LV 2

《備考》

シックルスパイダーの鎌から作られた大鎌。イオリが自分が見えるようにきちんと調整されており、しっかりと振ることが出来る。柄などの部分はミスリルで出来ているため、魔力の通りがとてもいい。斬撃を飛ばすことができる。

|||||

鎌大蜘蛛のシミター +7

STR +135

DEF +75

AGL +95

属性 旋風・闇 重さ 1.3kg

業が二つある!?! うん、聞くか。

「そういえば、職業が二つある人が結構いるんですが、なんでですか？」

目の前に……いや、背後にいる店員さんに私は聞く。何でこの人が鍛冶屋やってるんだろ？

「……それは俺の口から説明する事ではないな。……ギルド嬢にでも聞いてくるがいい」

「え、はい」

ギルドに行く用事が出来てしまった。

第14話 お祭りと新たな武器と―2

ちわつす。イオリです。今僕は、時々見かける職業が二つある人の謎を聞くために、鍛冶師？ のあの人のアドバイス通りギルドに来ています。

そして、この街に来てから随分とお世話になっているラナさんを見つければ、丁度誰も並んでいなかったので話しかける。

「ラナさんラナさん。そういえば、職業が二つある人がチラホラ見えるんですけど、あれってなんなんですか？」

「あれは二次職ですね。レベル25刻みで新しい職業を取れるんですよ。イオリさんも超えていますよね？ 取っていきますか？」

お、おう。中々に急な展開だが、どうにかついていけている。まだテンプレテンプレ。僕としては、殆ど間もなく答えてくれたラナさんにビックリだよ。

「それは、どこで出来るんですか？」

「奥に転職部屋って所があるので、そこですね。今から行きますか？」

「はい、ぜひ」
場所は変わり転職部屋。ソコソコの広さの場所の中央に、台座と水晶が置いてある。

「では、この水晶に手を触れてください。そうすれば、なれるものが浮かび上がってきますので」

言われた通りに手を置くと、様々な職業名が浮かび上がってきた。どうやらこれは自分にしか見えてはいないようだ。

『植術師』『剣士』『レンジャー』『魔法使い』『暗殺者』 e t c ……

(それにしても多いな……うわ、そのまんま野生児なんてのもある)

そう思っていると、気になる職業を一つだけあった。それは、職業名が書いてあった画面の1番下にあった。

『ドヴェルグ』

(これってたしか、北欧神話辺りに出てきた神様の武器とかを作っていたりするやつだよな?)

とりあえずこれを第一候補として他のものを見ていくが、これよりも興味を惹かれるものはなかったの、とりあえずドヴェルグを取得してみる。

「どんな職業にしたんですか？ イオリさん」

「とりあえず鍛冶系のやつですね。私はあくまで鍛冶師なので」

胡散臭い目をレナさんが向けてくるが、気にせずにステータスを確認すると、HPとSTR、DEXが上がっていた。ただDEXあげれば気がすむんだろう？

|||||

《ドヴェルグ》

神話の職人達の名を冠する鍛冶系スキルの最高峰。鍛冶系スキルの多数が解放され、製作する武器の完成度に超大幅補正。炎と土の魔法適性が上昇する。

|||||

うん、満足満足。でも、出来ればさっきの装備を作る前にほしかったなあ……

そんな後悔の念を、首をブンブンと振って振り払う。とりあえず無事に二次職にも就けたので、僕は宿屋に帰っていった。

今日は疲れたよ……森から帰ってきて、武器を作って、最後に心理的ダメージ……寝よう。

翌日の朝

……木目の天井だ。

そのことで森から戻ってきたことを思い出した。久々にベッドで寝たよ……

「ふわあ……よく寝た。今日もお祭りは……やってるみたいだね」

さて、今日は祭りを楽しむぞ〜！

「まさか異世界で、こんな風景を見られるなんてね！」

大通りからほんの少しずれた道の出店、そこは日本食の出店がズラリと並んでいた。たこ焼き焼きそばカキ氷etc……まるで縁日の

ようだった。

さて、お金もたっぷりあるし、買い食いに行きますか!!

◇

10分後、僕はベンチに座り、一心不乱にたこ焼きなどを食べていた。飲み込みきれず、リスのようになってしまっているのはご愛嬌ということで。久しぶりの日本食でまともに調理された食べ物なんだ！ 仕方がないじゃないか！

そして、気がつくともう周りに人が集まっていた。所々から会話が聞こえてくる。

「おい、あんな量どこにはいつていつてんだ？」「たしかに。凄く大食いだな」「さしずめ大食い幼女ってところか？」「そうだな、大食い幼女だな」

おい、どんな会話してんだよ。そうツツコミを入れたかったが、あいにく口は食べ物で満タんだった。

まあこれ以上ここでは食べていられないようなので移動をする事にする。はあ……なんでこんなことになってるんだか……

食べ物をしまいしばらく歩いてみると、なんとなく目にとまるお店があった。そこに僕は吸い寄せられるように入っていく。

「いらつしやい嬢ちゃん」

「え?! シイラさん?」

入った店の中にはシイラさんが居た。それも、カウンターに座る形で。

「全然来てくれねえから忘れてたのかと思ってたぞ」

「あはは……」

言えない、今まで完全に忘れていたなんて言えない。

店内を見渡すと、そこは雑貨屋のようだった。武器や防具、生活雑貨に魔法薬（ポーションとかをそう言うらしい）などがいろいろな場所に並べられていた。

その中で、ふと気になるものがあった。見た目は白色の腕輪なのだが、他の物とはなにか違うような気がする。解析をかけてみると、驚きの結果が出た。

ない画面が目の前に現れた。

《この装備は呪われています！ 外すことはできません！》

「あ、言い忘れてたがその装備は……って遅かったか」

そういうことは本当に早く言って欲しかったです。もしかしてずつとこのままだったり？

「まあ付けちまったんなら仕方がない。スキルに霊体化つてのがあつたろ？ それを使えば消えるから安心しな」

そう言われたので《霊体化》！ と念じてみると見事に耳と尻尾は消え、普通の状態に戻った。

「うう、何から何まですみません……」

「こつちにも不手際があつたから気にすんな。あんな売れ残り買つてくれたからそれくらいはなんでもないさ」

シイラさんと手を握り合う。そのついでに僕はあればいいなと思つていた物があるか聞いてみる。

「あ、そうだシイラさん。固形のMP回復薬つてここで売ってますか？」

「おう、売ってるぞ。だが、液体の回復薬よりは効果は低い。それでもいいか？」

「もちろんです！ ちょっと考えている戦法には、液状の奴じや合わなくて……」

「全く、どんな戦い方をするんだか……」

その後、他愛のない会話をして僕は、お店に有った固形MP回復薬【蜂蜜飴】を大量に買い占め、お店を後にした。

そして、買った肩当×4やら帽子やらを適当に改造しつつ僕は、決戦当日を迎えた。

この白い腕輪……名前が銀狼の腕輪になっていた……は予定外だけど、なんのキャラを真似しようとしてるかは……分かるよね？

デース！

第15話 隣町からの冒険者

早朝。いつもよりもギルドの中は冒険者達で混み合っていた。そんな中に慣れた様子で入ってくる少女が一人、勿論イオリだ。

明らかに幼女なのを見た冒険者達の中でも数名がカモが来たとかかりに絡もうとしたのだが、周りの者達にモーブの末路を聞かされると、殆ど自分の大切な場所を押さえ見ない振りをするのだった。

そして、オークの依頼に関してどこに行けばいいのかを考えていると

「イオリさん、オークの依頼はこれから二階で詳しい説明がされるので、そっちで待つてください」

と言われたので、ギルドの二階へと向かうのであった。

ギルドの会議室、と言っても日本と違ってプロジェクトやらホワイトボードやらがある訳でもない。広い空間に椅子が乱雑に並べられているだけの部屋でしかない。本来は会議室の中央に置かれているであろう大きな机は部屋の隅に寄せられていた。

既に登録を済ませたのだろう。20人程の冒険者達が既に部屋の中へと集まっている。

恐らくパーティを組んでいる者達なのだろう。3〜5人程のグループで集まっており、オーク討伐をどう進めるべきかで話を進めていた。そんな中へとイオリは歩を進めていく。

他の者達は数人のグループを作っているというのに、そこに一人で入ってきた幼女。当然その姿は非常に目立ち、会議室にいた者達の視線を一身に集める。

なんとなくその視線に恥ずかしさを覚え、頬を赤らめながらも、部屋の隅にあった椅子に座り他の冒険者を観察する。

「おいおい、なんなんだあの幼女？ 何人かは若干引いてるみたいだが……」

「ああ、あの娘か。あの娘はあれだよ、モーブを倒した」

「けど、それが本当ならまだたかがFランクだろ？ オーク討伐は早すぎないか？」

「いや、さつきちらりと見たんだが、ランクDになってたよ。全く、一週間で何をしたらそこまであがるんだか……」

「まあ、それなら問題ないか。それよりも、さつき顔を赤くしてたの可愛くなかったか？」

「おう、それは俺もそう思ったぞ」

「お前ら、ロリコンだったのかよ！」

そのこのパーティーの人達、子供は地味にいろんな事聞いているんだから気をつけないと。

(ロリコンねえ……日本はロリコンの国って言われてた気がするけど、この世界はそれよりも酷い気がするなあ……)

一瞬だけモーブの顔を思い出し、次の瞬間にはあっさりとそれを脳裏から消し去り他の冒険者達の様子を観察する。

勿論子供なんて一人もない。

そしてまた冒険者達の方でもイオリに興味があるのか、チラチラと視線を向ける者が多い。興味はあるが、明らかに幼女なイオリには話し掛けにくい。そんな、どことなく居心地の悪い雰囲気漂っている会議室の中へと新たに数人の冒険者達が入ってくる。

そしてその人影を見た会議室にいた者達は、イオリを見た時とは比べものにならない程にざわめく。

その様子に興味を引かれたイオリは他の者達と同様に新たに入ってきた冒険者3人へと視線を向ける。ついでに解析もかける。

まず目に入ってきたのは先頭にいる男だ。年齢的はふむ、36歳のようにだ。身長はだいたい190cm、髪は茶、筋肉モリモリのマツチヨマンだ。緑色に光る大剣を二本背負っており、その二刀流で戦うのだろう。レベルは見えなかったが、ここに集まっている人達が有象無象に思えるほどの覇気を纏っている。変態で無い事を祈る。

その男の後ろを歩いているのが、ながい緑色の髪を束ねた35歳の女冒険者。手に杖も持っているし、魔法使いで間違いなさそうだ。一

瞬不快そうな顔をしたが、私を見つけると手を振ってくる。解析を使っただのがばれたのかな？ 羽の付いたカヌー……いや、何も関係は無いな。

そして最後尾を歩いているのが薄い緑色の髪をした少年だ。年齢は12歳のように、素早さを重視しているのか魔物の革製のレザーアーマーと片手剣二本という軽装だ。まあ多分あの二人の息子なんだろう。武器も似させているし。

その人物が、自分の母親が一瞬だが不快そうに見た方向。つまり僕に視線を向けると、ニヤリと笑って私の方に向かってズカズカと近寄り、私の目の前で立ち止まると口を開く。

「おい、お前。なんでお前みたいな奴がここにいるんだ？ ここはお前が来るような場所じゃないぞ、帰れ！」

私に明らかな侮蔑の目を向けながらそう言うてきた。

今日は厄日だわ!!

第16話 父さんにもぶたれたことないのに!

「ほ、ほう……言ってくれるじゃん? これでも私、Dランク冒険者なんだけど。それでも役立たずっていうの?」

僕は自分のギルドカードを取り出しながら言う。すると、話しかけてきた少年は顔を赤くして叫ぶ。

「う、うるさい! いくら俺と同ランクっていったって、そんななりじや碌に武器も振れないだろバカ!」

「む、私だつてちゃんと戦闘はできます! それと、私が産まれた地方じゃ『バカつて言った方がバカ』つて言うんだよバカ!」

「な、それならそつちだつてバカじゃないかバカ!」

「それは暴論だよ! そつちが先に言ったんだからそつちがバカなんだよ!」

「うるさいバカ!」

「なんだ?! このバカ」

「バカバカバカ!」

「バカバカバカバカバカ!!」

そんな僕と少年の口論を、微笑ましそうに周りが見つめている。ば、バカは向こうだつての! あ、そつちの両親っぽい人達もそんな顔して見ないでくださいよう

「ふん、バカはもうこつちでいい。冒険者なら、これくらいは避けることはできるよなつ!!」

そう言つて少年が右手を振りかぶり、僕に向かって振ってくる。そして、両親っぽい人達が、慌ててこちらに走ってくるのが見える。

なんてことを見ている間に、視線を戻すともう避けられない程近くまで拳が迫ってきていた。魔法を使えば避けられないことも無いけど、床が壊れちゃうし……展開中断。ああもういいや!

「っ!」

拳が当たるのに合わせてその方向に飛び、威力を抑える。顔に当たったものの、特にダメージは無い。が、丁度よく飛んだ方向に椅子が置いてあり、自分で飛んだ勢いのままぶつかる。

ドンガラガツシャン と椅子を巻き込み転がった僕は、いつの間にやら左側の眼の脇……殴られた方だ……から血が出ていた。そして、椅子が絶妙に絡まって動けない。

(なるつ、痛いじゃん！ こうなったら外聞を完膚なきまで叩き潰してやる！)

「う、うえくん。痛いよう。グスツふえええん」

イオリ渾身の泣き真似によって、周囲の空気は一気に少年が悪という方に傾く。ふ、幼女をぶん殴った罪、とくと味わうがいい！

「こいつ、本気で殴りやがった……」「正気か？ 自分より年下だぞ？」「しかも幼女を……」「どう思うお前ら？」「さつきはお前らの気持ちからなかったが、今なら分かる」「おう、俺もだ」「判決は？」「」「ギルテイ！」「」

あのロリコン達が、予想以上……いや、予想通りに切れている。あ、ヤバイ。泣き真似のつもりだったのに治らなくなってきた……グスツ。なんてことを思いながら、目を押さええている手の隙間から少年を見ると、鬼の形相をしたメイトリックス(仮)が立っていた。

「ち、違う。俺はあんなに強く殴った訳じゃ……」

そんな事を口走った少年を、メイトリックス(仮)が殴る。

「そんな言い訳が通るか！ 現に血を出して泣いてるじゃないか！」

「それはあいつが自分から飛んだからで……」

そこまで見ていると、不意に視界が塞がれる。当然そこに居たのは、あの少年の母親っぽい人だった。

「ウチのバカ息子がごめんね。《ヒール》」

何か温かいものに包まれ、流れていた血が止まる。が、泣き真似だったはずの涙が止まらずひしと抱きつく。

「よしよし」

だが、そう言ってぽんぽんとしてくる手にだんだんと涙が収まっていく。これがお母さんの力かっ!?

「グスツ、ありがとうございます……えつと……」

「私の名前はシンディよ。ウチのロイドが本当にごめんね」

「どうやら少年の名前はロイドというらしい。」

「大丈夫……です」

そんな事を話していると、首根っこを掴まれてこっちに連れてこられていた。ね、ネコか……？

「ほらロイド、きちんと謝って許してもらえ」

「分かったよ父さん……。悪かった、許してくれ」

僕はピイツと顔を背ける。ふん、そんなので許してやるもんか！

「ロイド、お前は女の子の顔を殴って怪我させたんだよ？ もっときちんと謝ってやらないと許してくれないと思うよ？」

「ああ……もう、分かったよ母さん！ 殴って本当にごめんなさい、許してください」

そう言って頭を下げるロイド。まあ、そういう事なら……

「グスツ、分かった。いいよ」

そう言って僕は手を出す。それを見て向こうも手を出し、お互い握手をする。それを見て、満足そうな顔をする周りの人達。

「そういうえば、あなた達って何なんですか？」

「ああ、言ってなかったか。俺の名前はメイ。そして俺たちは《ストームプリンガー》。隣町から来たSランク冒険者だ！」

バーン！ という文字が見えそうな程に胸を張るメイ（トリックス）さん。おお……な、なんか凄い……

「わ、私はDランク冒険者のイオリです。よろしくお願いします。それと、先程はありがとうございました」

そう言って私は頭を下げると、剛毅に笑いながらメイさんが返事をする。

「おう！ よろしくな！ むしろ今回迷惑をかけたのはこっちだからな、今回の依頼、危なくなったら俺たちを頼ってくれ！」

「は、はい！」

そんな迫力に押され、僕は思わず素で返事をしてしまった。まあ、変では無いよね？

そんな事を話していると、見覚えのある人達……クラスメイトの人達……と、一人の大柄な男が会議室に入ってきた。

第17話 出陣!

その様子を見て、今まで話していた冒険者達も、僕と《ストームブリンガー》の人達も近くの椅子に座る。いや、僕達は倒れた椅子を拾ってだが。勇者がざわついていているが、誰も気にはしない。

そして、全員が椅子に座った事を確認すると目の前に立った男が口を開く。

「皆、よく集まってくれたな！俺が今回の依頼を仕切る、ギルドマスターのヒッグスだ！」

ほへー、あの人がギルドマスターなのか。しっかしメイさんといいこのヒッグスさんといい、コマンドー臭が凄いな……ここ。かつこいいとこ見せましょ！」

「勇者を含め、たったの60人しか居ないが、俺たちならば絶対に成功させられると信じてる！」

えくと、先生含めて僕の居たクラスは僕を抜かすとして40人だから……あれから一切冒険者増えてないのかよ！ 数集まらなさ過ぎじゃない!?

何て事を思っていると前方で立っているヒッグスさんが話し始める。

「さて、まずは今回の依頼の確認だ。とりあえず、依頼書に書いてあった事までは説明しなくてもいいな？」

それは当然だ、と僕を含むこの場にいる全員が頷く。依頼を覚えていられない冒険者とか、唯の役立たずじゃん。

「オークが集落を作っているのは、この街から1km程の【レトナークの森】の奥だ。初級の冒険者が、ゴブリンの討伐や薬草採取によく寄る森で危険度が大変上がっている。そして、ギルドが放った斥候の情報によると、目視で200体程のオークを確認したらしい」

その200体という言葉に場が騒つく。僕は基準が分からないから何とも言えないが、200体というのはかなり多い方なのだろう。それにしてもあの臭いがする奴らが200体か……鼻栓必要かな？

「だが、あくまで目視での報告という事を忘れるな？ 見えない範囲にいた奴を考えると、少なくとも50体は増える事を考えておけ。そして、この規模の集落だ。確実に率いている奴がいる。最低でオークジエネラル、悪くてオークキングだろう」

オークジエネラルというのは、たしかBランクの魔物で……オークキングはAランクだったはずだ。まあ、どちらにしろ今の僕が正面から戦ったら勝てないかな？

「万全を期して夜襲をかけるため、街を出発するのは夕方だ。今までの話で質問はあるか？」

えーと、オークが250だから……一人頭4体くらい倒せばいいのか？ 何て事を考えていると、冒険者の一人から質問が飛ぶ。

「オークの持っている武器は、倒した奴の物でいいのか？」

「ああそうだ」

武器？ 金属!? ふっふっふ、狩って狩って狩りまくってやる……私は金欠だからね……

そんな事を考えている間にも、さっきの質問を皮切りに質問が飛んでいく。

「集落までの移動方法は？」

「徒歩だ。たったの1km、馬車を使うまでも無いだろう。それに、夜襲をかけるまでの休憩時間もあるんだ。大したこと無いだろう」

「作戦はどうなっているんですか？」

「それは現地に到着してから話す」

僕は質問あるかな？ えーと……ハッ！ 一個あるじゃん！ 僕は手を挙げて言う。

「はい！ 質問いいでしょうか？」

「その銀髪の嬢ちゃん、なんだ？」

「ここに集まっている人達は、みんなパーティーを組んでいるように見えます。けど、私はパーティーを組む人がおらずソロなのですが、それでも参加は出来ますか？」

そう、これは結構重要な事だ。これがダメなら、メイさん達か他の

見知らぬ人、もしくは勇者の誰かと組まなければいけない。特に最後のやつは最悪だ。バレたくないって言うのに、いつボロを出すか分かったもんじゃない。

「ああ、問題ない。出来ればパーティーを組んで欲しいところだが、まあソロでも問題無いだろう」

「よかった……」

(でも、結局ソロは僕以外いないんだね……)

周りを見渡しても、パツと見ソロで挑もうとしている人は居ない。もしかしたら、僕みたいパーティーの近くに居るだけの人がいるかもしれないが、そう楽観視はできないだろう。

そう思っただけ息を吐いていると、隣からシンデイさんが話しかけてきた。

「イオリちゃんって、ソロだったの？」

「はい。こんな見た目なので組んでくれる人も居なかったし、抱えている事もあるので丁度いいと思ってます。危険か危険じゃないかはおいといてですけどね」

そう言っただけはニヤリとする。パーティー組まない理由？ そんなのこの見た目の所為で組んでくれないって事と、まあこっちは個人的な考えなんですけど、パーティー組んだらその人にステータス教えるといかないでしょ？ 多分。そしたら転生者ってバレちゃうし、この《ヘーパイストス》って職業も、なんかありそうなんだよね……

「そう……分かったわ。もしあれだったら私達と行動しないと云おうと思っただけだけど……」

「お気持ちだけでもらっておきます」

そう私が丁寧な断ると殆ど同時に、ざわついていた会議室が静まった。そして、ヒッグスさんが口を開く。

「どうやらもう質問は無いようだな！ それでは解散。その後、各自夕方になったら門の外に集合だ！」

その言葉に、ピリツと空気に緊張が走った。けど、勇者とか必要以上には緊張してると感じさせるけど……

「言い忘れていたが、ちゃんと飯は食ってこいよ？ 腹が減っていた

ら勝てるもんも勝てなくなるからな！」

そう言った後、ガハハと笑いながら退場するヒツグスさん。その最後の言葉で緊張感は霧散した。

まあ、こつちの方が良かったのかな？

「それでは、今日はよろしくお願いします！」

「おう！」

私はそう言ってギルドを後にするのであった。

遠足みたいな気分になったのは言うまでも無い。さて、宿に戻って寝ますか。……この身体だと、夜になるとすぐ眠くなるんだよ！

第18話 私の戦い方

「ふあく……ああう。よく寝……た……!?!」

寝ぼけ眼を擦り、窓から見た空は太陽が傾き始めていた。そう、夕方である。

「まっず、遅刻遅刻くく」

そう言っ僕は宿から飛び出し、城門に向かっていった。昼ご飯を食べる前に寝てしまったので、パンを啜えながら。残念だったなあ、ホットドッグだよ。

◇

「ひよはっは、はひはっは」

城門を出ると、かなりの冒険者と勇者が集合していた。最後では無かったので安心である。

「お、今度はイオリちゃんか」

「ふあい？」

僕の右手の方向から、シンデイさんの声が聞こえた。よく先生が持っっいっような名簿みたいな物を持っっている。

「へっほ、ほふひふほほへふは？」

「話すのは、そのホットドッグを食べきっってからね」

「ふあい」

顔を赤くしながら、僕は口に含んでいたホットドッグを飲み込み始めるのだった。

「えっと、改めまして。今度は私っってっっどういう事ですか?」

「一応、ギルマスから逃げ出した奴が居ないか確かめてくれっって話が来たからね。私がここの門、反対側にはメイとロイドが行っって確認してるんだよ。時間がきたら、向こうの門に出た冒険者達を回収して、こちらから出発するらしい」

「そうだったんですか……」

成る程ね、普通ならこっちの門から出てくる筈だけど向こうに行く人もいるかもしれないからね。ごうりてき? とかいうものなのかな。

「そうだイオリちゃん。人が来るまで暇になっちゃうから、少しお話ししない?」

「は、はい!」

まだ見た目相応の扱いをされるのに慣れておらず、若干変な声で返事をしてしまう。うくん、慣れないとな……

「ソロで挑むっていう事は、それなりには戦えるって事だよな? 出来ればいいんだけど、私に教えてくれないかな?」

僕の戦い方か……スキルがかなり関係してるからな……教えてもいいものか? と考えていると、ふと周りから音が消えている事に気付く。

「え? 音が……」

「直ぐに気付くなんて凄いわね……。風魔法の《真空》よ。あんまり長く中にいると息が出来なくなるけど、ここならあなたの秘密、話しても大丈夫でしょ?」

「そう……ですね。私の戦い方は、私のもつてる職業に関係していて、《ヘーパイストス》って職業知ってます?」

まあ、悪い人でも無さそうだし、これくらいは教えても大丈夫だろう。すると、シンデイさんはとても驚いた顔になり聞いてくる。

「知ってるも何も、鍛冶系職業の最高峰じゃない! そんなのどうやってその年で就いたの?」

「まあ、そこは秘密という事で。それで、《ヘーパイストス》のスキルのお陰で、作った武器のスキルを手に入れられることが有るんですけど、私はそれで戦っています」

「まあ、それはそうよね。でも、それだけでも無いでしょう? あの時魔法陣を展開していたし」

あちやー、消したと思ってたけどバレてたか。うん、ここまで話しちゃったんだ、正直に答えよう。

「まあ、私は見た目通りSTRがあんまり無くて、そのままじゃ強く武器が振れないんですよ。それを風魔法・火魔法で補って、土魔法で相手を妨害するって感じです。戦える鍛冶師を目指します!」

僕がビシッと指をシンデイさんに指しながら言う。すると、シン

デイさんがお腹を押さえて笑い出した。

「ぶつ、あははは。戦える鍛冶師って、そんなの滅多にいないわよ。あははは」

「む、笑わないで下さいよー。私、これでも必死なんですから」
「ごめんね……まあ、あなたの見た目は幼女なのに、話してみるとどう考えてもそうじゃない事を一番聞いてみたかったですかね。まあいいわ、ありがとうね」

そこまでシンデイさんが言うと、周りの音が戻ってくる。《真空》という魔法を解いたのだろう。便利だから僕も使えるように頑張らないとね。それに、私と話している間も、しっかりと城門に目を向けていたシンデイさんは本当に凄いと思う。Sランク冒険者って、かなりヤバイな……

なんて事を思っていると、僕の耳に人が歩いてくる音が聞こえてきた。多分そうなのだろうと思ってみると、案の定メイさんとギルマスだった。その人達に、シンデイさんが近づいていくので私も付いていてみる。すると、お互いの名簿を見て確認していた。

「このサーリって人はどうしたの？」
「放してやった」

くっ、なんでこの人達がこのネタを知ってるんだっ！ 頭の中に、崖下に放される人のイメージがよぎる。

勇者がいるので顔には出さないようにしているが、この人達はこれから関わっていききたいなと思う。

なんて言っているうちに、ヒッグスさんが号令をかける。

「1人事情により来られなくなってしまうが、メンバーが揃った！
行くぞ！ オークの討伐に！」

『『『『うおおおおおおお!!』『『『『』』』』』』

その凄まじいときのこと関の声に、僕は思わず耳を塞ぐ。あうう……なんか強化されてるらしい五感だとうるさいよ……

若干涙目になっている僕だった。

閑話―4 天上院の今

勇者召喚から一カ月、戦闘系の職業を持っていたメンバーでパーティーを組み、僕達は所謂ダンジョンに潜っていた。生産系の職業を持っていた人は付いてきてる人もいない人もいる。

僕はというと、王国の聖剣とやらを授かりすっかり勇者風の装備でリーダー的立場に立っている。

「皆、下がって！」

『了解！』

後方から響いてきた声に、攻撃をしていた俺がいる隊が下がる。そして、入れ違うように飛んできた様々な攻撃魔法が直撃し、ダンジョンのボスであった魔物は絶命した。

「お、レベル上がった」などの声が後ろから響いてくる。ザツと見渡してみるが、誰一人欠けていないようだ。

その戦闘に貢献すれば、それに応じて経験値が入手できる。そのシステムのお陰で、俺たちは楽にレベルアップすることができている。

タクミ・テンジヨウイン

種族 人族

性別 男

年齢 16

職業 勇者・聖騎士・(空き1)

Lv 50

HP 701/701

MP 799/799 +1000

STR 520

DEF 535

AGL 460

DEX 510

MIND 540

INT 810

LUK 53 +100

《スキル》

NEW!!

勇者 LV55 聖騎士 LV41

異次元収納 LV2 解析 LV6 暗視 LV9

超隠蔽 LV8

聖剣術 LV15 魔法剣 LV18 身体能力強化・改 LV

3

気配感知 LV7

打撃耐性 LV4 斬撃耐性 LV4 刺突耐性 LV4

聖光魔法 LV15 生活魔法 LV――

《称号》

覚醒者・ダンジョン踏破者・魔物殺し

聖騎士・ガラティーンの勇者・探索者

《装備》

武器・聖剣 ガラティーン

防具・ミスリルの軽鎧 +10・ミスリルの小手 +10

ミスリルの腰当て +10・学制服・旅人のブーツ +3

聖剣のお陰で、MPに+1000、LUKに+1000の補正が入り、かなり強くなっている。そしてこれなら……

「これでレベル50か……探索範囲がまた広げられるな……」

「まだ白沢くんのこと探しているの?」

そう柊さんが話かけてくる。確かに俺は、この世界に来てから随分と蒼矢のことを探しているが、見つかる気配は一向にない。普通なら諦めるのだろうか……俺には諦めるといふ考えはなかった。

「そりゃあね、あの状況で一人だけこっちに来てないっていうのはおかしな話だし」

「随分信頼してるのね。っていうか、それよりもっと……もしかして、白沢くんの事が好きだったり?」

「……………チガウヨ」

「その間は何!? しかも片言だし!」

「なんでも無いから行つた行つた!」

そう言つて俺は柊さんを押しのける。違う、俺はホモじゃないはずだ……

頭に満面の笑みを浮かべた、文化祭の仮装で女子の制服を着ていた蒼矢の顔が浮かぶ。……………違ふ……はずだ。

「蒼矢、本当にどこに行つたんだよ……」

そんな感情を無理やり押しつけてたその呟きは、勝利に沸くクラスメイトたちの声に紛れて消えていった。

王城に帰還すると、王様が俺たちを呼び出した。

「勇者達よ、お主らに対して救援の文が届いた」

「はっ。それで、私達は何をすればいいのでしょうか?」

一応代表ということになっているので、俺が代表として王様の言葉に答える。

隙を見て解析した王のレベルは76、王女ですら62という高レベルだった。騎士団長は84だったし、まだ逆らつてもメリツトも勝てる見込みも一切無い。強くないと……

「うむ、今回の依頼は辺境での魔物の大量発生ということだな、戦つてもらふことになる。行つてくれるか?」

後ろをチラリと見るが、誰も嫌な顔はしていない。これなら大丈夫だろう。

「勿論です、王様」

◇ こうして俺たちは、救援要請のきた街へと向かうことになった。

街に着いて俺はその光景に目を見開いた。救援要請では、今にも攻めてきそうだという話なのに、まさかお祭りをやっているとは……

(一応リーダーだししっかりやっておくか……。確か攻勢に出るのは

明日って話だったし……)

「全員今日は自由行動でいいよ！　ただしハメは外しすぎないようにね！」

そんな事を考えていると、先生がそんな事を言い俺にウインクをして来た。いつも頑張ってるお礼という事でいいのだろうか？

とりあえずその厚意に甘える事にして、僕も街に繰り出していった。

そこで開催されていたお祭りは、日本の物にとてもよく似ていた。カキ氷やたこ焼きの屋台に、パチンコでの射的……そんな物を見たりしながら歩いていると、広場に人だかりができていた。

「これは、何があったんですか？」

「これか？　見てみるよ、ほら」

そう言つてその人が指さした先には1人の女の子がいた。その子の近くには、あり得ないほどのたこ焼きのパックなどが置かれており、その口はリスのようになっていた。

ただそれだけの筈なのに、僕はなぜかその子から目を離す事ができなかった。暫く見ていると、その子は周りの光景に気づいたのか、そそくさとどこかへ行つてしまった。

(今の子、どことなく蒼矢に似てたような気が……うん、気のせい気のせい。でも、あんな楽しそうにこの街で暮らしてるんだもん……守らないと)

その子が去った後そんな事を思い出し、多少嫌気が差していたこの街の防衛にやる気が出てきた天上院であった。それが本人であった事など知る由も無い。

第19話 作戦会議です！

「イオリちゃんって本当に軽いわね、ちゃんと食べてる？」

「食べてますよ、自分で作ったり買い食いだったりはしますけど」

討伐に出発する

←

周りが歩いているのに対して、僕は小走り。

要するに、僕歩くのが遅い。

←

すぐに息切れ

←

見かねたシンデイさんが背負ってくれた(いまこ)

はい。という訳で今、僕はシンデイさんに背負われながら話をしていきます。まあそうは言っても、最近は塩を振った串焼きと薬草のサラダくらいしか作ってないんだけどね。あ、炭水化物はパンを買い溜めして食べてました。お米が食べたいです。

「それに、アイテムボックスの中は時間が止まっていますからね、今も実はかなり入ってますし。具体的には2週間は生きていける量がですね」

「なんでそんなに入れてるんだよ……」

話を聞いていたロイドが、呆れたように言う。むう……そんな事言われてもさ……

「いざっていう時の為だよロイドくん。私、身寄りが無いからね……」

若干目を伏せながら僕は言う。身寄りが無いから養って貰えるわけじゃないし、何も準備がないままお金が尽きたりしたら生きていけないからね。作った武器を売って？ 僕の見た目を考えてみてよ、絶対買い叩かれるだろうね。

「そうか……ごめん」

「大丈夫、私は気にしてないよ」

こういう時は……笑えば、いいと思うよ……ハッ、なんかの電波が……ええと、ひぐらしの人っぽく……

「にぱー☆」

……Oh、ロイドくんが顔を真つ赤にして顔を背けてしまった。何これ威力高え。そんなになるようなもののかな？

なんて事を考えて首を傾げていると、森の近くに着きヒッグスさんが声を上げる。

「ここで一旦休憩とする！ パーティーリーダー、及びソロで参加する者は集まってくれ！ 作戦の詳しい内容を説明する！」

僕はシンデイさんの背中から降りて話しかける。

「そういえば《ストームブリンガー》のリーダーってメイさんなんですか？ それともシンデイさん？」

「私達のリーダーはメイの方だよ。だからほら、行ってきなイオリちゃん」

「はい！」

背中を押され、僕は人が集まっている中へと向かっていった。

◇

「先程も言ったように、詳しい作戦を説明する」

ヒッグスさんがそう言っている中、周りを見渡すがパーティーを組んでいた人達の顔しか無かった。勇者からは天上院だけが出てきているが……僕ボッチかよ……あ、やば、涙腺が。

「まずは《ストームブリンガー》の方々の代名詞、暴風魔法《ツイスター》で一当して数を減らし、そこから湧き出てくるであろうオークを冒険者、勇者共に分散して各個撃破だ。ただし、オークキングなどと遭遇した場合、可能ならば逃げて応援を呼べ」

最後のは、視線が僕に向いていた。まあ、流石にAランクとまともにぶつかって勝てると思いはありませんよ。

「最初に大規模な攻撃をした《ストームブリンガー》の方々には、敵が集中するだろうが存分に頼らせてもらおうぞ」

「ああ、問題ない」

そう胸を張って答えるメイさんをカッコイイと思う反面、僕は何かが違うような、とても嫌な予感がしていた。

(作戦自体は問題ないし、勇者っていう戦力にSランクパーティーも

居る……だけど、なんだろうこの気持ち悪い感覚は。そう、何か……
何かが違うような……)

——スキル 予見 を入手しました——

そう頭にメッセージが流れる。そんなスキルが手に入ったってことは、絶対に何かがあるんだよなあ……

そんな事を思っている間にも、会議は進んでいたようでヒッグスさんが締めに入る。

「よし、これで作戦は全てだ。何か意見がある者はいるか？」

そう言われるが、誰も質問は無いらしく声を出さない。僕のこの不安感を言いだそうか迷っていると、ヒッグスさんが質問を閉め切ってしまった。

「作戦開始は完全に夜になってからだ。今夜は三日月なので、襲撃には丁度いい。全員、生きて帰るぞ！」

そう言って会議は終了となった。集まっていた人達がバラバラになり、各自で話し合い始める中、僕はこの不安感をせめて伝えておこうと思ひシンデイさん達に近づいていく。

「あらイオリちゃん、どうかしたの？」

「シンデイさん。いきなりなんです……なんだかこの作戦、凄く嫌な予感がするんです。私なんか言う事じゃないかも何ですけど、本当に気をつけてください」

僕は頭を下げてお願いする。一番の激戦区になるであろう、シンデイさん達には言っておきたかったのだ。杞憂に済むならそれに越したことは無いけれど……

「忠告、ありがたく受け取っておくわ。イオリちゃんも気をつけてね」「はい……」

僕はそう返事をし、無理やり笑顔を作りその場を離れていった。

「さて、私も装備しないと……」

そう言って僕は、装備一式を装備していく。武器や防具は、ちゃんと装備しないと効果がありませんよつと。

そう思いながら装備を付け終わった僕の姿は、魔女のような帽子に四つの肩当て。大鎌を持ち、色は黒とミスリルの緑で、この姿はまさ

に……

「デスデスデース！」

なんて事を小声で言いながら大鎌を構えてみる。下がワンピース
とは言え、かなりの恥ずかしさが押し寄せ顔が赤くなる。

が、まとりついた不安感は晴れず、モヤモヤした気持ちのまま僕
は作戦の決行を迎えた。

わ、私は常識人デース！

第20話 討伐開始!

上空から三日月が地上を淡く照らす夜、討伐隊の面々が散らばっていく中僕は、シンデイさん達《ストームブリンガー》の近くに居た。

僕は無詠唱のスキルを持っていてから今まで一度もまともな詠唱をしたことがなかった。だから、本物の詠唱というのを一目見てみたかったからだ。

なんて事を考えている間に、シンデイさんが作戦開始の為の魔法を詠唱し始める。

「猛き風よ、渦巻き荒ぶりて、我が敵を討ち滅ぼせ。吹き荒れる!

《ツイスター》!!」

何その詠唱カッコイイ、と思っていると緑色の大竜巻が集落がある方向に向かっていき家? を吹き飛ばしていく。

(す、すっぐ……)

少しの間見惚れてしまったが、我に振り返り僕も飛び出していく。さて、嫌な予感が杞憂に終われば良いんだけど……

オークの集落に飛び込んでいってからしばらくすると、クサイ臭いが濃くなり20体程のオークとエンカウントした。杖持ちに弓持ち、フィールドウルフに乗ってる奴に剣を持っている奴、槍を持っている奴まで居る。うくん、某戦争にはアサシンが足りないか。

「災輪・T^{ティ}iN^ン渦^{カー}あB^{ベル}エル! なんちやって」

そんな集団に、技名()を叫びながら突撃する。肩当てからバーニアではなく、爆発を起こしながらコマのように回転しながらオークを斬り裂いていき、最後の一匹を斬ったところで止まる。

「うえ……き、きぼぢわるい」

こんな技をやったのけるあのキャラ、絶対常識人なんかじゃない……技名もアレだし。なんて心の中で愚痴りながら、ポーシオンを煽る。

「も、もう2度と使わない……」

僕は大鎌を支えにしながら、散らばった武器を拾い次の敵を探して

歩いていった。

◇ 燃える建物の屋根を、爆発で加速兼破壊しながら僕は移動していた。このMP消費の激しい行動のせいで蜂蜜飴を何個も食べているため、口の中が甘ったるくて仕方がない。自業自得なのは分かっているけどね。

「予想はしてたけど、やっぱりファンタジー世界のオークってそういう事するんだね……」

先程からチラホラとボロ布をまとっただけの女の人が、建物から救出されているのを見かける。今も、地球で言うなら小6くらいの女の子が担がれていった。あんな子まで攫われるとか、幼女な僕としては薄ら寒いものを感じるね。

「つとと、アレはもしかして?」

視線を巡らせていると、黒い肌をした普通のオークよりふた回り程大きなオークと、それから逃げる人を背負った黒髪の集団を見つけた。

「ええと、オークキング!? なんでそんな奴にちよっかい出してるの勇者!?! しかも女子だけのパーティーで」

関わる予定は無かったが、流石に見捨てるわけにもいかなないので僕はそちらに駆けていく。

「ああもう、効くか分からないけど! 《マッドプール》《エアプレッシャー》《バインド》《チェーンバインド》《フレイムチェーン》!!」

僕は覚えている限りの行動を妨害する系統の魔法を使う。泥沼に深く沈み込み、光の輪と炎の鎖に拘束されたオークキングに向かって、大鎌に飛び乗り土で作られた鎖に引かれさらに加速しながら突っ込む。

「ブモツ!」

その事態に気がついたオークキングが、手に持った鉄塊のような大剣を構えようとするが、光の輪と炎の鎖が邪魔をして上手くいっていない。今が好機!

「断殺・邪刃^{ジャバ}ウオ^{ウオツ}t t K K K ううう!!」

僕はかなりの勢いでオークキングの首に向かって突進していき、強い衝撃を受けたものの、そのまま通過した。

「つく……」

ズサアアアつと、靴の裏側を削りながら停止する。そして振り向くと、勇者が雑魚オークに襲われているのが見える。人を背負っている為か、上手く応戦出来ていない。

「ああー！ 《火球》《火球》ー！」

二発の火球に、後ろから飛斬を当て燃えながら飛ぶ斬撃というなんかカツコイイ物に変化させながら、僕は雑魚オークに攻撃する。

目の前の人間に気を取られていたのか、僕に気付いていないオークはそのまま斬撃の餌食となり、襲撃していたオークは全滅した。バカだろ。

「ふう……」

僕がそう溜息を吐いていると、人を背負ったままの勇者が近づいてきた。えっと、確かこの人は……

「助けてくれてありがとう。あのままじゃきつと全滅していたわ。私の名前は終鈴華。いや、この世界だとスズカヒイラギかな？」

そうそう、終さんだ。確か天上院とも結構仲が良かったはず……知ってる人を見捨てないでほんとよかった。

「私は、イオリって言います。こちらこそ、ゆるしやさまがたの獲物を奪ってしまいすみませんでした」

「いやいや、大丈夫だって。それよりも、攻撃する時に口走っていた言葉だけ……」

「すみません、お母さんが似たような攻撃をする時に言ってたことばで、意味は分かんないです」

勇者に疑われた時の為に考えていた対応策その1、親が日本人？を実行しながら僕は言う。ボロが出る前に早くどこかに行きたいんだけど……

「そう、悪い事聞いちゃったわね」

「気にしてないですから大丈夫です。それよりも、その人達を早く連れていってあげてください」

「そうね。それじゃあそうさせてもらおうわ。気をつけてね！」

「はい！」

そう言っつて勇者……柊さん達は去っていった。ふう……ボロが出る前で本当によかった。

「さて、あの武器も回収したし、次のオークを探しにいけますか！」

オークキングを倒せた事で気が緩んでいた僕は、楽な気分で歩き出した。戦闘が始まってから嫌な予感がしていたことを忘れていた僕は、後にこの時そのことを思い出しておけば良かったと後悔する事になる。

第21話 悪寒の正体

オークキングを倒した後、雑魚オークを相手にせずまたもや屋根から屋根へと移動していると、一人でオークキングと打ち合っている人……天上院を見つけた。

見た感じ、危険を感じるような戦い方ではないのだが、何故か途轍もない悪寒が僕を襲った。そして、その悪寒に突き動かされるように僕は天上院と逆方向からオークキングに突撃する。

「加勢しますー！」

「助かるー！」

それだけ言うと、天上院は聖剣？ でオークキングの鉄塊剣を大きく打ち上げる。

「せやああああ!!！」

その隙に僕はオークキングに肉薄し、弾かれている右手に大鎌を一閃させ斬りとばす。が、オークキングは痛みにも顔を歪めながらも空中にいるうえに大鎌を振り切った後の所為で、身動きの取れない僕に無事な右腕を振り抜く。

「ヤバッ！ 《エクスプロージョン》！」

そう言っただけは、魔法で自分の目の前の空間を爆発させる。そして、その反動で僕はオークキングの腕の届かない範囲まで吹き飛ばす。

「けほっけほっ、無理して避けるものじゃないね」

「ありがとう、あとは俺に任せて！」

そう言っただけ、天上院がこちらに敵意全開の目を向けてきているオークキングに向かって突進する。まあ、僕も経験値はゲット出来るだろうからいいか。

そんな事を思いながら見ていると、流石勇者と言うべきなのか武器を欠いたオークキングをあつさり倒してしまった。

その事に素直に感動していると、《気配感知》のスキルが今までに無いくらいの警鐘を鳴らした！

「っー！」

急いで周りを見渡すが、私の近くにはなんの気配も感じないし何かの陰も見えたりしない。ハツと思ひ、離れた場所にいる天上院の方向を見る。すると、こちらを向いている天上院の真後ろに奇妙な空間の揺らぎのような何かと、燻んだ緑色のオークキングとは違い斬れ味も凄まじそうな、血の滴る大剣が浮かんでいるのが見えた。

「うしろのおおのおおのおおつ!!」

明らかに危険な光を放っているそれを見て、僕は声の限り叫ぶ。

その僕の声の聞いて、振り向いた天上院は手に持った聖剣を掲げて防御姿勢を取る。更に、大剣が振り下ろされるまでの短い時間に透明な結界のようなものと、光系の魔法と思しき結界が張られる。

それに僕は安心したのだが、次の瞬間それらをあっさりときき破り大剣が天上院に到達する。

「っ!!?」

そのまま大剣で斬りつけられた天上院は、僕のいる方向に吹き飛ばされ近くの木に叩きつけられた。

「ゲホツゲホツ、ゴフ……」

木に叩きつけられた天上院は、見た目は怪我は殆ど無いのだが、口から血を吐いていた。これはまずいと思ひ、僕は焼け石に水かもしれないが、天上院に《ヒール》をかけていく。

天上院の息が安定し、ふと顔を上げると先程空間の揺らぎのような何かがあった場所には、真っ赤な肌をして大剣を構える巨大なオークが立っていた。そのオークはオークキングよりふた回りは大きく、この身体になつてから目線が違うので正確では無いだろうが、3mは余裕で超えているように見える。

そして、解析を使って判明した結果に僕は笑いが漏れる。

「あは、あはは……アレは、アレは本当にまずいね。戦いたくなんてないけど、逃げるのも無理じゃん……詰んでない? これ」

僕達を睨みつけているオークの解析結果は、こうなっていた。

オークエンペラー

ランク?

種族 ゴブリン・魔族
性別 雄

L v 86

スキルレベルが足りないのか、そもそのレベルが足りないのかは分からないが、僕が使った解析にはここまでの情報しか表示されなかった。けど、それだけでも僕に絶望を与えるには十分だった。

レベル差約40、圧倒的に格上の相手に足が震える。しかも、そんな奴が僕達を完全に敵として見てるんだよ？ 漏れそうだな。

そんな気持ちの中、震える足を押さえて唯一の希望を求めて天上院へと話しかける。もし、もし本当にあれが聖剣なら……テンプレ通りならどうにかなる筈だ。

「ね、ねえ天上院。その武器って、多分聖剣でしょ？ 必殺技とかがあったりする？ それが撃てればあの化け物を倒せる？」

ふるえ声で僕は尋ねる。頼む、テンプレ通りであってくれ……

「ゲホッ、君は一体何なの？ そんな極秘事項を知ってるし、それに……」

「今度余計な事言っと、口を縫い合わすよ！ あの真つ赤なオークのレベルは86なんだよ！」

僕は咄嗟に思いついた脅し文句を、太もも付近に投げるように付けていた針を見せながら口にする。

脅し文句と、言った真実のどちらが効いたのかは知らないが、天上院は一度目を見開いてから真面目顔になり、話し始めた。

「君の言う通りコレは聖剣で、凄い力を持った必殺技もあるよ。魔物全般と、魔族に特効があるって話だから、当てられれば多分あの化け物も倒せるよ、けど……」

「けど？ 早く言って！」

オークエンペラーは、こちらを見て口元を歪めている。多分、笑っているのだろう。今はこんな見た目でも、僕は女の子だしね……

「力を溜めるのに1分くらいかかるし、溜めてる間は俺は動けなくな

る。あ、1分っていうのは……」

「大丈夫、それだけ分かれば十分だよ。もう立てるよね？　じゃあ今から溜め始めて欲しいな」

「でも、俺は動けなくなるから……」

「私が足止めしてくれば、万事解決でしょ？」

そう言っつて僕は、自分の足元に魔法陣を展開した。もう覚悟は決まった。助かるために、いっちょ頑張りますか！

奇跡を見せてやろうじゃないか!!

第22話 オークエンペラー

そう覚悟を決めて突撃しようとした瞬間、後ろから肩を掴まれる！

「ダメだよ！ 君みたいな小さな子が行くなんて無茶だ！」

その地球では普通な考え方に、僕は頭を搔く。この世界はレベル制なんだよ？ ちよつとイライラしてきたかも。

「ああもう、そっちが必殺技溜めてる間は動けないでしょ？ この場には私達の他に誰も居ない、それじゃあ私が足止めするしかないじゃん！ ゆーしゃならそれくらい解れよ！」

「それでも……君が助けを呼んできてくれれば……」

それもまあ天上院が強ければ大丈夫だけど……LV53か、僕の解析にも気づいてないし無理だろうな。いやそりゃあ僕だって怖いけど、僕が行くしかないでしょう？

「さつきから私の事見てニヤニヤしてるだけで済んでるけど、多分私達が動いたらすぐに攻撃してくるよ？ レベル86相手に、私に解析使われたことにも気づいてないゆーしゃが戦って死なないって言える？ それでゆーしゃが死んじゃったら責められるのは多分私だよ？ はっ、だったら助かる見込みがある方に私は賭けるね！ ていうか、私の覚悟が鈍らない内に行かせて欲しいんだけど」

「……」

そう僕がまくし立てて言うと、天上院は黙ってしまった。あゝ、あの僕を見てくる目気持ち悪いんだよ。さつきと決めてくれないかな？

「……死なないでね」

顔を上げ、不承不承といった様子で承知する天上院。今更その程度の心配とか……

「私は助かる方に賭けるって言ったんだよ？ こんな所で死にたくはないし、安全第一で行くよつと！」

そうやって僕は、今度こそ足元を爆発させ加速しながら、とりあえ

ず一当てしてみるためにオークエンペラーに突撃する。

「せいやあああつ!!」

ギンツ!!

僕が、裂帛の気合いと共に放った大鎌の一撃は、ニヤリと笑うオークエンペラーに難なく防がれてしまった。

「ちっ」

舌打ちをして、全力で下がっていく僕にオークエンペラーが斬りかかってくる。ゴウツ! と唸りを上げて襲いかかってくる大剣を、どうにか受け流そうとして打ち合っている内に、大鎌の刃の部分に大剣を引っ掛けられ吹き飛ばされてしまう。

「やっばつ!!」

先程と同じように、火力は高めに目の前で爆発を起こし一気に距離を取る。そしてシミターを取り出し、ハンマーを右手シミターを左手に持つ変則的な二刀流で構えたところに、いつの間にか接近してきたオークエンペラーの大剣が振り下ろされる。

「なっ、めっ、るっ、なあああ!」

シミターの背で勢いを殺しながら、魔法を併用してハンマーで大剣の峰を叩く。大きな音をたて弾かれた大剣は、僕のすぐ近くの地面に叩きつけられ、反動で僕は浮かび上がる。

空中で、ハンマーをオークエンペラーの右足の人間だと小指に当たる部分に投げつけ、太ももに付けていた針をオークエンペラーの眼を狙って投げつける。

「ブモオオオオオオオオツ!!」

突然の足の痛みと、針が刺さり視界が奪われたことでオークエンペラーが滅茶苦茶に大剣を振り回す。

迫ってくる大剣に対して、空中でまともに身動きの取れない僕に出来たことは、咄嗟に腕をクロスさせ身体を丸めることだけだった。

「ツツ、!! カハッ!」

そのまま吹き飛ばされた僕は、木に天上院以上の勢いで叩きつけられた。ミスリルの腕甲はひしゃげ、腕も変な方向に曲がっている。凄く痛い。ヤバイヤバイ真面目に痛い。

「あああああああ!!」

あまりにも痛く、叫んでる僕に聞き慣れたアナウンスの声が聞こえてくる。

——スキル 痛覚耐性 LV 1を入手しました——
ありがたいけどまだかなり痛い。あだだだだだだだ。どこぞの北斗神拳の継承者じゃないよ。

——スキル 痛覚耐性 のレベルが2に上昇しました——

——スキル 痛覚耐性 のレベルが3に上昇しました——

——スキル 痛覚耐性 のレベルが4に上昇しました——

——スキル 痛覚耐性 のレベルが5に上昇しました——

ここでようやく考えることができるくらいには痛みが引いてきた。持っていたシミターは、飛んでいった大鎌の近くに刺さっており、ハンマーはオークエンペラーの足元でひしゃげていた。動こうとしたら、全身を脱力感が襲った。これは……魔力切れだな。

そして、そんな僕を見て、天上院が駆け寄ってこようとする。天上院のチャージは……終わってるように見えるのにだ。そんなことしたら、僕が稼いだ時間が無駄になっちゃうでしょうが!!

「私は、良いから! 早く撃って!!」

僕は、残った魔力を総動員し声を増幅し叫ぶ。それが僕の限界だったようで、段々と視界が狭まっていく。そんな中、天上院がコクリと頷き叫ぶ!

「ガランツティインツ!!」

振り下ろされた聖剣から極大の光がオークエンペラーに向かって放たれ、オークエンペラーが消えていくのが見える。

ニフラムかよ……なんてことを考えていると、頭にレベルアップのファンファーレが聞こえた。どうやら問題無く倒せたようだ。

(ああ……よかつ……た)

視界の端に、シンデイさんのような人影が見えたところで、僕の意識は闇に包まれていった。あとは、任せましたよ……

僕のHPヤバイデース……ガクッ

第23話 一章エピローグ

知らない天井だ。

よし、テンプレ完了。え〜と、たしか私はオークエンペラーに吹き飛ばされて……あ〜、魔力切れで気絶したんだったな。

……よし、五体満足。とりあえず起きないと現状確認も何もできない。そう思って身体をベッド(仮)から起こすと、足元の所でシンデイさんが寝ていた。起きるまで待つか。

◇

起きたシンデイさんの話によると、どうやらオークエンペラーは討伐成功。その後は特に強敵もおらず順調に終わったらしい。その報告に安心する。

そして、私の鎌とシミターは壁に立てかけてあり、ボロボロの装備はその下に畳まれて置いてあった。あ、因みに外はお祭りをやってるのかと思いきややっていなかったよ。

「起きてそうそう色々ありがとうございます。私ってどのくらい寝てました?」

「2日よ。このまま起きないんじゃないかって随分と心配したんだから!」

「あはは……すみません」

「全く……。意識が戻ってそうそう悪いんだけど、そういえばヒツグスが呼んでいたわ。ギルド長室にいると思うから行ったほうがいいわよ」

その言葉を聞いて、私は取り出した串焼きを食べながらギルドに向かって歩いていった。

ギルドに入ると、何やらいつもより視線が集中しているような感じがした。そして何人かがヒソヒソと話している。《集音》発動! になになに……

「おいお前ら! 《首刈り》が帰ってきたぞ!」「はっ、嘘だろ……つてマジじゃねえか!」「久しぶりに見たけど、やっぱり可愛いな」「ああ、

やっぱりそうだよな」「お前ら……この変態共め」「変態紳士と呼んでくれ」「俺が……」「俺たちが……」「変態紳士だああああ!!」「」
(よし、聞かなかった事にしよう)

私は魔法を切り、あだ名というか、通り名みたいなものだけを記憶に留め、レナさんに話しかけた。

「ギルド長が呼んでるって聞いたんですけど、どうすればいいですかね?」

「えっと、二階にギルド長室があるのでそこに行ってください。場所は突き当たりなのですぐ分かると思います」

「ありがとうございます。じゃあ行ってきますねー」

◇

キングクリムゾン！ 普通の話の時間は吹き飛ばす。

「という訳で、勇者の奴からお前にプレゼントが来てるぞ」

そう言っただけヒッグスさんは、恐らくアイテムボックスの中から燻んだ緑色の大剣を取り出した。あれってエンペラーの持ってた奴だよ
ね?」

「誰も使える奴がいらないんでな。お前が鍛冶師って聞いたら喜んで置いていったぞ」

「まあ、それならありがたく受け取っておきます」

「それと勇者から伝言だ。『一週間経ったら戻ってくるから色々詳しく話を聞かせてね』だとき。何したんだ?」

勇者が戻ってくる↓話でボロを出す↓バレル↓王国辺りに繋がれる↓自由が減少!!

この伝言を聞いた時の私の頭の中にはこんな構図が出来上がっていた。なので、僕としては苦笑いをする事しかできなかった。

「それとは別に、オークエンペラーを倒して今回の依頼に多大に貢献したからな。特別報酬がある。できる限り要望には応えるぞ?」

「それじゃあ、この大陸の詳しい地図を貰えませんか? あと見逃してください」

早めにこの大陸から逃げた方が良さそうだ。勇者の仲間入りとか御免被る。それに、折角だから旅を試みたいと思う。なんてったつ

て異世界なのだから。

「それだけで良いのか？ もう少しなら出せるぞ？」

なぬっ？ それならもう少しなら欲を出しても良いのかな？

「それじゃあ、鉱石とかインゴットを貰えませんか？ 今回の戦いで随分ボロボロになっちゃったので」

「これでギルドの面子も保たれるし、嬢ちゃんも物が貰えて満足だな。ガハハハツ。ちよつと待ってな、すぐに持ってきてやる」

やっぱりそういうことだったのか……と思いつながら私が欲しがる物が一部予想されてたからこんなに対応が速いのかな？ と思いつながら、元々自分が付けていた防具類の確認を始める。

肩当てはほぼ砕けてるし、腕甲はひしゃげている。ワンピースは際どい感じで破れてるし、運動靴は無茶な行動をし続けてたせいかわり切れている。帽子は……そもそも無かった。どうやら武器類は少しの整備で済みそうだから……よく私こんな状態になって生きてられたな。流石魔法ということなのか？

そんなことをしている間にヒッグスさんが戻ってきた。

「ほらよ、これが報酬だ。そういえばこれから嬢ちゃんはどうするんだ？」

「いや……私の秘密が勇者にバレちゃったかも知れないので、すぐにでも旅に出ようと思つてます」

思い切つて、約束をすっぱかすことを告白してみる。

「振られたな……勇者。伝言はあるか？」

「いえ、伝言はないですね。けど、勇者が来たらこのメモを渡してくれと有難いです」

そう言つて私は日本語で書かれたメモをアイテムボックスから取り出し手渡す。

「これは……見たことのない文字だが、良いのか？」

「勇者には読めますんで大丈夫です。それじゃあ私は旅支度をしないといけないので、ここら辺で！」

そんなことを言いながら、ギルドを飛び出していったイオリであった。

翌日の朝

「この街には一月も居なかったのに、随分と色々な事があつたよなあ……」

早朝、私はリフンの街の門を見上げながら言う。テンプレにテンプレを重ねた感じだったけど、日本で生きていた時よりも随分と充実した日々だったように思える。

「えっと、《獣人界》に行くには……うへえ、山越えないとダメなのかあ……」

私は地図を眺めながら、一人そんなことを言う。まあ、そんな冒険を試してみるのも一興だろう。

「さて、勇者に見つかっても良くないし、とつと行つちやいますか！」

そうやって私は一路次の街へと向かって歩き出した。

第一章 完

閑話―5 勇者サイドの後日談

「ガラランツティインツ!!」

チャージしていた力が解き放たれ、振り下ろす剣から膨大な光が溢れ出す。その光が見えたのか、回避しようとしたオークを飲み込み消しとばした。

オークの装備していたものが地面に転がるのを見届けた俺は、あの銀髪の少女の倒れている方へと向く。しかしそこには先客がいた。たしかストームブリンガーというパーティーの魔法使いの人だ。

「大丈夫なんですか!？」

俺が囮にしていたようなものだ。それが原因で死んでしまう事は、俺自身を許せない。そう考えながら、俺も近づいていき《ヒール》を連続して使用する。

「ええ、本当にギリギリだけどね。そんなレベルであいつを倒すなんてね……やるじゃない、あなた達」

銀髪の少女の呼吸が安定してくる。どうやら問題は無さそうだ。

「え、どこ行くの？ あなた」

「他のオークを殲滅してきます。その装備は、その子にあげてください。一番活躍したのは、間違いなくその子ですから」

そう言い残し僕はその場を立ち去る。そして暫く走っていき、オークの物と思われる小屋の陰で座り込む。

「はあ……はあ……もう、限界。無理……」

実は、魔力も体力ももうすつかからかんだ。それを自覚してはいるが、あの場で倒れたらあの人の苦労が二倍になる。そうはならなくて良かった、目に終さんの姿を捉え僕は気を失った。

意地だ、悪いか！

◇

「成る程ね、だからあんな戦線から離れた変な場所で倒れてたのか」
王都へと帰る馬車の中、話を聞いていた人達から代表して俺を回収した終さんが言う。

「まあね。そういえばそっちも助けられたとか言ってたけど……」

「うん。オークキングに追われてる時にいきなり首を吹っ飛ばしていったよ。確か、断殺 ジャバウオックとか言ってた」

「とんでもないな、あの幼女……。って何でシンフォギアの技名を!?!」
そう俺は思い、それを見ていたらしい柊さんに聞く。

「柊さん、何で知ってるのか聞いてみた? もしかしたら……」

「えっと『すみません、お母さんが似たような攻撃をする時に言ってたことばで、意味は分かんないです』って言ってたから、お母さんが勇者とか転生者だったんじゃない? まあ、蒼矢くんって事はないわよ」

「そうか……」

残念だ。もしかしたら、そういう可能性もあると思っていたんだけど……手がかりなしか。

「けど、どっちにしろギルドには留まっているように話はしておいたから、本人から聞けば良いんじゃないかな?」

「それもそっか」

その後は、特に話す事は無くなったのか俺はいつの間にか眠ってしまった。王様に報告したら、早めに戻らないとな……

3日後、リフン

リフンの街のギルド長室。俺はそこで、問題に直面していた。

「あの子が出ていったああああっ!?!」

「おう、振られて残念だったな勇者様」

そう、話に来たのは良いが、当の本人が既にどこかに行ってしまった後だった。あれだけ人をまとめるのが上手かったヒッグスも、勢いそのまま送り出してしまったらしい。

このまま収穫無しで帰るのはかなりまずいなあ……そう思い、大きな溜息を吐くと今思い出したかのように言った。

「そうだそうだ。そういうえば嬢ちゃんから手紙を預かってるぞ。俺には読めなかったが、勇者なら読めるつつう話だったからな。ほれ」

そういつて机の上に置いてあった手紙を渡してくる。

「はあ……」

そう言つて開いたメモには日本語でこんなことが書かれていた。

……」

「俺はロリコンなんかじゃねえええええ!!」

その日、ギルド長室から謎の叫び声が聞こえたと言う。

第1章登場人物紹介

イオリ・キリノ

種族 人族（偽・銀狼族）

性別 幼女

年齢 7

職業 ヘーパイストス・ドヴェルグ

LV 47

HP 689／689

MP 1214／1214

STR 375

DEF 331

AGL 309

DEX 3150

MIND 311

INT 749

LUK 51

《スキル》

職業

ヘーパイストス LV61 ドヴェルグ LV32

EX

家事万能 無詠唱

通常

異次元収納 LV6 超隠蔽 LV5 解析 LV6

鷹の眼 LV2

戦鎚術 LV13 二刀流 LV11 大鎌術 LV15

回復力強化 LV7 気配感知 LV14 身体能力強化・改

イオリが蒼矢じゃないかと疑っている。

モーブ

最初にイオリに絡んできた冒険者。イオリに玉を潰された。

柘 鈴華

イオリがオークキングから助けた少女。何気に勇者編の登場が多い。LV 48、職業は剣豪と忍者と実は強い。

メイ

《ストームブリンガー》のパーティーリーダー。髪は茶、筋肉モリモリのマッチョマン。大剣の二刀流で戦う。どう見てもメイトリックス。「地獄に落ちろベネット！」（※言いません）

シンデイ

《ストームブリンガー》の実質的なリーダー。まるで計ったような名前。オークエンペラーにやられたイオリに回復魔法をかけてくれた人物。

「今日は厄日だわっ！」（※言いません）

ロイド

《ストームブリンガー》でシンデイの護衛的な事をしてる人物。二人の息子。イオリとの口論の末、幼女を全力で殴った酷い奴という印象がつけられた。

オークエンペラー

今章のボスキャラ。見た目は赤いオークキング。イオリと天上院相手によく戦い、イオリに重傷を負わせたが、最後は聖剣の光に飲まれて消えた。因みに聖剣の光は、腹ペコ王のエクスカリバーと違って、地形破壊はしない。

第2章　もう一人の転生者

第1話　プロローグ

「はっこねっのやつまはー、てーんかーのけん。かーんこっくかーんもーもーのなーらざー♪」

山道を、そんな歌を歌いながら一人の少女が歩いている。銀髪蒼眼の少女が、木の枝を振りながら歩いている光景はなんともほのぼのする光景だ。

はいっ。という事で私ことイオリは、今絶賛山越え中です！この「チュンパオ山脈」は、獣人界に行くまでに最短で行くなら絶対通らないといけないルートらしい。

けれど、やつぱり最短ルートと言うだけあって一つ大きな問題がある。それは、自然に発生するとは全く思えない罠が大量に設置されている事だ。という話を聞いていたので、今私は常時解析をONにし……ガコンツ、ビーツ！　ビーツ！　ビーツ！　て歩いていただけ、どうやら罠に引っかかってしまったみたいです。

「ふふっ、来やがれツラ見せろ。出てこい、大鎌が待ってるデース！」なんて事を言いながら大鎌を構え待っていると、《気配感知》がどんどん敵の数が増えていくのを伝えてくる。5……10……25……50……まだまだ増えていく。

「え、ちよっ、これ、まずっ！」
どんどん増えていく敵の数に、冷や汗が垂れる。こういう手に負えない時は……

「三十六計逃げるに如かず！」

私がそう言って逃げ出すのと、飛び出してきた魔物が追いかけてくるのはほとんど同時だった。

◇

「ま、まだ追ってきてるっ!」

全力で山道を走り回る私の後ろには、数えるのも億劫なほどの魔物が追いかけてきている。

「すみませんもうふざけたりしませんからとつと消えてくれませんかー!？」

『『『きしやああああああつ!!』』』』

『『『グルルギヤアアアアツ!!』』』』

「デスヨネー」

そんな事を言ってみたりしながら走っていると、私1人がどうにか入れるかどうか程度の岩の隙間が見えた。

「ラッキイイー! 《土壁》《土壁》《炎壁》!」

その隙間に身体を滑り込ませ、入り口を魔法で塞ぐ。その数秒後、音は聞こえないがドンドンと何かが当たる音が聞こえてくる。

(来るなよく保てよ……)

そう念じながら頭を抱え込んで縮こまっていると、5分くらい経ってからだろうか? 当たる音が一切聞こえなくなった。

「い、行ってくれた?」

そう若干涙声で呟き《気配感知》を使ってみると、外には一切の反応が無かった。

恐る恐る魔法を解除し外に顔を出してみると、足元に焼けた魔物の死骸があるだけだった。

「た、助かった……」

そう言いながら異次元収納にそれらを仕舞っていくと、頭上に《気配感知》が反応した!

ハツとして手をかざすと、そこから衝撃を受け岩の隙間の中に逆戻りしてしまった。

「いったた……油断した……」

起き上がるために手を地面につき、力を込めた瞬間また カチツという音が鳴った。

「え、嘘……」

目の前の天井がガコンという音と共に降りて、奥からはドドドトツと低い音が響いてくる。

「あは、あはは……うわああああああつ! ゴボボツ」

水が勢いよく溢れ出して来て、私はその流れになす術もなく流され

ていき、最後に落下していくような感覚を感じ気を失った。
どうか五体満足で生きていられますように。

第2話 もう1人の転生者

パチ……パチツ……

焚き火か何かの弾ける音がする。確か私はトラップに流されて……

「ハッ!!」

手足が揃ってるのかとか、服とかはどうなってるのかとか色々な考えが頭に浮かび、急いで起き上がると黒髪黒眼の人物と目が合った。

じっと見てると、何故か顔を逸らされたのでなんとなく自分の姿をしてみる。結論から言うと、下着のみしか私は身につけていなかった。ワンピースは、焚き火の近くで乾かされている。これって……

「私、気絶してる間に、無理やり女の子にされちゃった?」

「誰がそんなことするか!!」

目を逸らしていた黒髪黒眼の……日本人風の顔をした人物から、鋭いツツコミが入る。身長も高めで170cmくらいだろうか? しかも、イケメンの部類に入りそうな顔をしている。流石に転生して一月も経たずにそんな目に遭うのは、ごめんだったので、一応安心だね。「せっかく助けてあげたのに、それは酷いよ。転生者のイオリさん?」「っ!?!」

(鑑定系の能力が使われた!? 隠蔽を突破して?)

私は跳びのきながら、お返しとばかりに《解析》を使用する。

リユート・カンザキ

種族 獣人 (???)

性別 男

年齢 16

職業 王者・剣士・盗賊

LV 75

HP 1020 / 1020

MP 1874 / 1874

STR 439
 DEF 521
 AGL 668
 DEX 567
 MIND 545
 INT 1059
 LUK 63

《精霊術》 光の太刀・光曲幻影・閃光轉身

《スキル》

職業スキル

劍士 LV 43

王者 LV 88

盜賊 LV 26

EXスキル
ゲイト・オプ・バヒロン

王の財宝

無詠唱

獸化

通常スキル

劍闘術 LV 8

小盾術 LV 1

2

回避術 LV 11

身体能力超化 LV

6

五感超化 LV 10

鷹の眼 LV 12

無音 LV 13

《称号》

転生者・光の友・野生の劍・魔物殺し
 戦う獸人・覚醒者

《加護》

世界神の加護 + 獸神の加護 ++ (身体能力強化)

|| || ||

名前

リユート・カンザキ

「れ、レーナ、僕は何もしてないよ?」

そんな風に言うこの青年とレーナと呼ばれた少女の関係がなんとなく気になり、どんな反応をするのかと思ひ私は言ってみる。

「酷い……私の初めてを奪ったくせに……しかも、気絶してる間に!」
私は手で自分を抱え込むようにして言う。名演技だな、と思つていると、青年は何てことを言いやがったと目で訴えてくる。

「リユ……ト、くん?」

「わ、ちよつ、その喋り方凄く怖いからね!」

「ぐす……」

「……」

「レーナ、無言で包丁を取り出すのは止めて! ほんとに洒落になつてないからね!」
そもそも今までの事、全部そのイオリさんの嘘だからね!」

レーナと呼ばれた少女の目からハイライトが消えて、包丁を持ち出したところで、流石にヤバイと感じたのか青年がそんな事を言う。

「本当……ですか?」

「そうだよ、そうだよね!」

面白い物も見れたし、もういいかなと思ひ私も頷く。

「良かった……」

「大丈夫大丈夫。僕が好きなのはレーナだけだから」

そう言つて、2人は目の前でピンク色の空間を作り出す。えくと、凄く居づらいいんだけど……それに、側はたから見るとこの構図……

「あ、もしもし警察ですか? はい、はいそうです。目の前に危険な口リコンが1人居まして……」

「僕はロリコンじゃなあああああいー!」

日が沈み始めた山に、青年の叫び声がこだました。

第3話 初めての仲間？

トントントントン、ザツ、ジュー

暗くなってきた山の一角で、場違いな音が響く。その発生源を見ると、鋼色の台の上でワンピースにエプロンを付けた幼女が料理をしていた。

「よし、こんなもんかな」

「僕は、いつまでこうしてればいいの？」

はい、という訳で料理をしていたイオリです。この前はノリで言っていたのに、リユートさんは気絶してる私のほっぺをツンツンしたりペシペシしたりして楽しんでたらしいです。なので、鉄塊を抱いて正座中です。

「なんで私は焼きそばなんて作ったんだろう……まあ、パンには合うけどさ……」

「あの……イオリちゃん、料理を任せっきりにしてた上で凶々しいかもしれないけど……料理終わった？」

「うん、終わったよ。私がやってる料理は趣味みたいなものだから、気にしなくて大丈夫だしね」

私は申し訳なさそうにしているレーナさんに、そう話しかける。ていうか、初対面の人に料理を任せるそっちもかなり凄いと私は思うんだけど……

「まあ、とりあえず食べながら自己紹介でもしようよ。お互いの事を知らないことには、できる事も出来なくなるしね」

私は笑顔でそう言った。

◇

「じゃあ、発案した私から。私の名前はイオリ、ギルドランクはCで転生者だよ。まあ、適当に呼んでくれて構わないよ」

「じゃあ僕だね。僕の名前はリユート・カンザキ。同じ転生者で、ギルドのランクはAだよ。よろしく」

「えっと、私はレーナって言います。ギルドのランクは、2人と違ってDだよ」

焼き火の周りで、焼きそばパンを食べながらの自己紹介……ひどくシユールな絵面だ。それつきり会話がなくなりそうだったので、私はちよつと気になっていた事を聞く。

「あ、そうだ。さつきリユートさんのステータスを強引に突破して見たけど、《王の財宝》ってスキルがあつたよね？　なんで私に使わなかつたの？」

一応私の職業にヘーパイストスなんてあるし、結構効果的だと思うんだけど……

そんな事を考えていると、渋々といった感じでリユートさんが答える。

「僕の《王の財宝》は欠陥だらけなんだよ。まともに使える宝具は3つだけだし、それも制限付き。イオリさんのレベルなら、最悪無理やりにでも取り押さえられるから使いたくなかつたんだよ」

「なるほど」

制限付きなら仕方ないか、天の鎖とか見てみたかったのに……。なんてちよつとがっかりしているとレーナさんが私に質問してくる。

「イオリちゃんは、戦つたりするの？」

「そりゃあもちろん。剣とか槌とか大鎌とか色々使うよ。そう言う二人こそ、獣人みたいだけどういう風に戦うの？」

(無い) 胸を張って言った後、ふと疑問になりそんな事を聞く。すると、レーナさんは大きく後退しリユートさんはあの王の財宝特有の金色の波紋から、武器を私に向けている。

その顔には敵意が孕んでいる。だがその様子をイオリは平然と見つめていた。

「な、何のことかな？　イオリさん？」

「いや、そつちこそ何なのさ」

何気なく言ったことにこんなにも過剰に反応されたらさすがにビビる。

「あ、もしかして獣人な事が関係してたりする感じ？」

「そうだよ。獣人は、人間にさんざん奴隷みたいに扱われてきたからね。けど、レーナも僕も何も悪い事はしてない、見逃してくれないか

な？」

真剣な表情を向けてくる。と同時にリユートはすぐさま剣を抜けるように身構えている……が、それも無駄になった。

「言う？　なんで？　これでも私も獣人なのにな？」

私は耳と尻尾の霊体化を解きながら言う。

「……は？　いや、嘘でしょ。解析じゃ人族だったし」

レーナはポカンとしている。

「うぐ、いや、そうだけどき、一回やってみたかったんだよ！　それに、何でわざわざ種族が違うくらいで差別しないとダメなのさ……」

「い、イオリさん……」

「それに元々転生者だよ？　ケモナーだよ？　モフモフを奪うとかあり得ないし！　日本人舐めんなっ!!」

ズビシッ！　とリユートに指を指して言う。するとそれを見たリユートは大笑いをする。

「ふふふ……あははははっ！　そうだそうだ、日本人の転生者なんだから気にする必要なんてなかったじゃん！」

「む、笑わないでよ。今後一切リユートさんには料理出さないよ？」

「それは……本当に勘弁して欲しいな……」

「あはは、だが断る」

「酷いっ!!」

イオリのテンションが落ち着くのを待ってリユートが聞く。

「はあ………そういえばイオリさんは何でこの山に？　クエストか何か？」

ケモミミと尻尾を消して、私は答える。面倒くさいが、言うしかないさそうな雰囲気だ。

「ん？　ああ、私の目的？」

そういえば言っただけだった事を思い出し、口を開く。

「国境越えだよ」

「……え？　そ、それって……？」

「うん、レーナさん達と同じ……だね」

「何で？　いや、ケモナーって言ってたし……」

「それもあるけどさ、いや〜私、勇者に追われてまして」
「……はい？」

「いやー、死ぬ気で頑張った時に転生者ってバレそうになってね。色々聞かれたりしたら面倒だから、逃げるためだね」

「またもリユートさんが大笑いを浮かべる。」

「なにがおかしいのリユートさん」

「……………なんか変なルビが見えた気がするんだけど？」

「それにさ、2人がやろうとする事を私がやるだけでしょ？」

リユートは突如真剣な顔になり言う。

「危険なんてもんじゃないよ？ 今の『獣人族』はかなり好戦的になっている。人間なんてバレたらただじゃすまないと思うけど？」

「そうだろうね。まあ、そのためにコレ使ってるんだし。もし戦うことになっても返り討ちにしてやるよー」

私は耳と尻尾を再び出して、力こぶを作るようにして言う。力こぶなんて有りはしないが。

「へえ、言うじゃん。イオリさんのこともっと知りたくなってきたよ」

「うわっ、やっぱりロリコンなんじゃ……」

「誰がロリコンだあああー！」

「そんなに僕のことをロリコン扱いしたいの!? と続けて怒鳴ると、もちろんそうだよ！ と元気よく返され、そのやり取りを見たレーナが小さく笑いを溢す。

「とにかく、ここで会ったのも何かの縁だと思っただ。行き先は同じなんだし、一緒に行く？」

「う〜ん……」

「そう言っただけ少し悩むような顔を作る。急に黙ったので、リユートが聞いてくる。」

「どうしたんだ？」

「まあ、いいか。一緒に行っても別にいいよ」

本来なら一人で行動するつもりだったが、改めて考えるといざという時保護者の立場に立ってくれる人がいないと大変な感じがしたので、了承する。

「あ、でも」

「でも？」

「襲ってきたら現行犯だからね」

「ぎっけんな！ 僕はドノーマルだよ！」

「気絶してる私を弄ってたって聞いたけど言い逃れできる？ それにレーナさんだって小さい方だし……」

「よし、表にでろやイオリさん！」

「ここはもう既に表だよ？ ロ リ コ ンさん」

「その名前で呼ぶなあああ!!」

二人のやりとりを見て、やれやれと肩を竦めるレーナ。しかし、誰にも聞こえないような小さな声で

「私、小さいのかな……？」

と言ったのを聞いたのは桶の中の魚だけだった。

第4話 夏だ祭りだ

「昨日までの、私の苦勞って……」

「仕方ないよ、イオリちゃん」

そうレーナさんが言つて、orzしている私の肩に手を置いてくれる。

因みに私がこうなっているのは、私が旋風魔法で姿を隠蔽し、速度は遅かったがヴィマーナに乗って私達は山を越えたからだ。これだからチートは……

そんなこんなで国境近くの街である「サーマス」に辿り着いた一行。だがそこで思わぬ事態が起きた。

「これは……どういうこと？」

「さ、さあ？」

今彼らの目の前には、大勢の人が屋台のような店を出して賑わいを集めている。屋台も多く出ていてお祭り自体は好きだが、8歳児の体ではまともに楽しめないイオリにとつては、この状況は目の前にご馳走があるのにそれを食べられない犬みたいな状態だった。

「お、お祭り……だよね？」

可愛らしく首を傾げるレーナだが、その瞳は若干輝きを増していた。目移りするほどの店の多さ心を躍らせているのかもしれない。どこの世界でも、小さい子がお祭りが好きなのは同じらしい。

「うくん……7月の後半くらいだったはずだし、夏祭りとかかな？」

「それだつっ!!!」

その言葉を聞いて、突如リユートがクワツ と目を見開いて叫んだ。

「うわっ、びっくりした。いきなり叫んで何さ？」

「イオリさんの言う通りだよ！ 今日夏祭りなんだつて！」

（なんだ。もっと違うようなやつかと思つてたのに若干期待ハズレだな……）

納得すると、だんだん不愉快になってきた。こんな体じやまともに楽しめないだろうし、リユートの子供でも思われたりするのとはなん

か癪に障る。いや、こういう時のために一緒にパーティー組んでるんだけどさ……

「イオリさん、今失礼なこと考えてない？」

そんな風な私の心情を読んだかの如く、リユートが私に聞いてくる。危ない危ない……。ともかくそれっぽい理由を言わないと。

「ん？ 何も。ただリユートさんが事案を発生させないか心配になっただけだよ。ほら、ちっちゃな子供は沢山いるし」

「何度も言ってるけど、僕はロリコンじゃないからね!? あと普通今のは嘘でもはぐらかすところだからね？ 嘘ついてる匂いしてたら、隠そうとしたって無駄だよ！」

そうリユートさんが焦ったように否定してくる。いや、獣人だから鼻が良いのは分かるけど、そんな匂いで判断するなんて……

「匂いフェチ!? それに、このパーティーを見た人の第一印象はロリコンだと思うよ？」

「な、何も言い返せないっつー！」

リユートさんは拳に力を込めて震わす。その時、ちらりと見えたレーナさんの顔は明らかにワクワクしており、目も興奮したようにキラキラしていた。あーうん、分かる。

「……よし決めた！ 誰が何と言おうと、主にイオリさんがどう言おうと決めた！」

「またいきなりどうしたの？ レーナさんの赤くなった顔なんて見ちゃって……まさか!?」

「違うよ!!」

リユートさんが勢いよく否定する。レーナもキョトンと目をパチクリしている。

「今日はここに宿を取るんだよ？ 折角お祭りがやってるっていうのに、楽しまないなんて損だよ！」

その言葉にレーナはパアツと表情を明るくする。相当嬉しいようだ。さつきあんな顔してたしね。実際は私も行きたいもん。

でも若干忌避感があるので、私はツーンとした表情で言う。

「なら2人で楽しんでくればいいと思うよ！ デート。私は先に宿で

……」

「まあ待ってって」

歩き出そうとしたところ、肩を掴まれる。むう、折角二人の時間を作ってあげようと思ったのに……

「声掛け事案……」

「いや、違うでしょ。楽しいよ？ お祭り」

「2人でデートでもしてくれば？」

「それは嬉しいんだけど、そんなことを言ってもいいのかな？」

「……………何が？」

せつかく二人きりの時間を用意したと言うのに何がダメだったのだろうか？

「いい？ この【サーマス】で開かれる夏祭りは、見て分かる通り規模がかなり大きいんだよ」

「うん、それは分かる」

「店だつてかなりある。しかも！ 日本食の屋台も出るのがココの特徴なんだよ！」

日本食という言葉に興味が引かれ、眉をピクリとさせる。いやいや、唯のたこ焼きかもしれないじゃないか。期待はダメダメ……そう首を振っているところに、爆弾発言が放り込まれた。

「そして【サーマス】ではどの屋台が一番人気が出たかを競う大会もやっててね、そこには日本米m「よし！ 行こう！ すぐ行こう！ 今すぐ行こう！ さあさあほらほらレッツゴー!!」説明遮られた……しかも何その超ハイテンション……」

リユートさんは、気落ちしたような雰囲気を漂わせているが、口元は若干綻んでいる。レーナさんもみんなで回るのが楽しみなのか、ワクワクが止まらないと言った感じだ。三人はしばらくの間、祭りを楽しむことに決めた。

えっと、私の残金を考えて……日本米は買えるだけ買いたいし……その他も楽しまないなんてもったいないし……。

服よし、髪型よし、お金も装備も収納してるから盗まれる心配なし！ イオリ・キリノ、サマーフェスティバルに出撃します!! あ、誘

拐とかされたらどうしよう？

第5話 ミスコンとロリコンと

「米だ！ 屋台だ！ お祭りだあああ！」

イオリはその屋台を見た瞬間、屋台に突撃していった。

「おじさん！ そのお米、これでも買えるだけ頂戴!!」

「おう！ それはいいんだが、そんな量持てるのか？」

「大丈夫！ アイテムボックスあるから！」

「はは、こんなに買ってくれてありがとうな嬢ちゃん！」

その後もスタタターと走り、色々な屋台を買い込んでいった。リユート達と別行動で本当に良かったと思ったイオリだった。

後で散財しすぎた事に後悔するのだが。

・合流地点にて

「あれ？ レーナさん何見てるの？」

私はレーナさんの持っているチラシ？ を見て聞いた。

「ん？ これ？ これはアレだよ」

そう言つてレーナさんが指を指した場所にはデカデカと【サーマス大ミスコン選手権】と書いてある看板があった。

「賞品が豪華だからでてみたいなくって思ったんだけど、服も何もないからね……残念だなあつて思つてたんだよ」

「へえ〜何々……」

|||||

【サーマス大ミスコン選手権】賞品

一位 賞金 5万G

魔杖・フリート

魔盾・ミラー

魔導書・雷属性

特選お米2年分

二位 賞金 3万G

化粧セット

魔導書・生活魔法

ミスリルの長剣
ミスリルの小盾

三位 賞金 2万G

割引券

B級魔物素材詰め合わせ

玉鋼の長剣

玉鋼の大盾

|| || ||

絶対にミスコンの賞品じゃないけどこれは……

「よし、レーナさん！ でよう、ミスコン！」

「え、でも……服とかはどうするの？」

「高レベル裁縫スキル持ちの人が隣にいるんだよ？ 今から作るに決

まってるじゃん!!」

まあ厳密には違うけど。

「え、悪いよ。それにあと一時間しかないし……」

「大丈夫！ 40分で作るから問題ない！」

そう言っただけは、アイテムボックスから素材を取り出し、ベンチで裁縫を始めた。

ふふ、ミシンは無くても、ミシンより速く縫えるパワーはあるのだよ。

◇

「ふふふ……できたあ!!」

——《スキル》思考加速 LV 1 を入手しました——

きっちり40分後、ついでにスキルをゲットして、できた装備がこれだ！

|| || ||

薄紫の着物 + 7

DEF + 100

AGL + 85

MIND + 65
LUK + 10

属性 水

重量 普通の着物

レベル

耐久 丈夫

《スキル》

水耐性《中》LV |

魔法防御《小》LV |

・セット効果

幸運《中》LV |

|| ||

黒色の帯 + 7

DEF + 75

AGL + 50

LUK + 12

属性 闇
重量 ただの帯レベル

耐久 丈夫

《スキル》

闇耐性 LV 1

魔法防御 LV

1

・セット効果

幸運 LV |

|| ||

花柄の下駄《黒》+ 7

DEF + 70

AGL + 65

LUK + 15

属性 闇
重量 ただの下駄レベル

耐久 丈夫

《スキル》

闇耐性 LV 1

AGL上昇 LV 2

・セット効果

幸運 LV —

|||||

因みにこんな装備を作れたのは、私が……いや、この場合は僕か。僕が小さい頃、散々着させられたせいでよく覚えてるからだ。

私？ 付いてた校章とかを外して、ソコソコのアクセサリーをつけた制服だよ。

「全部＋7って……というか今の私の装備より性能良いんだけど……」

「ん？ 何か言った？ 行こうよミスコン」

そんなレーナの呟きは、お祭りの喧騒に紛れ誰も気がつくことはなかった。

◇

「さて！ 今年も遂にこの季節がやって来ました!! 【サーマス大ミスコン選手権】、開催です!!」

「「「うおおおおおおお!!」」」

「準備はいいか野郎どもおおお!!」

「「「うおおおおおおお!!」」」

野外ステージに群がる男衆が叫ぶ。探してみると、リユートも叫んでるみたいだ。

「それじゃあエントリーNo. 1 前回優勝者、冒険者のアミカさんです！」

そう呼ばれ、レーナさんよりほんのすこしだけ大きい女の子が手を振りながら出ていく。

「いやあ、始まったねえ」

「こ、この服似合ってるかな？ イオリちゃん」

「うん、似合ってる似合ってる」

なぜか全員武器を携帯しているのだが、それはいいのだろうか？ ちなみにレーナさんは曲刀を、私はハンマーを携帯している。

そんな話をしながらコンテストは進んでいき、レーナさんの番となった。

「次はエントリーNo. 24番、冒険者のレーナさんです」

「ん、呼んでるみたいだよ？ いったらっしやい！」

「え、ちよつ、うわっ」

私は押し出したレーナさんを、覗き見る。

「はい！ レーナさん。あなたの特技はなんですか!？」

……………え？

ミスコンって、歩くだけじゃないの？ なんで特技なんて聞いているの？ そんなの考えてないんだけど？

「えつと……」

どうやらそれはレーナさんも同じようだった。よかった、同類が居た。

「んー？ 格好からして侍みたいだし、居合とかできたりするー？」

「あ、はい！ できますー！」

「ふっふっふー巻き藁カモンー！」

そんな掛け声と共に、巻き藁が現れた。が、その頃の私の頭の中はというと

（え、どうしようどうしよう？ 何にも考えてないよ！ 私にはそんなに武器の扱いも上手いわけじゃないし、鍛冶をするにしても時間が全然足りないし！ あわわわわわわわわわわ）

「えー、エントリーNo. 25番、最後の選手となった、冒険者のイオリさんですー！」

（あ、終わった）

頭の中がぐちゃぐちゃの状態で呼ばれ、終わったなど私は思うのだった。

第6話 ミスコンとロリコンとー2

あははは……どうも、イオリです。なぜか、ミスコンで自分の特技を披露しないとイケないんだって。はあ……

「えー、エントリーNo. 25番、最後の選手となった、冒険者のイオリさんでーす！」

(あ、終わった)

そんなことを思いながら、私は天幕へ踏み出した。光の奔流が私を包み、眩しさに目を細める。そして……

ワアアアアアア——ツ!!!

「ッ!?!」

人、人、見渡す限り人人。稀に獣人。

レーナさんの腰が引けてたのが納得の状況だった。あ、リユート発見。

しかし、一度は覚悟を決めたのだ、成せば何とかなるっ！ クラスの発表でもそうだった！

「はい！ それじゃあイオリさん！ あなたの特技はなんですか!？」

「えっと、私の特技は……」

どうしようと迷い、頭の中を過去の思い出が駆け巡る。これが走馬灯ってやつか。違うか。

確か向こうの学園祭でも女装してたっけ……その時歌った歌……確かエーデルワイズだったかな？ ……凄く好評だったよなあ……ん？ 歌？ そうだよ！ それ歌えばいいじゃん！ せっかく鎌がメイン武器なんだし、ギアは無いけど！

因みにここまで2秒、思考加速様々だな。

「特技と言っているのかは分からないんですけど、今回は私の故郷の歌を歌いたいと思いますー！」

「おおっと!?! 今大会で初めてのパターンができました！ 曲名を言うてからどうぞー！」

(ええいっ！ もうなるようになれだ!!)

若干顔を赤らめながら、私は言う。

「曲名は『手紙』です！ よろしくお願ひします！」

（旋風魔法《拡声》発動！）

私がそう念じると共に、口元に魔法陣が展開される。因みに、手紙は手紙でも、デースな方だ。日本語なので、こつちの人には分からない筈だ！ 分かってたら死ぬる。

◇

「はい、これで今大会の全メンバーが出揃いました！ 今年の一位は誰になるのか、ワクワクしますね!? 結果発表は、約一時間後です！

時計は広場にあるので、遅れないでくださいねー！」

そんな放送を、私は死んだような眼で聞く。そして、重い口を開いた。

「恥ずかしい……マジで恥ずかしい……。昔上手くいったからって今回もそういくとは限らないじゃん……」

「どつちかっていうと、皆聞き入ってたと思うけど……」

そ、それならいいんだけど……そんな会話をリユートさんとしていると、周りがだんだん取り囲まれてきている事に気付く。

さりげなく視線の先を見ると、それは私では無くリユートに向いていた。あ、そういう事か。

「ねえねえリユートさん、今は自分の身の安全を考えた方がいいと思うよっ……」

「へ？ なんで？」

「周り見てみ？」

そう言つて見渡した周囲には、眼に嫉妬を滾らせた男達がリユートを睨みつけている。

ろ、ロリコン怖いっす。

「私とレーナさんは、あそこのベンチでカキ氷でも食べて待つてるから頑張つてねー。行こっレーナさん」

「え、あ、うん」

そういつた私達が、リユートの側を離れていった瞬間、周りで今か今かと待機してた男達がリユートに……

第7話 ミスコンとロリコンと―3

あれから一時間、リユートと男達の鬼ごっこを見た後、私とレーナさんは広場に来ていた。

リユート？ そのベンチっぽい物で横になってるよ、ボロボロで。

「さ、レーナさん、結果発表見に行こ！ どっちか……ってというか、レーナさんが一位になってたりたりしないかな？」

「私が一位になってたりなんて多分ないよ。あつてもギリギリ三位とかじゃない？」

「結構自信あるんだね……」

そんなことを話していると、ボロボロになったリユートが、いつの間にか起き上がり話しかけてきた……

「い、イオリさん！ さっきはよくもy『さあさあ！ 集計が終わりました！ 今から、今大会の結果発表を始めたいと思いま〜す!!』……なんでこんなに遮られるのさ……」

が、放送に遮られまともに話すことはできなかつた。

「あっはっは、残念だったねリユートさん。さて、発表聞こうか」「ソウダネ」

『それでは、第3位から発表させていただきます！ 第3位、エントリーNo. 1番前回大会優勝者のアミカさんです！』

「わああああああ!!」

どこにいらなかつた、ハンカチ噛んでキーッてしてる。古風な。

「前回大会の優勝者が3位だつて。こりや私はランク外かな？」

「いやいや、案外2位とかだつたりするかもよ？」

「そうだったら嬉しいね〜」

『第2位になった者は……エントリーNo. 24番、冒険者のレーナさんですー!』

「うおおおおおおお?!」

まあ、レーナさんならありえるかな？

「おめでどうレーナさん！ 2位だつてさ！ つて事は、私はランク

外かあ……」

「もしかしたら1位って事もあるかもしれないじゃん！ 大丈夫だよ！」

「いや、それならそれで色々問題だけどね……」

『それでは、今回の大会の頂点に輝いた者を発表したいと思います！
今大会の第1位になった人物は………：エントリーN0. 25番
！ 同じく冒険者のイオリさんです!!』

………？

「え？」

「よかったねイオリちゃん！ 1位だって1位！ もしかしてが当たったね！」

「え、あ、うん。いえーい！」

え、1位？ まじで？ 私みたいなロリが？

『それでは、先程呼ばれた方々は舞台上上がってください！ 賞品の授与を行いたいと思います！』

その言葉に未だに驚きが収まらないものの、私も舞台上上がっていく。

「1位のイオリさんにはトロフィーをどうぞ！」

そう言つてトロフィーを渡される。

「あ、ありがとうございます」

そういつて頭を下げて周りを見てみると、何かを期待しているような目で見られている。

??? 「笑えば、良いと思うよ」

……謎電波も受信したことだし、とりあえずどこぞの巫女さんみたいに、にぱー☆としておこう。そんな風に思い、実行してみる。

『『ブファッ!!』』

観客席が真っ赤になってしまった。夜空に綺麗な赤い花が……そんなに幼女のにぱー☆は威力が高いのか!? それともここにいるのはロリコンだけなのか!?

「こ、今回の大会は、これで終了になります！」

鼻血を流しながら司会者の人が言う。うん、こういう場合はとりあ

えず

「逃げますか」

◇

ミスコンの後、鼻血がやばいことになっていた軍勢から逃げ、私達は予約していた宿の部屋に居た。

お金の節約のために三人部屋だ。

「ところで、これからどうするの?」

リユートがそう聞くと、イオリは受け取った賞品を弄りながら言う。

「すぐにでもここを出発して、獣人界に渡りたいかなあ。あのミスコンで優勝なんてした所為で私の居場所バレちゃっただろうし」

「たしかにそうだろうね。でもイオリさん、関所を通るには《割り符》が必要だけど持つてる?」

「え? なにそれ?」

気まずい沈黙が降りる。

「え、まさかそんなことも知らないのに大陸を渡ろうとしてたの?」

「そりゃあ勿論。泣き落としでもすれば入れるかなあ。って。ほら、こんな感じのボロボロな服もあるし」

そう言つて、オークエンペラーと戦った時の服を取り出して見せる。

「そんな甘い考えで入ろうとしてたのかよ……」

リユートの頭の中に上目遣いで涙目なボロボロのイオリが思い浮かぶ。自分だったら通してしまいそうだと考えてしまいそうだと、と思ったがそれを振り払い現実へと戻ってくる。

「いい? イオリさん。《割り符》はギルドで申請して発行してもらおうんだよ。ほら」

そういうやつて見せてもらったのは、一枚の小さな紙だった。そこには発行日や有効期限日が書かれており、800という文字が。電車の切符か!?

「ならここでやれば……」

「いや、このギルドだと申請してから貰えるまでかなり時間がかか

るよっ。」

「……マジで？」

「マジだよ。本来なら王都のギルドで発行してもらうんだ。まあ、それでも一週間くらいかかるんだけどね。ここからだ、王都のギルドへ確認を取り、許可を貰って初めて《割り符》が手に入る」

もちろん犯罪歴などがあれば許可は下りない。人物に問題無く、関所を通る十分な理由があると判断されれば、発行される。それが《割り符》である。切符と違って実に面倒である。

「ふーん、ていうことはこのままだと私は関所は通れないってこと？」
「うん、通るにはかなりの時間がかかるね。もしくはSランクまでランクを上げれば、理由があれば通れるけど……」

私は目を閉じ、これからどうしようか考察する。1週間もここに居たら確実に勇者に見つかってしまうので、それは避けたい。

「あ」

「ん？」

「いや、関所って確か大きな橋の上にあるんだよね？」

「そうだね。その橋が人間の大陸と、獣人の大陸を繋ぐ唯一の道だしね。まあ、海を強引に渡るって手も無くは無いけど、オススメはしないかな」

大陸間の海は、海龍などのヤバイ魔物の巣窟になっているらしい。

「まあ、こんな体じゃ碌に泳げはしないだろうからそれは無いけど……上空には警備はないよね？」

イオリの黒い笑みを見て、二人はなんとなく嫌な予感がするのであった。

どこの小説の文字使いさんがやってた事、私もやってやろうじゃないか。

第8話 関所の通過

「ないけど……それがどうしたの？」

「だったらさ、リユートさんが私を投げ飛ばして私がそこからバードフォームな感じで魔法を使つて飛んでいけばいいじゃん！ 金色なあの人な感じで」

「却下」

「ダメです」

私がかさも名案といったように言った瞬間、二人から否定が入った。

「というか、ヒイロが二人混ざってるよイオリさん……」

「いいじゃん、ノリで言ったんだし。というかなんでダメなのさー、二人は《割り符》を持つてて私は持つてないんだよ？ 私の魔法でも滑空くらいは出来るのにさー、ぶーぶー」

「だって、イオリちゃんがそんな事するのは危ないじゃないですか！」

私がお口を尖らせて言うと、レーナさんが怒つて言ってくる。だったら他にどんな方法があるつて言うのさ。いや、流石に竜とかが来たらヤバイけどさ。なんて事を思っていると、リユートさんが口を開いた。

「イオリさんがちゃんと戦えるつて事も、似たような状況だから同じ手段でなら越えられるだろうつてのも分かるよ。だけどねイオリさん、一つ忘れてる事があるのに気付かない？」

「忘れてる……こと？」

「僕にはね、いくら幼女つていっても一人一人を高く投げとばすパワーなんてないんだよー！」

「な、ナンダッテー」

バーンという文字が見えてきそうだな。そんなリユートの言葉を聞いて、リユートのステータスを思い出す。えーと《身体能力超化》でどれくらい上がるのかは分からないけど……うん、パワーはないね。

「転生の時の女神に、バビロン使いたいならそれくらい許容しろつて言われてね……パワーは人並みしかないよ。あ、人つて人族の方だけか

らね」

「あーうん、ドンマイー！」

笑顔でリユートにサムズアップをしておく。でもそうしたら、私はどうやって国境越えればいいんだ？

「まあ、もう慣れたからいいんだけどさ……。まあ、このままじやイオリさんが国境を越えられないから、仕方ないから僕がヴィマーナを出すよ。迷彩はお願いね？」

「もちろんだよ！ リユートさんありがとう!! あいsツ!？」

隣から、オークエンペラーを軽く凌駕する殺気を感じ、私は言葉に詰まってしまった。危ない危ない。

「それじゃあ、今日はもう寝てもいい？ もう結構眠いや……。ハッスルしても気にしないから……」

そんな事を言いながら、私はフラフラと二つあるベッドの片方に向かって歩いていき、ボスンと倒れた。そしてすぐにスヤスヤと寝息を立て始める。くう……

以上回想

っていう訳で、絶賛風王結界インビシブルエアのイメージで魔法を使っているイオリです。あ、二人は私に気を使ったのか知らないけど、ハッスルしてなかったみたいです。

「リユートさーん、なんかワイバーンっぽいのが来てるんだけど……。どうする?」

「はあ!? なんでこんな時に!？」

そんな事を思い出していたせいか、フラグを回収してしまったようだ。

橋を渡って少しの場所にある森、その上空で目の前から迫るワイバーン、私は魔法で手一杯、レーナさんは酔ってダウンしているの、必然的にリユートが迎撃しなくてはいけないのだが、先程から射出されているリユートの武器群はヒラヒラと躲され当たる様子がない。

「ちよっ、リユートさん、ちゃんと狙ってよー！」

「ああもうー！」

リユートがそう必死な顔で叫び、バビロンから覗く武器が増えた。

そして、その中の武器の一つがワイバーンの飛膜に命中する！

「グギャアアアッ！」

「どうだ！ 私の武器の味は！」

「イオリさん！ そんな挑発するような事を言ったら！」

「ギユワアアアアッ!!」

そんなリユートさんの忠告が届くのと同時に、私に向かって突風が吹き付ける。十中八九ワイバーンの魔法であろうそれで、立ち上がっていた私はヴィマーナから足を踏み外してしまった。

「あ」

「イオリさん！ 後ろ後ろ！」

そんな風にリユートさんが言ってくるので体を捻ると、ワイバーンが大口を開けていた。

「どっせええい！」

食べられたくないのも、大鎌を取り出しワイバーンに一閃する。そしてそれは見事にワイバーンに直撃し仕留めたのだが、いつも通りに魔法を使ってしまったので落下速度がアホらしい程に加速する。

「あーリユートさん！ 後で探しに来て！」

魔法で声を拡大させ、私が離れたことで姿が見えつつあるヴィマーナに向かって叫ぶ。今はレーナさんが寝てるから、激しい動きはできないだろうしね。それが聞こえたのか、ヴィマーナが高速で移動していく。

「よし、逆 噴 射 ー!!」

ヴィマーナの隠蔽に使っていたMPの分も合わせて、風と爆発で可能な限りの減速を試みる。短パンが見えてる？ そんなのしるか！

こっちは生きるか死ぬかの瀬戸際なんだよ!!

上空からの落下を、普通に耐えていたうえにちゃんと着陸していたユニークチートさんは、本当に凄いなと思うよ。主人公は違うって事か！

第9話 黒い悪魔

視界に入るのは黒、黒、黒、黒。そんな状況で私は大鎌を振り回していた。

「うわああああああ、くるなくなるなくなるなあああ!!」

簡単に言うと、絶賛G（の魔物）にたかられ、戦闘（錯乱）中だった。なぜこんなことになったのかは、少し前に遡る。

◇

「うおおお！ 最大噴射ああああ！」

私はそう叫びながら、必死に魔法を行使する。しかし無情にも森はぐんぐんと迫っていき……

「この速度じゃ、やっぱり減速が間に合わなんばっ!!」

結局、バキバキと木をへし折り地面にズドンッ！ と私は着陸（着弾）する事となった。

「イタタ……《ヒール》《クリーン》。あ、魔法は使うとバレルからダメなんだったっけ」

『獣人で魔法を使えるのは、特定の種族だけなんだよ。いくら銀狼族が魔法を使えるって言っても、属性が違うから調べられやすくはなれちゃうから、少なくとも王国に着くまで目立つように使っちゃダメだからね!』

そんなリユート達からの忠告を思い出しながら、今回だけとは思いつい魔法を使いそそくさとその場から移動を始めようとする。と、その時一匹の蝶が目映った。それは不自然に目に止まり、私はフラフラとその蝶を追いかけ、森の奥に迷い込んで行ってしまった。

………

「私は一体何をつ?!」

気がつく、森の中……しかも結構深い所にいた。そして目の前にはヒラヒラと漂う、変な色をした15cm程の蝶が一匹。こいつが原因か!?

「うおりやつ!! って うわっ!」

腰に差しておいたハンマーを抜き叩き潰すと、蝶の体液のようなも

——スキル 混乱耐性 L V 1を入手しました——
——スキル 恐怖耐性 L V 1を入手しました——

「ひやあああああああ?!?!」

見える範囲の中をカサカサカサカサカサカサカサと動き回り、時にはあの短い距離しか飛ばないジャンプをする、私とほぼ同じ大きさの台所の黒い悪魔に、私は無茶苦茶に大鎌を振り回す。

——スキル 混乱耐性 のレベルが2に上昇しました——

——スキル 恐怖耐性 のレベルが2に上昇しました——

——スキル 混乱耐性 のレベルが3に上昇しました——

——スキル 恐怖耐性 のレベルが3に上昇しました——

——スキル 恐怖耐性 のレベルが4に上昇しました——

「よし、あんなのはただの虫、虫つたら虫!」

スキルをゲットしたお陰か、普段よりも圧倒的に早く冷静になれた。

大鎌を振り回して、向かってくる魔物を斬り続ける。イオリの全身は、切り捨てた魔物で汚れて色々と大変な事になっていた。《クリーン》ではそういう汚れは落ちづらいので、放置することになってしまっている。

「燃え移っちゃうから、爆炎魔法は使えないしっ! こんなのもう嫌だああああ!!」

若干魔物の勢いが衰えた時、それに気付いた。先程から振り回している大鎌の刀身の部分が、本当に少しだけMPが抜けている感と共に、三振りに分裂しているのだ。ノイズが走るようにブレブレで、きちんとした形に定まって無かったりするものの、謎の銀色のオーラで三振りに分裂していた。

「何このオーラ!? 斬れてるからいいけどさ! いいけどさ!! あ、大事なことなので二回言いました」

当然のことながら周りには虫しかいないので、ギチギチという音以外なにも返ってはこない。

「ちぎしよー!!」

まだまだ気が抜けるような状況ではないので、気を取り直して戦闘

を再開する。

◇

戦闘はさらに30分は続いた。MPもMPの回復薬も尽き、大鎌を持つ手がプルプル震えてきた頃、ようやく目の前から魔物が消え去り終了した。

「終わったあああああ!!!」

私はそう叫んでドデンと大の字に転がる。うええ、なんか色々潰れた感触がした。

大鎌の刃は欠け、根元がグラついている。また整備をしないとイケないのはやむを得まい。因みに、イオリのレベルとスキルのレベルも全体的に2つ程度上がった。

「それにしてもひどいなーこれ。オークの時よりも死ぬかと思ったよ」

周りには2つに分かれたGの死骸が大量に転がっている。本当にバラバラなので、素材にはできなさそうだ。いや、残っててもしたくないが。

「よいしょつと。うわあ……これはしばらく着たくはないなあ……」

そう言つて、色々なもので酷く汚れたワンピースを脱ぎ捨てた時、背後の茂みがガサガサと揺れた。

魔物の生き残りかと思ひ大鎌を持ち振り返ると、そこに居たのは

……

「……………（・□・）」

ポカンとしているリユートだった。その視線の先にはもちろん下着（下のみ）しか身につけてない私がいる訳で……

「……………いつから見てた？」

「お、終わったあああ!! 辺りから」

「……………」

その言葉を聞いて、私の中の何かがプツンと音を立てて切れた。

「ま、待って、話せば分かるっ!」

「記憶を無くせええええええええっ!!」

最後にリユートの視界に入った物は、飛んできたイオリの足の裏

だ
っ
た。
。

第10話 目的地

「う、ううん」

「あ、やっと起きた」

「もう、心配したんですよ?」

私の飛び蹴りを受けて気絶していたリユートが目を覚ました。あ、違う服に着直してるよ?」

「リユートさん、どこら辺から記憶がある?」

「え?」

私は大鎌を突きつけ、殺気を出しながら聞く。

「えっと、なんでいきなり殺気を出してるの? イオリさん」

「いいから早く言つてよ?」

私はニコニコ笑顔でリユートさんに言う。もし覚えてなんていたりしたら、もう一回やるしかないからね。

「う、うん。確かヴィマーナから降りて、イオリさんが落ちた場所に着いてもイオリさんがいなかったけど、森の奥の方から戦闘音が聞こえて……」

「それで?」

「レーナより先行して戦闘音のする場所に向かつて、それから……それから……あれ? 何があったんだっけ?」

よし、記憶は無くなってるみたいだ。その事が確認できた私は、大鎌を仕舞い何事も無かったようにリユートさんに話しかける。

「うん、それならいいんだ♪ それじゃ、旅の続きをしようよ!」

「もう、イオリさんがリユート君を引きずってきたときは心配したんですよ!」

「え、あ、うん。ごめん」

多少の違和感はあるだろうが、そんなものは勢いのままにどうにかしてしまえるだろう。リユートを引きずっていった時に、この事に関してはレーナさんと口裏を合わせるように話してある。無論、協力してくれた。

「ところで、これからどこに行く予定だったの?」

「いきなりだねっ?! まあ、いつものことだけども……」

私が尋ねると、リユートは呆れたようなため息を吐きながら指を指す。勢いのままどうにかしてしまおう作戦は、どうやら成功したようだ。

「ここから真つ直ぐ東に行つたところに『ヴォダン』っていう名前の村があつてね、そこだよ。まあ、ヴィマーナはもう出せないけど、近めだから今日中には着くかな?」

「なんか発音しにくい名前の村だね……どんなところなの?」

『『狼人』の一族が住む村だね』

(『狼人』? 調べた通りだったら私の種族だど……)

変装道具を買った時に、一応自分の変装する種族のことに關しては、ギルドなどを使って調べてある。それによると、銀狼族とは敵対しているとのことだった。

「私、この通り銀狼族に変装してるんだけど……殺されたりしない?」
「そのことなら大丈夫だよ。まあ、イオリさんが男だったら十中八九そうだっただろうけど、あそこ、子供と女性には人が変わったみたい
に優しくなるから」

そんなことがあつたのかと驚く。『百聞は一見に如かず』って、本当
だったなあ……と思つてみると、リユートがまた口を開く。

「僕とレーナだけなら、僕が獣化してレーナを乗せていけばいいんだ
けど……幾らイオリさんが幼女とは言え、さすがに2人分を乗せてい
くのはキツイし、ヴィマーナもそんなに出せる訳じゃないから、乗り
物を借りに行こうと思つてね?」

「なんでヴィマーナはそんなに出せないの? 出すのにインターバル
があつたり?」

リユートさんのヴィマーナで旅をすればいいという、私のチートを
存分に利用してやろうという考えはどうやら出来ないようなので、そ
の理由をリユートさんに聞いてみる。

「それもそうだけど、ヴィマーナも他の宝具も出してるだけでMPを
バカみたいに消費するんだよ……見てたでしょ? ヴィマーナに
乗ってる時、僕がしょっちゅうMPポーションを飲んだの」

「そうなの？ レーナさん」

私は魔法にかかりきりだったので、リユートさんの近くで乗り物酔いで倒れていたレーナさんに聞いてみる。

「飲んでましたよ、イオリちゃん」

「そうなのかい。それじゃあ仕方ないか……」

レーナさんの証言もあり、本当にMPをバカ食いする事が分かってしまったのでヴィマーナで空の旅の案は無くなってしまった。

「諦めてくれた？」

「うん。チツ、私がMPポーションを作れたら……」

DEXも、アイテムを作る技術も高い私だが、実はMPポーションは作れなかったりする。魔薬草とかいう草と水が原料なのだが、水はそんなに多く使う事はできないし、魔薬草はそもそも持っていない。唯のポーションに比べて高いから多くは持てないので、ヴィマーナは結構高コストなんだろう。そこら辺に、魔薬草生えてないかな？

「僕が水っ腹になっちゃうから、それは止めて欲しいなあ……」

「緊急時以外はね。という事は、ここから徒歩で移動？」

「うん。しかも、結構な間、森の中を歩いていくことになるね」

「え」

先程までの、Gばかりの森の中という最悪の光景を思い出し、私は身震いした。

そういえば、ゴキブリって燃やしたらフェロモンうんぬんが関係してとんでもない数の同族を呼び寄せるっていう話をどこかで聞いたような気がするんだよね……今思うと、あの時燃やしたりしなくて良かったな……

第11話 ヴオダン到着!

森の中では、イオリが危惧していたゴキブリの大襲来という事はなく、ただキングマンティスという大きなカマキリが襲ってきたのみであまり戦闘は無かった。

しかしそれとは別に、先導しているリユートを困らせている大きな問題が一つあった。

「ねえねえリユートさん、あの毒々しいキノコ何？ 食べられる？ 食べていいよね？ 《ファイヤ》いただきます!!」

「いや、それ【ネムリ茸】!! 食っちゃダメつつつ! 遅かったか」

「ふわあ……まじだあ………【フレッシュ】! よし目が覚めた! ついでに耐性GET!」

先程から、こんな感じでイオリが目につくキノコを片っ端からこんがり焼いて食べているのだ。上手に焼けました〜! という感じの焼け具合なのだが、ここに生えているキノコは大半が毒キノコだ。

なので、今の見た目より幼い行動をしているイオリには食べる度に状態異常が発生し、今のような事態が多発していた。例えば

「なにこの黄色いキノコ? とりあえず食べよう《ファイヤ》!」

「ん? なんかいよいよ匂いが……つてそれ【麻痺茸】だつて! なに食べようとして……ああ」

「なんか言っとな、なんか痺れてきだ……【キュア】! あ、なんか耐性GET」

などとなったり、他にも猛毒のキノコを食べて顔を真っ青にしていたり、いきなりお腹を鳴らして倒れていたたり、急に笑い出したりしていた。

そんな事に頭を悩ませるリユートを全く気にせず、耐性スキルを取るのに夢中になっているイオリは、そんなことをリユートが考えている間にも……

「お、おお!? なんか全ての動きが遅く見える。まさかこれが、フィジカルフルバースト!? まあいいや、【キュア】!」

「あーもう、今度は【加速茸】なんて食べて! 何がしたいのさ!」

「いや、耐性スキル集め？ あ、耐性系が集まって《状態異常耐性 L V 2》になった。おお、しかもついでに《魔法耐性 L V 1》も！ イエイ」

「ああよかったね!!」

もう付き合つてられんとばかりにぶつきらぼうに言つて、リユートはズカズカと森の中を進んでいく。

「あー、待ってよー」

そんなことを言いながらトテトテとイオリはリユートを追つていく。そんな二人をレーナは呆れたように見ていた。

◇

そんな騒ぎが一段落し、しばらく歩いているとようやく森の出口が見えてきた。

「はあああ……やつとか……」

リユートさんは重い溜め息を吐きながらも、つい早足になってしまっている。

森を抜けるとそこには青々とした草原が広がっており、奥には山頂の雪の白が眩しい、裾の広い青い山がドンと構えていた。

「ほへー……」

「うわゝ」

レーナさんは言葉を失ったかのように見惚れている。その雄大な眺めに圧倒されているような感じだ。かく言う私もそうになっている。

「……」が【エドの草原】だ!!」

そう胸を張つてリユートが紹介をしているが、私は目の前の山に何かデジャブのようなものを感じて考え込んでいた。

(んく……なんだろう？ この既視感。どこかで見たことあるような気もするんだけど……)

とりあえずそれが一番早いと思い、今も紹介しているリユートさんに聞いてみる。

「ねえ、リユートさん。あの山の名前は？ なんか凄い既視感を覚えるんだけど」

「日本人ならやっぱりそうだよね!? あの山は、【フジ・ヤマ】って

名前なんだよ!!」

そう興奮した様子のリユートが私をガクガク揺すってくる。色々納得はできたがやめて欲しい、まだ食べまくったキノコ類を消化できてないんだから!

「ちよつつつ、やめつつつ、マジ吐くつ、吐いちやうからつ!!」

「ああ、ごめん。つつい興奮しちやって……この先がいよいよ『狼人』達の村、『ヴォダン』だよ……」

少し落ち込んでいるようなリユートに付いていくと、段々と道が舗装されていった。

「ヴォダン、うおだん……あー……うーん、昔どこかで聞いたことがあるような……つつて、あ」

「どうかしたの? イオリちゃん」

「いや、ヴォダンって名前をどこかで聞いたことがあるなあ……つつて思ってたんだけど、今やっと思いついてね」

不思議そうに首を傾げていたレーナさんに、理由を説明する。

「ジエヴォーダンの獣って、確か狼に關係してたはずだし……リユートさんはどう思う?」

因みにジエヴォーダンの獣うんぬんは、緋アリのリサがそんな感じだった記憶がある。

「どうって言われてもね……村の名前の理由は聞いたことあるし……」

「え!? 教えて教えて!」

……自分でも、子供っぽくなってきた自覚はあるよ。だから、あんまり気にしないで欲しいな。

「はいはい。この世界にも、大昔にジエヴォーダンって魔物がいたらしくって、それにあやかって付けたって聞いたよ。あ、魔物じゃなくて神獣だったかな?」

「マジか……ジエヴォーダン、神獣って言うからには美味し……じゃなくて強そうだな……」

「今美味しそうって言いかけたよね!」

「気にしない気にしないー♪」

そんな問答をしていると、飼育されていると思しき牛っぽい何かや水田が見えてきた。そして眼を凝らすと、山の麓にどことなく日本の匂いの漂う小さな村が確かにあった。

醤油とかあるかな？

第12話 事件です！

村の中に入ると、何やら広場のような場所で私の色違いのような耳や尻尾を生やした女性と、狼がそのまま二足歩行しているような人？達が集まっていた。獣度100%だ。

何をしているのかと思ひ、私達も行ってみることにする。

「どうしたんですか？」

「え？ お、おお!! リュートじゃねえか！ ずいぶん久しぶりだな！」

「はい！ お久しぶりです、バイトさん！」

二足歩行の狼と、日本人風の青年が握手をしている。どこことなくシユールな光景だ。

そんな光景を見ていると、バイトと呼ばれた狼人がひどく真面目な顔をしてリュートに問いかけた。

「おいリュート、お前……その耳」

「え？ あ、はい。ちよつと人間界で……」

「クソツ、人間どもめっ！」

リュートはバツの悪そうな顔をしているが、バイトからはヤバイ感じの殺気が漂ってきた。

「ひっ！」

最近、若干の幼児退行を起こしている私は、反射的にレーナさんの後ろに隠れる。なんだろう、オークエンペラーと向き合うのとは別種の怖さというかなんというか……

「ああ、すまん。怖がらせちゃまったみたいだな。俺は狼人のバイト。昔、リュートに体術を教えていたもんだ。お二人さんは？」

殺気は消え、ニコリと笑って話しかけてくる。顔が狼じゃなかったら良かったのだろうが逆効果だ。端的に言って物凄く怖い。

「え、えっと、私はレーナ・アークライトって言います。よ、よろしく願います！」

若干脅えたような感じでレーナが自己紹介をする。この頃になつて、他の狼人の人達も集まってきた。

「わ、わわ、私はい、イオリ・キリノって言います。ぎ、銀狼族です。た、食べても美味しくないですよ?」

色々なものが合わさってとても残念な感じの自己紹介となってしまう。しかも若干涙目になってしまった。ぐすん。

そんなわたしを見て、他の者は微笑ましそうに微笑みを作っている。そして所々から、

「あーあーあんなに怯えちゃって」「あんたが怖がらすからだよバイト」「あんなに小ちゃい子を……」「バイト……」「子供泣かすなんて……」

などという声が聞こえてくる。子供に優しいっていう話は本当だったようだ。

「ぐ、ごめん。泣き止んでくれよな?」食べやしないし、ほら、お菓子あげるから」

そう言って、服のポケットから謎の袋を取り出してくる。《超解析》によると、中身はかりんとうのようだ。そんなので私を懐柔できるとでも思ってた……

「ぐすつ、美味しい」

あっさり懐柔されました。くつ、仕方ないじゃん、甘くて美味しいんだから。

「そうか! よかったよかった。なんか調子が狂っちゃったが、二人ともよろしくな」

(あ、これ食べてるとMP回復するんだ。後で買い占めよう……)

そんなことを考えて、かりんとうをサクサク食べている私を脇に、リュートさんがここで集まっている理由を聞いた。

すると、バイトは難しい顔をして言う。

「トウキビを取りに行く道と、ライドファンングを飼っている場所に行く道が同じなのは知ってるな? そこから少しそれた場所で、最近妙に上質な鉱石が採れるようになったんだ」

何? 上質な鉱石だと? と私は目の前のかりんとうから、そっちの話に意識を傾ける。

「それがどうしたんですか?」

「最初はそれは大助かりだったんだが……それを狙ってユニークモンスターが現れてな。このままじゃどうしようもないから男衆で突撃でもしようかって話になってたんだ……」

「ユニークモンスター……」

何やらリユートの様子がおかしくなっている。ユニークモンスターって、よくあるRPGだと……

「ねえリユート君、ユニークモンスターって何？」

「ああ、レーナは知らないのか。ユニークモンスターっていうのは、化け物みたいに強くて、攻撃的な魔物の事だよ。ついでに凄く珍しい。正面から戦ったら、少なくとも僕一人じゃ絶対に勝てないね」

認識は間違ってたなかったみたいだ。でもそういう奴って、大概いいもの落とすんだよなあ……

「ち、因みにどんな魔物だったんですか？」

私はおずおずと尋ねる。勿論勝てそうだったら挑むつもりだ。ユニーク武器的の素材的なのを落とすかもしれないしね！

「全身が金色のトカゲみたいな奴だったからな……恐らくは《オリハルコンテイラノ》だろうな」

「えっと、今オリハルコンって言いました？」

「おう、言ったぞ。Sランクの魔物って言っても比較的弱い方の魔物だからな。「プロデュ、間違えた。リユートさん!! やりましょうよ!! オリハルコンですよオリハルコン!! 狩る以外ないでしょ!!」えらいテンションだな、嬢ちゃん」

バイトに若干引かれてしまったようだ。解せぬ。だってオリハルコンだよオリハルコン！

「まあ、僕もAランクだし、イオリさんは今はCランクだっけ？ チートを含めば、戦闘力だけで言えばできないこともないけど……イオリさん、武器壊れてなかったっけ？」

「あっ」

私は、完全にその事を忘れていた。くっ、

第13話 武技と精霊術

「えっと、嬢ちゃんも戦うのか?」

バイトさんが驚きを隠さない表情で私に聞いてくる。若干不思議に思ったけど、私ってまだ肉体的には7歳だったよ……そりゃあこんな年端もいかない子供が戦うって言ったら驚くか。

「あつ、はい。これでもランクCですから。今すぐにも行きたかつたんですけど……明日は武器の補修にかかりつきりになっちゃおうし……」

実質明後日になってしまいうだろう。結構深刻そうな問題に見えるから、今すぐにも行きたいけど多分それじゃあ勝てないし……

「勝てる確証はあるのか?」

「えっと、私とリユートさんが全力を出せば……多分、問題ないはずですよ」

最悪、リユートさんが使えるって言ってた天の鎖で拘束して逃げれば態勢は立て直せるだろう。

「ふむ……それなら、1日くらいは我慢するでしょう。よろしく頼むぞ?」

「はい! 勿論です!」

◇
「いきなりなに言っちゃってんのさ!」

宿の中、私はリユートに絶賛怒られてる最中だった。レーナは疲れからか眠ってしまったている。

「うう……だってオリハルコンだよオリハルコン。夢のファンタジー金属だよ!」

「それでもだよ! 僕の王の財宝の中って、ほとんど宝具なんて入ってないんだよ? それに補修って言ったって、ここ鍛冶ができる場所なんてないし!」

「それは作れるからいいんだよ。じゃあ私一人で戦ってもいいからさ!」

涙目+上目遣いでリユートを見つめる。ロリコンなら……殺せる

はずだっつ！

「うっ。はあ……一人で行って振り返りに遭いましたじゃ、寝覚めが悪いからね……仕方ないなあ」

内心してやったりと思いつながら、色々あったせいで聞けなかったが、疑問に思っていたことをリユートに質問する。

「そういえば今日、ここに来るまでにでつかいカマキリみたいな魔物でたじゃん?」

「ああ、キングマンティスね。それがどうかした?」

「あの時リユートさんが、『光の太刀』って言って剣を振ったら腕が落ちてたけど、あれって何なの?」

「え?」

「え?」

2人に沈黙が降りる。え? 私なんかおかしな事言った?

「ああそつか。イオリさんって獣人じゃないんだった」

「ちよっ、いきなりなに言ってるの!? 《遮音》誰にも聞かれてないよね?」

リユートさんが納得したように言ったが、最後の方の言葉は問題しかなかった。私が人族なんてバレたら食われるって言ってなかったっけ!? 咄嗟に魔法を使って音を漏らさないようにしたから今は安心だけど……

「あ、ごめんごめん。説明に戻るけど、昼間使ってたのは《精霊術》だよ」

「《精霊術》? エルフが使いそうだけど?」

「うーん、なんて言えば良いのかな? まああれだよ、精霊と契約して使う力だね。精霊使いなブレイドダンスのやつに近いかな? 因みにこの世界にエルフは居ない」

分かりやすさと残念さが一挙に押し寄せてきた。リアルエルフ耳……いや、まだ知られてないだけで希望はある筈だ……

「獣人だと、契約する精霊が自分の内に存在する事、この腕輪みたいなアイテムがないと発動と契約ができないこと。レーナの場合は小太刀だね。簡単には精霊を顕現はさせられない事くらいが違いだね」

「へえ、それって人族には使えるの？」

使えるのなら、練習してみるのもいいかもしれないと思い聞いてみる。契約するなら、エ〇トよりはスカー〇ツトの方がいいかな？ やっぱり。

「ん〜……過去には使えた人も居たみたいだけど、限りなく無理に近いんじゃないのかなあ？」

「残念。使えれば今回のにも使えそうだったのに……」

「その代わりに、人族が使う技の《武技》っていうのがあるらしいよ。」

もしかしたら、Gを相手にしてた時のあれかな？アレか……試してみても安定しないんだよなあ……。いまじねーしょん？ が足りないとかそういう事なのだろうか？

「そつちの事も教えて。ほんの少しだけだけど心当たりがある」

「えっ？」

「まだ確信してるわけじゃないけどね」

「えっと、教えてくれた人が感覚でやってから詳しいことは分からないけど、HPを消費して何かを起こすらしいよ。あの人は雷を纏ってたかな？」

多分、アレを突き詰めればそうなるのかな？ 使いこなせば魔法のあまり使えないここでは役に立つぞ！ と考えていると、不意に急激な眠気が襲ってきた。むう、もう時間か……

「ふああう、駄目だ、眠い。これ以上は明日だね……いや、もう欲しい情報はかなり集まったけど……」

「よくもまあ8歳児の身体でここまで起きてられたよね」

因みに今の時間は、地球で言うなら……うーん、夜10時ちよつとかな？ この身体だと、もうおねむな時間なのですよ……

「うん……おやすみ……」

私はそのままフラフラと備え付けのベッドによつていき、どうにかよじ登ったところから記憶がない。

あー……オリハルコンよりはアダマントイトの方が硬いらしいけど、ハンマーじやリーチが足りないし……うーん、残りのアダマントイトの量的には……

第14話 武器の改造タイム!

翌日、私は空が白み始める頃に目が覚めた。あんまり寝てない？
気にしないでくれ。

「さて、今日で準備は終わらせるぞく!!」

そう静かに叫び、私は準備を始めた。さて、武器の修繕は全部終わらせないとねっ!

◇

カーン、カーン、カーン

そんな小気味良いリズムの音で、リユートは目が覚めた。

「ん、んう? 朝っぱらから何の音だ?」

そう思い窓から外を見ると、裏庭に炉のような物の中で赤々と燃える炎と、その前で真剣な顔をして金槌を振るうイオリさんの姿があった。

「へえ……鍛冶師っていうの、嘘じゃなかったんだ……」

そうこう言っている間にも、どんどん作っている物の形が出来ていく。完成したのは、どこか全体的に虫っぽい雰囲気醸し出す、黒緑色の大鎌だった。

その鎌はかなりの完成度を誇っていると、そういう事にあまり詳しくない僕でも分かるもので、つい拍手をしてしまっていた。その音に気づき、イオリさんがこちらを向く。そして、

「あ、リユートさん、おはようございます」

という言葉が耳元で聞こえた。何かかと思いい近くをしてみるが、イオリさんは一歩も移動していなかった。

「ちよつとした魔法ですよ。話があるんですが、私はまだやる事が山積みなんで、下に降りてきてくれると話しやすいです」

そう聞こえた後、イオリさんは先程座っていた場所に座り直し、砥石のような物をどこかから取り出し、鎌を研ぎ始めた。

まあ、行きますか。

◇

「よし、後はここをこうして、ミスリルの形を変えて……」
大鎌に魔法陣を刻んでいく。ミスリルは魔力をよく通すので、魔法陣を付けるにはもってこいの素材だ。

蟲斬りの大鎌 + 12

STR + 287

AGL + 134

MIND + 101

属性 旋風・闇

重さ 4.5kg

斬れ味 とても鋭い

刃渡り 片刃 100cm

耐久 丈夫

《スキル》

斬れ味強化 LV 3

スイング速度強化 LV

3

軽量化 LV 3

重斬 LV

3

風纏 LV 2

インセク

トキラー LV |

《備考》

破損したシックルスパイダーの大鎌をイオリが作り直した物。Gを斬りまくった事と素材によって強化されたことで、虫系の魔物に対して威力が上昇する。

惜しげもなくアダマタイトが使われており、かなりの強度を誇るが、その分重量が増加した。

完成した大鎌を振って感覚を確かめっていると、リユートが裏庭に降りてきた。

「おーやっとな降りてきたー」

「おはようイオリさん。聞きたい事があるって言ってたけど何？」

「聞きたい……事？ 私、そんなこと言った？」

「言ったよ!! いきなり耳元で声が聞こえてびっくりしたんだからね!？」

えくと、リユートと話したのは確か……そうそう、大鎌を作り終わった頃で……おお！ 確かに言ってたな。

「思い出したっ!! ユニークモンスターの名前がわかってるんだからさ、最低レベルとかって分かったりしない？」

「ああ、成る程ね。ん……オリハルコンティラノは確か、80代前半の報告が多かったはずだよ。1番レベルが高い報告だと101だったはずだよ」

駄目元で聞いてみたが、分かっているとは……結構高めのレベルだけど、80代前半か……確かあの時の。

「あ……またオークエンペラークラスの敵か……生き残れるかな？」

そんな私の呟きに、リユートが驚いたような顔をする。

「えっ!? イオリさん、オークエンペラーと戦ったことあるの!？」

「ああ……そういえば言っていなかったか。私が勇者から逃げる原因になった事なんだけど……」

私はあの時の出来事を一部を除きリユートに説明した。いや、全部話すとTSの事までバレちゃうしそれは嫌だし。

「まあ、同じレベルみたいだから行けそうだと思うんだけど……リユートさんのレベルって70代後半だよな？ あの時の私よりましだと思っただけど？」

「大概のユニークモンスターには特殊能力があつてね。イオリさんの戦ったオークエンペラーも、いきなり姿を現したんでしょ？ 多分透明化みたいな能力でもあつたんだと思うんだけど、

オリハルコンティラノはそれが厄介この上ないんだよ……」

「厄介？」

「そう、厄介なんだよ。身に纏ってるオリハルコンのせいで魔法ダメージは8割がカット、物理ダメージも5割はカットされるんだよ……」

うわあ……何その能力。と思い顔をしかめていると、だけどとリュートが付け足した。

「武技と精霊術は殆ど減衰されずに通るんだよ。後は僕の王の財宝の中の宝具も普通に通るかな？ 威力はお察しだけど」

「へえ。色々直し終わったら武技の練習かなあ……期待はしないで欲しいけど」

そう言っつてシミターの方の修復に取り掛かろうとした時、不意にリュートが声をかけてきた。

「あ、ついでに俺の剣と盾も強化しといてくれない？ 時間があればでいいんだけど」

「ん、了解。鍛冶師冥利に尽きるってもんだよ♪」

気を取り直して再開しますか。えっと、確か魔剣やらなんやらがあつた筈だし……

◇

私が装備の強化を終えたのは、太陽が沈み始めた頃だった。そして今は宿の中に戻っている。

「はい、借りてた剣と盾。剣は多少威力を上げるくらいしかできなかったや」

「それでもありがたいよ。つて、ん？ 『剣は』？」

「ふっふっふ、予想通り盾の方は大いに魔改造させて貰ったよ」

元々持っていた魔盾・ミラーと私のチート職業が合わさって、唯の小盾だった物ほとんどもない物に進化していた。それがこれだ!!

隕鉄の魔盾 + 15

DEF + 400

DEX + 250

MIND + 400

属性 大地

重さ 1kg

耐久 とても丈夫

《スキル》

耐久強化	L V 4	物理耐性	L V 3
魔法耐性	L V 3	魔法反射	L V 4
結界	L V 3		

《備考》

隕鉄から作られた盾が、イオリにより魔改造された物。物理系ではない魔術を L V 4 相当まで反射、それ以上の物も軽減する。性能が3倍近くになっていたので、イオリがノリで色を赤くした。

「本当は、サイサリスの耐核仕様冷却盾……まああのくそでかい盾にしようと思っただけだ、金属が足りなくて……」

「してたら怒ったからね?」

リユートから殺気を感じる。おふぎけが過ぎたみたいだ。赤いには何もツツコミなしか……

「あはは……うんやらないやりませんって! それじゃあおやすみなさい!」

中々に疲労が限界だった私は逃げるようにベッドに飛び込み寝る準備を始めた。

明日の為に、しっかり寝とかないとな!

ぐう……

閑話―6 イオリの行方

オークの事件から一週間。俺たち勇者は、2パーティーに分かれ、ダンジョンの攻略に、舞踏会のようなパーティーに、救援依頼に訓練にと多忙な日々を過ごしていた。これは、そんな中のある日の話。

「はあ……またいつかって、結局どこ行っただよ……」

「まあイオリって子の事考えてるの？」

宿屋の窓に頬杖をつき、ため息まじりにそんな事を言っていると、背後から柊さんが話しかけてきた。

「だってさ、わざわざ意味深な言葉を残して俺から逃げるなんて、本人だって言ってるようなものじゃん……」

「そんなものなのかなあ？ まあ、事情は知っていそうな感じはするけど……」

そこまで話した時、部屋のドアがドンドンと叩かれた。それに柊さんが答える。

「はーい。なんですかー？」

『天上院、柊さん、来てくれ！ 今下で映ってる映像にイオリって子が出てくるかもしれない！』

その言葉を聞いて俺たちは顔を見合わせ、すぐ様下に降りていく。そこではいつものように、海堂という生徒が中心になって馬鹿騒ぎをしていた。そして、そんな海堂が俺に話しかけてくる。

「よう天上院！ 見てみるよこれ、ミスコンって言うくせに幼女が出てるぜ！ アヒヤヒヤヒヤ」

酒でも飲んでいるのか、真っ赤な顔をした海堂が言う。最近、こういう輩がどんどん増えてきており、王様もこれを止めないので悪化の一途を辿っている。今となっては誰が注意しようが御構い無しなので、対処に困る問題の一つになっている。

それは置いといて

そう言っつて海堂が指差す方向には【記録の水晶】というアイテムから映像が映し出されていた。そしてそこには、若干の違いは有るもの

の、俺たちの高校の制服を着て、顔を真っ赤にしたイオリが立っていた。

「……」

「……」

俺たちはその光景に固まってしまった。今まで隠してきたのを、ここでバラしているのかよ……そんな事を思っている間に、画像のイオリが話し始める。

『曲名は『手紙』です！ よろしくお願いします！』

明らかな日本語で歌われたそれは、日本人の子供じゃありえない程正確に歌われていた。なんでそんな自爆曲を選んだのか……そんな疑問が頭に浮かぶが、それと同時に頭に一つの答えが浮かぶ。

「もうバレてもいいって事？」

「どうしたの？」

自分の頭の中だけで完結した上に、この中で中学で蒼矢と同級生だったのは俺だけなので、まだ誰もわかつてはいない。だから、騒ぎをかき立てないように小声で柘さんのみ言う。

「あのイオリって子、十中八九蒼矢だよ。昔、同じ曲を歌ってたんだけど歌い方が全く同じに聞こえる」

「！」

その言葉に目を見張る柘さん。そしてその後何か考えるような動作をする。そんなことをしている間にも、あの曲が流れている。どこからどう見ても大人じゃないよ……

そんなことを考えながらも、とりあえず海堂に聞いてみる。

「なあ海堂、その映像ってどこで撮られたやつなんだ？」

「なんだ？ 興味が出てきたか？ いいぞ、教えてやる。この映像はな、獣人界に続く橋がある近くの町【サーマス】って所で、3日前に撮られたやつだ」

「サンキュ、後で何か奢るよ」

そう言って振り向くと、先程まで考え込んでいた柘さんが、納得したような表情へと変わっていた。何を納得したのかは知らないが。

「で、この事は皆に言うの？」

「……いや、言わない。たしか宣戦布告をして、戦争が始まるって話だから、攻め込んで話を聞く。流石に元クラスメイトには攻撃できないでしょ」

「まあ、確かにぬか喜びするよりはマシンになるわね。海堂の能力で転送出来れば良かったのだけれど……」

「あいつの能力じゃ、武器と認識した物しか飛ばせないからなあ」
転送、とても便利なスキルに思えるが、どんなに頑張っても人間は飛ばす事はできなかった。どうも魔物は武器と思えても、人間は武器とは思えないらしい。

「まあ、目処が立っただけマシンか」

そう一人呟いたところで映像が消え、皆がゾロゾロと部屋に戻り始めた。

「とりあえず、また明日から訓練だし、早めに寝ますか……」

「おやすみなさい」

そう言って俺たちは別れ、それぞれの部屋へ戻っていった。

第15話 偵察

「はあああ……」

オリハルコンティライノが現れたという場所に向かっている最中、リユートが大きなため息を吐いた。二人とも勿論フル装備だ。

「いきなりどうしたのさ？ そんな重い溜息吐いたりして」

「レーナも狼人の人達も連れてこられないのは分かっているけどさ、たった二人でユニークモンスターを討伐するとなるとなんか不安だね……」

確かに、所々大きく抉られた跡のある大岩を見ると、確かに不安になるところはある。

「けど私からしたら……」

「んく……ダメだ。ユニークモンスターって分かっているのに、どうにも素材にしか思えない」

「本当、そのお気楽さが羨ましいよ……」

そう言っただけでしばらく歩いていると、獣人に変装してから強化されている聴覚と、《気配感知》と《予見》がそれぞれ危険を知らせ、私は足を止めた。

「ん？ どうしたのイオリさん？」

「……いる。多分あそこの大岩の裏辺り」

私は、いつになく真面目な顔をしてリユートに警告する。すると、地図らしき物を開いていたリユートが、

「その奥、少し広めの場所になつてみたい。多分間違っていないよ」
「偵察、してこようか？」

「うくん……じゃあお願いするよ。二人で勝てなさそうなレベルだったら撤退する。それでいい？」

リユートがそう提案してくる。まあ、もしそうだったら名残惜しいが仕方ないだろう。

「じゃあ行ってくるよ。《遮音》《風密操作》

《気配隠蔽》」

私達が二人で来たのは、遠慮なく魔法を使うためだ。私の周囲から

そう驚いている私を余所に、テイラノの口元に黄色い光が集まってくる。《気配感知》《予見》が猛烈な警告を発してくる。
「くっ」

横に大きく跳んだのとほぼ同時に、テイラノの口元から岩塊が発射される。土系統の魔法で造られたと思われる岩塊は、先程と違い地面に当たると大きな爆発を起こした。私は爆発によってできた砂埃に紛れ、近くの岩陰に身を隠す。

「ははっ、これでダメージ通りにくいとかなんてマゾゲー」

ゴリゴリと何かを砕いているであろう音がする。恐る恐る確認してみると、こちらに興味を失ったのか食事を再開していた。

「あれより2つは上のランクがいるのか……」

「ってことは、あれを乗り越えないと話にもならないってことだよなあ……」

冷静になって考えてみると、今回見破られたのは蛇などが持っているピット器官などを持っていたか、魔力を感知するスキルを持っているたのかもしれない。ただの野生の勘だったというのは、勘弁して欲しいな。

そんな事を思いながら、私は細心の注意を払いながら、リユートの下へ戻っていった。

「あいオリさん、どうだった?」

私が魔法を解除すると共に、リユートが駆け寄り私に尋ねてくるが、私の普段と打って変わった真面目な表情を見て、

「イオリさんがそんな表情してるって……そんなにヤバイ相手だったの?」

「……うん、ヤバイまじヤバイ。あれ一人だったら即死ねる。LV9とか、もう素材としてなんて見れないね」

イオリの言葉にリユートがゴクリと唾を飲む。

「いつものイオリさんらしくないよ? 大丈夫なの?」

「正直言うと、少し怖い。ちよつとだけ時間が欲しいかな」

いくらレベルが上がり強敵と戦ってきたと言っても、まだこの世界に来てから一月と少しな上に、体は幼女だ。やっぱり、自分より格上

の魔物と戦うのは怖い。

だがこのまま引き下がると、前とは違い犠牲になる人が出てきてしまう。それに、今後冒険を続けていけば、ああいうのも相手にするところになるだろう。

ならばここで、約束を破り逃げ出すなんて出来ない!!

(逃げるんなら、やれることを全部やりきってからだ!!　そして何よりオリハルコンっ!!)

そう心のなかで決意し、両手で頬をパシンとはたく。

「よっし、もう大丈夫。へいきへっちやらデースー!」

「まあ、そんなにふざけられるなら大丈夫か。ところでどう攻略するつもりなの?」

私は肩当てと帽子を装備し、大鎌を肩に担ぎながら言う。

「とりあえず最初は【ガンガンいこうぜ】、駄目そうなら【いのちだいに】でいい?」

「いいよ。元々僕は王の財宝以外の火力は高くはないしね。でも、あんまり期待はしないでね?」

「あははっ、大丈夫大丈夫。《筋力強化》《速度強化》《耐久強化》《リジエネリート》!!　じゃあ、行きますか」

今回は時間があるので強化魔法のオンパレードだ。あ、そういえばまだ【雷の魔導書】を読んでなかったな。この戦いが終わったら、鍛冶よりも先に読もうっ!

第16話 VS オリハルコンティラノ

先程と同じルートをたどり、ティラノに接近していく。こっそりと覗き見ると、相変わらず岩をゴリゴリと食べている。

「うわあ、あんなのと戦^やるんだ……さっきのイオリさんの気持ち分かるかも……作戦はあるの？」

「ん……とりあえずガンガンいこうぜのヒットアンドアウェイで。最初に私が行くから、そこからは臨機応変にがんばろー」

そう言つてイオリは飛び出していった。恐らく魔法を使つており、通常の倍ほどの速度となつており、大鎌はノイズ混じりだが三振りに分裂している。それは不完全ながらも【武技】と分かるもので、リユートを驚かせた。

「ああもう、勝手に動いて……」

そう呟くりユートの目の前で、オリハルコンティラノがイオリに対して小さな岩を乱射する。

「そりやああー！」

イオリは自分に当たりそうな岩だけを斬り裂きながら、ティラノに接近していき……

「まずは一発っ!!」

そう叫び大きく縦に振り下ろした。しかしその一撃は、大きな金属音を響かせ尾の根元の鱗を貫通したもののそこで止まっていた。

「うはっ、かったー！」

そんな事を言いながら、振り下ろした鎌を引つ掛け、そのままサーカスのような動きで大きく距離を取った。

「ま、マジか……」

今までまともなイオリの戦闘を見ていなかったリユートは、驚愕の声を漏らす。

(今までネタ武器だと思つててゴメン)

「《光の太刀》っ！」

ティラノの無防備な背中に光の速度で飛んだ斬撃が当たり、少し深めな傷を作る。

「グルアアアアッ！」

その攻撃を受け、ティラノが吠える。それだけで空気が震えた。

「とりゃああー！ 喰らえー！」

猛スピードで近づいていったイオリが、大鎌でティラノの足をなぎ払ったが、ガチンツ と音が鳴り刃の部分が鱗に挟まってしまった。

「ヤバッ」

「イオリさん！ 後ろに跳んで！」

リユートが全力で叫び、イオリが跳ぶのと同時にティラノは体を一回転させ、遠心力のついた尻尾でイオリを襲った。

イオリは後ろに跳んではいるが、いかんせん小さいせいと距離が足りない。このままでは尻尾につかまる。

「く、《結界》！」

咄嗟にリユートが盾の力を使い、結界自体は尻尾に当たった瞬間砕けたが、若干速度が下がりイオリは攻撃範囲から遠ざかった。

しかし、尻尾の先がほんの少しだけかする。それだけでイオリの体が、トラックに撥ねられたかのように10m以上吹き飛ばされた。

イオリは派手に吹き飛び、地面にたたきつけられ転がっていく。大鎌もイオリの下に吹き飛んでいく。

「イオリさん！」

そのリユートが出した声を聞いて、イオリを一瞥しティラノの注意がリユートに向く。

「ギユアアアアアア！！」

ティラノがリユートに向かって突進を開始する。鈍重そうな見た目とは裏腹に、全力のイオリよりも速く迫ってくる。

「《光曲幻影》！」

リユートの本体が掻き消え、少し前の空間に三体の幻影が現れティラノを攻撃し始め逃亡する。ティラノが守備よくそちらを追いかけいき、リユートは吹き飛ばされたイオリのもとに走った。

倒れているイオリは、ブツブツと何かを呟いていた。大鎌は腕の近くに刺さっただけのようで、イオリに当たってはいなかった。

「うーん、やっぱりイメージが固まらないからか……いや、ならあれな

らいけるかも……」

「何言ってるのイオリさん！ 早く動いて！ 幻影がもう持たない！」

「え？ リュートさんいるの？ どこ？」

そんな事を言っている間に、囿にしていた幻影が再度の突進を受け霧散した。幻影が消えたことで、リュートが姿を現す。

「あ、そこに居たんだ」

「急いで！ 早く隠れないと稼いだ時間が無駄になる！」

「ゴメン無理。なんか麻痺つててほぼ動けない。引つ張つてつて」

そう言つて、刺さっていた大鎌を触りアイテムボックスの中に仕舞ったイオリは、リュートに手を伸ばす。

「了解！」

「あぐれ〜」

近くにあった大岩の裏に駆け込み、テイラノのようすを確認すると、二人を見失いキョロキョロとしている。

「《キュア》。ふう、助かったよ……まさか耐性貫通して麻痺るとは……」

「まだレベルが低い分過信しちゃいけないよ。で、どうするの？ あれ」

そう言つてリュートが指差す先には、獲物である二人を見失ったオリハルコンテイラノが狂ったように暴れている。

「一つだけ思いついたことはあるんだけど……リュートさん、王の財宝の中に水つてどれくらいある？」

「は、水？」

「そう、水。因みに私は補給出来てないからあんまり無い」

「う、うん。かなりの量入ってるけど、アイツ呼吸してないから水攻めは効かないよ？」

「大丈夫だよ、使うのは違うことにだから。これでダメならもう運試ししかなくなるけど」

そう言つたイオリは、取り出した本を笑みを浮かべながら凄い速度で読み始めた。

第17話 決着

「《ピット・四重奏》!!」

私はそう叫び、テイラノを中心として魔法を起動した。半径10m、深さ10m程の円形の大穴が開き、テイラノが落下した。

四重奏カルテットとは言ってるが、ただの重ね掛けだ。テンションだ、エアロブラストをする訳でもないので気にしないでほしい。

「《エレキフィールド》《エアプレッシャー》《カーボンランス》！
リユートさん、水と結界！」

「全く、よくこんな考え付くよね！」

雷魔法は、私と相性が良かったらしくすぐにレベル1 は覚えることができた。今は無理やり魔力を流して運用してる状況ではあるが、問題無く使えている。

大穴の中のテイラノが、絶えず周りで光る電気と次々に降ってくる水を鬱陶しそうにし、飛び上がる！ その大ジャンプは大穴を飛び越え……なかった。

《エアプレッシャー》の魔法で、上から空気ごと押さえつけられ速度が減衰し、結界に完全に押し留められていた。なお、この《エアプレッシャー》で使っている空気は、下から発生したものを使用している。

「よかった……破られたらどうしようかと思ったよ」

「そもそもこの作戦自体が無茶だと思うのは僕だけなのかな？」

そんな事を言っている間にも、投入されていた水は、炭素の槍から電気分解され続け減り続けていく。そしてそこには、酸素と水素のガス……うろ覚えだけど、確か爆鳴気と呼ばれる、爆発する危険性のとても高いガスが残った。水素と酸素が2 : 1だったはず……まあそんなことは置いといて。

「これならいけるだろ！ ブツとベファイアアアア!!」

私がそう叫びながら放った火種に爆鳴気が反応し、視界が純白に染まり爆音が轟く。幾ら物理防御が高くても、若干魔法も混ざったこれならば！

「やったか!?!」

「リユートさんそれフラグー！」

私がそうツツコミを入れた瞬間、爆発の中から振るわれた金色の尾がリユートを薙ぎはらう。私と違って尻尾直撃したリユートさんは、岩壁にめり込んでいる。

爆発の中から飛び出てきたオリハルコンテイラノは、全身をボロボロにしながらも生きていた。その目はまっすぐ私を見据えている。

私の後ろには自分で開けた大穴、逃げ場はない。

「確か、武技なら通るんだったよね……」

今まで明確なイメージが無く、安定していなかった私の武技。今完成させないと、間違いなく私は負ける……そして美味しく頂かれてしまう。

「グルルアアアアアアツ!!」

そうテイラノが叫び、遅くはなったが私に向かって突進してくる。ええい、背水の陣だ!

「ははっ、やってやろうじゃないか!」

頭に思い描くのは一人のアニメキャラ。爪のように銀色のオーラが展開されている大鎌を旋回させる。

「終虐・Ne^ネ破^{パー}a^ラア^{ランド}乱怒オオオオツ!!」

すれ違いざまに一閃。

——《武技》アルジェントスラッシュを習得しました——

——《武技》はあと7つ登録可能です——

——称号 装備制限解除 の効果で、残りの7枠が消滅しました——

そんなアナウンスと、確かな手応えを手に私は気を失った。

名前……違うじゃん……

◇

「……きて、お……てイ……さん!」

体を揺すられる感覚と共に、どこからか名前を呼ばれた気がする。霧のかかったような頭でそんな事を考えていると、今度こそその名を呼ばれた。

「起きて! イオリさん! 寝てないで起きて!」

「リユートさん……?」

口から出たのは、思っていたものと違い掠れた声だった。気絶する前確か私は、テイラノを鎌で斬りつけて……

「そうだっ!! ティラノは? ティラノはどうなった!?!」

「見てみなよ」

そう言っつてリユートが指差した先には、私が作った大穴が広がっていた。私は握ったままだった大鎌を杖のようにして立ち上がり、まだハッキリとしない平衡感覚のまま歩いていく。

穴を覗き込むと(因みに所々ガラス化していた)三枚に下ろされたようなオリハルコンティラノを発見した。

「勝った……の?」

「勝ったんだよ! ユニークモンスターに」

「よっしやああああ!」

二人して歓喜の声を上げる。穴の中に飛び降り、ティラノを回収しているとは大変な事に気づいた。

「リユートさん、《精霊術》つてその腕輪みたいな媒体が無いと使えないよ、魔法も一部の種族しか使えないんだよね?」

「ん? そうだけどそれがどうしたの?」

「リユートさんの力はあるの人は知ってる、私は《精霊術》が使えない。銀狼族が使える魔法は水と氷系統。この状況、どう説明すればいいんだろう?」

空気が凍りつく。先程まで顔文字が踊り、小躍りでもしそうな雰囲気だったのが、今はまるで真冬のようなようだ。

「確かに、ヤバイ。イオリさんが人族ってバレたら冗談抜きで食べられるかも」

頭にバイトさんの顔がよぎった。ダメだこれは早くなんとかしないと。

「リユートさん、銀狼族の特徴教えて! 今から言い訳捏造するから!」

「わ、分かった」

程なくして言い訳を考えつき、私は大穴を《鉱石魔法》で塞いだ。焦

りすぎてMPが切れ、
気絶したのは予想外だったが。

第18話 お祭り

計画を伝えるだけ伝え、そのまま気絶したイオリを背負い村に帰ると、村人総出で迎えられた。

「本当に……本当に心配したんだからね！」

そう言っただけでレーナが飛び込んでくる。いくら戦闘がほぼイオリ任せだったとはいえ、受け止めきれず倒れこんでしまった。

「大丈夫だって。討伐も成功したし、二人とも怪我もしてないから」

「え？　じゃあなんでイオリちゃんは、リユートくんを背負われてるの？」

「あ……これは魔力切れだよ。討伐した証拠も見せないとダメだからな……起きろー」

背負ってたイオリを降ろし、頬をペチペチと叩き始める。が、MPは回復している筈なのに起きる様子はない。

「仕方ないな……。起きないと、オリハルコン全部没収するよ。3……2……1」

「そんなことさせるかあっ!!」

カウン트가0になる直前、イオリが跳ね起きてリユートに蹴りかかる。バシッという似つかわしくない音を響かせ蹴りを止め、リユートは話し始める。

ドシャツと落ちたイオリは、周りを見て状況を把握したようで、ホコリを叩いて起き上がる。

「討伐した証拠、見せないとダメだから起こさせてもらったよ」

「全く……あんな起こし方しなかったっていいじゃん……。えっと、証拠だっけ？　はい」

そう言っただけでイオリは虚空に手を突っ込み、引っぱり出すと三枚下ろしのテイラノが姿を見せた。

それを見て場の空気が一瞬だけ凍りつく。

「本当だったんだな……。ありがとうなりユート。アイツを倒してくれて本当に助かったよ」

「いや、僕は殆ど戦ってないよ。アイツを倒したのは、ほぼイオリさん

一人」

「ほ、本当なのか？ 精霊術も使えない、あんなに小さい子が!？」
「本当だよ。その証拠にほら、僕には殆ど経験値入ってないから、レベルが上がってないでしょ？」

経験値はパーティーを組んでいれば均等に配分されるが、組んでいない場合はその戦闘の活躍によって変わるのだ。今回ダメージを与えていたのは、殆どイオリだったためリユートには経験値が雀の涙程しか入っていないかった。まるでゲームである。

「本当にあんなに小さい子がねえ……」

「まあいいでしょ？ ユニークモンスターはもういない、村の危機は去って倒したのはイオリさん。もうこれ以上は……ね？」

イオリはふわあと大きな欠伸をしながら、そのことを聴き安心していった。とりあえず人族だとバレるようなことはなさそうだった。

◇

その後は、なぜか村を挙げての宴会になった。簡単に纏めると、これで村の危機は無くなった。魔物に襲われずに済んだのだ。という事らしい。

まあ、当事者であ私はかなりの注目を集めていたのだけれど、出された料理が思ってた以上に美味しかったので、そちらは完全に無視しそちらを堪能している。

「ねえねえレーナさん。この際だから聞きたいんだけどさ、なんでリユートさんにはケモミミが無いの？」

ふと気になり、本人にもはぐらかされていた質問をレーナさんにぶつけてみる。まあ、答えてくれればいいかな？ 程度の質問だったのだが、その言葉で場の雰囲気が変わった。

「っ、それは……」

「あ、いや、答えたくないとか無理なら別にいいんだけど……」

レーナさんが、辛そうな顔をしたので取り繕う。なんか悪い質問しちゃったなあ……と思っているとレーナさんが意を決したような顔をして言う。

「リユートくんの耳はね、私を『人族』の人達から逃す時に片方は剣で、

もう片方も魔法で切り落とされちゃったんだよ……私を庇って」

「それって、駆け落ち……な訳無いよね。逃げる……逃亡……奴隷？」

その最後の言葉に、ピクンとレーナさんが反応する。小説とかの異世界で、バッドエンドな事は少ないけど最悪な事……とりあえず、私自身は絶対になりたくないと思っっている事の一つだったのだが、当たってしまったっていたようだ。

「そう……だよ。私は価値が下がるからとかいう理由で叩かれたりはしなかったけど、リユートくんはね」

「やつぱり……【リフン】じゃ獣人も人族もあんまり関係なさそうだったのに、やつぱりそういうのはあるのか」

そう言っただけは、若干暗くなった雰囲気の中溜息を吐く。うむむ……普通に重かった、どうしよう、この雰囲気。そう思っていると、レーナさんが口を開いた。

「それじゃあ、イオリちゃんはなんでわざわざ獣人界に来たの？ 変装してまで」

「えー……あー……うん、私の事情ね」

クラス転移から除外されて一人だけTS転生させられて、まあ異世界を楽しもうと思っただけなら事件に巻き込まれてクラスメイトと再会して、多分バレたから逃げてきたって……リユートさんが一緒じゃないと、レーナさんが理解できる気がしないぞコレ……。そのリユートさんは、バイトさんと話してるし……いや、これは私が頼んだだけだし。

「TSなんてわからないだろうし……内容が濃すぎるから、今度リユートさんが一緒の時に……ね。絶対に言うって約束するから、それでもいい？」

「私は言ったのにズルい……。絶対に言うって約束だよ？」

「うん、約束約束！」

私はその言葉にココココと頷く。えっと、約束を証明できるようなものは……。私がそう悩んでいると、レーナさんが小指を立てて手を出してくる。

「それじゃあ、指切りしよっか」

「え？ 知ってるの？」

「うん！ リュートくんに教えてもらったんだ」

「なるほどね。それじゃあ」

「ゆーびぎーりげーんまーん、うっそつーたらはーりせんぼーんのーます。ゆーびぎったー！」

「あ、呑んでもらうのは、イオリちゃんが持つてるその長い針ね」

「ふえ!？」

ちよつとそれを千本とか、ヤバ過ぎない!？」

◇

「そういえば、あの娘は何者なんだ？ 獣人のようだが、お前達とは毛並が違うし、お前らの子供って訳じゃねえんだろ？」

指切りをしている二人を見て、バイトさんが俺に聞いてくる。やつぱり聞いてきたかという思いとともに、イオリさんの考えていた言い訳が役に立ったなとも思う。

「拾ったんだよ。銀狼族なのに、水系統の魔法の適性が無かったらしく捨てられたって話だね。今日の大爆発は、あの娘の火と土の複合魔法だよ」

「そうだったのか……中々重い過去を持つてるじゃねえか」

これでいいんだよね？ と耳をピクピクさせて聞いていたイオリに目を向けると、サムズアップをしていたので問題は無いようだ。口の周りが色々汚れてるけど、拭かないのだろうか？

「そんな過去があったから、あんなに小さいのに強えんだな。まあ、AとCランクのコンビでオリハルコンティライノを倒すなんて聞いたことねえぞ?。」

「まあ、僕も詳しい事は知らないけど、確かに規格外だよ……」

若干暗そうだった雰囲気が消え失せ、楽しそうに二人で料理を食べているイオリを見ながら、転生者とは言えどうしてあんなに強いのだろうかと思うリュートだった。

第19話 第2章エピローグ

「ふっはっはー、私に勝てる奴はいないのかー」

先ほどの暗い雰囲気なんて消え去り、私の前では3人程の狼人族の男が倒れていた。その理由はというと……

「す、スゲー。なんだあの子」「もう3人抜きしてるのに、まだまだ入りそうな顔をしてるぞ?」「あの小さな体になんであれだけの料理が入るんだよ」

何故か発生した大食い対決だ。そして、謎の大食い大会でブラックホールのように料理を食べている私は、ある一つのスキルを入手していた。

《【別腹】： 食事を限界を超えて食べられるようになる。また、その分のエネルギーを余剰分としてストックすることが可能。レベルの上昇によってストックできる量が増えるが、その分体重が増加する》
今現在このスキルのレベルは5で、まだまだ入るように感じる。ふふ、まだまだ食べ続けてやる！ そう決心して私はまた、目の前の料理を食べていった。

た、体重が重くなつてたからって太った訳じゃないんだっ!!

◇

そのまましばらく食事（大食い）を続けていると、踊り子のような露出度の高い服装をした女性たちが数人現れた。扇を持つてる人もおり、どうやら今から舞いを踊るらしい。その中には勿論獣度100%の人はいない。当たり前か。

太鼓に横笛、琴はないけどあれは笙しょうだったかな? そんな和楽器の音に合わせて踊っている。そして、合いの手のように男衆が、時折遠吠えを入れている。思ったよりかなりマッチしている。

それを見て遠吠えを試してみたくなったのは秘密だ。

「凄い綺麗な音だね……踊りも上手!」

「そうだね。でも、踊りつて言うよりは舞なのかも……」

レーナが両手を合わせながら見惚れているが、私は

(なんで私は、こういうのをやってみたいか思ってるんだろう……)

はっ！　これがよくある身体に精神が引きずられるってやつか！

そんな事を考えて呆然とし、忘れるために近くににあった料理を食べていた。まさに悪循環である。そして、完全に一人で百面相である。

「そうだレーナさん！　レーナさんがあの衣装を着て、リユートさんを悩殺……って、あ」

そう言っただけで私が指差したりリユートさんは、相変わらずバイトさんと話しているのは良いのだが……所謂キレイなお姉さんにお酌して貰っていた。顔も赤くなっている。おい未成年。

「むっ、浮気は許さないんだから」

彼氏が、見知らぬ女性をみてデレデレしているのを見つけたような怖さが、今のレーナさんからは滲みでていた。

「リユートさくん、ちよつとO☆H A☆N A☆S H Iしようか」

そう言いながらリユートの下に、フラフラと幽鬼のように向かっていった。眼からハイライトが消えて、黒いオーラが溢れていたけどそんなのは見間違いだよね！　ね！

(あとでレーナさんには包丁を贈ろう……)

丁度近くに料理も無くなったので、私はどう作るか考えを練り始める。うーん、歌うのは結構楽しかったしなあ……マイク的な何かでも作ってみようかな？

◆　そんな事を考え始めた私を尻目に、お祭りの夜は更けていった。

宴会が終わった翌日、私達は宿を引き払い旅に出る準備をしていた。バイト達からはもつと滞在時間を伸ばせよという要望があったのだが、できる限り先を急ぎたいという事で今日出発という事になった。

そして、ここにきた本来の目的？　の「ライドファンク」という乗り物……いや、乗り魔物？　は灰色の毛並みの軽トラ程の大きさの狼だった。二匹のライドファンクに、リユートさんとレーナさん。一人で私という組み合わせで乗ることになった。私が一人なのは見た目が銀狼族だからだろうか？

リユートさん達が乗っているライドファンクは灰色なのだが、何故

か私が乗っている子は白だった。それを見た私が、某ジブリ作品の事を思い出したのは悪くないはずだ。

「嬢ちゃん、片付け手伝ってくれてありがとうな」

「ふああう。凄く早く起きちゃったですから、大丈夫です」

そう言ったが、レーナさんの包丁を作ったりなんだりをしている間にいつの間にか朝になっていたので実は寝ていない。隈は出来ていないが、かなり眠い。

「そうか。ライドファングは見た目と違ってあんまり揺れないからな、存分に寝ると良い」

「あはは……了解です。ぐう……」

そんな私を見透かしていたのかバイトさんにそんな事を言われた。なので、よじ登ったライドファングの首元にしがみつき、顔を埋める。そこは何故か干した布団のような香りがして……私はすぐに眠りに落ちた。

「でも、ほんとに用事はもういいの？ リュートくん？」

イオリが寝息を立て始めた頃、レーナがリュートにそう問いかける。

「うん。ここに来た目的はこの子達を借りることと、このかりんとうだしね」

そう言ってリュートはかりんとうの袋を取り出した。自分で食べるのか、それとも誰かにプレゼントなのか、今日の朝大量に買い込んでいたものだ。因みにイオリは、その他にも大量に様々な調味料を買い込んでいたりする。

「それじゃ、そろそろ行くのか？」

「はい」

「どこ行くんだ？」

イオリのライドファングと一緒に近くに来たバイトが、リュートに問いかける。

「色々見て回りたい所はあるけど、最終目的地はシャルフだよ」

「【獣王国・シャルフ】か……遠いな」

そう、ここからはかなりの距離が開いている。歩いてでは辿り着け

ないレベルの距離ではあるが、ライドフアングならそこまでかからない。ヴィマーナなら多分数日だろう、風情も何も無くなるのでイオリが断固反対していたが。

「それじゃあ、またー！」

「またいつかです」

「ぐう……ZZZZ」

そう言つて去つていくリユート達を、バイト達狼人の人達とフジ・ヤマーが見送っていた。

第2章 完

閑話―7 ユニークモンスターの討伐（勇者）

「ユニークモンスター……ですか？」

「そうだ。最近被害報告が出てきてな、折角現れたのだ。勇者の訓練として討伐してもらおうと思つてな」

ある日呼び出された俺たちは、王様からそんなことを言われた。ユニークモンスター……ゲームなどではありふれている強力なモンスターだ。

「分かりました。すぐに編成して行つてまいります」

「ふむ、頑張つてくれよ」

一部の気が抜け始めている人達が、これでどうにかなつてくれればいいんだらうけど……

この頃、初めは一致団結してことに当たっていたクラスが、バラけ始めてきた。海堂を中心としたこの世界に来てから好き放題やり始めた奴らと、俺が中心となつている元の世界に戻ろうと必死に頑張っている2つの派閥にクラスが分裂してしまっている。

そして、俺が中心となつている派閥の方には女子が多く、海堂達からは俺は目の敵にされているようだ。

（今回は、向こうにやらせてみるかなあ……）

そんなことを思いながら、俺は自分の部屋へと帰つていった。

◇

海堂達を討伐に行かせてから二週間と少しの時間がたった。片道二〜三日の場所では無いのに、あいつらの強さを考えるとこれはおかしい。

「ちよつと、あいつらの様子を見に行つてくる」

「りよーかい。いつてらー」

俺はそう近くにいた女子に告げ、とスキル《韋駄天》を発動させて全速で駆けていった。因みに韋駄天は、自分の素のAGLを1.5倍にするスキルだ。

時々休憩を入れながら、2時間ほど走り現場の村に着くと、そこは暗いオーラが漂っていた。

「な、何があったんですか!？」

武器屋と思しき建物から出てきた青年に声を掛ける。いくら海堂達と対立してるとは言っても、亡くなってしまったりしたら俺は……「あんたは……? まあいいか。最近、ユニークモンスター討伐に来た勇者達が、討伐が終わったのに毎日毎日騒ぐもんでな……酒は飲むわ、喧嘩はするわ、迷惑したらありやしねえよ!!」

「そんな……」
青年が怒り心頭といった表情で、語気を強め言ってくる。大分酷いとは思っていたが、ここまでとは……。

「すみません、俺があんな奴らを派遣したばかりに……今すぐ連行していきますので……」

「本当だよ! あんな奴らとつとと連れていってくれ!」

「それで、あいつらは今どこにいますか?」

「この時間だからな……恐らく酒場だろう。さっきは吠鳴どなっちゃまって悪かったな」

そうぶつきらぼうに言つて、青年は武器屋の中へと荷物を持って戻っていった。

「あいつらは……確か酒場だったな」

俺はそう呟き、酒場へと走っていった。

酒場に着くと、そこは既にどんちゃん騒ぎになっていた。迷惑そうにしている店員さんを完全に無視し、酒をガバガバと飲んでいる。お前ら、高校生だろ? 何考えてるんだよ。

そんな事を思っていると、その中の1人が俺を見かけて声をかけてくる。

「おう、天上院! お前も飲んでけよ」

「……ふざけるなよ」

「あ、なんて言っただんだ?」

顔を赤くし、酒臭い息を吐きながら話しかけてくるクラスメイトに、俺は怒りを覚える。幾ら何でも、これはないだろう。

「お前ら、ふざけてんじゃねえよ!!」

「お、おい。落ち着けて。ほら、エールでも飲んでリラックスしな」

「海堂！ お前もお前だ！！ なんでここまでなるまで放置していた！ お前もリーダーだろ！」

ステータスに物を言わせ、人混みを押しつけながら海堂に迫る。
「け、ここは異世界なんだ。何してもいいじゃねえか！」

「っ！！」

力任せに海堂をぶん殴る。それを見て酒場が静まり返る。

「い、痛えじゃねえか！ 何すんだよ！」

「お前らが、幾ら何でも酷すぎるからだ！ 《転移門》！」

俺がそう言うのと目の前の空間が歪み、牢屋へ繋がる。《転移門》俺がレベル60になった時に覚えたスキル《次元魔法》で使えるようになった魔法だ。一旦行ったことのある場所でないといけませんが、人も飛ばせる便利な魔法だ。

「お、おい、やべえぞ」

「逃がすか！ 《韋駄天》《クロックアップ》！」

スキルと魔法の2つで加速し、全員をあつという間に牢屋へ繋がる門へと放り込む。

そして、魔法を消し店員さんに頭をさげる。

「うちの勇者達が、本当にすみませんでした！」

「い、いえ。頭を上げてください。大丈夫ですから……」

「本当に、ありがとうございます。お勘定はこれで。お釣りは要らないです」

そうやって僕は、手持ちの金貨を2枚置いてお店を後にした。

その後一日中村を駆け巡り謝ったが、全くと言っていいほど、勇者達のいい印象は無かった。

(何やってんだよ……俺……)

酷く後悔をしながら、俺は王城へと《転移門》で帰った。

閑話―8 変わる勇者達

海堂達一派が牢屋に拘束されていたのは、腐っても勇者……それに仕事や依頼はきちんとこなしていたのもあってか、案の定たったの1日だった。まあ、依頼などをこなしたとしても、先日のようなことになるのが大半なのだが。

その解放されたばかりの海堂達と、俺は今王城の一通路で遭遇していた。

「よう」

そう声をかけられたが、幾ら切れていたとは言え、こちらは強制的に彼らを牢屋に移させた身だ。なんと言えはいいのかわからない、俺は黙ってしまおう。するとそこに、馬鹿にしたような声で海堂が話しかけてくる。

「そうかよ。ホンモノの勇者サマは俺らみたいなのはみ出し者なんかとは会話もしたくねえってか」

「なっ、違う！俺はただ、今のお前になんて話しかければいいのかわからなくて……」

「はっ、信じられねえそんなもん。問答無用で俺らを投獄したやつという言葉なんてな」

その言葉を否定できないので、俺はまたしても黙ってしまう。

「まあいい、また王様がお呼びだぞ、ホンモノの勇者サマ」

そう言っただけで海堂はどこかへ去っていった。向こうが悪い事をしていた筈なのに、何故かこちらが負けた気分だ。確かにこっちにも非はあったと思うけれど……

「ああもう、やめだやめだ！こっちもどうせ戦争の事だろうけど、聞きに行くしかないか……」

因みに、王様からの話は戦争に関するのではなく、今回の海堂達の横暴を止めたことに対するものだった。

思えば、ここから海堂達と、何かがズレできていたのだろう。

◇

あれから数日後、依頼などで各地に散っていたクラスのみんなが

段々と戻ってきた頃、それは起こった。

「何よ！ 後から来たくせに！」

「はっ、(っ)ちや(っ)ちやうるせえんだよ！」

俺が痛む頭を押さえ、昼食を取ろうと食堂に向かっているとそんな声が聞こえてきた。

最近、女子から押し付けられ気味だった仕事を断りきれず、量は少ないのだがそういう物に限って面倒な物が多いこと多いこと……と、これ以上は愚痴になっちゃうか。

まあ、そんなこんなで今は悩みの種が多く、睡眠時間も削れている俺が、若干イライラしながら食堂に入ると、海堂達と柊さん達が睨み合っていた。はあ……

「あ、委員長！ って、機嫌悪い？」

「色々、やることがあつてね……。で、これはどんな状況なの？」

「私達がこの席に集まつてお昼を食べていたら、いきなり海堂くん達が邪魔だから帰れつて言ってきたのよ」

グループを代表して、いかにも怒ってますよという雰囲気柊さんが言ってくる。

「それで海堂は、なんでそんなことを……」

そこまで俺が言ったところで、急に目の前の景色が歪んでいき、そのまま俺は気を失ってしまった。最後に目に入ったのは、ニタニタと笑う海堂の顔だった。

◇

「あなた、何をしたの？」

私達の目の前で、今の今まで話していた委員長がパタリと倒れた。海堂たちがニヤニヤしているので、恐らく犯人はそちらなのだろう。そう当たりをつけて問いかける。

「何、随分とお疲れのようだったからなあ、眠らせてやっただけだよ」「このタイミングでそれをやっても、自分の邪魔をした奴を黙らせたとしか取れないんだけど？」

こういう時に、山下先生が居れば……そんな事を思いながらも、場にはピリピリとした空気が漂っている。そんな一触即発の雰囲気

壊したのは、食堂に入ってきた王女だった。

「どうなされたのです？」

その言葉で、男子達のニヤニヤした顔と騒めきが収まる。いくら王女様が美人だつて言つても不自然じゃないの？　というか、若干王女様のドレス、露出が激しくなつてゐるような……

「いえ、特に何もありません。いたつて平和です」

「ちよつと何よそつっ!?!」

その時目が合った海堂は、とても濁つた寒気がする目をしていて、私は言葉に詰まつてしまう。

「それよりも、そこで倒れている天上院を運んであげないのか？」

「っ、そうさせて貰うわ。みんな、とりあえず引くわよ」

「ちよつ、鈴華!?!　なんでそんなあいつらの言いなりみたいに！」

「いいからっ！」

そう言つて私は、寝ている委員長の方を担ぎ歩き出す。何故だろう、今の海堂には絶対に関わつたらいけない気がする。その、なんて言えばいいのだろう、今までとは纏つてゐる雰囲気が悪い方向に違すぎる。

「後で説明してもらうからね、鈴華」

「分かつてるわ」

そう言つて私達が去つた後食堂に残つたのは、ニヤつく海堂と不思議そうにしている王女、そして何故かきちんと並んでゐる男子達だった。

第2章登場人物紹介

イオリ・キリノ

種族 人族(偽・銀狼族)

性別 幼女

年齢 7

職業 ヘーパーストス・ドヴェルグ

LV 56

HP 762 / 762 +500

MP 1702 / 1702 +500

STR 504

DEF 461

AGL 431

DEX 5150

MIND 426

INT 1021

LUK 53

《武技》アルジエントスラツシュ

《スキル》

職業

ヘーパーストス LV 72 ドヴェルグ LV 57

(空き1)

EX

家事万能 超解析 無詠唱

通常

異次元収納 LV 8 超隠蔽 LV 9 鷹の目 L

V 4

別腹 LV 5 思考加速 LV 1

戦鎧術 LV 14 二刀流 LV 12 大鎌術 L

V 19

回復力強化 LV 11 気配操作 LV 1 身体能

力強化・改 LV 17

暗殺術 LV 9 予見 LV 9 痛覚耐性 LV

9

衝撃耐性 LV 9 状態異常耐性 LV 4 魔法耐

性 LV 2

爆炎魔法 LV 12 鉱石魔法 LV 13 旋風魔

法 LV 11

聖光魔法 LV 10 雷魔法 LV 3

《称号》

NEW!!

玄人鍛冶師・ミスコン1位・鍛冶バカ

空飛ぶ者・ユニーク殺し・虫の悪夢

下剋上・芸術は爆発だ・嘘つき

戦う少女・大喰らい・大狼の友

寝不足

《加護》

世界神の加護++ 鍛冶神の加護++

《装備》

武器・黒緑金属の戦鎚 +8・蟲斬りの大鎌 +12・蟲斬りの曲

刀 +12・Braid of Queens of music

“ + 12・ミスリルナイフ +8・ミスリルの針 +8

防具・チュニツク《青》+ 6・ミスリル合金の胸当て + 10・

ミスリル合金の肩当て×4 + 9・風のリボン + 6・銀狼の腕

輪・暗闇の短パン + 7・大地蛇のベルト + 8・ミスリル合金

の腕甲 + 10・鍛冶師の手袋 + 8・靴下《青》+ 5・黒狼

のブーツ・改 + 7

|||||

|||

名前 イオリ・キリノ

性別 女
年齢 7

生まれ 不明

ランク C

ゴールド 389,640

|||||
|||

銀髪ポニテで、蒼色の眼が特徴的な主人公。今回はミスコンに出てみたり、周囲の忠告を無視してユニークモンスターを倒しに行ったりと色々ハツチャケていた。

遭遇したのは偶然だったが、オリハルコンを大量&ガラスを入手してホクホクの模様。

装備製作技術の上昇と共に、悪ふざけも悪化している模様。夢のファンタジー金属のせいかな現在かなりやる気に満ち溢れている。

アニソンを歌えるのがリユートしか居ないので、若干悲しい模様。

「この手から零れ去った、イノチ……紡いだコ・ド・ウー！」

リユート・カンザキ

種族 獣人 (獅子族)

性別 男

年齢 16

職業 王者・剣士・盗賊

LV 79

HP 1313 / 1313

MP 1956 / 1956

STR 456

DEF 543

AGL 697

DEX 589

MIND 566

INT 1125

LUK 64

《精霊術》 光の太刀・光曲幻影・閃光轉身

《スキル》

職業

王者 LV 89 剣士 LV 45 盜賊 LV 2

8

EX

王の財宝 無詠唱 超解析

通常

鷹の眼 LV 12 無音 LV 13

劍闘術 LV 8 小盾術 LV 14 回避術 LV 12

12

身体能力超化 LV 7 五感超化 LV 10

《称号》

NEW!!

ユニーク殺し・ロリコン

《加護》

世界神の加護 + 獣神の加護 ++

《装備》

武器・隕鉄の片手剣 + 12

防具・隕鉄の魔盾 + 15・光の腕輪・内着《黒》+ 4・ミス

リルの鎧 + 7・ミスリル合金の籠手 + 6・隕鉄の腰当て +

5・ズボン《黒》+ 4・ミスリル合金のグリーブ + 6

|| || ||

名前 リュート・カンザキ

性別 男

年齢 16

生まれ シヤルフ

ランク A

ゴールド 1, 293, 520

|| || ||

今章で初登場したもう一人の転生者。身長 178cm 体重 68kg 黒髪黒目のイケメン？ 称号にロリコンが着き、言い逃れができなくなった。

高レベルなのに、あまりイオリと能力が変わらないのは、転生時に特殊能力(王の財宝)に振ってしまったのと、イオリがアホみたいに大量の称号を持つてる+最上級の職業を持っていること、そして死にかける事が多いから。決して弱い訳ではない。

無詠唱のスキルは持っているが、何故か魔法は使えない。

「欠けたムーンライトその光は、残した者にナニヲ問ウ！」

レーナ・アークライト

種族 獣人(黒猫族)

性別 幼……女？

年齢 15

職業 侍(空き1)

LV 28

HP 420/420

MP 270/270

STR 168

DEF 124

AGL 265

DEX 123

MIND 104

INT 290

LUK

40

《スキル》

職業スキル

侍 LV 28

EXスキル

獣化

一刀両断

通常スキル

鷹の眼 LV 6

戦刀術 LV 2

見切り LV 4

集中 LV 7

居合術 LV 5

五感超化 LV 5

生活魔法 LV

《称号》

幼女・冒険者・SAMURAI・黒猫・狩人

居合抜き・ミスコン2位

《装備》

武器・細身の曲刀 + 7・精霊小太刀《無》・包丁 + 6

防具・薄紫の着物 + 7・黒色の帯 + 7・猫耳帽子 + 7・

黒色の手袋 + 7・保護足袋 + 10・花柄の下駄《黒》 + 7

|| || ||

名前

レーナ・アークライト

性別

女

年齢

15

生まれ

アルフ

ランク

D

ゴールド 45,680

|| || ||

身長145cm 体重44kg 黒髪黒目で、髪はイオリと違い

短め。今回は戦っていないが、リユートとパーティーを組んでいたの

で、ぼた餅的に経験値をゲットした。
最近、ヤンデレ化してきた節がある。
「二人共、何やってるの?」

タクミ・テンジヨウイン

種族 人族

性別 男

年齢 16

職業 勇者・聖騎士・魔導騎士

LV 73

HP 889 / 889

MP 1254 / 1254 +1000

STR 770

DEF 825

AGL 695

DEX 760

MIND 835

INT 1040

LUK 62 +100

《スキル》

職業

勇者 LV 80 聖騎士 LV 75 魔導騎士 L

V 42

EX

MP消費半減 全言語理解 詠唱破棄

超解析 忍耐

通常

異次元収納 LV 10 超隠蔽 LV 7

HP高速回復 LV 1 MP高速回復 LV 1

聖剣術 LV 21 魔導剣 LV 7 身体能力超化

L V 1
防御力超化 L V 1
精神力超化 L V 1
韋駄天

L V 5

城塞 L V 6

物理耐性 L V 5
魔法耐性 L V 6

状態変化無効 L V |

神聖魔法 L V 3
次元魔法 L V 3
火魔法 L

V 5

風魔法 L V 5
土魔法 L V 5
水魔法 L V

5

生活魔法 L V |

《称号》

NEW!!

苦勞人・耐える者・不沈艦・要塞

東奔西走・テレポーター

《加護》

世界神の加護 ++

《装備》

武器・聖剣・ガラティーン

防具・ミスリルの軽鎧 + 12・ミスリルの籠手 + 12・オ

リハルコンの腰当て + 15・ミスリルのグリーブ + 12・学

生服・ズボン

黒髪黒目で、クラス委員だったこともあり勇者のリーダー的な事をやっている人物。身長 172cm 体重58kg 何気にイケメン。

イオリの動向を、いなくなってからすぐに掴んだので追いかけてやっていたが、海棠達の問題の解決のために時間を割くしかなく、イオリを取り逃がした。

神聖魔法以外にも、軽い魔法なら使えるようになり、短距離のテレ

ポートも出来るようになった。が、スキル構成はタンク。
「誰か……胃薬と頭痛薬を……」

司会者

ミスコン大会で司会者をしていた人物。最後のイオリにはー☆
で夜空に赤い花を咲かせた。

アミカ

ミスコン大会前回優勝者。ハンカチを噛んでキーなどの古めかしい行為をしていた。長身青髪ロングの結構な美人だったが、今回は口
リコンが多く三位。イオリの最後のにばー☆で撃沈した。

バイト

「ヴオダン」の村に住んでいる狼人。昔、リユートに体術を教えていた
らしい。女子供には優しいが、人族や銀狼族の男衆にはとても厳し
い。レベルが58もあるので襲われたらひとたまりもない。

オリハルコンティラノ

今章で、何気に書かれた文字数が多かった竜。ティラノ視点だと、
唯美味しい物を食べていただけなのに何故か討伐された。解せぬ。

現在、イオリの異次元収納の中で素材ごとにバラバラにされ保管
中。

第3章 激動の獣人界

第1話 プロローグ

私達は目的地を【獣王国・シャルフ】に定めて歩を進めていた。勿論、ライドフアングに乗ってだ。

「いや〜…見た目が狼だから振動がヤバそうだと思ってたけど、こんなに快適だとは思わなかったよ」

当然だ！ とばかりにヴォフツ と鳴くライドフアングにごめんごめんと謝りながら、改めて快適さについて考える。

普通狼のような動物は、走るときに背が大きく上下している…と聞いたことがあったような気がしていたので、乗るのには適さないと思っていたのだが、ライドフアングは違った。

走っている時の背に乗っていても、殆ど振動が無いくせにかなりの速さで走っているのだ。本当にすごいと思う。

「行けー！ とばせー！」

「ワオオオオオオン！」

そう言っただけはノリノリで、バイクの二人乗りをしているようなリユートさん達を追いかけていくのだった。

しばらく走っていると、視線の先に魔物の影が見えてきた。中からのウサギのような魔物が数匹だ。

「お、久々に戦闘かなー！」

ずっと座りっぱなしだったりリユートさんは、やる気満々のようだ。しかし、テンションが上がり上がりになっている私は、手の中でこねくり回していた魔法を発動させた。

《《ヒール》》《リフレッシュ》《雷纏》！ GOOー！》

バチバチと音を立てる雷を纏いながら、イオリが乗っているライドフアングが飛び出し、ウサギの魔物に飛びかかり、3秒程で殲滅してしまった。

「は、ちよ、え？」

降りて戦おうとしていたリユートさんは、口をポカンと開け固まっ

ている。

「よしよし、食べてていいよ。日も暮れてきたし、今日はここで野宿しない?」

「んな唐突な……まあいいけどさ。消化不良な分はこころ辺の魔物の狩ればいいか……。うん、そうしようか」

私の案が採用され、この森の近くで野宿することになった。リュートさんの顔が、もう諦めていたのには触れないでおこう。

◇

幾らしばらく野生生活をしていたせいで慣れているとはいっても、元現代っ子現幼女になっている私は、提案しておきながらあまり野宿は好きではない。

最近は《状態異常耐性》のお陰であまり気にすることはなくなったけど、変な病気になったりしたら困るし、地面とか本当に寝づらいし。それに……

(う〜ん。やっぱりこの汗臭さは許せない……)

そう思い、異次元収納から小屋を取り出し、中に入り内側から門をかける。そして、大きめの窪みに水を溜め炎で加熱していき、天井には、自前の聖光魔法で光を灯す。

何をしようとしているかというと、つまりは風呂だ。水を出す以外は全て自分の魔法で行っているので、風呂に入れる上に魔力も鍛えられ一石二鳥だ。あ、この小屋はオークの事件の前に森に籠ってた頃に作ったやつね。

「私も随分この身体に慣れたよなあ……」

そんなことを呟きながら、私は服を脱ぎ捨て、据え置き石鹸などを手に取り、身体を洗い始めた。

風呂? に浸かりながら、光球をいじって遊んでいると、小屋の外から声が聞こえてきた。

「なにこの小屋……もしかしてイオリさん? 何してるの?」

リュートに見つかってしまった。これは面倒くさいことになるかも知れない。

「そうですよ、べつになんでもないよ」

「何でもないことないよね!? ちゃんとした獣人の嗅覚舐めないでね? 明らかに石鹸の匂いがしてるからね!」

「はあ!? な、なななに嗅いでんの!」

私は顔を赤くしながら、急いで風魔法で辺りの空気を散らした。

「一人だけ風呂なんてズルイよ! 僕にも入らせて欲しいんだけど?」

「い、いくら私が幼女だからって……あ、そうか! ロリコンだった……や、ヤダよ?」

私は湯船から上がり、そそくさと取り出したタオルで身体を拭き始める。そしてドライヤー(仮)の魔法で並行して髪も乾かし始める。

「だ、誰が入るかっ!!」

「称号にロリコンってついてる癖に」

「うっ、そ、それは……」

ドアを開ける手間も惜しく、服を着た後直接異次元収納に小屋をしまい、リユートを睨みつける。

顔が真っ赤になり涙目になってしまっている。どうも最近精神年齢が退行している気がしてならない。

「この変態! ロリコン! 匂いフェチ!」

「な! 最後のは違うよ!」

「それ以外は認めてるじゃん!」

うう〜とお互い睨み合っていると、そこにレーナさんが戻ってきた。

「全く、私がない間に何やってるの? お互い謝って。ね?」

「ごめん。でも匂い嗅いでくるのは悪い」

「それは……うん、ごめん」

逆らったらダメな気配を向けてくるレーナさんのお陰で、一応仲直りは成功するのであった。

「じゃあ僕も風呂入っていい?」

「べつにいいけど、最低でも生活魔法が使えないと無理だよ?」

「」

第2話 事情を話そう

レーナさんが風呂から上がり、あれ？ 私って魔法に頼りすぎてない？ と思いつつも、魔法を使い料理をしていると、レーナさんが声をかけてきた。

「そういえば、何でさつきは誘ったのに一緒にお風呂入ってくれなかったの？」

その言葉を聞き、鍋を熱していた炎がぐらつく。うぐ、さつきまでもに答えてればよかった。

「えーあく……うん。ここらで言っちゃった方が楽か……。食べてるときに話すよ」

「約束だからね！」

そう言って私達は料理を再開した。まあ、約束もしちゃってるし仕方ないか。

「で、話って何なの？ イオリさん」

「えっと、私がこっちに来た経緯と言うか……まあそういう感じのを話しちやおうと思ってる。前レーナさんと約束したしね」

「まあ、ありがたいけど。いきなりどうして？」

「ほら、さつきレーナさんと風呂に入らなかつのに、かなり関係してるからだよ……」

リユートがもしやという顔をする。ええそうですよ、多分そっちが考えてる事はあつてますよ。

「まあ詳しい経緯は言いたくないから省くけど、元々私は男だったんだよ。15歳の。まあ、その表情ならリユートさんには少しくらいは予想出来てたんじゃない？」

「え？ えっ？ そうなんですか？ リユート君」

レーナさんが目を白黒させながらリユートに聞く。そりゃあこの世界の人からすれば信じられないだろうなあ。

「二応は……ね。向こうじゃTS物なんて腐るほどあつたし。その割には家事が万能だったり、今の姿に嫌悪感とかもなさそうだけど、そ

れはどうして？」

「うっ……男の娘って言われるような人だったからね……あっちじゃ。しかも色々な機会でそういう格好させられてたし」

「ああ……うん、なるほど。キャラ濃すぎない？」

「そりやあそうは思ってるよ。地球じや家事万能な男の娘で、こつちじや銀髪碧眼な口りなんだから……今は獣人もか。」

「男の子？」

「ああ、こつちじや伝わらないか。レーナが思ってるのはちよつと違って、僕とイオリさんが言ってる男の娘っていうのは、男だけ女の子みたいなのことだよ」

「へっ……なんでそんな格好してたの？」

「レーナさんが私にそんな事を聞いてくる。自分から言っただしね、きちんと答えますか。」

「いや、格好自体は男物なんだよ？　けど、髪を伸ばしたままにしてたら切るのが勿体無いつて言われてね……放置してた」

「あははくと、私は笑う。私服の男物は死ぬ程似合ってなくて、よく女装させられてたなんて事は言えない。」

「ま、今の私は男だった記憶を持つてる幼女程度だから、あんまり気にしないでほしいな。つて言いたいけど、どう？　気持ち悪いとか思ってた？」

「リユートさんはいいとして、レーナさんには気持ち悪いとか思われていたらかなりショックだ。家出的な事をしてしまいそうなくらい。」「えつと、まだよく分からないけど、とりあえずイオリちゃんはイオリちゃん……なんだよね？　それなら、気にはしないよ？」

「よかったあ……」

◇ 私 は 心 の 底 から 安堵 した 。

「イオリさん、さつきからなんか赤い球を持つてるけど……なに？」

「目的地である【獣王国・シヤルフ】に向けてライドファンングを走らせている最中、リユートが話しかけてきた。」

「これ？　オリハルコンティライノの右眼」

「はっ!?」

リユート達がライドファンングごとを一気に遠ざかる。

「な、何でそんな物持つてるのさ!」

「いや、あの時睨まれたら麻痺したじゃん? やっぱり魔眼とかそういうテンプレなのかなって思ってたね。超解析をずっとかけてるんだよ」

「魔眼ね……話には聞いたことあるけど……」

そんなことをリユートが口走った時、私の目の前に解析の情報が現れた。

|||||

神鉄竜の魔眼

(状態・未使用)

オリハルコンティラノの魔眼。使用すると、相手に高確率で麻痺効果。その眼に見られた者は蛇に睨まれたカエルの如く……

スキル《蛇の眼》

|||||

「おおー、魔眼であつてたよ!」

「え? 嘘! 見せて見せて!」

そう言つてリユートが近寄ってきた時、空から黒い影が襲いかかり眼を攫つていった!

「はあ!? あれ?」

「んく……あれは確か《ソニッククロウ》だったかな? 取り返さないでいいの?」

「はっ、そうだった。逃がすか! 《ライトニングショット》」

私の人差し指から一条の稲妻が迸り、黒い影を捉えた。音速が光速に勝てるか!

上を見上げると、魔眼を持ったまま焼け焦げた《ソニッククロウ》が落下してきている。

「つとつと」

傷める事がないように、風魔法を使い減速させながら下ろしていく。とりあえず異次元収納にしまったところで、リユートさん達が寄ってくる。

「ん？ どしたの？」

レーナさんが何やら歯がゆそうな顔をしている。なんだろう？

「今のイオリちゃんとか、リユートくんの戦いを見てると思うんだ。私って足手まといなんじゃないかなって……」

レーナさんの顔からは、思いつめた様子が見て取れる。

「だったら、レベル上げたりすればいいんじゃない？」

「え？」

まるで分からないと言うように首を傾げているレーナさんに、さらに言っていく。いや、この世界だったらさ……

「だってこの世界には、レベルとかスキルっていうちゃんとした強さの基準があるじゃん。それが離れてる分違いは色々あるよ」

まあ私は死にかけるような目に何回かあってるから、普通より強いのもかもしれないけど。なんて事を思いながら、リユートさんに何かいいなよという意味を込めて目を向ける。

「レーナだってちゃんとした獣人なんだから、イオリさんみたいなエセ獣人と違って潜在能力は凄いなだよ？」

「……うん」

「そんなに急ぐ必要はないよ。僕達も教えられる事は教えるしね」

「ほ、ほんと？」

レーナの顔がパアツと明るくなる。それを見た私もリユートも満足気に頷く。リユートさんから話を聞いた時から、レーナさんが魔法を使えないのが不思議でならなかったんだよね。

「んじゃあ私は魔法を教えますー！」

「じゃあ僕は剣術かな？ 《精霊術》は師匠に頼めば……引き受けてくれるかもしれない」

顎に手を当てて悩む素振りをしているリユートさんに、レーナがぎゅっと抱きつく。乗り方を考えると仕方ないけど、私から見ると二人はもう恋人にしか見えない。

「爆発すればいい」

そんな風に私は眩き、一行のライドファンクは走り出した。

本当に爆発させようしていた？ ソンナコトスルワケナイジヤナイデスカー

第3話 ドラゴン（テイラノ）ステーキ

その日の夜

「今日はこの前戦った、オリハルコンテイラノを食べようと思いまーす！」

「おおー」

いつの間にやらこのPTの料理担当になってる私が宣言すると、拍手が起こる。ノリがいいね。

「でも、何でいきなり言い出したの？」

「昼間強くするって言った手前、何もしないのは癪でね。ドラゴンステーキって、なんか強くなりそうじゃん？」

「そんなゲームじゃないんだから……」

「それは食べてみてからののお楽しみだよ……」

そう言っただけはテイラノを取り出した。

鱗に皮などの素材に使えそうな部分を取り除き、目の前に現れたのはきめ細やかな霜降りが点在した見事な赤身だった。

鉱石ばかり食べてたのに意味がわからないがこれは……

「たしかに……」

「な、なんか凄そう……」

（とりあえず焼きますか）

そんな感想を聞きながら、ある程度の大きさに肉を切り分け、鉄板で焼いていく。結構高かった上にそんなに量もないけれど、胡椒も惜しみなく使う。

勿論包丁は私が作ったやつで、斬れ味抜群だ。

「美味しそう……」

鉄板の上でジューツと音を鳴らす肉を見て、レーナがそう呟いた。

持っている素材でどうにかやりくりして、あんまり同じ料理にならないように色々頑張っているせいでかなり疲れてきている私にも、この単純な料理はヤバかった。ステーキなんてファミレスでしか食べた事はなかったけれど、なんだろう、一目でレベルが違うことがわかった。

そして焼き終わり、各自の座る場所の前に置かれた肉は、程よく焼き目が付いておりとても美味しそうな匂いを放っており、トッピングには、野菜各種や薬味……あとは今日の魔眼（調理済み）を自分のだけには置いてある。溜め込んでいる食料を大放出だ。

「いただきます」

それだけを言うと、三人は一気にそれを口に運んだ。

一噛みすれば、旨味といふかなんというか、肉のすべてが凝縮されたような味が口の中全体に広がり、それは私達の喉を通り抜ける。その時私、の頭の中に音が響く。

——スキル 予見・超隠蔽 のレベルが最大になりました——

——スキル 衝撃耐性 が 物理耐性 に成長しました——

——条件を満たしました。スキル 超解析・超隠蔽・鷹の眼・未来予測 を統合し、EXスキル 情報の魔眼 へ進化させます——

……………

などの情報が一気に頭の中に流れ、頭をブン殴られたような衝撃が走る。く、自分のにだけあの焼けた魔眼を添えたのがいけなかったのか!?

「あばばばばば……」

料理を作った人としてこれはまずいと思い二人を見ると、こちらが驚く反応をしていた。

リユートは何が明鏡止水なスーパーモードな感じになっており、本命のレーナさんは黒い揺らめくオーラのような物が噴き出していた。

（光と闇が合わさると、最強に見える……る）

私はその言葉を心の中で呟くと同時に、ぱったりと気を失った。

◇

「ん……んう？」

目を開けて周囲を確認する。リユートさん、レーナさんは机に突っ伏して寝息を立てていた。とりあえず、無事なようだ。

「なんか……ヤバイ量のメッセージが来てたような……」

そう言って何気なくステータスを見て、私は自分の眼を疑った。

イオリ・キリノ

種族 人族(偽・銀狼族)

性別 幼女

年齢 7

職業 ヘーパイストス・ドヴェルグ(空き1)

LV 56

HP 768/782 +600

MP 1702/1702 +600

STR 525

DEF 485

AGL 432

DEX 5750

MIND 487

INT 1088

LUK 55

《武技》アルジエントスラッシュ

《スキル》

職業

ヘーパイストス LV 74 ドヴェルグ LV 59

(空き1)

EX

家事万能

無詠唱

情報の魔眼【超解析・超隠蔽・未来予測・視界倍率変更・千里眼】
通常

異次元収納 LV 8 別腹LV 6 並列思考 LV 3

3

情報処理 LV 3 思考加速 LV 3 HP自動回

復 LV 1

MP自動回復 LV 1

戦鎚術 L V 1 4 二刀流 L V 1 2 大鎌術 L V 1 9

気配操作 L V 2 身体能力強化・改 L V 1 9

暗殺術 L V 9

痛覚大耐性 L V 4 物理耐性 L V 1 状態異常耐性

L V 4 魔法耐性 L V 5 精神攻撃耐性 L V 3

爆炎魔法 L V 1 4 鉱石魔法 L V 1 5 旋風魔

法 L V 1 3

聖光魔法 L V 1 1 迅雷魔法 L V 1

生活魔法 L V |

《称号》

NEW!!

魔眼の行使者・オッドアイ

「うっそ、食べ物一つでここまで強くなるって……トリコじやあるまいし……」

もしかしたら、グルメ細胞とかあったりして。

なんてことを呟きながら片付けというか後始末をしていると、リユートが起き上がってきた。

「頭がガンガンする……」

「大丈夫？ リユートさん」

「うん、一応……って、え？」

リユートさんが私の顔を見てとても驚いたような顔をする。そしてなんのことか分からず首を傾げる私の左眼を指差す。

「その、イオリさん。左眼がなんか真っ赤に染まってるけど、何があったの？」

「なんかいろんなスキルが混ざって魔眼になっちゃいました！ テヘ☆多分リユートさんも色々変わってると思うよ？」

それっぽく、ウインク+横ピースをしながら言ってみる。

オッドアイって書いてあったから色が変わってるのは知ってたけ

ど、真つ赤ねえ……。銀髪、ロリ、紅蒼オツドアイ、鍛冶師（自分で言つてて違う気がする）、巨大武器……。ドンドンキャラとしての属性が増えてきてる気がする。

「え？ 本当だ。ステータスも上がってる、流石ドラゴンステータキと言うべきか……。それともこのトリコだよ！ と言うべきか……。あと、横ピース似合わないよ」

「うぐつ……。まあ、私としてはレーナさんにも効果があつたみたいだからいいんだけど」

なんか色々スキルが統合されていたみたいで心配だったが、今までと殆ど使い勝手は変わらないみたいだ。いつもの解析と隠蔽に、顕微鏡と望遠鏡が加わった感じ？ みたい。未来予測はわからない。

「まあ、イオリさんの目的？ は達成できてよかつただろうけど……。私は気絶しているレーナさんを抱っこして、移動し始める。幼女が、幼女と少女の中間くらいの女の子をお姫様抱っこ……。非常にシユールな光景だ。

「まあ、とりあえず今日はお開きつて事でいいかな？ イオリさん」「レーナさんがこうなっちゃった以上、そうするしかないでしょ」

またこんな機会があればいいなあ、と思いながら今日は終わっていった。

第4話 ギムレー

ザーツ

「ねえリユートさん！ 次の街って何時になつたら着くの!？」

「大丈夫！ もうすぐの筈だよ！」

ドラゴンステーク事件から数日、バケツをひっくり返したような雨とは正にこの事だろう……そう思える程の土砂降りの雨の中を、私達は移動していた。大声なのはそのせいだ。

因みに全員カッパのような物を着ている。傘っぽい物も作つてみたのだが、今はカッパの方が雨を防いでくれるので傘は仕舞つてある。

コホン。それで、次の目的地の街「ギムレー」では一泊する予定なので確実に雨風にさらされながら移動なんて事にはならないので、私はそんな事を聞いてみた。

「で！ 「ギムレー」ってどんな街なんだっけ!？」

「シャルフに一番近い街で、『栗鼠族』の人達の街だね！」

「え、今乗ってるのって、曲がりなりにも狼だよね!？ 私も銀狼族な件!？」

普通に考えるとダメな気がする。狼と栗鼠って……捕食者と餌つて感じがするし。栗鼠は美味しいけど、栗鼠族の人は食べたりしないよ? 人だもん。

「まあ、流石にライドフアングは入れないよ！ だから街の外に止めることになるね！ イオリさんはまあ……その幼女だし」

「ちくしょう、言うようになったなこのお」

そんなことを言い合いながらも、新しい街に私はとてもワクワクしていた。色々と調達したい物もあるしね。

雨の中しばらく進んでいると、道が舗装されたものになつていき、その奥には城門のようなものが見えてきた。

「あれが『栗鼠人』の人達が住む街、『ギムレー』だよ！」

それは城門の中に大きな木々が並び立っている不思議な街だった。

街の外にライドフアングを繋げ、街に入ろうとすると衛兵に呼び止められたけど、ギルドカードを見せたらすんなり通ることができた。便利な物だね。私の種族？ 特に聞かれなかったよ。

「ここが【栗鼠族】の街ねえ……。うん、小さい人が多い！」

「イオリさんが言えたことじゃないよね？」

「イオリちゃんの方が小さいし」

「うぐっ」

街に入ると、尻尾の大きい【栗鼠人】と思しき人がわんさかいた。その誰もが小柄で、力が弱そうに見える。……。私よりは背が高いけど。みんな大きな葉っぱを持つてる。フアンタジー傘だね。

「まあ見ての通り小柄な人が殆どで、力もあんまり強くないけど、銀狼族と同じで魔法が得意な種族でね、たしか【風魔法】と【木魔法】だったかな？」

【木魔法】……たしか基本的に補助がメインの魔法で、植物の力を借りて使うって書いてあった筈。うん、使えたら楽しそう！

「へえー！ 魔法書とかがつってうってるかな？」

「探せばあるんじゃない？ 凄く高いか凄く安いかどうかだろうけど」

それじゃあ、と言ってリユート達と一旦別れる。うん、ツリーハウスっぽい建物がほとんどだね。

（うくん、みんな童顔。一部の人達には天国だね、確実に）

そう思いながら街を散策していると、魔法書売っている店を見つけたので、買い物をするついでに話を聞いてみる。

「おとなの人もこどもの顔をしてるけどなんで？ おばあちゃん」

「おや、知らないのかい？ 【栗鼠族】って言うのはね、みんな背が低いんだよ。なんで儂の事は分かったんだい？」

「《解析》のスキルをもってますから」

「なるほどねえ。でも、初めて会った人に《解析》をかけるのは余り良くないよ」

「つぎから気をつけます」

わざと舌足らずな感じで話しかけてみたけど、思いの外簡単に話を聞くことができた。こういう時は、この幼女なほでいに感謝だね。

「まあそれは置いておくとして、お買い上げ有難うね」

「はい、ありがとうございます」

そう言って私は合流場所のギルドへと向かった。魔法書は「木魔法」と「水魔法」を買うことができホクホクだ。反対にお財布は寂しくなったけど。

◇

「リユートさん、事案でも起こした？」

「誰がそんな事するか!!」

ギルドに辿り着くと、顔に真つ赤な紅葉マークの付いたリユートさんと、プンプンと怒った様子のレーナさんが待っていた。

そう、この街は俗な言い方をするならロリシヨタ天国。そんな所でロリコンなんて称号を持つてる人がそんな状態、しかも隣には彼女(未来系)が立っている。まずはそれを疑うよね。

「じゃあ何したの？ ラツキースケベ？ レーナさんを押し倒しちゃったり？」

「ぐっ………なんでそんなにイオリさんの勘は当たるのさ」

「分かんない!」

今だってよくある(2次元で)感じの事を言っただけだったのだが、普通に当たってしまったようだ。マズイね……これが小説なら、リユートさんのオリ主説が濃厚になってきたぞ。

「それで、なんでギルドなんて集合場所にしたの？ 宿でもよかったんじゃない？」

「また急に話を変えて……まあいいや。色々と勿体ないからイオリさんとパーティーを組んでおきたいのと、オリハルコンティラノの討伐報告だね」

あーうん。お金も経験値も大切だもんね。 特にお金。

因みに私とリユートさんがこんな会話をしている間、レーナさんが終始無言だった。まあ、私かもしリユートさんとラブコメ展開になったら確実にそうなるのは分かる。

ハーレムのロリ枠になんてなってやるものか!!!

第5話 ギルドにて

こんにちわー。イオリです。今はリユートの言った通りギルドにきていまーす。なんかこの前見たく、経験値がゲットできないのが勿体無いからパーティー登録をしておきたいらしい。

最初は見慣れない三人組ということできさやかな注意を引いたが、この世界に来たばかりの頃のモーブのような輩が絡んでくることはなかったもので、これ幸いと三人はカウンターに向かいます。

「冒険者ギルド、ギムレー支部にようこそ。ご用件は何かしら？」

そう言っただけ対応したのは、リフィンでお世話になったラナさんとは違って恰幅のいいおばちゃんだった。解せぬ。むー……ギルド嬢って大体美少女とかだと思ってたのに……もしくはおっさん。

「素材の買取です。後ろの二人は二次職、三次職に就きに。あとパーティー申請もです」

「一気にきたねえ……最初は転職からでいいかい？」

この質問には私が答える。一番素材も溜め込んでるしね。GとかGとかGとか虫系の魔物とか。

「あ、はい。大丈夫です！ 素材は量が多いので転職部屋で合わせて買取って頂いてもいいですか？」

「勿論大丈夫だよ。それじゃあ行こうか」

早速転職部屋で水晶に手を置くと、ズラツと並んでいた職業欄の下に、新しく付けられるジョブが増えていた。

『発破師』『バーサーカー』『付加術師』『魔法戦士』『魔導研究者』『錬金術師』

(うーん……今回は伝説っぽいのはないか……うん、なら錬金術師かな)

バーサーカーは選んだら狂化しそうだし、発破師はなんか嫌だ。魔法戦士じゃなんかありふれた感じになりそうだから無しとして、残るのは付加術師と魔導研究者、錬金術師。その中なら、うーん……一番ロマンが有るのは錬金術師だよね!!

そう思い『錬金術師』を念じて、レーナさんに場所を譲るために後

ろに下がる。ステータスを見るとDEX、INT、MPが上昇し、《魔力操作》のスキルが増えていた。錬金術は多分デフォルトっぽい、さつきまでと違ってなんとなく使い方が分かるし。

「それじゃあレーナさん、交代ね」

「はい」

そう言っただけで交代したレーナさんが水晶に手を置き、悩み始める。あの悩んでる表情からして、しばらく時間がかかりそうだ。

そこで暇になった私は、ここで魔法陣を出すわけにはいかないの
で、木の魔法書を読み始めるが……全く解らない。どれくらい分らないかというところ、全部ドイツ語で書かれた本くらい。あの時は、本当に辞書にお世話に……

それは置いておいて
閑話休題

こんな魔法言語（仮）に辞書なんて存在しないので……解析しろ魔眼！

——スキル《大樹魔法》を習得しました——

そんなアナウンスト共に、テイラノステーク事件の時程ではないが、大量の情報が頭に流れ込んでくる。

「ぐわあ、頭がああああ」

「イオリさん……何やってるの？」

「な、なんでもない。そ、それよりもレーナさん、なんの職業に就いたの？」

『料理人』にしました！　いつまでもイオリちゃん料理させる訳にはいきませんから！

へえ、料理人なんてあつたんだ。えつと……

レーナ・アークライト

種族 獣人（黒猫族）

性別 幼……女？

年齢 15

職業 侍・料理人

LV 30
HP 458 / 458
MP 291 / 291

STR 176

DEF 129

AGL 271

DEX 134

MIND 113

INT 293

LUK 41

《スキル》

職業スキル

侍 LV 30 料理人 LV 1

EXスキル

獣化 一刀両断 魔法の才

通常スキル

心眼 LV 1 先の先 LV 1

戦刀術 LV 3 集中 LV 9 居合術 LV 6

五感超化 LV 7 攻撃力強化 LV 1

衝撃耐性 LV 1 精神攻撃耐性 LV 1

生活魔法 LV

《称号》

NEW!!

魔法使いの卵・見習い料理人

ラッキースケベな事があつたとは言っても好きな人は好きな人だろうし、私がいなくても好きな人には美味しい料理出したいだろうしね。

「それじゃあ次は素材の買取でいいかな？」

「はい、お願いします」

おばちゃんが何事もなかったように話を続けた。凄え、この人凄えよ。

私は異次元収納から、リユートさんも王の財宝から大量の素材を次々と出していく。そして最後にオリハルコンテイラノ（討伐部位とかいう牙）を引っ張り出した時、おばちゃんが驚愕の表情をする。

「こいつは……ユニークモンスターのじゃないかい!」

恐る恐る手に取り、隅から隅まで丹念に確かめる。そして考えがまとまったのか、ようやく顔上げたおばちゃんは、キツとリユートを睨む。

「小さい子を囿に使った上に、荷物まで持たせてるとは、感心しないねえ……」

どうやらおばちゃんの中では、リユートさん＝悪という図式が出来上がったようだ。

うーん……それなら私は、荷物持ちをさせられてる上に、格上の魔物への囿の少……幼女って事か。首輪っぽいのを付ければ、信憑性が増すね!

そんなくだらない事を考えていると、リユートさんがおばちゃんにツツコミを入れる。

「いえ、囿にされたのはどっちかっていうと僕ですから」

「え?」
おばちゃんの表情が固まる。あ、私の中だと歳は、おばあちゃんく おばちゃんな感じね。

どっちかっていうと私は、おばあちゃんな感じの人が好きかな。
「それ倒したの殆んどイオリさん1人ですし」

「え?」
こつちを見たので、一応うんうんと頷く。

リユートさんがオリハルコンテイラノの戦いでやったのって、若干の攻撃と私を助けてくれた時の囿、他には水ダバーと結界くらいだったかな? 最後には尻尾のなぎ払いで吹っ飛ばされて……あれ?

沢山助けては貰ったけど、主に攻撃してHP減らしてたのって私

じゃん。

その後は、おばちゃんが多少私に信じられない眼を向けてきていたけど、お金も受け取りパーティーも組むことができ、問題なく進むのであった。

明日、「シヤルフ」につければいいなあ。

第6話 獣王国・シャルフ

私達は「ギムレー」で一泊した後、予定通り「獣王国・シャルフ」へと向かった。

「ねーリユートさーん。シャルフまで後どれくらいー?」

「えーと、あの大きな木……まあ世界樹・ユグドラシルって言うんだけど。あの真下がシャルフだよ。だから、あと数十分ってところかな?」

「ありー」

リユートさんが指差す先には、先程から見えていた巨大な木がある。ふと、左眼の魔眼に千里眼のスキルがあつたのを思い出したので、使ってみる。

ん……んんん? おお!?

「見えた!」

「水の一雫?」

「違うわ! シャルフだよ!」

いつぞやの「リフン」の色々な建物混じっていた街とは違い、全て木造建築のように見える。瓦に当たる部分も木製に見える……不思議だ。それに川も流れていることが見え、自然をととても大切にしている感じがする。

「へえー。それも魔眼?」

「そうそう。凄い綺麗な街だね」

「やっぱりそう思う? 現代のコンクリートジャングルばかり見慣れてるとね……」

そうリユートさんが言い、その後ユグドラシルの説明を始めた。その内容をザッと纏めるとこんな感じだ。

- ・ユグドラシルは意思を持っています、貶すと養分にされます。
- ・人や魔族の状態で触ると、怒りを買って養分にされます。
- ・ただし、基本的には温厚? な性格で、獣王国を守ってくれています。

その後の殆ど関係の無い愚痴を聞き流しながら、魔力操作の練習を

始める。うん、正直面倒だから違う事に逃げた。

魔力は私のイメージだと、理科の実験とかで作ったスライムだ。これを色々な感じで動かすのだが……これが予想以上に難しい。なんて言えばいいんだろう、指の第一関節だけを動かすような感じだろうか？ どこぞのケイネスさんの銀色のアレをイメージすればいいのかな？

そんな事を《並列思考》で試しながら、私はさらに水の魔導書を読み始める。

——変装道具・銀狼族タイプの隠しスキルが発動します——

——水・氷属性適正極大化が発動しました——

そんなメツセージが頭の中に流れ、私は魔導書を読み進めていく。（木魔法の時とは、比べ物にならないほどよく分かる……凄いな、これ）

感覚的には、木魔法の魔導書をオールドイツ語の小説と言ったが、水魔法の魔導書はひらがなカタカナのみで書かれた小説みたいな感じだ。

——スキル《水魔法》を習得しました——

——変装道具・銀狼族タイプの隠しスキルが発動します——

——スキル《水魔法》がスキル《蒼海魔法》へと進化しました——
お、おう。マジですごいなこのチョーカー型変装道具。これを売ってくれたシイラさんに感謝だけど……なんでこれが売れ残ってたんだろ？

そんなことを考えながら走っていると次第に城門が近づいてきた。

「あれが、シャルフの城門？」

「そうだよ。あれが【獣王国・シャルフ】の入り口だよ」

◇

街に入ると様々な獣人が溢れていた。その中には私と同じ銀狼族もいる……ように見える。初対面の人に《解析》は使っちゃダメって言われたしね！

「ほへー……」

「イオリさん、見とれてないで行くよ」

そう言つて手を引かれる。これ、見ようによつちや完全に親子な感じだよなあ……身長的に。

「そういえばその会いに行くつて人、前に言つてた師匠？ それとも違う人？」

「まあ、違う人の方だね。一年は会つてないから、お菓子持つて機嫌を取らないと何されるやら……」

リユートさんは若干嫌そうに言っているけど、何か懐かしい物を出すような目をしている。うーん、婚約者とかじゃないだろうし……まあ、会えばわかるか。

「そういえば何処に向かつて歩いてるの？ さつきから」
「あれだよ」

そう言つてリユートが指差す先には、何というか……木製の城から枝と葉っぱが生えているとしか言いようのない、奇妙な造形の建物があつた。

「見てわかる通り王城。因みに、ウッドメタルっていう木の手触りする金属で出来てるんだよ？」

「へえ……その金属プリーズ！」

「そこら辺の鍛冶屋さんにも行つてきたら？ 多分売つてるよ」
「あー……じゃあ、その用事が終わつたら買いにくるかな」

何てことを話している内に、王城が段々と近づいていき何か問題に巻き込まれることもなく到着した。王城の入り口には兵士らしき人物が二人立っている。おそらく門番だろう。

「すみません」

リユートさんがその声を掛けると、二人の門番が手に持った槍を構え、彼を鋭い目つきで見つめた。どういうわけか若干緩んだが、その後最初の厳しい視線が私達に向く。

「失礼ですがリユートさん。そのお二方は？」

「こつちの黒猫族の子は僕の彼女で、銀狼族の子は人間界からの帰りに拾つた身寄りの無い子です」

急にそんなことを言われたレーナさんは、顔を赤くして口をパクパクしている。まあ、私はそうするのが無難だろうね。ていうか敬語つ

第7話 修羅の巷

ど、どうも、イオリです。気絶しているリユートさんに、未だに馬乗りになつてる黒髪の女の子と、レーナさんが目の前でバチバチ火花を散らしています。虎と般若がそれぞれの背後に見えるのは、見間違いだよね？ そうだと言つてよバーニイ！

「あなたは、何者なんですか？」

そんな緊迫感溢れる雰囲気を破つたのは、レーナさんだった。二人の間には、オリハルコンティライノが可愛く見える程の殺気というか嫉妬というか……そんな雰囲気の流れている。

ど、どうしよう。ネタをかますのも、話をなあなあにする事も出来そうに無い……

「私はお兄ちゃんの妹だよ。そういうあなたは、お兄ちゃんのなんなの？」

「私は、リユートくんの彼女です!!」

頬を染めてレーナさんが、そんな地雷としか言いようの無いことを宣言した。そんな私の予想通り地雷を踏み抜いたようで、場に溢れる雰囲気が一層濃くなった。

あ、ああ……どうしよう、今まで何回も死にかけるような怖い目に遭つてきても漏れそうになる事なんてなかったけど、ここはヤバイ……駄目だ。

(だ、誰かこの場を収められる人は!?)

へたり込んだまま、私は周りを見渡してそんな救世主が居ないか探す。さっきの門番さん達は……駄目か、見て見ぬ振りしてる。周りには誰も人は居ないし、いつそ私が泣く？ いや、今の二人が止まるくらいの大泣きとかしたら、私が精神的に耐えられない。

そんな風に私が考え事を巡らせていると、左眼の視界に火花を散らす二人の間に赤い線が見え、頭にメッセージが流れた。

|| || || 《巻き添え／威力 逃亡推奨／範囲 逃亡推奨／脅威度 逃亡推奨》 || || ||

多分これが分からなかった《未来視》のスキルなんだろうけど、初

の発動がこれって……。ん、魔眼？

「そ、そうだよ。こういうのは本人しか止められる訳ないじゃん……」
そう震え声で呟き、藁にもすがる思いでリユートさんに解析を使う。……こいつ、状態異常の欄に気絶が付いてない。狸寝入りしてやる。そうとなれば話は早い！

「りゅ、リユートさん!! ヒツ、寝たふりなんてしないで起きて説明して!!」

私がリユートさんの名前を呼んだ瞬間、自称妹さんの殺気がこちらに向かつてきたが、言いたいことは言えた。ち、チビってなんてないよ？

「起きてたんですね、リユートくん」

「起きてたなら言つてよね、お兄ちゃん？」

ビクンツと、二人のその言葉を受け、はつきり分かるくらいリユートさんが反応する。冷や汗がダラダラと流れてる。

私はやりきった！ やりきったぞ!!

◇

「れ、レーナ。アンナは正真正銘僕の妹だよ、親族だからね？ やましい事は何もないよ？」

「怪しいです……」

レーナが、僕にそう言つて疑いの目を向けてくる。ああ、どうも。僕です、リユートです。あんなヤバイ雰囲気は僕は入り込めない、そう思い気絶したふり（最初は本当に気絶してたよ？）をしていたのに、イオリさんの一言のせいで逆に修羅場に巻き込まれる事になっちゃってます。心なしか雰囲気は柔らかくなっているけど。

小さい頃、一緒に風呂に入っていたのは流石に含まれないよね？

「それよりもお兄ちゃん、そのレーナつて人のこと。それにさっきの小さな女の子のこと、詳しく聞かせて欲しいな？ 約束、覚えてるよね？」

因みに約束というのは、本当に好きな人ができたりしたら一緒に帰ってきて報告するっていうやつだ。昔から僕は『好きな人は1人で

十分!』と言ってきたせいである約束なのだが、そんな約束をした昔の僕を、今だけはブン殴ってやりたい。

「も、勿論だよアンナ。ほら、ここで立ち止まってるのもなんだし、ゆっくりお茶でも飲みながら話さない? かりんとう、好きだったでしょ?。」

「そんなこと言って、私をいいように誤魔化すつもりでしょ。そうはいかないんだからね!」

「うっ……」

喉の奥からそんな声が思わず漏れる。この手はもう通じないか。ふう……腹をくくろう。というか、僕の妹はいつからこんなになっただろう?

「レーナは、今の僕の彼女だよ。僕が転生者って事も知ってるし、それでもお互い好きでつきあってます!」

「ふーん……」

そうつまらなそうな言葉を溢したアンナは、レーナのことを絶対零度の目で見つめる。消えかけていた言い知れない緊張感が再び場を包むが、レーナはそれに真正面から対峙している。

「まあ、いいんじゃないの? 一步も引かなかったし」

そうアンナが言うとともに、謎の雰囲気は霧散した。安堵する僕の前には、レーナの猫耳がピョコピョコと動いているのが見える。うん、可愛い、癒される。

「それで、さっきの銀髪の小さな子は……あれ?」

「イオリさんは……って、え?」

先程までは2人からの圧迫感が凄く周りを見渡す余裕がなかったので分からなかったが、いつの間にかイオリさんの姿が消えていた。が、よくよく見ると一枚の紙が置いてあった。文鎮のような金属で、風に飛ばされないようになってる。近寄って見てみると、何やら日本語で文字が書いてある。

|||||

||

こ、こんな修羅場の中にいられるか!

お城の中を探検してきます。リユートさん達に迷惑はかけないの
で、探さないで。ほんと、さがさないで。by イオリ

||

全体的に文字が震えていた。泣きそうな顔で震えてたし、仕方がな
いの……かな？

パーティーメンバーと転生者のよしみで、地面の黒い染みは見な
かった事しておく。

第8話 幼女2人

リユート達が手紙を発見して読んでいる頃、イオリは先程とは違う服装で城内を歩いていた。そして、後ろの方には門番の片方が付いてきている。1人で動き出したイオリの見張り兼見守り役だ。

「ぐすつ、もうやだあ……いっしょうものの恥だよお……」

そんな風に半泣きでトボトボ歩いている私と、後ろからそれを見守っている門番の人。時々通りかかる人は、私を微笑ましい目で見てくる。さつき通りがかりの人に頭を撫でられて、不覚にも安心してちゃったのはこんな精神状態だからと信じたい。

因みに、服は先程まで着ていた青いワンピースから若草色のワンピースに変わっている。まあ、うん、着替えたからね。周りを土壁で囲ってから。

そんな事を考えながら行く当てもなく彷徨っていると、太い木の枝のように城から飛び出している場所に出た。

そこは、足元葉っぱ小さな枝々と葉っぱ（解析結果ではオールウツドメタル）で出来ており、所々に木陰のある空中庭園のような場所だった。モンシロチョウみたいなの蝶も飛んでいるそこは……

「綺麗、だなあ……」

元々花の世話とかが好きだった私は、見えた花壇のような場所にフラフラと誘われていった。荒んだ今の私の心には最適な場所だね、ここは。

◇

「あなたはだれ？」

トオオトオオオオオ！　じゃなくて、花壇の前に座り込み色々な花とそこに舞う蝶を観察していた私の肩が、不意に誰かに叩かれた。声からすると、多分女の子だと思っけど……

そう思い振り返ると、短い白髪に赤い眼をした私と同じくらいの女の子が立っていた。大きめの板を小脇に抱え、右手には筆のような物を持っている。絵でも描きに来たのかな？

「邪魔しちゃってたね、ごめんなさい。私の名前はイオリ、今このお城

に来てる人のパーティーメンバーだよ。あなたは?」

「イオリちゃんって言うんだ! 私はミーニャって言うんだ! 宜しくね!」

「うん、よろしく!」

そんな風に元気よく挨拶を返す。

あ、思い出した。白髪赤眼って、アルビノってやつじゃない? それだと日光が……なるほど、だからここは日陰が多いのか。そしてその高いテンションと一緒に動いているミーニャちゃんの耳と尻尾は、なんだろう、簡単に言って凄く可愛いと思った。

私はレズウじゃない筈……いや、精神的には男だから……あれ?

そんな考えが頭をグルグルと回っていた私に、ミーニャちゃんが声をかけてきた。

「イオリちゃんは、お花好きなの?」

「うん! 綺麗だし、いい匂いがするし!」

一応もう一回言っておくけど、これは私が転生する前からの趣味なんだよね。この身体になってから、前よりは興味が向くようになったのは否定できないけど。

「そうなんだ! じゃあ、一緒にお絵描きでもする? 楽しいよ?」

あ、でも筆が……どうしよう?」

途中までの明るい表情から一転、残念そうな顔に変わってしまう。

《異次元収納》の中には、紙くらいしか入ってないし……そうだ!

「ミーニャちゃん、ちよつと待っててね!」

そう言っただけで私は魔力を練り始める。鉛筆の芯は確か黒鉛と粘土で……周りの木は適当でいいや。目を瞑り、頭に鉛筆を思い描きながら《鉱石精製》と《樹木生成》を発動させる。

次の瞬間、目を開けると手の上には多少の歪みはあるものの、紛れもなく鉛筆があつた。これが、《魔力操作》の練習成果だ!

「凄い! 今のどうやってやったの!」

「魔法、かな? さ、これで描くものも揃ったし描こう?」

「うん、そうだね!」

そう言っただけで手に持っていた紙を一枚渡してくる。私も木の板を取

り出して、ミーニヤちゃんの隣に座りもらった紙に見える風景を描いていく。最早私の中に、あの地獄のような修羅場は残っていない！

(そういえば私、絵心ってあんまり無かったような……。が、頑張ってチートDEX!!)

そんな風に若干焦りながらも、たまにはこういうふう ゆっくり過ぎずのものだなあ……。私は絵を描きながらそんなことを思うのであった。

(そういえば、この世界で同年代の子とちゃんと話したのって、何気に今が初めてだったんだなあ……)

その事に気付くと、感慨深い思いが込み上げてくる。横を向くと、楽しそうに筆を走らせているミーニヤちゃんが眼に入る。まあ、偶にはこういう風に年相応な事をして、いいよね？

そんな事を思い、私もまた多少歪んだ鉛筆で絵を描き始めた。

そしてこの頃、ずっと私を見張って……。いや、見守っていた？ 門番の人の気配が遠ざかっていった。最初は若干警戒してみたんだけど、私達が仲良く絵を描き始めた頃にはもう温かい眼を向けてきていたね。気配での判断だけ。

あ、よし！ 思ったよりかなり上手く描けてる！

第9話 強襲!!

花の前に座り鉛筆で絵を描いていた私は、ふと近くで魔力がいきなり現れて、じつとりと観察されているような気配を感じ顔を上げた。そこには、カラスのような鳥が旋回していた。

「どうしたの?」

そのことを不思議に思ったのかミーニヤが聞いてくる。

「ちよつと嫌な感じがして……なんだろうなって思つて」

そう言いながら魔眼を使い、そのカラスに向かって《超解析》をかけると、眼にこんな情報が浮かんできた。

|| || || 《式神／音速鳥／状態 魔法付加》 || || ||

|| || || 《ユニーク魔法／威力 不明／範囲 不明／視覚転送／脅威度 無し》 || || ||

「え?」

ちゃんとそれが見えたのは良いのだが……それを見た時、不覚にも固まってしまった。なにせそういう能力は、小説だと基本的には召喚された勇者などが持っているスキルだからだ。そんなものを飛ばしてくるのは、監視かそれとも……なので鎌をかけてみることにした。

私は手に持っていた紙と鉛筆（仮）を傍らに置き、魔力の見える場所に指をさし言う。

「その勇者! 貴様! 見ているなっ!」

「イオリちゃん、いきなり何言ってるの?」

そんなミーニヤちゃんの声を聞き流しながら反応を見る。私がそう言う指をさした途端カラスがポフンと消え、魔力の塊っぽい何かが残った。そして、眼に赤い線が走る。

……………ミーニヤちゃんの方に向かって。

|| || || 《ユニーク魔法／威力 不明／範囲 不明／転送・剣／脅威度 大》 || || ||

（嫌な予感の方が当たった!）

「ミーニヤちゃん、私の後ろに!」

そう言い放ち私は、異次元収納から鎌剣とBraid of ……

長いからマイク剣でいいや……を取り出し構える。それとほぼ同時に多数の武器が目の前に現れた。これが転送ってやつなんだろう、このバビロンだ！ 遠隔っぽいけど。

「きやあああつ!!」

「ちっ!」

未来予測が映す赤い線の内、私とミーニヤちゃんに当たりそうなものだけを、両手に持った鎌剣とマイク剣で叩き落としていく。

だかいかんせん数が一人で守るには多すぎ、私にチラホラとかする。1日で2つも服が駄目になりそうだ。

「緊急事態! ミーニヤちゃん、それ着けといて!」

「え、え!?!」

「早く!」

異次元収納から何時もの私の防具一式を、ミーニヤちゃんの前に放り出す。まともな鎧とかの着かたなんて分からない私が作ったやつだ、どれも簡単に着れるだろう。スキルてんこ盛りの私より、ミーニヤちゃんの方が優先だ。

さっきの解析の時、私はうっかりミーニヤちゃんにまで《超解析》のスキルを使ってしまっていた。その時にうっかり見てしまったステータス、そこにはハッキリと【王族】という文字があった。守らないと私、極刑だね。首ポーン。折角できた同年代の友達を、怪我させたりなんてしたくないっていうのもあるけどね。

「《大樹の守り》!」

剣や槍、斧などを弾き飛ばしながら私は魔法を発動させる。私の後ろにいるミーニヤが緑色のオーラに包まれ、周りに木が球形に集まる。大樹の守り、中に居る人を回復しながら攻撃も防御するという便利魔法だ。木のある場所でしか使えない上に、その木に能力は依存するっていう欠点はあるが。そこらへんの雑草だとゴミだった。

「これでっ!!」

降り注ぐ武器達の量と勢いが増す。流石にこの量の武器が一気に当たったら《大樹の守り》が壊れてしまうので、全力で弾いていく。

弾いた武器が近くの地面(枝)に刺さり、どこぞの固有結界の中の

ようだ。

(まずいね……全く終わりが見えない。早くどうにかしないと私のス
タミナ切れで終わりか……)

武器を弾きながら周りを解析し打開策を探す。そちらに意識を割
き始めたため、私の被弾率が上昇していく。

思考加速 LV 4 のスキルをフル活用していてもなおそれな
ので、前に採取していた《加速茸》を食べる。私の見ている世界の動
きが、更に一段階遅くなった。

(さっきの解析結果には転移じゃなくて転送って出ていた……ならこ
の場に出現させてる訳じゃなくて、ゲートの的な何を開いてこの場に送
り届けているはず！ というか誰か来いよ！)

——スキル 思考加速 のレベルが5になりました——

——スキル 並列思考 のレベルが4になりました——

——スキル 情報処理 のレベルが4になりました——

自分の身体の動きがとても遅く感じる。私のMPが無くなる前に
誰かが来ると信じて、私は魔法を発動させる。

《風纏》

どこかのエアリアルのように私に風が纏わりつき、身体が羽根のよ
うに軽くなる。マイク剣は、マイクというだけあって音……風系魔法
の強さを上昇させてくれる。私が纏うのは、いつもと違ってもはや暴
風だ。

《雷纏》

テイラノ戦の倍以上のMPを込めて発動させたそれで、今度は私に
バチバチと電気が走り無理矢理に身体能力を上昇させる。鼻血が垂
れてくるのを感じるし、体の所々から出血するのが分かるが、これ
でようやくいつもと手足の動きが一致する。

《リジエネレート》

私が今幾つも受けている切り傷、自爆して血が出ていた部分がゆっ
くりと治っていく。いつもより回復が遅いが、武器に塗られていた毒
の所為だろう。

「ハアアアアッ!!」

次々と飛来してくる武器を鎌剣で弾き、マイク剣で受け流し、蹴りを入れて逸らす。短剣のような小型の武器群が来れば電気の壁で軌道を歪ませ、中型の武器の雨は爆発で吹き飛ばす。

自分の持つスキルをフル活用し周りの解析と迎撃を続け、飴を噛み砕きながら反撃の策を練っていると、ピシリ と嫌な音が背後から聞こえた。

焦って振り返ると《大樹の守り》に弾き損ねた多数の武器が突き刺さり、ひびが入っていた。そして、今までとは何かが違う赤黒いオーラを纏った刀が頭を覗かせている。

「ミーニャー！」

あれには耐えられない、何故かそう私にはハッキリとわかった。私はそう叫び、残りのMPを無視する勢いで魔法も使い全力で移動する。そして、《大樹の守り》を一部解除し中に突入し、ミーニャを抱きかかえる。

そのままその場を離脱しようと足に力を込めるが、ガチャンツ！と音が鳴って、つんのめり倒れてしまう。

「きゃあっ！」

(何!?)

足元を見ると、無骨な足枷のような物が空間から飛び出し私の足に付いている。この時をチャンスと見てか、刀が発射される。私もろとも、串刺しにする腹づもりなのだろう。

「そんなのっ、させない!!」

私は左手に纏っていた風を集め突風を発生させ、ミーニャを吹き飛ばす。右手では《エクスペロージョン》の周りに小さな金属を精製した物に雷を使い加速させ、今しがた刀が飛び出してきた穴へと打ち込む。

「《リリース》！」

私が放った魔法が炸裂するのと、私に刀が突き刺さるのは、ほとんど同じタイミングだった。穴の向こうから爆音が届き、こちらを見ている魔力が揺らめき……そして消えた。

「へへっ、ざまあみやが ゴホッ」

決めようとした言葉は最後まで喋ることが出来なかった。最後の悪足掻きなのか、打ち損ねていた小型く中型の武器が動けず倒れている私に降り注いだからた。口から血が溢れる、どこか食道に繋がる場所か呼吸器系が傷ついたのだろう。

(死体撃ちとか……マナー守れし。あと失血ヤバイ……)

「《水……て……ん》」

傷口が割っておいたポーションに包まれる。これで失血死はないはず……敵っぽい魔力も消えた。

頭に響く無数の怨嗟や呪う声、それは明らかに最後の刀から響いてきていた。

(罪歌かよっ!! ちょっと違うけど!)

そんなツツコミのせいで力尽きた私が最後に見たのは、何かに祈っているようなミーニヤの顔だった。

犯人は、ゆうし……

第10話 瀕死なイオリ

『アンナ様!! お姉ちゃん! 庭園に来てください!!』

こんな声が頭に響いたのは、突如聞こえてきた爆発音と剣戟のような音の元となっていた場所……庭園に向かっていている時だった。

ついでに言えば、その聞こえてきた爆発音はイオリさんがよく使っている魔法の音によく似ていた。

「アンナ! 今の声、ミーニヤ様だよねっ?」

「そうだよお兄ちゃん! あんなに焦ってるって事は、やっぱり何かがあったんだよ!」

「えっと……ミーニヤ様って、第二王女の?」

「そうだよ!」

そんなレーナからの質問に答えながら、僕は内心舌打ちをする。

(獣王様が視察で居ないって時に、何が起きてるんだよ……)

◇

庭園に着くとそこは、多数の警備兵に囲まれており中が見えない状態になっていた。そしてかなりの警戒をしているようで、空気もピリピリしている。

(濃い血の匂いがする……これがアンナを呼んだ理由か)

アンナは光魔法の上、聖光魔法が使えたりする。僕は何も魔法は使えないのに。そんな事を考えていた僕に、警備兵の1人が声をかけてくる。

「アンナ様と、そのお兄様ですね! その後ろの「僕の彼女! 手伝い」了解しました。お通り下さい、重傷者が一名います!」

そう言って警備兵の人が道を開ける。そしてあらわになった庭園は、いつもとは明らかに違う風景になっていた。

地面や花壇には、大きさも分類も違う多数の武器が突き刺さっているし、所々に焼け焦げた跡や短剣なども散乱している。さらに木が不自然に動いた形跡もあるし、何かに溶かされてもいる。

明らかに戦闘があった跡だ。それも尋常な戦いではない。

「アンナ様!! こちらです!」

「……………つち、早く!」

そう呼ばれる声を辿り武器の林を抜けると、何故かイオリさんの装備を着て魔法を使っているミーニヤ様と、その傍らで杖を持ち魔法を唱えている金髪の美少女……第一王女のラファール様が居て、二人が魔法をかけているのはイオリさんだった。

右肩の辺りには禍々しい刀が深々と突き刺さっており、元は綺麗な緑色だったであろうワンピースは、自らの血でどす黒く染まっている。近くに山積みになされている血で染まった武器は、全てがこの小さな身体に刺さっていたとでも言うのだろうか？

「……………え?」

「さっきから《光魔法》を使ってるのに、全然治らないんです! アンナ様なら……アンナ様なら治せますよねっ!?!」

「!? ちょっと待って」

そんな事を言われたので、二人して解析を発動させるがイオリさんの状態は余りにも酷かった。

イオリ・キリノ

種族 銀狼族

LV 56

HP 36 / 782 (—75)

MP 143 / 1810

【状態】猛毒・麻痺《大》・火傷《小》・昏睡・呪い・出血《大》・失血・回復阻害・耐性低下・発熱・体力低下・極度疲労・脳力酷使・消費魔力増加・裂傷・感電《小》・打撲・骨折・リジエネレイト・水纏

まさに瀕死と言って差し支えない状態だ。この前話してくれた自動回復スキル、恐らく自前のリジエネ。水纏というのは分からないが、ミーニヤ様達が掛けている回復魔法でどうにかなっているように見える。

「手足の深すぎる切り傷とかバカみたいな状態異常もだけど……お兄ちゃん、まずはその刀！」

「分かった！」

呆然としているレーナを置き去りにして、アンナは魔法をかけて僕は刀に手をかける。が、次の瞬間、僕の頭に耐え難い呪いの声が響き柄を手放してしまう。

「なんだっ……これ」

頭を押さえながら、明らかに呪われている刀に解析をかける。

罪苦の怨刀 + 13

STR + 666

AGL + 444

INT | 9999

属性 暗黒・呪怨 刃渡り 1m

《スキル》

呪い LV | | 対象弱化 LV | | 状態悪化

LV | |

狂乱 LV | | 傷口悪化 LV | |

《備考》

数多の生き物からの怨念を受ける刀。持たばたちまちその者は怨念に取り込まれ、傷を受ければその傷からは呪いが進行し、抜かば狂乱を撒き散らすだろう。

そんな表示を見てももう一度柄に手をかけるが、やはり頭に尋常じやない声が響く。それを無理矢理我慢し抜こうとすると、刀を覆っているのと同種の赤黒いナニカが傷口に纏わりつきイオリさんが苦痛に呻く。心なしか傷口が悪化したように見える。

「つつ、無理みたい！ 無理やり抜こうとすると傷口が広がる！ しかも抜いたら狂乱を撒き散らすって！」

「無理か……つてことは本当にヤバイかも……」

「そんなっ」

その言葉にミーニャ様が泣きそうな顔をする。現にアンナが来てからイオリさんのHPが減る事は無くなったが、回復もしていない。このままじゃジリ貧だろう。せめてレーナが光魔法を使えたり、バビロンの中に回復できる宝具があればよかったんだけど、それはたらればの話だ。

こんな状況を解決出来るとしたら……

「……リユートツ、あの人はあなたの師匠だったはず。この娘を助けたいなら、早く！」

「う、でも、あの人は……」

あの人は僕より酷い……いや、背に腹はかえられないか。イオリさんも、多分納得してくれるだろう。

「いや、分かりました。呼んできます！ レーナは二人を手伝って！」

僕は保管していたMP回復ポーションをレーナに渡し、取り出したヴィマーナに乗り込み飛び立った。

（何があったのかは分からないけど、王女様にも頼まれちゃったし何より寝覚めが悪い、間に合ってよ！）

そんな事を思いながら僕は向かう。自分を鍛えてくれた師匠の一人、レベルがカンストしている回復魔法のエキスパート、そして、僕を超える……

第11話　そう、リユートの師匠は

空から見下ろすシャルフは、とても綺麗な光景だ。木造建築が並ぶそれは日本を思い出させ、そこを沢山の獣人達が動き回っている。この光景をいつか二人にも見せてみたいなと思うながら、シャルフ郊外に建つ真つ白な建物に向かっていく。

しかし、他の場所に比べると、かなりの年季が感じられる……悪く言えば、とてもボロつちい建物だった。それこそ、まるで廃墟のように。

「師匠！　いますか!?　リユートです！」

僕はバンバンとそのドアを叩く。しかし予想通り返事は無かった。いつもならもう少し待たたりするのだが、今は時間が無い。

「入りますよ！」

そう声を出し、鍵のかかかっていない扉を開けて家に入っていく。五感超化のお陰でいるのは分かっている。

(相変わらず無用心だな……何か盗まれたらどうするつもり……あ、消されるのか。まあ、そもそもここに盗みに入っても師匠には勝てないだろうからいいのか……)

そんな事を思いながら病院の匂い漂うその中を掻き分け、記憶の中にある地下への階段へ向かって歩いていく。そして、閉まっている地下へと通じる扉を見つけた。

「よっこらせっ！　と」

そう言つて実験室に繋がる扉を開けると、中から途轍もないアルコールの匂いが漂ってくる。

「あー……またか」

そう言つて僕は地下へと梯子を使つて降りていく。あの人、偶にヤケ酒するからなあ……地球で言うスピリタスカ日本酒で。1回付き合わされたのは嫌な思い出だ。

「うえっ、臭……」

「悪かったな！　臭くて」

地下への階段を降りていると、不意に前方からそんな声が聞こえて

きた。

現れた人物は、水色の髪を長く伸ばし額に大きな紅い宝石のようなものが付いている白衣の女性……まあ師匠だった。

カーバンクル。それがこの人の獣人としての種族だ。確か進化というものをしたらしい。

「全く……呼ばれたから出てきてみりやあ、お前かよりユート」

「お久しぶりです、クラネル師匠」

「私の言う事無視して出ていったやつに師匠呼ばわりされたくなんか
ないね。で、何の用だ？ まさか修行をやり直すとか言うのか？」

「いや、そんなワクワクした顔で言われても……」

因みに師匠は医者で戦闘狂だったりする。この世界では地球とは違つて回復魔法を使える人がなるものだけど、この人が医者になつたのは合法的にロリシヨタと触れ合えるからだったりする。

最近急患以外の対応は無いと聞いていたが、腕自体は凄いのでこうして頼みに来たのだ。

「今、現在進行形で一緒に旅をしてた仲間が死にかけてるんです。治療、お願いします！」

「ヤダね」

「師匠の好きだった狼人族のかりんとうとお酒持つて来たんですが……ダメですか？」

「お前、昔もそうやって酒を持つてきて私に治させたじゃねえか。しかも男を。もう物には釣られねえよ」

昔の事を覚えていた僕は、なんとなく断られるだろうとは思っていた。だから僕には被害は出ないが、最悪の最後の切り札を切る。

「師匠、治すのが男じゃなければいいんですよね？」

「へっ、それでもまだ足んねえよ！」

「それが8歳の少女でも？」

僕はニヤリと笑い言う。内心は罪悪感でいっぱいだが。

「あ？」

「それに僕は結構な間旅を一緒にしています。師匠の言う事に、なんでも一つ……とまではいかなければ、本人の許容する範囲内までな

ら言う事を聞いてもらえろと思えますよ？ 何せ命の恩人になるんですから」

そこまで言い切ると、師匠がいきなり僕の腕を掴み走り出した。

「その事を早く言いやがれこのバカ弟子が!! そんでもってとつととお前のヴィマーナだせ！ 行くぞ！」

そう言っただけという間に玄関に停めてあったヴィマーナに飛び乗り、バンバンと叩く。そして続いて僕も乗り込む。うわ、ヴィマーナヒビ入ってる。

そう、この師匠は、僕がロリコンになった原因のどうしようも無いロリコンだった。YesロリータGoタッチなタイプの。

(イオリさん……ごめんなさい)

そんな事を思いながら、勢いよくヴィマーナを出発させる。そして短い飛行時間の中、師匠が聞いてくる。

「で、容態は？」

「はい。最後に見たときには、HPが残り38で多数の状態異常にかかっていて、呪いの武器が突き刺さってました。今は僕の妹とミーニヤ様、それとラファール様が治療に当たっていて、本人の回復系のスキルも多いので死んではいません」

「はあつ!? 今向かってる場所は王城だろ？ なんでそんな戦場でも見ねえような状態になってんだよ!？」

師匠が驚いた顔をする。まあ、僕も初めて見た時はビックリしたしね。王女様二人掛かりで治ってなかったからね。

「それが……全く分からないんです。ミーニヤ様は知ってると思うんですが、その子……イオリさんって言うんですけど、治療にかかりつきりになっていて。とりあえず僕は師匠を急いで呼びに出たので事情は全く知らないです」

「……確かにそりゃあ、この国で確実に治せるのは私しかいねえだろうな。ナイスだリユート、よく私のところに来た」

ヴィマーナを飛ばしながら、この時ばかりはこのロリコンな師匠がいて良かったと思うリユートであった。

いやほんと、何を師匠に要求されることになるのやら……

第12話 全治一週間

「アンナ様！ イオリちゃんのHPが50代にまで回復しました！」

「まだ安心しちやダメ！ このデカ物が抜けてないんだから」

「……それに、状態異常が治らない」

リユートが去った後、三人の懸命な治療のお陰でイオリの状態は当初よりはマシになっていた。

刺さっていた小型・中型の武器は全て抜かれ、状態異常こそ治っていないもののHPもほんの少しずつではあるが回復してきていた。

「まあ、マシになってきたのは確かよね。この《水纏》とかいうのも実はかなりの貢献度だったし」

「……これがなかったら確実に血が足りなかった」

リユートも分からず、害は無いだろうとして放置していた状態《水纏》。これがどんな物であったのかは、武器が抜かれてから判明した。

傷の一つ一つ……とまではいっていなかったが、多数の傷口に低位だがポーシヨンが纏わりつき、血液を保護して身体を循環させていたのだ。それによって出血は魔法を発動する前までの量で済んでいた。

ポーシヨンは、実は点滴としても使える。原料は草と水だというのに……謎だ。

「それでも、状態は芳しくないのよね……お兄ちゃんは呼んでくるって言ってたけど、私より回復魔法が使える人なんてあの人しか……」

そこまでアンナが言った時、空の一点がキラリと光ったと思うと共に何か降ってきた。その降ってきた物は人で、勢いよく庭園へと着地した。

「呼ばれて飛び出てクラネルさん！ 現着だ！ さあ、患者はどこだあああああ！」

降ってきたのは変態だった。それに続いて、降りてきた黄金の飛行物体からリユートが姿を現す。

「お、お兄ちゃん？ この人が……呼んできた人？ 人違いじゃなくて？」

「……起きていてよかったです、クラネルさん。治療、お願いします」

「はあ!? この人があの!?!」

「そうだよ。ロリコンなことに目を瞑れば、本当に凄くて尊敬できる
師匠だよ……」

リユートがヴィマーナを王の財宝の中にしまいながら、そんな事を
言う。すると、後ろからクラネルさんがどこからかハリセンを取り出
し、それでリユートの頭を叩いた。

「しかとしてんじゃねえよバカ弟子が!! お前しかツツコミ役がいね
えだろ! さっさと患者の場所に案内しやがれ!!」

「師匠、ここですよ!」 足元足元!

そう言つてリユートは呻いているイオリを指差す。すると、足元の
イオリを見たクラネルは……

「ふん、この娘の尋常じやない回復力があつたとはいえ、よく普通の
回復魔法程度でここまで頑張つたな。やるじゃねえか、後は引き継い
だ!」

どうやら鑑定系統の能力でイオリの状態を確認したようだ。一応
名医だけはある。

「ふむ、この呪い付きの刀がネックか……ならあれだな《テイバインス
ペル》!」

そう言つて、クラネルの手から放たれたどこか神聖さを感じさせる
光に刀が触れた途端、刀に纏わりついていた赤黒いオーラが霧散し
た。

「うし、これはもう邪魔だ。しっかしこの娘も中々やるじゃねえか、低
位ポーションを使って水魔法で循環させてるとはな」

そう感心しながら刺さっていた刀をいとも簡単に抜き、投げ捨て
る。

「えっ」

「ふん、これくらいできて当然だ。後はこの状態異常の群れをどうに
かしないと。うし、《エクスキュア》!」

クラネルがそう言くと、イオリの身体が翡翠色の光に包まれる。鑑
定・解析で見えていた3人は分かったが、たったそれだけで大量にあつ
た状態異常が無くなりリジエ等の効果のみになった。

「《エクスヒール》。これでもう大丈夫だろう。まあ、いくら私の回復魔法っていつてもいつ目が醒めるかは本人次第だからな。それに魔法で回復させた組織は普通に回復するよりは、暫くは弱い。ま、全治一週間ってとこだな」

ふざけた調子ではない、いたってまともな診察結果によかったと安堵の声漏れる。

「……本当にありがとうございました」

「兄のパーティーメンバーを助けていただき、ありがとうございました、クラネルさん」

「イオリちゃんを助けてくれて、ありがとうございます」

三者三様のお礼を向けられたクラネルは、頭を掻きながら言う。

「おう、大した事じゃねえよ。戦場じゃ、五体満足な方が珍しいからな。その分マシだよ。っとそうだ。おいリユート、あの約束忘れんじゃねえぞ?」

「分かってますよ、師匠」

そんな会話をした後、師匠は出口の方へとゆつくり歩いていき……何かにつまずいてこけた。なんとも締まらない感じだな。まあ、地下室にいたってことはヤケ酒してたんだろうし、アンナとミーニャ様はその……アレだから仕方ないか。

(さて、イオリさんが起きたらなんて説明しよう……ん?)

そんな事を思っていると、倒れているイオリさんの手元辺りに、赤い日本語で書かれた文字を見つけた。

「犯人は、ゆうし……か? いや、小さい『や』か。って事は、ゆうしや?」

「お兄ちゃん、何か言った?」

「い、いや、何でもない」

幸いにも、今この場で日本語が読めるのは僕だけだ。今の混乱している状況でこんな事を言ったら、確実に情報が流出するし、確実に世論は戦争へと向かう事になる。

(僕としては戦争は否定したいし、もしするとしても流れのままそう行くのは嫌だし……これは、まずは獣王様に報告しないとだな)

はあ……、僕はそう深い溜息を吐き、伝令の人にこの事を書いた手紙を渡すのだった。

閑話―9 獣王国会議

「何!? 王城でミーニヤが襲撃されただど!? 警備は何をしていた!」

「す、すみませんネイオン様。襲撃があつたということ以外、何もわかつていないのです」

声を荒らげる獣王……ネイオンに、早馬に乗ってきた使者がビクリとする。筋骨隆々とまではいかないがガツチリとした身体、逆立った赤く短い髪の毛が怒鳴ればそうなるのも仕方ないだろう。

「ふむ……怒鳴って済まなかつたな、続きを頼む。それで、ミーニヤは無事なのか?」

「はっ。ミーニヤ様はその場にいた冒険者が庇い、擦り傷一つ無いとのことでした」

「冒険者か。ふむ、リユートか?」

ネイオンは黒髪の同族の、数年前にはミーニヤの家庭教師を依頼した青年を思い浮かべる。確かにあの青年ならば守りきれるだろう、そう判断して言った言葉だったが、次の使者の言葉にそれは打ち砕かれた。

「いえ、ミーニヤ様と同年代の銀狼族の少女です。リユート殿のパイティメンバーとのことですが、その当人は瀕死の重傷、事情を知っているとされるミーニヤ様も治療に集中しており詳細は不明です」
「そうか、下がってよいぞ。クラネルの奴がシャルフにはいた筈、奴の性格を考える限りその冒険者が死ぬという事は無いだろうな」

「そして獣王様、リユート殿から書状を預かっています。火急の用件との事です」

そう言つて使者が、手紙を渡す。その手紙を見たネイオンは目を見開いた。

|||||

お久しぶりです獣王様、リユートです。時間がないので結論だけを書きます。

今回の事件、犯人は最近呼び出されたという人族の勇者の可能性が高いです。

根拠は現場の状況と残されていた血文字ですが、これはあくまで僕の推測なので、頭に置いていて頂ければ幸いです。

|| || ||

「犯人は勇者の可能性が高い……か。なんにせよ情報が足りんな、視察はここまでだ！ 王城へ帰還する!!」

獣王達が視察から帰還したその日の夜、人間界の王都、セントシユタインからの宣戦布告の報が届いた。

◇

今王城の一室では、獣人界の主要な戦力といえる人物が一堂に会し、会議を行っていた。王子のクライヴ、直属の護衛部隊の【四神】に大臣といったところだ。

「皆の者、人族から宣戦布告を受けたことは知っているな」

獣王の言葉に、皆が当然のことだと頷く。

「知つての通り、我は争いは好かぬ。故に魔王とも長年に渡り交渉し、平和条約を締結した。だがっ！」

机に腕をダンと叩きつけ、普段とは違う荒々しい口調でネイオンは言う。

「実の娘を命の危機に晒されてなお動かない奴は、国王としても！ 父親としても失格だ!!」

この場にいる誰もが見たことのなかった、怒りの込められたネイオンの言葉に誰もが口を閉ざしている。

「長年に渡る獣人の差別や奴隷化、更に王女の暗殺未遂が加わった！

今までは外交手段を駆使してきたが、最早容赦はいらぬ！ 今こそ我らが牙をもって、積年の恨みを晴らそうではないか!!」

「おおっ！」

その言葉に、周りからは力強い声が返ってくる。そしてこの場にいる誰もが、獣人らしい獰猛さを感じさせる笑みを浮かべている。本能的なものなのか、どこぞの修羅場よりも迫力がある。目を覚ましては

いないが、イオリが居たらあの時と同じような事になっているだろうレベルだ。

「この戦、最早勝利以外の結果はありえない！ 長年に渡り虐げられていた我々の力を人族の奴らに思い知らせてやるのだ！」

「おおっ！」

「出陣は3日後だ。それまでに各自、ケジメをつけておくように」

先程までの調子と違って、段々と普段の調子に戻り始めているネイオンの言葉に、皆が頷きを返す。

「では今から戦力の確認と配置、戦略を煮詰めていく事になるが……」

◇

「ふむ、やはり慣れない事をするとなりが凝るな……」

「大丈夫か？ 親父。これからもまだ、同じような事が続くんだろ？」

「ああ、大丈夫だクライヴ。ミーニヤの暗殺を企んだ勇者は、許す事は出来ないからな」

会議を終えた後、若干疲れを滲ませた顔で言うネイオンと、それを心配するクライヴがそんなやり取りをしていた。

「だけどよお親父。なんで犯人が勇者つて断定出来たんだ？ 今まで

勇者には、これといった動きが無かったじゃねえか」

「ふむ、その事か。ミーニヤを庇い重傷を負った娘がいただろう？

あの娘が血文字にそう残し、その直後に人族が戦争を仕掛けてきた。更に間諜からの報告によれば、現在勇者は二分されているらしいが、その片割れの過激派には今回の事件を実行可能なスキルを持つ人物がいる上に、何かと黒い噂が多いと聞く……今言った事が全てだ」

リユートからの手紙を見てそれらを調べ、確証を得ていたりする。

「はーん、成る程なあ、それなら可能性は高いつて訳か。まあ、存分に戦えるなら俺は満足だ」

「本来ならお前が次の王になる筈なのだから、その戦闘好きは改めて欲しいのだが……まあ仕方ないか」

実際やるときはやるのがクライヴなので、あまり強く出れないネイオンだった。

閑話―10 銀狼の獣人（幼）

セントシユタイン王国の王城にある一室、武器庫の中で2名の人物が話しながら何かの作業をしている。

「なあ海堂、本当にやるのか？ 相手はまだこんな小さな子じゃねえか」

「国王サマと王女様から直接頼まれたんだぞ、当たり前じゃねえか」

（まあ、王女つてのは嘘だな。こう言っとけば納得するだろう）

「それは、そうなんだろうけど……」

「ならいいじゃねえか。やるぞ」

そう言つて海堂は、転送魔法というユニーク魔法を使い、友人が放つた音速鳥という式神のいる場所……つまり、【獣王国・シヤルフ】上空に片目分の視界を転送した。

何故こんな事になっているのかは、数日前に遡る。

◇

「勇者海堂よ、そなたに魔王の1柱獣王の娘を暗殺してもらいたい」

「へえ、なんで俺みたいなのにワザワザ頼むんだ？ 国王サマ？」

「貴様！ いくら勇者とは言え、無礼だぞ!!」

玉座に座り話す国王に対してそう答えた海堂が、周囲の貴族から責め立てられる。しかし、そこを国王が手で制する。

「今はよい。その程度の事を気にしていたら話が進まん。それで、そなたに暗殺を頼む理由は貴様の能力が転送だからだ」

「成る程な。だけどよお、俺のスキルは俺の視界内にしか転送は出来ねえぞ？」

まあ、例外はあるがな。そう小さく呟く海堂に、国王が話しかける。

「その例外とやらは、自らの視覚を転送できる事だろう？ 確かそなたの友人には、式神という使い魔を召喚する事のできる者がいた筈だ、それを利用すれば可能だろう？」

「ああ。それで？ 何時やればいい」

「3日後だ。その日、我々は獣王国に宣戦布告する。この任務が成功したのなら、相応の報酬は支払おう」

「はいよ。そんじゃあな、国王さま」

そう言つて海堂は玉座の間から去つていった。そして冒頭に戻る。

◇

「おいおい、なんで似たようなのがいるんだよ」

安定した海堂の視界には、白髪赤眼の幼女と銀髪ポニーテールの幼女が映っていた。しかも何故か発動している鑑定が、銀髪の方には鑑定不能としか映らない。

「鑑定不能だあ？ いや、そっちが王女か」

「どうしたんだよ海堂」

「いいや、なんでもねえ。つーかお前も見てるんだろ？」

「一応……ね。さっきの鳥はもう消したけど」

どうやら先程の鳥の更上空から観察しているらしい。そんな事を話していると、銀髪の幼女が手に持っていた板を置きこちらを指差して言った。

『その勇者！ 貴様！ 見ているな！』

その左右非対称な色の眼には確信が見て取れた。隣の王女は不思議そうな顔をしているが、明らかに襲撃がばれている！

「か、海堂！ バレてるよ、いいの!？」

「あんななりして護衛かよっ！ いい訳あるか！ 始めるぞ！」

そう言つて海堂が近くの武器を飛ばし始めると同時に、銀髪の幼女がどこかから不思議な形の剣を二振り取り出して構えた。

「はっ、そんなもんでこの武器の雨が防げるかよ！ って、はああ!？」

「うわようし、よっおい」

そう嘯いた海堂だったが、若干かすつてはいるもののほぼ全ての武器を弾いていく銀髪幼女に驚きを見せる。あえて隣が言った言葉は無視しているようだ。

「だがその武器は全て毒塗りだ。お前はまだ耐えられるようだが、後ろの王女に1発でも当たったら負けだぞ？」

『《大樹の守り》！』

そんな事を呟いた途端、示し合わせたかのようなタイミングで王女の周りに緑色の結界が張られた。転送に手間のかからない武器を飛

ばしてみるが、その程度では破れない。

「ちつ、クソ面倒くせえ事してくれやがる。いいぜ、そつちがぶつ倒れるまでやってやらあ！」

海堂は、大量に準備していたMP回復ポーションを煽り転送する武器の量を倍に増やす。すると流石に防ぎきれず、本人にも結界にも攻撃が入るようになるのだが、まだ倒れない。

「ったく、これでもまだ足りねえのかよ。んだこいつ、本当に幼女かよ、バケモンじゃねえか」

「うわつ、なんかゴウゴウバチバチいい始めた。しかもなんか防がれる量上がってるじゃん！」

「みてえだな。けど、相当な無茶をしてるっぽいぞ？」

確かに防がれる武器の量は上がったが、それは銀髪幼女の周囲だけで結界には先程よりも当たっている。こちらからだど段々と結界の限界が迫ってきているのが分かるが、自分の事で精一杯で銀髪幼女はそれに気付いていない。

「……これを使う予定はなかったが、確実に止めを刺す為だ仕方ねえ……なっ！」

そう言つて海堂は、自分のアイテムボックスから赤黒いオーラを纏った刀を放り出して転送を開始する。

そしてそのタイミングで、結界からピシリという音が走り銀髪幼女が振り返る。

『ミーニャー！』

そう叫びながら武器を投げ捨てた銀髪幼女は、自分の脚も火傷するだろうレベルの爆発を足元に起こし、たったの数歩で結界の中に辿り着き王女を抱き抱えた。

「海堂、これ使つて！」

「ふ、お前初めてまともな仕事したなっ！ と」

『きやあっ！』

たった今手渡され転送された足枷が銀髪幼女の脚にはまり、そのままつんのめって倒れた。そして、ようやく刀の転送が完了して倒れた二人に向かい発射された。

「これで止めだ！」

『そんなのっ、させない!!』

それと同時に、銀髪幼女が自分に纏わせていた風を使い、左手で王女を突き飛ばし、右手では安心で開きっぱなしにしていた呪刀を発射した海堂の目の前の穴に一瞬で生成した何かを打ち込んできた。

「マズイっ!!」

慌てて穴を閉じようとしたが間に合わず、その何かの侵入を許してしまう。こちら側の空間に転移してきたそれは、燃え盛る中ぐらいの火球の周囲に尖った金属片が大量に配置された物だった。

『リリース!』

飛ばした視界の向こうからそんな声が響き、叫んだ張本人に呪刀が突き刺さるのと同時に、王国の武器庫で大爆発が起こった。

第13話 目が覚めた!

「う、ううん……」

目を開けるとそこは、いつか見た休憩室だった。外は真っ暗になっている。記憶の整理をしよう。確か私はここに来た後……

「そうだつ! ミーニヤは痛つ……」

ベッドから起き上がろうと動いた途端、身体に痛みが走った。そういえば、全身に剣とか突き刺さったんだっけ……

「前にも思った事あるけど、よく生きてたよな……私」

そんな事を思いながら手足を確認していく。酷い傷だったはずだが、全身に問題は……というか、見える範囲には傷一つ無かった。服装も、いつものワンピースでは無く貫頭衣? みたいな物に変わっていた。あう、髪下りてるしリボンない……

「くすん、どういうこと?」

そう思い若干悲しくなりながら頭を捻っていると、勢いよくドアが開け放たれる。

「良かった! 目が覚めたんだ!!」

その勢いのまま入ってきたミーニヤが、ベッドの上の私に飛び込んでくる。

「わっ、ちよっ、痛い痛い」

「あ、そうだった。ごめん」

ミーニヤが若干シユンとした雰囲気で離れていく。な、なんか凄くこっちが悪い気がする。

「大丈夫、大丈夫だよ。それよりもミーニヤちゃん、私が怪我してから何日経った?」

「えっと、今日で4日かな? でも、リユートさんのお師匠様がぜんちいっしゅうかんつて言つてたから、まだ動いちやダメだよ!」

話しぶりから察するに、私を治してくれたのはリユートの師匠らしい。なにそれ凄い。

「うん、分かった! そう言ってるって事は、私を治してくれたのは、リユートさんのお師匠様って事?」

「そうだよ！ 私とお姉ちゃんとアンナさんでもどうにもならなかった怪我をすぐに治しちやつてて、ビックリしたよ！」

「凄い人なんだね〜」

そんな風にしばらく話していると、色々な事が分かった。

まず、私が気絶した後助けを呼んでくれたのがミーニヤだということ。念話っていうEXスキルらしい。そして、私のダイイングメッセージもあって、宣戦布告してきた人族との戦争が決定してもう出陣していること。

「多分勇者だったんだろうけど、実は確証はないんだよなあ……あれ」
そう呟きながら、話し疲れてしまったのか分からないけど、途中から瞼が落ちてきて、今はもうベッドに寄りかかって寝息を立てているミーニヤちゃんの頭を撫でる。

そうしてゆつくりとした時間を過ごしていると、ガチャリ と静かにドアが開けられた。

「起きたみたいだね」

入ってきたのは今度はリユートさんだった。その顔はどことなく申し訳なさそうな雰囲気醸し出している。なぜだし。

「起きたよ。リユートさんの師匠が私を治してくれたんだってね。しかもリユートさんが呼びに行つて。ありがとう」

「いや、流石にイオリさんを見捨てる程薄情じゃないよ、僕は。その師匠についてなんだけど……」

私が素直にお礼を言うと、リユートがポツポツと自分の師匠の事を話し始めた。え？ ロリコン？ 医者？ レベルカリスト？ ふえ？

「文句は言えないけど、まさかそんな事になってるなんて……」

「それしか方法が無くて……ごめん」

まさか、『私の許せる範囲で、なんでも一ついう事を聞く』のが条件だったとは……。命の恩人に対してキツくは当たれないし……

ロリコンで医者じゃなければ何ともなかったのに……寧ろ全力で取り組んだのに……

「まあいいよ。命の恩人だしね、ある程度までは黙認するよ。実験台

とかは嫌だけど。それよりも、すつごく禍々しい刀があつた筈だけど……あれつてどうなつた？」

刺さつた瞬間、尋常でない呪いと怨嗟の聲が頭に響いてきたあの刀。絶対に放置してはいけけない類の物だ。

「あれなら、師匠が一瞬で浄化したから、ここにあるよ」

「へっ？」

「えーと、そうそうこれだつたかな？」

そう言つてリユートが金色の波紋に手を突つ込み取り出した刀は、確かにあの時見た形そのものだった。しかし浄化されたという言葉の通り、赤黒いオーラは消えていた。

「本当だ……。凄い。って、そうだリユートさん！ 私もリユートさんにお願ひしたい事があるんだつた！」

話を聞きながら、ずっと考えていた事をリユートに言おうとしたら、手で制された。

「ごめんイオリさん。それつて明日でも構わない？」

「いいけど……。なんで？」

「今の時間、地球で言うなら真夜中だよ？ イオリさんが起きたつてミーニャ様から連絡がきたから、僕だけは来たけどさ。レーナがいないのはそれが理由ね」

確かにそれはマズイ。そんな時間に王女様を付き合わせてしまったのか。というかどうかやつて私起きたの分かつたんだろう？

「マジか……。うん、じゃあ今日はもう寝る事にするよ。という訳で外にどうぞ」

私はベッドから降りてリユートを押していく。あまり力が込められてないのはナイショだ。

「分かつた、分かつたから押さないで。まあ、また明日にでも来るよ。おやすみ」

「了解。おやすみリユートさん」

そう言つて私はドアを閉める。

(これも木製だから……)

「《樹木生成》」

樹木生成でチェーンのような物を掛ける。これで良し。

切れていた身体能力超化を使い、ミーニャちゃんを持ち上げる。そしてそのまま私もベッドに戻る。

実は中々に限界だったみたいだ。HPもMPも回復しているのだが、所々力が入らなかつたりしてる。

「寝ますか……」

ついていた明かりを消して、私は眠り始めた。

い、いや、ただ一緒に寝た方が暖かいでしょ？ 他意はないからね

？

誰が私がロリコンだ!!

第14話 りよーよーちゅー

「んう……」

何か自分では無い温かさを感じて目が覚めた。毛布をめくってみると……そうだった、寝るときにミーニヤちゃんを引き込んだんだっただ。

「ふわあああ。よく寝た」

時計が無いから詳しくは分からないが、多分朝の内に起きる事ができた。すやすやと寝ているミーニヤに毛布をかけ直し、ベッドから降りる。

「誰も来てないみたいだね」

なんら変わりの無い木製チェーンを元に戻し、自分の体調を確認する。

まだ何となく動かし辛い場所がある。特に右肩。これじゃあ当分ハンマーは振れそうにないなあ……そう思っている時に、頭に コツンツと何か当たり下に落ちていった。

これは確か……そう思い警戒するが、紙が落ちていたり、紙飛行機が飛んでくることもなかった。

「あれ？」

そう首を傾げながら、いくらただの鉄鉱石でも勿体無いと思いついで拾う。

(へえ、鉄鉱石からミスリルに変わってる)

その解析結果を見ると、ポフンツ という音と共に一枚の紙がヒラヒラと落ちてくる。やっぱり手紙でしたか。

|||||
|||

お久しぶり☆あなたの女神だよん☆何死にかけてるのさ？ ねえ、ねえ!? ビックリするじゃないの！ 全く、余りにビックリし過ぎて仕事場で変な声あげちゃったじゃないの！ 白い眼で見られて、「課長……」って悲しそうに言われる辛さが分かる？ 分からないよね!?

ながら《鉱石精製》かな?)

後で焚き火辺りの焚付けにでもしようかな? そう思い手紙を仕舞っている、毛布がもぞもぞと動き、ミーニヤが起き出してきた。

瞼を軽く擦り、伸びをし、その動作に合わせて肌が見え隠れしている。リユート^{リョク}さんが歓喜しそうな光景だな……いや、リユートの師匠っていう人もか。

「おはよう、イオリちゃん。早いなだね」

ミーニヤちゃんはどつかの作者と違って朝起きてもすぐに二度寝したり、それに飽き足らず三度寝とかはしないらしい。私? 私は見えての通り寝起きはいいよ?

「うん、なんか目が覚めちゃってね。朝ご飯とか、食べに行くの?」

この世界に来てから、家事万能で料理ばかりしていた私は、なんとなく王城のご飯というものが気になっていた。歴史上だと、王家とかは豪華な食事をしてたっていうし。

「うん! えつとね、今はパパ達がいらないからリユートさんと、レーナさんにアンナ様と食べてるんだ! 『イオリさんが起きたら、絶対食べにくるだろうから』ってリユートさんが言ってたから、用意はしてあるはずだよ!」

あれか、転生者はやつぱりそういうのは気になるものなのか。とりあえずリユートさんナイス!

「ほんとに!」 ミーニヤちゃんの準備が終わったら行こつ!!
「うん!」

テンションが上がる。テンプレとは違うけど、王城で王様達が食べる物を食べるってよくありそうで、やってみたい事だったしね!

ともかく、寝間着姿のミーニヤが着替えるのを待って私達は食堂という場所に向かって歩いて行った。私? 今は気分を変えてサマードレスだね! 刀が刺さった右肩に、傷跡がなくてほんとよかったですよ。

◇

「リユートさんの師匠はロリコンなんだよね。私襲われないかな?」

「危なくなったら僕を呼んでね、マジで呼んでね?」

「了解。まあ、大丈夫でしょ……だよな？」

なんでも最低限のマナーさえ守っていれば、話したりしても別に構わないという事だったので、私はリユートの師匠……クラネルさんの事について質問していた。

「出兵したって聞いたけど、レベルカンストしてる人が国に残っていないの？」

「確か国の防衛担当って名目で、残ってたかな？ まあ師匠らしいし、いいんじゃないの？」

「一応、国のぼうえいやくっていったよ」

すかさずミーニヤちゃんがそんな事を言う。成る程ね、奇襲でもされたらアレだからか。会いに行くのは明日かな……今日は色々やりたい事あるし。

「あ、ところでミーニヤちゃん。このお城の訓練とかしてる場所ってどこにあるか分かる？」

「うん。ああ！ 運動するつもりでしょ！ ダメだからね！」

「大丈夫大丈夫、運動はしないって」

そこまで話した時、丁度朝ご飯を皆が食べ終わった。私はとつくに食べきってますよ。数日寝たきりだった人をなめるな！

「じゃあ僕が見張ってるから、ミーニヤ様はしっかりやる事をやってくださいね？ 勉強、あるんですよね？」

「はーい……」

庇ってあげたくなくなるけど、勉強はしなきゃね。レーナさんも一緒に勉強してるんだとか。

「じゃあ、それぞれ解散！」

妙に言い慣れたようなりユートのその言葉で、私達は解散していった。

勉強か……何やってるんだろ？

第15話 りよーよーちゅー その2!

「そういうべき、リユートさん。ミーニャちゃんとかレーナさんがやってる勉強って、どんなもんなの?」

元男とリユートは知っているので、多少荒っぽい……とまではいなくても、いつもと違う口調で話しかける。気を抜けるっていい事だよね。

「ん〜? 確か今は足し算引き算……まあ、加減法をやってるって昨日聞いたかな。『やつと4桁の計算が出来るようになった』ってレーナが嬉しそうに言ってたからね。なんでそんな事を?」
「いや、まだ私は安静にしてろって言われてるじゃん? だから歴史とかなら混ざろうかなって思ってたね。この見た目だし」

獣人の国の歴史、実はそこそこ気になっていたんだよね。カンザキ家とかモロ日本の苗字だし。色金あったりしないかな?

「へえ、イオリさんが鍛冶と戦闘以外に興味を持つなんて……今日は槍でも降るの?」

「や、槍が降ってくるのはもう勘弁かなあ……」

「そういうえば、槍の雨で死にかけてたよね……ゴメン。えっと……あの程度の歴史なら説明するけど? ただ見張ってるなんて暇だし」

「マジで? ありがとう!」

私は、対ロリコン奥義・にぱー☆を繰り出しながら言う。不謹慎な事言ったお返しだ!

「う、うん……中身が男って分かっててもこれは……」

何か返事をした後に言ってたようだが、私にはよく聞こえなかった。でもリユートさん、鼻血出てるよ鼻血。

そんな事を話してるうちに、どうやら訓練場に着いたようだった。「それで、何するつもりなの? 訓練場に来たのはいいけど、運動はしないんでしょ?」

「んー、ちよつと作りたいものがあるんだけど、部屋じゃ作れなさそうだったからね」

「何作ろうとしてるの?」

「えーと、なんて名前だったかな？ カリヨン……だったはず」
「何それ？」

前世？ でいいのかな？ ともかくこつちの世界にくるほんの少し前に読んでた本に出てきたなんか凄い剣だったんだよね。

たしか23個以上の何かの効果を持った護符だったか金属片だったかを纏めて出来ている剣で、変な効果を持ったのが化学反応を起こして凄いいことになって、相手の力を利用するんだとか何とか……特殊能力みたいなのも有るのはあったけど、『コンデイションを最善に保つ』くらいだったからエクスカリバーみたいなのはないはずで、問題は自己学習して特徴が出てくるとこみたいのがあった（気がする）とこだけど、それは女神様が叩き込んでくれた情報に出来そうなのがある。

「うーん、なんか小説に出てきた凄い剣！ 宝具なんて作れないけど、量産型つてのもあったしこつちなら出来るかもしれないって」

「よく分からないけど、そんな曖昧なのに作れるの？」

「多分頑張れば作れるはず！ まあ、結局手当たり次第になるからついでに歴史も聞けたらいいなって。とりあえず金属バンバン出していくから、部屋じゃ出来なそうだしさー」

流石に話を聞きながら魔法陣を刻み続けるとか出来っこない。ただ、魔法で金属を作つて積んでいくだけなら話を聞きながらも出来るっぽいし、そんなに失礼じゃないと思うんだ。

「まあそれならいいんだけど、立ったまま話すの？」

「それはやだから、はいベンチ」

「毎回思うけど、イオリさんはアイテムボックスに何入れてるのさ……」

そんなリユートさんの眩きを無視して取り出したベンチに私はドシツと座る。足はつかないからブラブラさせるしかない。

「まあとりあえず座つてよ。歴史、聞かせてくれるんでしょ？」

「うん、じゃあ何が知りたいのか質問どうぞ？」

背後で《鉱石精製》から進化した《金属精製》で頭に叩き込まれた金属を積みながら、若干得意げな表情をしているリユートさんに尋ね

る。

「じゃあさ、なんであのユグドラシル？ の下にこの国が作られたのか。誰が建国したのかだね。所謂国の成り立ち」

「この国を作った人は初代獣王・ライオンズって人だね。で、その人がユグドラシルをシンボルとして街を作り上げていったらしいよ。まあ予想は出来るだろうけど、ユグドラシルの葉や枝にはかなりの回復の力が宿っているからね、それをライオンズは利用したんじゃないかな？」

「成る程ね……確かにそんな木があるんなら建国もし易いか。ライオンズって、ひよつとしたら転生者だったりして」

「それは直接ミーニャ様とかに聞けばいいと思うよ」

それは、暗に認めてるって事でいいのかな？ まあ、直接聞けって言ってたし後で聞きに行けばいいか。

「えっと、それじゃあ次ね。なんで時々獣人でも100%そうですって感じの人と、私とかリユートさんみたいに獣耳と尻尾だけって人がいるの？ 遺伝？」

「多分そうだと思うよ。偶に代々僕達みたいな方のタイプの人達から、バイトさんみたいな人が生まれてくる事も有るらしいから、若干分からないけど……」

「うくん、先祖返りとか？ 因みにそんな風に生まれてきた子はどうなるの？ まさか捨てられたり？」

「それは滅多に無いかなあ。周りにもそういう人は居る訳だし、男女の差くらいにしか意識されて無いかな」

「ほへえ……そこはならではって感じか、安心だね。あ、はい飲み物」

私はリユートさんにリンゴっぽい果物を絞ったジュースを渡しながら、そう納得する。私はMP回復ポーションを飲んでるが、青汁みたいな味だからあんまり美味しくない。

「知りたい歴史はこれぐらいだし……あ、そうだ！」

「概要だけで終わっちゃったよ……で、何？」

「リユートさんの苗字ってカンザキだったよね？」

「そうだけど、何かあるの？」

そこで気づけないとは、ぬかったなりユートさん！

「リユートさんの家に、ヒビイロカネとかあつたりする!? 色金の方の!!」

「無いよ」

「そんな死んだ魚みたいな目で見ないでよお……」

リユートさんに、色金の方の話は禁句だったみたいだ。あ、ヒビイロカネって金属自体はあるみたいだよ。アリアみたいな能力は無いみたいけど。

第16話 りよーよーちゅー その3!

異次元収納に出しまくった金属を仕舞う作業が一段落したところで、リユートさんに話しかける。

「そういえばさ、歴史とは関係なくなるけど昨日リユートさんに聞きたい事があるっていったじゃん?」

「そういえば言ってたね」

「リユートさんって、スキルに《獣化》って持つてるじゃん。それって変身してステータスを上げるスキルってことで良いの?」

大体小説とかに出てくる同じ名前とか似た名前のスキルはそんな効果だった。だからそう当たりをつけてリユートさんに聞いてみる。

「そうだね。僕達みたいな方の獣人だと、バイトさんみたいなタイプに変わって、バイトさんみたいなタイプだと、完全に動物っぽくなるね。因みに、僕達みたいなタイプだと一部だけ変身とかも出来るけど、それがどう……まさか」

「いやいや、教えて貰おうとまでは思っていないよ。私は獣人って言ってもエセだし。私の魔眼って、情報の認識・解析がメインみたいだからさ、一回目の前でやってみて欲しかったんだよ」

手を合わせ、お願いしてみる。弱点的なのが無いか探したいし、あわよくば私も出来るようになりたい! 諦めはしないさ。

「うくん、まあ良いか。全身までやるとすごく疲れるけど」
「そうなんだ」

リユートが、あまり乗り気では無いようだが、やってくれるようだ。魔眼と情報系スキル全開にして、ベンチから立ち上がったリユートさんをまじまじと観察する。

「《獣化》」

そう言ったりリユートの姿が見る見るうちに変わっていく。瞳孔?

が縦方向に割れ、首元からはフサフサした毛が生えてくる。ライオンの獣人らしいからね、リユートさん。そして手足も相応の物に変化していき、一回り大きくなったところで変化は止まった。あ、服。

「これで良い?」

「うん！ て言うか低くなった声カツコイイね！」

「そ、そうかな？」

「とりあえずそのセリフは死ぬ程似合わない」

リユートが溜息を吐いているが、無視して観察を続ける。

むむ、むむむ……分かりづらいけど、スキルレベルが上がったことで、一気に処理できる情報の量が増えている。もう少し、もう少し……

——スキル 情報処理 のレベルが7になりました——

そのアナウンスが流れた時、靄がかかっていた思考がパツと晴れた。

——EXスキル 獣化 の解析に成功しました——

——EXスキル 獣化 の取得に失敗しました——

——銀狼の腕輪 の特殊効果が発動します——

——EXスキル 獣化 を最適化しています——

——EXスキル 変身 を取得しました——

——種族 銀狼族 に変身可能です——

「ぶはっ、息止めてた……。リユートさん、ありがとう。もう解いてもいいよ」

そう私が言うと、プシューという音が聞こえそうな感じでリユートさんが萎み、元の姿に戻った。……上半身裸で。無言で取り出した適当な服を渡しておく。

「はあっ……疲れた。そんな顔してるってことは、なんかスキル手に入れられたって事だよな？」

「うん。獣化じゃなかったけど……」

早速私は手に入れたスキルに、魔眼を使う。そして出た結果はこうだ。

|||||

変身

自分が望む姿に変身する事が出来るスキル。変身しても性別は変わらないが、一部の変身ではステータスが上昇する。

変身可能 : 人族・銀狼族【部分獣化・獣化】

|| || ||

うん、流石EXスキル。強いね。

「変身出来るスキルゲットした。一応獣化も出来るみたい」

「マジで!? 見せて」

「もちろん! 《変身》!」

まずは脚だけ獣化させてみる。靴下は履いてないので何かが破れる事は無い。変身が終わったのを感じで感じ、見てみると見事にフサフサになっていた。ステータスはAGLが上がっていた。

「うおお、本当になってる。凄っ……チートめ」

「バビロン持つてるリユートさんが言うかああ!」

今の身体の状態じゃそんなに力は込められないのでポカポカとリユートさんを叩くが、何処となく嬉しそうだったのでやめた。くそう……

「我々の業界ではご褒美です」

「うん、途中から気づいてた。それにしても、鍛冶が出来ないとやる事無いなあ……」

「偶にはそういう日も良いんじゃないの?」

「なにかしてないと、なんというかムズムズするんだよ」

そんな事を言いながら、私は今の自分が出てくることを考える。うーん、護符的な物の魔法陣を刻むのはリユートさんが見てるだけになっちゃやし、鍛冶は出来ないし走れもしないし……あ、そうだ。

「バターケーキ、だったかな?」

「何か言った? イオリさん」

「いや、ちよつと思ひ出した事があってね」

小麦粉はこの前買い足したから結構な量あるし、バターのものもそこそこ残ってたはずだし……よし。

「リユートさん、ちよつとお菓子作るから手伝って欲しいな」

「いきなりなんで? それに僕が手伝っても邪魔なだけなんじゃ……」

「あー、レーナさん喜んでくれると思ったんだけどなー」

「くっ、やるよ」

そんな私の棒読みのセリフに見事にリユートさんが反応した。まあ、私とリユートさんが一緒にできる事なんてこれくらいしか無いからね。

そういえばあの名前が長かった小説、読み終わる前にこっちの世界に来ちゃったんだよなあ……こっちの世界は楽しいけど、やっぱり帰りたい、かなあ……

「暗い話は無し無し。さて、やろつか!」

「もう僕は、キッチンを出したのには驚かないよ」

第17話 ノーロリータ・ノーライフ

「念願の アイスソード を 手に入れたぞ！」

「それで、カリヨンとやらは出来たの？」

「……丸一日使ったのに出来なかった」

「まあ、そんなに簡単に2次元の装備が作れるわけないよね」

「あんなに演奏会みたいな事になって迷惑かけたのに完成しないなんて、チート鍛冶師失格だよ……」

ドーモ、昨日1日全てを掛けてカリヨンが一本たりとも作れなかったへボ鍛冶師のイオリです。護符を作って、組み合わせで、どうなたかを確認して……なんかそれっぽい形にはなるのにそれだけ。いや、何も完成してないわけじゃなくて副産物はあるんだけどさ……

「あの綺麗な音、イオリちゃんが出してたんだ」

カリヨンの物を作ってた時とか武器を試しに組んでいた時、原作で鳴ってたみたいに色々音がなってそこそこに五月蠅かったのだ。いや、綺麗な音なんだけどね？

「そうだよ、ミーニャちゃん。失敗しちゃったけどねはあ……」

「少し前から思ってたんだけど、イオリちゃんはリユートくんの師匠に会ってこなくていいの？」

「あ」

私がミーニャちゃんにそう答えていると、不意にレーナさんがそんな事を言ってきた。

確か今日が私が大怪我をしてから丁度一週間だったはず。絶対安静の期間は過ぎたって事だから、会いに行ってお礼はしないとね。……ロリコンだって話だけど。ロリコンだって話だけど!! 大事なことで二回言ってみた。

「会いに、行かないとなあ……命の恩人だし。リユートさん、案内して欲しいな! それで……いざってなったら私のこと助けてよ?」

「分かった。流石に師匠の目の前にイオリさんを置き去りにしたら、ナニされるか分からないけど、とにかくイオリさんが危ないからね、可能な限り助けはするよ」

「ありがとう！」

なんだろう、リユートさんの言い方だと何ってナニになりそうで凄く怖いんだけど。皆揃った朝食は、もしかしたら今この瞬間が最後なのかもしれない……

◇

「師匠ー連れてきましたよー」

とても年季を感じさせる家の、まるで廃墟のようなドアをリユートがノックする。そして、それから数秒も経たずして、長い青髪の白衣を着た女性が飛び出してきた。

「おいリユート！ あの子はどこだよ！ いねえじゃねえか!?」

「理不尽!!」

開けられたドアの影にいた私には気づかず、勢いよくぶつ飛ばされるリユートさん。外開きなんて珍しい……じゃなくて、リユートさん痛そうだなあ。

「あ、そんな所に居たのか。とりあえず上がっていつてくれ！」

「アツハイ」

こっそりリユートを引きずりながら、家へと入っていく。

家の中は、もっとロリコン的アトモスフィアが漂ってると思ってたんだけど、思ったよりまともだった。普通にベッドやら薬品棚やらが置いてある病院風の室内は、ある意味コワイ。

「ちなみにこの建物は基本病院だ。私が生活してるのは地下だな」

「地下ですか!? 行ってみたいです」

「そうかそうか！ じゃあ行ってみような、な！」

そして、私は地下へと降りていく。その途中の壁には、所狭しと薬品が並べられている。えーと、麻酔薬に風邪薬、胃腸薬に媚薬……ん？ 媚薬？ ……見なかつた事にしておこう。

「痛っ、痛っ、イオリさん引きずるの止めて！」

「あ、起きたんだ、案内ありがとね。あとは壁として……」

「何やってんだ2人ともー、早く来いよー」

そう言われ少し開けた場所に出た途端、入り口の向こうで棚が倒れて帰り道が塞がれてしまった。

「ふっふっふ、舞台は整った！」

そう呟きながらニヤニヤしているクラネルさんを見て、先程の柵の中にあつた媚薬という文字と、この人がロリコンな事が繋がり何か酷い身の危険を感じた。

「リユートさん!!」

「分かった！ 天の鎖よ!!」

それだけでリユートさんには(ありがたい事に)伝わったらしく、即座に金色の波紋から鎖が飛び出してクラネルさんを拘束する！

「しやらくせえっ!!」

が、次の瞬間にはそんなことを叫んだクラネルさんが、鎖を引きちぎってしまった。流石のこれには、私もリユートさんも固まってしまふ。ねえ、それ宝具だよ？ いくら劣化してるって言つても、バーサーカーも引き千切れなかつたんだよ？ あ、いや、神性がうんぬんって話が……あれ？ え？

「で、リユート。師匠である私を拘束して、タダで済むとは思つてねえよな？」

ちよつと頼みの綱が全く効果を示さなかつた所為で、頭の中がグルグルしてて考えがまとまらない。ああ、どうしよう？ そう思つて隣のリユートさんに目を向けると、何故か物凄い冷や汗を流してる。

「イオリさんを差し出します、見逃してください！」

わ、私を売りやがった！ 助けてくれるって約束してたのに！

「ちよっ!! リユートさん!? ナンデ!」

「やつぱり人って、自分の身が一番大事だよね……」

そんな精一杯の私の抗議は、遠い目をしたリユートさんには届かなかつたようだ。いや、天の鎖がダメだった時点で私もリユートさんには期待してなかつたけどさ！

「それじゃあイオリちゃん、そんなバカ弟子は放つておいてこつちでお話ししようか？」

そんな風にとても楽しそうな笑顔……私から見れば、まるで悪魔のような笑顔……でクラネルさんが言ってくる。リユートさんは、パカッと開いた床に吸い込まれて何処かへ行つてしまった。

私の頭の中で薬品棚とクラネルさんの性的嗜好がグルグルと回る。スキルまで発動した高速の思考で出た結論は、どうあつても私は美味しくいただけられちゃうとの事だった。

(マズイ、それはマズイぞ……僕のギリギリ残ってる男として大切な何かも、私の女の子として大切な何かも一緒くたになくなっちゃう……気がする)

くそう……考えろ、考えるんだ私僕この状況からは、どうすれば逃げられる？ ハッ！ 恥を忍んでアレをやれば、一応お礼をしたことになるし逃げられる。いや、でもそれにはリユートさんの位置が……

「クラネルおねえちゃん」

「ブフツ、何かな？ イオリちゃん」

「リユートさんは、どこに行っちゃんだんですか？」

「あのバカ弟子なら、今頃は家の前に放り出されてるだろうな。それがどうかしたのか？」

「ちよつとしんぱいだったので」

よし、条件は揃った。私僕は、絶対に無事に帰ってやる！

第18話 リュートさん今何してますか？忙しいですか？助けてもらっていいですか？（切実）

「全く、こんな可愛い娘に心配されるとかあいつも隅に置きねえな」

私の今の姿は銀髪オッドアイの、まるで2次元のロリだ。そんな姿の私だ、あざとさと可愛さを全力で出してアレをやれば、ロリコンなら1発で撃沈できるはず……いや、出来てくれないと困る！

「クラネルおねえちゃん、ちよつとしゃがんで！」

「おう、いいぞー！」

快くクラネルさんはしゃがんでくれた。よし、まずは成功だ。私は、普段なら絶対にやりたくないけどトトトツとクラネルさんに近寄る。どこぞの紅緒様と同じならいけるはずだ……もうシスコンもロリコンも同じでいいよね？

そして、クラネルさんの耳元で……

「たすけてくれて、ありがとう！ クラネルおねえちゃん、大好きー！ きちんと発音は出来るのだが、わざと年相応な感じでそう小さく言い、クラネルさんのほっぺにちゅーをする。『ありがとう』『おねえちゃん』『大好き』の三大ワードを打ち込んだ上でのちゅーだ、効いてくれよ！」

「ブハアツ!!」

そんな私の祈りが届いたのか、クラネルさんは部屋の中に大きな赤い花を咲かせて仰向けにバタンと倒れ、気絶した。

「だ、大丈夫だよね？ 本当に気絶してるよね？」

そう言っただけはクラネルさんをついてみるが、反応は無い。よし、私は賭けに勝ったんだ!! けど、まだこの作戦は終わってない。ここから無事に脱出するまでが作戦なんだ。

「《金属精製・アダマンタイト》！ あと《鍊金》！」

気絶しているクラネルさんの関節辺りを全て、今の私が作れる中で一番硬い金属のアダマンタイトを作り、鍊金で変形させ拘束している。天の鎖を引きちぎってたから、気休め程度だけど数秒くらいなら

この人の行動を止めてくれるはずだ。

「よし、あとは逃げる！」

私は自分に使える限りの付加系の魔法を使い、全力で家の中を駆け抜けていく。爆発は流石に起こしてないよ？ 色々不都合だし。

目の前に倒れている柵を越え、短い通路を走って一階に登るまだ後ろに気配もないので、安心して玄関に向かう。目の前には玄関の扉、その向こうにはヴァマーナという空への逃亡手段を持ったリユートの気配を感じる。

私は走ってきた勢いのまま扉を開き、リユートさんに向かって叫ぶ！

「リユートさん！ 今すぐヴァマーナを出し……て？」

「イオリさん！ ナニもされてなかつ……あ」

私がそう言いかけた時に、シユルツという音とともに私の左脚に緑色の太い蔦が絡みついた。発動された魔法の気配、そしてクラネルさんの気配がいつの間にか背後からしている。これは……詰んだ。

「い、嫌だ！ リユートさん、助けて！ 私はまだ、色々大切な物を失いたくない——」

懸命に伸ばした私の手は、リユートさんの手を掴むことなく空を切り、無慈悲にもドアはボタンと閉じられた。

『恐怖というものには鮮度があります』

私の頭に、なぜか青髭の旦那のセリフが浮かんだ。

◇

唐突だけど、一つ昔話を聞いてもらいたいと思う。勿論、僕とクラネル師匠の話だよ。いきなりなんでって思う人もいると思うんだけど……

『全く、いきなり走り出しやがって……危ないじゃねえか』

『ひゃあつ！ ど、どこを触ってるんですか!?!』

『怪我の後遺症とか痕が残ってないかの確認だ、気にすんな』

『それとは明らかに違う場所もひゃうんっ!?!』

扉のすぐ向こうから、こんな声がずっと聞こえてきてるんだよ。いや、うん、流石に何か違う事を考えてないと僕もまあ、所謂口リコンっ

て分類の人間だからね、何か間違いを起こしそうなんだよね。師匠め、うらやまけしからん。

えっと、それで僕と師匠の関係だけど、一言で説明するとやっぱり師弟関係だね。やっぱり師匠と会ったところから話すとしようかな。誰に喋ってるかは分からないけど、僕の精神的な平穩の為に付き合ってもらいたいな。

僕と師匠が初めて会ったのは、地球で言う小学校みたいな所からの帰り道だったんだ。当時の年齢は10歳ね。いつも通りの帰り道の途中に立っていた長い青髪の綺麗な人……それが僕の師匠に対する第一印象だった。

その後帰ってから両親に聞いてみると、多分クラネル・レイカーさんだろうって言われたんだ。流石にその名前はその頃の僕も知っていた、レベルカンストの凄い強い医者って有名だったからね。

加えてその頃の僕は強くなりたいたいと思ってたんだ。神様に貰った王の財宝は自分のMPじゃ武器の一つも取り出せないし、天の鎖も神性を持つてる人が居ない(だろう)この世界じゃあんまり役に立たない。

だから、戦い方を教えてくれる師匠が欲しかったんだ。その事を両親に伝えたら、物凄く微妙な顔をしていたけど了承してくれた。何故僕の両親がそんな顔をしていたのかは、次の日、よく実感することになった。

『そ、その薬はなんですか!? あ、明らかにヤバイ色をつ!』

『何、怖いのは一瞬だ、すぐ楽になる』

……若干イオリさんが心配になつてきたけど続けるよ。

その次の日は丁度休日だったから、教えてもらった師匠の家に向かったんだ。まともに取り合ってもらえるとは思ってなかったけど、せめて話くらいは聞いて欲しくてドアをノックしたんだけど、いくら待ってもドアは開かなかった。そのくせ内側からガゴ音はしてたから強盗か何かかかって思ってた王の財宝から安物のナイフを取り出して、失礼しますって言って家に入ったんだ。

変態がいた。

うん、大量の僕の級友とか隣のクラスとかの女の子の写真を必死に片付けてる師匠がいた。僕は、思わずナイフを取り落として固まっちゃった。第一印象はあっさり崩れ「あ、これダメな人だ」そんな言葉が僕の頭に浮かんだ。そして、次の瞬間には呆然としている僕の前に師匠は立っていた。そして僕の肩をがっちり掴んで言った。

「君は何も見えてない、聞いてない、誰にも言っちゃいけない。いいね？」

「アツハイ」

ついそんな言葉が出てしまった。元オタクの性ってやつなのかな？ まあそんな僕だけど、ハッと我に返って自分がここにきた目的を思い出した。

「だ、だったら僕に戦い方を教えてください！」

「それは、私を脅してんのか？」

そんな言葉と共に、僕に強烈な殺気がぶつけられた。頭ではたかが性的嗜好をバラされるだけでこんな怒るの？ と思いつつも、僕の足は震え正直チビリそうなレベルで怖かった。

「そ、そうです！ 学校中に……いえ、保護者にも言いふらします！」

指だけはビシッと突きつけそう言うと、アレだけ強烈だった殺気がピタリと止んだ。

「ふん、私の殺気を受けながらそんな事を言えるとはな。いいぜ、暇な時間なら付き合っつてやる。だけど、言ったら分かるな？」

緊張が切れへたり込んでいた僕はコクコクと頷いた。僕と師匠の関係はこんな感じで始まったんだ。

修業はスパルタだった。体力作りとか言っつて延々と回復魔法をかけられながらマラソンをしたり、組手（僕のレベルは15向こうは300）をしたり、無手で魔物の群れに放り込まれたり……色々あったなあ……。

因みにこの1週間後、このやり取りを聞いていたらしい近所の人の密告と今までの犯行のせいで今の場所に家移された。その日から修業の難度がノーマルからルナティックに変わったのは言うまでもないかな。うん、思い出したくもないけど、そのお陰でこれまで生き

ていられてるっていうのも事実なんだよね。

「師匠に対する信頼は、僕がイオリさんを助ける為に呼びに行った通り《医者としては》かなり高い。」

理由は色々あるけど、やっぱり一番この事に繋がるのは、修業中にも色々急患が運び込まれてきた事があつたからだね。どうしてそうなったのかは知らないけど、左腕がキレイに無くなってる人の腕を再生したり、何らかの魔物にやられたのだろう腹の中身が色々見えちゃってる人を数秒で治してたりしてるのを見て、凄いとしか思えなかつたよ。あと、そんな人を見てリバーズしちゃつてた僕に優しくしてくれたらね。

「媚薬って出てますから！ 出てますから！！ 幾ら何でもそんなのは嫌ですって！！」

『んなヤワな魔法、私に効くかよ！』

『こ、こんなに早く処女喪失とかしてたまるかあああつ！！』

中から水音とか爆音とか帯電してるような……嵐のような音が聞こえてくる。……やっぱり師匠は人としては尊敬は無理だね。流石にそろそろイオリさんを助けに行かないと、後で死ぬ程文句を言われそうだし……

「師匠！！ 前からあんまりしつこいと嫌われるって言ってますよね！」

僕はそう言ってドアを開けた。

第19話 やはり私の貧乏生活は間違っている

「ふえ……ぐす……ひつく……もうずこし早く助けてよお……。ほん
とに、ほんとに怖かったんだからね!」

「あーよしよし。僕が悪かったって」

本当に、リユートさんが助けに入ってきたタイミングはギリギリ
だった。血走った目のクラネルさんが私を押し倒し、怪しげな薬品
(解析によると媚薬)を私に嗅がせる寸前だった。無駄に高い五感の
せいで若干吸っちゃったけど。身体がムズムズするし火照ってるの
は、多分そのせいだろう。

因みに決め手は、『これ以上やると! クラネルおねえちゃんとな
んて、一生口きかないもんね!!』だった。

まあ、それは置いておいて。今の私はリユートさんにおんぶされて
いる格好だ。そんな私達を、大半の人は微笑ましいものを見るような
眼で見ているが、一部の人はリユートさんに奇異の眼を向けている。

「気に入らないんだよなあ……」

「え? 何が?」

ヴォダンでえーと……ベートじゃなくて、バイトさんか。そう、バ
イトさんが気にしていたみたいに、獣人にとつて耳がないのはやつぱ
りおかしいようだ。最近は、ミーニヤちゃんにそのお姉さんとか、
クラネルロリコンの変態とかの人としかあってなかったから忘れていたけどね。

思い返せば、いつも私かレーナさんがくつついていたおかげか優し
い目線の人が多かったが、リユートさんに嫌な目線を向けている人も
少なからずいた。なんで気づかなかったんだよ、私。

「周りの人のリユートさんを見る目。今は私を背負ってるからこうだ
けど、一人だと相当じゃないの?」

「あー……なるほどね。まあ、レーナを助けた時にこうなるのは覚悟
してたから」

そうリユートさんが苦笑を浮かべる。確かにそう覚悟してたなら
いいのかもしれないけどさ、だけどさ!!

「曲がりなりにも自分の命の恩人が、こんな眼で見られてるとか許せ

ないんだよお……リユートさんが嫌じゃないなら、コレと同じ原理で耳くらいなら生やせる物作るけどどうする？」

そう言っただけは自分の銀狼の腕輪を指差す。今こそ変身のEXスキルを使っているが、かなりお世話になった腕輪だ。魔法とかの隠しスキルは無理だけど、獣耳を生やすくらいの機能なら再現できるはず。勿論、本人の同意があればだけど。

「治すっていう話なら断ってたけど、それならお願いしようかな？」

「よし来た！　って言いたいところだけど、治すなら断ってたんだ。なんで？」

「この無くなった耳は、僕が未熟だった証だからね。慢心王の能力なんてものを持つてる今、慢心は敵、実際二人とも無事では逃げ切れなかった訳だし。まあ、格好良く言うて自分に対する戒めだよ」

「ほへえ……あ、そろそろ降ろして、自分で歩く」

そんなにかっこいい感じのことを考えてたのかと思いつながら、私は背中から降ろしてもらおう。もしかしたら、クラネルさんが治さないのもそういう理由が……いや、幼女じゃないからか。うん、間違いない。「かっこ良く締めたのにスルー……まあ、いいよ。けど、そろそろどこに向かっているのかは教えて欲しいな」

「言っただけじゃなかったっけ？　鍛冶屋だよ鍛冶屋」

「イオリさんが、鍛冶屋……だって？」

リユートさんが心底驚いたような顔をしている。そんなに私が鍛冶屋によるのが信じられないの？　あ、8歳がそんな物騒なとかは今更なしね。

「まあ、武器防具を売りに来たんだよ。今の私の全財産がそれだよ？」
私はそう言っただけでリユートさんに取り出したギルドカードを渡す。それにはこう書かれているはずだ。

|||||

名前　イオリ・キリノ

性別　女

年齢　7

生まれ 不明

ランク B

ゴールド 54, 350

|||||

「大銀貨5枚と銀貨4枚、それに大銅貨と銅貨が少ししかないって……何があったのさ」

「えー……心当たりないんだ。じゃあヒント①シヤルフに来るまでの間、料理をしてたのはだ〜れだ?」

「いきなりクイズか。まあそりゃあ、イオリさんでしょ?」

そう言うリユートさんに頷く。まずは正解だね。

「じゃあヒント②普通の旅の食事は?」

「干し肉とか、固く焼き固められたパンとからしいよね。まあ、僕とかイオリさんみたいに収納できるスキルとかアイテムがある人は違いたいだけだ。でも、その日狩った魔物とかを食べてた筈だし、食材費じゃないよね?」

「そうだよ。ラストヒント、料理の味付けはどうだった?」

「懐かしい日本食みたいな味付けで、スパイスとかも効いてて……もしかして、香辛料とか調味料?」

「正解! 特に胡椒が高いのなんの……」

私は大きいため息を吐き頭を押さえる。地球の歴史だと中世くらいでは胡椒が金と同じくらいの高値で取り引きされてたって話だったけど、こつちの世界でもかなり高い。元々持っていた分を買い足してたらあつという間に金欠になった。

「オリハルコンテイラノの報酬も三等分だったしね。最終手段に出た訳」

「でも、それなら僕はいらなかったんじゃないの?」

リユートさんがそんなことを言ってきた。むう……少し考えれば分かるだろうに。

「ねえリユートさん、私の年齢は知ってるよね?」

「身体は8歳精神的には15歳だよね?」

「うん、だからね。保護者同伴じゃないとせいぜいが盗品扱いだよ、どうせ。だからお願いね、おにーちゃん！」

「いや、まあ、うん。分かったよ……」

そんなことを話しながら、私達は鍛冶屋に入っっていった。

……うん、この最終手段はかなり使えるかもしれない。というか緊急時以外は止めとこう。しめて265万と8790ゴールド也。

アイスソードしゅごい……

第20話 鬼畜！ロリコン！鬼！悪魔！匂いフェチ

「やっつと、帰ってこれたあ……」

そう言つて私は、当てがわれている部屋……まあ、リユートさんとレーナさんの部屋なんだけども……のベッドに大の字で倒れこんだ。みんなとの夜ご飯も終わり、本当にやる事が無くなった時間帯が今だ。リユートさんは多分訓練場にいるし、ミーニヤちゃんも多分レーナさんとか、ラファールさん？ と一緒に風呂タイムだ、いつもなら身体を軽く拭く風呂に入って、髪を手入れしてそのまま寝るのだけ……

「約束したし、腕輪作らないとね。《デイバインスペル》！」

そう呟き私は、今まで呪いがかかっていたという事で外すことの出来なかった腕輪に解呪の魔法をかける。MPを大量に

「あつ……うつ……くう……んつ……」

今更すぎるのだが、銀狼の腕輪の魔法によつて作られていた私の獣耳&尻尾は殆ど感覚が無かった。それは《変身》のスキルを入手して変身してる最中でもそうだったのだが、どうやらそれはこの腕輪の所為だったらしい。

普通の人間……いや、人族か……まあ、普通にはない第二の耳や尻尾が存在する感覚がいきなり出てきて、そのムズムズするというか気持ちいいというか……なんかそんな感じなのだ。SAOの小説で、シノンが尻尾を握られたときにあんな反応をしてた理由がよく分かった。

「はあ……はあ……びっくりしたー」

私は乱れた息を整えながら、今しがた外した白色の腕輪を見る。大きな破損こそ無いものの、大小様々な傷が付いている。

「今までずっと一緒だったからなあ……」

今までの私の戦いの軌跡？ のような物だと考えると、なにか感慨深いものが込み上げてくる。私を買った物の中で、最初の形を留めて

いるのは服とか下着とかを除くとこれだけなんじゃないだろうか？

「それは置いといて、リユートさんの腕輪だよ腕輪」

自分に言い聞かせるようにそう言い、腕輪に解析をかけ、何がどうなつて変装なんて効果を発揮していたのか観察する。

|||||

変装道具・銀狼族タイプ

属性 無

耐久 自動修復

《スキル》

変装・銀狼族 LV | 霊体化 LV | 五感強

化 LV 5

着脱不可 LV | 水・氷適性極大化 LV |

《備考》

ユニーク装備。装備すると、銀狼族に変装することができる。

変装先の銀狼族の特徴を模倣し、水・氷の魔法の適性が上昇するが、呪いにより着脱不可になる。

|||||

買った当時では見ることに出来なかった情報が浮かぶ画面越しに、腕輪が彫り込まれた10個以上の魔法陣がそれぞれ発動し、更にそれらがやたら複雑に組み合わせられて出来ているのが見えた。

「これはまた再現もアレンジも難しそうな……」

つついそうボヤいてしまうが、そんなことを言っただけでも始まらない。私は文字の映る画面を消し、魔法陣1つ1つを調べ始めた。

◇

「ここが呪いだから変えるとして……魔法系の機能はオミットするでしよう？ で、こうすると安定しなくなるからここを繋げて……」

「何してるの？ イオリさん」

僕が日課の素振りを終えて一風呂浴びて（勿論男湯）部屋に戻って

くると、ベッドの上でイオリさんが何かをしていた。その手元には小さな白色の腕輪と、対照的に大きな黒色の腕輪があった。

「んー……で、ここをこうして……。あ、おかえりリユートさん。昼間話した腕輪を作ってるんだよ、もう少しで出来るよ！」

そう尻尾をぱたぱたさせながら言ってくる。あれ？ イオリさんの尻尾ってあんなに動いてた？ まあ、気にすることじゃないか。

「やる事が早いね。凄く嬉しいんだけど……イオリさんって、獅子族の人の耳を見た事あるの？」

「あつ」

ぱたぱたしていた尻尾がピタリと止まり、イオリさんが「忘れてた」っと読み取れる表情になった。タラタラと冷や汗が流れているのが幻視できる。

「そうか……そこだ。なんか微妙に違ってたのは……。ど、どどどどうしようリユートさん！ 私見た事無いしそんな知り合いも居ないよ!？」

「いや、最近毎日会ってるでしょ？」

「ふえ？」

イオリさんがキョトンとした表情で固まり首を傾げる。珍しくポニーテールじゃない長い髪がサラサラと流れる……。くつ。とりあえず鼻血のでそうな鼻を押さえて僕は言う。

「知らなかったの？ ミーニヤ様とかラファー様って獅子族だよ？」

まあ、王家以外にも居るといえば居るけど、イオリさんに一番身近なのはミーニヤ様なんじゃない？」

「なん……だと」

「知らなかったんだ。イオリさんなら真っ先に解析を使ってそうだと思っただけど……」

「だって失礼だし……」

そう言っつてイオリさんはプクークと頬を膨らませる。あざとい。この人元男なんだよね？

「まだ三人ともお風呂だろうし、上がってきたら行ってみるかなあ……」

「いや、今から行ってきてもいいと僕は思うけど？」

「それは、私を元男だと知ってて言うてるの？」

イオリさんがキツと睨みつけてくるけど、我々の業界ではご褒美です。そして僕は決定的な一言をイオリさんにぶつける。

「こつちの世界基準だとなんとも思わないけど、日本人としては少し臭うよ？ イオリさん」

「そんなんっ……」

そう呟いた後イオリさんは少しの間目を瞑り、考えた末か目を開けて言った。

「仕方ない……か」

「行ってらっしゃい」

「はあ……」

テキパキと腕輪を片付け、重い足取りでイオリさんは大浴場へと向かっていった。

「うひゃあ……」

脱衣所もそうだったが、浴場も凄く広かった。数十人が入れそうな……それこそ泳ぐことが出来そうなほど大きな円形の湯船があり、レーナさんが浸かっており入ってきた私を見て目を丸くしている。

そして、その少し前の場所でミーニャちゃんがラファアーさんに頭を洗われていた。泡が立ってるからシャンプー的なものがあるんだろう。

「……いらつしやい、イオリちゃん」

「イオリちゃん来てるのー？」

「あ、お、おじやまします」

そう言ってきたラファアーさんの【謎の白い光】は、私とかミーニャちゃんとかの【謎の白い光】とは比べ物にならない程大きかった。というか私の【謎の白い光】が一番小さい。

「これが……きよーいの格差しやかいっつ」

私がボソツとそんなことを呟いていると、ザバアツという音を立ててレーナさんが立ち上がり、私に向かって歩いてくる。立ち上がった拍子にその私達よりは大きいが決して大きいとは言えない【謎の白い光】とか【謎の白い光】とかが露わになってるのだが、全く気にしてはいないようだ。

「私は寸胴……イカ……すぶらとうーん……」

「何言ってるのイオリちゃん？ いや、それよりも……イオリちゃんって元々男の子だったんでしょ？ なんでここに……」

「いや、その事なんだけどね……なんかね、なんとも思わないっぽいんだよ」

今私の視界に映っている【謎の白い光】とか【謎の白い光】とか、はしやいでいるミーニャちゃんの肌色とか【謎の白い光】とかを見て、恥ずかしいと思ったり劣等感を感じてる私はいるけど、【謎の白い光】してる僕とかは微塵も感じられない。変わりつつあるって事、認めないといけないな。

第22話 第二の大イベント

「ハッ！ い、いやな夢を見た……」

私は翌日の朝、日も昇り切らないような頃、嫌な夢を見て飛び起きた。全く、三人ずつのクラネルさんとリユートさんにかごめかごめされるとか……。

私の隣にはレーナさんがいるし、リユートさんは隣のベッドで寝ている。完全に夢だ……よかった。

「こんな朝っぱらから……また鍛冶？」

「怖い夢見て起きただけだよ……しに行こうとは思ってるけど」

地味に大きな独り言で、リユートさんを起こしてしまったようだ。私の趣味嗜好を把握してる上に、寝起きで言い当てるとか……なんてロリコンだ。

「ふわあ………いってらっしやい。けど、五月蠅くしたら迷惑だから、しないように」

「はあい！ 行ってきます！」

私はそう返事をしながら部屋を出た。なんだろう、一瞬リユートさんがお父さんみたいな雰囲気……うーん、なんて言えばいいのか分からない。

「まあ、そんな事はどーでもいいか！」

そんな事を言いながら、いつ入れたか分からない串焼きを取り出して食べながら私は訓練場へ向かった。一応、異次元収納の中は時間が止まってた筈だから大丈夫だと思っ

「はむ、やっばりひやるほひはらほうふはらはねんぐつ、面白い金属も色々あった筈だし」

ストレス解消には、趣味に没頭するのが一番だよね！

「♪ ～♪♪ ～」

訓練場についた私は、隅の方でいつも通り炉を鼻歌混じりで作り火を入れる。火種は勿論神様からの手紙だ、だってよく燃えるんだも

ん。

(今までの事を考えると、問題には絡まれやすいけど一回大きな問題があった後はしばらく安全だもんね……)

実際オークや、オリハルコンテイラノの事件があった後はしばらく平和な日々が続いていた。今回もミーニャちゃんの事があったから、しばらくは安全にやりたい事が出来ると私は考えてる。

「準備完了ー！ やりますか！」

目の前にはすぐにも鍛冶が出来る温度の火が燃えている炉、金床、私はワンピース姿でランドセルを背負い、右手には最近めつきり武器として使うことのなくなったハンマーを握っている。

因みにこのランドセルは、カリヨンを作っていた時に余りにもすぐ私のMPがなくなり気絶しそうになったのでついで作った物だ。中にはクリスタライトメタルがMPを込めた状態でギッシリ詰まっている。かなり重い、私の最大値の何倍ものMPが込められているので鍛冶作業中に気絶なんて事は起きない。

「まずは結構破損してるマイク剣の修復と強化を――」

そう言っただけで私が剣を取り出した瞬間、大きな鐘の音と物凄い焦りの色を含んだ声が聞こえてきた。

『緊急警報！ 緊急警報！ 突如出現した大量の魔物が東西南北からシヤルフに接近しています！ クラネル様、並びに冒険者の皆様！ 準備が完了次第、直ちに迎撃して下さい！』

急速に鍛冶を目の前にしてワクワクしていた気分が消えていく。何？ あんなフラグ染みた事を言ったからこうなったの？ というかこんな朝早くに起きてる人なんているの？

「それよりも、誰だよ僕私の楽しみを潰してくれやがった奴は」

先ほどのワクワクの裏返しのように込み上げてきた怒りに釣られて、私の周りの空間に小さなスパークが走り、風が渦巻き始めた。そんな事は無視して私は考える。

「クラネルさんの家は街の東、ギルドは西で、ここは北。南には何があるか分からないけどまあいいや、とりあえず私は、ここの魔物を殲滅してやる。ふふふ……ふふふふ……」

私はそのまま幽鬼のような足取りでお城の裏手へと歩いていった。後で聞いた話だけど、ギルドと城門は24時間体制なんだって。

◇

「えっと、お嬢ちゃん？ 今からここは凄く危なくなるから、早くお家に帰った方がいいよ？ お母さん達も心配してるだろうからね？ そんな格好していても、凄く危ないんだぞ」

お城の裏手から出発し北側の城門に着いた時、そこは少ない衛兵さん達が集まり警戒していた。そしてそれを見ながら城門を越えようとしたら、久し振りに着る冒険者スタイルで来たのに全身鎧の隊長っぽい人に止められた。今ここ。

むう、イラツときたからちよつと暗いこと言ってやる。

「私、家族なんて居ませんし、これといって家って呼べる場所も無いです。それに私、こんな見た目でもランクBの冒険者なので、戦力にはなれると思います。今はどんな状況ですか？」

少なくともこの世界ではね。まあ、保護者ならリユートさん達になると思う。それよりも、今は魔物の大群私の八つ当たり対象の状況の方が重要だ。

「あ、ああ、すまん、こんな事を聞いてしまつて」

「いえ、別に気にしてないです。それよりも状況は？」

「まだ猶予こそあるが、数十種類の魔物からなる大集団がシャルフに四方から進行中だ。もう城門の上からは土煙が見える程近くだ。主要な実力者は戦争へ行っているし、こんな早朝だ、ほとんど人も集まらない。俺達の役目は、クラネル様が来るまでここを絶対に死守する事だと思っているよ」

どう八つ当たりしてやろうかという事ばかり考えていたが、若干諦めたように笑いながら言う隊長さんや、それにつられて笑うこの場に集まっている人達を見ていたら、そうもいかなくなる。ん、ちよつと待て、クラネルさんが来るだど？

「自分達でどうにか出来るとは思わないんですか？ 皆さん強そうですし」

「はは、それは無理って話だよ嬢ちゃん。侵攻してきている魔物にはSランクの龍も混じっているんだ。俺達じゃ到底かなわないよ」

「そう……ですか」

そうか……このままもたしていたらあのロリコンさんが来るのか……早くなんとか……絶対になんとかしないと、また色々される。あれ？　なんかもつとシリアスな事を考えてた筈だけど……そんな事よりこつちの方が大事だ！

「竜なら、前にも一回倒してます！　クラネルさんが来る前に、私がどうにかしてみますよ！」

「待て！　嬢ちゃんの言ってる竜と俺の言ってる龍は——」

なにやら引き止められるような言葉が聞こえた気がしたけど、クラネルさんが来ると分かっている以上ゆっくりなんてしてられない。主に私の個人的安全の為に、とつとと退場してもらわないとね。

そんな事を思い城門を駆け上がりながら、私はカリヨンの時にランドセルのおまけで作った、小さな可愛らしい色の杖状のペンダントを取り出す。

「闇の力を秘めし鍵よ、真の姿を我の前に示せ、契約の下、イオリが命じる、レリイイイズ！」

第23話 カードキャプターイオリ

私の小さな手の中に収まる程度の大きさだった杖が、ちよつとしたステッキくらいの大きさに伸長する。伸びる仕組みは、魔法を記憶できるとっていう素材の金属にアイテムボックスを付加して色々やっただけだ、長くなるので省いておく。

「カード無いけど、『翔』^{フライ}！」

先端の方から旋風魔法で作られた羽状の力場みたいなナニカが発生して、城門を駆け上がってきた勢いそのままに飛び始める。そのまま持っていたんじや飛びにくいから、足で杖は挟んである。

——称号 魔法少女 を入手しました——

「そこはせめて少女にして欲しかったなあ……まあ、こんな格好の魔法少女がいてたまるかつては思うけどね」

城の最上部を軽く見下ろせる高度で羽の生えたピンク主体の杖に跨り、白いワンピースの上に緑がかかった金属製の腕甲脚甲に胸当て肩当てをつけていて、両腰にはそれぞれハンマーと鎌剣が吊つてある。短パンの少し下にはいざって時の為の長い針が何個もあり、場違いなランドセルを背負っている。

「自分の眩きで改めて考えてみたけど、まさしくカオスだね」

そう眩きながらも、千里眼^{望遠機能}で土煙の上がついている場所を見てみようとしたが、かなり近くにまで魔物の群れは迫っていて使う必要は無かった。多分このまま飛んでいけば20分くらいの距離だと思う。

「色んな種類の魔物がいちにーさんしー……まあとにかくいいの、あれは、特地甲種害獣ドラゴン！ なんて言ってもリユートさんしか分からないか。はあ……というかどうかどうしようあの群れ」

こんな事を言った通り、群れの上空を飛んでいるドラゴンは四肢とは別に翼を持つ西洋風ドラゴンだ。因みに色は赤で、私を見てるのか凄くプレッシャーを感じる。けどまあ。

「クラネルさんの方が100万倍怖かったけどね」

一応今の私の魔法でも、大半のカードの効果は再現出来るだろうけど……多分500体と少しもいる大軍には、はつきり言っただろう

らいいのか見当もつかない。

……うん、真面目に魔法は使おう。そう思い私は杖を握る手に力を込めて、魔法陣を展開させる。

「いくら無詠唱で出来るって言っても、雰囲気って大切だし」

MPがガリガリ削れていく感覚と共に、銀色の魔法陣が幾つか重なつていき私を中心に立体的な構造となつていく。それを尻目に黒歴史厨二病の頃の記憶から、確かそうだったなと思う詠唱を口にする。

「え〜つと、確か……時は来た、許されざる者達の頭上に、星砕け降り注げ！」

杖から離れた右手を土煙巻き起こる場所に振り下ろしながら、私は詠唱を締めくくる。

「全員潰れる！メテオ!!」

次の瞬間、白み始めてきた空の彼方でチカチカツと何かが無数に明滅した。

何、原理は簡単で、私の魔法が届く限界の距離（上空）に私2人分くらいの直径の金属塊を炎と雷を付加した状態で精製、旋風魔法でその軌道を修正しながら相手にぶつけるという、たったそれだけの魔法。だけど……

「初弾、弾ちやーく、今！」

気分の高揚してる私がそんなことを言った瞬間、土煙に空から流星が落下した。そんなに離れていない場所に魔物の群れがいるため、私の浮かんでいる場所まで轟音と衝撃波が届く。

ランドセルの魔力も使って私が作った金属塊の数は40。本物の隕石着弾と比べると小さいものの、かなりの威力を誇る流星がまだ大量に残っているのだ。安眠妨害？知らない子ですね。

「こうか　　は　　ばつぐんだ。つて、うそおっ!？」

降り注ぐ流星を、ドラゴンはヒラリヒラリと回避している。下にいる魔物は回避も防御も出来ていないというのに。くっ、流星は命中率90ってことか。

「グガアアアアツ!!」

「うひゃあつー!」

なんて思っていると、まだ声の届かない距離の筈だったのにドラゴンの咆哮が轟き、杖から落ちかけた。体勢を立て直しドラゴンを見ると、眼に怒りを浮かべてこちらに突撃してきている。

「マズイってそれえー！」

ギルドの放送や、私の現在進行形で発動してる魔法の轟音で起きている人は多いだろうけど、それでもまだ早朝も早朝。そんな時にこんなドラゴンが突撃してきたらとんでもない事になる。

それを防ぐために今の私ができることは……煽って注意を引きながら、私の魔法の範囲内に突っ込む事！

「やーいやーい空の王者(笑)！ じっくりワールドツアーとかして恥ずかしくないのかー！」

「グルアアアアッ!!」

「ちよっ『水』」
ウオーティ

ドラゴンの上を加速しながら通過しようとした時放たれた猛烈なブレスに対して、初めてまともに使う蒼海魔法でどうにか迎撃する。

「あつぶなあ……」

所々赤いラインの見える上空で、ドラゴンと向かい合う。名前は炎龍、レベルは……119、HPはまだ8割近く残っていてMPは6割。あ、称号に《空の王者》って本当にあったよ。で、業火耐性とかいうスキルもあると。

(どうしよう？ メテオを当てるかりユートさんを待つくらいしか勝ち目がない気がするんだけど)

「グギアアアッ！」

「ああもうやるだけやってやりますよおっ！」

突進してきたドラゴンを躲し、自分の今の手札を考える。メテオが発動中だから難しい魔法は使いたくないし、近接戦は無理……動きを止めてメテオに当てるのが一番いい方法か。残りのメテオは11発……無理だったらリユートさんを待つ方向だね。

「くらえ『光』！
ライト」

「そんでもって『風』と『木』に『地』と《鍊金》！
ウインディ」「
ウッド」「
アーシー」

ついでに『雷』！
サンダー」

旋回して再度突進してきたドラゴンの眼の前で、猛烈な光を爆発さ

せる。ゲームのように落下こそしなかったが動きが止まったので、今使えるギリギリまで魔法を発動する。

動きの止まったのでドラゴンに風と植物が纏わりつき動きを妨害し、全身の至る所にアダマントタイトが《錬金》で形を整えられて拘束具として付けられた。ついでに鼻付近にはキノコの胞子を精製してあり、全身にスパークが走ってる。

龍の眼から『お前やり過ぎだろ』って意思が伝わってくるけどそんなこと知らない。私みたいな弱い幼女が、ドラゴンなんて化物に勝つにはこうするのが一番確実だもん。

「うーん……：汝のあるべき姿に戻れ、クロ……いや、イオリカード。なんちゃって」

抵抗の意思が消えたつぽい、段々高度の下がっていつているドラゴンを見て、なんとなくそんな事を呟いてみる。

「は!? え、ちよ、ま」

もうギリギリしか残っていないMPがゴソツと削れる感覚と共に、ドラゴンが銀色の光に包まれて、その存在が中心に収束されていく。そしてカツと一際激しく光り、私は目を瞑ってしまう。

「アイエエ……」

目を開けると私の目の前に、ペルソナ！ って出来そうな感じで
【THE DRAGON】という文字とさっきの龍っぽい絵柄のカードが、回転しながら降ってきた。とりあえず落ちてきている真下に《異次元収納》の入り口を開き仕舞ったところで、魔眼が急に反応した。

|| || || 《複合魔法／威力 大／範囲 中／流星／危険度 極大》 ||
|| ||

「っ！ 『盾』!!」

ドラゴンに当てようとしていた流星の事を完全に忘れていた。残り90ちよつとしかないMPに無理を言わせて斜めに、使える属性全てを混ぜた壁を張る。

「あつ……」

パラインという音が鳴り壁は砕けたが、ほぼ一瞬の接触だったお陰

で流星を逸らすことは成功した。が、予想以上に高い威力だった為咄嗟に込める魔力を増やし、その所為でMPが底を尽きた。

杖の翼が消滅し落下が始まる。力も入らないし、MP自動回復はあるけど、落ちきるまでもう一回は飛べない。

(こんな終わり方ってないよ……)

そんな風にスキルと走馬灯的なもので加速した時間の中思っていると、視界の端に金色の何かが映り凄まじい速さで接近してきて、誰かが落ちている私をキャッチした。

「りゅーと……さん？」

「少し目を離れた隙に、いつつも無茶して……しかも今回は病み上がりでしょ？ 何してたのさ！」

髪に寝癖の残っているリュートさんが、私をお姫様抱っこの体勢でキャッチしていた。そんな事言われても、喋れないよ……

「かーど、きやぶたあ……」

そう言った後の私の記憶は無い。

第24話 この男は駄目だ

「はあ……やつと終わった……」

私は、頭の少し上辺りから聞こえたそんな呟きで目が覚めた。それと同時に、抱き抱えられてる感覚もする。さっきの声から考えるに、多分私を抱っこしてるのはリユートさんだろう。バレたら面倒なので目は瞑ったままだ。

（まあ、助けてくれた訳だしこれくらい役得はあってもいいか。減るもんじゃないし、私もまだ眠いし）

勿論変な場所を触ったりした場合はその限りでは無いけどね。まあ、偶にはこう、抱っこされてるのも安心していいかなあ〜なんて思ったり。頭に顎を乗せられてるのも不問にしてもいい。

そんな事を思いもう一眠りしようと思った時、リユートさんがスンツと鼻を鳴らした。

「……いい匂いがする」

前言撤回、やつぱりロリコンには抱っこされてちやダメだ。されるならラファアーさんにしよう、そうしよう。

「《バインド・九重奏》クインテット」

私は久しぶりに使う拘束系の魔法を発動してから目を開け、固まってるリユートさんの腕の中から脱出する。場所は、予想通りヴィマーナの上だった。杖は……よし、ペンダントに戻って首にかかっている。ランドセルは多分リユートさんの王の財宝の中だろう。

そう当たりをつけて、私を抱っこしていた体勢のまま光輪に拘束され冷や汗をダラダラと流しているリユートさんに、満面に笑みを浮かべながら話しかける。

「リユートさん♪ 先ずは助けてくれてありがとう！ だから選ばせてあげるね！」

「あ、う、うん。あ、アレ？ どうしてだろう？ イオリさんの背後にレーナみたいな般若が見える」

失礼な、私みたいな元男の現幼女があんな怖いスタンドみたいなものを出せる訳が無いじゃないか。そう思いリユートさんをジト目で見

ると、ビクツと一際大きく反応しリユートさんの流している冷や汗の量が増えた。

「ま、まあそれはいいか。えっと、僕は何を選べばいいの？ イオリさん」

「えーつとね……メテオに当たるか、大鎌で斬られるか、クラネルさんにボコられるか、どれがいい？ 30秒以内に答えないと、今私にした事とかある事ない事泣きながら言いふらすから。この街中に」

寝ている女の子の匂いを嗅ぐとかいう事をしたんだから、これくらいの仕打ちは当然だよ。そんな事を思いながら大鎌を取り出し、肩に担いでカウントダウンを始める。

「にじゅーきゅー、にじゅーはちー、にじゅーななー、にじゅーろくー、にじゅーごー、にじゅーよんー、にじゅーさんー、にじゅーにー、にじゅーいちー、にじゅー」

リユートさんが顔を青ざめさせながら必死に頭を回しているように見える。そういえばリユートさんには言っていなかったけど、今回のメテオはどつちかかっていうと《KEITO☆TENTUI》な感じだから、舐めてかかると防衛も出来ずに潰されるだけだね！

(まあ発動はこのMPじゃ出来ないから、後日になるけども)

「じゅーさんー、じゅーにー、じゅーいちー、じゅー」

「弁明の機会を下さい」

カウントが10を切った時、唐突にリユートさんがそう言った。ちっ、まあいいか。けどね、

「気絶してる私の匂いを嗅いだ理由を、キチンと説明できるなら許してあげるよ！ 制限時間は……」

そこまで言っただけでそう言えばここはどこだろうと思ひ、ヴィマーナの下を見渡す。えーと、結構離れた草原の上か。多分南の。ヴィマーナがこの速度のまま動くと考えると……5分くらいで街に着くだろうから……

「街に戻るまでだね！ あ、速度は落としたり言いふらす」

「あは、あはは……」

シャルフから少しばかり離れた上空で、私のリユートさんに対する

尋問が始まった。

◇

「……という訳で僕はイオリさんの事を何回も助けてるし、これからの役得があつたつていいと思うんだ。別に減るもんじやないでしょ!?! 元男のよしみで許してくれない!?!」

「最後のは除くとして、レーナさんとかミーニヤちゃんとかに同じ事言えるの? リュートさん」

「うっ」

アレから3分とちよつと、私はリュートさんを論破し続けてる。いや、ちよつと、うん。流石にあの修羅場で漏らした事を指摘された時は不味かった。けど、これまでのセクハラ(仮)をクラネルさんにバラすつて言つたら引き分けになつた。

「ふっふっふ……そろそろ時間切れだけど、どの罰を受けるか決め……た?」

フラついた身体を、大鎌を杖代わりにしてどうにか支える。あちやー、やつぱり体力もMPも回復しきつてない状態で無理し過ぎたか。なんだろう、論破するのも疲れてきたし……

「くっ、やつぱ師匠にボコられるのが一番マシか。多分生死の境を彷徨うだけで済むだろうし……」

「リュートさんリュートさん」

俯き物々と喋っているリュートさんに近づき、私は喋りかける。

「な、何? 強制執行?」

「ううん、そうじゃないよ。なんか面倒臭くなつたから、ランドセル返してくれて私をお城まで運んでくれるだけでいいや」

「え、本当に? 本当に死にかける事はない? はい、ランドセル」

「本当の本当だよ。だって眠いし面倒だし、運んでもらえればいいよ。ん、ありがとう」

リュートさんが王の財宝から取り出した私のランドセルを《異次元収納》に仕舞い、私はそう言う。よくよく考えると、疲れきってるし早起きしすぎたし眠いんだよ。

「ほら早く。おんぶ」

「え、でもそれって」

「変なことしなければいいから。ほら早く」

「りよ、了解」

それを聞いた私は、重い装備を全て《異次元収納》に放り込みリユートさんの背中に飛び乗る。

「おやしゆみ……」

「えっ、寝るの!？」

「くー……」

「やっぱりいい匂いがするなあ……」

リユートさんは全く懲りてなかった。

(2人には言っておこ……う)

ギリギリ残ってた私の意識は、リユートさんの大きな背中に揺られているうちに沈んでいった。

第25話 改めて考えると

「はい、これで緊急クエスト完了です。あの、本当に何も無かったんですか？ 魔物の移動の跡とか痕跡とか……」

「数匹魔物が残っているだけで、本当に何もありませんでした。それこそ突然現れたみたい……」

僕はギルドカードを返してもらいながらそんな事を言う。起きたイオリさんかキレたりしてたせいで最後は若干グダグダになっちゃったけど、僕はきちんと今回の異変の調査のクエストを受けていた。

それにしても、今回の魔物は本当にどこから来たんだろう？ どこにも穴とか転移の魔法陣とかも無かったし……そんな事を考えていると、ギルドの受付嬢（城門に出張中）の人が話しかけてきた。

「了解しました。えっと……その女の子が例の同行者の子でいいんですよね？ 随分と安心して眠っているようで何よりです」

先程までの事務的な雰囲気と違って、柔らかい雰囲気です受付嬢の人が言ってくるので、改めて自分の背中でスヤスヤと寝息を立てているイオリさん脅してきた犯人を見ればしらないので耳を立ててみる。

「確かに、本当に気持ちよさそうに寝てますね。無防備過ぎると思いますけど、魔力も体力も使い切っちゃったみたいなんですしょうがないんでしょうね」

「ちゃんと守ってあげるのが貴方の役目だと私は思いますよ。そんな小さな子じゃあ、攻撃魔法1〜2発で魔力が切れちゃいますもんね」
ふふふ、と小さく笑ってる受付嬢の人を見て、改めてイオリさん……というか転生者は規格外なんだなあと思った。あとロリは絶対に守る、そんな事は当たり前じゃないか。

「とりあえず、この子を早く寝かせてあげたいのでこれで失礼しますね。あ、因みに明け方の流星を降らせたのがこの子の魔法ですから」
なんとなくイオリさんが凡人扱いされてるのが嫌だったので、去り際にそんな事を言ってみた。

イオリさんからする謎のいい匂いと、背負っている感触を感じなが

ら城に向かって歩いてる最中、後ろの城門の方から叫び声が聞こえてきた。

◇

「イオリさん、着いたよ〜お城」

「んあ……ふあ……ふえ？」

私は、リユートさんのそんな声で目を覚ました。って、なんか最近同じ事を言った気がするけど、まあいいか。

「おはよお……リユートちゃん」

まだ半分寝ぼけながらそんな事を言い、リユートさんにおんぶされた状態のまま首をブンブンと振って眠気を飛ばす。リユートさんが鼻血を垂らしていたが気にすることではないだろう。

「リユートさん、運んでくれてありがとう。降ろして」

「ん、了解」

私がそう言うと、リユートさんはしゃがんで私が降りやすいようにしてくれた。……手馴れてるな。

とりあえずそのまま降りると、リユートさんが心配そうな顔で私に聞いてくる。

「えっと、あのヴィマーナの上での事は許してくれたって事でいいの？」

「まあ、レーナさんとアンナさんくらいにしか言わないでおくよ」

「それじゃあ約束が違」

「考えてもみてよりユートさん」

リユートさんの反論に覆い被せるように、私はついさつき気づいた大変な事を言う。

「完全にブラコンなアンナさんと、リユートさんスキーなレーナさんに今回の事を知らせなかったら多分私達両方……」

なんだろう、般若が見える二人が地の果てまでも追いかけてきそうな感じがするんだよ。私の第六感が黙ってちやいけないうって言うてる。リユートさんも私の言いたいことに気がついたのか、ゴクリと唾を飲んでる。

「確かに……そうだね。はあ……うん、僕が怒られてくるよ」

リユートさんが何か諦めたような表情をして、お城の中へ入つていこうとする。うーん、なんかこつちが悪いような気になってきた。等価交換じゃないと言うかなんというか……

「あ、そうだ。リユートさん、こつち向いてちよつとしゃがんで欲しいな」

「ん？ 別にいいけど……」

「ていつー！」

丁度いい高さまでしゃがんでくれたリユートさんに、正面から抱きついてみた。んー……別にドキドキとかはしないから、まだ本格的に女の子にはなつてないんだなあ、私。

「え、何？ いや、嬉しいけどつていうかなんか柔らかい匂いががががが」

「なんかリユートさんに迷惑ばかりかけてたからやつただけど……」

鼻血が私にかかりそうなくらいドバドバ出てるし、ガクガクとした振動が伝わってくる。お礼には……なつたよね？

「それじゃあ私は訓練場で色々やつてるから、用があつたら呼んでね〜！」

5秒くらい抱きついた後、ピシリと固まってしまっているリユートさんから離れ、そのまま私はパタパタと訓練場に走っていく。

「さて、まだ時間的にはお昼頃だし、装備類の強化にドラゴンのカードも試してみたいし、今日中で終わるかなあ？」

というかりユートさん本当に頑張つてよ？ 私般若に追い回されるなんていやだからね？

第26話 セーフ

「やっぱり、誰もいないんだなあ……」

訓練場に戻ってきて、私が発した第一声はそれだった。戦争中で使う人がいないのか、私が朝出て行ったそのままの状態だった。まあ、その方が色々と都合がいいんだけどね。

ここ数日ハンマーを振るような鍛冶が出来てなかったので、禁断症状みたいなものが出てきそうだが、鍛冶をする前に確認しておかないといけないことがある。

「これだけは、後日とか後回しにしちゃあマズイよね」

そう呟きながら、ペンダント状だった杖を伸長させて異次元収納からドラゴンを封印したと思いきカードを取り出す。やっぱり、使ってみるしかないよね！

「えっと、確か詠唱は……『クロウ』の創りしカードよ、我が鍵に力を貸せ！ えっと……カードに宿りし魔力をこの鍵に移し、我に力を！

ドラゴン
『龍』!!」

魔力を纏い中に浮かんでいるカードに、両手で握っている杖の先端をかざしながら詠唱してみたが、何も起こらなかった。うん、何も起こらなかった。

ああ……まずい、すっごい恥ずかしい。周りには誰もいないが、段々顔が赤くなっていくのを感じる。ううう……でも折角ゲットしたからこのカードは使いたいし……

『私』の創りしカードよ、創造主たる私が鍵に力を貸せ！ カードに宿りし魔力をこの鍵に移し、私に力を！ 『龍』ドラゴン」

若干アレンジした詠唱をして杖をかざすと、今度はちゃんと変化があった。カードから銀色の魔力が湧き上がり、その中から赤い強靱そうな腕が、立派な翼が、カッコいい尻尾が、猛々しい牙が現れた。

「きゅるあっー！」

そんな可愛らしい鳴き声と共に私を見つめるつぶらな瞳。そう、カードから出てきたドラゴンは封印？ した時の大きさじゃなく、私の半分程度の大きさの幼龍？ になっていた。心なしか全体的に丸

みを帯びているような気もする。

バツサバツサじゃなく、パタパタと翼を動かしてホバリングし私と目線を合わせている。

「えっと……何コレ？」

「くあ？」

「雄？」

「きゆうう……」

「雌？」

「きゅあー」

「……」

「きゆるうー」

私が首を傾げると一緒に首を傾げ、なんとなく頭を撫でてみたら目を細めて嬉しそうな声を出している。雌らしいね。とりあえず可愛い、超可愛い。何この生き物。

「つて、いやいや、そうじゃなくつて。ブレスとかやつてもらえる？
的は……とりあえずこの剣で」

言葉が通じる前提で、いつだったか作った片手剣+4くらいを少し離れた場所に投げて刺す。一応ミスリル製だし、そうそう簡単には壊れたりしないと思うけど……

「きゆるあああつー」

「わーお……」

単発のタイプじゃなく、継続的な感じで放たれたブレスは柄の部分とその近くのミスリルを溶かしつくし、パンチで刀身が真っ二つになり尻尾の叩きつけで完全に粉々になった。

ふえ……結構頑張つて作ったのに……いや、泣いてない。泣いてないもんね。強さが確認出来た分プラスだもんね！

「グスツ……とりあえずもどつて」

「きゅあつー」

私の声に応えて、そう一鳴きして幼龍は銀色の魔力に包まれカードに戻った。とりあえずドラゴンは超可愛い、強さは変わらない、魔力もあんまり使わない。いわゆる、強い(確信)つてやつになると思う。

けど今はそんなことよりも。

「ふええ……いいもん、新しく作るもん」

もうどうしようもなくなった元剣を朝作った炉の中に投げ入れ、私は久しぶりに鍛冶を始めた。鑄潰して、新しく……

◇

「お兄ちゃん、流石の私もそれはどうかと思うよ……」

「……」

僕は今、レーナとアンナの目の前で正座で座らされている。今回のことの顛末を話したら、イオリさんが恐れてたような事態にはならなかつなけど、説教タイムが始まった。はつきり言つて何も言い返せない。

「リユートくん、ここに来るまでイオリちゃんに一回でも謝りましたか?」

「謝つてない……です」

改めて考えると、僕がやった事は本当に事案というか通報ものだった。安心しきつて寝ている幼女に近づいて、抱っこして匂いを嗅ぐとか……どこの変態だよ。いや、余裕で実行に移しそうな人が結構近くに居るけど、僕はあそこまでの変態にはなりたくない。

「今からでも遅くはないです、すぐに謝りに行きましょうリユートくん!」

「はい」

レーナがカンカンに怒っているのは殆ど初めて見るけど、可愛い……じゃなくて!! 思い出すと、確かに僕は一回も謝つてはなかつた。問答無用の尋問があつたのもあるけど、確かに謝つておくべきだった。

そんなことを思っていると、目の前でアンナとレーナが目配せをしてから僕に話しかけてくる。

「リユートくん（お兄ちゃん）、そんなに匂いを嗅いだりしたいなら、私達でもいいんじゃない?」

「いや、確かにそ……じゃなくて今は謝りに行かないとダメなんだなよね?」

見事に重ねられたその言葉にちよつと恐怖が顔を出した。いや、それは気のせいのはずだ。

「イオリちゃんも、これくらいの間なら待つてくれる筈だよ！」

「そうですね、なんとってイオリちゃんですし」

イオリさんに謎の信頼が置かれているせいで、若干僕がピンチだ。

あや、ご褒美なのか？ いや、やっぱり謝りに行く方が先だ。

「いやいや、流石にこれ以上時間をかけちゃわるいし、今すぐ謝りに行つてくるよ！ それじゃあ！」

正座から立ち上がり、そのまま部屋を出て訓練場へ……そう思つていた僕に声かけられた。

「ちよつと待つてお兄ちゃん、お兄ちゃんだけじゃ心配だから私も付いていくよ。レーナさんは？」

「リユートくんが、イオリさんが言つてた『らっきーすけべ』つていうのをしないか心配なので、ついていきます！」

なんか断つたらヤバイ。そんな勘にしぶしぶ従つて、僕は3人で訓練場へ向かつていった。

つていうかイオリさん、レーナに何教えてるんだよ。

第27話 鍛冶キチ

「で、イオリちゃんは今どこにいるんですか？ リュートくん」

「そうそう、それを教えてくれないと」

「確か、訓練場で何かをしてるって言ってたよ」

イオリさんが鍛冶をしてるなら、不自然過ぎるほど静かな場内を歩きながら二人に僕はそう答える。さっきの事を思い出すと鼻の奥がツンとするがまあ、大丈夫だろう。というかこれ以上鼻血なんて出したら貧血で倒れると思う。

「そうなんだ、じゃあ迷う心配もないね！」

「そういえばリュートくん、『おりしゅ』とか『踏み台てんせいしや』って何？ イオリちゃんに聞いても、リュートさんに聞いてっつてしか言ってくれなかったんだけど……」

「えっ」

いや、確かに僕はどっちにも当てはまりそうなんだけど……ほんとイオリさん何教えてる訳!？」

「リュートさんでも分からないんですか？」

「いや、説明は出来るけど……」

「私も聞きたいな、お兄ちゃん」

「あ、いや、はあ……うん、まあいいか。えっと、まずはオリ主っていうのは——」

二人にひとしきりテンプレな事を教えている内に、訓練場の入り口に着いたが、相も変わらず何の音もしない。確実に何かがおかしい、もしかしたらイオリさんは移動してたり？ それは二人も思っていたらしく……

「ねえお兄ちゃん、本当にイオリさんはここに居るの？」

「イオリちゃんならこんなに静かにしてる訳ないと思います」

「そうだよ。まあ、とりあえず入ってみれば分かると思うから、行ってみるよ」

そう言っつて僕は訓練場の扉を開けた。が、一切の音がせずイオリさんの姿もないので、とりあえず確認だけでもと思い一歩踏み出した途

端、視界に映っていた世界が一変した。

「ふふ、ふはは、ふはははは！ あはははははははははは！ 私は今、生きています!!」

轟々と燃え盛る炉、その前で狂ったように笑いながら、ちよつとヤバメの眼で、ランドセルを背負いながらハンマーを振るっているイオリさんの姿が僕の目に映った。おまけに防具も全部着ている、若干色が違うけどまあ、なんというか……そう、関わり合いたくない類の光景だった。

(うん、とりあえず一旦撤退)

だから、そう思っただけでレーナ達の所に僕が戻っても悪くはないと思うんだ。そういうえば騒音対策はしておいてって朝頼んでおいたなあ……と現実から逃げていると、レーナが話しかけてきた。

「リユートくん、イオリちゃんはいたんですか？」

「一応……ね。うん、元気そうだったよ」

「それじゃあ行ってきたよ、お兄ちゃん。それとも、私達かどっちかが居ないと不安？」

「いや、そうじゃないよ。これに関しては、見てきてもらった方が早いと思う」

そう言っただけで二人を訓練場の中へ、背中を押しして踏み入らせてみる。すると、さつき入った時にイオリさんがいた方向を見て本当に一瞬で帰ってきた。

「リユートくん（お兄ちゃん）！ 何アレー!」

「1週間くらい鍛冶が出来てなかったから……リバウンド？」

それにしても、二人とも凄く仲良くなったよね。最初は修羅場だったのに……おっと、話がずれちゃったか。

「とりあえず、あの状態のイオリさんには話しかけたくないんだけど……どうすればいいと思う？」

「私はイオリちゃんの気が済むまでやらせてあげた方がいいと思うよ!」

「あ、私もそれに賛成!」

「それじゃあ、それで決定ってことで」

とりあえず僕達は、一旦この場から撤退する事にした。

◇

「はあ……はあ……もー汗でびちゃびちゃになってるや」

自分でもどれくらいやってたか分からないが、この身体にピツタリワンピースがくつつくくらいの汗の量からして、かなりの時間鍛冶をしてたのだろう。

「まーその分、色々出来たからいいんだけどね！」

記憶にあんまりないけど。って、私は誰に喋ってるんだろう？ まあ、ランナーズハイ？ 的な何かだろう。

そんな事を思いながら、自分にかけていた魔法や消音の為に使っていた魔法を切り、装備類を外して《クリーン》の魔法をかけて収納する。きちやないのはきちんと洗わないとね、簡易的にでも。

「とりあえず、お風呂入ってこよう……」

と、装備類はそれでもいいが私自身はそうもいかないため、腕で汗を拭いながらお風呂場へ向かう。気配はある程度なら察知できるから、男の人が来てたら隠れよう。それぐらいのMPは残ってる。

「あー……ちよつと髪切ったし、きちんと洗いたいなあ……」

どこかの漫画で髪の毛使ってたから、もしかしたらって思って散髪（毛先を整えるくらい）の髪の毛を使ってみたりした。ちよつと長すぎたんだよね〜この髪型は変える気はないけど。

そんな事を思って、城の入り口辺りを歩いている時だった。

「あつ」

「あれ？ イオリちゃん？」

「それよりもイオリちゃん！ 格好どうにかしてください格好！」

そんなレーナさんの声で自分の格好を改めて見てみる。多分汗で顔には髪の毛が多少張り付いてて、ワンピースは汗で濡れ透けな状態だから……上は何も着けてないから、色々見えちゃいそうな訳で……
「kyっ!？」

流れでそう女の子らしく叫んでみようととして声を出しかけた時、城門の方から知らない気配の人が。これは……馬？ に乗ってこのお城に向けて走ってくる音が聞こえた。

「リユートさん、とりあえずよく分かんないけど警戒」

「了解。て言うか、今のイオリさんの格好かなり目に毒なんだけど……」

「このロリコンめ。《炎纏》」

改修して、全体的に緋色になり刀型になったマイク剣改を取り出して正眼に構えながら、全身に炎を走らせて汗を一気に吹き飛ばす。リユートさんも気づいたのか、金色の波紋を多数展開させた。

「えっと、お兄ちゃんといオリちゃん、いきなり何を？」

「馬に乗った不審者。私が前衛、リユートさんが援護射撃でお願い。二人は下がって」

門が開かれ、軽装だが騎士っぽい格好の人が馬に乗ってこちらへ駆けてくる。とりあえず本当に不審者だったら一刀両断してやろうと力を込めると、その人は目の前で急停止して、アンナさんに話しかけてきた。

「アンナ様ですね！ 緊急でお伝えしたいことがあります！」

「その剣の紋章、なりすましという訳ではなさそうですね。用件は何ですか？」

アンナさんがそういうので剣を見てみると、確かになんか紋章がある。多分それが軍の紋章なんだろう。っていうか、アンナさんが大人な対応をしてる!?!

とりあえず、リユートさんが王の財宝の展開を止めたので、私も剣を下す。腰に構えて抜刀術擬きをできる体勢で、だが。

「今回の戦争の結果です！」

「もう勝敗が決したんですか!?! 何が何でも早すぎます！」

えーと、移動の時間を考えるとして……2、3日で決着か。いくら魔法があったりしても、確かに早すぎるね。

「今回の戦争は——」

ゴクリと、この場の誰も唾を呑む。私も実はかなり気になる。

「人族が橋の大部分を斬り飛ばして撤退！ 追撃が不可能な為帰還する事となりました！」

えっと、それって勝ち？ 負け？

閑話―11 独断専行、そして

「ちっ、クソが」

何度目になるか分からない悪態をつきながら、夜も明けきらぬ王城の中を一人の男が歩いていった。その左腕は包帯のようなものに包まれて吊られており、よくよく見れば他の四肢にも包帯のようなものが巻かれている場所が多数ある。

「ああもうやってらんねえ、何が安静にだよクソが」

王国の軍、そして戦闘系のスキルを持った勇者達がこの城から去ってはや数日、海堂は毎日城の中を放浪する生活をしていった。

獸王の娘の暗殺依頼を受け、その時に受けたイオリからのカウンターにより、海堂とモブAこと藻部島は重傷を負っていた。

イオリがなければなしの魔力を使つて放つた、破片手榴弾と焼夷手榴弾が一緒くたになったような地味に凶悪な魔法が目と鼻の先で炸裂したせいで、レベルが30弱ほどしかなかった藻部島は未だ寝たきりで、レベルが40中盤程の海堂も、動けはするものの咄嗟に庇つた左腕はかなり酷い状況になっていた。それこそ、軍医の回復魔法ですら瞬時には治らないほどに。

「ぜってえに、生きてる事を後悔させてやる。あのクソ幼女が」

実はこの徘徊も、本人なりに考えたりハビリの一環だったりする。ただし城に残っている人に発見されると面倒なため、それこそ深夜から明け方までとなっている。

だが今日は、それ以外の目的が海堂にはあった。

「今日、今すぐになあー」

城のテラス、そこで両目を瞑りここ数日の成果と視界を繋げる。隣で寝かされていた藻部島から何体かの式神を拝借し、自分の視界を確保した上で様々な場所へ向かわせていた。

海堂の目に映る幾つもの風景、それは火山の火口、霧深い谷の奥地、大森林の奥深くから繋がる地下、雲を超えた上空などのSランク以上の魔物の巣窟だ。そんな死地のような場所で式神が残っているのは、

ひとえに式神があくまで生き物ではないという事と、海堂の操作が上手かったことが理由だ。

「こんな時間だ……城門くらいは機能してるだろうが、その程度でこいつらは止めらんねえだろうなあ！」

そう言った海堂は、飛ばしていた式神の上に小さく転送用のゲートを開いた。そしてそこから、アイテムボックスから取り出した幻誘蝶の体液というアイテムを素材とした魔物を呼び寄せる薬品を、式神に盛大に被らせる。

途端に変化は起こった。本来の使い手とは違うため音声を拾うところそ出来ないが、視覚だけでも分かる程の殺気をぶつけられ、海堂は獣王国へのゲートを続けざまに開いた。

火山の火口からは獰猛そうな炎龍が、谷の奥地からは霧を纏った大亀が、大森林の地下からは何なよく分からない目玉に触手の生えた生物が、上空からは真っ白な大鷲のような魔物が、そしてそれらを追って魔物の群れが。それぞれ北、西、南、東に開いたゲートから式神を追って獣王国へ侵攻する。

「あはははははっ!! どこもランクSSがいやがる。俺の、俺の勝ちだあ！」

獣王国へ向かわせていた式神を消し去り、自分の視界だけを残した状態にし、四方と上空から獣王国を観察できる状態で狂ったように海堂は笑い声をあげる。

城門の警備隊が迎撃の準備を始めるがもう遅い、そんな程度じゃこいつらは止められない。そう確信していた海堂の視界のうちの一つ、北に異変が起きた。流星が降り始めた。

「ああ？ なんだよこの流星は！ ……っ、んでいやがるんだよクソ幼女があ！」

北にある視界には、羽の生えた杖に跨り空を駆けるクソ幼女ことイオリが映っていた。なんてことを考えている内に、一瞬で炎龍は拘束され、銀色の光に包まれて消滅した。

「なんだよいつもいつも邪魔しやがってえっ!!」

怒りのままに欄干に右手を叩きつけると同時に、北の視界に隕石が映り、視界が散らされて消滅した。

「ふう……だがまあ、よくよく考えればいいことじゃねえか。あいつが北にいたってことは他の方角はっ!？」

続いて、東の視界は真つ白な閃光に包まれて繋がりが断絶した。そして南にも金色の浮遊する船という異物が現れた。そしてこれは、余りアニメに詳しくはない海堂が、珍しく知っている物の一つだった。

「まさか、ヴィマーナ……王の財宝か？」
ゲートオブパピロン

そして、その考えを頷けるように縦横無尽に空中を動く船には多数金色の波紋が纏わりつき、そこからは宝具かは分からないが大量の武器が射出され魔物を次々と屠っていく。そして殆ど時間をかけず、Sランクの目玉触手を除き全滅させた。

そして、その頼みのSSランクの魔物も金色の鎖に絡め取られ、本来の実力を発揮出来ずに……かは分からないが、針山のように消えていった。

「ああ！　なんで俺のやる事なす事こうも上手くいかねえんだよつ！」

残っている西の魔物群も、謎の光を使つたと思しき人物やヴィマーナ、間に合うかは分からないが今まで全てを邪魔してきた幼女がいるせいで成功しないだろう。

全ての視界との繋がりを切り、海堂は目を開く。

「勇者として称えられるのは天上院達だけ、俺らだって依頼はこなしているのに信頼は向こうに全部掠め取られてる。クソが！　このままで終われるかよ！　クラス転生だ、なら俺だって主人公の筈だろうがよー！」

そんな海堂の憤怒に惹かれて、なにやら良くない物の気配が寄ってくる。それにまだ本人は気づいていない。

「天上院も！　アイツの仲間も！　王国も！　クソ少女も!!　許さねえ……」

——全部何もかも、ぶっ壊してやる!!

そう言おうとした時、何処からともなくエコーのかかった、奇妙な

声が聞こえてきた。

『いいねえ、君。結構気に入った』

「誰だ！」

『そうだね、魔神とでも名乗っておくよ』

いつの間にか黒い煙が周りに渦巻いている。

「そんな魔神サマが俺みたいな奴になんの用だ？」

『言ったでしょ？ 君が気に入ったって。だから契約をしてあげようじゃないか、君が望む力をあげるよ。誰にも負けない、ね』

そんな自称魔神の問いに、ほんの一瞬たりとも迷わず海堂は答えた。

「はっ、いいだろう。魔神だかなんだか知らねえが、力が手に入るっつうんなら契約でもなんでもしてやるよ!!」

『それじゃあ、契約成立だね』

そんな言葉と共に、黒い煙が海堂を包んでいく。

——スキル 七大罪・憤怒 を入手しました——

——スキル 七大罪・嫉妬 を入手しました——

——スキル 七大罪・色欲 を入手しました——

『あはははは！ あははははははははは！』

そんな奇妙な笑い声が響く中、魔神と海堂の契約が交わされた。

閑話―12 始まる戦争

城でそんな事が起こっていた翌日、両国を繋ぐ橋を挟んでの睨み合いが続いていた。

獣人側の軍の先頭には、総指揮官である炎髪灼眼（仮）のネイオンが、人間側の軍の先頭には灰髪灰眼の王都のギルドマスター、アルデイトが立っている。俺は双方とも、レベルが200代後半だという話を俺は聞いていた。

正直追いつける気はさらさらしないがそれは置いておいて、一応勇者のリーダーをやっている俺もこの戦争に参加している。

「ねえ委員長。いま、結局なにがどうなってるの？」

「詳しい事は覚えてないけど、お互いの軍から代表を出して橋の中央で互いに降伏勧告をした後拒絶。で、その2人が戻ってきてから開戦らしいね」

そう俺に話しかけてきたのは柊さんだ。というか、この勇者の集まってる中で俺の近くに立っているのは柊さんしかない。俺達以外のクラスメイトは、この場の空気に当てられたりなんだりで今は山ちゃん先生が付いている。元々海堂派だった人達は、なんだろうワクワクしてるというか何というか……危ない雰囲気を漂わせてる。

「どこかで読んだような感じだけど、まあそんな感じだったと思う」

「へえ、そうなんだ」

俺もそうではあるけど、少なからずこの空気に当てられているらしい。気の利いた言葉が出てこない。

俺も柊さんもレベルはもう80代にはなっているが、それとこれとは話が別だ。平和な日本から俺達は召喚されたんだ、1ヶ月やそこらじゃ中身はそんなに劇的に変化はしない。

「ねえ委員長、その代表の人ってあの人じゃない？」

「えっと……そうみたいだね」

今俺達にいる場所は、ほぼ最前線になる事が確定してるような場所なので、視界はかなり開けている。だから今も、しっかりと馬に乗ってこちら側に戻ってきている人が見えた。

「それじゃあ、第一目標お互いに爆発四散でサヨナラ！　つてならないようにする事。その他は臨機応変にやっつけていこうか」

「委員長、凄いい分りにくいよそのネタ。けど、少しは気が楽になったかな。それと、その柊さんっていうの長くて面倒くさいでしょ？　今度から私を呼ぶ時は鈴華でいいわよ？」

「えつと……いきなりどうしたの？　柊さん」

え、いや、何その死亡フラグ。それにあんまり言いづらいつて訳でもないんだけど……

「す、ず、か、で良いっていったよね？」

「アツハイ。えつと、分かったよ鈴華さん。これでいい？」

「まあ、いいわ」

そこまで話した時、代表として出ていった人がこちら側の陣営に完全に戻り、そして――

「全軍、突撃いいいいい！――」

◆　そんなアルディートさんの掛け声と共に、戦端が開かれた。

戦争が始まってから数十分、そこには地獄が……少なくとも俺達にとってはそう表現できる光景が広がっていた。

空では竜騎士と鳥系の獣人が火花を散らし、時折流れ弾なのか魔法や精霊術？　が降ってくる。

「貴様が人族の勇者か！　我らが勝利の為n」

「はあああああつ！――」

飛び交う怒号に舞う血吹雪。橋の上には既に大量の事切れた人達が倒れており、色々な匂いが混ざりあつて最終的に不快な臭いとなっている。

俺自身は今ののように聖剣の腹で相手を全力で叩いてるので、直接的に誰かを殺めてしまったりはしていない。多分これは人族からしたら悪い事なんだろうし、偽善なのかもしれないけど、この一線を越えてしまったらもう後戻り出来なくなる気がしてならないのだ。

「うぶつ、はあ……はあ……。《エリアハイヒー》」

「委員長！　後ろ!!」

吐き気を無理やり押さえ込んで魔法を発動させようとしたところに、柊さんからの警告が飛んでくる。慌てて体を捻り横薙ぎに聖剣を振ると、ホームランのように俺に攻撃しようとしていた人が吹き飛んでいった。

オークの事件の時といい今回といい、俺は背後から攻撃される事が多いみたいだ。そういえば、(多分)蒼矢のイオリって子は今はどうしてる……じゃなくて！ 今は目の前のことに集中！

「鈴華さん、怪我とかしてない？ みんなはどうだった!？」

「まあ、特に無いわよ。けど、クラスみんなは酷い状態だったわ。薄々気づいてはいたでしょうけど、先生と一部の人を除いて碌に戦ったりは出来なそうな感じ」

ひいら……鈴華さんと背中合わせで敵をさばきながら、会話を続ける。やっぱり1人の時とは比べ物にならない程安定している。

「けど、そんな事よりもっと大変な事が起きてたわ」

「《転移門》！ 何それ!？」

飛んできた火の塊を、転移門で相手に跳ね返しながら鈴華さんに問う。全体的に負けそうだったりしたらそんな事よりだとは思いうけど……

「まだ噂話の段階だったけど、王都でクーデターが起きたっていう話。ちよつと千里眼で見えたら、本場で、犯人は海堂だったわ。けど、何か雰囲気違ったし、黒い靄が纏わりついてた」

「黒い靄?」

「うん、しかもなんか凄く良くない感じの」

良くない感じの黒い靄……悪霊とかかな？ ん、千里眼ってそんな詳しいとこまで確認出来るスキルだったっけ？

「それで、その海堂がここに向かって騎士団の人達とかを連れて進軍中。馬を使い潰しちゃうレベルの速度できているから、半日もしない間に到着しそう」

「それってやっぱり?」

「うん、明らかに味方としてじゃないかな」

やっぱりか。っていうか、このままじゃ挟撃される事になるから

……

「撤退しないと、こっちの軍全滅しない？」

「多分ね。だからもつと酷い事って言ったじゃん」

でも、俺達だけじゃ実行は出来ないから……

「アルデイトさんに伝えに行くしかないか。映像とかある？」

「勿論」

とりあえず行って、判断を仰ぐしかないかな。少しくらいなら、俺が時間稼ぎは出来るだろうし。……出来なくても頑張るしかないけど。

閑話―13 勇者VS獣王

「それで委員長、ギルドマスターに伝えなきゃいけないのは分かるけどどうやってやるの？ 幾ら私達でも、真正面から行ったらあの人達と同じような事になると思うけど!？」

そうやって鈴華さんが指差した方向には、激戦を繰り広げているアルディートさんと獣王に加勢しようとして、時折人族獣人間わず人が吹き飛んでいる光景が広がっている。そんな状況からか、2人の周囲だけ戦場とは思えない程空間が開けている。

お陰で目指す方向は分かりやすいが、そんな災害の中に飛び込むような事をしたら幾らステータスが優遇されている俺達でもただじゃ済まないだろう。

「まあ、そうだろうね。だから最初から聖剣をブツパしようと思ってる。あの人と同じくらいの強さなら、当たれば無視は出来ないだろうから」

そう走りながら会話している間にも、聖剣のチャージは進めている。蒼矢（仮）のイオリさんと共闘した時とは違い、移動しながらでもチャージは出来るようになった。何回か機会があったアルディートさんとの訓練で、当たった時には訓練所の端まで吹き飛ばせていたから威力も申し分無いはずだ。

「その後は？ やっぱり委員長が足止めするの?」

「そうするしか無いだろうね。これでも一応タンクなんだし一、二分くらいは頑張って保たせるからさ、その間に説明してもらえない?」

「はあ……分かったわ。とりあえず私が戻ってくるまで絶対に死ぬんじゃないわよ」

「了解!」

そこまで言ったとき、最後の人が固まっていた場所を抜け空白地帯に到達した。その中央付近で、予想通り二人が剣を交えている。

「《付加・光・四元素》」

剣戟だけで衝撃波のようなものが発生してるような、明らかに今の俺には場違いな戦闘。そんなのに介入するには、最初から最大火力を

ブツパするしかない！」

「ギルドマスター！ 下がってください！」

「いきなりなんだ!! つとそりやマズイ、なっ！」

鈴華さんのその声を聞いたアルディートさんが、強く剣を打ち付け、その反動も利用して大きく後方に跳ぶ。攻撃の範囲内には、獣王とその後方に獣人達（と、ほんの少し人）しか居ない。獣王がこちらに気づくがもう遅い、躲せるもんなら躲してみろ！

「五重付加ガランティイイインツ!!」

右側から逆袈裟に振り上げた剣の軌道をなぞって薄く虹色がかつた極太の光の柱が、結局回避しなかった獣王に襲いかかり……

「地龍の崩剣！ ぐっ、ぬおおおっ!？」

噂に聞く精霊術で迎撃され、大幅に威力を削られてしまったものの10m程吹き飛ばす事に成功した。使える最大最高の技なのに、後ろの人達まで被害が及んでないとか、化物かよ。

「いきなり戦闘に混じってきやがって、どうしたよタクミ」

「このまま戦闘が長引けば、恐らくこちら側が全滅します！ 詳しい事は鈴華が説明してくれますので！」

それだけ言っただけは、もう体勢を立て直している獣王に向かって駆け出す。そしてそのまま魔法を——っ!？」

その時、背筋に悪寒が走った。このままじゃ斬られる、そんな自分の勘に従い聖剣を頭上に掲げた瞬間！

「ガッ……………」

一足で距離を詰めてきた獣王が剣を振り下ろしてきていた。忍耐のスキルを筆頭に、付加魔法や装備などで俺自身の耐久力をかなり底上げしているから耐えられたけど、この大きな石橋？ が陥没するって平時だったら完全にペシヤンコだった。

「ほう、今の攻撃を耐えたか。そこそこはやるようだな」

「これでも……一応タンクを、自称してる勇者ですからねっつ」

「ほう、貴様が勇者か。そうか、貴様が！」

——スキル 未来視 LV 5 を取得しました——

獣王が蹴りを繰り出してくるイメージが頭をよぎった。両腕は

聖剣を握ってるし、両脚も橋に埋まっており動かせない。やはりこれも、躲さないと死ぬ！

「つつ、ショートジャンプ短距離転移」

どうにか発動させた次元魔法で、2 m程斜め後方に転移する。視界が切り替わるとそこに映ったのは、蹴りを繰り出そうとした瞬間目の前から俺が消えバランスを崩している獣王だった。

「武技・魔槌閃！」

こんな隙は逃す訳にはいかない。本来の時間稼ぎという目的も忘れて、俺は獣王に追撃を仕掛ける。あの娘がやってたように足の裏で爆発を起こして加速し、剣を前に突き出す。武技の効果で、剣に掛かっていた付加魔法が前方に暴発する！

「すまない、助かったぞシワルワト」

「俺は当然の事をしたまでじゃよ」

が、あと少しで獣王に届いた剣本体は8個の緑色の六角形の何かで拘束されピクリとも動かせず、意図的に暴発させた付加魔法も六角形の集まった何かに散らされてしまった。

犯人は、奥の方に見える真っ白な髭を蓄えた老人？ だろう。杖を構えてるし、緑色の亀の甲羅がここからでも見える。

「ふむ、まずはその聖剣とやらを壊そうかの？」

「ショートジャンプ短距離転移っ!!」

聖剣が木っ端微塵になる。そんなイメージが現実にならないように、俺はまた後方に転移した。

「それは先程も見たぞ？ 勇者！」

「があっ!!」

転移した先には獣王が剣を横に構えながら待っており、転移したばかりの俺は聖剣を盾にする事は出来たものの、なす術もなく吹き飛ばされた。

「《バーストゲイル》っ、《エクスプロージョン》！」

自分の身体に暴風と爆発ぶつけて勢いを完全に殺す。短距離転移はMP消費が結構重いからこの方法をとったけど、凄く痛い。あの娘はよくこんな動きが出来たと今更ながらに感心するよ。

「はあっ……はあっ……ゴホッ」

もうかなり身体はボロボロだが、俺は獣王に剣を構える。そしてまた駆け出そうとした途端、誰かに後ろに引き倒された。

「アルディート……さん」

「獣王相手によくやったな、タクミ。次の出番まで下がってる、ネイオンだけならまだしも、四神が出てきたんじゃあお前には荷が重すぎる」

「は……い。あの、結局どうなるんです？ 撤退ですか？」

さつきまで完全に忘れていたけど、元々俺は時間稼ぎをしてたんだ。これで信じてくれてなきや、完全に無駄骨だ。

「それしかねえな、むぎむぎ挟撃なんてされてたまるかよ。だから次の出番までにその子に回復されとけ」

「了解です」

「いくぜ獣王!! 武技・グランドクロス!」

武技を発動させながら突っ込んでいくのを見ながら下がると、怒ってますというオーラが出てる鈴華さんが立っていた。

「あ、いや、ゴメン」

「はあ……本当に分かってるの？ 無茶し過ぎよ」

溜め息と共に渡されたポジションを飲みながら、自分の神聖魔法でも傷を治していく。

「わ、分かってるよ。それより、撤退するって聞いたけどどうやってするの？ 戦ってみて、本当にあの人達から逃げられる気がしなくなっただけだ」

「それは——」

鈴華さんがそう言いかけた時、吹き飛んでくる影が一つ。

「くはっ、やべえわ。玄武だけじゃなくて白虎まで出てきやがった。こりゃ手に負えねえわ。タクミ、話は聞いてんな？ 橋落とすぞ。俺が向こうやるからお前こっち側な。で、落としたらお前の転移で逃げる」

吹き飛んできたのはアルディートさんだった。そしてかなり遠くを指差した後、すぐ足元を指差す。

「はい!?!」

「なんだ? まだ聞いてなかったのか? ま、今ので分かったろ?

じゃあやるぞー!」

「ちよ、ちよつと待ってください! それってこっちの人達も巻き込まれるんじゃないんですか?」

撤退するのにそれくらい必要なのも分かるし、だからこそ聖剣のチャージも始めてるけど味方も巻き込むなら……

「大丈夫だ。こんな最前線にいる奴なら勝手に察して引くだろうよ」

「……分かりました。付加・次エンチャント元デイメンション」

なんとなく腑に落ちないけど、とりあえず先程は使わなかった魔法を付加する。まあ、俺の方は当たっても死にはしないから大丈夫なのだろう。

「それじゃあいくぞー! 武技・天墮断!」

目の前で振られた剣から、斬撃の跡の様なもの橋の向こうまで大きくなりながら飛んでいく。

「武技・天翔」

それを尻目に、僕も中を蹴りながら跳び上がる。今回の聖剣の解放は爆発じゃない、長く、細く、鋭く!

「斬!」

「デイ・ガランティーン!」

橋の向こうでは巨大化した斬撃が向きを変えて落下、橋を文字通り切り裂き、こちらでは俺が放った聖剣に次元魔法を纏わせた攻撃で、当たった部分が決定的にズレた。そして、

カシャン

そんな音を立てて手に持っていた聖剣が砕け散った。何故? どうして? いや、そんな事より今は。

「異次元収納!」

「全軍!! 撤退だ!!」

とりあえず砕け散った聖剣の破片を収納した時、崩れつつある橋の上からかかる声を聞きながら、まだ比較的無事な部分に着地する。

「委員長! 聖剣はどうしたの!?!」

「木っ端微塵になった。《転移門》！ それより今は早くここから脱出
しないと！ アルディートさんも！」

「おうよ！」

視界の橋に、獣王達がグリフォンに乗った兵士に回収されていくの
を見つつ、俺達も橋の上から撤退した。

第28話 隠し事

(まあ橋をズパンって斬ったって言うけど、多分天上院のエクスカリバーもどきでなら出来ないことはないだろうし、橋を落とすのは一番楽な追撃を防ぐ方法だろうしね)

目の前で馬から降りた騎士っぽい人とアンナさんがどこかに歩いていくのを見ながら、私はそんな事を考えていた。

「まあ、いつか別に。みんなも……かは分からないけど、とりあえずは生きてるみたいだし」

そう思いながら、私はマイク剣改を仕舞う。元々コレは、後でリユートさんに見せて驚かせようとしてたやつだから、今はあんまり見せたくない。

「さて、そんな事よりおっふるくおっふるく♪」
「ちよつと待ってイオリさん」

そう言いながらお風呂へ行こうとした途端、リユートさんに呼び止められた。そういえば誰か探してる風だったし、それが私だったってことかな？

「どーしたの、リユートさん？」

「さつきイオリさんの言ってた、『みんなも……』って言うのが気になってね。なんか言い方がその、引つかかるっていうか……」

「え、口に出ってた？」

「普通に喋ってましたよ？ イオリちゃん」

自分じゃそう考えただけに喋っちゃってるって……あうう。

「そう、イオリさんが勇者側みたいな言い方だからだ！ 何か隠したりしない？」

「うっ」

若干頭の中で恥ずかしがっている時にそんなことを言われ、身体がビクツと反応する。だ、大丈夫、まだリカバリーは利く。

今ここで、勇者と繋がってるなんて思われたら王城から追い出されかねない。それは避けねば、ていうか元々繋がってないけど！

「な、なananんのことかな？ わわ私は何も隠し事なんてしてないの

でアリマスヨ」

「いや、明らかに何か隠してるでしょ。その反応」

随分昔に感じるけど、こういう時元の僕なら顔色一つ変えずに対応出来たのに！　ちっちゃくなってるから、こういう時に感情の制御が利かないのは不便だなあ……

「お、乙女の秘密を暴こうなんて、最低だよリユートさん！」

「いや、イオリさんってTS幼女って言ってたから、心は男なんですよ？」

「ばーかばーか、心だってもう女の子ですもんねー！」

「ぐぬっ」

はっはっはー、どうだ！　これ以上私に追撃はできまい！　自分で自分を女の子って言うのと、地味にしつくりきた事にびつくりしていると、レーナさんが私に話しかけてきた。

「それじゃあ、私だったら話してくれる？　女の子って、そういう話とかをするんでしょう？　イオリちゃん教えてくれたもんね」

「い、いや、あれは私が読んだ本の話の中だけであって……そ、そうだし！　私今汗臭いし、お風呂入ってこないと！」

「んー、それじゃあ私も一緒に行ってもいいい？　イオリちゃん一人じゃ、髪とか洗い辛そうだし」

「そ、それくらい出来るよー！」

「イオリさん、そろそろ諦めたら？」

私がバタバタしながらレーナさんと話していると、リユートさんが私の肩に手を置きながらそんなことを言う。ああーううーああー、はっ！

「そうだ！　ジャンケンで決めよう！」

「まさか、そのネタを本当に言う人がいるとは思わなかったよ……じゃあ、僕が勝ったら話してね」

「う、うん」

よかった、リユートさんが乗ってきてくれた。よし、この世界の運は数値化されているんだ、流星群でレベルも上がってるし最大値ではないかもだけど、60弱もあるんだから負ける事は無いはず！

「せーの」

「じやーんけんぼん！」

結果は、私↑チョコキ、リユートさん↑グーだった。ま、負けた……
「それじゃあ、約束通り話してね？ イオリさん」

「う、うう……女の子の秘密を無理やり暴くなんて……サイテー」

泣きそうな眼でリユートさんを思いっきり睨みつけるが、そういえば、リユートさんには効かないんだった。むしろ凄く喜んでる、雰囲気。

「ああもう！ 言えばいいんでしょ言えば!! あー……でも、大声じゃ言えないから……ちよつとしゃがんでリユートさん」

「大声で言えないことって何さ……あ、天の鎖よ」

リユートさんがしゃがんでくれた。と、同時に私の左手に金色の鎖が巻き付いた。逃げるのは無理か……仕方ない、もうどうにでもなっちゃえ！

「えつと、私はTSだけじゃなくて、クラス転移もしてました。橋をぶった斬った勇者は多分委員長で、元親友です！ あ、別に繋がってる訳じゃないよ」

「えつ、ちよつ、は？ 最後のはまあ信じるけど、勇者って小学生？」

「いや、高校生だけど」

「それじゃあ、色々辻褄が合わない気がするんだけど……」

リユートさんが渋い顔をして首を捻っている。んー……そうだ、私は今幼女だった。前に元15歳って言ったけど、信じてもらえなかった気がするし……

「あんもう！ どうにかしてよ神様！」

「何言ってるの？ イオリちゃん」

私が頭にあの女神様を思い浮かべそう大きな声で言い、レーナさんが首を傾げた次の瞬間、ポンツと言う聞き慣れた音がなり紙がヒラヒラと落ちてきた。え、嘘？

「これ、イオリさんがやったの？」

「いや……女神様に頼んだだけだけど……」

「えつと……」

呆然としてる私とリユートさんを置いてきぼりにして、レーナさんが落ちてきた紙を読み始める。

|||||

そうまで頼られちゃ仕方ないわね☆どうも、私とその娘を女の子にして転生させた転生の女神リインネートです。文字に起こすと非常に長くなるので、裏面にその娘のクラスの集合写真を貼っておきました。正直面倒なんでそれでどうかしてください。

この手紙は、読み終わってから30秒後に爆発します。

|||||

「爆発!? ちょっとレーナさん、裏側見せて見せて!」

「う、うん」

ぴよんぴよんとジャンプしてレーナさんを急かし、裏側の写真とやらを見せてもらう。そこには、ちゃんと集合写真が写っていた。ただしそれは、学園祭の時の物で私は女装していた。神様え……

「えっと、これが私でこっちが委員長。で、私はこの女神様のせいでみんなとは違う場所に幼女化されて召喚されて、元の世界に戻るなんて確証はないからいつそ旅をしようと思ったから勇者に正体がバレたくなくて逃げ出した時にリユートさん達に会いました! はあ……はあ……これでいい?」

「えっと、まあ、うん。とりあえず分かったよ」

私が早口でそう言い終わると、リユートさんはとりあえず分かってくれたようだった。

「だけどき、イオリちゃん……」

「本当に元男?」

「本当に元男だよ! ちゃんと元15歳だよ! よく女装させられてたし、そのせいで趣味もそういうのが多いけどね!」

うう……その事は若干コンプレックス気味だったんだよお……

「え、ちよ、なんでいきなり泣きそうになってるの!」

『精神が肉体に引きずられる』ってやつだよバカア……。その事は、

昔からコンプレックスだったんだよお……。ひつく、なんで男友達といるだけで彼氏彼女扱いされるんだよ……。他の女子の目が痛いんだよお……」

な、泣いてなんかないもんね！ まだ！ これは汗だよ汗！

「髪を切れればよかったんじゃないですか？」

「一回やろうとしたら、周りの人全員から止められたんだよ……」

一回髪の毛を纏めて帽子を被り、男っぽい格好をしたら、死ぬ程似合わなかったのを覚えている。ふえ……。なんか思い出したら涙が

……

「ふ、ふえええんレーナしゃあん」

「よしよし、いい子いい子」

リユートさんには絶対にはやりたくないからレーナさんに抱きついたら、私のことをぎゅってしてよしよししてくれた。

レーナさんのお母さん力が天元突破してる……。安心する……

第29話 誰がそうであるか、薄々気づいてはいたよ

「えっと、その……匂い嗅いだりなんてしてごめん」

あのまま流れでレーナさんとお風呂に行き、またもや全身を洗われてキレイにされて風呂から手を繋いで出てきた後、リユートさんが言った第一声がこれだった。

今更そんなこと言われても、最初に会った時の事とかリユートさんが転生者って時点でもう色々諦めはついてるし……許すとは言っていないけど。

「んー……別にもう気にしてないからいいよ。リトとかワンサマーのラキスケとかと比べると……ねえ?」

「そりやあまあそうだよ!」

「とりあえず許してもらえてよかったですね、リユートくん」

若干満足気なレーナさんがそう言った。今回私はなされるがままに洗われたしね、抵抗は無意味だったんだ……。迂闊に全力を出すわけにもいかないし。

「因みに、あんな感じのラキスケを私にやってきたら、まあ……分かるよね?」

私がそう笑顔でリユートさんに言うと、無言でコクコク頷いてた。とりあえず、私と僕のどっちの視点から見ても誠と一条楽ラクはタヒねば良いと思う。レーナさんはポカンとしてるけど、あんなのは知らなくて良いって私は思う。

「まあ、そんなことよりリユートさんに聞きたい事があったんだ」
「僕の処遇はそんなことなんだ……」

「え? だってロリコンだし……じゃなくて! なんか物作りの上手い人知らない? 錬金術とかそっち系の方向の」

私がレーナさんと繋いでいた手を離し、リユートさんを指差しながらそう言うと、リユートさんは凄い驚いた顔をした。

「えっ、嘘!? イオリさんが、物作りで誰かに助けを!」

「いやだって、自分一人じゃ作れそうにない物っぽかったから……」

そう、この前の1日+さつきまでの時間を合わせても結局出来る気

配が欠片もしなかったのだ……聖剣^{カリヨン}は。宝具とかオブジェクトの装甲とかを作ろうと作ろうとしてるんじゃないんだから、作れたっていいじゃないか!! そう半分くらいムキになっていた時に気づいたんだよね。

あれ? そもそも聖剣^{カリヨン}って、鍛冶関係なくね? どっちかって言えば魔術師とか錬金術師とかのマッドな人達の分野じゃんこれって事に!

「もしかして、この前言ってた聖剣^{カリヨン}ってやつ?」

「そうそう。私みたいな鍛冶師のりよーぶんじゃない代物だったよ、アレ」

「鍛冶……師?」

レーナさんが私に、簡単に訳せば『何言ってるの? こいつ』って眼を向けてきてるけど、私は嘘は言っていない。だって、武器を持って戦いに行ったり大魔法? を使ったりしてるけど、ステータスだと(最高峰の)鍛冶職が2つに錬金術師しか職業はないんだもん。

「まあ、イオリさんが鍛冶師かどうかと言うのは置いておいて「私がかじしだー!!」ハイハイ。錬金術とかでの物作りが上手い人、もうイオリさんは会った事があるよ?」

「ふえ?」

そんなリユートさんの言葉に、私は首を傾げる。えつと……私がここに來てから会った人って言えば、ミーニャちゃんにラファアーさん、アンナさんに門衛さん達……

「まさか……いや、そうだよ、こんな事にまであの人が出張ってくる訳がない!」

「残念だけど、そのまさかだよイオリさん。この街で一番そういうのに詳しいのは、僕が知ってる限り師匠だね」

現実は厳しかった。うう〜どうしよう、私としては完成させたいけどあんな貞操の危険がある場所には戻りたくない。けど、一番そういうのに詳しいのはクラネルさんらしいし……

「嫌だ、凄い錬金術師があんなロリコンだなんて認めない。もつと弟の声優がくぎゆみたいなのマトモな人の筈だ。こんな現実は認めたく

ない、認めるもんか！ あくた・えすと・ふあーぶらあつ!!」

「ふぎけてないで、とりあえず落ち着いて」

「ふぎやっ」

どこぞのコズミック変質者のダンスの最後みたいに腕を左右にバーンってしてたら、リユートさんにチョップを食らった。私だって学習する、だからもう睨んでなんてやるもんか。

「うう……レーナさんが私みたいな目にあったらどうするのさあ……」

「そうなたら、限界を突破してでもエアを起こしてどうにかするから大丈夫。それに今回は大丈夫、僕にいい考えがある」

「ちよつと待ってリユートさんそれ某司令官の失敗フラグ」

隣でレーナさんが『イオリちゃんみたいな目？ しっぱいふらぐ？』って首を傾げているけど、そんなことよりリユートさんの言う作戦っていう方が大切だ。下手したら私とレーナさんが……

「イオリさんって、フィギュアとかって作れる？」

「うん。一応モデルがあれば多分作れると思うよ？」

「良かった！ だったらフィギュアをさ……こう……」

成る程、その手があったか!! でもそれだったら……

「多分……を……して……すればいいと思うんだ！ 一応出来そうだし！」

「ナイスアイデアだよイオリさん！」

よし、そうと決まれば……預かる物も預かったし……

「レーナさん、ちよつと手伝って欲しい事があるんだけどいい？」

「なんだかよく分からないけど、別にいいよ？」

「よし、それじゃあ訓練場、一緒に行こ！」

「あ、そうだ、イオリさん」

私がレーナさんの手を引いて訓練場に行こうとした時、リユートさんから声をかけられた。

「僕はちよつとギルドから呼び出しされてるから、レーナの事頼んだよ」

「大丈夫！ 多分これなら上手くいくから！」

それだけ言って私とレーナさんは訓練場に、リユートさんは多分ギルドに向かった。

えっ？ 失敗したら？ KEITO☆TENTSUIしてどうにかするかな。

第30話 鍛冶キチ×ガチロリコン!!?

「そういえばイオリちゃん、さつきイオリちゃんが作ってたやつは何に使うの?」

お昼を食べた後、仲良く手を繋いで到着したクラネル悪夢の家さん宅前で、ふとレーナさんがそんなことを言った。

「リユートさんの師匠と、きちんと話すためのやつなんだけど……レーナさんはちよつとその建物の影に隠れて欲しいな」

「えつと、なんで? 私、ちゃんと挨拶してお願いしないと駄目だと思うんだけど……」

「最悪の場合、アレごと私が持つてかれちゃうから……」

交渉が出来なかった場合、私ごとゲツツされちゃう可能性もある。レーナさんが近くにいたら巻き添えを食らう可能性があるから、私としては下がって欲しい。

そんな事になったらリユートさんとガチバトルする事になるだろうし……あれ? 案外それもいいかも? いや、よくないか。

「あ、うん。それじゃあ私、隠れてるね」

私が遠い目をしながらそう言ったお陰か、素直にレーナさんは隠れてくれた。よし、これなら不安もなく作戦を実行出来る。リユートさんの声は聞こえてたみたいだし問題も無いだろう。

ここから先は、私の交渉ケンカだ!

「さて、やってきました! ジャ○ネツ○イオリのお時間です! 本日は異世界の獣人界の王都、シャルフの郊外からお届けします!」

扉の前で私が一人で喋っているだけなので絵面はかなり悲しい事になっているが、まあ必要な事だつて割り切る。

「今回紹介する商品はコチラ!! 1/8スケール、魔力式イオリちゃん目覚まし時計です!」

そう言つて私は、異次元収納の中から本当に1/8の大きさの私が時計を抱えている物体を取り出す。木と金属を組み合わせただけだが、ちゃんと色は塗つてある。

時計本体の時間は、別れる時にリユートさんに貸してもらった懐中時計に合わせてあるから多分合ってる!! な、名前が零時迷子(笑)つて出てたけど、まあへーきへーき。

「毎朝が眠くて起きられない。そんなあなたのために作られたこの商品! まずは、肝心な音声をどうぞ!」

それっぽく言って私は、ポニテ部分のスイッチを押して音声を再生する。因みに録音したのはさつきだ。素材は蓄音石つてやつだけど、今は省く。

『お姉ちゃんおはよう! 朝だよ? 早く起きて!』

『お、お姉ちゃんの事を起こしに来たんじゃないんだからね! つ、ついでに起こしてあげるだけなんだからね!』

『仕事の時間だよ! むうう……お姉ちゃんのバカ!』

因みにこの他にも、10通りくらいのボイスがあるんだけど……改めて考えると、ちよつとテンションのせいでやり過ぎた感がある。時刻設定は、腰あたりにあるハンマーを開けば設定出来るから、問題は無い……はずだ。

「いや〜どうでしょうか? このイオリちゃん目覚まし時計は。起きること、できそうでしょうか? 一品一品ハンドメイドの為、本来は10,000ゴールドはこの商品ですが! 半額以下の4,980ゴールドでお届けします!」

若干扉が動いたような気がしたが、まだ足りないみたいだ。これで終われば一番良かったけど、まだ用意しているものはある!

「そして今ならなんと!! しつかりと話を聞いてくれる……その条件を呑んでくれる場合のみとなりますが、半年間修理費は無料となり更に! 5センチ程の大きさのロリっ娘ストラップが付いてきます!」
「その取引、乗ったああっ!!」

これでもダメか……と更に物を上乗せしようとした瞬間、目の前のドアが勢いよくバーンと開け放たれた。



「成る程な。その聖剣カリヨンとやらの方が興味を唆るが、まずはそっちのリユートの彼女の修業についての話だな」

目覚まし時計とストラップを渡した後、病院の部分で私達はクラネルさんと話している。

「まあ……その……なんだ。私としては、修業をつけるのに文句はねえんだが……二人共、まだ精霊と契約出来てねえだろ？」

「え、あつ、はい……」

「そもそも私は、契約の媒体すら持つてないです」

レーナさんは若干申し訳なさそうにそう言い、私はあるのままの現状を……つてアレ？　なんで私まで修業の対象になってるんだ？

「だからまずは、精霊と契約してきて欲しい。まあ、あのバカで……リユートに聞きながらやれば、問題なく出来るだろうよ。で、イオリちゃんはこの中から物を選んでくれ」

そう言つて近くのクラネルさんは、近くの机の引き出しから色々な物を取り出して並べていく。指輪、腕輪、髪飾り、イヤリング、チョーカー、モノクル etc……その全てが真っ白だ。つて、

「なんでここに、契約の媒体なんて物があるんですか？」

「戦時以外の怪我人の大半が、精霊契約の事故でな……呼び出すにしろ、捕まえるにしろ精霊側がキレて暴れた時に大体媒体をぶつ壊していくんだよ。だからだな」

「そ、そうなんですか……」

おいリユートさん、そんなに危険だつて聞いてないぞ？　まあ、そんなのはどうでもいいか。後で問い詰めれば済む話だし。

とりあえず今は選ばないとだから……

「その腕輪にしますー！」

「そうか、それじゃあ大切にしてくれよ」

腕輪を選んだ理由は、最近までしていた銀狼の腕輪を外したからなんだけど……なんか今一瞬、頭にテレビの砂嵐みたいな音がした気がする。うーん……まあ、気のせいかな。

「とりあえず、私が今レーナちゃんに教えられる事はねえから、リユートと合流して契約してくるといい」

「はい！　今日はありがとうございました。明日からもよろしく願いしますー！」

そう言つてレーナさんは、クラネルさんに頭を下げて帰つていった。ん、あれ？　もしかして私ピンチ？

「それじゃあ、私としては本命な聖剣カリヨンとやらの話に移るが……。話を聞いて思つたんだが、なんでワザワザ剣にする必要があるんだ？」

「えっと、それは私知ってるのが大剣の形だったからです！」

私は(無い)胸を張つて答える。まあ、後はそれ以外想像出来なかつたつて言うのもあるけどね。

「そうか。だけど、折角私とイオリちゃんが協力して造るんだ。お互いに物作りに関してはずぶっ飛んでるだし、そんな誰かが使つていた模造品なんて造つてもつまんねえだろ？　だったらもう、好きなだけやっちまおうぜ？」

クラネルさんがニヤつとしながら、そう言つてくる。そんな発想は無かつたけど確かにそうだ。だったらもう！

「そ、それじゃあ大鎌造りましょう！　クラネルおねえちゃん！」

「おうー！」

TSロリとガチロリコンが交差する時、何が生まれるんだろう……

第31話 ランクアップ！エクス（削除されました）

「別に、迎えに来てもらわなくても帰ったのにー、ぶーぶー」

日はとうに暮れ、酒場とかそういう系のお店の光がチラチラと見えるのみの道を、私は今むすつとした顔でリユートさんに手を引かれて歩いている。

因みに一応モノは完成している。お互いの想像した事を詰め込みまくったせいで、名前はバグってるわこの世界での聖剣みたいにくニーク武器化してるわけで、本来考えてた物とは最早別物って言っているレベルの代物になっちゃってるけどね。

「だってイオリさん、あのままだと多分師匠とずっと何かしてたでしよ」

「う、それは確かに否定出来ないけどさあ……」

クラネルさんと何か作ったりそれを私が着てみたり、後者の方は結構危なかった気もするけど熱中してた事は否定出来ない。呼びに来てくれたのも、よくよく考えてみると私が迂闊だったしありがたい事なんだけどさあ……

「お迎えに来てもらうとか、私の歳のにも幼稚園とかを考えちゃうんだよ……確かにリユートさん達は私の保護者みたいなもんだけどさ」
だつてもう、しちゅえーしよんからそうじゃん。知り合いの家に遊びに行つて、帰りが遅いから親御さんがお迎えに来る……むむむ、そうなるどリユートさんのポジションは……

「パパ？」

「ブフォツ!?!」

リユートさんを見上げながらそんな事を呟いた瞬間、盛大にリユートさんが吹いた。

「え、いきなりどうしたの？」

「どうしたのって、いきなりイオリさんがそんなこと言うからじゃん！」

「思ったこと言っただけなんだけど……」

えっと、私が漏らした考えだと……お父さんがリユートさんで、そ

うなると必然的にお母さんはレーナさん、リユートさんの妹のアンナさんもいるとして……何この家族、リユートさんを対象だから……私もフアザコンになりそう。も、もうこの想像は止めようしよう。ま、まあとにかく、明日はイオリさんもギルドに来てもらうからね。絶対に！」

「なんで？ 特に予定とかは無いから問題無いけど……」

「イオリさん、今日の朝っぱらから凄い事やったでしょ？ それでギルドから呼び出されてるんだよ」

「や、ヤバイこと？」

「そうだよ、自覚なかったの？ まずは——」

今日の朝私がやった事って言ったら、イラツときたから魔物の群れに隕石落としてついでに炎龍をきやぶたあした事しか無いよね？ もしかして、あの時の隕石での騒音被害？ もしくは衝撃波で何かが壊れたとか？ もしや賠償金？ いや、そっちはやりたく無いけど武器とかを売り払えばどうにかなるか。後考えられるのは……街中の魔法禁止とか？ そ、それはヤダー！ 魔法禁止とかにされたら、一々鍛冶屋さんまで行って鍛冶しないといけないじゃん！

「——って事なんだけど、分かった？」

「あ、うん」

ちよつと色々考えている間に、リユートさんの話は終わってしまった。けど大方私が考えた事と一緒にでしょ、とりあえず魔法禁止だけは絶対に回避しないと！

そんな決意をして、色々とドタバタしていた1日はようやく終わったのだった。

◇

「なんて決意をしてきたんだけど、どうなってるのりユートさん！」

色々気を張っていたというのに、次の日のお昼頃着いたギルドでは普通に宴会のようなものが行われていた。正直、お酒の匂いで酔っちやいそうであんまり長居したくはない。

「どうなってるのも何も、僕昨日ちゃんと説明したよね？ 『師匠はまあいいとして、街の一方方向を守った人が居ないんじや宴会が締まらな

いから一緒に行くよ』って」

「う、嘘じゃない？ 鍛冶禁止になつたりしない？」

リユートさんの服の裾を両手で握り、ガクガク揺らしながらリユートさんを見上げる。こ！ で嘘だったら、バクってる鎌のサビにしてやる！

「嘘じゃないよ。だからその泣きそうな眼を止めて、イオリさん可愛い部類に入るんだから、周りからの視線が痛いから！」

「うう、誰が可愛いだ!!」

「酷い、っ！」

「あ」

つい反射的に、リユートさんにバツクドロップをかましていた。も、元の身体なら巴投げくらいだったのに、なまじ力が強くなってるからこんな事が出来たみたいだ。えつとつまり、床に叩きつけるだけのつもりだったのに突き刺しちゃったって事。

「だ、大丈夫？ リユートさん《ヒール》」

「あ痛たた……まあ、大丈夫だよ」

「良かったあ……」

首を振って木片を落としてるリユートさんを見て安心する。恋？

ナイナイ、だって私が安心して理由ってレーナさん達に何もされないって確信できたからだもん。リユートさんは私の中だと……お兄ちゃんとかかな？

「あの、そろそろよろしいでしょうか？」

「ふえ？」

「はい」

私がそんな事を思っている間に、ギルド嬢の人が近づいてきててそう言ってきた。なんだろう？ さつきまで騒いでいた人達も静かになつてるし……

「今、ここにいる冒険者の方々と同様に、あなた方二人にも特別報酬が出ています」

「特別報酬……ですか？」

「はい。お二人のたった一人で街の一方を防衛したという功績を称

え、それぞれに10,000,000ゴールドを与え、特例で冒険者のランクをSへ昇格させます！」

うおおおおお!! と周りが一気に沸き立つ。あんまり大きな声出されると、ビクツてなるからやめて欲しい。えっと、それよりも1000万ゴールドだから白金貨10枚か。金貨100枚にへへ……

「それで、話の続きなのですがSランクとしての注意点です。イオリさんにはしばらくの間関係はない事もありますが、覚えていてください。勿論、リユートさんは忘れるような事はないようにしてくださいね」

「はい」

二人して返事をした後、話を聞いた。なんか面倒くさい言い回しが多かったけど、纏めると……

- ・ 割り符なしでも国境を渡れるようになる
- ・ 指名依頼が来るようになる
- ・ 戦時は呼び出される事がある
- ・ 二つ名が付く

・ 今まで以上に節度のある態度を

って感じた。私が関係ないのは、2、3、5つ目だそう。二つ名って、なんかいやな予感が……

「えっと、私とリユートさんの二つ名って、決まったりするんですか？」

「はい。それぞれ【流星群】と【黄金】になっています」

「うわあ……」

リユートさんが隣で凄く嫌そうな顔してる。んー？ カッコイイと思うんだけどな黄金って。多分ヴィマーナで飛んだり王の財宝が原因だと思うんだけど……

「ねえねえリユートさん。今から槍使ってみたりしない？」

「え？ やだよ。って言うか、僕剣しか使えないし」

「むー……じゃあ、弓で天魔覆滅とか……」

「何それ？」

「なん……だと」

神座シリーズを知らないなんて勿体無い！ パラロス？ 私も詳しくは知らない。だって売ってなかったし。

「その話の内容は分かりませんが、最年少でのSランク到達おめでとうございます、イオリさん」

そう受付嬢の人が言ってくれたが、まだ色々追いついてないからかどうかすればいいのか分からない。なんか雰囲気的に私が何か言わないといけない感じだし……と、とりあえず。

「にぱー☆」

結局嬉しいって事には変わりがないので、綴れそうな感じにぱー☆って笑っておいた。冒険者の大半と受付嬢の人達が紅い花を咲かせたのに、既知デジャヴ感グるんだよ……なんちゃって。

した。

「な、ならチート寄越せよ!! それにとつとつて何だよ! そんな格好で、どうせそのパソコンでコーラでも飲みながらネットゲでもやるしか予定は無いんだろうこの絶壁!!」

「いつてくれやがりますね……最後の撤回しろ」

元タイライラしていたところにそんな事を言われたせいで、もはやいつものキャラは空の彼方に吹き飛んでしまっている。

「は、するかよこのニートで絶壁! してもらいたかったらチートを寄越すんだな!」

「そうですか、分かりました」

男は何やらやりきったという顔をしていたが……

「じゃあ転生特典はたわしでいいですね。剣と魔法の世界で、たわしを出せるだけの能力で頑張つて来てください。それと、私はニートなんかじゃないですし、現在進行形で仕事してますから」

数秒後には絶望を浮かべた顔で、現れた落とし穴に落ちていった。「これでしばらくはゆつくりできそうね。はあ……えつと、たしかここから……」

そう言つてまたキーボードをカタカタと叩き始める。芋ジャージでパソコンに向かつていたらそう言われても仕方がないと思うのは気のせいだろうか?

「あー、ちょっとそこの。こつち来てくれる? 分かってるでしょうけど、正直手が足りなくて困つてるのよ」

そう呟きラインネットが手招きをするが、その方向にはやはり白が広がるのみで何かがある訳でも誰かが居たりする訳でも無い。

「何言つてるのよ、そのあなたよあなた」

そうはつきりと言つて、同じ方向に手招きをする。何か透明人間のような物が居たりするのだろうか?

「だから、さつきから話してるあなただつて。私の事を着物が似合いそうな美人とか言つてた」

……え?

「はつきり言わないと分からない? やる事が多すぎるから手伝えつ

て言ってるのよ■者。編集くらいやってみせなさいよ」

次の瞬間、目の前に数字と文字の列が並んでいる。パソコンと机が現れた。えっと……多分これをこうして。

「流石にこんな静かなのは暇ね。あの子をちよつと覗きますか」

そう指を弾きながら言った途端、どこからか巨大なスクリーンが現れた。そして、そこにどアップで映された映像は……

『にぱー☆』

この日、聖域にも犠牲者が2名居た。

第33話 お酒は二十歳になつてから

紅い花が咲いた事件があつたものの、その後は特に何事もなく宴会は進んでいった。

かく言う私も、今は実は初めてギルドの飲食スペースを使つてる。保護者代わりのリユートさんと一緒の席で、お酒は飲めないし飲みたくないから、プリアとかいう魔法少女に変身できそうな名前の果物のジュースを飲んでる。リンゴみたいなのが美味しい。

「そういうえばリユートさんつてさ、今レベルどれくらいになつてるの？ 私の所もそうだったから、多分そっちにも凄い量の魔物いたんでしょー？」

やつたつてという話は聞いていたけど、具体的にどうなつたのかは聞いてなかつたなあと思ひ、なんとなくそんな事を聞いてみる。椅子に座つてても、足がつかないからパタパタさせてるけど気にしないで欲しい。

「えつと、今は確か85だったかな。確かにいたよ、ボスみたいなのは真つ黒い目玉に触手が生えた浮いてる奴で、その他にも強そうなのから弱そうなのまで沢山」

「……このロリコンめ!! とか、言われなかつたの？ 私を抱っこしてたんでしょ？」

今聞いた限りの特徴だと、やつぱりバックベアードが頭に一番最初に頭に浮かんでくる。いや……口があつたりするなら、びほるだー？

「明らかにヤバイ気配がしてたから、とりあえず武器を撃ちまくつて何かさせる前に倒したから分からないかな。そういうイオリさんこそどうなの？ レベルは」

「ふえ、私？ 確か78に……つて、78じゃん!!」

私はガタンと椅子から立ち上がる。丁度プリアジュースも飲み終わつたところだし、行つてこなきゃ。

「いきなりどうしたの？」

「ちよつと新しい職業とつてくるー！」

「あ、うん。いってらっしゃい」

確か25レベル刻みで新しい職業はゲットできた筈だし、ギルドに居るんだから取ってこないと。そんな事を思い私は受付のお姉さんと一緒に転職部屋に入っていった。

◇

それからしばらく、お酒を飲みながら（勿論酔いすぎないように加減はしてる）他の冒険者の人達と話したりしていると、喜んでるような怒ってるような微妙な顔をしたイオリさんが帰ってきた。

「どうしたの？ イオリさん。そんな微妙な顔して」

「むう……聞いてよりユートさん！ 新しい職業とってきたのはいいけど、名前がスクナヒコナだったんだよ！」

「スクナヒコナ？ どこかで聞いた事があるような……」

僕が厨二病だった頃に聞いた事のあるような気がするから、どうせ多分また最上級の職業なんだろうけど……なんて思っていると、プリンと怒っているイオリさんが何だか説明してくれた。うくん、全く怖くない、むしろ可愛い。

「スクナヒコナって、神様の名前だけど一寸法師だよ一寸法師！ 防御もスピードも上がったし魔法とか薬とかを作るのに補正がかかるみたいだから嬉しいけど、私はそんなにちっちゃくないよ！」

「いや、イオリさんが言ってもそれは……」

現に僕の胸より少し下くらいしかイオリさんの身長は無いわけだし……というか、多分まだ7歳っていうなら普通だろうに。って、イオリさんの様子が若干おかしいような。

「とつたけど、もう身長伸びなくなっちゃうかも知れないじゃん！」

「ふんだ、どうせ私は背も胸も無いですよーだ」

「そう言ってるイオリさんの顔は赤い。……もしや、」

「イオリさん、ちょっとそのコップ貸して欲しいんだけど」

「や、やだよ！ どうせ私が口をつけた所をペロペロするんでしょ、変態ー！」

「そんな事しないよ！ って、やっぱりお酒じゃん」

そんな風に僕は思われてたのか……いや、色々前科があるからそう

思われてても仕方ないけど。なんだか悲しくなつて僕ははあ……とため息を吐いた。

「あ、今ため息吐いた!! やっぱりロリコンなんですよ! でゆえるだけつとーだ!」

「いやいやなんでそうなるのつて、そんな物ここで出したらダメだつて!」

赤い顔で酔っ払つてる感じのイオリさんがどこから取り出した、どこかサイコパスのドミネイターを連想させる身の丈程のメカメカしい長方形が、展開して大鎌になった。色は青、黒、銀……ワンポイントで赤とイオリさんを連想させるもので……

|||||

魔型聖鎌・ヴィターエトモルテ

STR +600

DEF +520

AGL +570

MIND +530

LUK +80

【属性】混沌

【斬れ味】鋭利(平均) ▼詳細

【耐久】頑丈(自動回復)

【重量】3.8kg

【刃渡り】110cm

《スキル》

特筆能力・極限回復

特攻術・擬似永劫破壊

エネルギー吸収

リミッター解除

変形

選定

《備考》

イオリとクラネルが協力して造ったユニーク装備の大鎌。余りに色々な要素を詰め込み過ぎたせいで始めはステータスがバグってし

第34話 タバコも二十歳になってから

「――、よしよし。怖くない怖くない」

悪夢から意識が戻った私に、誰かがそんな風に優しい声で話しかけてきている。なんだか気分はふわふわしてて、安心するしこのままいかなあくなんて思うけど、一応最後の記憶を確認してみる。

えっと確か、新しい職業を取ったけどなんかイラついたから席に戻って……そうか、お酒を飲んじゃったんだ。という事は……

「私お持ち帰りされた!?!」

「うわっ、起きてたのイオリさん!?!」

「リユートさん!?! ハッ、きせいじじつ!? 離せー!!」

「ちよ、危ないって!」

そんな事をされたら、三重くらいの意味で私は死んじゃうから全力で暴れてリユートさんにおぶられてる状況からの脱出を試みる。予想どおりリユートさんの背中から落ちたけど、そのまま着地してリユートさんから距離をとる。

「きよ、今日という今日はもう許さないよ!! もう真っ暗だし、そこら辺の路地裏にでも私を連れ込んで! お、美味しくいただくつもりだったんでしょ!」

「だからしないって!! 話せば分かるから!」

リユートさんがそんなことを言ってるけど、それは犯人が言う言葉だし信じない。大鎌の錆にしてくれ……って入ってない? あれは私とクラネルさん以外が触ったらアウトなやつだから大変なんだけど!?!

いや、それも全部リユートさんから聞き出せばいいや。

「オーリーハールーコーンツ!!」

「うわっ、眩しい」

引き抜いたナイフの若干赤っぽい刀身がピカーッと光を放ち、リユートさんの目をくらめます。そのナニを斬り飛ばしてやると思い、走っていかうとすると。

「話を聞いてっ! 天の鎖よ!!」

「ふあっ!!」

リユートさんの使ったずっと鎖に絡め取られてしまった。後ほんの少しで刀身が届きそうなところで止められたので、まるで某ライダーのサーヴァントのような格好だ。しかも本当に動けない。

「くっ、なんで！ クラネルさんは引きちぎってたのに！」

「イオリさん、僕よりもレベルが低いし職業的にもこれとは相性が良くないしね。で、話は聞いてくれる気になった？」

「うぬぬ……仕方ない」

疲れ切った顔をしてるリユートさんを見ると、なんか罪悪感が湧いてきたから抵抗するのをやめる。するとすぐに天の鎖から解放してくれた。

「で、なんで私はリユートさんにお持ち帰りされてる訳？ 大鎌も無くなってるし」

「イオリさんがお酒を飲んで悪酔いしたからだよ。大鎌もその時に僕が回収して「リユートさん今すぐそれ出して！ 絶対に触らないで！」ええ？」

「王の財宝の中なんですよ？ 宝具喰われちゃうから！」

「わ、分かった！」

私が必死にそう言うと、すぐにあの鎌が金色の波紋から吐き出された。で、やっぱり予想どおり大鎌は何というか……ツヤツヤしててステータスも上昇してた。

「うわあ……絶対宝具何個か喰ってたよ」

「一体何なのさその武器は……まあ、師匠とイオリさんが造ったやつ何だからマトモな訳ないからいいか。それより、随分とうなされてたし寝言も言ってたけど大丈夫なの？」

「ふえ？」

その判断は若干納得のいかない所もあるけど、うなされてたとか寝言を言ってたとかって何？ 大鎌を背負いながら、首を傾げる。

『僕だよ、ソーヤだよ』とか『みんな置いてかないで』とか色々泣きながら言ってたから心配だったんだよ」

ほら、と肩の辺りにある染みをリユートさんは指差す。……夢の中

でも泣いちゃってたけど、現実の方でも泣いてたんだ……私。

「えつと……あんまり気にしないで」

夢の内容をはつきり思い出して泣きそうになってしまったので、精一杯笑顔を作ってリユートさんにそう言う。

「まあ、大丈夫ならそれでいいよ」

「うん！　ありがと、リユートさん。それじゃ、早く王城帰ろう？　お酒飲んじやったせいとか、私眠くなってきちゃったし……お城まで競争だー！」

「ちよつと待つて！　今王城には――」

両手を挙げてわーつて走っていると、もうすぐ城の門の近くになるという所で、何か……恐らく獣人の誰かにポフンとぶつかってしまった。

「ワプツ、すみませんでした。周りを見ていなくてぶつかってしまいました」

「ははっ、別に構わないさ。君がイオリちゃんなんだろう？」

「はい、でも、何で私の名前を……？」

顔を上げ、見上げると、そこには見たことの無い獣人が立っていた。赤い髪の多分ライオンの獣人で、口にはタバコのようなものを啜えている。嫌な匂いがしないので、有害では無いのだろうが……と、ここでリユートさんが追いついてきた。

「はあ……はあ……イオリさん速……い……。じゅ、獣王様！」

リユートさんがNRSを起こしそうな顔でそんな事を言う。察するにリユートさんの内心は『アイエエ！　ナンデ？　ジュウオウサマナンデ!?』つてところだろう……じゃなくて！　それが本当なら私はこの国の王様にぶつかっちゃったって事だよね!?　もしやセブクをしないと駄目な状況!？」

「えう……あう……す、すみませんでした！」

「ははは、構わないよ。子供は元気が一番だからな」

そう言っただけで下がっていた頭をワシヤワシヤと撫でてくれた。むむま……駄目だ、やっぱり雰囲気は友達の家のお父さんだ。あん？　あながち間違っではないのか？

第35話 第3章エピローグ

城内は、私達が出て行った時とは様変わりしていた。知らない気配の人……ちらつと見えた限りではメイドさんとか執事……が動き回り、人も多くなり随分と騒がしくなっていた。

因みに、獣王様（ネイオンさんっていうらしい）が外でタバコっぽいものを吸っているのは、城内が全面禁煙だかららしい。

「それでリユートさん、これからどうする？」

「どうするって？」

とりあえず歩きながらリユートさんに質問してみるが、首を傾げられた。目的地は私とリユートさん達の寝てた部屋だ。

「いやさ、折角の久しぶりの家族だらんになるんだろうから私達は邪魔者でしょ？ 少なくとも私は関わりたくない訳で、どうしようかなって」

「成る程、そういう事ね。だったら、僕とレーナに付いてくる？」

「ほえ？ どういう事？」

今度は私が首を傾げる番だった。どういう事？ って思ったけど、さっきの私の言葉も、しゅ、主語？ だったかな？ それが抜けてたような気がするからあんまり人の事は言えない気がする。

「ちよつと、両親に挨拶しに行かないといけないからついでにレーナの事もって考えてるんだよ」

「……それって逆じゃない？ 娘さんを私に下さいなら、レーナさんの両親に挨拶しに行かないとダメだろうし」

そう考えると、私ってどうなるんだろう？ 両親は地球だし、この身体としての親は……神様？ って、なんで私は女の子目線で考えてるんだよ、一応僕は男男、レーナさんは可愛いそれでいいはずだ。いや、けどこの身体だとそれはレズウになるのか？ ……ううああ！ もうやめだやめ！ こんな問題は後回し！！

「何一人で百面相してるのさ。それはもう、イオリさんが大怪我して寝てた頃に行ってきたよ。一発殴られてもきた」

「おぉー！！ でも、見たかったなあ………というか私放置」

そう言つて左側の頬を指差すリユートさんが、何故だか知らないけど凄くカッコよく見えた。思わず拍手をしちやうくらいに。

「師匠が治して、ミーニャ様と時々ラフアー様がイオリさんの事は見てたから、安心して行つてきた。それで、戦争に行つてたらしい僕の両親に今から挨拶に行こうつて事」

「むう〜……一大イベントを見逃した気分。そうだ！ 2人が挨拶しに行つたところで私が、2人の娘です！ とか言つたりしたら」

「止めてね。絶対止めてね？」

話に割り込まれて釘を刺される。ふふふ、甘いぞ、そんな返し方をすると……

「それはフリつてやつだよね！」

「全然違うから！ 凄い問題になつちやうから！ それに、一応貴族なんだよ？ システムはテンプレつて言えば、イオリさんなら面倒だつて分かるよね？」

「……うん、そうだね。少なくとも関わるならだいさんしやとしてがいい」

一番記憶に新しいのはこのすばのダクネスの話だけど、それでも面倒だなあつて思つた記憶がある。ん？ でもそうすると……

「ねえリユートさん、それなら私ドレスとか着た方がいい？ 貴族つて冒険者を毛嫌いしてそうだし」

「無くても大丈夫だよ。そもそもこの世界の冒険者は、そんなにマナーが悪い人は居ないし」

そう言われてみると、確かによく小説である冒険者同士のいざこざなんて見た事がない。いや、そういうえば確か……

「え、初対面で私を奴隷にしてやるつて人が人間界に居ただけだ」

「うわ、何そのロリコン。どうしたの？ その人」

「リユートさんが言えた事じゃないよ……ロリコンつて。決闘して倒して、有り金とミスリル製の剣を巻き上げた」

「えげつないなあ……」

なんて事を話していたら部屋の前に到着した。えつと……ふむ、この気配は。

「レーナ、入るよー」

「りゅ、リユートくん!? ちょっと待ってくださいー!」

私がドアを開ける前にリユートさんが開けてしまい、目の前にあられもない格好のレーナさんの姿が飛び込んでくる。

(ラッキースケベ、実際に見るとこういう……)

まあ勿論、そんな姿を見てしまったリユートさんの未来は決まっています……パチーン! そんな小気味いい音のするビンタを食らっていた。

◇

「痛い」

頬にキレイに紅葉マークが付いたリユートさんが、リユートさんの実家へ向かう道中そんな事を呟く。

「リユートくんだからいいですけど、本当だったら許されませんよ!

それに、イオリちゃんも気づいてたんなら止めてくださいよ」

「えっ、嘘、バレてた?」

「やっぱり分かってたんですね!」

鎌をかけられてたみたいだ。くっ、私が大鎌を使うからって……因みに今も背負ってる。だって異次元収納にしまうの怖いし。

「だってえ……リユートさんのラッキースケ見てみたかったし……」

「イオリさん酷くない!」

「てへっ☆」

そんな風なリユートさんのツツコミに適当に答える。うん、使えるものは使うんだ。

「そういえば、イオリちゃんってこれからどうするんですか?」

そんな事を思っていた時、ついさっき聞いたような質問をレーナさんがしてきた。えっと、それなら……

「この後は2人に付いて行って……」

「いえ、そうじゃなくて。その後です」

「その後?」

その後なんて何かあったっけ? 王城に帰って……んう?

「はい。私とリユートくんはここ、シャルフを目指して旅をして着

きましたよね？」

「うん、確かにそうだったね」

「それじゃあイオリちゃんはこの後もずっとここに？」

「あ……」

「そういえば考えてなかった。うーん……悪夢だったけど地球にいた頃の夢を見ちゃったし、一箇所にとどまり続けてもつまらないだろうし。」

「また旅しようかな、折角Sランクになった事だし獣人界の観光名所とかを。期待はしてないけど、もしかしたら地球に帰れたりするかもしれないし」

「脳裏に今までの冒険を思い浮かべながら、私はそんな事を言う。確かに死にそうになったりした事は沢山あったが、楽しかった事に違いは無いし。もし帰れるとしても、折角だから楽しみたいし、」

「そう……ですか。なんだか寂しくなっちゃいますね」

「でも、レーナさんに魔法を教えるって約束してたから、しばらくはシヤルフにいるかなあ……」

「2人ともーそろそろ着くよー」

「そんな事を話していると、もうリユートさんの実家に着きそうになっただけ。うわ、すっごいお屋敷。」

「はーい」

「少しリユートさんから遅れていた私達は、少し早足で歩いていった。」

第3章 完

第3章登場人物紹介

イオリ・キリノ

種族 人族・銀狼族

性別 幼女

年齢 7

職業 ヘーパイストス・ドヴェルグ・錬金術師・スクナヒコナ

LV 78

HP 1060 / 1060 +800

MP 2531 / 2531 +800

STR 672

DEF 631

AGL 712

DEX 8250

MIND 670

INT 2032

LUK 58

《武技》アルジエントスラッシュ

《スキル》

職業

ヘーパイストス LV 100 ドヴェルグ LV 82

錬金術師 LV 64 スクナヒコナ LV 12

EX

家事万能 無詠唱 情報の魔眼

変身 MP消費半減 武者の卵

通常

異次元収納 LV 15 別腹 LV 8 並列思考 LV 7

高速処理 LV 1 思考加速 LV 7 HP自動回復 LV

7

MP自動回復 L V 7 魔力制御 L V 9

死神 L V 2 身体能力超化 L V 4

龍鱗 L V 2 龍力 L V 2 五感超化 L V 1

痛覚大耐性 L V 6 物理耐性 L V 5

状態異常耐性 L V 8 魔法耐性 L V 6

精神攻撃耐性 L V 9

爆炎魔法 L V 18 鉱石魔法 L V 19 旋風魔法 L V

16

聖光魔法 L V 14 迅雷魔法 L V 10 蒼海魔法 L V

7

大樹魔法 L V 8 生活魔法 L V |

《称号》

NEW!!

魔眼の行使者・オツドアイ・錬金術師

獣人の王女の友・死線を潜りし者

人間鉱山・魔物の殺戮者・ユニークキラー

守護者・Sランク冒険者・流星群

小さき者・武術者の卵・災害魔法使い

《加護》

世界神の加護++ 鍛冶神の加護++

《装備》

武器・黒魔鋼の戦鎚 +20・魔型聖鎌・ヴィターエトモルテ

鎌剣ブリジンガー +20・緋色之拵声刀 +20

鍵の杖 +21・オリハルコンナイフ +20

ミスリルの針 +10

防具・浅葱色のワンピース +20・朧水晶の胸当て +20

朧水晶の肩当て +20 ×4・契約の腕輪

漆黒の短パン +20・ドラゴンベルト +19

隴水晶の腕甲 +20・隴水晶の脚甲 +20
対魔のグローブ+18・濃紺の靴下+19
龍皮の靴 + 18

|| || ||

名前 イオリ・キリノ

性別 女

年齢 7

生まれ 不明

ランク S

ゴールド 1,608,790

|| || ||

銀髪ポニテで、今回左眼が紅くなりオッドアイに進化した主人公。
ポニーテールの長さは腰くらい。

今章では、魔眼をゲットする際に尋常じゃない頭痛に襲われたり、魔法を覚える為に頭痛に襲われたり、友達を守るために身体に大量の武器が刺さったり、その治療費でロリコンに襲われたりと散々な目に遭った。

最早自重は空の彼方へ飛んでいき、装備も魔法もちよつと頭がおかしいレベル。因みにイオリが見た悪夢は、このままの姿で地球に戻ったが誰にも自分と認識されずに置いていかれてしまうもの。

「魔界にも行ってみたいかなあ」

幼龍（名前無し）

イオリが魔物襲撃の際、何故かきやぶたあできた龍。ステータスは変わらないが、見た目は完全に幼龍になってしまっている。

リユート・カンザキ

種族 獣人（獅子族）

性別 男

年齢 16

職業 王者・剣士・盗賊(空き1)

LV 85

HP 1678 / 1678

MP 2095 / 2095

STR 577

DEF 683

AGL 746

DEX 639

MIND 740

INT 2005

LUK 67

《精霊特性》光

《精霊術》光の牙・光曲幻影・閃光轉身

《スキル》

職業

王者 LV 93 剣士 LV 69 盗賊 LV 44

EX

ゲイトオブ・ハビロン
王の財宝 獣化 超解析

無詠唱

通常

鷹の眼 LV 15 無音 LV 19

剣闘術 LV 10 小盾術 LV 17 回避術 LV 16

身体能力超化 LV 8 五感超化 LV 13

《称号》

大金持ち・ロリコンの師・魔物の殺戮者

守護者・変態紳士

《加護》

世界神の加護 + 獣神の加護 ++

《装備》

武器・黒魔鋼の魔剣 +20
防具・反魔の小盾 +19・光の腕輪
内着《黒》+10・オリハルコンの軽鎧 +19
オリハルコンの籠手 +17・オリハルコンの腰当て +20
ズボン《黒》+10・オリハルコンのグリーブ +16

|| ||

名前

リユート・カンザキ

性別

男

年齢

16

生まれ

シャルフ

ランク

S

ゴールド

139, 293, 520

|| ||

二章で初登場した、黒髪黒眼のライオンの獣人。王の財宝のスキルを持つているが、かなり劣化している。イオりにステータスを抜かれ地味に焦ってる。

実はコソコソお金を貯めていたお陰で、1人だけ桁が違うお金持ち。そして実は結構カッコいい事が判明した。

そのお陰か、最近王律鍵バウ・イルを出せるようになり、武器の投射で稀に宝具が出るようになった。が、エアは目覚めない。

「ステータス抜かれた……」

レーナ・アークライト

種族 獣人（黒猫族）

性別 幼……女？

年齢 15

職業 侍・料理人（空き1）

LV 51
 HP 710 / 710
 MP 1507 / 1507
 STR 254
 DEF 164
 AGI 465
 DEX 223
 MIND 173
 INT 867
 LUK 45

《スキル》

職業

侍 LV 50 料理人 LV 69

EX

獣化 一刀両断

通常

鷹の眼 LV 10 集中 LV 13 見切り LV 16

戦刀術 LV 15 居合術 LV 10 五感超化 LV

7

回避術 LV 16 韋駄天 LV 5

生活魔法 LV |

《称号》

獣人の姫の友・家庭料理人

《装備》

武器・日本刀・黒金 +20・脇差・魔喰 +20

包丁・龍牙 +19

防具・藍染の着物 +20・無地の腕輪・朧水晶の胸当て +20

龍鱗仕込みの袴 +20・対魔のグローブ +20

吸魔のアンクレット +20・保護の足袋 +21

韋駄天の草履 +20

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

|| ||

名前

レーナ・アークライト

性別

女

年齢

15

生まれ

アルフ

ランク

C

ゴールド

1, 189, 390

|| ||

二章で初登場した、黒髪黒眼の黒猫と黒尽くしの獣人。イオリやリユートとパーティーを組んでいたお陰で、柵から牡丹餅的にレベルがかなり上がった。

リユートと公認で彼氏彼女の仲になったため、イオリがリユートより優先して装備をあげた。そのせいで装備品込みだとリユートよりステータスが上である。

「お、落ち込まないでリユートくん！」

アンナ・カンザキ

黒髪黒眼の中学生くらいの女の子。髪は短めで、レベルは42。

リユートの妹。実は城の看護師長のような立場にいるので、かなりの信用がある。ブラコンで、かなりの回復系の魔法の使い手。

サトウ・N・ミーニャ

白髪紅眼の幼女。7歳。髪は短めで、レベルは19。

獣王国の第二王女で、こつちの世界に来てからのイオリの初めての友達。イオリに助けられた後、逆にイオリを助ける為に奮闘した。

アルビノ故に日の光が苦手だったりしたが、イオリが復活後即対応する魔導具を作ったため今は問題が無い。

実は名字はサトウである。

クラネル・レイカー

長い青髪に青い眼をした見た目は20代の普通の女性。

しかしロリコン。なんといってもロリコン。獣人から進化しカーバンクルとなり、レベルも300で、治癒師としての腕も素晴らしいのだが、ロリコンが全てを台無しにしている。

イオリと一緒に大鎌を作る時、ロマンと狂気を詰め込んだ張本人。

サトウ・N・ネイオン

短い赤い髪、赤い眼のライオンの獣人

8代目の獣王だが、イオリの印象では休日の友達のお父さん。タバコのような物を吸っている事が多い。レベル283の超人。

勇者を圧倒、ギルマスとのバトルは周りを空白地帯にした。精霊は実は地龍。

サトウ・N・ラファー

長い金髪のライオンの獣人。レベルは62。

獣王国の第一王女で、回復魔法の使い手。瀕死のイオリを回復してくれた。メロン。

タクミ・テンジヨウイン

種族 人族

性別 男

年齢 16

職業 勇者・聖騎士・魔導騎士

LV 89

HP 1059 / 1059

MP 1421 / 1421

STR 930

DEF 985

AGL 855

DEX 945

MIND 995

INT 1251

LUK 69

《武技》 魔槌閃 天翔

《スキル》

職業

勇者 L V 8 0 聖騎士 L V 7 5 魔導騎士 L V 4 2

E X

M P消費半減 全言語理解 詠唱破棄

超解析 忍耐

通常

異次元収納 L V 1 0 超隠蔽 L V 1 3 未来視 L V

5

H P高速回復 L V 8 M P高速回復 L V 8

聖剣術 L V 2 6 魔導剣 L V 1 3 身体能力超化 L V

9

防御力超化 L V 9 精神力超化 L V 9 韋駄天 L V

7

城塞 L V 1 0

物理耐性 L V 8 魔法耐性 L V 9

状態変化無効 L V |

神聖魔法 L V 1 2 次元魔法 L V 1 5 火魔法 L V

5

風魔法 L V 5 土魔法 L V 5 水魔法 L V 5

《称号》

敗走者・大切断・元聖剣の担い手

《加護》

世界神の加護 ++

《装備》

武器・聖剣だった物・ミスリルの剣 +10

防具・ミスリルの軽鎧 + 16・ミスリルの籠手 + 16

オリハルコンの腰当て + 15・ミスリルのグリーブ + 12

学生服・ズボン

黒髪黒目で、クラス委員だったこともあり勇者のリーダー的な事をやっている人物。身長 172cm 体重58kg 何気にイケメン。

今回の戦争では、誰一人殺すことなく切り抜けていた。が、海堂の襲撃の対応に追われ、ギルマスと協力して橋を落とした際聖剣が砕け散ってしまった。柊さんといい感じの雰囲気。

柊 鈴華

一応勇者側のヒロインポジションにいる人で、最近天上院といい感じになった。剣豪兼忍者兼ニンジャ、カラテやジツ、情報収集も得意。忍者とニンジャは別のものである。

アルデイト

王都のギルドマスター。レベル289の猛者、オツタルじゃない。人族側の最高権力で総大将、今まで実は勇者に稽古をつけてたりしたりらしい。

海堂

転送の能力を持って召喚された。その能力で調子に乗り始め、天上院に投獄され、腹いせに獣人の姫を攫おうとするがイオリの反撃に遭い重傷を負い失敗。その後、自称魔神と契約し戦争中の人族を襲撃した。レベル 不明 職業 不明。

第4章 出会いと再会の魔界 第1話 プロローグ

獣人界のとある場所にある渓谷。そこには今、もうもうと濃い紫色の毒霧が立ち込めていた。その中からは、キラキラと光る魔力の光と断続的に続く爆音が響いている。つまり、毒霧の中で誰かが何かと戦闘をしているという事だ。

「シユガアアアア!!」

「砂糖でも食べてろおおお!!」

刀身に入ったひびのような部分から光を漏らす大鎌を手にした、年端もいかない小さな女の子と、元は九つの首があったヒュドラが交差する。そして次の瞬間、残っていた片方の首を切り落とされヒュドラは普通の龍となんら変わりのない状態になってしまった。

「というか私です、イオリです。ヤバい戦闘中なんで色々後で!」

「焰よ、雷のように疾く広がれ!!」

そして私が唱えた魔法によって、他の場所同様少女と同じくらいの大サイズの切り口は焼きつくされた。これでもう、ヒュドラ特有の斬つても斬つても首が生えてくるという事は無くなった。

「厨二つては言わないで欲しい、再発した自覚はしてるから。」

「シユガアアアッ!」

「っ!!」

が、次の瞬間空中にいて踏ん張りの利かなかった私は、唸りを上げて迫ってきた尻尾に壁に……いや、崖? に叩きつけられてしまった。この大鎌のおかげでしばらく放っておけば済むレベルの怪我だが、見事に埋まってしまつて動けない。

「無論向こうがこんな隙を見逃してくれる訳もなく……」

「ブレスか……フローー! こっちもファイアブレス!!」

「きゆるあぁっ!」

「ちょっとそれは洒落にならないので、こちらもブレスで対応する。」

「あ、フローーっていうのは分かってるかもしれないけどあの幼龍ね。名

前がないとかわいそうだからつけてみた。もう私と同じくらいの大
きさだから幼龍とは言え……るね。うん。

って、そうじゃなくて。どうにかジタバタして落下していく最中、
頭上でブレス同士がぶつかり合って爆発を起こす。余波で穿いている
スカートは捲り上がる中、私は大鎌の一つの機能を使うために歌う。

——Gatrandis babel ziggurat ed
enal

Emustolronzen fine el baral z
izzl——

作った時は、リミッター解除って言ったらやっぱり絶唱でしよって
気分だったんだ、仕方なかったんだ。そう自分に言い聞かせながら歌
いきると、大鎌がドクンと脈打った感じがした。

「終虐！・Ne^ネ破^{パー}a^ア乱^{ランド}怒^ドツ!!」

ズドンと着地した後、鎌をクルクルと回しながらヒュドラに突進し
て、最後の一本の首に向かって大鎌を振り抜く。絶唱だから、戦技の
名前よりこつちがあつてると思うんだ。

「せいやあああつー!」

最後の首を両断され、そのままその巨体を溪谷の底の大地に沈ませ
た。そして頭の中にレベルアップの音が流れる。ということは戦闘
が終わったという事だ。

それに安心し、私は鎌を変形させて背負い座り込む。女の子座りだ
けど気にしちやいけない。

「はあ……疲れた。やっぱりフローの時みたいに魔法でやる方がいい
よなあ……ここじや無理だけど」

「ぎゆう?」

近くに来たフローの頭を撫でながらそんな事を呟く。流石に元行
商人の人のルートを壊したら何言われるか分からないし。

「あ……回収回収。あ、そこに落ちてるのは食べていいよ」

そんな思い出を振り払い、私は最初の頃再生させまくったせいで、
ヒュドラの顔が大量に見えるこの現状をどうにかすべく次々に異次
元収納の中に詰め込んでいく。フローが美味しそうにヒュドラ（首）

を食べてる、言っついてなんだけど大丈夫なのかな？

と、まあそれは置いて。

あの事件があつてこら約3ヶ月、私は宣言通り魔法を教えたり観光をしたりしていた。レーナさん達に魔法を教えていた頃には、リユートさんと模擬戦してたら何故か獣王様が混ざつてきたり(協力しても全敗)よんじゆうし? って人達が色々絡んできたけど結構楽しい日々だった。

そして旅に出てからは、観光地を場所を一人で旅している。Sランクという事もあり、お金には困らなかつたのだが、ムーブのような輩がわんさか絡んできたとだけ言つておこう。まあ、末路はわかるよね?

「えっと、リユートさんに頼み込んできたのが1週間前だから……結構急がないと」

そして最近わかつたことがある。そう『一人旅は寂しい』って事だ。魔界に行こうと思ひ立つたのはいいけどそう思つた私は、この前リユートさんに涙目+上目遣い+泣き声のコンボを決めて頼んできた。勿論OKしてくれたよ。

よく小説だと新しい場所で新しい仲間とパーティーをつて事が多いけど、私としてはリユートさん達の方が安心出来る。

「待ち合わせ場所は、魔界の方のこつち側の橋の街だから……つて、着替えないと」

今の私の格好は、最近寒くなつてきたけど夏場とあんまり変わつてない。こんな格好でフロアの上に乗つて移動したりなんてしたら確実に風邪をひいちやう……うん、多分ひく。

まあ、私の着替えシーンなんて見ても詰まらないよねって事でカットして、私はフロアの上に乗る。格好? Fate/zeroの方のイリヤつて言えば分かりやすいかな。色も形も、髪も下ろしてるし。

「さて、橋の街にれつごー!」

「きゅあぁー!」

フロアに跨つて、テンション高めで私は橋の街に向かつていった。そういえば確か、王の財宝の中にはヒュドラの肉が入つてたような

気が……よし、出来たら食べ比べよう！
毒抜き？
魔法と包丁の効
果でゴリ押しかな。

第2話 橋の街

「ゆきやこんこ、あつられやこんこ」

街に続く舗装された道。フロアの上で懐かしい童謡を歌いながら、もう見えている街に向かって進んでいく。

「ふつてくも、ふつてくも、まくだふくりやまぬ」

「きゆう？」

雪が降ってきそうなら気温は低いのに、いつまで経っても降らないから歌ってみている。確か、ゆきやこんこじゃなくて本当はゆきやこんこで、雪よ此処に来てってどこかで見た気がする。

そんな事を思い出していたら、街の城門に到着した。入る時にフロアの事で門衛さんと一悶着あったけど、ギルドカードを見せたらなんか納得した顔になって、目の前でフロアに帰ってもらったら諦めた感じの雰囲気を漂わせてた。なんでだろうね？

「リユートさん達はまだ着いてないみたいだし、とりあえずギルドで換金してもらって街をブラブラしてようかな」

そう呟いて私は、木造と石とかレンガっぽい家が混じった街並みを眺める。最近木造建築ばかりだったから中々に新鮮だ。

因みにギルドは、どこに行っても外見はそんなに変わりがないので凄く分かりやすい。それに気づいた時、ちゃんとした組織なんだなーって思った。えと、要するになにが言いたいのかと言うと、結構城門の近くにあったのもう着きました。

(そんなに見れなかったなあ……街並み)

そうちよつと残念に思いながらギルドに入って、若干感じる視線を無視して受付嬢の人の場所に向かう。

「あの、ちよつといいですか？」

「うん、大丈夫よ。どうしたのかな？」

お姉さんが優しく私に話しかけてくる。うん、もう慣れたよ。初めて行った街だとギルドカード見せないと信じてもらえないって。

「此処に来る道中に、アシッドヒュドラって魔物に襲われたんですけど、そのまま返り討ちにしてきたので素材の買取お願いします」

ヒュドラの首を一本……というか頭の部分だけ出しながらそう言った瞬間、ギルドが静まり返った。……ああ、ギルドカード出してなかったか。仕方ないじゃん、おつきいから両手じゃないと持てないんだもん。

「えっと、ギルドカードと胃薬もどうぞ」

「ありがたく貰っておくわ。買取と依頼の報酬を合わせるとかなりの額になるから、明日もう一度ギルドに来てもらっていいかな？」

「わかりましたー」

元気にそう返事をして、私はギルドを後にした。

余談だけど、こういう事が多いからワザワザ調薬とかを覚えたんだよね。……クラネルさんに頼み込んで。お陰で胃薬から猛毒まで色々作れるようになったよ、何故か媚薬の作り方を教え込まれたけど。

◇

「と言うわけでやってきました魔法屋さんが多い通り！」

ギルドでの用事も終わったので、不思議な匂いのする方向に私は歩いていっていた。それでしばらく歩いていくと、いかにも魔法屋ですというお店の並ぶ通りに出た。

「よしっ」

私はその中でも立派なアトリエ風の建物……ではなく、その向かい側に建っていたボロボロのお店へとドアを開け入っていく。

ここ数ヶ月、いくら私がSランクの冒険者と言ってもまずは偽造を疑われ、もしも疑われなくても足元を見られる事が多かった。まあ、幼女だから仕方は無いんだろうけど……

「いらっしやい、おや？ お嬢ちゃんみたいな子が来るとは珍しいの……」

そう言つて、薄暗く謎の光を放つ鍋が置いてある店内の奥から、ローブを着て、杖をついた老翁と思しき人物が姿を現す。

魔法屋さんの人って、なんでこう、お年寄りの人が多いんだろう？

「えっと、ここのお店って魔導書って売ってますか？ 出来ればマイ

ナー……珍しい属性のやつで」

「今ある珍しいのは、闇と氷の魔導書かのう？　まあ、お嬢ちゃんには買えないと思うがの」

「ホホホと笑う老爺。むう、期待していたのにまさかここもなのかな？」

「お金なら持ってますよ！　私、これでもSランク冒険者なんですから！　後、氷魔法は使えますよ！」

「私はヤケクソ気味にギルドカードを取り出して見せる。いつもならここで一笑に伏されるのだが……」

「ほう、お嬢ちゃんが《流星群》だったか。なら、どうして儂の店に来たんじゃ？　他の所ならもつと良いものがあつたらうに……」

「大きなお店に行くと、貴族のボンボンに間違われたり、ギルドカードも信用してもらえなくなつて足元見られるんですよ……その上勧めてくるのは火とか水とかの魔導書ばかり……もうとつくに使えますよ！」

「このようにしつかりと会話する事ができた。なんだろう、泣きたくなるくらい嬉しい。」

「そりゃあ大変だったのう……でも、儂も魔導書売るのには1つ条件を付けさせてもらおうかの」

「え、な、何ですか？」

「値段を吊り上げるとかだったら嫌だなあと思いつながらも、老爺の次の言葉を待つ。」

「儂は覚えられもしない奴に魔導書売るつもりは無くての、お嬢ちゃんの適性を確認させてくれんかの？　単純にSランク冒険者の適性ってのを見てみたいというのもあるんじゃがの」

「それくらいでしたら全然構いませんよ。それで、どうやって測るんです？」

「この水晶に手を置いてくれ、そうしたら儂の側に適性が表示されるようになつておる」

「なにその便利道具？　と思いつながらも特に気にもしないで私の身長に合わせて置いてくれた水晶に手を乗せる。私の魔法の適性って

どんなものだろう？　と思い老爺を見ると、その顔を驚愕させて固まっていた。

「えっと、適性ってどんな感じだったんですか？」

「え、ああ、これじゃよ」

そう言っただけでもらった画面は、正直に言っただけと目を疑う感じだった。

|||||

イオリ

火属性 EX 光属性 SS 雷属性 SSS

水属性 SSS 闇属性 SS 空間属性 EX

風属性 SS 木属性 SS 呪属性 D

土属性 EX 氷属性 SSS 無属性 B

|||||

「あは、あははは……」

これってあれだ。火と土、雷は確実にヘーパイストスとドヴェルグで、空間は多分転生者だからだろう。水と氷は元銀狼の腕輪だろうし……残りはあれか、チートを強化とか言っただけどそれなのかな？

因みに、ギルドのランクと同じ表記らしく、EXは測定不能の事らしい。

(うわ、私の適性高すぎ?)

そんなことを考えている間に老翁は、近くの棚から2冊の本を取り出した。

「え？　闇だけじゃなかったんですか？」

「二冊目は空間の魔導書じゃよ。今まで誰も適性を持つ者がいなくてのう、ほぼ死蔵扱いになっておったんじゃよ。そんな時に現れた嬢ちゃんに託さない手はあるまいて」

マジか！　魔族になら居そうと思っただのに……って事は、地球に帰るのは望み薄かな？　はあ……

「ありがとうございます！　それで、何ゴールドですか？」

「2つ合わせて、金貨1枚じゃな」

「安すぎないですか？」

私がいっただったか買った木魔法の魔導書は、一冊でそのくらいだったのだが……

「面白い物を見せてもらったお礼じゃよ。それに、孫がいればこんな感じかと思うとの……」

「本当にありがとうございます、おじいちゃん！ それで、ちよつとここで読んでいてもいい？」

お年寄りは大切にっていうしね、何と無くそういう気分で言う。

「ほほっ、構わんよ。ゆっくりしていつてくれ」

許しも出たので、私は近くにあった椅子に座り、魔導書を読み始めた。魔眼は使わずにね。

第3話 暇を持て余した

「んっ、んう……」

読んでた魔導書(闇)の方が一段落ついたので、座ったまま背伸びをしたら身体からパキパキと音が鳴った。私まだそんなに歳とつてないのに……心も体も。

なんてことを思っ外を覗いてみると、すっかり日は沈んでしまっていた。えっと、ここに来たのが昼過ぎだから……5時間くらいか。

「あの、随分長く居ちやっみたいで、すみませんでした」

「別に気にしてはおらんよ。ゆっくりしていつてくれと言ったのは儂じゃからのう」

なんか1時間に2人ペースで人が来てたから、迷惑かけちゃったかと思っただけど許してくれたみたいだった。

「それじゃあ、お邪魔しました。またいつか!」

そう言っ頭を下げて、私はお店を後にした。延々と本を讀んでたせいで、お昼もまだ食べてなかつたし宿も取つてないのだ。

受付嬢の人の胃にダメージを与えてしまった手前、ギルドに泊めてもらうのは忍びないので宿は見つけないといけない。

「宿で夜ごはんを食べて、明日あたりにリユートさん達と合流できればいいんだけど……」

1人だと、独り言が多くなっいけないなあ……なんて思っいながら歩いていると、前に2人後ろに1人の冒険者風の男の人達が出てきて囲まれてしまった。周りに人がいないのも、この人達のせいかな? いや、夜だからか。

「やっど店から出てきたな、小娘」

右前のおっさんが私にそんな事を言っってくる。っっていうことは

……

「もしかして、5時間もスタンバツてたんですか? お疲れ様です」

「お疲れ様ですじゃねえんだよ! とつと有り金全部出せや!」

そんな事を言って前の2人が片手剣を抜いて、後ろからも金属音がしたから武器を抜いたんだと思う。というか後ろの人、殺気がだだ漏

れなんだけどこれで隠れてるつもりなのかな？

「そう言われて素直に出すバカなんていますか？　というかあなた達が私に勝てる見込みなんて、凄く低いと思うんですけど……」

「ハッ、Sランク冒険者とか聞いたが、あんたの噂は魔法関連の事しか聞かねえ。この距離なら俺らがあんたを斬る方が早い、状況分かかって言ってるんだろうなあ！」

そう言って睨んでくる2人と私のレベルの差が、軽く40はあるんだけど気づいてるのかな？　それに無詠唱なら斬られるより早く魔法撃てるし。あはは……苦笑いしか出てこないけど、とりあえず魔法を使う準備はしておこう。

「何笑ってるんだ！　ぶっ殺すぞー！」

「やります？！」

首を傾げながらそう聞きながら、左手に伸ばした鍵の杖を握る。後は五感超化をきいたら準備はOKかな。

「そんなにやられたいんなら、お望みどおりやってやらあ！」

と、そこまでやった時、前の2人が斬りかかってくる。けど、最近Sランクくらいの魔物ばかりと戦っていた所為で凄くその挙動は遅く見えて……

「遅いです。《フラッシュバン》!!」

どこぞの神喰い並みになってる身体能力でそのまま飛び上がり、下に向けて魔法を放つ。そして次の瞬間、爆発的に閃光が広がった。

「ぐわっ！」

「ぎゃあー！」

五感超化をONに戻し、アシクビラクジキマシターにならないように着地して目を開けると、私に斬りかかっていた人達が後ろから私を狙っていた人をザツクリやつてるのが見えた。

「非殺傷形態・麻痺弾ノンリーサル
パラライザー。なんちゃって」

右手で背負ってた大鎌（銃形態）を、ガンダムF91のヴェスパーみたいに構えて容赦なく麻痺弾を撃ち込む。実は色々撃てるんだよ、この大鎌。原動力は魔法だけど。

「あ〜……うん、とりあえず血は止めるとして……後どうしよう？」

「いや、どうしようじゃないでしょイオリさん」

一応斬られちゃった人に出血が止まるくらいの回復魔法をかけていると、後ろから声かけられた。

「誰!？」

「私だ」

「お前だったのか」

「暇を持て余した」

「神々の」

「遊び」

「「いえーい!!」」

「何やってるんですか、2人共」

リユートさんとハイタッチして、レーナさんに突っ込みを入れられる。そんな経ってない筈だけど随分と懐かしく感じる……じゃないくて！

「それにしてもリユートさん、よく私の居場所が分かったね！」

「イオリさんの事だから、どうせトラブルに巻き込まれるだろうと思っただけで、案の定コレだよ」

「何それヒドイ」

ほっぺを膨らませてリユートさんに抗議する。ポカポカパンチじゃリユートさんが喜ぶだけだしどうしよう？ 弾幕でも張る？ なんてことを考えていると、レーナさんが話しかけてきた。

「とりあえず拘束しておいたけど、この人達はどうするのイオリちゃん？」

振り向くと私を襲ってきた男3人組は《バインド》で拘束されていた。仕事、早すぎませんか？

「とりあえずギルドに連れていくかな。私みたいな弱い女の子を襲ってきたんだし」

「イオリさんが、か弱い……?？」

「リユートさん、なんで疑問符がつくの!？」

身長は未だに123cmしかないロリっ娘だし、手も足もちよつと力を込めたら折れそうな細さなんだよ？ これをか弱いと言わず何

という。

「か弱くは……ないんじゃないかなあ？」

「レーナさんまで！ うっ……ひどいよお……」

いいもん、どうせ私がか弱くなんてないもん！

「あんた達のせいだ！ せいでえ！」

「イオリさん蹴るのやめてあげて！ 変な音が、その人から変な音が鳴ってるから！ さっきの言葉は撤回するからあ！」

第4話 鉱石生成の真の力

ギルドにあの3人組を（鎖を巻いて）引きずっていったら、話は聞いてくれたけど「そういうのは城門の方々に引き渡してください！」って言われてしまったので、事情を説明して引き渡してきた。

今はその帰り道、リユートさん達が取っていた宿に向かっている最中である。あ、勿論別室にする予定だ。理由？ え、いや、だって、その、リユートさんとレーナさんはその……アレな訳だし……私がいたら邪魔でしょ？

とまあ、そんな事は置いておいて。

「それにしても、なんだったんだろう？ さっきの人達。私とのレベル差が45はあったのに襲おうとしてきたんだけど。どう思う？ リユートさん」

「え、それ僕に振るの？」

「うん！ だってリユートさんの方がそういうのに詳しそうだし」

一応貴族って言ってたし、いかにもそういうの庶民の生活にも詳しくそうじゃん。ん？ 私だけこのパーティーのなかで庶民？ サンプルとしてゲッツされそう。

「そう言われても、イオリさんが制圧する少し前からしか見てないからなんたも言えないよ」

「むう……さんねん」

そこで会話が途切れ、私達を静寂が包む。……どうしよう、気まずい。し、しりとりでもする!? なんてことを考えていると、ふとレーナさんが話しかけてきた。

「そういうえばイオリちゃんって、腕輪とかリボンとかはしてるのに指輪とか髪飾りとか付けてないよね。有名な魔法の道具には指輪があるってリユート君が言ってたけど」

「えっと、髪飾りはすぐ落としそうだからで、指輪はその……」

いや、リボンとか腕輪とかはいいんだけどさ……なんか指輪って言うとき……

「いや……やっぱりその、似合わないだろうし、そういうのって婚約者

とか結婚した人達が付けてるイメージがあるってどうか……」

「何か凄く今さらな感じがします」

「だよねえ……」

後、それよりこの小さい結構プニプニしてる手に指輪をはめるって
どうなの？　っていうのもある……って、そうだ！

「リユートさん達って指輪しないの？　両親にも挨拶したって聞いた
し」

「え!?!　いやだって、この世界じゃ指輪にそういう風習はないし、
魔道具になる上にお金も時間もかかるから手を出しづらくて……」

「なんか寂しいね、それって」

確かによく思い出すと、め、め、メイさんとシンデイさんも指輪は
嵌めてなかった気がする。

「うくん……よし作ろう！」

「へ?」

「料金はリユートさんの給料3ヶ月分ね。2人の希望は全部聞くよ！

実は宝石も作れるし」

実は路銀を稼ぐいい方法ないかなって思って試してみたら、なんか
作れたのだ。けど、武器防具のほうが高く売れて涙目になったのはい
い思い出だ。結構大きめなダイヤモンドが金貨一枚って……

「いや、ストップイオリさん。話が早すぎてよく分からないんだけど」
「寂しいから、二人の指輪を作ろうかなって。作るなら料金はリユ
ートさんの給料3ヶ月分」

「僕に給料とか無いんだけど……」

「じゃあ材料費で考えるって事で……最終決定はレーナさんでいいか
な?　欲しい?」

私とリユートさんで話がまとまって私が作ったとしても、レーナさ
んが要らないならそれまでだ。その場合骨折り損のくたびれもうけ
……にはならないか、装備品が増えるだけだし。

「えっと、それじゃあお願いしようかな?」

「うん!　えっと、それじゃあ素材は真鍮からヒイロカネまでなん
でもいいし、宝石類もアクアマリンからレッドダイヤモンドまでなん

でもいいよ!」

「ちよつと待とうかイオリさん」

異次元収納の中に手を突っ込んで、右手に宝石を左手に金属をめいっばい持つてそう言うのと、リユートさんがビシッとツツコミを入れた。きた。

「ふえ? また? 何か問題でもあつたりリユートさん。あ、品質は大丈夫だよ! 全力で作るから!」

「いや、それはありがたいんだけど、レッドダイヤモンドって言ったよね!」

「言つたよ? 因みにパンチしたら砕けた」

ダイヤモンドは砕けないっていうから、ちよつと籠手を付けて全力でパンチしたら砕け散つたんだよなあ。

「何やってるの!?! レッドダイヤモンドって、あの何十億円とかするやつだよね!?! 付けるのもそうだけど、僕の財布の中身が消し飛ぶよ!」

「大丈夫だよ、ある意味人工だし量産できるし。どんなに貴重な材料を使つても、最高で金貨5枚にしといてあげる」

そう言つてたパチンとリユートさんにウインクしてみる。よく考えると原材料費は0Gだから、私の手間賃くらいしか掛からないから格安だ。他の人なら? 白金貨10,000枚くらい要求するかな、ひやつくおつくえーん。

「すうじゅうおく………白金貨が何千枚!?! イオリちゃん、安くしすぎだよ!」

「天然物じゃないしそんなに大きくないから多分安いし、何よりレーナさん達だから」

えへへ、と笑いながら言つてみる。とりあえず思いつく限りのデザインで作つて、ついだから思いつきり魔道具化しちゃおう。

なんて思つてる内に、宿が見えてきた。近くに他の宿見当たらないし多分あそこだろう。

「それじゃあ私、自分の部屋とつて色々作つてみるから!」

「あの、それはいいんだけどイオリさん、ごはん食べたの?」

「…………あ」

そう私が呟いた時、お腹からきゆるるううくと自分で言うのはあれ
だけど、可愛らしい音が鳴った。そういえば私、お昼から何も食べて
なかったような……。顔が赤くなつていくのを感じる。

「イオリちゃん、前に会ったときよりも子供っぽく……。いや、見た目相
応になつてるね」

「はうう……………」

閑話―14 人間界の今

「ちっ、ここも一足遅かったか。タクミ！ あとどれくらいで転移できると!?」

「かなりの長距離なんで、もう少しかかります!」

「委員長! あんまり持たないよ!」

「分かってる!」

暗い夜道を走りながら、《転移門》を発動する為に魔力を練り上げていく。今更ながらに気がついた事だが、余りにも長距離を転移するには大量の魔力と詠唱破棄のスキルが有っても時間がかかる。

そしてそんな俺たちに多数の風切り音と共に、矢の雨が降り注ぎその後ろからは《火球》の魔法が迫ってくる。

《水遁・水流壁》!

「おらあ!」

《転移門》にかかりつきりで他の魔法が使えない僕の代わりに、鈴華とアルディートさんがそれぞれ防御する。鈴華の生み出した水流の壁で《火球》が打ち消され、それを突破してきた弓矢はアルディートさんが剣圧で薙ぎ払う。

「準備出来ました、長距離転移いきます! 3、2、1!」

そしてその走っている勢いのままに俺たちは転移門をくぐり、【リフン】の街に転移した。三人だけなのは、あまり大々的には動けないのと、俺のMPの問題だ。

「ああつ! 七大罪スキルってこんなに厄介な奴なの!? テンプレか!!」

「結局今回の街も、結局ダメだったものね」

そう、結局今回転移して行った街も、全員が海堂のスキル【七大罪・色欲】の効果で洗脳されてしまっていた。しかもその洗脳が、こちらに対する異常なまでの敵意を植え付けるだけというからタチが悪い。

「今のところ、無事な街はここを含めて5箇所。いつかは物も足りなくなるだろうし」

「じり貧……よね」

山ちゃん先生のスキルでダンジョン化した街が5つ、僕達勇者が16人、アルデイトさんとSランクのパーティーが6つで23……いや、この前1人頼まれて信頼できる人？ の来る場所に送ったから2人。そしてそれ以外の冒険者の人達が、今洗脳を広げている海堂に對抗している全戦力だった。

ダンジョンはDPとかいうよく分からない仕組みで動いているらしいが、安全なのは確かだ。

「本当、これからどうなる事やら」

今ここに至るまで何があったのか、ちよつと昔話をしたいと思う。いや、昔話つて言うほどでもないか、ほんの数ヶ月前の事なんだし。

◇

獣人達との戦争を中断させ海堂達を避けながら撤退していた俺たちは、時折魔物の襲撃やレベルの割に異様な強さの黒い霧が纏わり付いた王都の騎士団の人達を撃破しながら、サーマスの近くにあるオルトユーナというそこそこの大都市に逃げ込んだ。

消耗品やら武器やら色々な物が不足しているこの状況、防衛設備も整っているこの街ならしばらくは安心できるだろう、というアルデイトさんの判断に異論はなく、街の人達も友好的だった為俺を含むクラスメイトのみんなも安心して気を抜いていた。いや、気を抜ける筈だった。

その日の深夜、嫌な予感がして目を覚ました俺が宿の部屋から見たのは、紅蓮に燃える街並みとその手に何かしらの物を持って暴れている黒い霧を纏った住民の姿だった。

その黒い霧は僕達勇者にしか見えない物らしいけど、明らかに洗脳されてる人から見えるものだった。

「一体何が……？ いや、もしかしなくても海堂だろうけどなんで？

距離もまだあった筈……」

そんな予想外の光景に、多少呆然としてしまっていると部屋のドアが勢いよく開け放たれ、鈴華さんが飛び込んできた。

「委員長は委員長だよな!? 大丈夫だよな!」

「何が何だかわからないけど、とりあえず俺は俺だよ」

そう言った俺を、鈴華さんが何故かじつと覗き込んでくる。名前呼びに変わった事もあって、こんなに顔が近くにあるとすぐドキドキするとうか、なんか意識しちゃうとうか。

「大丈夫……みたいね。とりあえず逃げるよ委員長!! 街から脱出しろってギルマスさんも言ってた!」

「とりあえずわかった!」

時間が無さそうなので、異次元収納の中から鞘に入っただままの剣だけを取り出して、前を走る鈴華さんに付いて走っていく。

昼間は普通だった街の人は魔法で吹き飛ばし、それを越えてくる兵士の人達はある程度加減して剣を叩きつける。

「何がどうなってるのか、鈴華さんは知ってるの?」

「私も詳しくは知らない! けど、そこら辺にいる人に解析を使えば予想は出来るよ!」

そう言われたので急いで解析を使ってみると、表示された状態異常の欄に【感染・洗脳】【感染・催眠】と書かれていた。

「洗脳って……しかも感染って……デタラメじゃん」

「一応ある程度の力を持つてる人には移らないみたいだから、北側の城門に残ってる人は集合なんだって!」

そして、俺たちはオルトユーナの街から脱出した。

「離せえ! テメエら離しやがれ!」

「クソがあ!」

脱出した先の北の城門は、酷い状況だった。人は百人いるかいないかで、そのうち何人かは鎖に巻かれて拘束されている。そしてその全員が口汚ない言葉で罵っている。

「ようやく来たかお前ら」

「アルディートさん! 一体、今はどんな状況なんですか!」

「まあ落ち着け、今からそれは説明する」

キツと真面目な表情になったアルディートさんが、こちらを見て言う。

「ギルドの文献を漁ってきて分かった事だが、多分この現状は七大罪スキルっていうやつが原因だ」

「七大罪スキル、ですか？」

「ああ、お前の持つてる忍耐のスキルの対極のやつだな。洗脳と感染ときたからにはおそらく色欲と嫉妬だろう」

「色欲と嫉妬……その洗脳は解けないんですか？」

「無理だな。通常の回復魔法は一切効果が無かった」

鈴華さんは何かしら思うところがあつたのか、少し考え込んでいる。七大罪か……小説だとそんなに主人公の危機感とか分からなかったけど、ここまで酷いなんて。

「まあ詳しい話は追々だ。この色欲の効果にかからねえのは、俺と復讐の対象……まあ状況から察するにお前らだな、それしかない。移動ばかりになるが、違う街を目指す」

「それでも結局、ここと同じようになっちゃうんじゃないですか？」

俺が言おうとした事を鈴華さんが先に言った。結局逃げ込んでもここと同じになつたら意味がないんじゃないか？

「それに関しては大丈夫だ。ここでは間に合わなかったが、お前らの先公のスキルで街をダンジョン化しまえばどうにかなる」

「そ、そうなんですか、分かりました。それじゃあ、他の人達の集合を待つて出発ですか？」

「いや、今ここにいる奴らの準備が整つたら出発だ。他の奴らはもう手遅れだ、お前らも早く準備しとけよ」

そう言つてアルディートさんは去つていった。

いきなり色々な情報が出てきたせいで頭の中が混乱しているが、とりあえずもう手遅れな人が多いこと、逃げないところらがやられるという事だけは分かった。

◇

そしてその後色々な街を転々として、落ち着いたのがこの【リフン】の街だったという事だ。

他の大陸に逃げればいかとも考えたが、僕が飛ばせるのは他人1人が限界だ。その上人族は戦争をしたせいで魔族からも獣人からも

敵視されている。

これが今の、詰んでるんじゃないかと思える人間界の現状だった。

第5話 魔界突入!

「おつきい……こんなの……無理」

「きゅ、きゅうう……」

「そもそも歩いてないのに、何ボケてるのイオリさん」

「一回安全な時に言ってみたかったんだよ……ぶーぶー」

魔界に渡る為の橋の上で、思ったままの言葉を呟いてみたらボケと勘違いされた。ちなみに見て分かる通り、私は今フロアの上に乗っている。何十kmもあるっていう橋を歩いたりなんてしたら、私じやいつ着くのか分かったもんじやない。

「ねえイオリちゃん、さつき言ってたのってどんな意味なの?」

「えつとね、さつきのは……ゴニヨゴニヨゴニヨ……つて事だよ! 多分リユートさんとする時に言っただけならいいんじゃないかな!!」

「えつ、あう……はう……」

聞かれた通り、ちよつと直接的な言葉で耳打ちしてみたら、レーナさんは顔を真っ赤にして俯いてしまった。出てるはずがないのに、顔から湯気が立ち上っているように見える。

「ちよつと何レーナに変なこと吹き込んでるのかなイオリさああん?!」

「ふつ、朝とはちがうのだよ!」

リユートさんのチョップを腕をクロスして受け止めて、リユートさんに対してドヤアって顔を向けていると、バシヤツ! という水の音が聞こえた。

「なっ、魔物!」

「ここは橋の上だぞ?」

「きゃあああつ!!」

私たちの周りに少なからずいた、橋を渡っている人たちがパニックになる。この橋は、魔物が殆ど近寄ってこないような材質でできているらしいからまあそうなるだろう。とりあえず皆が上を見上げているので見上げてみると、そこにはそこには鉄柱が……じゃなくて、

「ふわあ……じえんもーらん……」

「ちよつとイオリさん呆けてないで防御防御！」

その声にハツとして周りを見渡すと、普通の人は逃げようとバタバタしてて、リユートさんは盾を構えて結界を発動させていて、レーナさんはシヨートしている。

なるほど、跳んでるのはでっかい秋刀魚みたいな水龍でコツチにブレスを撃つてこようとしているのね。

「つて、それマズイじゃん 『盾』 オオオ！」

首からかけてあつた杖を左手で引き抜いて、クロウカード風の魔法を咄嗟に使う。リユートさんの広げた盾の結界と私の咄嗟に使った『盾』の魔法が、範囲を広げて使ったせいかミシミシと軋む。というかあと数秒で割れそうだな。

「あ、現れよ！ ザ・シールド！」

流石にちよつとそれは洒落にならないので、昨日と同じように大鎌（銃形態）を構えて似たような効果の魔法を重ねて使うことでどうにか凌ぎきる。そしてそのまま飛び出してきた方向とは反対側に、秋刀魚型水龍は飛び込んだ。

なんで出てきた魔法がチャイカだったんだろう？ なんてことを思ったりもするけどそれは一先ず置いておいて、

「じゅるり……さっきの秋刀魚脂乗ってて美味しそう……」

「一応まだ秋だからそうだろうけど、アレ龍だからね？」

「美味しそうです……」

いつの間にか復活していたレーナさんも、私と同じ意見のようだ。たしか醤油も塩もまだ結構残ってるし……あとは七輪？ 大根おろしはリユートさんが欲しいなら作ろうかな。

「ああ……もうこれ何言っても止められないやつだ」

リユートさんが遠い目をしているが、そんなのは知ったことじゃない。今日のお昼ごはんは白米と秋刀魚の塩焼きと味噌汁で決定なのだ。サラダも忘れちゃいけない。

「今日のお昼ごはんは秋刀魚の塩焼きでいいよね？ リユートさん！」

「ああ、うん、もうそれでいいよ。援護はいる？」

「ううん、いらぬ。じゃあちよつと狩ってくるー、行くよフロー！」
「きゅあー！」

ドラゴンに乗って大鎌を構えて、秋刀魚が飛び込んでいった方の水面に飛んでいく。

この世界に来てから、私も随分とあぐれつしぶ？ になつたなあ……ん？ あぐれつしぶつてどんな意味だつたつけ？ まあいいか。

◇

「私魔界つて、もつとこう、りゅうおうとかデスピサロとかが居るような場所だと思つてただけ……こつて凄く……その」

「平和だね、イオリちゃん」

よく分らないでつかい鳥が飛んでたり草原が黒かったりするだけで、魔界は特に暑すぎも寒すぎもしなかつた。

大鎌でザツクリとやった秋刀魚を周りにいた人達と一緒に食べた後、しばらく歩いて関所を抜けてついた魔界はそんな場所だった。美味いって言ってくれると嬉しいよね。

「そりゃあ一応人が住んでる場所なんだし、環境は普通だよ。まあ、確かにあんまりそういう環境とか関係ない種族の人もいるつて話だけど」

「それつてどんな人？」

「リツチとかさまようよろいみたいな人とか」
「なるほど」

確かにそういう人達は環境とか気にしなさそうだ。聖なる力みたいなには弱そうだけど。げ、あの鳥のランクSSつて出てる、案外魔界つてヤバイのかも。

「えつと、確か魔界にはダンジョンが多いんだよね、リユートくん」

「そうだね。ダンジョンがあるから、必要以上に街の外の魔物が狩られなくて強くなつていったつていう話もあるくらい有名だよ」

おい魔界何怠けてるんだよ。さっきの怪鳥二体に増えてるんだけど、番い？ 番いなの？

「なんでダンジョンがあると、外の魔物を狩らないで済むの？
リユートくん」

「ダンジョンにはいい武器が入った宝箱があったり、食用の魔物がい
たりするから戦力も食料も調達出来るからね」

「やっぱりダンジョンってテンプレなのか。って、あの2匹の鳥が子
供だと……親鳥出てきたよ……SSSランクの魔物って初めて見た。」

「って、イオリさんはさつきからなんで空を見上げてるの？」

「いや、おつきな鳥さんだなーって」

「やっぱりイオリさん……」

「そ、そんな目で見ないでええ！」

「さ、最近危険な感じにはなってきたけどまだ心までロリじゃない
もん！」

第6話 ダンジョン攻略の敵

あの後、特にな何も問題はなく私達は魔界側の橋の街に到着した。獣人界側の橋の街とそんなに街並みの違いはなかったが、大きな違いが一つこつちの街にはあった。

まあわかつてる事だけど、ダンジョンがあった。最前線が14階層って話でそれなりに多くの冒険者が挑んでいるって門衛の人が言っていた。という事で、

「ちよつと潜ってこうよりユートさん！ このダンジョン!!」

「さっきの話の通りだと危険も多くはなさそうだし、僕も行ってはみたいけど出てくる魔物の種類がなあ……」

「が、我慢するよ」

レーナさんが苦笑いしながら答える。なんでレーナさんがこうなってるのかというと、ここの街にあったダンジョンに出現する主な敵が虫系ばかりという話なのだ。私？ よく分からない液体でベタバタになったりGが大群で来たりしなければいいかな？

「ダンジョンについて少しは知っておかないと大変だから、挑むにしても明日からだね」

「はーい」

「楽しみなのは分かったから、とりあえずイオリちゃんは落ち着こう？ 尻尾がすごい勢いでバタバタしてるよ？」

「はーい……」

昼間は否定したけど、やっぱり私の行動って……まあ精神的な部分がそうなんないならいいか！

◇

「それじゃあ、これからダンジョンについて説明していききたいと思えますー」

「わーわー。どんどんぱふぱふー」

「イオリちゃん、茶化さないで欲しいな」

「はーい」

という訳で宿の部屋では今、リユートのぱーふえくとなダンジョン

教室が開かれている。実際この世界のダンジョンについては、私はほぼ知らないでこれからは真面目に聞こうと思います。

「まず、ダンジョンっていうのはこの世界の……まあ、獣人界では聞いたことが無いから除外するけど、あちこちにある洞窟みたいなやつだね。イオリさんはテンプレ9割って認識してればいいよ。それで、現在確認されているダンジョンはこの魔大陸に大半があつて、ダンジョンにはダンジョンコアっていう核が存在するんだよ。で、それが取り外されたり壊されたりすると、ダンジョンとしての機能を失うんだ」「はい！ 質問質問！ それって魔物とか宝箱が出なくなったりとかするってこと？ ダンジョンが攻略されたらその都市も道連れにならない？」

それだったら、あわよくばダンジョンコアゲットだぜ！ とかottaどー！ な私の目標は諦めなければならぬ事になる。

「いや、【魔核】っていうSSランク以上の魔物から採れるアイテムをセットすれば、いずれは全部復活するらしいよ。ボスも含めて。だからそれをギルドに報告して、自分で【魔核】を置けるなら何してもお咎め無しって話だよ。だからこそ何度も挑戦可能なんだよね」

「なるほどねー、じゃあこのダンジョンもコアはとって良いってことか。【魔核】ならたしか3個はあるし」

うん、異次元収納の中に確かに3つはある。

「そもそもそう言うと思ってこの話はしたんだよ。Sランクの冒険者なんだし、いいんじゃないかな？」

「わーい」

それなら良かった。この数ヶ月分の危険が役に立ったというものだ。なんてことを思っていると、レーナさんから質問が飛ぶ。

「リユートくん、ダンジョンは洞窟みたいな物って言ってたけど、明かりはどうなってるの？ 真っ暗？」

「いや、一般的なダンジョンだと壁が光っていたり、消えない取れない松明が所々に置かれていて明るいらしいよ」

なにそれ気になる。消えない松明？ そしたら酸素とか魔力はどうなってるんだろう？ 一本欲しいな。

「で、ダンジョンで一番危険で注意しないといけないのは罠。これに
関しては【チユンパオ山脈】で嫌という程味わっただろうから説明は
要らないよね？」

「散々な目に遭ったからね……まあ、リユートさん達と会うきっかけ
にもなったけど」

「懐かしいね」

かなり前だもんなあ……でもよくよく考えると、あの山自体がダ
ンジョンだったりして。

「それで、確認しておくとして凄く便利なのが【安全地帯】って呼ばれるダ
ンジョンの魔物が進入してきたり、発生したりしない場所だね。深い
ダンジョンだと、中で寝泊まりする事もあるからそっちになると確認
が必須だね」

「安全地帯か……リユートさん質問質問！」

「何？ イオリさん」

「今日渡ってきた橋の金属を作れるんならさ、どこでも安全地帯に
なったりするの？」

一回解析したからもう作れるし、もしちゃんと効果があるならすつ
ごく便利だと思うんだ！

「ごめん、それはわからない。明日ギルドの人に聞いた方がいいかな
？」

「じゃあもう一個質問！ トイレとかはどうなるの？」

「トイレは……うん、無い。一箇所だけ、安全地帯にトイレが設置され
ていたダンジョンが有ったらしいけど、それは人間界のだからね
……」

それは、ヤバイな。安全地帯とか近寄りたくない状態になってるか
もしれない。えっと、次元の果てに消し去るのはまだ無理だし……か
といって浄化じゃ消えないし、燃やしたら燃やしたで問題が起こる
……

「何やらイオリさんが考え込んでるけど、レーナは何か質問はある？」
「えっと、深いダンジョンだと一回出たらもう一回同じ場所に行くま
で時間がかかっちゃうよね？ だったら物凄く深いダンジョンだと、

絶対に攻略出来ないんじゃないの?」

「それはね、ダンジョンの5の倍数の階層にワープ装置っていうのがあるらしいんだよ。まあ、それもその層まで行かないと使えないみたいなんだけどね」

「そうなんだ〜」

レーナさんの猫耳がピコピコ揺れるのを横目に、私は考えを巡らせる。木系の魔法じゃ効果は期待出来ないし、風と雷は何をどうすればいいのか分からないからパス。いつそ凍らせる? いや、それじゃあ根本的な解決にならないし……

「で、さっきからイオリさんは何を深刻そうに悩んでるの?」

「トイレの事!」

「そんなのそこらへんで……そっか、二人は女子だもんね」

「そうです! ちょっとはリュートくんも考えてください!」

なんか、地味に男女の違いを感じた。けど……あれ? 確か次元魔法に《転移門》って魔法が確か……えっと、なるほどルーラか。

「リュートさんリュートさん! なんか私、頭ぶつけないルーラ覚えてみたい!」

「あはは……万事解決だね」

「リュートくんが白目に、大丈夫なの!?!」

レーナさんが、白目を剥いたリュートさんを揺さぶって……あ、戻ってきた。

うん、やっぱりパーティーでの旅はこういう事があるから楽しいよね!

第7話 ダンジョン行こうぜ！

私は昨日のリユートさんの助言通り、ギルドで説明を聞きに来ていた。朝っぱらだからそんなにギルドに人はいないと思ってたのに結構人がいてびっくりだよ。

「えっと、ギルドで売っている結界の魔導具と同じ素材っていう事ですか？」

「はい、完全に材質が同じみたいなので効果はあると思います」

「質問に答えていただきありがとうございます。それで、ダンジョンの地図などはあったりしないですか？」

「はい、現在攻略済みの13階層分まで販売しています。全部で金貨1枚です」

「じゃあ全階層分よろしくお願いします。金貨1枚ちょうどで」

後ろの冒険者の人達が騒ついてるけど、もうそんなのはいつつもの事だから慣れたかな。そして私は、まだ二人が寝てるであろう宿へと戻っていった。

◇

「なるほどね、それで情報を集めて地図を買ってきて戻ってきたと」

「うん！ 適当な依頼も受けてきたよ！ 【ダンジョン探索】ってそのままの奴」

「はあ……まあ良いけどさ。これからは僕達にも相談してよね……」

「ご、ごめんなさい」

ここしばらく一人で行動してたせいかな、そこら辺の配慮が足りなかった。普通に許してくれたからよかったけど、これからはちゃんとしないとね。

着替えた後、色々話しながらダンジョンへ向かう道の途中で、横合いから急に話しかけられた。

「おいお前達、ダンジョンに行くならこの紙に名前を書いてくれ」

頭に角が生えた人……噂に言う鬼かな？ その人からいきなり渡された紙には、名前がビッシリと書かれていた。所謂名簿ってやつだろう。それはどことなく学校の先生の持っている名簿に似ていた。

「人数と名前の確認をしてるんだ。帰ってこなかったら、搜索や遺留品の回収依頼を出すためにな」

なるほど、そうやって遺族に渡したりするのね。死んだりするつもりは毛頭無いが、とりあえず書き込んでお………けない、場所が高すぎる。ふえ……

「おう、ごめんな。嬢ちゃんには高すぎたか」

「……ぐすん。りゅうとさんかいて……」

「了解」

泣いてなんか、泣いてなんかないからね！　ちよつと目にゴミが入っちゃっただけなんだからね!!

「よし、もう良いぞ。嬢ちゃんのことを守ってやれよ?」

「あはは……」

リユートさんとレーナさんが苦笑いをする。

道を進んでいくと、二、三分で目的のダンジョンに着いた。

ダンジョンの入り口は見た感じ洞窟のようだった。見た目は、大きな岩に穴が開いているようにしか見えない。ドラクエの宝の地図の入り口みたいだから、多分中に階段が続いてるのだろう。

そしてその入り口の手前はやたら込み合っていた。

「ポーターは要らないか? アイテムボックスを持つてるから、かなり持てるぞ!」

「魔術師がいないの! 誰か入ってくれませんか!」

「罫の解除なら任せてください!」

と、こんな感じで様々な人が勧誘をしていた。あ、魔術師募集をしてた人達が入っていった。ダンまちのりりみみたいな子が居たりしないかなあ?」

「よお! あんちゃん達、見たところかなり偏ったパーティーじゃねえか? 俺と組まねえか?」

「見たところ全員が華奢だし、俺がポーターをやるうか?」

そんなことを考えていたところに、そう声がかかる。そうだよなあ、見た目はなあ。

「きゃしゃ……」

私は見た目そのまま小さな女の子だし、レーナさんもそんなに変わらない。リユートさんもゴツいとは言い難いしね。

「見た目だけだと、私達って凄くバランス悪いねリユートくん！」
「事実は一レだけどね……」

私は自分で言うのもなんだけど近接戦闘もできるし魔法も普通に得意で、リユートさんはチート持ちだしどっちの距離もできる。レーナさんは、リユートさんと一緒なら相当強いってこの前言ってたし。
「あの、ちよつと良いですか？」

「ん？ なんだ？ 嬢ちゃん」

これを機に、今まで気になってはいたけど聞いたことはなかったことを聞いてみる。

「数ヶ月前にSランク冒険者になった、《流星群》とえくつと……」

「《黄金》だったね、僕のは」

「そうそれ！ その二人の話って聞いたことはありますか？ あったなら、どんな噂がありました？」

「また随分といきなりだな。《黄金》の方は、黒髪黒眼の獅子族の獣人って聞いたことがあるが……《流星群》はなあ……」

え、私の方は聞いたことがないとか？ あんなに獣人界じゃ暴れたのに？ 流星群降らしたり、噴火レベルの魔法を使ってみたり色々してたのにな？

「聞いたことがない……とかですか？」

「いや、噂自体は聞いたことがあるんだがな……こっちはよくわかんねえんだよ」

「そうそう。筋骨隆々の大男だとか、華奢な少女だとか、フードを目深に被った少年だとか。果てにはちっさな幼女とか。共通してるのは銀髪ってことだけなんだよ」

「えっ」

私ってそんなことになってるの!? 最後の噂しか合っていないよ!?

「イオリさん……」

リユートさんが頭をポフポフしてくれる。うう……涙腺が……

「……ふええん、レーナさん……」

「あー……よしよし」

「おいおい、いきなり泣き出してどうしたんだ？」

「だって、だってさ……」

「すみません、自己紹介がまだでしたね。僕の名前はリユート。一応Sランク冒険者です。そして、そこで泣いてるのがあなた達が話題にしていた《流星群》です。最後の幼女って噂は合ってますね」

「はあ!? マジかよ!」

「こんなチンチクリンが!」

「まじですよお……」

泣き声だけど反論する。ふん、どーせ私はSランクって言っても信じてもらえませんよーだ。

「おう、それなら問題ねえな。それどころか戦力は過剰だな」

「そうですね。まあイオリさんが泣き止んでくれるまで、気長に待ちますよ」

ちよつ、リユートさん! そんな目で見ないでよ! 他の人まで見られるじゃん! レーナさんも手でポンポンするのはやめ……いや、安心するからやっぱり続けて欲しい。

「おう、それなら俺たちは別の所の勧誘に行ってるな」

「元気でな!」

「うう……ふえ……」

「僕の時よりもこれは酷いな……ごめんねレーナ」

「ううん、別に大丈夫だよリユートくん。こうしてるイオリちゃん可愛いし」

結局、私が泣き止むまで暖かい目で見られ、ダンジョンに入るのが遅れるのだった。

第8話 電波幼女と苦労男

「よし、イオリさんも落ち着いたし、ダンジョンに入りますか」

「おー！」

「そうだねー」

「あ、頭ナデナデしないでよレーナさん！」

特に意識した訳じゃないけど、手をバタバタ振り回していた。スキルを使つてないのと、力をあんまり込めてないのもあってレーナさんに手が当たるもナデナデは継続している。あう、あうう……

「ああもう！ 早く行こうよりユートさん!!」

「分かったよ、イオリさん」

ぶんぶん怒りながらも周りを警戒するという、自分で言つておかしいと思う事をしながら階段を降り1階層に入った時、左手に嵌めていた腕輪から痛みが走り、頭にテレビの砂嵐みたいな音が鳴る。

「リユートさん、なんかテレビの砂嵐みたいな音聞こえない？」

「え？ 何言ってるのイオリさん。不気味なくらい静かじゃん？」

「私も何も聞こえないよ？」

レーナさんも首を横に振る。そういえば、この砂嵐みたいな音ってこの契約の腕輪？ を嵌めた時にも聞こえたような……なんて事を考えている間にもその音は聞こえてくる。

【ザー、誰かザザツ……水……ザーツ、迷kザーツザーツ……助けプツン】

プツンという音を最後に痛みも音もピタリと止んだ。……小さい女の子の音が聞こえた件。

「つーしんーしてるかーらとー、せーつぞーくしてみーるとー」

「イオリさんが変な電波受信した!？」

「一回布団に巻かれてみるのもいいかも。ピザは焼けばいいし」

うん、そうだ。1日くらいそうしていてもいいはずだ。多分何かしらの問題が起きるだろうけど。

「まあ、もうふざけるのは止めようか。誰かと鉢合わせするのもアレだし」

ネタを1つ挟んでもなお落ち着かない気分だが、とりあえずリユートさんの言うとおりで歩き始める。見た限り、大鎌を振りまわせる程の広さは無いみたいなので銃形態にして、魔法と鎌剣がメインになりそうだ。

つと、そうだそうだ。

「リユートさん、魔界にあるダンジョンにさ、水なんたら迷宮ってある？」

「あるも何も、有名な迷宮の一つだよ。【水神の大迷宮】まだ未攻略の、確か6大迷宮っていうやつの一つだよ」

むむむ……なんかそこに行かないといけないような気がする……やっぱりさっきの奴が関係してるのかな？ いや、むしろそうじゃなかったらビツクリだけだ。

「うくん……なんだろう、絶対に行かないと駄目な感じがする……呼ばれてる？」

「まあ行く事になるとは思ってたけど……まずはこの迷宮で練習してからだね」

「それも……そうだね」

今行っても、多分駄目なのだろう。なんとなくそんな気がする。

「なんか出鼻を挫かれちゃった感じですけど、行きましよう？」

リユートくん、イオリちゃん

「そうだね！ とりあえず今は今」

「地図によると、このまま真っ直ぐみたいだね」

喉の奥に魚の小骨が突き刺さってひっつかかっている感じの微妙な気分だが、とりあえず今は目の前のことに集中だ。

「ねえねえリユートさん、ちよつと試してみたい事があるんだけどいい？」

「別にいいよ。危ないことじゃなければ……というか、僕達に被害が及ばなければ」

「大丈夫だいじょーぶ」

いきなりな話になるけど、初めて魔導書を読んだ時からずっと思っていたのだ、MP消費は酷いけど次元魔法ってつくづくチートだなっ

て。チート＝理不尽、理不尽な次元魔法と言ったらかなみん。もうこうなったらやるしか無いでしょって事で、

「次元魔法『ディメンジョン』！」

「何も……起きない？ イオリちゃんの事だからもつと何か大変な事になると思ってたんだけど……」

そういつてレーナさんが首を傾げているのが、見えてないのになんとなく分かる。流石本家の10倍くらいのMPを使ってるだけはある。

今は半径3mくらいだから、情報が来過ぎないように注意して、このまま範囲を広げていつて……って、あれ？

「リユートさん、前から凄い勢いで人が走ってきてる。結構ケガしてて、その後ろには強そうな魔物が居るみたい。どうする？」

「いや、どうしようも何も助けようよ」

「んー……でも、あと15秒くらいでここ通りすぎるよ？」

多分風系の補助魔法でスピードをあげてるから、このままスピードを落とさなければ階段をソッコで上がって脱出する感じだ。私達に魔物をなすりつけて。死なないための方法としては間違っていないと思うよ！

「わかった。それじゃあイオリさんはその通り過ぎる人を回復してあげて？ その魔物は僕とレーナでどうにかするから」

「ちよっ、リユートさんそれ私の難易度が」

「できるよね？」

鏡のようなピカピカの短刀を構えているレーナさんのとなりで、王の財宝の発射準備の出来ているリユートさんがニッコリ笑いながら言ってくる。そ、そんな風に言われたら断れないじゃん。

「ふ、ふん。リユートさんに頼まれてからじゃないんだからねって言ってみたり！」

「とりあえず頼むよー！」

なんて事を言ってる間にももう見える範囲内にその人物が出てきた。緑髪で、狐の獣人の少年が逃げてきていて、後ろには何かが先行して追いかけてきている感じの砂けむりがある。

なんかこの逃げてきてる人、見覚えのあるような……なんて考えられる私って、結構ききかんが薄かったりするのかな？

第9話 ダンジョンに出会いを（ry

走ってきてる人の背後から迫ってる魔物を迎え撃つ構えになっているレーナさんとリユートさん、その後ろで一応杖を持って回復魔法を使う準備をしている私。なんで1階層に入ってほとんど経ってないのにこんな事になってるんだろう？

「魔物は僕達が引き受けます！ 後ろの子に回復してもらって下さい！」

私がそんな事を考えていると、さっき話し合ってた内容をリユートさんが大声で言う。うーん……あとちよつとで思い出せそうなんだけど……

「すみませつ!？」

その声に返事をしようとした男の子が、安心したのか足を纏れさせてバランスを崩した。逃げるのにかんりの速度で走っている人がバランスを崩すとどうなるかというところ、それはもちろん転けて吹っ飛んでくるわけであつて……

「うわあああああつー！」

「きやつ!？」

「がつ……」

とりあえず筋肉ガードで顔だけは守ったけど、私の身体でレーナさんよりも少し高い男の子の勢いを止められる訳もなく、なす術もなく押し倒されてしまった。向こうは胸当てに顔面強打だけど別にいいよね？

「お、重!! ど、どいてどいてー！」

「……………」

未だに胸当ての上に顔があるのはなんか嫌だし、本人＋防具＋剣が二本という地味にかなりの重さか私にかかっている訳で、抗議してみただけど一向に動く気配がない。

なに？ この人ロリコンなの!? それならちよつと、回復魔法とクラネルさん直伝の毒で延々と酷いこととしてやる。

「ああ、気絶してつて、ふええ!？」

そんなことを胸に、確かめるべく使った魔眼の解析結果には、もう色々と驚くしかない結果が映し出されていた。

◇

走ってきた人がイオリさんの方に吹き飛んでいって後ろが色々バタバタついてる中、僕達の前に現れた魔物は、かの有名な陸海空の全てを移動できる昆虫の名前が付いており見た目もそっくりだった。

「ジイイイ!!」

「ひっ」

その両腕を上げて威嚇してくる様子に、剣を構えていたレーナが短く悲鳴をあげて僕の後ろに隠れる。いや〜うん、改めて見れば見るほど……

「オケラだなあ……」

「ビイイイッ!」

「りゅ、りゅりゅりゅートくん! な、なななんなんですかあの魔物は!? キメラみたいなのに地味に目が可愛いです!」

僕の背中に隠れて、オケラ型の魔物にブンブンと指をさしながらレーナがそう言う。涙目でプルプルして、僕の服の裾を握ってるレーナの可愛さが天元突破している件。

けどその精霊と契約した短刀は仕舞って欲しいかなあ、刺されそうで怖い。

「ダンジョン・クリケットモールだって。見た目そのままの名前の魔物だね。とりあえず天の鎖!」

「ビジー!」

そういつも通りに発射した天の鎖を、オケラ型の魔物は高速でサツと横にずれた後ジャンプして全てを回避した。そしてそのまま右手を引いて天井を蹴り、呆気にとられている僕達に突っ込んでくる。

「嘘っ!」

狭い所だとかこういう動きをしてくる魔物もいるのかと感心しながら、反射的に左手の盾を構えて結界を発動させる。そして次の瞬間、「咲き誇れ! ろんぎふろーらむ!」

たどたどしい詠唱と共に、後ろから飛んできた青白い色の炎の槍が

オケラに直撃し、そのまま遠くに飛んでいき爆発四散した。うん、ナムアミダブツだね。

まあそれはいいとして、

「イオリさん、結界越しだったのに焼けそうなくらい熱かったんだけど」

「あはは……ごめん。はい、涼しい風涼しい風」

後ろを向いてイオリさんをジト目で見ると、大鎌の柄？ をダンジョンの床に突き刺しながら涼しい風を送ってくれた。オケラをトレインしてきた件の少年は、壁にもたれかかっていた。傷は全部塞がってて服とかの汚れまで無くなってる。

「うくん、この子の身元とか分かれればよかったんだけど……」

「一応私の知り合いではあるんだけど……」

「え？」

むむむくつという感じで悩んでいるイオリさんが、余りにも普通にそんなことを言ったので僕はちよつと固まってしまった。

「その人、イオリちゃんの知り合いなの？」

「うん、人間界にいた時のね。一応この人……まあロイドって言うんだけど、ロイドのお母さんは私の命の恩人だね。最初の私みたいに腕輪で変装してるみたい」

そう言われたので解析を使ってみたけど、解析に失敗しましたとしか表示されなかった。一応イオリさんのステータスでも覗き見れたのに、この結果に驚いて僕をそのままにイオリさんは話を続ける。

「でも、なんでロイドがここにいるのかは分からないだね。両親と一緒にパーティーで戦ってた筈だし、もしかしたら地上にいるのかも知れないけど二人が居ないのもちよつと変だし……」

「とりあえずそのロイド？ 君は、ここに放置するのは危ないから外に運ぶなりギルドに運ぶなりしないといけなし、一旦ダンジョンからは出ないとだね」

「私はもう、今日はダンジョンには潜りたくないなあ……」

そう言った僕に、レーナが苦笑いで答える。オケラって初めて見ると色々な意味でビツクリするもんね。

「ええ、折角面白い事が分かったのに。それじゃあもうちよつと待ってほしいな！」

「その面白い事って、さつきからイオリさんが大鎌をダンジョンに刺してるのに関係してたりする？」

「うん！」

イオリさんが笑顔でコクコク頷く。大鎌なんて物騒な物を持つてるせいで違和感が凄いけど。

「こうしてるとね！　なんかMPが凄い勢いで回復してくんだ！　もうちよつとで異次元収納の中の鉱石とかにも限界まで溜まるから、あと1分くらい待ってほしいな！」

そうイオリさんが言った少し後、ロイド？　君は僕が背負いダンジョンを後にした。

脳裏にダンジョンコアが過労死する未来が見えたけど、多分それは気のせいだよな！

第10話 やっぱりだよ!!

「むむむむ……」

私はそう唸りながら、宿の朝ごはんまで出てきたパンを口いっぱい頬張る。まあそのままじゃ飲み込めもしないから、牛乳も一緒だ。

と、言うわけで。私達が初めてダンジョンに潜って、予想外の再会をした次の日の朝、私達初めて普通に宿で朝ごはんを食べていた。

「イオリちゃん、顔にシワが寄ってるよ?」

「もごっ? もつごぐぐ」

「とりあえずちゃんと飲み込んでから話そうか、イオリさん」

「んむ」

ついつい口にパンを頬張ったまま喋ろうとしちゃって、リユートさんに注意されてしまった。むう……これくらいのこと、元々というかこの世界に来てからもすぐの頃なら普通に出来たのに……

「んぐつ。だつてさー、結局ロイドは目を覚まさなかったし、ギルドと宿人に聞いた限り1人みたいだし。なんか腑に落ちないっていうかさー」

「イオリさん、足をぶらぶらさせるのも行儀悪いよ」

「はーい……」

これも身体に精神が引きずられるってやつなのかな……自分でも最近、子供っぽい……いや、年相応? の動きをする事が多くなってるように感じる。高い場所に立ったりすると楽しく感じるし。あと今食べてるみたいな甘いお肉は好きだけど、一緒にあるピーマンみたいなのは嫌い。食べるけどね。

「まあとりあえず、昨日送ってきた宿に行つて話を聞いてくればいいんじゃないの?」

「うん! だけど、私とリユートさんがいるのに、まだ特に酷い問題が起きてないって事が凄く不安で……」

「普通の旅なら昨日のロイド君の事だけで充分問題なのに……」

レーナさんがそう呟いているのは多分本当なんだろうけど……大体この数ヶ月、1週間に最低一回は何かトラブルに巻き込まれてた私

と、同じ転生者のリユートさんがいるのにアレくらいじゃおかしい。もつと何か大変な事が起きる筈。

ん？ コレってふらぐって言うのかな？

「確かにイオリさんの言う通りなんだよなあ……もつとこう、隕石が降ってくるとかドラゴンが襲来したりとか」

「私どっちも出来るけど？」

「やめてよね」

「イオリちゃん、やっていい事と悪い事って言うのがあってね？」

「私、これでも元々15歳なのに……」

ぶーとほっぺを膨らまして抗議していると、よく分からない何か私の中を通り過ぎていった。リユートさん達もビクツとなつてたから今のは分かつたんだろう。

「フラグ回収……早すぎない？」

「僕も今、全く同じ事を思ったよ」

冒険者の皆様はギルドに集合して下さいという放送を聞きながら、ようやく来たかどこか安心して私だった。

まだパジャマだし朝ごはんも食べ終わってないからそっちの方が先か。……………パジャマはピンクの花柄だよ！ 悪いか！

◇

「空気がピリピリしてる……何があつたんだろうねリユートさん」

到着したギルドの中には緊迫した空気が漂っていた……のだけど、まだ何も説明はない。私を含めみんながみんなフル装備だから、その雰囲気には拍車がかかっている。

「さあ？ まあ、多分ダンジョン関連の何かではあるんだろうけど……………」

そんな事を話していると、ギルドのドアが勢いよく開けられ一人の男……昨日の鬼（仮）の人だ……が入ってきて叫んだ。

「【暴動】だ！ ダンジョンから魔物が溢れてきている！ 今すぐ誰でもいいから救援をくれ！」

「こんな朝っぱらにかよ！」

「普段からいる奴らじゃ人出が足りねえ！ 防衛する奴らと、原因の

ボスの討伐してるパーティーに加勢する奴らで分かれてくれ!!」

ぼーどう……ハッ、昨日私がダンジョンから魔力を搾り取ったりしたから!? いやいやまさかそんな事はあるはずないだろう。

「リユートくん、【暴動】って何ですか?」

「大量の魔物が、何らかの理由で発生して溢れてくることだよレーナ。ダンジョンの中は外とは比べ物にならない程魔物がひしめいてるっていう話だね」

「うう……私行きたくないです……」

レーナさんが凄く嫌そうにそう言う。やっぱり暴動っていうのはそういうやつだったか。虫が通路とか階段にみっちり……悪夢だね。

まあそれは置いておくとして、

「リユートさん、私がダンジョンの中に行ってくるからそっちはダンジョンの外でいい?」

「レーナも行きたくないって言うてるし僕は別にいいけど、幾らいオリさんでも罾とかひしめいてる魔物は簡単に突破できないと思うけど?」

「大丈夫! 緊急時だからダンジョンぶち壊して進むから!」

私は右手を、さむずあつぶっていうんだったかな? その形にしてリユートさんに言う。踏破するのが難しいなら、自分で道を作っちゃえばいいじゃんって事だよな!

「ああ、うん。緊急時だもんね、なんでもありだよな」

リユートさんがまた遠い目をして、疲れた雰囲気を出しているけれどいいよね! だってリユートさんだもん。

「レーナさんもそういうことでもいい?」

「うん、いってらっしやいイオリちゃん」

「いってきま——ってそうだ」

そのまま勢いよく走り出そうとして、思い出したことがあったから足を止める。私としたことが、うっかり忘れ物をしそうなところだった。

「はいリユートさん、胃薬と頭痛薬渡しておくね!」

「……ありがたく貰っておくよ」

「それじゃあ気を取り直して。行つてきます！」
そう言つて私は昨日行つたダンジョンに向かつて走り出した。
ふふふ、助太刀ついでにダンジョンコアもゲッツしてやる。

第11話 ダンジョンコア涙目

《炎纏》から部分獣化(目と耳と尻尾)まで多種多様なパフをかけながら屋根の上を走って私がダンジョンの付近に到着した時、そこはとても酷い状況になっていた。

ダンジョンの入り口からワラワラと出てくる虫を昨日のおじさん達みたいな人達が街の方に溢れないように止めており、空を飛んでいこうとする魔物を魔法で撃墜しているのだが、いかんせん人数が足りないようで討ち漏らしが少しずつ出ているようだった。

「虫の魔物を一掃します！ 気をつけてください!!」

マイク剣改をちゃんとマイクとして使って注意を呼びかけた後、ダンジョンの入り口に向かって飛び上がった私は、とっておきの一つの魔法……いや、魔導? を発動させた。多分この元ネタはリユートさんでも分らない筈だ。

「《炎ファイアー・大文字! 一面! 獄炎色イイツ!!》」

私の周囲の空間から大量の炎が吹き上がり、空中地上地下構わず縦横無尽に炎が駆け回っていく。

まだ私の技量が足りないせいか、オレンジ色の炎は数秒で消え去ってしまったけど、その数秒で目に映る範囲の虫を灰にするのは結構簡単な事だった。最低でもこれくらいはやらないと、真似したとも言えないからね。

「もう少しで援軍が来るから、もうちょつと頑張ってください!!」

危ねえじゃねえかとかなんとか言ってる文句を無視して、そのままダンジョンの入り口に飛び込む。……入り口、所々デロって溶けてたりガラスみたいになってたけど仕方ないよね。

「ふっ飛べ、うぞーむぞーっ!!」

大鎌を持っていない左手を中心に回転していた3つの魔法陣が拡大拡散、その中心から発射された光の衝撃波がひしめいていた魔物を

吹き飛ばす。

「つてもう！ 魔物多すぎ!!」

まだたった8階層目だと言うのに、かなり時間がかかってしまっている。といつてもカツプラーメンが出来るくらいだが。

「ああもう、加勢が遅れて死んじやう人が居たりしたらトラウマものだし……ええい、やっちゃえ！」

幸いにもここはダンジョン、どんな大魔法を使ってMPが消し飛ばうと（ほぼ）永遠にMPは回復出来る。どこかからここに入った時に聞こえた声とはまた違った啾り泣く声が聞こえた気がしたけど、そんなのは知った事じゃない。

「《タナトニウムランサー》！」

私が頭に叩き込まれた情報の中で、危険度がMAXのタナトニウムという空想上の金属を槍状に成形して、結構離れた場所に打ち出す。それは、どこぞの蒼い鋼なアニメに出てくる侵食魚雷のように、バシウウウンつという音を出して、ダンジョンの床に大穴を開けた。

「次の階まで……空いてるみたいだね。よし、行けそう！」

私が穴の縁からひよつこりと下を覗き込むと、その大穴の下にはきちんと次の階層が広がっていた。自分でやつといてなんだけど、もうコレダンジョン攻略じゃないね。

「まあいつか。《タナトニウムランサー・マルチショット》！」

ぴよんと穴に飛び降りて、私は更に魔法でダンジョンを突き破っていく。なんだろう、これすっごい楽しい。

「イヤッホオオオオオオウ！」

そんな風に叫びながら落下して行って、数えて15層目。そこに広がっていた光景もダンジョンの入り口と同じ……いや、それよりも酷かった。

黒光りする巨大カブトムシ、倒れている色々な人達。所謂レイド戦でもしてたのかな？ そしてフラフラになりながらも立っている口イド。

……今、何気にロイドって悪運が強いなあって思った。

「はあ?」

「昨日ぶりだね、ロイド！」

そのままズダンと着地して、私は刀身のひびから光を漏らす大鎌をカブトムシに向ける。一応私としては、なんでボス部屋にいるの？とか、なんでシンデイさん達がいらないの？とか、

「色々聞きたい事はあるんだけど、まずはあのカブトムシを倒すって事でいいかな？」

「ああ、だけど俺はもう碌に動けないぞ？」

「休んでて《ハイヒール・四重奏》カルテット」

とりあえずステータスを見ても危なかったので、《エクスヒール》1歩手前の回復魔法をロイドにかけておく。そんな事をしている間も、カブトムシからは目を離さない。SとSSの間くらいのこのカブトムシから目を離すのは、いくら私でも無理！

「と、まあ。よくも私の知り合いを……しかも唯一の名前を覚えている男の子をこんなにしてくれたよね」

因みにリユートさんは例外ね、だって私の保護者みたいな立場の人だし。うん、今度パーとか言っただけでもいいかもしれない。

「許さないんだから」

ロイドが好きとか、そういう感情はこれっぽっちも……いや、小指の爪の先の垢くらい（ゲーム的に言うなら初期値？）はあるかもだけどまあそうじゃない。けど、自分の知り合いがボロボロにされてるのを見て、黙ってられる程私は性格が良くはないんだよねえ。

「ギギギイイ！」

「その角に甲殻に、全部置いてけえええ！」

まあ、本心はこっちなのだが

第12話 広がる悪意

「その角に甲殻に、全部置いてけえええ！」

本人が目の前にいる手前色々言ってみたけど、結局本音を叫んで私はカブトムシに突撃する。うーん、嘘は言っていないし、もうちよつとカッコつけるつもりだったのになあ……

「イヤーツ!!」

私の掛け声と共に大鎌の先から3連続で爆発音が鳴り、私の素の身体能力とも合わさって凄まじい勢いで大鎌が跳ね上がる。もちろん目指す先は、黒くて硬そうでぶつといあの角だ。

「ギギヤツ!!」

カブトムシ……正式名称？ 甲虫王者 鎧兜つていうらしい……も角を振り下ろしてくると思いきや、翅を開いて後方に回転しながら舞い上がった。

「ふえっ!?!」

当然全力の斬り上げを回避されてしまった私は思いつきり体勢を崩してしまい、そのまま床を削りながら突進してきたカブトムシの突進をモロに受けて、壁に弾き飛ばされてしまった。

「グッ……」

床にベチャって感じで倒れた私だけど、手放さなかった大鎌を杖代わりに立ち上がる。私自身のスキルと大鎌の能力とで、もはや呪いって言ってもいいレベルでHPと傷は回復するし痛みも薄いけど、受けた衝撃自体は消えはしない……つまり何が言いたいのかというと、(アドレナリンがドバドバ出てない限り) 私は慣れるまでの後数秒は動けないって事で……

「ギギイツー!」

それはイコール、こんな風に飛びかかって来られても無傷では回避も防御もできないって事だ。

「危ない! 避ける!!」

「言われなくても!! 《エクスペロージョン》」

私の小さな身体が自分の魔法の爆風で勢いよく吹き飛ば。さつき

も言った通り、怪我をする事覚悟なら回避なんて余裕だ。痛みは危険信号つて言うし、流石の痛覚大耐性も一定以上の痛さは弱めてくれな
いからそこは注意だけどね。

なんて事を思いながらも、某カズマさんみたく二、三回転して体の動きを止める。勢いを殺すついでに、床を大鎌で削ってMPを回復しておくのも忘れない。

「むう……あつたまきたあ！ 鎖をこの手に、素材はアダマントイト、用途は拘束、数は4つで十二分！」

「ギイ?」

だんだんテンションが上がってきた私は、ノリノリで魔法を唱える。リユートさんの天の鎖エルキドゥと違って、地面から生えた燻んだ緑色の鎖がカブトムシをがんじがらめに拘束する。ついでに大鎌にも接続してつと。

「断殺・邪刃ジャバウオウオツてKKK!!」

魔法、身体能力、武器、その全部が強くなった事で、初めてオークに使った時とは比べものにならない速さでカブトムシの首? に突っ込むが、ガツキンツ!! という音が鳴って、頭と胴の境目の半分くらいの所で大鎌刃は止まってしまった。けどっ!

「ファイヤーッ!」

私は大鎌に魔力を流し、先つちよになっている銃口の部分から連続して爆発を起こして刃を押し込み、死神っぽく真つ二つにした。

「よっしやああ取ったどー!」

シユタツという擬音がなるような感じで着地した後、黙っていようと思っていたのに何故かこんな事を口走ってしまった。しかもロイドとロイドがポーシオンを掛けてる人のすぐ近くで。

赤くなってる顔を誤魔化す為に、大鎌の刃の部分に付いてたよく分からない何かを魔法で水洗いしているのは悪くない筈だ。わ、私は悪くねえ!

「後はカブトムシを仕舞って、倒れてる人を回復して……」

そっからはここに魔物が来ないようにしながら回復させて離脱するか、救援を待つかするとして……

「ちよつ、皆さん何を?! うわあつ!」

大鎌を畳んで背負おうとしている最中、そんなロイドの声が聞こえたと思つたら久々に魔眼に情報が流れた。

|| || 《斬・刺・打・魔／威力 大／範囲 中／集中攻撃／脅威度
防御推奨》 || ||

見える赤い線は、上下左右斜めから私を通過している。というか私を中心にかなり真つ赤になっている。私が……狙われている？

《盾》は間に合わない、変な体勢だから回避も出来ないし、背後からだから防御も……くつ、仕方ない。あんまり使いたくないけどっ!

「形……きやー!」
イェツ

その詠唱の途中で、いきなり横から凄い勢いの風がと一緒に手が伸びてきて、滲み出し始めていた血臭ごと私を突き飛ばす。

諸々の装備込みで40kgにもなつてないもんなあ私。そんな事を思いながら見たのは、やったげな顔でこっちに右手を伸ばしているロイドと、黒い霧のような物が纏わり付いている人達の攻撃がその右手に叩き込まれる光景だった。

「チイツあいつ、小僧を身代わりにしやがった」

「この悪魔め!」

そんな言葉が次々と私に投げかけられる。え、ちよ、は? いきなりが起こってるの? というか腕飛んでるし! 赤いし! 血がドバツツって! 治されてるけど【洗脳】? 【催眠】? 何その状態異常!?

ファイアリ

「《炎・大文字一面獄炎色》!」

仕舞いかけていた大鎌を再び床に突き刺し、地上だと技量も魔力も足りていないから維持できたのは数秒だけど、このほぼ無限に魔力を搾り取れるダンジョン内なら魔力のごり押しが出来る。だから原作のように……

「とりあえずみんな仲良くぶつ倒れろー!」

状態異常から見るに絶対よくないものだろうけど、私は命を奪うなんてことは魔物くらいにしかしたくない。だから、一応風の魔法で抵抗している人以外には魔法は当たらないように制御しているけど、ダ

ンジョンなんていう密室空間でこんな大規模な炎が起こったら？

「クソ……」

「チクショウ……」

そんな恨み言を呟きながら起き上がっていた人達がバタバタと倒れていく。私自身は風の魔法で空気作ってるから大丈夫だけど、普通こうなる。

「ふう……全く。一体なんだったんだろう？」

全員が倒れて気絶している事を確認して魔法を解除し、私はそんな事を呟く。

それにしても、あんなラブコメみたいに突き飛ばされたけどドキツともしなかつたなあ〜と、漂っていた塵一つ残らず燃え尽きて心なしか綺麗になつた空気を……

「ん？ 塵一つ残らず燃え尽きて？」

自分の言葉に嫌な予感がし、右肘から先の無いロイドを見る。そして周りを見渡す。

………あつ、右手。

第13話 いい雰囲気？

「クラネルさんだったら、腕が残ってれば治せたかもしれないけど私じゃ無理だしなあ……」

状態異常のある人達とそうじゃない人達を離して寝かして一段落ついたところで、未だに気を失っているロイドを見て私はそう呟く。

クラネルさんなら多分腕が残ってれば治せただろうけど、私じゃそんな事はできないし、そもそも無くなっちゃってるからクラネルさんでも多分無理だろう。希望があるとしたら、チートを貰ってるはずの元クラスメイトの誰かくらいかな？

「とりあえず助けを待つしかない……か」

綺麗な青色のダンジョンコアを台座からとって仕舞い、そこに紫色の【魔核】をセットしたから、【暴動】も収まったと思う。ダンジョンコアって一旦取るとダンジョン全体の機能が停止するとかいう話だったし。

脱出も考えてみたけど、離れた場所で鎖を使ってがんじがらめにして洗脳されてるらしい危ない人達が数十名に対して、無事なのは私含めて6人しか居ないからすぐに無理って分かったね。だって洗脳とか解除出来なかったんだもん。ぶーぶー。

「作ったことなんて無いけど、義手ってやつを作ってみるしかないかな？」

頭の中で愚痴りながら、冷静にそんな事も考えてみたりもする。今こんなになっちゃってるのは私が原因だし、そこは絶対にどうにかしたいと思ってる。義手っていったらやっぱり機械オートメイル？ 似たような感じだとシエルブリットとか……

「やだな、罪悪感があるのにそれを上回るレベルの創作意欲が湧いてきた……」

それも意外と悪くないと思っちゃってる分、私って酷いなあって思った。とりあえずただ待ってるのも退屈だし、本気で作るか。



「大丈夫だっ、た……？」

「ふふんふーん♪」

ダンジョンの外は殆ど全てが片付いたので、僕の切り札でもある閃光転身を使って駆け抜けて、誰よりも早く「暴動」の収まり始めたダンジョン内をボス部屋まで走ってきた僕が見たのは、昨日の男子に膝枕をしながら鼻歌まじりに金属を弄ってるイオリさんだった。周りには鎖に巻かれた沢山の冒険者の人達と、そうじゃなく普通に倒れている人達がいるから更に混沌としている。

「イオリさん、もしかして僕……邪魔だったりする？」

「いや、全然？」

僕のその問いに、イオリさんは全く表情を変えずにそう答えた。ロイド君は気絶しているみたいだけど、凄く可哀想に思えた。

「えっと、まあいいや。それじゃあ、この状況の説明をして欲しいんだけどいい？」

「うん、いいよ！ この状況はカクカクシカジカって事だよ！」

「ごめん、ちゃんと説明してほしいな」

そう元氣よく言われても、可愛いだけで今回は全く分からない。結構長く一緒にいるけど、流石に心を読めたりはしないからね。王の財宝の中を探せばあるかもしれないけど。

「え〜めんどくさいなあ……むう、そのままだと長くなるからある程度まとめると、私がダンジョンに穴を開けてここまで突入してきた時にはロイドがここのボスと戦ってて、私がボスをそっこで倒したらそっちの鎖で縛ってる人達が襲ってきたんだよ」

「それで？」

「その時に私を庇ってロイドが右腕を切り飛ばされて、本気でそれを撃退する時に切り飛ばされた方を消し炭にしちやったから義手製作中。おっけー？」

「OK」

イオリさんが作る義手がまともな物になるのか心配なところだけど、間違いなく悪い事にはならないから大丈夫だろう。

だから今、イオリさんが組み立てている何かの他にオートメール風のパーツが置いてあったり、自慢の拳になりそうなパーツが置いて

あつたりしても大丈夫……うん、大丈夫だと思う。

「あ、そうだリユートさん。見ればわかると思うけど、そっちの人達は洗脳と催眠って状態異常になってて、感染するし回復魔法じゃ治せないみたいだから注意ね」

「はいっ!？」

鎖で縛られている冒険者の人達に近づいていた僕は、イオリさんが思い出したように言ったその言葉を聞いて飛びのいた。

「危ないなあ……そういう事はもう少し早く言つてよ。それって対処法とか無いの?」

「んつとね、どうにも状態異常は変わつてくみたいで、最初の【感染・洗脳】って文字が点滅してる間なら回復魔法が効いたかな。それ以降はもう無理だった」

「それはまた……こんどはギルドに連れていかないようにね」
「はい」

でもそうになると、僕が一人で来たのはあんまり意味がなかったように思える。宝具は頼れないし、僕一人じゃあんな人数は運べない。

「じゃあ僕は他の人達が追いついてくるまで、この部屋に魔物が入つてこないようにしようかと思うけど……最後に一つだけ質問してもいい?」

「別にいいよ?」

「それじゃあさ、なんで膝枕をやってるの? 大体ラブコメだと、好きな人にやるやつだしちよつと気になってね」

かくいう僕も、最近レーナに耳搔きをやつてもらつたりなんだからあつたりする。まだ一線は越えてないよ?」

「起こさずに腕の長さとか色々見やすいじゃん? あと一回やってみたかつたつてのものもあるかな。リユートさんとかクラネルさんにやると何されるかわからないし」

「僕は何もしないよ!!」

昔なら兎も角、今の僕にはレーナが居るし。でも、あーうん、5分なら耐えられる。

「うっ……あ……」

そんなことを話していたら、膝枕中のロイド君が目を覚ました。

第14話 いい雰囲気? そのに

「うっ……あ……」

そんなうめき声を漏らしながら、ロイドが目を覚ました。いやあ、膝枕ってなんかこそばゆい感じなんだね。と、まあそれはいいとして。

「おはようロイド。ってアレ? 今って朝だっけ?」

「へ?」

ダンジョンに入ったのは朝だった筈だけど、突破したり戦ったりしてどれくらい時間が経ってるのか分かんないや。なんて思ってる人みたいに下げた視線と、私の膝の上から見上げてきているロイドの視線がびったり合う。

「……」

「……」

「うわあっ!!?」

「ふぎやっ」

見つめ合う? 事数秒、いきなり跳ね起きたロイドの額が覗き込んでいた私のでこと思いつきり衝突する。うう……不意打ちは痛い……ってというか、いつだったかアニメでこんな見た気がする。しかもヒロインが私と同じ銀髪……ファンネル作らないと(使命感)
「ぐっ……」

そしてそのままの勢いで立ったロイドがバランスを崩して左側にバタンと倒れる。

おでこを押さえて涙目になっている私と、右腕を押さえて涙目になってるロイドを見て、リユートさんがはあ……とため息を吐いた。「なんで僕が、こんなラブコメみたいなを見せられなきゃいけないんだろう……」

「だったらレーナさんとヌキヌキポンしてこいよおっ!!」

「あべしっ」

最近は私がいるから見える所ではしてないけど、気がついたらラブコメしてるリユートさんには言われなくなかったから、足元の金属片

を投げつけたけど私は間違っていない筈だ。

「はあ……とりあえずリユートさんが来たってことはそろそろ救援の人達が来るだろうし、それまでは状況の確認って事でいい？」

立つのは諦めたのか、座っているロイドに話しかける。

「別にそれで問題ね……ないです。あん……あなたはもうしてこころで俺に優しくしてくれるんだ……ですか？ 昨日会ったばかりなのに」

「ふえ？」

その言葉に、色々放置していた部品を仕舞っていた私の手が止まる。リユートさん？ ギャグ漫画風に頭から血を流して倒れてるよ。

「もしかして、気付いてないの？ 私と同じ特徴の人なんてそうそう居ない筈なんだけど……」

大鎌に銀髪にロリだよ？ 嘘でしょ？ と思ったけど、普通に頷かれてしまった。私って個性っていうかキャラ濃いよね！

「初対面で僕の事を殴ったのを忘れられてるとはね……」

「あ、いや、まさか!？」

まだこの部屋に応援の人達が来そうにないことを確認してから、ぱっしう？ で発動していた魔眼と変身のスキルを解除して、適当なリボンで髪をポニーテールにまとめてみる。これで多分、初めて会った時の服装になってる筈だ。

「これで思い出した？ ちなみに優しくしてるのは、私が趣味でやってるやりたい事だからだよ」

「え、それって」

「あと言い忘れてたけど、さっきは助けてくれてありがとうね！」

なんとなく懐かくなつたので、久しぶりににぱー☆って感じで笑いながら言ってみたら、やっぱり顔を赤くしていた。

そういえばいつ求援の人が来てもおかしくないというか、今14階層に入ったみたいだったから急いでスキルを全部ONに戻す。気付けるのはデイメンジョン様々だね。

「あんまり時間もないみたいだけど、他に質問はある？」

「あ、ああ。それじゃあ……俺のこの右腕はどうなるんだ？」

そう真剣な表情をして聞いてきた。あう、やっぱりそうだよね……私を助けてなっちゃったわけだし。あとついでに装備の破損も酷いよね……特に剣は熱で歪んじやつたし。

「別に後悔はしてないんだけど、これじゃ冒険者は続けられないだろう？ だから気になつてな」

「多分世界一のお医者さんロリコンの人が知り合いにいるけど、結論から言うともう元には戻せないし治らないかな」

「そう……か」

ロイドが、なんか凄く考え込んだ感じになる。言ってから思ったけど、良くない言い方だねこれ。

「でも」

「でも？」

「義手っていう物があるんだけど、ロイドは知ってる？」

「一応はな。失くした腕とかの代わりになるってやつだろ？ 確か一番安くて白金貨一枚もするって話だったな」

あ、一応こつちの世界にも義手つてあるんだ。それにしても一番安いやつでも白金貨一枚つて、やっぱりかなり高いんだね。

「知ってるなら早いや。一応鍛冶師としてSランク登録されてる私が、責任を持つて全力で作つてるから。細かい調整は後々していくとして2日で義手は用意するから、使えるようにはなるかな」

私が治せる可能性を限りなく0に近い状態にしちやつたからって事もあるけど、やっぱり趣味と実益を兼ねた最高のお仕事だね！ つていうことの方が大きいんだよね。

「いや、悪いって。それに、もし作つて貰えたとしても俺にそんな代金は出せないんだが……」

「いいよ、私が好きでやつてる事なんだから。気にしないで！」

好きにやり過ぎて、性能がとんでもない事になりそうではある事はないしよだ。全力で使うなら初期のこの大鎌の十歩手前くらいにはなりそうなんだよね……

つて、うわっもう14層突破してるよ。速いなあ。

「とりあえず、もう救援の人達が来るみたいだから質問とかの続きは

「ここを脱出してからだね」

「なんで、そんな事が分かるんだ？」

「んー、エスパーだから」

そう言ったほんの少し後、感知してた通りに救援の人達がやって来て、私達は揃って地上に帰還した。因みに外はお昼だった。

第15話 懲りないイオリ

ダンジョンから脱出した後、勿論すぐに攻略祝って事で宴会が始まったんだけど（場所はギルドの酒場みたいな所ね）、私、ロイド、リユートさん、正気の数人の中には真っ先にギルドの人と衛兵さんの偉い人かな？ からの事情聴取が待っていた。優しかったけど。

リユートさんは全部が終わってから来たせいかすぐに解放してもらえてたけど、私含む残りは夕方までずっと拘束されていた。

「だいたいなんで私に対しての質問があんなに多いんだよー。確かに色々言っちゃったけどさあ……」

状態異常の事やら、ヤバイ人達を連れ出す時にそこそこ説明したり回復魔法を常時使ったりやっただけどさあ……。そんなことを思いながら私は、バンツと目の前のテーブルを叩く。

「私みたいな7さいの女の子にじょーきよーせつめーのーりよくを求めるとかおかしいよ!! だってまだ年齢一桁だよロリだよよーじよだよ!?! Sランクぼーけんしやではあるけど、ぱうわーだけの話なんだよお……」

「そうだよね……話はいくらでも聞いてあげるからイオリさん、まずその手に持ったワインは仕舞おうよ……絶対身体に悪いって」

「そうだよイオリちゃん。今みたいな頃から飲んじやうと背も胸も大きくなるよ?」

「あるこーる、げどくでできるもん」

「そういえば説明してなかったから今の状況を説明しておこうと思う。」

ようやく事情聴取が終わった私は、念のためギルドの医務室までロイドを連れていった後、普通にお腹がペコペコだったから宴会場に行っただけ……私が着いた時には宴会も終盤に差し掛かって、料理なんて殆ど何も残ってなかったんだよ。一応そこでリユートさん達と合流し、近くのテーブルで私が手持ちの料理を食べながら、煮込みハンバーグとかの料理用に買った赤ワインをグイツと飲んだ辺りからはもう記憶があやふやだ。

ってあれ？ 私は誰に説明してるんだらう？

「そーですよー、どうせ私はつるぺたロリっ娘ですよーだ。ロリ巨ヌーってなんだよ、何あの生物？ 私なんて虚ヌーだっつーの」

「ちよつ、レーナ。今のイオリさんって導火線に火のついた爆弾みたいな感じなんだから、下手に刺激するような事を言ったら……」

ねえリユートさん、そんなヒソヒソ声で言っても私にはばっちし聞こえてるんだよ？ ふん、私だっつて立派なれでいー兼元男なのだ、それくらいで爆発なんてしたりしないさ。ただ後で造る予定の艦装（侵食魚雷＋超重力砲＋ビーム砲＋赤バンダナ侍フィールドっぽい物付き）の性能テストに付き合ってもらっただけだよ？ 私、怒ってないかないですよ？

「そーで……で……りちゃんの……ことも……と……うな」

あれ？ なんだか、だんだん、まぶた……が……

「……のが……」

とりあえず、リユートさんは実験台に……ぐう……

◇

「ふわあ……え？」

小さく欠伸をした後目をこすって周りを見渡すと、私の取った宿の部屋だった。私作の武器が立てかけてあるから間違いない。けど……いつ私は帰ってきたんだろう？ 昨日の事情聴取が終わった後から記憶がないや。

「うう……ダメだ、全然思い出せない。リユートさん達に聞きに行けばいいか」

一応指輪のサンプルも出来てるし、渡しに行くついでに聞けばいいか。とりあえず着替えるとして……結構干してる最中だから、適当に着替えてパーカーでも羽織っていけばいいか。ちよつと大きなせいでダボついてるけど、この薄い緑色のパーカー気に入ってるんだよね。ちよつとしたレースと刺繍以外余計な物が無いのがポイントかな。

そんなこんなで着替えた後、自分の部屋を出てすぐ近くにある

リユートさん達の部屋に立ってドアノブに手をかけたところで私は手を止める。

「なんでだろう、開けるのも魔法とかスキルで中の状況を確認するの
もいけない気がする」

うん、私の副作用とかロジックとかがそう言ってる気がする。今このドアを開けたら、桃色の甘い空間に巻き込まれる確率が100パーセントって。

「やめとこ。2人が起きてくるまでに義手、完成させとこう」

漆黒魔法の呪いをちよつと弄って触覚を再現して、そのままじゃ武器が使いにくいだろうから私の大鎌と同じように機剣コンフレイトのシステムも組み込んで使いやすくして、動力は魔力しかないからバッテリーつけて空間も次元魔法で広げて……浪漫を詰め込もう。

「とりあえず部屋もーどろつと」

強さのみを求めて強化して、ゴテゴテしてしまう義手など無粋の極み。だからこそのこのミリ単位魔法陣だ。なんちやつて。え、追加パーツでの強化？ それは浪漫でしょ。

素材もオリハルコン等の伝説の金属から、色々便利なミスリルとか魔力を掻き消す金属とか、地味に溜まっているA〜Sランクの魔物素材もふんだんに使っている。

「あれ？ 切り札含めると、私の大鎌とけつこーういい勝負ができそうな強さになるのかも」

それなら、ずつとリユートさんに断られてた模擬戦をロイドと出来たりするかもしれない。あー……でも、そうしたいなら一緒のパーティーか一緒に旅しないとダメか……まあ来てくれるかは向こう次第だけ。

「その事も含めてリユートさんとは話しないとなあ〜」

そんな事を呟きながら、取り出した黒をベースに所々紫がかった赤い線の走ってたり銀色の模様の描いてある義手を抱えて、私は自分の部屋に戻っていった。

あ、1人分多く私にご飯作らないとダメになるのか。香辛料は自重しないとすぐお金無くなっちゃいそうだなあ……

第16話 まともじゃなかった系義手

『……という訳でリユートさん、義手渡すついでにロイドの事をパーテイーに誘ってきてもいい?』

『えつと、向こうが大丈夫なら僕は別にいいけど……レーナは?』

『私も別にいいよ? なんとなく予想出来てましたし』

義手を完成させた後リユートさん達の部屋で話した結果こんな感じの返事を貰えたので、今私は上機嫌でギルドの廊下を歩いている。

受付嬢の人に「お見舞いになりましたー」って言ったら、あんまり人がいなかったせいかわ受付嬢の人達から暖かい目で見られたり「頑張れ」とか「服似合ってるよ」とか「青春だね」とかわれたけどなんだったんだろう? そんなに似合ってるのかな? このパーカーにスカートつて。

「うーん、まあ、別にいいか」

そんなことを考えている間に、昨日私自身が肩を貸して運んだ部屋の前に着いた。さて、辛気臭い挨拶なんてしよーじき柄じゃないし。

「おっはよーロイドー。生きてるー?」

「えっ、あ」

バアンとドアを開けると、ベッドの上で上半身裸の状態で顔を赤くしているロイドがいた。手には濡れてるタオルっぽい物を持つてるから身体でも拭いてたんだろう。って、腹筋割れてるとか凄い……元々の僕は割れてなかったのに……じゃなくて! 普通こういう覗きイベントは私とかレーナさんとかがされるものでしょうに。

「まあ丁度いいからいいや。ちよつと本気で造った義手持ってきたらそのまま置いてね!」

「ええ!?!」

そう言っただけは、見た目では見えなかったらーのバラニウムな義手の青い線が紫がかった赤に変わった感じの義手を取り出す。

|||||

STR +590
DEF +530
AGL +550
DEX +570
MIND +530

【属性】 混沌

【耐久】 頑丈（自動回復）

【重量】 600g（最適化待機中）

《スキル》

擬似・幕引きの拳

擬似・理想送り

最適化 Lv | パイルバンカー Lv |

スラストー Lv | 魔力生成 Lv |

魔力無効化（一部） Lv | 最適化 Lv |

耐久強化 Lv9 物理耐性 Lv5 魔法耐性 Lv5

寄生 Lv 2 呪い Lv 4 武具接続 Lv 2

《備考》

イオリが持てる技術の全てを使ってロマンを詰め込んだ義手^{ロマンの塊}。里見連太郎の義肢のようなスラストー、パルマファイオキーナ掌部ビーム砲を模して作られたパイルバンカー、ネフシユタンの鎧のような同化能力、幻想殺しのような魔力無効化能力（手首から先のみ）、極めつけは2つの必殺技などイオリがやりたい放題機能を詰め込んだ結果、ユニーク装備と化した。

若干の呪いの効力によって触覚と温度を再現し、多少の損傷は埋め込まれたダンジョンコアの欠片の効果で再生する。必殺技をどちらか1つでも使った場合オーバーヒートして、半日間ただの義手になってしまう。

使用者の熟練度により隠し機能が解放される。

元々、この大鎌の10歩手前くらいの性能になる予定だったのに、

張り切っちゃったせいで凄いい性能になっちゃったんだよね。何気にユニーク装備になってるし。

「はい右腕だして」

「あ、ああ」

よし、とりあえず変に膿んだりもしてないし綺麗に治つてると。これなら特に問題なく付けられるね。

「あつ、若干初めは痛いから」

「へ？」

「えいつ」

出されたままの腕にグイツと義手を押し付ける。凄いい痛そうだけど仕方ないじゃん、変に魔法で固定したり私なんかが手術じみた事をするより、ネフシユタンの鎧的な感じで固定した方が安全なんかもん。本当に色々な意味で。

なんて事を思ってる間にどうにかなったようだ。

「OK？」

「おーけー？」

「大丈夫？ って事。それで？」

「お、おーけー」

ゼロじゃなくて結構プラスで始まってたよな私の異世界生活。いや、TS転生（ロリ）だからプラマイゼロかな？ ってまた話が逸れたや、とりあえずOKらしいから次に進める事にする。

「じゃあ好きに動かして動作確認してみて。多分取れたりしないから」

「分かった」

そうロイドは短く返事をして、手をグーパーグーパーしたり手首を回したり、手を振り回したりしてみている。よしっ！ 取れてない取れてない、ちよつと割って組み込んだダンジョンコアナイス！

「何かおかしいところ……ある？」

「いや、特に無いな。けど強いて言うなら一つだけ……」

「えっ、嘘？ 何かダメなところあった!？」

それならマズイぞ。浪漫を詰め込むあまり安全性とか安定性が下

がるなんて本末転倒って奴だ。とりあえず鍊金を準備して魔眼もちゃんとして……

「俺の知ってる義手は確か最高級品だった筈だけど、それと比べてもコレは性能が高すぎる事かな。触ってる感覚とか温かさが感じられるなんて聞いた事も無いぞ?」

そう慌てている私に向かって真顔でそんな事を言ってきたせいで、ズコーツと滑ってしまふ。全くもう、焦ったじゃん。

でも改めて考えると褒められたって事なので、えっへんと(無い)胸を張って笑顔で私は言う。

「これでも私、鍛冶師でSランクの冒険者だもん!」

「昨日ギルドの人に聞いて確認したんだけど、それって本当だったんだな」

「信じてくれてなかったんだ……」

ぶーとほっぺを膨らまして抗議する。ロイドの顔が更に赤くなってるけど、風邪でもひいたのかな? それならそれで風邪薬があるけど……

「まあいいや。それじゃあ機能の説明に移りたいと思うんだけど……その前に」

「その前に?」

「ロイドってパーティー組んでる人達とか居たりする?」

「いや、居ないけど……なんでそんな事を?」

「ちよつとね」

ロイド自身はしないとしても、必殺技(擬似マツキーパーンチとか擬似理想送り)を悪用されたりとかしたらたまったもんじゃ無いし。千切られたりしたら私はキレる自信がある。

「それじゃあさ、ロイドが良ければ私達のパーティーと一緒に来ない?」

「え?」

「いや、あふたーけあみたいの意味も含めて一緒に来ない? っていう事」

鍛冶とか料理とかは楽しいけど、レーナさんとは模擬戦はしたくな

いしりユートさんはしてくれないし、その義手があるなら結構いい勝負が出来ると思うんだよね！

「あふたーけあ?」

「うん。今回の場合だと私がその義手を付けたから、その後暫く面倒をみるみたいな事……………ダメ?」

上目遣いで首を傾げてみる。因みにちやつかり義手を両手でギョツと握ってみたりしてる。リユートさんならこれで1発なんだけど…………

「こ、こつちこそよろしくな!」

「うん! ありがとう。それじゃあこの義手の機能だけど、手のひらをこつちやつて押し付けて使うのがパイルバンカーっていうやつで…………」

と、こんな感じで説明出来るやつは説明して、ロイドが私達のパーティーに加入するのが確定した。

計画通り（ニヤリ

第17話 次の目的地は？

「ロイドとやうりたういなう、てっかげん無つしのうガツチバツトル。ズツドン、バツコン、ドツカンと〜」

なんとなく着てみた紫の着物と、それに合いそうだったから差した番傘をくるくると回しながら、シトシトと雨の降る街の中を歩く。

歩きたびに鈴の付いた髪飾りがリンと鳴って、中々に風情がある感じだ。

「よくもまあ、普通の童謡をそんな凄く殺伐としたものに変えられるよね」

「イオリちゃんが歌っていると、それでも明るく聞こえるから不思議だよね」

パシャパシャと足元の水溜りを踏みながら歩いている私に、相合傘をしているリユートさんとレーナさんがそう言ってくる。

なんか知らないけど、私が昨日に引き続いてロイドのリハビリをしてきた後食材の買い出しをしている間に、この2人はデートをしてたらしい。ちよつと私、今なら神蝕現象フェイズスキル使えるかもしれない。

「だって私の本心なんでもん♪ 多分引き受けてくれるだろうし」

「こーやって聞くと、イオリちゃんとロイド君って付き合ってるみたいだね」

「なに言ってるのレーナさん？ そんな訳ないじゃん」

「ロイド君、多分イオリさんの事好きだろうけどなあ」

「ないない」

リユートさんがそんな事を呟いてるけど流石に無いでしょ。だって5歳差だよ5歳差？

まあでも、もしそうだとしたら殺し愛夫婦か……特異点に墮ちそう（kkk感）というか、改めて考えると私の渴望ってなんだろう？ 死にたくはないけどヌキヌキボン（ノ）レベルじゃないし……

「まあいいか。それよりもさ、昨日指輪のサンプル渡したけど決まった？ 決まってるなら今日辺りに完成させるけど……」

「流石にもうちよつと待つて欲しいかなあ……」

「イオリさんが、サンプルとかいって30種類くらい持ってくるからだよ」

「てへ☆」

だつて探せばそれくらいあると思わない？ 指輪の材料組み合わせつて。それにしてもまだ決まってるのか……どこかの鍛冶屋さんの工房？ を貸してもらつて(ツハヤ丸) 剣でも造ろうかな？

そんな事を考えていた私に、ふとリユートさんが質問してきた。

「そういえばイオリさんつて、次の目的地とかつてあるの？」

「うん！ この前リユートさんが言つてた【水神の大迷宮】！」

「人間界に、近い場所だね」

「らしいね〜」

レーナさんが私だと微妙としか表現出来ない顔をしてそう言う。

今日ギルドで聞いてきた話だけど、この大迷宮つていうのは10ヶ所あつて、獣人界から見ると一番右側にあるのが火属性の迷宮で、空間呪い、龍、生活を除いて私のメモの順番通り左回りに並んでるらしい。

かなり円形に近い形で並んでるらしいけど、ちよこちよこズレはあるみたい。そしてここからだ結構遠めの場所に水の迷宮はあつて……とここまで考えが巡つた時に、ふと私の頭に？ マークが浮かんだ。

「つて、あれ？ どうやつて行けばいいんだろう？」

どうやらいつぞやのライドファンングみたいな乗り物は無いらしいし、私とフローで運べるのもサイズの私含め3人が限界だ。ロイドがパーティーに入ったからそれはキツイ。

そう私が頭を悩ませていると、リユートさんが若干呆れた感じのため息を吐いた。

「一応、ヴィマーナが有るんだけど」

「え？ でもそれつて、確か魔力が持たないから無理だつたんじや……」

確かそんな事を、獣人界に入った頃に言つていたような記憶がある。だから一応選択肢から外してはいたんだけど。

「一応、僕だつて進歩はするよ。イオリさんみたいに突然変異する訳

じゃないけど」

「そんな、突然変異だなんて……」

「褒めてないからね。あとくねくねしない」

「はーい」

顔に空いている片手を当ててくねくねしてみたが、即座にダメ出しされてしまった。むう、そんなに似合わなかったか。

「それと、レーナと同じで僕も人間界にはあんまり近寄りたくないかな」

「やつぱりそれって、リユートさんがレーナさんを助けたっていうやつ?」

「そうだよ、イオリちゃん。リユートくんが来るのがもう少しでも遅かったらって思うと、今でも怖いんだよ……私」

自分を抱くようにしてレーナさんがそう言った。多分私じゃ想像もつかないような事があつたんだろうけど、この気まずい沈黙はなんかやだし……あ、

「そういえば私も、最近奴隷商の人に捕まつたんだった」

そう私がポツリとこぼした言葉に、二人がとても驚いた表情になる。

「イオリちゃんが?」

「自分から行つたとかじゃなくて?」

「うん。森の中でハンモックを張ってお昼寝してたんだけど、起きたら手枷足枷にボロ服と首輪付けられて鎖で繋がれてた」

いやゝあの時は焦った。目が覚めたら奴隷っぽい格好で牢屋の中に居たんだもん。何より大鎌が背中になかったし。

「それでどうなったの?」

「えっとね、ドラゴンパワーで鎖を引きちぎって牢屋をぶっ壊した後、外に出てみたら……」

「出てみたら?」

興味津々といった感じでリユートさんが聞いてくる。あれは正直言って私もびっくりしたんだけど……

「私が閉じ込められてたのは地下だったんだけど、上部の建物は全部

瓦礫になつて、数人氣絶した人が倒れて、近くの空中にこの大鎌が浮かんでたんだよ。しかも赤黒いオーラを纏つて」

そう言つて私は大鎌をポンポンと叩く。これはリユートさん達には言わないけど、その後からテキストが『聖遺物では無いので創造とかは出来ない』から『場に染み込んだ数多の負の感情や魔物などの魂を喰らつた事で聖遺物と化した』に変わつてたんだよね。創造は多分自分の渴望が分かんないから使えないけど。

「で、その後とりあえず倒れてる人を縛り上げて、瓦礫の中から証拠品を探したり、捕まつてた人達を助けて一緒にご飯を食べたり、その後近くの町にみんなで向かつたりしたんだけど……どうしたの?」

リユートさん達が引きつった笑みを浮かべていたので話を止める。あれ? 私何か変な事言つたかな?

「イオリちゃん、よくそんな怖い物背負つていられるね」

「ん? だつて造る時からこうなるかなつて思つてたし」

「それじゃあイオリさん、『聖遺物』つて言うんならその……やつぱり人を?」

リユートさんが恐る恐るといった感じで聞いてくる。いや、多分あの施設にいた人達をパクパクしたんだらうけど……

「いや、定期的に魔物を狩つてれば大丈夫みたいだよ」

「良かった……」

リユートさんが心底ホツとした表情になる。

うん、シリアスっぽい雰囲気はどうか押し流せたっぽい。

良かったっぽい。

第18話 出発!

ロイドに義手をくっ付けてからはや3日、そろそろ出発しようと思っていたところにギルドの人からOKが出たので私はギルドに来ていた。そのついでに新しい職業をゲットしてきたのだが：

「まさか被っちゃうとはね…」

リユートさん達の待っている門にロイドと2人で歩きながら、私はそう呟く。昨日と違って天気は気持ちのいいくらいの晴れだ。

イオリ・キリノ

種族 人族 銀狼族

性別 幼女

年齢 7

職業 ヘーパイストス・ドヴェルグ・アルケミスト・スクナヒコナ・

ウルカヌス

LV 104

HP 1698 / 1698 +1000

MP 4276 / 4276 +1000

STR 1023

DEF 991

AGL 1008

DEX 14350

MIND 981

INT 5462

LUK 67

《戦技》アルジェントスラッシュ

《スキル》

職業

ヘーパイストス LV 129 ドヴェルグ LV 113

アルケミスト L V 10 スクナヒコナ L V 98

ウルカヌス L V 1

E X

家事万能 無詠唱 情報の魔眼

変身 M P消費半減 武術者の卵

生産者の魂

通常

無限収納 L V 2 乙女の胃袋 L V 1

演算補助 L V 2 【高速思考・思考加速・並列思考】

H P高速回復 L V 1 M P高速回復 L V 1

魔力制御 L V 18

死神 L V 13 身体能力超化 L V 15 龍鱗 L V 1

3

龍力 L V 13 五感超化 L V 12 韋駄天 L V 5

痛覚大耐性 L V 13 物理耐性 L V 10

状態異常大耐性 L V 3 魔法耐性 L V 12

精神攻撃大耐性 L V 4

劫火魔導 L V 1 豊穰魔導 L V 1 暴風魔法 L V 1

2

蒼海魔法 L V 20 神聖魔法 L V 11 漆黑魔法 L V

10

植物魔法 L V 13 氷結魔法 L V 14 雷光魔法 L V

12

次元魔法 L V 7 生活魔法 L V |

《称号》

ユニークキラー・Sランクキラー・生産者の魂

鍛冶神見習い・魔導使い・竜使い

|| || ||

名前 イオリ・キリノ

性別 女

年齢 7

生まれ 不明

ランク S

ゴールド 238,650

|||||

だって確か、ヘーパイストスとウルカヌスって同じだったような気がするし：何？この鍛冶神見習いつて。確かに毎日10個は何かを作るのは日課だけどさ：錬金術師もアルケミストになってるし、原因は義手かな？

まあそれはいいとして《別腹》のスキルが《乙女の胃袋》に変わったけど。私が男だったら：身体が男だったらどんなスキル名になってたんだろう？ フードファイターとか？

「どうかしたのか？」

「え？ううん、ただ職業の数がついに折り返しかゝって思ってたね」

それと戦闘系の職業が一切ないけど、もう半分も職業が埋まったのは感慨深い感じがする。まあ、柄に合う戦う職業なんて魔法使いくらいしかないと思うから、取る気はないけどね。バーサーカーとか言ったら食べちやうぞ？がおー

「はあ!? っていうことは、レベル100以上なのか？」

「うん、そうだよー？ 戦闘職は無いけど」

「嘘だろ!？」

「本当本当」

ロイドが凄く驚いたように言ってくるけど、私が持ってるのはアホみたいな量のスキルだけだもん、嘘は言っていない。

「でも、これから模擬戦する身としては、あんまり強くなさそうで安心できるでしょ？ ステータスだけなら私とそんなに変わらないんだし」

「ダンジョンで使ってた魔法の威力を見る分、安心なんてできないんだが…」

「あんな大魔法なんて使わないよ、模擬戦なんだし。それに、その義手ならある程度は無効化出来るもんね」

「まだ使いこなせてはないけどな…」

ちなみに模擬戦云々は普通にOKしてくれた。なんでも私みたいな強い人と模擬戦出来る機会なんてそうそう無いから、強くなるには絶好の機会なんだってさ。ずっと嫌だって言ってたリユートさんとは大違いだね。

まあそれは嬉しかったって事で置いておくとして。

「ねえロイド、昨日から思ってたんだけどさ、分かりづらいから名前かあだ名で呼んでほしいな。あんまり酷いのじゃなければなんでもいいよ?」

初めてロイドと会った時も『お前』だったし、リユートさん達から大体名前呼びされてるからなんかむずむずするんだよね。でも某金色な文字使いの人みたいなあだ名は嫌だね、銀ロリとか言われたら滅尽滅相。勝てる気しないけど。

「え、いや、それは」

「だーかーらー、別にある程度ならなんでもいいからさー」

いくら私の遅い足でも、そろそろリユートさん達と待ち合わせている城門についてしまう。ハッ、今誰かが足引きBBAって言った気がする。それはリユートさんの妹さんの方でしようが、私はどっちかっていうとシユライバー。

「それじゃあ、呼び捨てでも…いいか? イオリ」

「うん、別にいいよ。それじゃあこれからよろしくね、ロイド」

とりあえず私は笑ってそう言う。呼び捨てとは珍しい、私がしてる以上なんとも言えないけど。

「あー後、私達のパーティーにいるなら多分すごい沢山トラブルに巻き込まれるし、色々驚くことがあると思うんだ。けど、それにいちいち驚いてたら身が保たないから、どうにか流していけるように頑張ってるね?」

「りよ、了解」

ちなみにこの後、城門でリユートさんが出したヴィマーナを見て凄

く驚いた後、キラキラした目で見ていた。
だから一応注意しておいたのに……カッコイイからわかるけど。

第19話 カオスなパーティーの日常

街から移動し始めて2日目の朝、私は何時ものように早起きしてフロアに周りを警戒させながら鍛冶をしていた。熱した金属を叩く音、偶にやる焼き入れの音とかがかなり前からの私の朝の日常なのだが、今日はそれを聞いている人がもう1人いた。

風の魔法で音は漏らさないようにしていたのに、いつの間にか起きていたロイドが気が付いた時には鍛冶をやってる私をじつと見てた。まあ、気が付いたのは全部が終わって片付けを始めた頃だったんだけど。

「よし、それじゃあやろつか」

そう言っただけはロイドと向かい合う。鍛冶の後片付けをしてる時にバツチリ目が合ったので、適当に木剣を作って朝の運動代わりに模擬戦やろう！ って事にした。

ロイドの方は両手に同じ長さの木剣を、私は右手に持っているのはロイドと同じ物だけど、左手には鎌剣をそのまま木製にしたやつを持っている。そういえば二刀流の人と戦うのって初めてかも。あ、お互いに防具はちゃんと付けているのは、朝っぱらから大怪我をしたくないからだよ。

「朝ご飯も作らなきゃだからそんなに時間はかけられないけど、結構楽しみにしてたんだよね。先手は譲るよロイド」

「それじゃあ行かせてもらうぞ、イオリ！」

そう言っただけでロイドが一気に私の間合いまで踏み込んでくる。そして振り下ろされる剣は私の予想よりも結構速くて……それでもまだ見えるし身体も動く。

「はあっ!!」

「ほっ、よっ、とっ」

ガコツガコツと硬い木どうしがぶつかり合う音を響かせながら、左手の剣を中心に次々と繰り出される剣を防いでいく。えっと、義手の調子は問題なさそうだね、流石私製。二刀流自体は、誰かに習ったのか何の真似もしていない私よりよっぽど上手いし……

「これなら試せるかなつと！」

くるつと回転しながら、振られたロイドの剣を回避してそのままの勢いで私は両手の剣を叩きつける。咄嗟に構えた剣で防御されたけれど、軽くロイドは吹き飛び私との距離が開く。魔法もスキルも魔眼と変身以外オフなのにこうなるって、レベルのシステムって色々怖いよね。

「私よりもロイドの方が双剣の使い方は上手いみたいだし、頑張つてね！」

「俺だつてまだまだだよ。頑張つてねつて、何をだ？」

「大怪我しないように！」

そう言いながら思い返すのは懐かしい小説のキャラクター。ヴァンパイアマスターで銀髪ツインテ、しかも魔法もかなり得意という凄いキャラ。

「まだまだ練習中だけど…我が双剣の舞い、受けてみよ！」

私は気持ちのいい笑顔を浮かべながら、ロイドに向かって突進していった。心なしか、持つてる剣から変なオーラが出てるように見えるけど気にしない気にしない！

◇

「つて感じで朝はすつごく楽しかったんだー！」

時は変わつてお昼、空を飛んでいるヴィマーナの上でリュートさんに弾代わりの武器を渡しながら私はそう言った。空の上で食べるお昼も中々良い物だったよ。

「なるほど、それで朝あんなにロイド君が疲れきつてたんだね。でもなんでイオリさんは大鎌を使わなかったの？ そっちの方が得意でしょっ。」

「木で作るのがめんどくさかったんだもん。後、よっぽどの事情が無いと対人戦じゃ大鎌は使いたくないんだよ」

私が双剣で戦いたいっていうのもあるけど、大鎌なんて全力で使うと即死レベルの攻撃がバンバン飛んでいく事になる。だから大鎌を使うのは魔物と本当の極悪人程度で十分だと私は思っているんだよね。

「へー、そうなんだ。ああ、それと、武器類ありがとうね。使い続けたせいか結構ガタがきているのが多くて」

「うくん、やつぱりがりよーてんせーを欠いたようなやつばかりじゃそうなつちやうかあ」

「まあ、それでも普通の鍛冶屋さんだと最高級品レベルなんだけどね…」

リユートさんが苦笑いでそう答える。へえ、普通の鍛冶屋さんだと＋10代で最高級品レベルなんだ…もし将来私がお店とかやるとしたら、物凄いレベルを抑えないとダメなのか…って、店舗を構えるとかそういうのって年齢的にかなり先の事じゃん。

「んう…まあいいか、警戒ついでにまたフローと追いかけてこしてくるよ。何か有ったら呼んでね」

「はいはい。一応言っておくけど、あんまりヴィマーナから離れ過ぎないですよ？」

「りよーかい、^{フライ}翔！」

私の履いている靴の脇から銀色の翼が生えて、空に浮かぶ。空に浮かんでる最中だからいい遊びが無いと思っていたけど、エアキックターンとか色々やりながらの追いかけては朝の模擬戦とも負けず劣らず楽しい。良い運動にもなるし、良いことづくめだと思うんだ。

「おりやー、待てフロー!!」

「きゆううっ!!」

「最近凄く子供っぽくなってきてるけど、その分強くなってるとよなあ…イオリさんって」

リユートさんの半分以上呆れたような声を聞きながら、私は空を飛び始めるのだった。ヴィマーナの周りを飛び回ってる私、未だに疲れ切った感じで大の字で転がっているロイド、ヴィマーナを操縦しているリユートさんにその近くで微睡んでいるレーナさん。

このパーティーは、今日もカオスです。

閑話―15 人間界の今②

俺たちが「リフン」の街に避難してから数ヶ月が経った。

避難してきた当初は、街に活気のかの字も見られない程暗い雰囲気
が漂っておりどうにも過ごし辛い状態だった。けれどそれもダン
ジョンとしての能力で5つの街が行き来できるようになった事や、あ
の状態異常も悪化する前ならば解けるといふ事が分かったことに
よって段々と持ち直していき、今となっては小さな子供が外を走り回
るくらいには明るくなってきている。

俺たちとしては、元凶である海堂を倒す事以外の解除方法は分から
ず、その海堂を倒しに行く事も容易じゃない上に、街のキャパシティ
に余裕が無くなってきた事もあつて胃が痛い毎日だったのだがそれ
が癒しにもなっていた。

が、やはり平和な日々が長く続く事はなく、大きな亀裂が入る事
になる。

◇

「以上が今回皆さんに集まってもらった理由と、これから起こるであ
ろう事だ」

アルデイトさんが言い終わると、かつても来た記憶のある会議室
はしんと静まり返った。

無理も無いと思う。他の街から来た3人の代表者とその護衛の人、
ダンジョン関係の事なので先生と、洗脳される危険が限りなく低い勇
者の代表として俺と鈴華さん、纏め役としてアルデイトさんが出席
していたこの会議で発表されたのは、街が1つ陥落したという事と当
然の如くそこから人が流れてくるという情報だったのだから。

「何か質問のあるやつはいるか？」

「何が原因で突破されたんだ？その小さい先生のスキルとここにい
る奴等の協力で、防衛能力に関しては何も申し分なかったはずだ。ほぼ同
じ防衛能力の街が落とされた以上、何か対策をしない限り他の街も同
じように落とされるだろう」

そう質問をしたのはシュワちゃん似の…たしかメイさんという人

だった。Sランクの冒険者で、今回は確か3つ目に拠点に出来た街の代表者の護衛として来ていたはずだ。20mおきに地雷を……いや、なんでもない。

確か元々拠点にしていたらしいリフンの隣町はもう……なんて事を思い出しているうちに、先生と話を聞いてきていた鈴華さんが話し始めた。

「無事だった人に聞いたところ、酷い物量押しだったそうです」

「私の設置していた罠に多数の一般人の人達を突撃させて罠を無効化し、その後魔物や騎士の人達が攻め込んできたとの話でした」

そう苦虫を噛み潰したような顔でいう先生を見て、今聞いた事に対する驚愕よりも先に海堂に対する怒りが湧いてきた。前々から頭がおかしくなつてるとは思っていたけど、今聞いたような事を本当に実行できるレベルなの？

「ふむ、そうかそれでは……こんな事態になった原因は、あなたが設置した罠が不十分だったせいではないですかねえ？」

メイさんが質問を締めようとした時、今まで黙っていた2つ目の街の代表者の人がそう嫌味つたらしく言ってきた。因みに男だ。

正直俺はこの人が苦手だ。協力を頼んだ時にも真っ先にお金を要求してきたし、自分では何もしくせに意見だけはしてくる。今回護衛として連れてきている人も確かモーブとかいう人で、一部では変態って言われている人だった筈だ。因みにアルディートさんから、金さえ渡しておけば信用できるが信頼はできないって言われていた。

「これでももう、かなり限界に近いんです。あなたはいつも口で言うばかりで……この状態を維持するのに、私達がどれだけ苦労しているかわかってるんですか!？」

「分かりたくもないですね、そんな明らかに人の使える範疇を超えた……むしろ魔物の親玉のようなスキルの使い心地なんてものは。私のような凡人には想像すら出来ませんよ」

手を横に広げてそういうあいつに対して、隣に座っている鈴華さんがボソツとネギト口にしてやろうかしら？つて言っていたけど今回

ばかりは俺も同意見だ。今にはカチンときた。

「アンタが貶した先生のスキルのお陰で今、この場所もあんたの街も無事でいられてるって事を分かった上でそれは言ってるんですか？」
「怖いですねえ勇者様？ あなたの様な強い力を持つている人に睨まれたりしたら、それだけで私の様な人は震え上がってしまいますよ。それとも、そのような人物はその剣で黙らせるのですかあ？」
「っっ!!」

そんなこちらを煽ってくる言葉に、つい剣を抜きかけるが相手の思う壺だと思っただうにか押しとどめる。戦闘や道具の生産などに尽力している事で印象は良くなってきているが、海堂も元は勇者だったせいか一部は俺たち全体を敵視していたりする。こいつはその中でも特にそういう傾向が強かったりする。

「別にそんな事はしませんよ。よっぽどの事をしでかさないう限りですけどね」

「へえ、それなら私が何を言おうと問題はないという事ですね。何せ話しているだけなのですから」

「っ、あんたは!」

「あーもう、そこまでだお前ら」

一触即発な雰囲気は、そんなアルディートさんの声で一気に霧散した。

「お互い、そんなに相手を挑発すんなよめんどくさい。そんなにやり合いたいなら他の場所でやってろ」

「…すみません、少し熱くなりすぎました」

「手を出そうとしてきたのは、向こうの筈なのですがねえ？」

ほんと、真っ二つにして…いや、これじゃ海堂とあんまり変わらない考えだ。落ち着かないと…

「大丈夫？ 委員長」

「うん、もう落ち着いた。あいつは毎回毎回…」

「落ち着けてないじゃん、ステイクルステイクル」

「2人共、そう言うのも後回しにしてくれ」

……

第20話 ダンジョンからの呼び声

「ほえ〜…」

「イオリちゃん、とりあえず口は閉めようね」

「ふえ？あ、うん」

あれから何日間かロイドと遊んだり色々な物を作ったりしながら移動して到達した街「エスイルト」、その重厚な金属製の門をくぐった先で見た光景に、私は思わずポカンと固まってしまった。

「ほらロイド君、君もだよ。そろそろ動かないと邪魔になるから」

「あ、はい。すみません」

そんな感じでロイドが固まってしまったのも不思議じゃないと思う。なんてつたつて「水神の大迷宮」のあるこの街は、歩いている人も多いし、ちゃんと石畳が敷かれていて街灯らしき物まであるからね。多分地方都市から東京に出てきたのと同じ感じだと思う。

「とりあえず、イオリさんは迷子にならないようにね」

「な、なんで私だけなのさ！私もうレーナさんと手を繋いでるし、ロイドだって固まってたじゃん」

「それじゃあ、そのさつきからバタバタしてる尻尾はどう説明するの？」

手をバタバタさせながらリユートさんに抗議していたが、そんな事を言われて慌てて尻尾を手で押さえる。恥ずかしさで赤くなった顔でリユートさんをキツと睨む。

「うう〜…」

「や、宿さえ取ったら自由でいいから、お願いだからこんな所で泣かないでよイオリさん」

「え！ホントに？わあい！」

自由行動って事はダンジョンに行ったり色々していいって事だよな？まだ昼前だし色々やっても十分な時間はあるよね、お弁当を作つて……いや、その場で料理できるから夕方までに帰ればいいんだし！「イオリさん、随分チョロくなっちゃったなあ…変な人に付いていたりしなければいいけど…」

「イオリが出かける時、俺が付いていきましようか？」
「うん、よろしく頼むよロイド君。イオリさんって色々出来るけど結構ドジなところがあるから」

ここ数日で仲良くなったっぽいリユートさんとロイドが後ろで何かを話していたけど、これからが楽しみでワクワクしていた私にはその内容は一切聞こえなかった。

◇

「それじゃあいつてきまーす、リユートさんレーナさん！」

「い、いつてきます」

約束通り自由時間になったので、若干遠慮気味のロイドの手を引いて私は宿から街に繰り出す。レーナさんから頼まれたから鍵を閉めていくことを忘れない。

そしてふと見てみると、やっぱりロイドの顔が若干赤くなってる。もしかして本当にロイドって……

「それで、どこに行く予定なんだ？」

吃ったりしないで私と普通に話せてるし、やっぱり勘違いか。えっと、食べ物で補充するのは確定として、調味料は……うん、大丈夫か。だったら……

「とりあえずダンジョンかな！ 帰りに色々買いたい物があるから付き合って欲しいな」

「やっぱりそうなるんだな。それならリユートさんが言っていたような事も起きないだろうし……」

「ふえ？ どうかしたの？」

「いや、なんでもない。ようやくこの腕にも慣れてきたし、俺も行きたかったんだ。早く行こうぜ！」

「あ、ちよ」

どこか誤魔化すようにそう言って、私の手を引いてロイドは駆け出した。え、ちよ、これなんてラブコメ的な行動？

私の左手を握ってるロイドの右手はあつたかくて……ん、あつたかくて？ 義手だよねその右手。ん（…あ、そっか、ハガレンでエド

が凍傷になりかけてたところがあつた気がするからヒーター付けてたんだつた。あと浪漫式冷却装置とクーラーも。装甲がズレて蒸気がぶしゅーってなるのカッコいいよね。スチパンスチパン。

そんな事を考えている内にロイドの走る速度が落ちてきて普通の歩く速度になり、神殿のような形の建造物が見えてきた。その第一印象がパルテノン神殿の建物を見て、ほへーと感心していると左手に嵌めている腕輪からズキンと痛みが走る。

「いっつう……ロイド、ちよつと……ストップ」

「あ、ごめん。大丈夫か？」

「貧血かも……ちよつと待って」

ロイドにそう言う間に、頭痛も出てきて魔眼の方の視界が掠れ始める。これって本当にヤバイやつなんじゃ……そう考えていると、あの砂嵐の音が頭に響き始める。そして魔眼の側に映る世界が段々違う物に変化していく。

どこか広い空間、足元には透き通った水が溜まっていて、壁からは滝のように水が出てきているが、それらが循環してるらしいという事が何故か分かった。何がどうなってるのか分からないその光景で、次に見えてきたのは……

「角？ 虹色の髪、十字架？ 鎖？」

そしてブツンと千切れるような音がしたと思ったら、それらの症状は一気に収まった。ほんと、なんなんだろうこれ？まだ頭がガンガンいってるし、左眼は痛いし……なんか嫌な予感がする。ふえ、涙出てきた。

「ほ、本当に大丈夫か？イオリ。俺が手を強く引きすぎたりしたか？」

「大丈夫、これは、それとは全然関係ないから」

涙声で私はそう言う。これじゃあ全然説得力がないなあ……でも、今あつた事を言っても信じてくれるのはリユートさんくらいしかいないだろうし……

「えっと、それじゃあその……女の人にはあるって話の……その……ダンジョン行くの止めておくか？」

そんな事を思っていると、ロイドがボソボソとそんな事を言ってきた

た。女の人特有の……っ!!

「まだ一回も！きてすら無いわあっ!!」

ロイドが言いたかった事の意味が分かった瞬間、私は思いつきりロイドの頬を引っ叩いていた。

頭がグリンなんて事にはなっていないよ？

第21話 CRS

「変態、デリカシーっていろいろのを考えてよ」

「デリカシーって、なんだ？」

「…繊細さとか思いやり」

右の頬に真っ赤な紅葉マークのついたロイドと、私は怒ってますよーという雰囲気を出して歩いていく。まだ来てないのは神様のせいなのかそれとも年齢的にまだなのかは分からないけど、やっぱりそういうのを聞くのってよくないと思うんだ!!

「でもまあ、そろそろダンジョン着くからいいけどさあ…これからは気を付けてよね？」

「あ、ああ」

そんなことを話しながら神殿風の建物の前に出ると、そこには予想よりも大勢の人が集まっていた。こ、これは1人で来てたら流されたたかもしれない。

「とりあえず、並ぼつか」

「そうするしかなさそうだな」

と、そんな感じで並んでいたのだが…

「私としては、子供二人でダンジョンに入るのは容認出来ません」

思いつきりダンジョンに入るのを止められていた。だから待機するための場所で絶賛話し合い中である。能力的には良いらしいけど、私としては許せないってこの出張ギルドの受付嬢さんは言ってるんだよね。

「でも私達、SとBランクの冒険者ですよ？ 身長はちっちゃいですけど」

「Sランクって言っても、貴女は鍛冶師でしょう？」

「魔法ならSランクオーバーらしいですよ？ 私」

普通のSランク冒険者の人は、隕石を降らせたり足元を噴火させた

りは出来ないらしい。そういうのを出来るのは、SSでも上位の実力の人（魔法特化）とかSSSランクとかの人外だけなんだって。

「それでも、ダンジョンの中では危険です！ 前衛がその子しかないですし、貴女自身は……」

「一番得意なのは大鎌ですけど、二刀流、槌、片手剣……その他の武器でも、BとAランク相当の動きは出来ますよ？ 使うための武器なら沢山持ってますし」

武芸者の卵っていうEXスキル、武器を作りすぎてゲットした大量のスキルが集まって出来たアレのお陰で器用貧乏レベルでならほぼ全部の武器が使える。元々使ってた二刀流と戦鎚……あとちゃっかかり銃は別だし、大鎌に至っては死神っていう最上級スキルになってるけどね。

「その君も止めなくていいの？ この子が大怪我しちゃうかもしれないんだよ!」

「いや、イオリは俺よりよっぽど強いし実戦経験もありますし。イオリが大怪我するような状況になったら、俺は多分死んでますよ?」

余りにも普通にロイドがそう言ったせいか、一瞬受付嬢の人が固まった。というかまあ、致命傷以外なら数秒で治せるんだよね私。

「うう、ああもう!! それなら5階層、5階層までです！ それ以上は今度保護者の方と一緒に来てください!」

「やったー、行くー! ロイド」

そうやってエイナさん（仮）を突破してダンジョンに入ったまでは良かったのだが、1階層に入って数分で1度私の意識はプツンと途切れた。

◇

その異常が起こったのは、俺とイオリがダンジョンに入ってからほんの数分後の、飛び出してきた大きめのカエル型の魔物を倒した時の事だった。

「そういえばカエルって確か、鶏肉のささみみたいな感じで食べられるらしいよねー。毒とかには気をつけな……きや」

イオリがカエルを仕舞ってる間、いつも通り隣に立って周囲の警戒

をしていたのだが、イオリの動きがピタリと止まった。

「大丈夫か？ ダメそうなら、今からでも帰るのは遅くないと思うぞ？」

「……」

そう話しかけても、先ほどとは違って返事すらない。なんだか心配になって前に回り込んで顔を覗いてみると、イオリは虚ろな表情でどこか分からない所に目を向けていた。

「え、本当に大丈夫か!? おーい！」

顔の前で手を振ってたけれど、これでも一切の反応を示さない。これは本格的に大変な事なんじゃ……そう疑い始めた頃、ポツリとイオリが呟いた。

「呼ばれてる……行かないや」

「どこの誰にだ!？」

やはり俺のその問いかけには反応せず、手に持った銃というらしい金属の塊を大鎌へと変えてイオリは呟いた。

「Yetzira^形h——」

その声は小さかったが妙に頭に響き、同時に何かとてつもなく嫌な予感がした。そして、薄っすらと血の匂いが漂い始めてきているこの感じは、前に俺がイオリを突き飛ばした時と同じだ。

「Falce^生とvitam^死の^大morte^鎌m」

その言葉が呟かれた瞬間、イオリと構える大鎌がひび割れ、決して広くはないこの通路に濃すぎる血の匂いが爆発的に広がった。そして飛び出していこうとするイオリの手をしっかりと握る。よく分からないけどそうしないといけない気がしたんだ。

「ひるがえりて来たれ、幾重にもその身を刻め……ヘイスト」

相変わらず抑揚の無いイオリの声が聞こえたと思った瞬間、もの凄い勢いで引つ張られその衝撃で俺の意識は途切れた。

◇

「あれ?」

私が意識を取り戻したのは、よく分からない通路の真ん中だった。足元には水が少し溜まり苔が生えているから、多分ダンジョンの中っ

てことで……うん、デイメンションによるとまだ1階層みたい。

因みに簡単にこのダンジョンの説明をすると、ドラクエ9の宝の地図の水系。

「とりあえずロイド、起きてー」

私が大鎌を持っていた反対の左手に、結構ボロボロになりながらもしがみついていたロイドを回復しながらペチペチとほっぺを叩く。とりあえずロイドが起きてくれれば、この何故か形成を使っている状況とか目の前のデイメンションでも分からない空間の謎もある程度分かるかもしれない。

「うつ……」

そうやって二、三回ペチペチしているとロイドが目を覚ました。起きなかつたら傷口に塩でもすり込もうと思ったのが効いたのかな？

「元……戻ったのか」

「ふえ？ どういう事？」

「いきなり『呼ばれてる、行かなきや』って言った後、虚ろな表情で走り出したんだ。覚えてないのか？」

「うん」

ふむふむ、私は何かに呼ばれてここまで来たと。絶対腕輪関連だよなあ……という事はこの謎空間は少なくとも確認はしないと行けないだろうし……

「はあ……起きてばっかりで悪いけどロイド、この先戦闘になるかもしれないから準備して。これ終わったら帰るから」

「わ、分かった」

ロイドが剣を抜き終わるのを待って、形成したままの状態で大鎌を使い壁を吹き飛ばす。覗いてみると、そこは今まで居た通路となんら変わらない空間だった。強いて言えば、水が多少深いくらいだろうか？

「《危機感知》が反応してる……」

そう、ロイドが言う通り私の魔眼も危険をずっと訴えてるのだ。一見何もないただの隠し部屋のように思えるけども。

「ん？ なんか変な色のやつが見えたような……」

そこまで考えたとき魔眼がキチンとした情報を映し出した。

|| || 《刺突・水、閤系統魔法／威力・中／範囲・大／分裂槍／脅

威度 84》 || ||

シールド
フアラシックス
「盾・密集防御!!」

全力で使った私の防御魔法の障壁に、玉虫色の何かがガンガンと当たって弾けていく。え、いや、嘘でしょ？ こんな吐き気が出てくる頭の痛さなんてまさか……ええい、とりあえず解析!!

《シヨゴス》

頭痛が強くなり、いつもと違って簡易的に表示されたその名前を見て私の疑問は確信に変わった。

「アイエエエ!? クトウルフ? クトウルフナンデ!?」

そんな事を叫びながらロイドの手を引いて部屋から出ようする間にも、久しぶりに聞くスキルの取得音が鳴り響く。こんな事を言えるって案外余裕があるのかもしれない。

ー スキル 精神攻撃大耐性 がレベル5になりましたー

ー スキル 精神攻撃大耐性 がレベル6になりましたー

ー スキル 精神汚染大耐性 を取得しましたー

ー スキル 精神汚染大耐性 がレベル4になりましたー

……………

「《金属精製・アダマンタイト》! からの《錬金》《錬金》《錬金》!!」

元の通路に転がり出て、自分で開けた大穴を完全に塞いだところで今まで手を引いてはいたものの完全に意識の外にいたロイドの事を思い出す。

「ロイド、大丈夫? 変な物とか見えてたり変な音とか聞こえてたりしない!」

「大丈夫、だから、そんな、ガクガク、揺さぶらないで」

「へ、あ、そうなの? よかった…本当に良かった……」

そう呟きながら私はペタンと座り込んだ。色々びしよびしよになるけど別にいい、だってその方が誤魔化せるし。気が抜けたら…ね。

因みに、精神攻撃大耐性はLV 9に精神汚染大耐性はLV 7に上昇していた。

第22話 あっ（察し）

「本当に変な物が見えたり聞こえたり、自分が変わったと思うところとかないんだよね？」

「さつきも大丈夫って言ったろ？ 心配のし過ぎなんじゃないか？」

ダンジョンから脱出した後、ちゃんと普通の格好に着替えた私達は街を宿に向かって歩いていった。多分リユートさんならクトウルフのヤバさが分かるだろうなあって事と、保護者同伴じゃないと駄目って言われたからだ。

「甘いよロイド。だってさつき攻撃してきたアレ、詳しくは覚えてないけど見ただけで発狂するっていうレベルの化け物だよ？ 一応これから対策するつもりだけど、その前におかしくなったら意味ないもん」

「は？ そんなに危険なヤツだったのか？ あの気持ち悪い色のスライムは」

「そうだよ、すつごい危なかったんだよ？ 私もロイドも」

いや、私はもしかしたらあの異常な耐性ゲットの速度を見るに耐えられたかも知れないけどね。今作ってある強化パーツじゃ渡しても意味ないだろうし進化させないと。ワイゼルガードとか言っちゃいけない。

「それじゃあ、あの2人も危険なんじゃないか？」

「いや、大丈夫だよ。この世界の法則っていうか、ステータスとかの範疇なら」

「世界？」

「ま、分かんなくても大丈夫だよ」

なんて事を話している間に宿に着いたけど、見上げる部屋の雰囲気は……やっぱリユートさんは勝てなかったか。

「あく……ロイド、やっぱり買い物に行つてこないと駄目みたいだから一緒に来てくれる？」

「え？ まあいいけど」

えつと……ご飯とお塩はあるから、黒ごまと小豆は買つてくるとし

て。鯛は夏頃に水龍と一緒に釣れた奴をまだ無限収納の中で保管してるからおかずはいいとして、お吸い物ってどうやって作るんだっのかな？

そんな事を考えながら、私はロイドと一緒に一旦宿から離れていくのであった。

◇

「たっだいまー！」

「ただいま戻りました」

「2人とも、お帰りなさい」

「ああ…おかえり」

元気よく宿の部屋に帰ると、妙に覇気のないゲツソリとしたリユートさんと、対照的にとてもツヤツヤとして元気なレーナさんが迎えてくれた。

あ、やっぱりなのね。その割にはリユートさん以外一切痕跡が残ってないってレーナさん凄くね？

「ちよつと話したい事と、この宿って確か朝と夜は大丈夫だけどお昼ご飯は出ないなって思ってた帰ってきたんだけど…」

「リユートさん、妙に疲れてますけど何があつたんですか？」

「何も、聞かないで」

リユートさんがそう言うって座っていたベッドに倒れこむ。とりあえずレーナさんにはサムズアップとウインクをしておく。

「とりあえずお昼食べよっか。イオリちゃん達も帰ってきたことだし」

レーナさんがそう言いながら、サムズアップとウインクを返してくれた。よし、そうなら私もさっき作ってきた料理を出しちゃうぞー！

「そうだね！えつと今日のお昼は、とりあえずお赤飯と鯛を使ったサラダと、お吸い物とヒュドラのハンバーグかな！」

なんでそこにヒュドラがあるのかって？ だってヒュドラって、一応蛇じゃん？ つまりはリユートさん用だ。リユートさんが共犯者はキサマかつ！ って感じて睨んできてるけど、覇気が微塵も感じら

れないから怖くない。

ふふふ…だから部屋割りがりユートさん&レーナさん、私&ロイドなのだよ。無論私達の方は2人部屋、私に夜這いしてきた場合は感電したあと氷像になります。

・

・

・

「と、まあリユートさんも元気になったみたいだし、話をしてもいいかな？」

「全部知っててその言い草だとしたら怒るよ？」

「私は場を整えただけだよねーレーナさん？」

「そうだよリユートくん。イオリちゃんは私が頼んだ事をしてくれただけだよねー？」

ねーとレーナさんと一緒に笑う。そうだもん、私はサポートしただけで決してレーナさんがナニをしてたなんて事知らないもーん（すとぼけ）

「ロイド君知ってる？ こういうのに僕みたいなタイプの人は勝てないんだよ？」

「あ、はい。うちの父さんもそうでしたから」

「あはは……」

なんか勝手にリユートさんがダメージを受けていたけど、まあいいよね。うん。

「とりあえず本題に入るけど、ダンジョンに行ったら次から保護者と一緒に来いって言われちゃった」

「酷いですよね？ 一応俺達だけでも十分に戦えるのに」

「そりゃあ二人とも、実力と見た目が全然違うしね。特にイオリさんは」

「えへへ〜」

私はニヤつきながら頭をかく。そんな事言われたら照れるじゃんかよー。

「でも、私達の中で保護者の役割が出来る人っているかな？」

そんな何気ないレーナさんの言葉に場の空気が凍る。私とロイドの保護者って言えばそうなのはリユートさんとレーナさんだけど、レーナさんは身長的にそうは見えないし、一番可能性が高いリユートさんも日本人特有の童顔って言うんだったかな？ それだから今まで通りに行くかは分からない。

高校生くらいの男子がロリとシヨタと中学生を引き連れてるようなパーティー…事案ですね、お巡りさん憲兵さんこっちはです。と、まあ冗談は置いておいて、もしかして詰んだ？

「ま、まあ冒険者としてはSランクが2人とAとBランクになるんだし、十分納得してくれるんじゃない?」

「そ、そうだよね! うんうん」

そのリユートさんと言葉で、無間大紅蓮地獄な感じが終わった。大丈夫、多分問題なく入れる筈だ。誰だよ流出したのってレーナさんか。

「あー、えと、うん。諸々の感謝の気持ちも込めて……はいリユートさん、注文の指輪」

「え、唐突だね。イオリさんにしては珍しく遅かったけど、何か変な機能は付けてたりしないよね?」

「うん、『変な』機能は付けてないよ」

ただ裏側に彫ってある文字が顕微鏡レベルの大きさの魔法陣になってて、常時清潔さを保ったり失くしても戻ってきたり致命的な破損は完全に治ったりするくらい。あと個人的に愛の力は強いって思ってるから、お互いに付けてる限り状態異常を完全に無効化したりも出来る。対NTR用だったのにまさかSAN値チエツクの成功確率を上げることになるなんて思ってたけどね。

「とりあえず次に行くのは何日か後の予定だから、ごゆつくり。あ、ロイドは一緒に来てね。義手関連でやっちゃいたい事があるから」

「ああ。邪魔するのも悪いしな」

そう言って私達はリユートさん達の部屋から出ていった。ケーキでも作ろっかな? 三段くらいの。

そういえば、クトウルフなやつと遭遇したって言い忘れたけど…ま

あ大丈夫だよね！

第23話 ショゴスは犠牲になつたんだ

「それで？ここがそのクトウルフが居たっていう場所なの？」

「うん、そうだよ！このゴチャゴチャに金属を圧縮して壁に蓋した後には間違いないかな。ね、ロイド」

「ああ、確かにここであつてるぞ」

一応リユートさん達の体調を考えて2日後、私達はあのショゴスⅡサンと遭遇した場所の前に来ていた。それにしても、壊されてたりしなくて本当に良かった。

「でもイオリちゃん、なんでわざわざこの先に行こうとするの？凄く危ないんですよ？」

「そうだよイオリさん、ニヤル様とか出てきたらどうするさ…全員発狂ルートなんて嫌だよ？」

そう言う2人の薬指にはキラリと光る指輪がある。因みにリユートさん達が選んだのは、特に華美な装飾は無いプラチナのリングに小さめのダイヤモンドが付いてるやつだ。

「でも、私が正気を失った状態でここまで来たみたいだし、絶対なんかあるってこと」

一時的狂気みたいな感じで私がここに突撃したっていう話だし、その上腕輪が相変わらずビリビリしてるから絶対なにかあると思うんだよね。いや、少なくとも神話生物はいるんだけどさ。

「イオリちゃんが行きたいなら良いけど……そのショゴスって魔物、居なくなつてたりしないかな？」

「もしそうだったらいいなあ……イオリさん、ちよつと聞き耳立ててみて？」

「なんで？音なんて聞こえないと思うんだけど……」

私は首を傾げながらそう言う。聞き耳なんて立てても、壁は分厚いし金属製だよ？音なんて通らないと思うんだよね。

「クトウルフだからだね」

そんな私の疑問に、リユートさんはその一言で答える。クトウルフだからって私、TRPG出来るほど濃い友達は天上院くらいしか居な

かったから知識は微妙なんだよなあ……

「ええーまあ、やってみるけどさあ。リユートさん達は？」

「SAN値が…じゃなくて幅的に無理だろうね。とりあえずレーナもやめておいた方がいいと思う」

「リユートくんがそう言うなら辞めておくけど…」

「えと、じゃあロイドも何か聞こえるかやってみようよ」

私だけ正気度が削れ……コホン、私だけじゃ確かな情報っては言えないからロイドにも頼んでみる。

「一応、俺はそのシヨゴスってやつと遭遇してるしな」

「次が大丈夫って保証は無いけどね…」

リユートさんがそんな不吉なことを言ってるけど、とりあえず聞き耳を立ててみる。目を閉じて集中してみるけど、耳が冷たいだけでやつぱり何も聞こえない。

「やつぱり何も聞こえない……って、どうかしたの？ロイド」

「いや、何かテとかりみたいなのが聞こえた気がして……」

目を開けてみると、難しい顔をしたロイドがそんな事を言った。……それって確かシヨゴスの鳴き声だったような気がするんですがそれは。

「やつぱり居るのかあ。イオリさん、ここに来ようとしてたって事は対策くらいあるよね？」

「もちのろーん！」

「もちのろんって今日日聞かないな」

何故ロイドがこのネタを!? 別にいいじゃん今日日聞かないような言葉だつて。ぶーぶー、死に戻りさせてや……寒気を感じたからこれ以上考えるのはやめておこう。

「ぐぬぬ…まあいいや。ロイド、ちよつと剣出して？」

「義手の必殺技を使うんじゃないのか？」

「それはちよつと温存かな」

私がそう言うのとロイドはかなり残念そうな顔になるが、この剣だつて凄いいんだからな。そう思いながら、ロイドに渡して貰った剣2つを合体させる。

言ってなかったけど、ちよつと前からロイドの剣ってどつちも片刃で長めのやつで…

「まあ、多分この先使う事になるだろうから大丈夫！ いや、大丈夫じゃないのかもしれないけど、今回はこの合体させた剣を使ってみて？」

「分かった。カッコよくていいなこの武器」

そう言っただけで私が渡したのは、柄は長めで真ん中から分かれそうな長い槍のような刀身：まあ有り体に言えば、ダウンサイズ版ルガーランスだね！ 手元を同化して威力も上げられるよ！

そんな事をどこかに説明しながら、私も銃状態の大鎌を腰だめ撃ちの要領で構える。

「とりあえずロイドと私とで壁ごと消し飛ばして行こうと思ってるけど…：撃ち漏らしたらお願いね？」

撃ち漏らししちゃう可能性は低いけど、念のために後ろの2人に謝っておく。

「うん。一応準備しておくね、イオリちゃん」

「イオリさんは何を撃つつもりなの？」

「ちよつと流れを変える為に主砲を」

なんか、雰囲気がいっつもわいのわいのわいのした感じじゃなくなっちゃってるからね。ここら辺でここ微妙な雰囲気をどうにかしたい。

「ロイド、せーので合わせてね！」

「了解！」

その掛け声と共にロイドが構える右手付近が緑色の結晶体に覆われ、私の構える銃の先に3つ、銃の脇に2つの魔法陣が現れる。大和魂を見せてやる！ いや違う。

「せーの！！」

「発射あああつ！！」

そしてその掛け声でロイドの方からは青白い直線的な、私の大鎌からは黒いスパークが走る螺旋を描く極太のビームがそれぞれ発射される。私はちっこいしロイドも私より頭二つ大きいぐらいの身長だから、普通ならそんなに広範囲の攻撃なんて出来ないけどそこは私の

廃スペックな武器、余裕で壁を貫通し奥の空間を蹂躪していく。

「僕はまず、何からツツコミを入れればいいんだろう?」

そしてリユートさんがそんな事を言い出す頃には、見る影もなく壊れた壁とその奥のシヨゴスの居た空間がポツカリと口を開けていた。

「今回は何もツツコミは入れなくていいと思うよ?ほら、シヨゴスも居ないしこんなに視界も開けた事だし」

「あの、イオリちゃん。そこに玉虫色の水たまりが…」

そうリユートさんを言いくるめようとしていると、レーナさんがそんな事を言っただけの床に指を指していた。見てみるとそこにはうねうねしてる玉虫色の水たまりが……とりあえず、床と壁を凍らしちゃえばいいか。えいっ。

「ほら、シヨゴスも居ないしこんなに視界も開けた事だし……ね?」

「イオリ、流石にこれは言いくるめられないと思うぞ?」

ぐぬぬ、私にはいいくるめスキルは無かったか。っていうか、幾ら構造を簡単にしてあるとはいえ一回見ただけで分解できるって凄いなあなんて事を思った瞬間、私達の足元にかなり大きな魔法陣が広がり、視界が謎の炎に塗りつぶされた。不思議と暑さは感じなかった。

第24話 場違いな水着回 ぜんぺん

「熱っ……くはないけど、何これ？」

視界は一面炎で何も見えないのに熱くはないし、状況を把握しようと思つて《ディメンション》を使つてみるけど失敗するし、下手に動いて変な風になつたらヤバイから動けない。

一瞬だったのかそれとも数分だったのかも分からない炎に包まれた時間が終わるとそこには、さっきまでいた場所と違つて体育館くらいの大きさの空間が広がつていた。少し離れた場所には完全に水没している大きな階段があつて、そこから溢れているのか足元もパシヤパシヤいうくらいには水が溜まつている。

「今度は強制的に水中戦闘……つて、リユートさん達は?!」

いつもと違つて、なんかSAN値が下がりそうな転移をした所為で混乱したけどハツと我に返る。転移↓分断なんてよくある手じゃん！ そう思つてリユートさん達のいた後ろを向こうとして、私は何かに足を取られて転んでしまった。

「ぐえっ」

「ぐえつて何さ。私、装備含めても30kgちよつとしか体重的ないんだけど」

ロイドの胸に打ち付けた額を押さえて、ほっぺを膨らませながらロイドに文句を言う。鍛冶つて結構体力使うし、戦闘もしてるし私が重い訳がない。というか、このシチュエーションつて立場が逆ならラキスケ的……おい誰だ平坦つつたのバラして素材にするぞ。いや事実ではあるんだけどね？

「それでも、いきなりのしかかられたら痛いものは痛いんだよ……」

「むうう……まあいいや。リユートさん達は？」

「ちゃんというよ、イオリちゃん」

「あざとい、今のはあざとい」

私がそんな風に呟くと、後ろから見知つた2人の声が聞こえてきた。振り返つてみるとちゃんとリユートさんとレーナさんが立っている。

「偽物……じゃないみたいだね」

「いきなり偽物呼ばわりって酷……くはないか、この状況なら」

「そうだよ！ こんなクトウルフ感満載な中であの変な炎、どこぞの無貌な神様が出張って来てもおかしくないもん」

うがーと手をバタバタさせながら私は言う。溜まっている妙にしょっぱい水と、嫌に目につく暗い緑色の所為で何が待っているのかは薄々気づいてはいるけど方が一が無いとは限らないもん！ この若干海水とは違う匂いがするのも気になるし……

「私にはよく分からないけどイオリちゃん、そろそろ退いてあげたら？」

「ふえ？ あ、ごめん」

レーナさんにそう言われて、慌ててロイドの上から降りる。流石に乗ったままジタバタしたのは悪かったかもしれない。

「いたた……それで、これからどうするんだ？イオリ」

「どうするって？」

「進むのか？それとも帰るのか？」

「えつと……」

そう言われて辺りを見渡してみるけど、例の水没してる下に続く階段以外階段は見当たらないし、魔法陣らしき物も見当たらない。転移魔法もこの感じだと……

「うーん、進むしかないんじゃないかなあ？帰る方法無さそうだし」

「イオリさんって転移魔法使えたよね？」

「使えるけど多分……」

両手をかざして、たまに使う転移門を開こうと頑張ってみるけど、スパークの走る薄紫色の波紋が揺らめくだけで一向に安定しそうにない。

「うん、やっぱり無理みたい。かなり無理すれば使えないことも無いだろうけどね」

「その無理っていうのは？」

「私が制御できる限界以上の魔力で無理やり発動。成功率はそんなに高くないだろうし、失敗したらここから辺全部巻き込んでボン」

「……進むしか無さそうだね」

リユートさんが諦めたようにそう言った。非力な私を許してくれ、いやどっかの白い盾よりは働いてると思うけど。

「でもリユートくん、進むって言っても水浸しだよ?」

「そうなんだよね、だから帰れないかと思っただけど……」

チラツとリユートさんが私を見る。出来ないものは出来ないって、

1日くらいあれば出来るかも知れないけどさあ……

「夏、1人で海に行った時に艦これごっこしてたから、私とレーナさんはとりあえず先に進めるよ?」

「イオリさんなら何かありそうだとは思ってたけど、何してたのさ」

「貝とかお魚取ってた。この前の鯛っぽい魚もその時取ったやつ」

沖に出て釣りをしてたのにあんまりにも釣れなかった時に、作ってみたんだよね。誰もネタが分からないから凄く寂しかったけど、快適に作業は出来た。

「まあなんのコスプレだかは知らないけど、アホみたいに性能は高いんだろうね。僕達はどうすればいい?」

「ゴーグルと息できるシュノーケルしかないからそれかな。けど、ロイドって線が細いし身長もそんなに大きくないから、いつそ女装させちゃえば丁度いいかも……フ『ロリ』アントライアングルになるし」

「誰が上手いことを言えと」

「ロリが増えるよやったねリユートさん!」

「おい馬鹿やめろ、誰が酷いこと言えと!」 後むしろ僕レーナにやられた側なんだけど」

「あ、そっか。リユートさんってリオレウス……」

「うぐっ」

「ちよつといいか?」

話が盛り上がり、最後にハタレってオブライトに包んで投げつけたところで、今まで会話に参加してなかったロイドが会話に入ってきた。

「念のため言っておくが、俺は女装する気は無いからな?」

「えー、つまんないのー。レーナさん、着替えちやお?」

「でもどこで？ 隠れられる場所も無いし…」

「うん、だから《金属生成》！」

不意打ち気味に、リユートさんとロイドの周りに適当な金属で高めの壁をつくり視界を遮る。

「もし覗こうとしたら、そこは焼却炉になるんでよろしくね！」

「分かってるよー、ロイド君も変な気を起こさないように」

「わ、分かってますよ！」

とりあえず敵が来るような様子も無いので、私達は着替え始めた。リユートさん達？ 最低限防具付けとけばなんでもいいんじゃないの？ 自分で乾かせるだろうし（辛辣）

第25話 場違いな水着回 こーへん

「イオリちゃん、こう?」

「いや、もうちよつと手をこうしていい感じにニコツと」

「それで爪先立ちしてくれれば(へ。▽。) って感じになるからOK
!」

「イオリちゃん、それどうやって喋ったの?」

「分かんない!」

「まあ、イオリちゃんだもんね……」

実はすぐに着替えは終わったんだけど、今はレーナさんと登場ポーズを話し合ってる。もうなんか、クトウルフな中に結構いた所為かこういうまつたりしたのがやりたかったんだよね。ここは安全っぽいし。

「やっぱりパイルバンカーを使うなら、高速機動が必須だと思うんだよ。って、ロイド君は元々高機動戦法が得意なんだっけ?」

「はい、父さんと同じようには戦えないので工夫してみたんですけど……」

「いいと思うよ、色々と噛み合ってるしね。あいにく、このパーティーには教えられる人は……イオリさんは参考にならないしなあ」

「ですよね……」

最初こそ文句を言ってたけど、こっちの着替えやらなんやらが長かった所為か向こうも違う話題で盛り上がっている。私だって高速戦闘は出来るからね?移動中に怪我して自分で治すのが前提だけど。

まあそれは置いておいて。

「リユートさーん、着替え終わったからもう行けるよー」

「はいはい、それじゃあこの壁退かしてくれる?」

「りょーかい!」

私はパシャパシャと足音を鳴らして私が作った壁に近づき、そのまま無限収納に放り込む。と、同時にレーナさんに目配せして同時にポーズを決める。

「艦長の指揮に入ります!」

「えっと、リユートくん…似合ってる?」

前のチャックは締まってるけど、レ級の格好をしたレーナさんがリユートさんに首を傾げて聞いて、私は私でいつぞやのイオナの格好でピシッと敬礼を試みる。髪の色は違うけど、レーナさん案外似合ってるんだよね。

「色々突っ込みたい部分は有るけどイオリさん、まずはその雀卓っばい何かとバケツは仕舞おうか」

「リユートさんも鼻血止めようか」

クトウルフなんだから、雀卓とバケツはかなりいいアイテムだと思うんだけどなあ、仕舞っておかないと怒られそうだから仕舞うけど。そういえばロイドは喋ってないけどどうしたんだろう? って思っで見えてみたら、なんか顔赤くしてワタワタしてる。

「全く、イオリさんが艦これっていうからってつきり艦娘だと思ってたけど、どっちも艦娘じゃないとは…」

リユートさんが呆れたようながっかりしたような声で言う。いや、一応ろーちゃんとかしおいとかのやつは有るけどさあ……

「私でも、流石に人前でスク水着るのはちよつと……」

「リユートくとんと2人つきりならいいけど……」

「流石の僕も、そこまで業は深くないかなあ……師匠ならともかく」

そういう風のリユートさんと話しているレーナさんには、間にあわせの装備だからレ級の特徴とも言える尻尾は無い。だから実質見た目は黒いパーカーと穿いてる物が違う程度だ……私が着る時は生やせるんだけどね、尻尾。

「まあ、ゆつくりし過ぎちゃったし早く行く? はい、ゴーグルとシユノーケル」

「イオリ達は無くて大丈夫なのか?」

「もちろん! この匠イオリちゃんが、見た目の雰囲気壊すような無様な真似をする訳が無いのです!」

「そ、そうなのか」

ロイドがこっちにはゴーグルが要らないのか聞いてきたけど、ゴーグルについてる機能程度服に織り込み済みだ。ゴーグル&シユノー

ケルの艦娘なんて……あれ？ 案外潜水艦娘ならありかも知れない。いやいや、まあとりあえず服にその効果は付いてるのだ、ロイドが若干引いてるけど気にしない。

「あまいいや、今度こそレッツゴー」

「おー」

リユートさんだけはこのテンションに乗ってくれなかったのは残念だけど、私は水没した階段を下りていく。きゅーそくせんこー。

◇

完全に水没して空気の残っている部分の無い広めの通路、そこに幾条もの閃光が走り、それを追尾するように金属製の槍が飛翔する。

その全てが迫ってくる多数の魚面の人形や稀に出てくる魚面の人魚っぽいナニカに直撃し、焼き焦がし消滅させていく。

「ヒヤッハー!!」

水の中だから喋れないけど、私の内心はこんな感じだ。一応これ、私が楽しんでるだけじゃなくって、湧き潰しで敵を倒してる事でリユートさん達のSAN値が減らないように気を使つての事だったりする。本当に私が楽しんでるだけじゃないからね？

ここから先には絶対に進ませない、そんな意思を感じさせるレベルで湧いてくるインスマスとダゴンっぽい何かを、超重力砲で薙ぎ払いクルツと後ろを向いてリユートさん達の呆れ顔を見たときにそれは起きた。

「!?」

動かしていた足に何かぬるつとした生暖かい物が絡みついた。しかも若干先行していた私に対してだけ。下を見ると、ダンジョンの壁だった物の色が変わっていき、ウネウネとした触手のついた肉塊が現れていた。

「く、くく盾・六角形展開!」

ちよっ、触手プレイとか誰得!?!いやそれよりもR18展開とか!?

そんな風に私が混乱している間にも、耐え切れなくなったシールドを破り触手が絡みついてくる。ちよっ、どこ触つて!?! うひやあつ!?! リユートさんは王の財宝でこつちを狙っているし、ロイドとレーナ

さんも何かをしようとしているけどひやうつ。この肉塊は私をうまく盾にしている攻撃しようとしても出来ないみたいだ。つまりコレは一番対応し易いのは私って訳でひやうつ、ああいいやもうやっちゃまえ！

ゴボゴボと口から空気の泡を出しながら、まだ服の機能が生きている間に私は詠唱する。

「(種々の罪事は天津罪、国津罪、許許太久の罪出でむ、此く出でよ)」あくまで私のできる範囲での再現。それでも私の大鎌から溢れ出てくる泥の様な闇に触れた水が腐って腐って腐っていく。あくまで範囲はリユートさん達に届かない程度、下の肉塊を腐り殺す程度！

「(此久佐須良比失比氏

——罪登云布罪波在良自)！」

大鎌を中心に、闇が一瞬だけ爆発する。全体的な力量不足と集中出来ない状況のせいで上手く使えなかったが、それでも効果範囲内は腐り落ち床の部分にはヘドロのような物が溜まる。

このままじゃ私以外通ることすらままならないから、思いつきり浄化の魔法を使おう：と思ったら、さっきの創造もどきに巻き込まれた所為で天井に大きな穴が空いていた。光も差し込んできている。

とりあえず上を指差して、予定を変更して腐った水は下の方に押し出し穴に向かって上昇する。

「ぷはあつ！ ザツケンナカラー！」

「い、イオリちゃん、どうどう」

水面をバシヤバシヤとしていると、上がってきたレーナさんが私を落ち着けようとしてくる。でも落ち着けるかー!! クラネルさんからも守り抜いた場所をあんな変な触手に触られたんだぞ!? 滅したけど。

「イオリ、その、大丈夫か？」

「んなわけあるかー！ まだクラネルさんにやられた方がましだわー!!」

「それって今度師匠に会った時に言ってもいい？」

「やめて下さいお願いします。なんでも言う事聞くから」

「そう言って聞くだけでしょ?」

「なぜバレたし」

次に、ロイドとリユートさんも浮上してくる。ちよつとやめないか、クラネルさんに言ったら本気に取られてんあー! になつちやうでしょうが。

「全く、それにしても……うえつ、何この門」

「見てるだけで気持ち悪くなってきました」

とりあえずこのふざけたやり取りのおかげで一旦怒りが収まったので周りを見渡してみると、どうやらここは大きめの部屋らしかった。そしてすぐ近くには、大小の丸が重なったような色々な図形が混じり合ったような暗い緑の気持ち悪い門が佇んでいる。

「イオリさん、コレはマズイ。今すぐ引き返そう? まだ多分間に合うから……イオリさん?」

「……」

意識は有るのに、何故か身体を動かせないし喋れない。そんな状態の私が一気に水から出て、門に向かって歩いていく。駄目だつてこの気配、絶対に良くない! そんな思いも虚しく私の動きは止まらない。

「あの時と同じだ……」

「っ、天の鎖よ!!」

そしてリユートさんが咄嗟に私に天の鎖を放つが若干遅く、私はそのドアを思いつきり開け放った。

第26話 TRPGじゃ無くても詰んでる件

「わたしは しょうきに もどった！けど、なにこれ？」

扉を開け放った瞬間、糸が切られたかのように私の身体のことろーるが戻ってきた。この絡みついたままの天の鎖を解いて欲しかったりするんだけど、それよりも大変な光景が目の前に広がっていた。

「真っ白……」

「これは、霧か？」

「霧……クトウルフ……紋章……あは、あはは、終わったかも」

リユートさんのS A N値が若干削れ過ぎてる感じがしなくてもないけど、私としてはそれよりも目の前に広がる真っ白な霧がもうもうと立ち込める空間の方が気になる。ただの濃霧にしか見えないのに、どこからか花の香りが漂ってくる。

そしてその霧は、開いた扉から段々こちらにも流れ込んできている。

「イオリさん、全体的にバフを掛ける感じの魔法って使えたりする？」

「え？ あ、うん一応少しは。とりあえず天の鎖解いて欲しいんだけど？」

ギシツと鎖を軋ませて振り返ると、みんな水から上がっていた。というか、私の開けた大穴が無くなっているからそうするしか無かったんだろう。

「了解。強化は防御面重視でお願い。多分気休め程度にしかならないけど」

「《エナジーシールド》《ライフフォース》《ビーストスピリッツ》、オリジナルで《プロテクトマインド》《マジックバリア》《ピオリム》《スキルト》、そしてメに《ゴッドブレス》！」

「こんな時にふざけないでって言いたいけどちゃんと効果はあるみたいだし……はあ」

「俺の知ってる本職のエンchanターよりも補助魔法が多いんだが……」

とりあえず鍵の杖を引つ張り出して私の覚えている限りの補助系の魔法を使ってみる。全ステータスが大体1・5倍くらいにはなってる筈だし、言われた通りメンタル面……この場合はMINDは2倍位にはなってる筈。でもリユートさんの言う通り気休め程度の効果しか無さそうなんだよなあ。

ロイドがそう言った時、いきなり視界を埋め尽くしていた霧が晴れて全員が足を踏み入れている部屋の全貌が明らかになった。多分1km2kmじゃきかない程、縦にも横にも奥にも空間が広がっている。

「レーナさん！」

「うん、見ちゃ駄目だよ？ リユートくん」

そしてその空間の中央付近には、神話生物じゃないけどこの場にいる男2人は見ちゃ駄目な光景が広がっていた。それに気づいた私はレーナさんに目配せをし、お互いにロイドとリユートさんの前に立つて2人の視界を塞ぐ。

暗い緑色の壁から透明な水が流れ落ちていき、床には私の足首位まで水が溜まっているそんな空間。そんな中に不自然に突きたっている真っ黒な十字架、そしてよく見るとそこには同じ色の鎖で小さな人が磔にされていた。

女の子で歳の頃は分からないけど、身長は大体私と同じくらい。目立つのは虹色に見える髪の毛と、元々は服だったんだろうけどもはや大事な場所すら隠せてないポロ切れを纏ってる事かな？ 眼は閉じられてるからよく分からないけど、何故か物凄く親しみつていうかなんというか……そういう感覚を覚える。

「とりあえずロイドもリユートさんも見ちゃ駄目！」

「えっと、いきなりどうしたんだ？」

ロイドがそう不思議そうに聞いてくる、そういえばロイドって獣人って訳でもないしまだ普通だからこの距離じゃ見えないのかな？

いや、そんな事言ったら私が頭おかしいみたいになっちゃうから、

ロイドの目がそんな良くないって事にしておこうしよう。

「えっとね、殆ど何も着てない私くらいの女の子が、部屋の真ん中で十

字架に磔にされてる」

「え、それって大変な事なんじゃ」

「うん、そうなんだけど……リユートさんは緊急時以外動かないでね？」

「じゃないと食べちゃいますよ？」

レーナさんは奥を覗こうとしていたリユートさんに、ぞつとするような笑みを浮かべてそんな事を言う。リユートさんの顔が、狂気とは無関係に青くなっている。…ドンマイ。

「で、でもこういうのって罠の可能性が高いと思うんだけど」

「ヨウジヨミステマスカ？」

「Noに決まってるでしょ？」

リユートさんが普通にそう言うってくる、流石ロリコン歪みねえな。お札に今度部屋に忍び込んで、添い寝してるのをどつかのAIみたいにコレハセツクツ？ とでも言っておあげよう。私にシスコンの兄はいな……姉ちゃんは居たや、うん止めておこう。

「えと、とりあえずロイドは周りを警戒してて！ ちよつと行ってくる」

「ああ！ とりあえずリユートさんを行かせなければいいんだな？」

「うん！ よろしくね」

一応レーナさんがいるから大丈夫だとは思うんだけど、一応ロイドにも頼んでおく。万が一があつたら（リユートさんが）大変な事になるからね。

「いや、ハイライトが消えたロリっ娘も……」

「リユートくん？」

「か、刀を抜くのは止めてねレーナ」

後ろで何かが聞こえた気がするけど知らない知らない。今はそれよりあの女の子を助ける方が優先だ。わざわざ走って時間を使うのも馬鹿らしいから一気に転移で十字架の近くに跳ぶ。

「むむむ……どうしようこの鎖」

怪我させちゃうかもしれないから下手に引っ張る訳にもいかないし、武器とか工具も使えない。うん、とりあえず試してみるか。

「どつちのだ?」

「二個目」

「分かった」

いつもなら『第三次大戦だ』って感じでふざけてたけど今はそんな訳には行かない。明らかにヤバイっていうかクトウルフな神格が出てくる予感しかしない。そして出てくるのはこの場所の雰囲気からして。

——いあ いあ くとうるふ ふたぐん——

——ふんぐるい むぐるうなふ くとうるう るるいえ うがふ
なぐる ふたぐん——

ああ、やつぱりそうか。そんな実感と共に膨大な魔力が上の空間に集まっっていくのを感じる。

「とりあえずレーナさんは絶対に上は見ないで!! 出来ればロイドも!」

「発狂した僕とイオリさんを止められそうなのは、正直レーナには荷が重いからロイド君にしか頼めないしね」

私はあんまり運が良くない、だから多分1D10/1D100で100の方を引いちやう可能性が高い。そうなたら…うん、詰みだね。見なきゃいいって話だけどそれは、リユートさんは時間稼ぎで見なきゃいけないし私も多分何かの拍子に見ちやうだろうから早いか遅いかの違いだね。

——ふんぐるい むぐるうなふ くとうるふ るるいえ うが||
なぐる ふたぐん——

——模造生物・■■??■ 完全召喚まで35秒——

そしてその宣言と共に、まだ実像は薄いのが、私達の頭上にそれは顕現した。そして私の中で何かがドクンと脈打った。

第27話 思い…だした

「ひう…あ…」

上から感じる酷い圧迫感、その元になっているやつを見た瞬間、覚悟はしていたのに私の口からはそんな声が漏れてしまう。

——探索者B、Dの一時的狂気の突入を確認——

——探索者AのSAN値の減少を確認——

そんな声が聞こえる中、私は降りてくる邪神から目が離せない。タコみたいに巨大な頭、それを中心に悪魔みたいな羽とか触手とか変に光る鱗とか象みみたいな身体とかそういうのが体育座りみたいに丸まっていて、それがゆっくりとだけど降りてきている。

(やつぱりよくない見ちやダメだよこんなの発狂とかするのも何となく分かつちゃうし実際私も頭痛いし狂気なってるみたいだけどそれよりもそれよりも他のみんなの方が大変だし…って、そうじゃない!!)

「レーナさんとロイドは見てないよね?」

自分で自分の頭にパンチして、ゴチャゴチャになってた思考を吹き飛ばして大声で2人に聞く。

「うん、見てないよ。けどリユート君が!」

「あ、ああ……」

ロイドは両手で自分を抱えるようにして、変な声を漏らしながらガタガタと震えてる。ぐぬぬ、見ちやった感じか。まあまだ大丈夫だろうとロイドは後回しでレーナさんの指差す方を見ると、リユートさんは頭を抱えて何かを早口でブツブツと呟いていた。まさか発狂しちゃってたりするばていーん?一応リユートさんの言ってる事を聞いてみ……る……と。

「えあう……はう……」

な、なんかロリの魅力を延々とブツブツ喋ってるんだけど。リユートさんなら大丈夫だと思ってたけど駄目だったか。あう……絶対今の私、他の人から見たら顔真っ赤だよ。

「ああもう、動けるの私1人!」

リユートさんもロイドもろくに動けるような状態じゃないし、レーナさんはあの幼女背負ってるから戦うなんて出来ない。上から降りてきているから時間もそんなにないし…

「眩め、封、閉ざせ。急急如律令！」

「イオリちゃん、何するつもりなの？」

「時間稼ぎ！」

鎌を適当に地面に突き立て、私は魔法で意識を奪ったロイドを支える。そしてロイドの右腕を持ち上げ、降下中のクトウルフに照準を定める。

「光よ！」

私が使った唯光だけの魔法で、ロイドの腕の影が伸びクトウルフ全体に重なる。効くかわからないけど、発動準備は整った！

「製作者権限で強制発動！新たな天地を望むか？」

私のその声をトリガーにして、ゴツツツ!!??!!?? という世界の抉れる音が炸裂した。実際にタナトニウムやらなんやらの暴走で次元がゴチャツとなるから間違つてはない。

そして、それに巻き込まれてあっさりクトウルフが消滅する。

「え、は？ いや、とりあえず逃げないと！ レーナさんはみんなと壁際に!!」

「分かった！」

私を作った義手が凄いのかそれともあのクトウルフがシヨボいのか、たった1発で吹き飛んだクトウルフにびっくりしながらも、私はとりあえず逃げる準備を始める。

適当にロイドを地面に横たえ、突き刺してある大鎌を握りしめる。「どうせならやっちゃえ！ 五分で成功するんだから！」

ちよつと前リユートさんに言った通り、そこまで成功率は高くない。けど、何もしないであぼーんなんて最悪だ。

そんな考えの下、吸収してあった私が制御できないレベルの魔力を無理矢理使い、暴走気味だけど転移の魔法を組み立てていく。

——模造生物・■■■■の完全消滅を確認しました——

——再召喚まで後1分——

よし、それなら間に合う！ 何せあと数秒で転移は出来るようになるんだから！ 問題なのはこんなのを残したまま脱出する事だけど、まあ外なら勝機がない事もない。地形は変わるけど。

そんな甘い考えは、次の瞬間粉碎された。

——探索者Aの魔法の脅威度が更新されました——

——封印は不可と推定。妨害のため、太極・無限中学二年生地獄を展開します——

私の手元で暴走した魔力が爆発する。大鎌を中心にして魔法を使っていたお陰で私が勢いよく吹き飛ぶくらいの規模で済んだけど、せっかくの服は無残にボロボロになっちゃったしかなり怪我もした。

今の私の格好はもう大破した艦娘な感じだ。そんな中でも大鎌を手放さなかったのは褒めて欲しい。

「つくう……」

「イオリちゃん！」

叩きつけられた壁から、落ちてバシヤツと倒れている私にレーナさんが駆け寄ってくる中、私は別の事を考えていた。

（何さ無限中学二年生地獄って正田卿じゃん、絶対ここ地球から来た誰かが作ってた感じだよ。それなら多分厨二な感じで詠唱すれば大丈夫なんだろうけど、今までの事を考えるとどうせこれじゃ終わらないんでしょどうせえっ!?!）

そしてそんな私のやけっぱちな勘は見事に的中し、更にこちらを追い詰めるような声が流れた。

——召喚終了までの時間稼ぎとして、神話生物の召喚を開始します

そんな声とともに遠くに、いつだったかリユートさんが倒したバツクベアードさんみたいな奴とか、さつき倒した肉塊＋触手の奴とか、インスマスな奴らとかテケリ・リさんとか色々な奴が落ちてくる。

「ふふふ、ドン千め絶対に許さない」

ふらふらしながらも、私は大鎌を支えにして立ち上がる。

私がいつだったか読んだラノベで、過剰な回復は呪いと変わんなって言うってたけど確かにそうだなって思う。だってもう、痛さも血

の跡も残ってるのに傷自体は塞がっちゃってるんだもん。

「イオリちゃん、怪我は!?」

「大丈夫、もう塞がった。今度の転移はちゃんと成功させるから…」

地面にしっかりと大鎌を突き立て、喋る詠唱とは別に右手で文字を書けるように魔力を込める。本当は左手も使いたいけど、今回は大鎌を持ってないといけなからパスだ。

「イオリちゃん、そんなに無茶しなくても大丈夫だから!」

「さっき思い出したばっかだけど、私って元男だからね。こういう時に無茶を成功させてこそってやつでしょ」

残り40秒弱、私は無理して笑いながらそういう。だってそうしないと、今すぐにも泣いちゃって動けなくなっちゃいそうで、心が折れちゃいそうで。

「今のイオリちゃんは女の子でしょ!」

レーナさんが叫ぶ。

「そうだよー。そうだけど、リユートさんもレーナさんもロイドも!私わがまま言っただけで付いてきてもらったんだよ!」なら脱出出来る可能性がある以上無茶してでもやるしかないじゃん!! こんな所で死にたくないし死んでほしくないんだよ!! みんな好きなんだもん!!?!!?」

ロイドに関してはlikeの方だけど、みんなが好きなのには変わらない。今までみたいになぶさけて怒られたり美味しくご飯を食べたり、そういう平和な日常っていうのはこっちの世界に来てからリユートさん達としか出来なかったんだから!!?」

「イオリちゃん……」

レーナさんが驚いた目で私を見てくるけど、正直時間がないから無視する。顔は真っ赤だろうし、今の口開くと何言い出すか分からないからってのもあるけどね。

「この身は悠久を生きし者。

ゆえに誰もが我を置き去り先に行く

追い継りたいが追いつけない。

才は届かず、生の瞬間が異なる差を埋めたいと願う

ゆえに足を引くのだ——水底の魔性!」

迫ってくる神話生物を前に、私は最早叫ぶように詠唱する。それに反応して私の影が揺らめく。こんな広域で相手を止める事の出来る魔法なんて、さっきの太極なんて聞いちゃった所為でこれしか思い出せない。時間的にも相手のにも詠唱はこつちだ。

なんて事を思いながら、右手では崩した平仮名で文字を綴る!

我、望郷を訴えたり 我、懐郷を訴えたり 遙か 彼方 千里 彼

方 万里、万里、遠き、故郷よ この手に届かぬ、在りし場所よ

「波立て遊べよ拷問城の食人影アアアアツ!!」
チエイテ・ハンガリア・ナハツエーラー

私と大鎌の影が枝分かれして広がり、それに触れた神話生物達が全て動きを止める。無茶な魔力での魔法の行使のせいか、皮膚が切れて血が出て再生するのが繰り返され、痛さを我慢してそこまで頑張っているのに並行して魔法を使っているせいか長くは止めていられそうにない。

残り時間だつて20秒切ったけど、それでも十二分に文字は書き上げられる!

我、妄執を訴えたり 我、憎悪を訴えたり この想いを以って、隔つ距離を繋ぎ給え

そこまで書き終えると、文字が収束し私達全員の足元に魔法陣が広がる。所々に紫のスパークが走っているけど、ギリギリ安定してるし多分問題なし!!

「開け! 移ろいの門!!」
イレイテックポータ

私が全力で作った魔法陣が下から持ち上がっていき、私達を転移させていく。私自身も転移出来ているのはあくまで酷似した魔法だからで……

「っ、きやあつ!?!」

転移が終了する間際、私は何かに阻まれたみたいに魔法陣から弾き出されてしまった。そして同じように、レーナさんが背負っていた筈の少女も私の隣に倒れている。

そして広がる光景は相変わらず神話生物、クトウルフも完全に召喚されてしまっている。

「あは、ははは……」
もうキレタ。完全にプツチーンって奴だ。

第28話 大惨事

「おい、一体何が起きてんだよ!」「知るか!俺に聞くんじゃねえ!」「そろそろやべえんじやねえか?」「爆発するぞおおおっ!」「この揺れの原因はなんだ?」「ああ!」「ちくわ大明神」「おい誰だ今の」「メデイツク、メデイツク!」

そんな酷い騒音の中僕は意識を取り戻した、どうやらベッドに寝かされているらしい。ここは…ギルドの治療室か。

「って、確か僕はイオリさんと一緒にクトウルフが降りてくるのを見て……記憶が無いって事は発狂してたのか」

大丈夫って言うていたのに情けない。そう思いながらも立ち上がり、周りの状況を確認する。何がどうなつてここにいるのかは分からないけど、右隣のベッドにはレーナが寝かされており左にはロイド君が寝かされている。その他にま室内には数名の人が寝かされている。

ふむ、イオリさんが居ないって事は、大方あの人が何かしたんだろう。そんな事を思った時、地面が大きく揺れ僕は思わず膝を突いてしまう。

「地震? いや、地震はもつとこうぐわつと長く揺れるものだし、そもそもこつちの世界に来てから一回も揺れた事ないし違うか」

具体的にはイオリさんが流星群を降らせた時は揺れたけど、自然な地震は一回も感じた事がない。とりあえずいつまでもこの部屋に居る訳にもいかないの、誰かに話を聞こうと思ひ部屋から出る。

「ともかく、誰かに事情を聞かないと」

非常に慌ただしく人が動いている中、受付嬢の人に話しかけてみる。

「ああ、あなたはさつき運ばれてきた3人組の。丁度良かった、人手が足りないんです。このポーションをあちらの怪我人が集まつてる場所に持って行ってくださいませんか!」

「え、はい。あの、ちょっといいですか?」

流れではいって言うてしまったけど、とりあえず本来の目的は果たしたい。少なくとも戦争とか魔物の襲撃とかそういうのだったら僕

が戦いに行った方が早いしね。

「はい。なんででしょうか？」

「目が覚めたばかりでまだ状況が分からないんです。概要だけでもいいので教えてくれないでしょうか？」

「はい。数十分前から先ほどのように時折地面が揺れ、一部の建物が崩れたりして怪我人が発生しています。それでギルドを開放し、治療を行っています。他に何か質問はありますか？」

うーん、それなら僕に出来ることはそんなに多くなさそうだ。イオリさんなら回復魔法やらポーシヨンやら色々役に立てただろうけども……って、3人組？

「あの、それじゃあ最後に1つ。さつき運ばれてきた3人組と言っていましたか、その他に小さい女の子はいませんか？ 銀髪と金髪の、それぞれこのくらいの子なんですけど……」

そうやって僕は自分の胸より少し下辺りの高さに手を合わせる。もう1人の方もイオリさんとほぼ同じ身長だったし、銀髪も金髪（よく見ると虹色）もかなり目立つから記憶に残っていたんなら思い出してくれるだろう。

「えっと、銀髪と金髪の女の子ですか？うーん、記憶にないですね。捜索を頼んでみましょうか？」

「あ、いえ、大丈夫です。それじゃあコレ、運んできますね」
そうやって僕は、受付嬢の人の前を後にする。

イオリさんももう1人も来ていない？ っって言うことは、もしかしなくても取り残されてる？ 詳しい数値は覚えてないけどクトウルフの前に？ 何それ洒落にならないんだけど。

「あ、これ運ぶように言われたポーシヨンです」

「おう、ありがとうな。って、あんたはさつき運んでやった兄ちゃんか。随分と回復すんのが早えな」

「え、あ、はい。一応これでもSランクの冒険者なので」

運ばれてくる人の応急手当てをしているらしい、体格のいい男の人がそんな事を言ってくる。一応笑みを作って答えるけど、内心は優れない。というか自分の知り合いが邪神と戦ってて普通に過ごせる奴

とか居たらここに連れてきてほしい。

「それにしてもさつきはビビったぞ。いきなりギルドのエントランスに不安定な魔法陣が現れて、そこから兄ちゃん達3人だけが水浸しで出てきたんだからな」

「やっぱり、3人だけなんですね」

このおっちゃんが今言った言葉で、イオリさんともう1人がその時点では確実に取り残されていた事を確信する。っていう事は多分この揺れは、戦闘音か……幾らイオリさんっていつでも勝ち目ほぼゼロじゃん。

「つーことは、やっぱり他にも居たんだな。どんな奴だ？ 今何をしてる？ 今回は見逃すが、あんな状態でギルド内部に転移させてきたことに抗議しないといけねえ」

またズンツとまた地面が揺れる。そして口を開こうと思った時、鳩尾に衝撃が走った。

「うぐつ……」

「リユートくんっ！」

雷……じゃなくて、下を見るとレーナががっしりと抱き付いて来ていた。しかも涙目で僕達を見上げてきている。ああ、さつきまでと違ってSAN値じゃなくて理性ががが……

「イオリちゃんがつ、血で真っ赤で、ボロボロで、それでも無理して魔法を使って、血の臭いが酷くて、魔法陣を潜って、今起きたらイオリちゃんとあの子が居なくて……」

「レーナ、ちよつと落ち着こう。ね？」

「うん……」

なんだかよく分からないけど、とりあえず背中をポンポンと優しく叩く。と、そこでおっちゃんから優しい目を向けられている事に気づく。

「あー、なんだ、若いっていい事だよな。彼女か？」

「はい、僕には勿体無いくらいですけどね」

そう言った瞬間、抱き付いているレーナが頭をグリグリとしてくる。大丈夫だってもう言わないから。

「それで、僕達をここに転移させたもう1人なんですけど……7歳の女の子で、今はおそらくSSSランクはある魔物がリーダーのSランク以上の魔物の群れと、人1人を庇いながらたった1人で交戦中です」

「すまん、俺の聞き間違いかもしれないねえ。もう一回言ってくれるか？」
おっちゃんが頭を押さえてそういう。……今の言い方だと誤解が酷くなりそうだから、ちゃんと付け加えよう。

「7歳の女の子が、今はおそらくSSSランクはある魔物がリーダーのSランク以上の魔物の群れと、人1人を庇いながらたった1人で交戦中です。Sランク冒険者の『流星群』って言えば分かりますか？」
「ああ『死神』か。ギルドに来るたびに胃薬と問題事を持ってきて、受付嬢の胃を殺していくっていう……」

「何してんのあの人……」

いや、確かに色々と心当たりはあるけども……いつかイオリさん、ギルドから除名されるんじゃないの？

『死神』はべらぼうに強いつて話を聞くが、その状況はマズイな。この揺れの元凶って言うんなら応援を寄越すことは出来るが……」

「場所は一度完全な水中を通過しないとイケませんし、敵の強さもSランク以下の人達は多分足手まといです」

「おいおい、そりやどんなバケモンだよ……」

そりやあくトウルフ系を簡単に言えば……

「姿を見ただけでこちらの精神を破壊してくる化物ですね。だからそこに隠れてるロイド君も、さっきの二の舞になるから行かないように」

「うっ……でも、1人で戦うよりは……」

「イオリさんの邪魔をしに行きたいの？ それに行けるんだったら僕だっけで行きたいよ……」

少なくとも天の鎖は効果抜群だろうし。でも正気度を保ってられる自信もないし、イオリさんの攻撃の余波に巻き込まれてピチュンしそうだからね……どうにか生きて帰ってきてよ？

そうやって祈る事しか出来ない自分がなんだか情けなく感じた。

ん？
う？
神様には邪神がいるせいで祈れないし、何に祈ればいいんだろ

第29話 幼女のおこには天変地異が宿っている

「あは、ははは……」

もうキレタ。完全にプッチーンって奴だ。こっちの魔法を露骨に邪魔してくるわ全力でやった転移を強制的にふあんぶるさせてくるわ、もうプッチーンを通り越してムカ着火インフェルノだ。見た目が大破？ そんなの知らない進軍だ。

「来て、フロー」

「キュウツ！」

「その子を背負って逃げてて？」

「キュツ！」

迫る神話生物を前に、私は軽く鎌を振ってフローを呼び出す。とりあえず、何をやるにしても巻き込むのは回避しないとね。なんてことを考えてる間に、フローが女の子を背負って上空に飛び去る。

もう形成の状態にはなってるしリミッターも外れてるから、下手したら鎌が掠っただけでとんでもない事になりかねない。

「まあ、元々神様と戦うための能力を何個かベースに混ぜてるしやれない事は無いでしょ」

今思うとここまで死ぬ気にならないといけないのって、随分と久しぶりに感じる。この世界に来たばかりの頃のオークとか、リユートさんと一緒に戦ったテイラノとか、今回はもう半裸だから危険度がその比じゃないなあ……

そんな事を思っている間にも、強いて言うなら冒流的な叫び声とかを上げている化け物の群れの中から、1体の玉虫色のスライムみたいな物体が私に飛びかかってくる。

「人の回想邪魔しないでよ？」

そしてそれは、私振った大鎌に一瞬で喰らい尽くされた。それを見て何故か相手の動きが一瞬止まる。なにさ、たかがそっちの味方1匹程度を捕食しただけじゃん。武器がシヨゴス化なんてことはARRA GAMI成分が入ってるせいで無い。

「調整開始。通常モードから特化モードへ。キラー設定。属性：

神族及びその眷属」

私がそう呟いた瞬間大鎌の刃の部分が数十もの破片に解け、綺麗な鐘のような音を響かせながらまた同じ刃の形に組み上がっていく。この鎌の斬れ味の欄に変な▼が付いているのはこれが理由だ。ゲーム的に言うところ、キラーを乗せられるって感じかな。しかも他の種族に対する部分からも数値は引つ張ってこれるから、今は最大：400%弱だったかな？

「だからもう！　せいぜい私の八つ当たり対象になれやあああつ！」

そんな事を叫びながら、靴から飛行する為の羽根を生やして神話生物の群れに突撃する。と、ここまでやって、さっきの厨二病強制空間はあくまで魔法のみに効果があるんだと確信する。なら装備は幾らでも大丈夫って事だよな？

「災輪・TさいりんいNテイ渦ンあBカーエル！」

肩当てからバーニアのように炎を吹かし、大鎌を構えて独楽みたいにスピンしながら神話生物を切り裂いていく。ついでに大鎌がその残りを捕食していく……のだが。

（ノリで行ったのはいいけど、流石にこの数をやるのは無茶だったかあ……）

鎌を振っても振っても、一向に敵の数が減っている気がしない。むしろ増えていってるようにも思える。正直燃料補給と素材回収がすぐく捗るからもっとやってほしいのだけれど、立ったまま動かないクトウルフがいつまでそうしてくれるか分からないし……

ズバンツと大きく鎌を振り切りながら回転を切り上げ、鎌の先端から何発も実弾を撃ち出す。そしてその反動で大きく後ろに跳んで後退する。

「ともかく、まずは数を減らさないとね！」

そう言っつて、私は鎌の柄を軽く地面に突き刺す。頭に思い描くのは、属性的に少しだけ親近感を覚えるあの厨二心をくすぐる古龍。

「果ての地に住む熾凍の古龍よ、汝が息吹、今ここに再現せん！」

私のすぐ目の前に、5つの魔法陣が重なり光り始める。ちゃんと成

功してるみたいだね、こんな恥ずかしい詠唱をした甲斐があったよ。

「轟け！ 熾凍の咆哮!!」

魔法陣ごと光が収束して、精々が私一人分くらいの太さの紫色の光線が神話生物達に向かって照射される。ただこれだけの説明だとすごく弱そうな魔法だけど、わざわざ私が対人戦で禁止してる魔法がこれだけな訳が無い。

「はああああああつ!!」

敵の中心で7方向に分かれて、その先々で炎と氷の竜巻を生じさせるというやっぱ災害レベルな魔法を見ながら、大きく上に跳び上がる。そしてそのまま、大声で叫びながら鎌を横に振り切る。

その次の瞬間、私の近くを除く地面からは天井にまで届く鋭い氷柱が発生して、天井付近から加速されながら流星群が降り炎の大嵐を巻き起こす。外で使ったんならもうちよつと火力が上だったり、フロアは私の真上にいるから効果の範囲外だったりするけど、まあそれは置いておいて。

「まだまだあ！ 魔法再強化、魔法三重化、熾凍の咆哮！」

大鎌を振り切った反動でクルリと一回転し、こんどは縦向きに振り下ろす。氷で乱反射する3本の光線、視界を埋め尽くす氷柱とそれを打ち壊しながら落下する流星群、その後には捲き起こる炎の地獄。そんな中でも、ほんの少しだけだが動いて、瀕死の体で生き延びているナニカを発見する。

「しづといなあ……」

すごく気持ちよく魔法を使えたのはいいけど、クトウルフ含め数匹だけ普通に生き残ってしまったている。元々クトウルフは、いあ、いあ、はすたあ！ な感じか、さつきレーナさんに色々ぶち撒けたお陰で何となく掴めた創造でゴリ押ししか無いと思ってたけども……

「あの半魚人が強いのか、私が未熟なのか……」

八つ当たりをしたお陰で、ほんの少しだけだが落ち着いた精神状態でそんな事を考える。そしてもう一度大魔法を使おうとした時、今の今までピクリとも動かなかったクトウルフが、吐き気を催すような叫び声を上げながら動き始めた。

……そして、クトウルフの近くにいた瀕死のナニカは、それに巻き込まれてプチッと潰れてしまった。あ、経験値兼燃料が……

第30話 全く小学生はS（殴三）

ズンズンと地面を揺らしながら、鉄塔くらいの大きさのクトゥルフがこちらに歩いてくる。かなり身体が大きいせいか、非常にゆっくりとしたペースだ。まあ未だに空中にいるから、実際どれくらい揺れているのかは分からないけど。

「それにしても、さっきので無傷かあ…ん」

周りの環境を気にする場合、私の必殺技の中でもかなり威力が高い方の魔法だったのになあ…んちよつと自信なくしちやいそうだけどもまあ、

「そんな事言ってる場合じゃないよね」

だって、触手はうねってるし明らかに怒ってるもん。ハスターさんとか呼べればどうにかなりそうだけど、呪文しらないし私のSAN値も保たなそうだからできないし…とりあえずゴリ押し安定かな？ 厨二病強制空間っぽいのも、最初以降は詠唱すれば特に問題も無さそうだし。

「そうと決まれば、アレが来る前に色々やっちゃわないとね！」

ここで一応、私が散々言っていた『形成』とか『創造』とかの説明をしようと思う。私の大鎌についてこの能力をすつごく簡単に言うると、『形成』が武器を具現化したりそれをできる状態の事を言っていて、喰らった魂の分生命力、身体能力と第六感が強くなるって力。

そして私が今から使おうとしている『創造』は、自分が心の底から願う事をルールにした異界を創造するっていう必殺技。そしてその中でも、自分が何かに変わるのが求道って言われてて、周りを変えるのが霸道って言われてる。そしてこの能力を使うのには詠唱が必須で、それは考えなくても頭の中に浮かんでくる。これが再現出来た事に、本当に感謝。これから毎日1万…は無理だけどそれくらい鍛冶作業してもいいくらい。

本当は1番下に『活動』とか、世界の法則自体を書き換える『流出』って言うのもあるけど、特に2個目の方は絶対に出来ないので省いておくね。ドイツ語とかの外国語が付くのはデフォらしい。

まあこんなに長々と何が言いたいのかっていうと、自分でもすつつつごく恥ずかしいから笑わないで欲しいって事！

私は、まっすぐ構えた大鎌を両手でぎゅつと握み口を開く。

Wen^あ n^な Sie^た ga^が und^和 ein^解e^を An^求sie^めdlung^る f^のo^なr^らder^ばn,
wer^私de^は ich^そ sie^れ zu^を er^受halten^入
Schwert^こ noch^の nicht^剣 ge^をzogen^抜 haben^い
Weil^私 ich^は dies^まe^だs

若干周りの空気が変わり始める。神様の趣味でTSさせられたり、こんな場所に1人残されたりした私が願うのは『また暖かい日常をすごしたい』なんていう分かりやすい事だ。またリユートさん達と一緒に色々冒険とかしたいし、天上院とかす、鈴華さんだったつかかな？勇者として召喚されてるらしい友達とまたバカをやったりしたい。

Dies^魔e^s Schw^のert,^血 das^で mit^だ dem^は
gef^鍛ähr^えlich^らen Blut^し ges^こch^のmi^のed^剣et^は wurde^は

Ich^ひ ste^とuer^えe^たret^び was^に zu^あ Tod^抜e^け auf^け alle^ば F^は

Des^だhalb^か ohne^を Bit^らte^めin^お Im^願st^のand^のese^いin,
ein^私 Schw^剣ert^を aus^かzul^なassen^で

クトウルフが歩く事によって生じる足元の波が、私に近づいてくると同時に急速に鎮まっていく。時間を止めたり、修羅を率いたり、永劫に時間を回帰し続けるなんて大層な物じゃないし、『流出』なんて出
来っこないけど私の願いは霸道らしい。

「創造 幻想世界・戦乱の剣」

そうして広がったのは強制的になんでも鎮静化させる空間。分か

る人なら、常時高濃度の雨の炎をばら撒いてると思ってくれてほしいよーぶ。ちなみに大鎌の刃に映る私の姿は、創造らしくほんの右眼に蒼色の光が揺らめいているという変化をしている。

なんでこんな能力なのか分からないし、詠唱的にもう一個何かありそうな力だけど、それでもクトウルフの動きが少し遅くなり雰囲気も若干落ち着いた感じがする。ただしノーダメージ。ノーダメージ!! 「やるしか、無さそうだなあ…残ってる高威力の魔法、ほとんど近距離用しか無いけど」

はあ…とため息を吐いた後、覚悟を決めてクトウルフに向かって飛んでいく。

「古の者達により建てられし塔 天廊を守護せし龍よ 幾多の狩人を屠りしその毒にて全てを侵せ！」

一気にクトウルフの上まで上昇した私の周りを、黒紫色の物が取り囲む。語呂が悪いから一部名前を入れ替えててごめんなさい!

「ドゥーム・レディラ 壊毒の流星」

そのままクトウルフへと落下し、私が纏っていた毒が爆発する。絶対に自分には当たらないように私が直撃した辺りは凍りついているのだが、4倍ダメージのせいでパツクリ裂けた部分がそうなった所為で、腕やら触手やらを乱舞させ始めた。

「え、わ、うわっ、ひゃあっ！」

普通なら魔眼の未来視を使って余裕で避けられるのだが、そんな事をした瞬間100%わんわんが襲ってくるから出来ない。鋭角なんてそこら中にあるしね。

「よっ、ほっ、とっ、喰らえ！」

荒ぶる触手とか腕とかを、時折捕食しながら全力で後退していく。なんか段々動きがゆっくりになってくクトウルフを見ると、その、そう、一思いに仕留めてあげた方がいいんじゃないかって思ってたね。

「よいしょっ」

バシヤンと水音を鳴らしながら勢いよく着地する。壁際まで来て、フローも背中の子も生きてるみたいだし、本気でやっても多分大丈夫だよね。

「武器の見た目はどっちかかっていうとフェイトだけど！」

そう言つて私は、鎌の刃を地面に突き刺し腰だめに構える。それと同時に、私の構えた鎌の先と、足元に巨大な銀色の魔法陣が広がり巨大な光球が現れる。

「使い切れずにばら撒いちゃった魔力と、ダンジョンから強奪中の魔力、その全部を自分の所に集めてぶっ放す！」

本当に本当の、最後の切り札って言つたらコレしか無いでしょ。そう思つて練習して、威力があり過ぎて封印してた魔法だけど邪神様だもんね。全力全壊で撃つてもダンジョンが壊れるのは防いでくれるよね？

そう、例えば今私の目の前でドクンドクン脈打つてるコレを解放しても耐えてくれるよね？魔力を集めすぎて地鳴りまで聞こえてきてるけど神様だもんね。

「スターライトオオ、ブレイカアアアツ!!」

ゴウツという音と共に、私の視界が真っ白に染まる。反動でガリガリと後ろに下がつていつちやつて、気をぬくと飛んでいつちやいそう。

「ブレイカー、シュウウウト！」

酷い轟音が響く。自分の魔力も絞り尽くす勢いで撃つこと数秒、段々と光は細く小さくなつていく。そしてその先に残っていたのは……

「もうダメ、つつかれたあ……」

もちろんクトウルフなんて影も形も残つておらず、どこまで続いているのか分からない真っ黒な穴が延々と続いていた。そしていつのまにかリミッターが再びかかつていて、私が使つた魔法も全部解けてしまつていた。

「これでもう再召喚も無いだろうし、回復をまつ——」

(貴女、本当に人?)

「わひゃあっ!?!」

こいつ、頭の中に直接!?! 完全に気を抜いていた時に頭の中に声が響いて、鎌も落として飛び上がってしまう。

「だ、誰!?! どっ?」

(後ろ)

そんな小さい女の子の声の通り振り向くと、フローに乗ったあの虹色の髪の幼女が、その私とは逆のオツドアイでジツと見ていた。

第31話 初めての

(もう1度聞く。貴女が今蒸発させたのは、幾らレプリカとは言え人格。そんな事をした貴女は、人?)

私をまつすぐに見つめながら、虹髪の幼女は私に問いかける。

えっと、一応人間だけどステータスには銀狼族って入ってるから半分くらいは獣人だろうし…

「うん、半人半獣? でも私ってハーフじゃないし」

(獣人も人の範疇)

「なら人だね!」

私はポンと手を叩き言う。そうだよ、私は断じて死神とか魔王だったりはないもん。というか、魔王なんていつたら魔界の王様って事になっちゃやし。

(そう、ならいい)

「何がよかったのかは分からないけど…とりあえず、なんで念話なの?」

私は首を傾げながら言う。はたから見たら、何も喋らない子に話しかけてる可哀想な子に私になっちゃやし。なんて事を思っていると、虹髪の幼女が小さく口を開く。

「%*π*・∞?。&ⅢΦ?」

(今のは『念話って知ってるんだ。分かる?』と言った)

よく分からない言葉の後、ちゃんと念話が届いた。でも何を言ってるのか全く分からなかったし…

「うん、これからも念話でお願い」

(賢明な判断)

うんうんと虹髪の幼女が頷く。って、いい加減この呼び方めんどくさいな。そう思った瞬間、ノイズ混じりの音声が響く。

——じ??ウ件を■たシテいまセン。横造生物・這y or混■完全s you■まで30ビョウ——

「ニヤル子さん……だと」

どうしよう、音声さんにもう頑張らないでいいって言えばいいの

か、目の前に迫る危機に早急にS L Bすればいいのか。慌てて大鎌を拾い上げながら、私はそんな事を考える。

(慌てないで大丈夫。帰ってもらおう)

「へ？」

そんな風に私がワタワタしていると、頭にそんな声が響く。そして今まさに足の触手が見え始めた魔法陣のすぐ下に、また別の魔法陣が展開される。別に私、ダジャレなんて言っていないからね。

「アレは……門？」

(正解)

召喚されて来てる筈のニヤル子さん(本来の姿)が、すぐさま送還されていくのを見てるとなんか……

「さっきまでの私の頑張り、なんだったんだろうなあ……ザメハ使えば全部一瞬で終わったなんて……」

(本来は、すぐに私を起こすのが正解。むしろ、それ以外の方法じゃ攻略不可)

「やっぱりかあ……」

発狂しなかったのは多分どこぞの女神様のお陰せいなんだろうけど、自分でも2度と使わないって決めてた魔法乱発したしね……今、ギクつて音が聞こえた気がする。

そんな事を考えていると、例の幼女がフロアから落ちた。

「っ、大丈夫!? どこかやられたの!？」

(違う)

私が焦って近寄ると、例の幼女のお腹から可愛らしい音が鳴った。

(お腹……すいた)

「あ、うん。でもまだ何か来たら……」

——条件ヲ達s e i。ぷろぐらム停し——

そう考えていると、都合よくそんな声が聞こえてきた。ダンジョンの機能が死んでないからコアIIサンは爆発四散してないみたいだけど、本当にご迷惑をおかけしました。

「えつと……とりあえず卵焼きとか色々あるけど……たべりゆ？」

(あざとい。でもたべりゆ)

なんか今、そう言わないといけないって電波を受信したんだ…断じて私の舌が回らなかつたんじゃないからね！ 違うんだからね！

そんな事を言つて渡しつつ、私もお腹が空いてたので同じものを食べ始めるのだった。因みに卵は市場で売つてたドラゴンの卵だったりする。

◇

「まさか……ストックしておいた料理の半分以上が無くなるなんて……」

(ん、満足。凄く美味しかった)

いや、殆ど表情が変わらないこの子がすつごくいい笑顔になり、美味しく食べてもらえて嬉しいんだけど、食いすぎでしょ……私も。危うくシヨゴスまで料理するところだったよ。

「それは嬉しいんだけど……あなたつて名前なんて言うの？ 名前が無いと呼び辛くて」

お皿や箸とかフォークなどを、全自動食器洗い機に入れながら私は問いかける。

(無い)

「へ、無い？」

真剣な表情でそう言ってくる。えっと、名前が無いってマジなの？ 封印されてたくらいなんだから、もっと何かありそうだと思つてただけど…

(そう、私に名前は無い。種族名じゃ呼ばれたくないから)

「あゝ……なんかごめん」

(それじゃあ、私と契約して)

「契約って何!? 私、魔法少女にはならないよ!？」

目の前のこの子がきゅっぷいってやったら可愛いのは分かるけどソウルジェムになるのは嫌だ。ちよつとわけがわからないよ…

(……私としたことが、何も言つてなかつた)

何かを思い出すようなポーズをした後、そんな声が頭に響いてきた。それに私はガクツとなつてしまふ。

(言い忘れてたけど、私は貴女の精霊)

「精霊？私の？」

(そう、だから呼んだ)

えっと、人が精霊と契約出来るのは稀っていつだったか聞いた記憶があるんだけど…それに私のもって事は専用？ いやいやまさか…

「えっと、色々聞きたい事は有るんだけど…まず、そもそも私って貴女と契約出来るの？」

(条件さえ整えば問題ない)

「条件？」

(長すぎて、喋るのめんどくさい)

「へ？」

そんな声が頭に響いたかと思うと、私はさして体格は変わらないはずなのに押し倒されていた。うわあ何これ、髪の毛くすぐったいってうか、本当に虹色に輝いて見える。何これキレイ。

「あ、あの、何を？」

(こうした方が早い)

次の瞬間には、ほんの数秒前まで話していた顔がすぐ目の前に在った。くつついてた、つまりはキスされてた。

「んん!？」

(動かないで)

そんな言葉が頭に響くと共に、舌が侵入してくる。

これってどこのカンピオーネってうか、なんでいきなりだしこないちぶのひとたちがよろこびそうになってうか頭になにかあついのが入ってきてなんかだんだんへんなきぶんに…

「どう？ 分かった？」

「はえ…ふえ…」

そんな混乱して、顔から湯気を上げてる状態の私に話しかけてくる。って、話しかけてくる？

「しゃべってる？」

「あなたの記憶、見させてもらったから。嬉しかった？ 転生者のイオリ」

「初めて、だったのに…」

今まで、リユート色々さんとかクラネル変態さん達から守り通した物が、こんな所でしかも女の子に……

「気にするの、そこなんだ」

「だって私、一応女の子だもん……」

「大丈夫、私も初めて」

「その割には躊躇なかったよね……」

うう……と涙目になって睨んでみるけど、ご飯を食べてた時と違って一切表情が変わらない。ぐぬぬ……

「効率の問題。それより、契約は分かった？」

「うん、とりあえず大鎌に腕輪を食べさせれば1番早くて安全なんでしょ？ 契約方法は、双方合意の上で名前を付ける」

「正解。それで、契約はする？」

記憶を見られちゃったし、そういう考えになると契約した方がいいんだろうけど……

「私に普通の精霊契約以上のメリットって、何かある？」

「ある。私の力の一部を貴女が使えるようになる事と、貴女がその【七大罪・暴食】のスキルで変わることを防げる」

「え？」

何その絶対危なそうなスキル。そんなの私知らないんだけど、今日の朝にはなかったよ？ ステータスを開いてみると、確かにスキルの欄に【七大罪・暴食】の文字があった。

「さっきクトゥルフを倒したのが原因。まだ影響はないけど、1日もすれば少しずつ変わっていく。あと私と契約すれば、多分地球に帰ることも出来る」

「私にメリットしかない……何か企んでたりしない？」

即座に魔法を使えるように準備しながら、そう私は聞く。正直、私にメリットがありすぎて怪しい。封印されてたくらいなんだから、私を騙して何かをするってこともあり得る。

「誰もいない、名前も呼ばれない中、1人で外を覗くだけの生活なんて、もう嫌」

顔を上げたこの子の目には、涙がたつぷりと湛えられていた。声も

心なしか震えているように感じる。何これ、もう断れる雰囲気じゃないんだけど。

「契約はする、するから泣かないで！」

「うん……」

「それじゃあ、名前を付けるにしても手掛かりが無いときついし…ステータス見せてもらってもいい？」

「じゃないと、どこぞの第四真祖の名前をもじった感じになっちゃいそう。挿絵が金髪…吸血鬼…鍛冶師…ありふれた職業うっ、頭が。」

「構わない」

「そう言つて魔眼を使つてみたステータスは…」

未定

種族 元魔族 神族 精霊 ヨグIIソトース

性別 幼女

年齢 ????歳

職業 ヨグIIソトース・巫女姫・仙人・大精霊・占星術師・霧幻の

魔術師

LV 126

HP 6897 / 6897

MP 10039 / 10039

STR 2687

DEF 2788

AGL 2564

DEX 2045

MIND 3895

INT 5979

LUK 70

《スキル》

職業

ヨグIIソトース LV 189 巫女姫 LV 189

霧幻の魔術師 L V 1 8 1 大精霊 L V 1 7 9
占星術師 L V 1 8 0 仙人 L V 1 8 7
E X

全てを見通す目 無詠唱 M P消費半減

転身 精霊化 叡智 アナザーワールド もう一つの世界

通常

超思考 L V | 魔力精密制御 L V |

H P超速回復 L V 2 5 M P超速回復 L V 2 4

五感超化 L V 2 0 物理超強化 L V 1 5

魔法超強化 L V 1 7 確率大補正 L V 2 5

龍力 L V | 龍鱗 L V | 身体能力超化 L V |

物理大耐性 L V 1 0 魔法大耐性 L V 1 0

状態変化無効 L V | 飢餓大耐性 L V 1 7

痛覚無効 L V |

時空神

海淵魔導 L V 1 6 暗雲魔導 L V 1 5 零度魔導 L V

1 2

颯風魔導 L V 1 0 星光魔導 L V 1 4 龍魔法 L V

1 0

爆炎魔法 L V 4 迅雷魔法 L V 6 怨嗟魔法

L V 1 2

《称号》

彼方なる者・外なる神・案内者・最古なる者

生命長き者・門にして鍵・虚空の門・無名の霧

混沌の媒介・人族の天災・獣人の天災・魔族の天災

龍の天災・精霊の天災・統率者・国落とし・無慈悲

霸王・魔神・戦闘狂・封印されし者・旧魔王

精神崩壊・記憶喪失・幼女・大精霊・大魔王

な、なんかとんでもないステータスだ…でも、記憶喪失って書いてあるし、大丈夫…：…なの、かな？

「私の名前、何？」

「ちよつとまってね」

このキラキラした眼を見ると、とてもそんな事をしたようには見えない。じゃなくて、名前名前…：…うくん。次元…：…霧…：…水滴？

「えつと、ティアア！ ティアア・クラフトで！」

ブルーティアーズとか、どつかの水銀ニートなんて関係してない。してないったら関係してない。

私が腕輪を大鎌に喰わせそう宣言すると、頭の中にダンジョンとは別の声のアナウンスが響く。

—— 大精霊に ティアア・クラフト と命名しました ——

—— ティアア・クラフト との契約を開始します ——

—— ティアア・クラフト とのパスの形成を確認 ——

—— 称号 夢幻の契約者 を入手しました ——

—— 称号 精霊使い を入手しました ——

—— スキル 無限収納 が アナザーワールド もう一つの世界に進化しました ——

—— スキル 次元魔法 が 時空神 に成長しました ——

—— スキル 七大罪・暴食 を共有します ——

……

私の大鎌がピカツと光り、かなりのスキルが成長した。ティアアも満足気な顔をしている。

「これからよろしくね、ティアア！」

「こつちこそよろしく、マスター」

私達は、お互いに小さな手を出してギュツと握り合うのであった。

第32話 何故どうして広い世界の中で

「まあ、何をするにしてもここから出ないとだねー」
「確かに」

勿論、目の前の大穴から出たりする気はない。どこまで続いているのか分からないし、もう疲れちゃった。だから転移だ転移。

「つて、ここはどれくらいの高さの場所なんだろう？ 少なくとも1階層じゃないんだろうけど…」

ある程度自分の場所が分かってないと、長距離の転移は出来ない。正確には出来ないこともないけど、じつちゅーはつく失敗する。

「ここは殆ど最深部。転移は私がやる」

「え、うん、分かった」

私は握ったままのティアの手を、更にギュツと握りしめる。大丈夫、別に16分割には見えてないし紫色のオーラも出てない。そう、私にしてきたちゅーはカンピオーネのと同じ原理、断じてレズウじゃない。

「《銀の門》」

ティアがそう魔法を唱えると共に魔法陣が広がり、ふわっという感覚がして目の前は違う光景になっていた。というか、あの凍りついた部屋の真ん中に転移してきていた。

「なんか、私の転移が雑に思える感じの転移だなあ…」

「当然。年季の差」

「年……年季？」

いや、確かにステータスには？ が4桁付いてたけど…背筋がゾワッてしたから、これ以上の詮索はしないでおく。なんだろう今の寒気、ティアじゃなくて上の方から来たけど……

「まあいつか。とりあえず外に出るとして、ギルドに行つてリユートさん達と合流して……」

「ちよつとまってマスター。その前に私もマスターも着替えないとダメ」

「え？」

そんな事を言われたので、改めて私達の格好を確認する。ティアは私があげたコートだけしか着てなくて、私は艦これなら大破つて感じの服（ボロ切れ）が引っ付いてるくらい……犯罪臭がプンプンする。「これは…捕まるね」

「あたりまえ」

そんな事を言いながら、何時ものように収納の中に手を入れようとするが……そもそも収納の扉自体が開かない。

「あれ？」

何かの間違いかと思つて何度も手を動かしてみるけど、手は何もない空をかくだけで開かない。え、嘘？

「私が元々持つてて、マスターにも共有されたもう一つの世界は、自分だけの異空間を作るスキル。慣れてないところやんと考えないと開かない。私には何も入つてないけど、マスターのは引き継がれてるはず。人も入れる」

「まじで？」

「まじ」

ティアがこくと頷く。何その便利そうで若干不便になつたけど、実はかなりメリツトが上回つてるスキル。

つて、とりあえず着替えないといけないし使つてみるか。

「えつと、じゃあ《もう一つの世界》！」

私がそう言うと、目の前に私より少し大きな半透明の門の様な物が現れ、1人でに開いていく。

凝つてるなあ……と思ひながら、その門を潜るとそこには驚きの光景が広がっていた。

「ふええ……」

「やっぱり、マスターはおかしかった」

門を潜つた先には、真っ白な精神と時の部屋みたいな空間が広がっていた。入つてすぐの所には、結構前に作つたオフトウンとかキツチンとか、魔法書を仕舞つておくための本棚とかが並んでいた。作つた記憶のないクローゼットやらタンスやら食器棚……果てには冷蔵庫モドキまであつて、普通に部屋だった。床は真っ白だけ。

「うん、後でここには畳か木の板でも敷いておこう」
「いやマスター、気にするのはそこじゃない。あつち」

ティアがそう言っつて、遠くを指差している。この床だけが微妙にマッチしてない空間より変な事つて何かあるかな？

「特に何も無いと思うんだけど」

「ちよつとした山くらい積んである魔物を、普通つて言い切るマスターの頭、大丈夫？」

「大丈夫だよ！ それに、鍛冶だつたり調薬だつたり料理だつたりに使うから、そんなにおかしくは……」

「それでもおかしい」

うう……バツサリと切り捨てられてしまった。これでダメなら、これ以外にも大鎌に結構食べさせてた分は言えないし……

「それに、武器防具の量もおかしい」

「そうなの？」

「マスターの記憶にある、自転車の立体駐車場みたいになつてるのは絶対に作りすぎ」

「これでも結構リユートさんに渡してるのに……」

お店でよくある名品なんて量産出来るんだし、武器を色々合わせて1000個くらいあつてもおかしな事じゃないと思うんだけど。最低でも1日10振りが増やしてるし、防具はそれより少ない上に、未だに槌は音速を超えてないし……

「もういいや、マスター。とりあえず着替えよう？」

「ええ、色々言いたいこと有るのに。まあ着替えるけどさあ」

そう言つて私は、着ていたボロ切れをポイつと投げすてる。それによつて、私の若干白めの肌が露わになる。私もティアも、結局は【謎の白い光】も【謎の白い光】もツルンペターンで、【謎の白い光】に【謎の白い光】が【謎の白い光】したりしてない。

「いやマスター、もうちよつと恥じらいって言うのを……」

「ティアしかないからいいじゃん」

「はあ……」

ティアがそんなため息を吐いている中、ダンスの引き出しをグイッ

と引つ張る。するとそこにはタイムマシンが……なんて事はなく、いつも私が手をつ突っ込んでいた黒い空間が広がっていた。

「あ、ここはいつもと同じなのね」

別にオシヤレとかする必要はあんまり無いし、適当に長袖を……ぶかぶかだけどいいや。たーとるねつくとか言うんだったかな？ コレ。後は長ズボンでも穿いておけばいいか。

うくん、今度ちゃんと丈夫でキレイな服でも作ってみようかなあ……同じ名前の読み方繋がり、かなり前に生命戦維モドキを混ぜた布作ってた筈だし。まあ、今となつちや何処にあるか分からないけど。「わぷっ」

そんな事を思い出しながら服を引つ張り出していると、私の顔に白い布が直撃する。ってこれ、今思い出していたハイパーな布じゃん。

「因みにここだと、考えれば物は取れる」

「何それ便利」

そう言つて振り向くと、学生服のような格好に白いコート、頭には黒いリボンを付けたティアが立っていた。ちよつと待とうか、物凄く見覚えのあるキャラと被ってるんだけど。布はタンスの引き出しの中に押し込んでおく。

「マスターの記憶にあった、ユ〇とアヴロ〇ラを足して2で割ってみた。どう?」

「わ、私のこと食べたりしないよね?」

「……………しない」

「何その怪しい間はあつ!?!」

ちよつと私の貞操がヤバいかもしれない。リユートさんとか思春期のロイドなんかより、よっぽどティアの方が危険じゃないこれ?」

因みにロイドが夜、偶にガサゴソしてるけど見て見なかつたことにしてるよ。まあ、直接私に手を出してきた場合はロイドが氷像になるだけだから問題無いね。

「冗談」

「ほ、本当に冗談だよね?」

「うん」

そ、そうだよね。私は何処ぞの歌いながら戦うオツパイの付いたイケメンとは全然違うもんね。うん、あの中じや私は多分キャロルかエルフナイン。

でもティアの私とは逆のオツドアイを見てると、足して2で割ったって言うのも納得できる気がする。

「そういうえばティアの眼って、凶つたみたいに私と正反対だけど…元から?」

「違う。だってマスターの左眼、元は私の」

「へ?」

「リインネットが、面白半分に急にチェンジした」

「へえ……」

あの女神様、そんな事してたんだ。本人に一切了承なく急に眼をチェンジしてたと。

「ねえティア、壊毒撒き散らせば神様も大ダメージにはなるよね?」

「なる、むしろ死ぬる。けど、私は別に怒ってない」

「そうなの?」

あれ? 確か外を覗いてたってさっき言ってたけど…そのための眼を取られたら、普通怒るんじゃないの?

「だって、その眼が無かったら呼べなかった。その点は感謝」

「それ以外は?」

「むかつく」

多少ムツとしたティアがそう言う。それならもう、やる事は決まったね。とりあえずティアに対して謝ってもらわないと。

「確か聖剣^{カリヨン}って、神様でも余裕で斬れた気がするなあーそれに壊毒は神様にも効くみたいだしねー」

「私がいるから、場所はすぐに特定できる」

「どうしよつかない」

ティアとふざけ半分でそんな事を言っていると、懐かしいポンという破裂音がして、1枚の紙切れが落ちてきた。あ、場所とか関係無いのね。

|||||

|| || || || ||

「ごめんなさい出来心だったんです。あの毒は私程度じゃ本当にシヤレにならないのでやめて下さい謝りますから。ティアさん本当にすみませんでした。」

|| || || || ||

「イエーイ」

とりあえずティアとハイタッチする。いつものふざけた調子じゃなくって、こんなに真面目な感じの手紙が降ってくるとは思わなかった。

「ねえティア、あの壊毒ってそんなに危険物？」

「リインネートが可哀想に思える」

とりあえず神様すみませんでした。本当に大変な物を送り込もうとしてたみたいです。…神様なんだから、心くらい読めるよね？

「色々あったけど、とーしよの目的だった着替えも終わったしダンジョン出よつか」

「異論はない」

そう言って私は《^{アナザー}1つの世界》から出て、ダンジョンの出口に向かって歩いていった。

第33話 私は抱き枕じゃないよ

私が凍りつかせた部屋から出て、多少ティアとお話をしながら歩いていくと、ほんの数分でダンジョンの出口が見えてきた。

「なんか、ひっさしぶりにダンジョンの外に出る気がする……」

「マスター、それなら私は初めて」

「あ、そっか」

そんな事を話しながらダンジョンを出ると、そこには結構崩れた街並みとそれを直して人達、眼を丸くしたギルドの受付嬢の人が待っていた。私とロイドがここに来た時の人とは別人だ。

「ひっ、死が……」

「ふえ？」

「いえ、Sランク冒険者の『流星群』さんですね。その隣にいる子は貴女の関係者でしょうか？」

「そう、私はマスターの精霊」

「うくん、もうちよつと笑った方が良いんじゃないの？こんな感じで」
「むり」

ティアがあまりにも無表情だからほっぺをムニムニ引っ張ってみただけで、無理らしい。ご飯食べてた時みたいに笑っていれば良いと思うんだけど……ティアのほっぺニプニプしてて楽しい。

「むにむに……」

「ますはー、やめへ」

そんな事をしている私達を、受付嬢の人がなんかすつごく微笑ましいものを見る目で見ている。

「そろそろ良いでしょうか？」

「え、あ、すみません」

「だから言ったのに」

ティアがムツとした雰囲気と言ってくる。でも仕方ないじゃん、気持ちよかったしムニムニするの楽しかったんだもん。

「確かあなたは治癒の魔法が使えましたよね？なら、怪我人の集まってるギルドに行ってもらえますか？」

「はーいー！」

「はい」

リユートさん達も多分ギルドにいるだろうし、元気よく返事して私達はギルドに向かって歩いて行く。怒ってないといいなあ…リユートさん達。

「それにしても、なんで街が壊れてるんだろう？ ダンジョンからモンスターでも出てきたのかな？」

「気づいて、ないの？」

ティアが驚いた目で私を見てくる。あれ？ なんか私おかしなこと言ったかな？ そんな目で見られる理由なんてないと思うんだけど？

「何を？」

「はあ…マスターの魔法が原因」

「へ？ なんの？」

「街が壊れた原因」

「はい!？」

え、嘘でしょ？ だって私は…：…そういえば流星落したりリスターライトブレイカーしたり、壊毒撒き散らしたり色々やってたや。それに、クトウルフも少なからずドタバタしてたし。

「そりゃあ壊れもするか。暴れすぎたもんなあ…」

「次からは、自重して」

「もう次なんて起きないことを祈るよ」

絶対人には使わないって決めてた魔法を乱発してようやく倒せたんだし、もう二度と戦ったりしたくはないかな。神格を倒せる方が異常らしいんだけど。

「正直、周りへの被害なんて何も考えてる余裕もなかったし、もう一回やれって言われても」

「マスター、右」

「勝てる気が…え、右？」

話してる最中に急にそんな事を言われたので、私はちよつと足を止めてしまった。そして右側を向こうとした瞬間、隣の道から飛び出し

てきた木箱と思いつきりぶつかってしまった。

「ふぎゆっ」

「すみません!」

ちよつとだけ吹き飛ばされてしまった私は、文句を言っただけでやろうと思っただけで埃を払いながら立ち上がる。私にぶつかつた人はどうやら少年で、右手は義手になってるみたいだった。つ、この義手って……

「なんだロイドか。ただいまー」

「すみません、苦情はコレを……イオリ?」

木箱の向こうのロイドと目が合う。なんか物凄く久しぶりに会った気がするなあなんて思っている、ロイドが手に抱えていた木箱を取り落としてしまった。中からガラスが割れるような音がして、木箱から何かが染み出してくる。

「えつと、それってポーションじゃなむぐつ」

ポーションとかだったら一大事だから大丈夫なのか聞こうと思つたら、言い切る前に私は抱きしめられていた。それはもうがっしりと。

「ぶはっ、いきなり何するのきロイド!」

「本物のイオリだよな? 偽物だったり幽霊だったりしないよな!」

「私の事をギユってしてるのに分からないとか言ったら、流石の私も怒っちゃうよ?」

こんなに密着してる状態で別人だとか言われたら、今まで私とどう接してたんだって思っちゃう。っていうか、何時まで私を抱きしめてるつもりなんだろう? そろそろ苦しくなってきたんだけど。

「マスターは、そう簡単には渡さない」

そう思った次の瞬間、私はティアに抱きつかれていた。さっきのロイドと違っていい匂いではあるんだけど……まあいいや。もしかしてティアって、心読めてたりするのかな?」

「マスターのなら、少しは」

「まさかの事実だったというね」

全く、これだから神様ってやつは……もしかしたら、神様の名前の職業を大量に持つてる私も読心が出来るようになる可能性が微レ存

?

「本物でいいんだよな……よかった……」

「おい小僧！ 何やってんだ！」

そんなくだらない事を考えている時に、とてもホツとしている様子のロイドに大きな怒声が浴びせられる。それに私もロイドも体を縮こまらせてしまったのに、一切反応しなかったティアにはなぜか負けた気がする。

「全く、ポーシオンを全部無駄に……ふむ、再会出来たのか。よかったじゃねえか」

「はいっ！」

そして近くに歩いてきたおじさんに、ロイドが元気よく返事をする。やっぱりポーシオン入ってたんだ、あの木箱。

「あのあの、すみませんおじさん。ロイドがポーシオンダメにしちやったのって、私とぶつかったのが理由なんです、ダメにしちやった分のポーシオンなら私が出しますし回復魔法も使えるんで余り怒らないでくれませんか？」

「ああ、元々厳しく注意するくらいいしかしねえよ。ははっ……おじさんか……そうか、俺はおじさんか……」

おじさんの雰囲気、目に見えて暗くなる。でもおじさん以外にいい感じの呼び方ないんだもん。おじちゃんなら良かったのかな？

「マスター、どっちでも変わらない」

「ええ、じゃあティアも何かいい呼び方考えてよ」

「……おじちゃん」

「もうあんまり、おじちゃんおじちゃん言わないでくれ……おじちゃんの精神が持たねえよ」

そんな事があって、私達はおじちゃんに連れられてギルドに向かっていた。

第34話 ルガーランスは魔法の杖

「どうしたのロイド？ さつきから元気ないみたいだけど……」

「あ、いや、元気ない訳じゃないんだが……」

色々なところにヒビが見えていたりする街並みを見ながら、隣を歩いているロイドに聞く。どうにも私と会ってから元気が無いみたいに見てる。顔も赤いし熱でもあるんじゃないかな？

「マスター、ロイドは照れてる」

「ちよっ、ななな何言ってるんだお前！」

「ふっ、凶星。あと私はティア、お前なんて名前じゃない」

「ぐっ」

ティアが心なしかドヤアつとした顔でそんな事を言う。ティアが楽しそうに何より、代わりにロイドの顔が凄いいことになってるけど。

「それにしても、本当に『流星群』がこんな年相応のちっこい子どもだとはな」

「むう……これでも気にしてるんですよ？ 運動のし過ぎで身長が伸びなくなったらどうしようとか！」

楽しそうなロイドとティアを見ている中、話しかけてきたおじちゃんにそう答える。最近トラブルに巻き込まれるたびに普通じゃありえない量の運動をしてるし、その他にも毎日鍛治はしてるし時折模擬戦したりフローと鬼ごっこしてたりで、運動し過ぎなんじゃないかなって思うんだ。昔、小さい頃から運動し過ぎると背が伸びなくなるって聞いたことがある気がするし心配なんだよね。

「はははっ！ そんな事は大丈夫だ。嬢ちゃんの背が伸びるのはまだまだこれからだよ」

「うにやっ、頭がしがししないで下さいよ！ 髪ぐちやぐちやになっちゃいますー！」

海水っぽい水とか吸って乾いたせいで、ゴワゴワだった髪をどうにか整えたんだから……私って髪長いから面倒くさいんだよもう。

「そういえばお前達が戻ってきたって事は、地下にいた怪物は倒した

のか?」

「はい! ティアと一緒に肉片一つ残さず消しとばしてきました!

ねーティアー?」

「勿論。いや、マスターはおかしかった」

「確かお前って鍛冶師だったよな……」

そんな事を話しながら到着したギルドには、かなりの量の怪我人が横たわっていた。軽めの怪我の人から、建物の倒壊に巻き込まれたのか血が滲む包帯をしている人まで様々だ。そしてその中で、受付嬢の人だったり女の人が忙しく動き回っている。

「あれ? なんで男の人がいないんですか?」

「おい小僧、看病されるならむさい男と綺麗な女どっちがいい?」

そう私がふと思った事を口にする、おじちゃんがロイドにそう尋ねる。うーん、それは一部の人を除けば多分……

「多分、男子なら満場一致で女の人だと思います……」

「そういう訳だ」

「アツハイ」

なんか凄く納得できる話だった。確かに看病してくれるのが女の方がすぐ元気になりそうだね。元の私……いや、僕? とかアストルフオみたいなの男の娘ならまた話は別なんだろうけど。いや、アストルフオは更に別か。

「とりあえず全体に回復使っておくかー」

「マスター、折角だし」

「へ?」

そう言って私が杖を引つ張り出した時、ティアが私の服の裾をクイクイと引つ張りながら、逆の手でロイドの背負っている双剣を指差す。えっと……うん、そういう事ね!

「ねえロイド、ちよつと剣貸して?」

「え? 別にいいけど何に使うんだ? まさか止めを……」

「私は人殺しとか人死には大っ嫌いな普通の女の子だよ!」

自分の事を特に抵抗なく女の子って言ったことに若干驚きながら、杖を適当に仕舞う。受け取った双剣を合体させてルガーランス状態

に変える。よし、後は手元にそれっぽい結晶を作って…

「波動に揺れる大気、その風の腕で傷つける命を癒せ！ ケアルジャ！」

私が掲げたルガーランス（仮）から、緑と黄色の混じった光が立ち上り周りに降り注いでいく。仕方ないじゃん、ベホマラーの詠唱なんて知らないんだもん。

「よし、これで多分こちら辺の人の怪我は全快したと思います！」

結晶をパラパラと落としながら、ルガーランスを適当に地面突き立てて私は言う。自分でも手応えはあったし、それを領けるように怪我をしてた人たちの中にざわめきが広がっていく。

「お疲れ、マスター」

「いや、全然疲れてないよ？」

確認はしてないけど、レベルが上がったのか前と比べて身体が軽い気がする、あと魔法が使いやすくなった。今ならもしかしたら鍛冶作業とかも上手くいきそう。

「なあ、嬢ちゃんって確か鍛冶師Sランクの冒険者だったよな？」

さっきのはその武器の力か？」

「いえ、普通に私が魔法を使っただけですけど……あ、ポーズは昔見た事のある人のを真似しました！」

「おじちゃん、頭痛くなってきたぜ……」

おじちゃんが頭を押さえて大きくため息を吐く。悪いことしちゃったなあ、でもいいことをしたのには間違いないんだし……あれ？ 結局私がやったのはどっちだったんだろう？

「イオリはこんな感じで無茶苦茶やるので、気にしたら負けですよサブマスター」

「サブマスター？」

くだらない事を考えている中、ロイドの言ったサブマスターっていう単語を繰り返してしまう。えっと、もしかしなくてもこのおじちゃん……

「そうだよ、おじちゃんはここのサブマスターだ。もうおじちゃんって呼んでくれて構わないけどな」

「はい、分かりました！」

んー……でも、今まで通った街のギルドだとかこういう時って大体ギルドマスターが外に出てどうにかしてただけけど……

「ギルドマスターは？」

「上の部屋で延々と書類仕事だな。街の被害の計算やらなんやらでこつちまで手は回せないそうだな」

私が疑問に感じていた事を、私が言う前にティアが聞いた。いつの間にか心を読まれてるって、地味に怖いね。今度から何か対策しないと……いつか読んだ奇異太郎みたいにすれば出来るのかな？

「納得」

「凄い髪色の嬢ちゃんは、もう少し表情を出した方がいいと思うぜ」

サブマスの人もやっぱり同意見だった。もうちよつと表情出した方がいいと思うんだよなあ……凄くいい笑顔でご飯食べてるの見ちゃってるし。

「あ、ロイド剣返すよ。貸してくれてありがとね！」

「元々作ってくれたのはイオリだし……その、大丈夫だ」

正直ただ演出の為だけに借りたからお礼を言ったんだけど、やっぱりギョツとしたりする方がいいのかな？ 獣人界の方向から、凄いやを感じてるからやらないけど。

「サブマスター、さっきの無駄に派手な光って何があつたんですか!？」

今度回復と拡散するレーザーが撃てるように改造しようかな？なんて事を考えていると、集まってきた何人かの中からそんな聞き慣れた声が聞こえた。

「リユートさーん、ただいま〜！ 転移とか大丈夫だった〜？」

「すみません、もう全部納得しました。イオリさんが迷惑をかけていませんでしたか？」

「迷惑どころか、感謝したいところだ。今さっき、ここの怪我人を治療してくれたからな」

手を振ってる私を見たリユートさんは、一瞬で諦めたような顔になつておじちゃんに迷惑をかけてなかったか聞き始めた。

全くもう、私だって偶には普通に良いことするんだよ？

第35話 第4章エピローグ

「じゃあ改めて。ただいま！ リュートさん、レーナさん！ あとロイドも」

「私は、初めまして？」

非常事態のせいで大部屋一つになった宿の部屋で、改めてティアと一緒に私は言う。挨拶は絶対の礼儀、古事記にもそう書かれてる。

「おかえりなさいイオリちゃん。目が覚めたらイオリちゃん達だけ居なくて、すっごい心配したんだからね！」

さつきは別行動をしていたらしくいなかったけど、少し前に合流したレーナさんが私にそう言ってくる。

「ごめんなさい…でも、私もよく分からないうちに魔法が失敗してて…」

「でももへ、へまち？ も無いんだよ！」

「それはへちまだと思うな、レーナさん」

そもそも使い方ってこれで合ってたっけ？ なんて事を考えながら、向こうは向こうで何か話しているリュートさん達の方に耳を傾ける。私は有無を言わずレーナさんの前に引きずり出されたからね。

「正に、母から怒られる子どもの凶」

「イオリさんの精霊…ティアさんでいいのかな？ 中々言うじやん」

「俺もあんな風に怒られてたなあ…」

……一瞬で打ち解けてた件。なんでだろう、やっぱり精霊だから受け入れやすかったとか？

「もう！ 聞いているの？ イオリちゃん」

「ふえ？」

「可愛く言ってもダメです！ ううく……これからは心配かけるような事をしないでよね！」

そう言ってレーナさんが私をギュツと抱きしめてくる。本日3回目抱き枕状態だけど、前二回と違って胸の奥が暖かいつていうか安心するっていうか、ふえ……涙でてきた。

「なあ、あれは俺の時みたく取り返さなくていいのか？」

「別にいい、マスターが嫌がってないから」

「俺の時は嫌だったのか……」

「息が苦しかったって」

涙で視界が滲んでくる。なんか緊張がもう解けてきて、今まで我慢していた色々なのか溢れてきそう……我慢がそろそろ限界になってきた。

「それに、マスターは頑張りすぎ。そろそろ休んでもらいたい」

「今は我慢はしなくていいんだよ？ イオリちゃん」

そう聞こえたティアの言葉と、背中をポンポンとしながら耳元でレーナさんの言葉が聞こえた辺りから、私の記憶はしばらく飛ぶことになった。

◇

「恥ずかしい……引き籠りたい。一日中ハンマー振ってたい……」

抱き締められて安心して、そんでもって疲れるまで泣くなんて……一応これでも私15歳ではあったのに、これじゃあ本当に小さい子じゃん。

レーナさんから離れて、体育座りになりながら言う。

「マスター、話すことがあるんでしょ。そんな事してる暇は無い」

「うん、そうなんだけど……」

「大丈夫、転生者にはよくあることだよ」

リユートさんが優しくそう言うってくる。肩をポンとされるけど、その優しさが今は痛いよ……

「てん、生者？」

「そうだよ……ロイドには言っただけじゃなかったし信じられないと思うけど、私は転生者って人種だよ。元々は15歳のね」

ずーんとしたテンションのまま投げやりと言う。まあ、今さっきの行動を見られてたんだし信じてはもらえないだろうけどね。はあ……なんでこうも感情の抑えが利かなくなっちゃったんだろう。

「まあ信じられないけど、リユートさんにイオリが言うんならそうなんだろうな。でも結局イオリはイオリだろう？」

予想外の言葉だかなり嬉しいんだけど、別にトウクってなら

なかった。多分これが最後の砦なんだろうなーなんて事を考えている内に、少しは気力も回復した。

「よし、復活！」

「イオリちゃん、随分復活早いね……」

バーンって感じで立ち上がると、レーナさんが苦笑いでそう言ってくる。ふんだ、もうこれくらいじゃへこたれないもんね！

「とりあえずリユートさん、この街に来る前に私が言ってた予定って覚えてる？」

「確かこの後は人間界に戻るって話だったよね」

「そうになると、私達とは一旦お別れだね」

レーナさんが寂しそうにそう言う。そっか……人間界に行くってなると一旦2人とはお別れか…一応また3人旅にはなるけど、やっぱり寂しくなるなあ。

「だけど、ティアと契約したお陰で次元魔法がカンストしたっぽくてね……」

「ヨグ||ソトースらしいから、まあ納得かな。他にも色々引っ付いてきてそうなのと、僕達のSAN値が減らないか心配だけど」

「この姿なら大丈夫」

「らしいよ？」

「アツハイ」

この姿ならって事は、ティアはあと2回は変身を残してそう。まあ、私何が言いたいのかというのと。

「レーナさんはリユートさんの故郷、行ってみたいと思わない？ついでに私の故郷でもあるけど」

「え？ それは行ってみたいけど、もう戻れないってリユートくんが言ってたような」

「ロイドは？」

「そりや行ってみたいけど……」

よし、それなら満場一致だね。リユートさん？レーナさんが行ってみたいって言ってる時点で付いてくるから問題はない、ないっつらな

「つまり何が言いたいのかっていうとね」

みんなからの注目を集める中、一旦深く息を吸ってからはつきりと告げる。

「地球に転移出来るっぽいから最後に……じゃないか、記念にみんなで行ってみない？ 勿論街がある程度落ち着いてからだけど」

「へ？ あ、マジ？」

「まじめもまじめ、超まじめ。生まれた時から？」

「大まじめ」

ティアに振ったら、私の記憶を見たって言ってたおかげか合わせてくれた。

「とりあえず、街が落ち着くまでには1週間は確実に必要だよね。それに、そんな簡単に行く物でもないでしょ？」

「うん、バカみたいなMPを使うらしいからダンジョンで充電してこないとね」

それにレーナさんはいいとして、ロイドはまず義手を隠せるようにしないとだめだし、じゅーとーほーがあるから私のこの鎌も……あ、もう仕舞って大丈夫か。

そんなこんなで、ここにいるみんなで地球に行ってみる事に決まったのであった。

……滅んだりゲートが開いたりしたらどうよう。

第4章 完

第4章登場人物紹介

イオリ・キリノ

種族 人族 銀狼族

性別 幼女

年齢 7

職業 ヘーパイストス・ドヴェルグ・アルケミスト・スクナヒコナ・ウルカヌス

LV 132

HP 2141 / 2141 +0 / 13200

MP 6246 / 6246 +0 / 99999

STR 1622

DEF 1580

AGL 1574

DEX 25850

MIND 1491

INT 6225

LUK 72

《戦技》創造 幻想世界・戦乱の剣
《スキル》

職業

ヘーパイストス LV 161 ドヴェルグ LV 154

アルケミスト LV 100 スクナヒコナ LV 137

ウルカヌス LV 82

EX

家事万能 無詠唱 情報の魔眼 変身
MP消費半減 武芸者の卵 生産者の魂

アナーザーワールド
もう一つの世界 七大罪・暴食 叡智

通常

演算補助 L V 15 魔力精密制御 L V 5

HP高速回復 L V 18 MP高速回復 L V 20

死神 L V 29 身体能力超化 L V 26

龍鱗 L V | | 龍力 L V | | 五感超化 L V 21

韋駄天 L V 9

痛覚大耐性 L V 21 物理耐性 L V 18

魔法耐性 L V 17 状態変化無効 L V | |

次元神

劫火魔導 L V 9 豊穰魔導 L V 12 海淵魔導 L V

8

暴風魔法 L V 19 神聖魔法 L V 18 漆黑魔法 L V

21

植物魔法 L V 15 氷結魔法 L V 17 雷光魔法 L V

14

生活魔法 L V | |

《称号》

NEW!!

ユニークキラー・Sランクの殺戮者

生産者の魂・龍の殺戮者・魔導使い

鍛冶：師？・ダンジョン踏破者・厄災

ダンジョン破壊者・機械鎧技師・勇者

モンスターな狩り人・むしろモンスター

霧幻の契約者・精霊使い・魔王

魔力の化け物・魔人・重度厨二病

《加護》

世界神の加護++ 鍛冶神の加護++

魔神の加護++ (MP増加)

《装備》

武器・魔型聖鎌・ヴィターエトモルテ
鎌剣ブリジンガー +29・緋色之拵声刀 +29

鍵の杖 +29・オリハルコンナイフ +28
オリハルコンの針 +20
防具・アインツベルン風コート+29
隴水晶の胸当て+29・隴水晶の肩当て+29 ×4

契約の腕輪・手編みのマフラー +30
白の長ズボン+29・隴水晶の腕甲 +29
隴水晶の脚甲 +29 技巧の指貫+25

変形可能グラシユ+30

|| || ||

名前 イオリ・キリノ

性別 女

年齢 7

生まれ 不明

ランク S

ゴールド 238,650

|| || ||

銀髪ポニテ、オツドアイなTS少女。精神年齢退行が酷くなって来ているが、こんな中でも主人公。

半年間の旅は、行く先々でトラブルに巻き込まれるという転生者特有のスキルを常時発動させ、SランクやSSランクの魔物を狩りまくる事になっていた。

完全に自重がなくなったせいで、余裕で即死技をばら撒けるようになった。が、一応自分の中で『人には絶対に使わない』と決めているらしい。果たしてそれは意味があるのだろうか？

天之狭霧神 L V 1 大精霊 L V 1 7 9
占星術師 L V 1 8 0 仙人 L V 1 8 7
E X

全てを見通す目 無詠唱 M P消費半減
転身 精霊化 叡智 アナザーワールド もう一つの世界
七大罪・暴食
通常

超思考 L V | 魔力精密制御 L V |
H P超速回復 L V 2 5 M P超速回復 L V 2 4
五感超化 L V 2 0 物理超強化 L V 1 5

魔法超強化 L V 1 7 確率補正《大》 L V 9

龍力 L V | 龍鱗 L V | 身体能力超化 L V |

物理大耐性 L V 2 5 魔法大耐性 L V 2 5

状態変化無効 L V | 飢餓大耐性 L V 1 7

痛覚無効 L V |

時空神

海淵魔導 L V 1 6 暗雲魔導 L V 1 5 零度魔導 L V

1 2

颯風魔導 L V 1 0 星光魔導 L V 1 4 龍魔法 L V

1 0

爆炎魔法 L V 4 迅雷魔法 L V 6 怨嗟魔法 L V 1

2

《称号》

N E W !!

イオリの契約者・転生者の契約者

天之狭霧神・境界線の守護者

《装備》

武器・無し

防具・ただの白衣 + 5・ワイシャツ《白》 + 7

紺のブレザー + 9・黒のリボン + 1 5

チエックのスカート + 8・黒のニーソ + 8
焦げ茶のシューズ + 5

金髪に見える虹髪、イオリと逆配置のオッドアイを持つイオリの精霊。今章初登場のキャラで、過去にトンデモない事を起こしていたようだが、長すぎる封印生活のせいでその記憶を失くしている。

イオリの記憶を覗いたせいで、イオリのノリに合わせられる数少ない人物の1人となった。契約を結んだ瞬間、長年成長していた職業が進化した。それもあってか、イオリと契約した事は後悔してないが反省はしてるとの事。格好は、某ありふれた感じのユエさんとどこぞの第四真祖のアヴローラさんを足して二で割った感じ。

イオリとHPの保管幅が違うのは、種族の違いとの事。

《叡智》：鑑定・情報系のスキルの最上位。効果はパッシヴなので、所持しているだけで頭の回転が異常に良くなる。違う言語を話せるようになり、片目は強制的に魔眼となるので厨二度が一気に上昇する。「マスターは、やっぱりおかしい。けど、それよりここはどこ？私に分からない場所があるなんて」

フロア

前章でイオリがきやぶたあした幼龍。イオリを乗せて飛んだり、主にサポートをこなしていた。最近はイオリと追いかっこ（空中）で随分と機嫌よく遊んでいる。

クトウルフ戦では、イオリの攻撃の余波を延々と躲し続けていた。

リユート・カンザキ

種族 獣人（獅子族）

性別 男

年齢 16

職業 王者・剣王・盗賊・シューター（空き1）

L V 104

HP 1988 / 1988
 MP 2647 / 2647
 STR 645
 DEF 728
 AGI 946
 DEX 769
 MIND 1264
 INT 2911
 LUK 70

《精霊特性》光

《精霊術》光の牙・光曲幻影・閃光転身

《スキル》

職業

王者 LV 112 剣王 LV 4 盗賊 LV 52

シューター LV 8

EX

王の財宝 獣化 超解析

通常

鷹の眼 LV 18 無音 LV | 狙撃 LV 1

マルチロツクオン LV 1

剣王 LV 3 小楯術 LV 6 回避術 LV |

身体能力超化 LV 16 五感超化 LV 17

精神汚染大耐性 LV 7 精神攻撃大耐性 LV 6

生活魔法 LV |

《称号》

黄金・智慧者・ヘタレ・襲われた者（意味深）

クトウルフ神話技能・苦労性

《加護》

世界神の加護 + 獣神の加護 + +

《装備》

武器・バスタードソード +29

防具・反魔の龍楯 +25・光の腕輪

内着《黒》+10・オリハルコンの軽鎧+25

オリハルコンの籠手+25・オリハルコンの腰当て+25

ズボン《黒》+10・オリハルコンのグリーブ+25

|| || ||

名前

リユート・カンザキ

性別

男

年齢

16

生まれ

シヤルフ

ランク

S

ゴールド

142, 405, 760

|| || ||

二章で初登場した、黒髪黒眼のライオンの獣人。王の財宝のスキルを持っているが、かなり劣化している。

ダンジョンでクトウルフに遭遇した際は、ものの見事に発狂してしまい、ロリの魅力を延々と語るマシーンと化していた。それは、聞いたイオリを赤面させるナイスな結果をもたらした。イオリとレーナが手を組んだ作戦により、有無を言わずレーナにやられてしまった。

なお、シューターはシューターでもどこぞの池袋のデユラハンの愛馬ではない。

「ダンジョンでスターライトブレイカー…地上が壊れる訳だよ…」

レーナ・アークライト

種族 獣人（黒猫族）

性別 少：女？

年齢 15

職業 侍・料理人・魔法剣士（空き1）

LV 84

HP 1248 / 1248

MP 2465 / 2465 +1500

STR 569

DEF 461

AGL 788

DEX 546

MIND 1504

INT 1721

LUK 62

《精霊特性》鏡

《精霊術》なし

《スキル》

職業

侍 LV 85 料理人 LV | 魔法剣士 LV 77

EX

獣化 一刀両断 料理上手

通常

鷹の眼 LV 16 集中 LV 17 見切り LV 20

戦刀術 LV 18 居合術 LV 19 五感超化 LV 1

3

回避術 LV 19 魔法剣 LV 20 韋駄天 LV 7

七属性魔法 LV 5

光魔法 LV 5 闇魔法 LV 5 生活魔法 LV |

《称号》

NEW!!

リュートの彼女・魔刀使い・肉食系
ガンガンいこうぜ・策士・魔法使い

狂気に耐えし者

《装備》

武器・日本刀 黒金 +26・脇差 魔喰 +20
浄化の包丁 +22
防具・藍染の着物 +25・反射の腕輪
朧水晶の胸当て +29・龍鱗仕込みの袴 +25
対魔のグローブ +25・吸魔のアンクレット +25
保護の足袋 +29・韋駄天の草履 +25

|| ||

名前

レーナ・アークライト

性別

女

年齢

15

生まれ

アルフ

ランク

A

ゴールド 1, 186, 150

|| ||

二章で初登場した、黒髪黒眼の黒猫と黒尽くしの獣人。イオリと手を組んでリユートを逃げられないようにし、襲って美味しく頂くというなんとも凄いいことを起こした。強い。

クトウルフ遭遇時、イオリとレーナだけが無事だったのはイオリが自分と同等の装備をレーナに優先して回していたこと、精霊の特性などが噛み合った幸運である。

「リユートくん、イオリちゃんが胃薬とポーション置いてったけど…飲む?」

ロイド

種族 人族 (偽・狐人族)

性別 男

年齢 13
職業 剣士・軽業師・魔法使い

LV 75

HP 912 / 912

MP 1401 / 1401

STR 728

DEF 654

AGL 714

DEX 542

MIND 621

INT 431

LUK 52

《スキル》

職業

剣士 LV 75 軽業師 LV 62 魔法使い LV 1

通常

夜目 LV 6 鑑定 LV 9 隠蔽 LV 7

魔力操作 LV 1

二刀流 LV 7 体術 LV 6 軽業 LV 7

回避術 LV 5 気配感知 LV 5

身体能力強化 LV 4 韋駄天 LV 5

旋風魔法 LV 8 生活魔法 LV |

《称号》

剣士・二刀流・アクロバット・風使い

軽業師・機械鎧の少年・恋慕の少年

一般冒険者・金持ち・真面目・照れ屋

クトゥルフ神話技能

《装備》

武器・シャイニー☆ハーフランス +28

スマイリー♡ハーフランス +28

防具・浪漫式義手 +25・緑狐の腕輪

白いマフラー +17・革グローブ《右》+16
アームガード N i c h t +26・レッグガード S e i n +26

フェストウムアーマー +26

|| ||

名前 ロイド

性別 男

年齢 13

生まれ エモフ

ランク A

ゴールド 2, 241, 820

|| ||

第1章初登場の、イオリに突っかかってきた薄緑の短髪少年キャラ。再登場したが、登場の仕方が敵を引っ張ってくるという若干迷惑な感じだった。

その後、気が抜けていたイオリを洗脳された冒険者達から庇い、右腕の肘から先を斬り飛ばされてしまう。が、その後すぐに浪漫を詰め込まれた腕になって復活した。その為常時義手のステータス上昇効果があり、イオリと打ち合えるくらいの強さになっている。

装備品は、大体イオリが冗談半分で作った物だが、やはり性能はキチガイ。色は装備するにあたってきちんと白系に統一されている。程のいい実験d……。クトウルフ遭遇時は、好奇心でクトウルフ本体を見た為一時的狂気に陥ってしまった。

なんだかねで何回もイオリに助けられているため、イオリの事を好きになつてる節がある。

「えっと、その。イオリが無事に戻ってきて本当に良かったです」

アシッドヒュドラ

4章冒頭で、イオりに狩られたSSランクの魔物。ヒュドラらしい猛毒の霧、水と炎のブレスなどバイ能力満載だったのだが、イオりにすんなりと狩られた。

黒光りする巨大なカブトムシ

1個目のダンジョンで、ロイドが1人で戦っていた魔物。イオリによるとSくSSランクの魔物だったのだが、特に難なく素材にされた。

神話生物の皆様方

テケリ・リ様：初登場時はイオリ達に狂気を与えたが、その後は超重力砲&シャイニー☆ビームやイオリの大魔法に巻き込まれ退場。

インスマス様：浸食魚雷&ビーム、イオリの大魔法に巻き込まれ退場。

ムナガラー&ダゴン様：方やイオリの魔法で腐り落とされ、方や大魔法を生き残ったもののクトウルフに踏み潰されて退場。

クトウルフ様：初登場時、眼と耳を塞いでいたレーナと、イオリを除いた全員を狂気に落とした邪神様。理想送りで一度退場後、すぐに再召喚された。が、イオリの放った壊毒を食らったのち、スターライトブレイカーで即退場した。

ニヤル様：遊びに来た瞬間強制的に退場させられた。

ダンジョンコアIIサン

今章最大の被害者で不運枠。一度目のダンジョンのコアはイオリちゃんに捕獲され材料となり、二度目のダンジョンのコアはダンジョンを死ぬ程壊されたり消しとばされたり、現在進行形で電池にされる。もう泣いてもいいと思う。

そして、何故か一番読者の皆様方から人気を獲得していたように思える。多分人気投票やったは3位にまでは確実に入るんじゃないかな？（白目）

第5章 平和溢れる地球

第1話 ぷろろーぐ

微睡みの中、コン、コン、コンと私が鍛冶をする時とは違った、ハンマーで何かを叩く音が外から聞こえてくる。

春先の陽気とはまた違った、けれど丁度良く私を眠りに誘っていてその音が私を再び眠りの世界へ誘っていく。

「んみゅう……」

冬の寒さも相まって、起きようなんて気はどこかに吹き飛ばしまい同じ布団の中に居るティアにギュツと抱きつく。やっぱり冬場は湯たんぽとか、人肌の温もりがあると気持ちいいよね……

「……まふ……はー?」

それでティアが起きかけてしまったが、結局私が抱きついてしまっている所為で諦めたらしく、そのまま私と一緒に寝息を立て始めた。

束の間、すう……すう……という寝息と外から聞こえてくるハンマーの音が響くだけの静かな空間が形成される。

完全に眠りに落ちるまでの数瞬の間に、こんな幸せな瞬間が続けばいいなあなんて思ったけれど、私は一つ失念していたことがあった。そう、ここは今までの部屋と違ってみんなと一緒に泊まっている大部屋なのだという事を。

「イオリさん、それにティアさんも起きないの? うわ、冷た」

リユートさんが私たちをおこそーと近よってきたけど、寝る前に張った私の結界に触ったみたいで、多分触った場所に霜が降りるくらい寒さが一瞬で襲ったと思う。効果のたいしょーは異性だから、レーナさんがきたらおしまいだけど。

「もうたべられにやい……」

「……たこやき」

「ダメみたいですな。レーナー」

「……いんむー」

「やじゅう…」

「本当に起きてないんだよね？」

なんかりゅうとさんのこえがきこえたような気がするけどそんなことはしらない。まどがあいててもこのあつたかいぼしよでねてたいんだー。

「イオリちゃん、ティアちゃんも起きてー？」

レーナさんにゆっさゆっさとゆさぶられる。けどそんなじやたりない、わたしはまだまだねむい…どうせこんなあさはやくにおきてるのなんて、おしごとがある人かひまじんだだけだよお…

「これでも起きないんだ…」

そう、だから毛布をはぎ取られても起きるわけにはいかないんだあー。

「うーん、これで起きないんだつたら…えい！」

「ぴやあああああつ!!」

ほんの数瞬間にそう決めたはずの覚悟は、突如として首元に発生した氷によつて、私の眠気もろとも一瞬で吹き飛ばされたのであつた。

◇

「それにしても、あれから1週間でここまで直つちやうなんてね」「驚き」

パジャマから着替え終わった後、日光を浴びつつ窓から外をみると8割方元に戻った街が視界に広がる。石畳とかは私も手伝つたりしたけど、それにしても復興が地球基準で考えるとあり得ない程早いと思う。全壊してた建物以外ほぼ完璧に直つてるとどうなのよさ？

「ねえ、僕には何も無しなの？イオリさん達を起こそうとして音響兵器をくらつたんだけど」

「私とティアの無防備な寝顔が料金つて事で」

「正当な料金」

私とティアとでリユートさんにごり押しする。いや、でも、うん？つて言つてるから、あながち考え自体は間違つてないと思う。

レーナさんが後ろでニコニコしてるけど…なんだろう、怖い。

「それでリユートさん、今日って何かする予定ってあった？」

「明日地球行くなって自分で言ってたくせに…準備するんじゃないの？」

はあ…とリユートさんがため息を吐く。けど仕方ないじゃん、まだまだ私もティアも寝起きなんだし。それにここ数日、Sランク冒険者って理由で色々な場所の手伝いに行かされてたんだから、若干日付がくるっても仕方ないと思うんだ。

「今日は、私とリユートくんがデー…街にちきゅうで着てもおかしくないような服を買いに行つて、イオリちゃん達はこすぶれがなんとかって言ってたよ？」

「ん…なんだろう？」

「分からない」

ティアと顔を見合わせて考えてみるけど、ついさっきの事もあつてか全然思い出せない。あんな寝起きドツキりみたいな事をされたら仕方ない、仕方ないったら仕方ないんだもん！

「イオリちゃん、この前貯めるって言ってたMPは？」

「うん、往復2回分くらいは貯めてあるよ」

レーナさんが不意にそんな事を聞いてくる。多分、ちよくちよく対策してた事を総当たりで確認していくんだろうけど、長くなりそうだなあ…。

因みにこれはよくある地球じゃ魔力が無いから魔法が使えないとか、MP消費が多いとかの対策ね。最大限に補正して4人でMP消費が10万とかいうキチガイみたいな数値なんだから、対策は必須だよ。ね。

「髪の色は？僕とレーナ以外、レイヤーさんくらいしかしない髪色だけど」

「幻術で対策可能。ロイドは腕輪を、マスターが弄ってた」
「えへん」

もし目立って職質なんてされた日には、住所不定無職の容疑者としてリユートさんがタイーホされてしまう。だから一応、そこら辺の

対策はちやんとしてるのだ。レイヤーさんと言えば、天上院と行ったコミケは楽しかったなあ。今の私がコスプレするとしたら…艦これの響とかかな？ 艦装作らなきゃ。ん、艦装？ なんだろう、何か忘れてる事があるような…

「リユートさんを殴らないと…」

「なんで!？」

「いや、なんとなく」

爆弾、ロリっ娘、虚ヌー…なんだろう、この喉まで出かかっている関係のなさそうな事。でも何か思い出さないといけない気が…

「ただいま帰りましたー」

そんな事を考えていると、いないなあと思っていたロイドが帰ってきた。そこそこ汗をかいてて双剣を持つてるから、多分素振りとかでもやってたんだと思う。演舞は基本だからいいんだけど、私を誘ってくれたって…寝てたんだった。

「はい、タオルー」

「あ、ありがとう」

とりあえず汗臭くなるのは嫌なので、ロイドに適当に取り出したタオルを投げる。そしてそれをロイドは右手で受け取って…

「思い……でした!」

「作者の知らないドラゴン?」

「いやそうじゃない。さっきまで話があつた事!」

別に私は覚醒してもギザギザしたりはしないし、あんな笑いを誘う走り方は出来ない。というか、このくらいのネタに乗ってくるテイアって本当なんというか凄い。

「違和感無くなつてたけど、ロイドの義手の見た目をどうにかしないと駄目じゃん!」

「おー」

ロイドだけ? が浮かびそうな顔だけど、他の3人はポンと手を叩き納得してる。ティアだけは気の抜けたおーって声を出してたけど。「えっと、ありがとう! リユートさんにレーナさん。引き止めちゃつてゴメンね、ゆつくりデート行つてきていいよ!」

「うん、行ってくるねイオリちゃん！」

「デートかあ…デートだなあ…。行つてきます」

「行つてらっしゃい」

そんなこんなで、私達は明日の準備を始めた。ロイドの義手、手首から先は魔法受け付けないから、ギリギリ触れないレベルで覆うように幻術掛けないと…あくまで普段は手袋と長袖で隠すとしてね？

第2話 地球に転移だー

「ねえねえリユートさん、そういうえぼりリユートさんってどの地方出身なの？」

「ん？」

地球へ転移してみようとする日の朝、ふと気になった事があつたからリユートさんに聞いてみる。ロイド？宿の外で、ティアと一緒に魔法の練習をした。

「えつとね、私は関東出身だし、転移するのも監視カメラとかを考えると学校の屋上辺りが丁度いいだろうし…近くだったら、リユートさんの出身地にも寄れるかなって」

「そういう事ね」

リユートさんが納得したように頷く。多分、訛りが無いような感じがするから東北じゃないとは思うんだけど…

「うーん、僕はこつちの世界に来てから10年は過ぎてるし別に寄らないでいいかな。それよりもイオリさん、まずは自分自身の心配をした方がいいと僕は思うな」

「ほえ？」

いや、こつちに来てから半年は経つちやつてるから心配ではあるし、一応元の僕とは似ても似つかない姿になつちやつてるのは心配だけど…

「だって、イオリさんがイオリさんって証明できるのは記憶だけでしょ？もしかしたら元の人格のコピーをくっ付けられただけかもしれないでしょ？」

「ん…例えばテイルズのルークとか、エスケエプ・スピキドの鶉子様とか…」

後は自分自身を否定されたとかなら、神ないのアイも似たような事になってた気がする。あとはどこぞの蜘蛛子とか。

「また分かりづらいネタを…けど、自分自身に関してはそのう事だね。もしもの話だけど、覚悟はできてるの？」

まあ要するに、自分が自分じゃないかもしれないって話でしょ？

それって凄いやな事だしすごい怖い事だけど……そういう事があるかもしれないって事を知っているのと、知らないままその事実を突きつけられるのとじゃ、ショックに天と地ほど差がある。

「一応は…ね。もしそうなら…うん、多分私を攻略するチャンスなんじゃない？ ティアが許さないだろうけど、案外コロツと言っちゃうかもしれないよ？」

「いや、僕はそういうふざけた事を言ってるんじゃないからね？」

リユートさんが真剣な眼でそう言ってくる。まあ、自分が自分である事を否定された人って大体精神崩壊しそうになっちゃったり、ヤケになっちゃってたからね。

かく言う私も、本当にそんな事になったら耐えられるとは思えないけど…

「まあ、もしそうなら神様に八つ当たりした後、本当の自分を探してみるかな。女の子になった僕はこんななっちゃったよーって」

「いや、イオリさんがそれでいいならいいんだけど…」

「いいんだよそれで。暗い気持ちでやったら、成功する筈の魔法も成功しないだろうしね！」

「そうじゃなくて、向こうの気持ちを考えようよ…」

「あつ」

口ではそう軽く言ってるものの、リユートさんとこんな話をした事で私の心には、ほんの少しだけ嫌な感情が巣食いはじめていた。

◇

宿の大部屋からいきなり消えたら大騒ぎになる。そんな事は分かりきっているのに、今はみんなでダンジョンのシヨゴスがいた部屋に来ている。

「そろそろ時間は大丈夫かな…：準備はいい？」

朝の通勤ラッシュも夕方夜の帰宅ラッシュからも大きくずれた、昼の11時頃。多分この時間ならいきなり屋上に現れても問題ない。校舎内からは屋上の真ん中辺りは見えないし、そんなに魔法のえふえくとも派手じゃないし。

「おうー！」

「大丈夫です」

「問題ないよ」

そう口々に答えるみんなの服装は、それぞれコートとかダウンジャケット（私製）を羽織っていたりしてオシャレな感じけど、ロイドだけはそれっぽいズボンにパーカーと手袋という適当な感じだ。

まあ、年齢的には男子中学生だし多少適当でも問題ないよね？
だって私もそうだったんだもん。私とティアはって？いつも通りイリヤコスと足して二で割ったようなやつだよ。

「よし、それじゃあやるよティア！」
「ん」

目配せして私は大鎌を、ティアは鍵の杖を構える。構えている手は、私は右手でティアは左手だ。

「コネクティブ・ティア！」
「アクセプション」

部屋の中を魔力が嵐のように荒れ狂い、私とティアの思考がリンクする。鎌と杖からそれぞれ蒼とピンクの光が漏れ、実質MPも魔法の処理能力も2倍になった。あ、いや、カップリングシステムっていつても別にレズウなわけじゃないし…うん！バディは大切って事で！

「混沌を支配する赤き闇よ！時の流れを弄ぶ球体をいざ招かん！巡りに巡る終末の灯火をただ繰り返し、溢れ出す雷で空を満たせ！」
「もし過去に跳んだりしたら、ミステイクイオリって呼ぶ事にするよ…」

リユートさんのそんな言葉に、お好きにどうぞって思いながら詠唱を続ける。静かだなんて思ったら、レーナさんとロイドはありえないレベルで渦巻く魔力に呆気に取られてるみたい。

「黒を歩む者、塵を踏む者！罪深きその忌み名をもって自らを運び屋とせよ！」

あ、詠唱間違えた。

そんな事を思っている間にも吹き荒れていた魔力が圧縮されて、私達の前に大人1人が通れるくらいによく分からない長方形が作られ

ていく。そしてそれは段々と繋がった世界の光景を映し出していき……重低音の響く重いBGMが流れ始める。

「輝きだけではないと、覚えてもらおうか!!」

長方形の向こうで、なんか凄い格好のおば…オネーさんが目をくわつと見開く。

「嗚呼、終焉への追走曲が薫る」

そしてその空中に浮かんでいるオネーさんが、歌の歌詞を口ずさみながらクルリと回転し、合わせた両手から凄まじい光が迸る。

……うん。私達は歌が次のフリーズ?に入る前に魔法を中断する。もう聖遺物の欠片でも掘ってきたい、いや、大鎌が完全聖遺物扱いになる可能性が微レ存?。(現実逃避)

「ミステイクイオリさん、今のは成功?失敗?」

「わかってるならきかないでよばかあ…」

リユートさんの容赦ない言葉で、若干目尻に涙が浮かぶ。うう…失敗だよ失敗!日本は日本でも、絶対平行世界とかだもん!いや、諏訪原とか冬木とか駒王とかに繋がらなかっただけマシだけどさあ…

「大丈夫、誰にでも失敗はあるよイオリちゃん」

「うう…」

「まあ、そんなに気にする事はないと思うぞ?魔法が上手く発動しないなんてよくある事だ」

「…うん」

2人が優しい口調で慰めてくれる。ま、まだ泣いてないし!泣きそうになっただけだし!

そんな風に頭の中で弁明していると、ティアが私の服の袖を引っ張りながら聞いてくる。

「そろそろ魔力、回収できなくなる」

「えっ、もう?!いい、急がないと!」

スターライトブレイカーの時みたくMPを回収するのは、実は地味に骨が折れるからやりたくない。急がないと10万分のMPが消失し飛んじやう!

今度こそちゃんと成功するように祈って、空いてる手を伸ばし

ティアと手を繋ぐ。

「それじゃあ今度こそ行くよー！」

私のその言葉に、それぞれが「おう」とか「うん！」という感じで返事をする。今度は趣向を変えて短い詠唱で!!

私達の繋いだ手が光ったところで、詠唱を始める。

「モコナモドキもく」

「どつきどつき」

私とティアの髪の毛がまるでツバサのように広がり、本当に小さな幼女2人分の大きさの魔法陣が広がる。かあくぷうく!

「ちよつ、それって僕たちがイオリさんに食べられるパターンじゃ!」

「問題ない」

淡々と言うティアの言葉に応じて全員を囲むように霧が立ち込める。そして段々と霧で囲まれた中に魔力が収束していき…

「ゴディメンション・メタヴァアイ!!」

シュンツと言う呆気ない音と共に、私達はこの世界から消え去った。

第3話 次元の狭間にて

バカみたいな魔力を使った、しかも世界を超えるなんて言うそれこそ神様とか一握りの天才って言われるような人達しか出来ない御技を使った所為か、非常にガタガタと揺れる感覚を味わっていると不意にその感覚が途切れて眩い光が目の前に広がった。

「うわぶっ」

「むぎゅ」

光が消え去ったと同時に目に入ってきたのは、まるで私とティアの持つてる《^{アナザーワールド}もう一つの世界》みたいな、真つ白な空間だった。しかもいつの間にかデカップリングしてるみたいで、頭が少しだけ痛い。「もしかして、失敗した？ティアはいるけど、リユートさん達はっ!？」

周りを慌てて見渡すけど、ティア以外人っ子ひとりいない…:とうか何もない、気配もない。スキルは使えるみたいだけど、魔力はうんともすんとも言わない。本当にどうなってんのこれえ!？」

「どうどう、落ち着く。多分そろそろ来る」

焦りでバタバタしている私をティアがおちつかせるためにそう言うってくる。誰が暴れ馬…:そろそろ来る?どゆこと?

「ん、画面越しじゃなくて実際に見た方がやっぱり可愛いわねー!!」
何の前兆もなく私の背後に突如現れた気配が、そんな事を言いながら私に突進してきた。

最近魔法で撃退することが多くなっていたから咄嗟に魔法を使うおうとしてしまい、けど魔力が何故か使えないこの空間じゃ意味はなくそのまま術もなく、私は抱きしめられてしまった。

「ああ、やっぱり小さい女の子っていいわね! 温かいし、プニプニしてるしいい匂いだし何より可愛い!!」

「うにゃーっ!!いきなり出てきてなんなんですかあなたはー!？」

声からして女の人みたいだし、現れ方からして只者じゃないんだろうけどクラネルさんとか姉ちゃんとか全く同じ空気を感じる。うわっ、なんで匂い嗅いでるのさ! 一応毎日お風呂には入ってるけど!!
すりすりするなあっ!!

そんな混乱の極みにある思考の中、妙に通るティアの声が聞こえた。

「久しぶり、リインネット」

「げっ」

「何が『げっ』」

その声を聞いて大人しく抵抗を止め上を見上げてみると、大体口イドと同じか少し高いくらい場所に、すっごい綺麗な顔の人がいた。頭にも背中にも柔らかい感触は無いけど、黒髪黒目のこの人はかなりの美人さんではあると思う。抱き枕なのはもう諦めた。

「ふえ？りいんねーとって事は、女神様？」

「そうだよ、あなたの女神様だよ☆」

この若干引くレベルのハイテンション：うん、確かに女神様だね。語尾に☆って、どうやって発音してるんだろう？

「無視しないで」

「えっと：封印されていた元同僚が、ロリ化して私の送り込んだ転生者と一緒に帰ってきたのにはなんて言えればいいのか：」

「確かに」

ティアと女神様が元同僚：だと。いや、確かにティアのステータス欄には神族って書いてあったからそうなのかもしれないけど……

「あれ？ティアって記憶喪失なんじゃなかったの？」

「全部って訳じゃない。意味記憶は全部残ってる、エピソード記憶も、小さな欠片レベルならある」

「世界滅ぼしたりしないでよ？」

そんな風に何時もの調子で話しているうちに、ようやく頭が落ち着いてくる。そして何個かの疑問が浮かび上がってくる。

「女神様、リユートさん達はどうなってるんですか？」

「揺れが酷くなっただけで無事よ？ただ魔法の核になってるあなた達がいらないから、本来より魔法の時間が長くなってるわね」

「私達が戻ったら？」

「即座に転移が実行されるわね」

「よかったあ：」

もしもリユートさん達が、怪我でもしようものなら壊毒ばら撒き
を実行するところだったよ…

「そ、それはシャレにならないんだけど…それに、ここは私が魔力が
動かないように固定してるはず！」

「女神様って、手紙と随分テンション違いますね。それと私に魔法を
使わせないようにしたいなら、大鎌を没収しとくんでしたね」

だって創造使っちゃえば、ある種自分だけの異界が作れるんだし
魔法も使えるようになるんだもん。なんでかは知らないけど。

「それで、私達をここに拉致ってきた理由は何？」

「それはね……」

ティアのそのもつともな疑問に対して、ぐっと貯めて女神様は言
う。

「癒しよ!!!」

「ひゃう……」

耳のすぐ近くでそんな大声が響いたせいで、反射的にビクツとし
てしまいそのまま女神様ごと後ろに倒れてしまう。

「もうほんつと嫌なのよ。毎日毎日仕事仕事仕事、神格だから不
眠不休で働けるせいで会社はもはや真つ黒だし！新入社員は気に入
らないからとか言っつてすぐ世界を滅ぼそうとするし!!八百万の神つ
て言うんなら本当にそのくらいの人数揃えなさいよー!!」

「わーわー、聞きたくない、聞きたくないです神様のそんな内情なん
てー!!」

座り込んでしまった状態の女神様にガツチリと抱きしめられなが
ら、私はいいやいやと首を振る。不眠不休で労働なんて真つ黒じゃない
ですかやだー。

「うーん、後はアレね」

そして、優しい口調で女神様が私に囁くように言う。アレってな
んだらう？

「あなたが必死に考えないようにしてたけど、つい昨日リユートさん
に聞かれて改めて考えてちゃって、実はあんまり眠れてな「わーわー
わーー!!」

「マスター…」

ちよつ、なんでそんな事暴露するのさ！確かに知ってると思うけど、改めてそんなこと聞かされたら恥ずかしいに決まってるじゃん！

目の前で立ったままのティアが、哀れみの目を向けてきているけどそんなのは知らない。

「まあ、それに関してなんだけどね？私が手ずからあなたの身体を弄ったから、あなたは間違いなく本物よ。そんな絶望を見るのは私の趣味じゃないわ」

「……ほんとうに？」

自分はコピーかも知れないとか、別人かも知れないとかそういう事は考えなくてもいいの？前の自分と今の自分を区別して考えたりとかも？

「口ではあんなに大丈夫な風に振舞ってたのに、実際の内心はこんなだったのね。うりうり可愛いやつめ」

「……」

「マスターが、無抵抗!」

抱っこされて頭をグリグリされるけど、無抵抗で受け入れる。嗅いだことない匂いだけど、花の匂いもするし暖かいせいかな安心するし、しばらくはこのままでいいかも…

「うう…マズイわね。私もずっとこうしていたいけど、そろそろあなた達を戻さないと魔法が壊れちゃうわ」

パツと抱きしめられていた腕から解放される。うう…もうちよつと抱っこされてたかった…

振り返って女神様を見ると、和服とドレスが混ざったような不思議な格好をしていた。今度、こういうタイプの服を作ってみるのもいいかも？

「名残惜しいけど、最後に何かあるかしら？」
「ない」

「つれないわね…あなたは？」

ティアが即答でそう答えるけど、最後にか…あ、もしかしたら

神様だし出来たりするかも？

「えつと…換金、お願いできませんか？日本円と」

そう言って私は、金貨を2枚、女神様に手渡した。

第4話 私はかああえつてきたああ!

すうつと意識が遠のいていき、眩い光が広がる。そして次の瞬間視界に広がったのは、紛れもなく私が通っていた高校の屋上だ。

「やつと、帰って、これたんだあ…」

見渡せば懐かしい風景が広がっている。背の高いビル、屋根の低い工場、リン〇ーハットやブツ〇オフの看板に見慣れた駅、都合よく休日か祝日の様で吹奏楽部の奏でる音楽と、運動部の掛け声が響いている。

そのどれもが物凄く懐かしい。気づかれる心配もほとんどなさそうだし、そしてその懐かしさを味わうように深呼吸した私は…

「けほつけほつ、はながあ…」

【アヴルム】の澄んだ空気とは違って、「地球】の空気は排気ガスやらなんやらで汚れているって事を私は忘れていた。

その結果どうなるのかっていうと、獣人化は解除してるとは言え普段から《五感超化》を使っているの、鼻に大ダメージを食らうことになった。もう地球じゃ嗅覚の強化は絶対しない…

「知ってたし予想はついてたけど、これはキツイね…」

「けふつけふつ…」

「義手のスラスターを使った後の匂いを、何十倍にもしたような…」

リユートさん達獣人と、純粋に異世界人のロイドにはキツイようだった。かくいう私も結構キツイ。昔の私、よくこんな中を平然と生活出来てたよなあ…

「うう…ティアは大丈夫なの?」

「もちろん」

そう胸を張るティアの周りには、魔眼で見ないと分からないレベルではあるけれど空気が何層にも重なってる。

「魔法を解いてもそれは言える?」

「無理」

即答、いただきましたー! 自分でもテンションが上がっているのは分かる中、リユートさんを除いた全員が同じように風を纏う。

魔法は…普通に使えるみたいだね。うん、これなら。

「みんなズルいよ…」

「はい、リユートさん。そう言うと思って、今空気清浄機みたいな魔導具作ったよ」

適当な大きさのミスリル片を作って、そこに適当に魔法陣を刻んだ物をリユートさんに渡す。オンオフ出来なかったり、魔力の消費が若干重かったりするけど、即興だから許してほしいの

「流石イオ「しーっ、静かに！バレルでしょ」…うん」

いくらバレそうにないとは言っても、大声なんて出したら即バレる。このままじゃ確実に不法侵入だから、バレたらもうアウトだ。

急いで幻術で髪と眼の色を日本人っぽく変える。ティアは金髪碧眼で思いつきり外国の人風だ。

「ロイドも早く腕輪使って？」

「分かった！」

ロイドも私の（魔）改造した腕輪を使って、日本人風の見た目になる。翻訳機能は抜きなく付けてある。

「それで、これからどうするの？イオリちゃん」

「まずは校内から脱出！」

そう言っただけは、テイラノの時に使ったステルスフィールドを…あれ？これがあれば、変装の必要無かったんじゃないや…

◇

「うん、問題なく脱出できたね！」

「いや、一回バレかけたからね!?!ね!?!」

高校から出て少しの所にある公園、そこで私達は話をしていた。一応そう強がってはみたものの、部活に顔を出す最中だったのか、知り合いの先生がこちらを見て怪しんできた時には本当に焦った。危うく記憶を飛ばす禁じ手を使うところだった…

「すぐくヒヤヒヤしたよ」

「スリリングだったな」

全くもってその通りだった。うん、やっぱり変装の魔法は必要だったね。さっきは浮かれすぎた。

「それでイオリさん、何か計画とかはあったりするの？ お金はないから特に何かが出来るわけでもないと思うけど……」

「それは問題ない」

そう言つてティアが、両手に5枚ずつ諭吉さんを広げる。へ、ちよつ、私ちやんと仕舞つてたのに!？」

「まさか、この短時間に誰かから？」

「えつとねリユートさん！これはカクカクしかじかつて事で」

「まるまるうまうま」

「いあいあくとうるふ」

「それはダメ」

最後のはティアに止められた。うん、当たり前当たり前、もう戦いたくない。リユートさんとはこれで通じたけど、他の2人には通じてなかったので改めて説明する。

「えつとね、転移の最中に女神様に拉致られて、そこで換金してきたんだ」

「イオリちゃんが盗んだとかじゃなくつてよかつたよ」

「女神……様？」

「ロイド、マスターはそういうもの。諦めて」

とりあえずこれで誤解は解けたから、色々と行動の幅も広がった。だから、こつちに戻つてきてからずつと思つてた事を口にする。「みんな、あの、私、やっぱり自分の家見てきたいんだけど……いい、かな？」

「資金はある、そちらも自由行動できるはず」

鍵を開ける事は出来るけど、見てくるだけにするつもりだ。女神様曰く、私は本物の白沢 蒼矢らしいけど多分気付いてくれる人はいないだろう。

「僕は止めないよ？ 同じ転生者だから、なんとなく気持ちは分かるからね。レーナは？」

「自分の家なら、私も行ってきた方がいいと思うな？」

「お、俺も行ってきていいと思うぞ！」

「ほんとに？ そつちで頼れるのリユートさんだけになつちやうよ？」

資金はあるとして、一番心配なのがそこなんだよね。地味に組み合わせが変だし、こっちの知識が一切ないロイドがいる分アレだし：「ちよつとくらいは僕を頼つてよ…一応年上だし、ずっと一緒に行動してきたでしょ？」

「それに、そんな顔されたらね？リユートくん」
「まあね」

え、嘘？そんなに私変な顔してるの？

「ロイド、言つてあげるといい」

「え？ああ。行きたくて行きたくて仕方ないって顔だな」

ふえ？

「大丈夫、マスターは私が抑える」

「それならこっちも安心して行けるよ。よろしくね、ティアさん」

「了解」

そしてティアはそのまま、持っていたお金をリユートさんに渡してこっちに戻ってくる。

「え、あ、そうだ。合流とかつてどうすれば…」

「私がいる」

「えっと、それじゃあ、行ってきます！」

そして私は、3人から行ってらっしゃいの言葉を貰って、毎日通っていた通学路を走り出した。

もしかしたら、姉ちゃんくらいには会えるかな？

第5話 姉との遭遇

このままずっと魔法で匂いを遮ってちゃ良くないので、段々と魔法の効果を薄くしながら通学路を歩いてく。

周りの道路を走る車、視界を遮る電線や信号機、やっぱりそのどれもが懐かしく帰ってきたって感じがする。

「特に怪しまれてはないみたいだね」

「ラッキー」

念のためティアと手を繋いで歩いているのが効いているのか、ステルスしてないのに声はかけられてない。髪の毛の量はちよつとおかしいから、そこら辺はあまり気に止められないよう工作してるけどね。

「半年もすれば結構変わっちゃってると思ったけど、そんなに変わってなくて安心したよ…」

赤信号で止まりながらそんな事を呟く。ほんの少し並んでいるお店が変わっただけで、そんなに激しく変わった所はないように見える。

ずっと歩いてるだけってのもなんだから、ここで私の家族について説明しようと思う。

パパとママ、そして私と姉ちゃん。家族構成はまあこんな感じで、パパとママは結構帰ってはくるものの海外を飛び回ってるらしく、家にいるのは大体大学生の姉ちゃんと僕だけだった。

そんなラノベの主人公みたいな環境だったから、私はアニメとかラノベとかにのめり込んでいったし、姉ちゃんはブラコ：いやシスコン？になってた。まあ、パパがアニメ好きだったのもあるんだけどね。

「なるほど、マスターの無駄な知識量はそこから…」

「そうだよ。そのままなら、私の部屋にはラノベとかゲームとか色々残ってるだろうね」

ピヨピヨいい始めた信号を渡りながら、ティアとそんな話をする。うーん、この距離だと天上院との関係を話したら家に着きそう

だね。

姉ちゃんは大学生って事もあって時々外泊する事があった。それで、一軒家に一人なんて寂しいって話をした時に相談に乗ってくれたのが天上院だった。それでまあ仲も良かったし、家が自転車です五分くらいな事と向こうの方が快く受け入れてくれた事もあって、時折お泊まりさせてもらってたんだよね。初めて行った時、向こうのお母さんから『匠のお嫁さんになって欲しいわ』って言われたなあ…

「やったねマスター、いまなら出来るよ」

「天上院とは、あくまで親友ポジがいいなあ…」

今はもう女の子になっちゃってるけど、流石に天上院をそういう目では見れない。それに天上院ってロリコンじゃないし、ベッドの下とかに置いてあった物が普通のやつだったからね。

そんな事を考えながら、小さな踏み切りを渡って少し進み住宅地に入っていく。

「変わってなくてよかった…」

「ここが？」

「うん、私の家だよ」

目の前の表札にはきちんと白沢の文字があり、私の記憶と寸分違わない一軒家が鎮座している。私の乗ってた自転車があるし、車はなけれど多分姉ちゃんが乗ってどこかに行ってるんだろう。これで私の家じゃなかったら詐欺だろう。

「それで、どうするの？マスター。入る？」

「ううん、ただ家を見たかっただけ。欲を言えば入りたいけど、もう別人みたいなものだからね」

そう言っってリユートさん達と合流しないうちになって思い振り返ろうとした時、プツと小さくクラクションの音が鳴った。

げっと思ひ振り返ると、見慣れた軽自動車が視界に入った。運転席には間違いなく姉ちゃんが座っている。

「マスター、とりあえず退く」

「え、あ、うん」

車を止めるのに明らかに邪魔な場所に立っていたことに気づき、

ティアと一緒に横にずれる。あわよくば逃げ出したいけど、ここで逃げたらずらして子どもに思われそうだから止めておく。

くっ、やっぱり自分の家に来るのは迂闊だったか？そんな事を思っている間に姉ちゃんは車を停め、降りてこっちに向かってきた。

「ねえあなた達、うちに何か用なのかな？」

「あ、いえ、ごめんなさい、ちよつと見てただけです…」

「ごめんなさい」

自分だって事を言いたいけど、多分信じてはもらえないだろうし混乱させるだけだと思うから、いつも通りティアと一緒にペコリと頭をさげる。

「ちゃんと謝れるなんて、偉いわね」

「うう、くすぐりたいです」

ティアは撫でられるままになっているけど、やっぱりいつになっても頭を撫でられるっていうのはくすぐりたい。ちよつと頭を振ってナデナデから逃げ出す。

頭を上げて姉ちゃんの顔を見ると、若干訝しげな表情をしている。あ、あれ？何か変なことした？

「今の癖…いや、でも、蒼矢は半年も前から…でもそう考えると顔もどこか…それに居なくなった状況も…」

そんな姉ちゃんの小さな呟きが、地球でも衰えないステータスの恩恵もあって私の耳に入る。こ、これはマズイかも…姉ちゃんを見くびりすぎてた。い、いやでも、まだ姿形声の違う私を僕と認識できるとは決まってるない！

「どうかしましたか？」

「ううん、なんでもないわよ。ちよつとそっちの子がね、居なくなっちゃった家族と似ただけで…」

ティアがそう聞くと、姉ちゃんは普通に正解を答えていた。姉ちゃんって一体…

「うーん、まあいいわ。お姉さんの名前は結衣って言うんだけど、お名前教えてくれるかな？」

「キリノ イオリです」

「ティア クラフト」

「うん、ありがとうね2人とも」

姉ちゃんがそう笑顔で言う。ティアの名前を聞いて外人さんなのかな？って呟いてるけど問題ない。よし、あとはバレない内にこのまま…

「あ、そっだイオリちゃん。最後に一つだけいいかな？」

「あ、はい。なんですか？」

「イオリちゃんは、青色は好き？」

もつとこう、核心を刺すような質問が来るかと思ったら意外に普通の質問だった。元々好きだし、私の今まで作ってきたアレコレを見て分かる通り…

「はい！大好きですよ！」

私がそう言うと、姉ちゃんは軽く握った左手を顎に当て何かすごい勢いで考え事を始めたみたいだった。

そしてすぐに手を元に戻し、私を指差して優しい声音で言う。

「あなた、蒼矢の子どもね!!」

「いや本人だよ結衣姉!!」

全く、酷いラノベ&ゲーム脳を見……た……

「あつ」

「あーあ」

「へ?」

つい反射で言ってしまった事に気付いた時にはもう遅く、場には沈黙が降りていた。

第6話 私は僕で僕は私

「本当に……蒼矢、なの？」

その静寂を破ったのは姉ちゃんだった。ああもう、なんで隠そうとしてたのに言っちゃうかなあ私は。ティアが思いつきり呆れているけど、今回も反論なんて出来ない。

「信じてはもらえないだろうけどね」

苦笑いを浮かべながら私はそう言う。まあ、言ってる通り信じてもらえないなんて事は期待してない。

「まあ、私の勘は蒼矢だって言ってるけど、とりあえず家に入りましょう？ さつきから凄く注目されちゃってるわ」

「あ、うん。ティアも一緒でいい？」

確かに言われてみると、色々な方向から視線を感じる。この場にティア1人を取り残すのは不自然だから大丈夫だろうけど、一応確認のために聞いてみる。

「ええ、変なことをしないのなら」

「ありがとう」

そうして私達は、車からエコバッグを持ってきた姉ちゃんと一緒に元私の家に入ってしまった。流れ変わったな、なんちゃって。

「それで、本当にあなたは蒼矢って事でいいの？」

「わた……僕の記憶の限りでは」

そして通された非常に懐かしいリビング、そのテーブルに座ってる私達の間には、重い空気が漂っていた。もちろん覚悟はしていたけど、結構キツイ。

「証拠は？」

「記憶しかない……かな」

私がそう言うと、少し悩んだようにした後姉ちゃんは口を開いた。

「蒼矢が初めて天上院君の家に泊まったとき、向こうの親御さんに言われた事は？」

「匠のお嫁さんになってほしいわ。」

そういえば姉ちゃんにはこの話をしたなあって思い出していると、姉

ちゃん目には驚きが見えた。まあ、この話を知ってるのは私と天上院の家族、後はティアだけだもんね。

驚きを滲ませつつ、姉ちゃんは次々と問題を投げってくる。

「蒼矢が中学2年生になってすぐの誕生日、何があった？」

「パパもママも帰国が間に合いそうになくて、結衣姉も大学に入ったばかりで忙しくて1人だった。1人で祝う事になると思ってたけど、天上院が祝ってくれた」

「プレゼントは何をもらった？」

「今もあるかは分からないけど、わたし：僕の机の2段目の引き出しの手前にある、小さな花が付いてる髪留め」

「正解よ。髪留めは今も残ってるし、言いづらいなら私でもいいわよ？」

「あ、うん。ありがとう」

今こう考えると、天上院つてもしかしたら私の事……いやいやいやいや、だってあの時の私って男だよ？見た目は女子だったけど、それじゃBから始まってLで終わる感じになっちゃうよ？確かに天上院の看病に行ったこともあるし、出かけたリ一緒に帰ることも多かったけど嘘だよな？

ティアにはもうちょっとお茶を飲みながら待ってほしいと思う。

「やっぱり、本物みたいね」

姉ちゃんがため息を吐いて、諦めたように言う。一応は納得してくれたみたいだ。

「それじゃあ、蒼矢……でいいかしら？あなたが今まで過ごしてきた事を聞かせてくれるかしら？さつきからだまっているその子の事も含めて」

「うん！」

そう元気に返事をして、さつきまでとは違い和やかな雰囲気は漂い始めた中、私は所々を端折ってはいるけど今まであった事を話し始めた。



「異世界転移に転生、TSにロリ化に冒険…まるでな〇う産のラノベね。つて、流石に信じられるわけないでしょ!？」

「デスヨネー」

ティアの補足付きの私の話を聞いた、姉ちゃんの第一印象がそれだった。うん、知ってた。転移とか転生とかラノベみたいな事言われても、普通は頭のおかしい人ってしか見られないもん。

「証拠なら沢山ある」

「もしかして魔法とやらが使えたり？」

「する。マスターも、色々あるでしょ」

「まあ、そうだけど…怖がったりしない？結衣姉」

ティアの言う通り、異世界に言っただけ証明は幾らでも出来る。魔法とか獣人化とか、ゼロ使の世界窓ワールドドアみたいに向こうの風景を映すくらいならそんなにMPは使わないで済むけど…もしそれで、怖がられちゃったりしたらどうしようって感情が大きい。

「大丈夫よ、絶対に怖がったりはしないわ」

「えつと、じゃあまず変装を解くね」

そう言っただけ私達は変装の為にかけた幻術を解く。途端に私の髪はいつもの銀髪となり、ティアの髪はあの不思議な虹色になる。目も勿論オツドアイに戻って…

「えいっ！」

更に私には、フサアという感じでケモミミと尻尾が生える。もしかしたら、化物って言われる覚悟もして目をギョツと閉じる。

「信じられた？」

「これは…髪色は自然だし、ケモミミも尻尾も明らかに血が通ってるように見える。いよいよこれは信じるしかなさそうね…凄く可愛いし」

褒められたせいで若干赤い顔を上げると、姉ちゃんが優しい目でこちらを見ていた。あう…恥ずかしい。

「安全に魔法を使うならマスターが適任、やれる？」

「うん。えつとね、これが魔法だよ！」

そう言っただけ私は、威力なんてほぼ無いに等しい魔法を発動させる。

向こうで、小さい女の子にやってあげたら物凄く喜んでくれたやつ。
…私も小さい子だけど。

目の前に数匹の火の粉と水でできた蝶々が舞い、落ちた水滴で虹がかかる。そして落ちた水滴は、机の上の薄いミスリルと木の上に作つた土に降り注ぎ、そこから急速に芽がでて花が咲く。色々意味を込めてラベンダーだ。使っていない魔法も多々あるけど、とりあえずこれで十分かな？

「後はここをこうしてっつと」

両手を合わせてから地面につけ、錬金術を使って木の部分を鉢に変形させる。ミスリルの部分は軽く魔法陣を刻んだ皿に変えて、最後に蝶々をぶつけて水蒸気に変える。地球にも魔力はあるみたいだから、水やり要らずの鉢の完成だね！

私は椅子から降りて、姉ちゃんに直接渡しに行く。

「はい、あげるー！」

「これはもう、どこからどう見ても魔法ね。うん、異世界から来たって言うのは信じるわ」

鉢植えを受け取った後、姉ちゃんがケモミミが生えたままの私の頭をナデナデしてくる。ケモミミが邪魔でやりづらそうだけど。うへへ。

「それと今まで言っていなかったわね…お帰りなさい、蒼矢」

突如撫でられる感覚が無くなったと思ったら、立ち上がった姉ちゃんが私を安心させるためなのか、ギュツと抱きしめてくれた。

随分と遠い記憶にあつた姉ちゃんの匂い、抱き締められることによる暖かさ、安心したことによる心の暖かさ、私とかレーナさんとか女神様には無い柔らかさ。随分と涙脆くなっちゃったなと思いながらも、やっぱり泣きたい衝動には抗えない…

「うう…ぐすつ、だだいま、結衣姉え」

「すぐに泣いちゃうのは、小さい頃にそっくりね」

「マスターだけズルい」

自分の泣いている声の中、獣人の方の耳がそんなティアの呟きを捉えた気がしたせいで、そこで止まってしまった。

う、本気では泣いちやダメな気がしてきた…

第7話 将来、ねえ…

「蒼矢、一ついいかしら？」

姉ちゃんにぎゅってされた私を見てティアがむすくれたり、機嫌を直してもらう為に色々やったりしてひとまず落ち着いた後、姉ちゃんが人差し指を立てて質問してきた。

「なに？」

「さっき、他の人達と一緒に来てるって言ってたわよね？」

「うん。一緒のパーティーの人だけけど…」

「天上院くんとかは、一緒に来てないの？」

「うっ、それは……」

天上院とか柊さんは、もしかしたら私が蒼矢だって気づいてるかもしれないけど、会いに行きたくないんだよねあ…相手にされないかもだし、それに…

「マスターは、一回勇者の誰かに殺されかけている。全身に武器を突き刺されて。天上院と柊は能力的に、犯人からは除外されるけど」

「そうなんだよね…クラネルさんが治してくれたからほかの場所には無いけど、ここに一箇所だけ傷痕が残っちゃってるしね…」

そう言って私は右肩に手を置く。起きたばかりの時は気づかなくてお風呂の時に初めて気づいたんだけど、あの呪いの刀に貫かれた場所には傷の痕が残っている。

因みにこれを知ってるのはレーナさんと私、あとクラネルさんとティアの4人だけだ。なんでも、呪いが染み込みすぎて浄化が間に合わなかったんだって。白装束で短刀を持って、地面に頭がめり込むほどの土下座をされた時にはびっくりだったよ。

「見せなさい」

「へ？」

「その傷痕、見せなさい」

魔眼が警告を発するレベルの怒気を纏った姉ちゃんに反論できるはずもなく、私はコートの下に来ていた長袖を脱いで右肩を見せる。そこには、上から脇の方に向かって斜めに走る傷痕がある。

「えつとね、治してくれたお医者さんは、恐らく一生残る傷だつて言つてたよ」

「そう」

そうそつけなく言つた姉ちゃんからは、異世界ですら感じたことの殆どない怒りが感じられた。つい癖で戦闘態勢になりかけちゃつたけど、隣に座つていたティアが抓つてくれた事で普通の状態に戻る。

「ねえ蒼矢?」

「ひゃ、ひゃいっ!」

見た目は完全にいつも通りな姉ちゃんだけど、雰囲気はかなりヤバイせいでなぜか返事がおかしくなつてしまった。

「その傷を作つた人つて、誰だか分かる?」

「ううん、分かんない」

「けど、もし見つけたら容赦しない」

「見つけられただけどね」

私とティアが交互に答える。因みに本当に許す気はない。最低でも1発は全力で殴るし、もしそれ以上の悪事を重ねてるなら、いつだったか私を攫つた人達のリーダーと同じ事をしてもいいと思つている。

アレも幾つかの魔法と同じく、二度と使わないと思つてたけどまあ今回は特例だ。まだ未完成だったアレで、リーダーは5分も経たずにもうその…ね、うん、可哀想な事になつちやつたから、今はもつと酷いと思う。

「もし見つけたら、1発デカイのを当ててきちやいなさい蒼矢。そして、頼まれても連れて帰つてこなくていいわ」

「え、あ、私もそうしたいけど…」

「恐らく、マスゴミ共が騒ぎ立てる」

ティアの言う通り、それで多分私とか天上院とか、さらには先生が責められる事になるんだと思う。もしそうなるなら、多少精神が終わつても連れて帰つてくるべきだと思う。

「確かにそうね。でも、そういう選択肢もあるつていう事は忘れないでね」

「うん！」

私の目に何かを感じたのか、姉ちゃんはそれで引いてくれた。S
LB?なんで一思いに殺ってあげる必要があるのさ?私はあるに
痛くて辛くて苦しい思いをしたのに。

「それじゃあこの話は一旦置いておくとして。蒼矢達はこれからどう
するつもりなの?」

「これから?」

「異世界に一回は帰らなくちゃいけないのは分かるけど、それから
どっちで暮らすのかとか将来とか」

ティアと顔を見合わず。全く考えてなかった。とりあえずクラス
のみんなをこっちに連れてくるために、何回かアヴルムに戻らなく
ちゃいけないのはいいとして、将来か…

「よく分からないけど、戸籍とかの問題があるだろうから地球に永住
は出来ないんじゃないかなあ…自分の葬式とか見たくないし」

「それに、転移の事が知られたら、GATEのレイのように狙われる
可能性もある」

異世界転移が個人で出来るのが、私とティアだけの場合はそうなる
だろうね…普通に考えると。ほら、未知の資源とか領土とか未知のエネルギー魔法と
か色々あるし。お隣さん(国)とかに狙われそう。

性格を考えると、パパは多分今再会してもむしろ喜びそうだし、マ
マも多分、心配をしてくれるだろうけど信じては貰えるだろうから、
そこはあんまり心配してはいないけど、そっちがね…

「難儀なものね…それじゃあ、今回はどれくらい居るつもりなの?
寝泊まりする場所は?食べ物はどうするの?」

「うーん、転移が安全に余裕を持って出来るまでだから…3、4日かな
?食べ物は何ヶ月分はいつも携帯してるし、寝床は…あつ」

お金はあるしルー〇インにでもって思ってたけど、無理だこれ。見
た目で考えると、高校生×1中学生×2小学校低学年×2…どう考え
ても保護者呼ばれますねはい。そしてリユートさんはお縄に…

「どうしよう…」

「そんな泣きそうな目で見なくても、人次第ではあるけど泊めてあげ

るわよ」

さっきの暗い雰囲気とは打って変わって、姉ちゃんもニコニコして
るしいい雰囲気だ。嘘偽りなく話すってやっぱり大切だね。

「それで、何人で来てるの？」

「私とマスター、常識人の転生者とその彼女、後マスターに恋してると
思いき少年の計5人」

「うーん、最後のは気にくわないけど大丈夫よ。お父さん達が帰って
くるのはまだまだ先みたいだしね」

「ありがとう結衣姉！大好き!!」

私は満面の笑みで言う。よかった：最終手段、私の
《もう一つの世界》の中にみんな泊まるっていう事にならなくて安
心したよ：仮にも女の子の部屋な訳だし。

「でも、一つだけ条件があるわ」

「え、なに？」

不安げな目で姉ちゃんを見つめる。不条理な事を要求される事は
ないだろうけど、条件つて聞くと少し構えてしまう。クラネルさん辺
りのせいだ、絶対そうだ。

「蒼矢とティアちゃんのお金は私が出すから、明日一緒にお買い
物行きましょう！お洋服とか！」

「あ、うん」

「分かった」

思ったより普通な事で安心した。私も戦闘時以外で、いつまでも自
作の服とか嫌だったんだよね！あ、でも…

「大学は？」

「大丈夫よティアちゃん。明日は日曜だから私の場合休みよ!!」

なんだろう、今ほんの少しだけ姉ちゃんからクラネルさんと似通っ
た雰囲気を感じた気がする…

第8話 転移事件

「結衣姉、そういうえば私達のクラスが転移した事件って、こっちじやどんな扱いになってるの？」

いい加減リユートさん達と合流しないととは思うけど、プライベートな事だし最後にコレだけは聞いておきたかった。向こうにいる間はそんなに考えることはなかったけど、40人が一斉に消えるって結構な大事件なんじゃないの？

「んーそうね、今はもうそんなに話題にはなっていないけど、当時は凄く大きく報道されたわよ？『忽然と姿を消した生徒達、彼らは今どこに』っていう感じで」

「やつぱり……家にマスコミとか来たり？」

「来たわよ？ 後は、予定を早めてお父さん達が帰ってきたりね」

「それは凄い」

ティアが素直にそういうけど、私も完全に同じ意見だ。予定を早めてまでパパとママが帰ってくるなんてビックリだよ。

そう目を丸くしている私達を見て、姉ちゃんが続ける。

「考えてもみなさいよ、白昼堂々と息子のクラスが丸ごと神隠しにあったのよ？しばらくテレビでも放送されてたわ」

「なんの予告もなく、授業中に強制的に転移だったからね…」

本当にいきなり跳ばされたからなあ。先生の授業、久々に受けてみたいなあ…見た目的に、場違い感が凄いだろうけど。

「本当に大変だったみたいだし、心配してくれてたんだね…」

「みんなが大騒ぎになってたのよ。今も家族会が色々な手を使って捜索してるし。それよりも、なんなのよその女神って奴は」

「へ？」

姉ちゃんがよくわからない所でキレた。え、なんで女神様？色々助けてもらった記憶しか無いんだけど…

「そのクラスごと召喚した人については、蒼矢が知らない以上何も言えないけども…不思議そうな顔をしてるけどね、気づいてるの？その女神様？に自分が玩具にされてるってこと」

「まあ…ね。今までの手紙の内容から、それくらいは察してるよ」

面白半分にTSさせたって感じの事、一番最初に言ってたもん。それくらいは私だって分かってる。あと決め手は獣人界で読んだやつ。「それならなんで「でもー」「でも?」

一旦そこで切ってから私は言う。そう、それはわかってるけど、それでも『でも』なんだよ私にとっては。

「多分、女神様が楽しむために、私が転移したての頃は絶対に死なないように干渉した気がするし、その後も色々あったし…多分、女神様が何かしてなきや、絶対どこかで死んじゃってたもん、私」

「でもそれは、その女神が蒼矢を今みたいな小さな女の子に変えなければよかった話なんでしょ!」

うん、それはそうんだけどね…姉ちゃんが怒ってるのってやっぱり怖いけど、自分の事だからキチンと言う。だって私が最初にシイラさんみたいな人に会えたのもおかしいし、リユートさん達と初めて会った時もよく考えると運が良すぎる。

「元の僕のまま転移したら、多分凄い大怪我をしても治らなかっただろうし、地球にも帰ってこれなかったと思うんだ」

「それに、今の人族にはいい噂を全く聞かない」

ティアの言う通り、他の大陸にいて敵対してるとは言っても情報は入ってくるのだ。なんでも謎の疫病が流行してるとか、王がいきなり暴君になったとか、見せしめとして街がまるまる処刑されたとか。正直、ロイドがいるとは言え余り戻りたくはない。

「それでもっ」

なおも食い下がろうとする姉ちゃんに、これ以上姉ちゃんの怒ってる姿を見たくないし暗い話を続けたくないの、伝家の宝刀を抜く。

「僕はちゃんと地球に帰ってこれて、姉ちゃんとももう一度会えて、本当に嬉しいんだけど…それじゃあ、だめ、かな?」

さつきからなってる地味な涙目で、姉ちゃんを見上げながら、声を震わせて私は言う。

「うっ、蒼矢がそれで納得してるなら、私が今更言えることはないけど…」

場に今までとはレベルの違う、かなりの重さの沈黙が広がる。う、あ、う……とりあえず、この空気はどうにかしなきゃ!

「は、話を戻すけど、絶対に信じてはくれないだろうけど、居場所が分かったのは出来れば伝えたいね!」

全員が全員無事かは知らないけど、所在が判明して生きている可能性が出てくれば、少しは気が楽になるんじゃないかと思う。よっしやテンション上げてこー!!!

「二でも、マスター（蒼矢）は出て行っちゃだめ（よ）」

「え、な、なんで?」

隣と目の前から同時に、全く同じ否定の言葉を言われて若干固まってしまう。証人がいないと話にならないと思うんだけど……

「マスター、さっき自分で言ってた」

「転移が出来る張本人が出ていったら、今すぐ会わせるとか開けとか言われるに決まってるでしょう?」

「あ、」

そこまで考えが回ってなかった。そう考えると色々嫌な考えも浮かんでくる。もし誰かが居なくなったりしたら……

「そう、マスターが酷いバッシングに遭うかもしれない」

「蒼矢、それにさっきの話だと転移は5人が限界なんでしょう?」

「うん……」

MPは足りるけどキャパシティが足りないんだよね。私の異常なDEXの補正が有ってもあんなにガタガタしてたんだからそれは間違いない……あ、そういう事か。

「どつちにしろ、転移のペースが間に合わない……」

「やっとなつてみたみたいね……」

「うん。話さないか話しても、手紙とかの方が良さそうだね」

私の認識をおかしくしてたドン千は絶対に許さない（こじ付け）

と、まあ冗談は置いておいて。話の区切りもいいし、

「ふええ……緊張したあ。うん、1時間くらい経っちゃってるしそろそろリユートさん達と合流しないとなあ……」

自分の家を見に行くって言って、1時間弱帰ってこないのは少しだ

け酷い気がする。というか、1時間もどうリユートさん達は時間潰して
るんだらう？

「そうね、私も会ってみたいわ」

「でもマスター、居場所分かるの？」

「抜かりはない」

えっへんと胸を張り、ドヤアとした顔で私は言う。そういうのは
ウツカリしないのだ。そう考えながら私は、リユートさんに渡した金
属片にくっ付けてた物と同じ物を取り出す。

「えっと、水滴？」

「てれてれてれー、細菌型汎用多脚走行運搬用自動増殖超ミニサイ
ズゴーレム略して《T4》!!」

「またマスターは…」

そうティアがため息を吐く中引き抜いた指には、ほんの少しだけ黒
い水のような物、私の魔眼の最大倍率で作った1nm弱のゴーレムが
(超大量に)乗っかっている。カラーリングは隠密感が欲しかったから
黒いよ。見た目？バクテリオファージ参照。

私の全力でも自由に動かせる範囲は半径250mしかないけど、電
波は半径3kmくらいなら飛ばせるし受け取れる。殖え方は…うん、
あんまり説明したくはないな。

「えっと、それに何かあるの？」

「今回は発信機なのですっ!!」

六角柱になってる場所に刻む魔法陣で、流体からかなりの硬さの金
属、さらには発信機にまで変化するからかなり便利だ。最初の一個が
完成するまではすごく時間がかかったけど、今となっちや餌を入れと
けば勝手に増えるから楽になった。

「とりあえず魔力を込めるとOK!」

ていやと魔力を込めると、指先の黒い液体が赤い光が灯す。それと
同時に、リユートさんのにくっ付いてる機体から反応が返ってきて
……

「リユートさん達、よく分からないけど移動中みたい。駅の方面だか
ら…ファミレス？」

「魔法って便利なものね」

「これは私の作った道具なんだけどね…」

自分で言ってるんだけど、よくよく考えるとなんでこんな作れたんだろう？ ナノサイズって馬鹿なのです。電子顕微鏡程じゃないにしても、私の左眼の分解能がおかしい気がする。その気になれば地平線まで見えて、ナノレベルまで拡大できる眼ってどーなのよさ。

「ま、どっちにしてもそんなに変わらないし、リユートさん達と合流したいなっ！」

「ちよつと待つマスター、隠す」

「はうあっ!？」

向こうの世界の時と全く同じ感覚で出ていこうとして、ティアに止められた。うん、銀髪ケモミミっ娘が出歩いてたら、ツイッターとかのSNSで拡散されたりなんだりで大変な事になるのが目に見える。

これはもう、アホの子って言われても仕方ないね、うん。

「とりあえず、このまま歩いていっても心配だし私が車を出すわ」

「ありがとー！」

この時の私は、最愛の姉に再会できたことで自分が何者になったのか、そしてリユートさんが何者であるかという事を完全に忘れてしまっていた。

君は知るだろう。背負った業はどこまでもつきまとう、それはたとえ、世界を越えたとしても変わらないという事を。

第9話 転生者達

「ねえ蒼矢」

「何？ 結衣ねえ」

運転中の姉ちゃんから、後部座席で流れていく景色を眺めていた私に声がかかる。凄く久しぶりに車に乗ったからか、地味にワクワクしてるのはナイショだ。

「さっき聞いた限りだと、蒼矢って何回も戦ってたのよね？」

「うん。 したよ？ 魔物とだけだけど」

人と戦ったことなんて一回もない。あ、いや、大鎌が気が付いた時には食べちゃって事はあったけど？ あとこれは、昔の戦争跡を見に行った時に気が付いたんだけど、あの大鎌どうやらしよつちゆう幽霊を食べてるみたい。そのお陰で私のレギオンは1万くらいはある。「跳んだり跳ねたりするのって、どれくらいの速さでしたのかわかって思ったのよ。もしかして、車よりも速かったり？」

「うーん、どうなんだろう？ ティアは分かる？」

自分じゃどれくらいかよく分からなかったからティアに聞いてみる。速いのと音速を超えてないのは分かるんだけど、私ってどれくらいの速さなんだろう？ テレポートは抜きにして。

「とりあえず、この車よりは速い」

「あ、やっぱり？ こっちの世界じゃ出来ないけど、飛べれば速いなあって思ってたのは合ってたんだ」

「異世界って、予想以上に殺伐としてるのね……」

「あー、うん。 多分そうかなあ……」

転移直後に戦闘になるし、着いた街には危機が迫ってくるし、変態に遭うわ、死にかけるわ変態に遭うわ、街が滅びかけるわ神話生物とガチバトルするわ……うわっ、私の幸運低すぎ？ 実際、ランサー並にない気がする……

「む」

そんな悲しいことを考えている内に、例のリユートさんに渡したブツに仕込んだゴーレムの操作可能圏内に入った。よし、やってみる

か。

「《タキオン神経加速》」

そうボソツと呟いて、思考加速とか色々なスキルを全開で駆動させる。名前は……うん、さつき自分の部屋に入って思いついた。世界が非常にゆっくりと見える中、リユートさんの金属片に仕込んだブツを一度大きく脈動させる。

そしてその後、小さく『姉ちゃんと一緒に車で行くからちよつと駅前で待ってて』って文字を浮かび上がらせて……

「解除つと。姉ちゃん、駅前でリユートさん達待ってって連絡したー」

「……魔法って便利ね」

多分姉ちゃん、考えるのを止めたんだと思う。なんて事を思ってる間に車は駅に到着し、私たちはリユートさん達と合流した。

◇

「僕たちを泊めてくださるという事で、本当にありがとうございます。イオリさんのお姉さん」

「かわいい弟……今は妹ね、その頼みなら是非もないわ。あなた達は悪い人では無いようだしね」

「本当に、ありがとうございます」

「それに、向こうでは蒼矢の保護者代わりになってくれてたって聞いたしね」

リユートさんとレーナさんのお礼に、姉ちゃんがそう優しく答える。ロイドはなんかソワソワしてる。ファミレスのテーブルって、6人で座ると結構狭く感じるんだね。

「……あ、そういえばロイドって言葉通じてるの?」

「読めはしないけどな」

「そう。とりあえず、マスターの義姉ちゃんに挨拶」

「ああ」

ロイドが姉ちゃんに向き直る。あ、日本語読めないならロイドはメニユーどうすればいいんだろう? まあいいや、何か美味しそうなものあるかな? ティアと一緒にメニユーを開いて見る。

「それで、この子が例の天上院くんのライバルね」
「なっ」

「大丈夫、元からバレバレ」

「えっと、あー。よろしくお願いします」

「礼儀は問題ないようね」

あ、終わった？　なんかピリピリした空気になってる気がするけど、まあそんなのはどうでもいいよね。大丈夫、私もティアも普通の座席に座ってる。断じてあの持つてくるイスには座ってない。

「みんな何食べるー？」

「イオリさんって、毎回狙ってこういうのやってるのかなあ……」

「小さい子の特権ね」

「リユートくん、読んで欲しいな？」

わあ凄い、ピリピリした空気が無くなったかと思ったら、途端に力オスな空間になった。うーん、言っついてなんてなんだけど私も何たのもうかな……あ、

「そういうイオリさんは、何にするか決まってるの？」

「うん！　お子様ランチ！」

「私も」

あれ？　ティアもなのって思ったけれど、今はそれよりも周りから注がれる暖かい目線の方がアレだ。凄く微妙な気持ちになる。

「い、いいじゃんお子様ランチでも！　偶には自分が作ってないご飯食べたいしー」

「それに、旗が立ってる」

「あー、うん。イオリさん、精神年齢退行してるもんね……」

姉ちゃんは無言でニコニコしてくる。う、うう、いいじゃん別に！　だってハンバーグだよ？　旗だよ？　頼むしかないじゃん！　恥ずかしさで、若干ほっぺたが熱くなる。

けれど、私とティアの力説のお陰かそのまま注文は進んでいき、姉ちゃんトリユートさんが日替わりランチ、私とティアがお子様ランチ、レーナさんが生姜焼き定食でロイドは何故かラーメンにした。かなり混沌としてるけど、やっぱりそれにしても……

「平和、だなあ……」

「向こうじゃ、大体トラブルが起きるからねー」

「所謂転生者補正ってやつだろうけど、巻き込まれる本人からするとたまったもんじゃないよね……」

「マスター、リユートさん達、それフラグ」

「日本なんだから、何かが起こるわけ無いわよ」

運ばれてきた料理からテケリ・リなんて聞こえもせず、爆発とかもしないままようやく食べられると思った時に、ティアの予想通り事件が起こった。

「よし！ それじゃあ、いただきまー全員、動くんじゃねえ！」は？」

ドアを突き破りそうな勢いで乗り込んできた4人組の男達が、そんな怒号を発する。そして次の瞬間、手に持っていた猟銃を天井に向けて撃ち放った。

銃弾の当たった蛍光灯が碎け散り、一気に悲鳴が伝播してゆく。そして、私たち異世界組は普通に落ち着いていたんだけど、落ちてくる破片が食べ物にかかり……プチンという音がして私の中の何かが切れた。

第10話 無事に済むとでも思ってたの？

「全員、動くんじゃないっ!!」

ドアを突き破りそうな勢いで乗り込んできた4人組の男達が、そんな怒号を発する。一瞬、店内の全員が何が起こったのか分からなかったが、次の瞬間轟いた銃声にあちこちから悲鳴が上がる。まあ、姉ちゃん含め、私達の卓は除くけど。

『『『きやああああっ!!』』』』

「騒ぐな！ 静かにしろ!!」

男たちの格好は、全員が古典的な黒の目出し帽を被っており下はGジャンとか革ジャンって言うんだっただけかな？ そういうのや、コートを着ている。リーダーみたいなのが猟銃を、その他の2人が拳銃を持っていて最後の1人は大きなカバンを背負っており、魔眼で透視してみると大量のお札が入っているのが見える。

へえ、全員レベルは20あるかないかだし猟銃の弾なんて見えるのか……こんなのなら、私が最初に戦うことになったモブ変態の方がよっぽどマシじゃん。

「まさか、日本でこんな事に巻き込まれるなんて……」

「僕らのせいだ……スミマセン」

「ここは安全なんじゃなかったのか？」

「ロイド君、リユートくんといオリちゃんがいる時点で……」

姉ちゃん達がしているそんな話を聞き流しながら、私はティアと高速の念話で方針を話し合う。食べ物の恨み＋あるふあは怖いのだ。

(マスター、あいつら、どうする?)

(殺s……はムリだから、精神だけでもぶち壊す)

(賛成。方法は?)

(神話生物見せてやる。できる?)

(余裕)

大体10秒程度の念話を終えて、ティアがテーブルの下で魔法を構築し始める。サイレンの音が聞こえてきたからそろそろ警察が来たんだろうけど、大切な姉ちゃんを危険な目に遭わせた上に……まあ

こっちの理由はいいけど、とりあえず他人任せで終える気なんてさらさらない。

「警察に要求する！ 人質を安全に解放して欲しけりや、車を用意しろ！ 妙な真似はするんじゃないぞ！」

リーダーっぽい人がそう言っただけで警官のいる方に向けて発泡しているのを見てみると、強盗の1人がこちらを見つめている事に気づく。そして私と目が合った事に気がついたのか、こちらにズンズンと近づいてくる。

「はっ、随分とまた上玉なヤツがいるじゃねえか」

そう言っただけで姉ちゃんを見て、そのまま拳銃を向けて命令する。おい、ちよつと待ってよ。日本はロリコンの国って聞いた事があるんだよ？ なら私かティアにターゲットは行くはずじゃん。

「どうせ捕まるんだ。それなら最後にイイコトしてもらおうじゃねえか。服を脱げ、逆らったらその子供を殺す」

まだギリギリ冷静さを保ってはいたけど、その言葉を聞いた瞬間私の思考は真っ赤に染まった。姉ちゃんが悔しそうな顔をしてる、強盗がニヤニヤといやらしい笑みを浮かべている……巫山戯るなよこのクソが。

「イオリさん、まっ」

「《神経加速》」

そんなリユートさんの制止も空しく、私は焼け付いた思考のまま《もう一つの世界》を開け、例の自作ナノマシンを操作する。形状は刃、薄さはマシン一つ分、用途は切り上げ、セーのっ！

「はっ？」

下から上に、目にも留まらぬ速さで振り抜かれた黒い線が拳銃を両断する。被害も天井と床が切れただけだから何の問題もないね。

（マスター、準備完了）

（やっっちゃって）

落ちてきた拳銃をすっかりナノマシンで巻き込んで回収していると、頼もしいティアの声が聞こえてきた。よし、やっっちゃえ。

「《パーマネントマッドネス》」

ティアがそんな声と共に魔法を使った瞬間、男達の様子が一変した。警察に要求を突きつけていたリーダーも、こちらを見張っていた拳銃男Aも、私達の前にいる拳銃男Bも、荷物持ちの男も、一様に脂汗を流し目の焦点がどこか違う場所を見てしまっている。

「ああ、ああああ！ うわあああああつ！」

「なんなんだよ！ なんなんだよ!!」

「……」

え、何あの最後の荷物持ちの人。段々白髪になっていってシワも増えていってるんだけど。リーダーの人は弾切れの猟銃をしつちやかめつちやかに振り回してるし、拳銃男Aは外に向かって拳銃を乱射した後外に飛び出していった。

そして目の前のクソは……

「助けて助けて助けて助けて助けて助けて」

そんな事を呟きながら、股間を濡らして地べたを何かから逃げるように動いているかロクに動けていない。ザマアってやつだね。

「イオリさん、何したの？」

「流石にこんな相手には、戦う気にもなれないぞ？」

呆れ顔のリユートさんと拳を構えていたロイドにそう言われて、そこそこ冷静になってる事に気づいた。うん、あの強盗共がこんなザマになるなんて爽快だね！

「えつと……その……ね？」

「マスターがやれっていった」

「ちよつ、ティアあ……」

賛成してくれたのに、私にだけ責任押し付けるなんて……ぶー、横暴だー。一応、全部ヒソヒソ声での会話だ。

「それで、何がどうなっただろうなつたの？ イオリちゃん」

「だって、姉ちゃんが変なことさそれそうだったんだもん」

「えつとね、蒼矢。そんなに心配してくれたのは嬉しいけど、何をしたらこんなになるの?」

姉ちゃんが強盗を憐れみを込めた目で見ながらそう言う。えつと……言っちゃったのは私だけど、実際は何を見てるんだろう?」

「全員が全員、旧支配者か外なる神を直視してる。あくまで、私の記憶の中の、だけど」

ティアが言ったその言葉で、場に流れていた空気が固まった。神話生物って言ってたはずなのに、神様見ちゃったかーそうかー……洒落にならないね。

見れば、実際に遭遇したリユートさんとロイドも顔が青くなってる。実際にクトウルフ見てるしね。けど、1人だけ本物の欠片が来てるような……歳取ってるし。

「ゴメンね結衣姉、多分私達が居た所為でこんなのに巻き込んだじゃって……あう」

ペシツとチョップが頭に落とされる。

「そんなに気にしないでいいわよ。それに、蒼矢達が居たからって決まった訳でもないでしょう?」

「可能性は高い」

「それでもよ。2人とも、あんまり無茶はしたらダメよ?」

「はい」

そんな私達を見て、リユートさん達がヒソヒソと話しているけど突入してきた警察の人達が立てる音によって、何を言ってるのかは聞き取れなかった。

……あれ? 私達異世界組はともかく、姉ちゃん冷静過ぎない?

第11話 お風呂でピンチ

あれから40年！ じゃなくて2時間と少し経った頃、一応事情聴取みたいなものを受けた後、マスゴミに捕まりたくなかったので私達は早めに家に帰ってきていた。

「まさか、戻ってきた初日にこんな事に巻き込まれるなんてなあ……」
私がそうボヤくのは、家のリビングで開いた《もう一つの世界^{アナザーワールド}》の中だ。明日は姉ちゃんと一緒に面白い物だし、1日でも休むと腕が鈍っちゃいそうだから中で物作りをしてる。

「マスター、お義姉ちゃんと一緒にいないの？」

「うん、今はリユートさん達とお話ししてるみたいだからね」

開けたままのドアの向こうからは、リユートさんと姉ちゃんが何か話をしているのが聞こえてくる。なんか、向こうでも私はこういうトラブルに巻き込まれるのかとか、いやいやもつと酷いことの方が多いですよーとかそういう話だ。

「そういうえばマスター、さつきから作ってるソレは、なに？」

「ん？ ティア用の杖ー。いつまでも私のこれじゃ嫌でしょ？ 元々はこうやって……」

「きゆう？」

カードを手元に引き寄せて、フローを召喚する。よくよく考えたら、物を変に弄らないならこの中に召喚しっぱなしでいいのかも？

とりあえず、フローの頭を撫でてその旨を伝える。魔物の素材は絶対たべないでねー！

「召喚だったり封印だったりに特化した杖なんだし」

「確かにそう」

「だからこそ、専用のこの杖なのですっ！」

私は今完成した、木と機械が絶妙に混ざり合った杖を掲げる。

中心の棒には私が全財産を投げ打って買ったユグドラシルの枝を、その上には余っていたダンジョンコアを球形にした物に乗せて、金属製の底からは黒いヒビロカネと金のオリハルコンで二頭の蛇が巻きつくような意匠を施し、そして最後に大きく広げられた翼の形の魔

ある大鎌もその杖も、パーツ一つ一つを全力で造ったんだもん。杖だって何日か前からゆっくり作ってたんだし。ナノゴーレムは……言い訳のしようがないけど。

「それでも、数日で国宝級の物を作れるのは、頭おかしいとしか言いようがない」

「えー」

「えーでもない。少しは自重をする」

「うう……それじゃあ、みんなにはヒミツにしたた刀鍛冶の人の作業をコソソリ見に行くのも……だめ？」

しよんぼりしながら私はそう言う。せつかく日本人なんだし、伝統芸能って言うのかな？ 一応同じ鍛冶師だから、見てきたいって思ってたのに……転移と透明化が使えるんだし。

「いや、それは別にいい。見れるかどうかはともかくとして」

「よかった……」

実は刀はそんなに上手く作れてないので見てみたかったのだ。日本にきてやりたかった事の上位に位置する事がダメって言われなくて安心していると、外から姉ちゃんが私達を呼んだ。

「結衣姉なにー?」

杖は一旦置いてティアと一緒に外に出ると、そこには3人分のタオルと着替えを持った姉ちゃんが待っていた。その手にあるのは、明らかに姉ちゃんの服と昔の私の服達とだった。

オフロガワキマシタって音が聞こえたし、これってまさか！

「久しぶりに一緒に風呂でもって思ってたね」

「い、いやいや、久しぶり言っても私が小さかった頃の話だよね？」

「今の蒼矢、小さいじゃない」

なにも、言い返せない。確かに私とティア、姉ちゃんと一緒に入ってもギリギリスペースは大丈夫だろうけども……男の時とはまた別の羞恥心が……その……なんというか。

「ひ、1人でも入れるよ？」

「だーめ、あなたは元々男の子でしょ？ ほら髪もこんなにボサボサになって……ないわね。異世界ならもつと、髪の毛が傷んだりする

と思っていたけど……」

「王族ごよーたしのチャンプーとかリンスとか使ってるからね！」

「勿論私も」

私の言った言葉にティアも同意する。ミーニヤちゃんの所のお風呂で使ってたやつを、かなり高額ではあるけど私も買って使ってるのだ。出費は馬鹿にならないけど、髪の毛は大切って言われたしね！

「へえ、異世界の王族御用達の……気になるわね」

「あっ」

姉ちゃんの目がキラリと光ったように見えて、私達は作戦が失敗した事を悟った。あ、もうこれ一緒に入るしかない感じですね。

「れ、レーナさんすけ」

引つ張るのが姉ちゃんなので力を込めて暴れるわけにもいかず、最後の頼みとしてレーナさんに助けを求めてみたけど、笑顔で手を振ってくるだけだった。

(ティア、覚悟決めようか)

(それしかない)

ティアと頭の中でそんな話をしながら、私達は風呂場へと連れて行かれるのであった。

あれ？ そういえばロイドはどこに？ 一緒に帰っては来たけど

……

第12話 帰還までのカウントダウン

「まさか、蒼矢のお風呂習慣がキツチリ女の子になってるなんて……」
「流石に半年くらいこの身体だもん」

若干意気消沈した感じの姉ちゃんがそう言うけど、元々髪の毛は長かった事もあってもうそんなのは慣れたのだ！ あと実の姉に身体を洗われるなんて嫌だ、レーナさんはセーフだけど姉ちゃんはやだ。

「因みに、義姉ちゃんの期待してたことは、そのレーナさんが先にやった」

「やっぱりそうよね。髪の毛はともかく、他の事は教わらないと男子にはどうしようもないものね……」

「むう、せっかくカツコつけたのに……」

ぶーとほっぺを膨らまして抗議する私を、姉ちゃんが微笑ましい目で見てくる。因みに今は魔法も解いて銀髪に戻ってるけど、ジャンル違い感がすごい。

「あ、やっといオリさん出てきた。ロイド君見つけたんだけど、どうにか出来る？」

「へ？」

「階段の所でぐったりして……」

そう言っつてレーナさんが指差す先には、ソファアの上で仰向けでぐったりとしているロイドが確かにいた。風呂に入る前、いないと思ったら階段で……ん？

「もしかして、結衣姉が原因？」

「そうね。勝手に二階に行こうとしてたから、妙に動きは速かったけど腹パンしておいたわ」

「ゆ、結衣姉すごい……」

ロイドだつてまあ、一般人から見たら超人レベルの動きの筈なのにそれを妙に動きは速かった程度で済ませられるなんて……。それにしても、なんでロイドは二階に？

「二階には私の部屋とかしか無いはずなのに……」

「マスター、多分それ」

「……あ」

なるほどそういうことか。いやでもこれを認めるとなると、ロイドが私の事を好きだつて事になるかもしれないし……私はそこまで自意識過剰じゃない。

「あ、そうだ。レーナさんお風呂入ってきていいよ?」

「え、うん」

レーナさんのそんな返事を聞きながら私は、トテトテとソファーマで走っていきロイドの頬を叩く。

「ロイド起きてー、お風呂沸いてるよー。リユートさんとも入ってきてー」

けど、起きる様子が一切無い。お風呂入れるのはレーナさんが上がってきてからだけど、うーん……どうすればいいんだろう? 起すのは確定として……

「どうすればいいかな?」

「やっちゃえ」

「バチツと」

「了解!」

姉ちゃんとリユートさんに後押しされて、私は手に電気を纏わせる。そしてそのまま手を振り下ろして、

「えいっ!」

「うわあっ!?!」

突如走った電流によってロイドが飛び起きる。そして近くにあった私の顔を見るなり逃げようとして、そのままドンとソファァーから落っこちた。なにこれ面白い。

「えっ、あ、俺は確か……ひっ」

「ロイド君、ちよつとこっちでお話ししようねー」

そして起き抜けのロイドを、いい笑顔の姉ちゃんがどこかに引張っていった。ロイドが目にかけてつて言われた気がしたけど、姉ちゃんに勝てる弟妹なんている訳ないじゃないか……

「南無……」

私がそう祈ってるのと同じく、リユートさんもロイドが引張られ

ていった方向に手を合わせていた。ティアは視界の外にいるからわからないけど、多分似たような事をしてるだろう。

「それでイオリさん。なんだか久しぶりに異世界組だけになった気がするけど、これからは予定とかあったりするの？」

「うん、一応ね。明日は私とティアは姉ちゃんと買い物に行く事になったし、個人的には日本刀職人さんの作業を覗いてみたかったりするから、滞在は長くて4日かな？」

「だから明日は、私達は確実に動けない」

私の説明にティアがそう付け足す。とりあえずそこまでは決まってるんだけど、リユートさん達の予定が一切決まってるんだよね。家の中にいる訳にもいかないし、かといってデートしてもらうのもいけないし。

「あれ？ 僕たちって何を……」

「私の自転車なら貸せるけど……」

「好きな事をするといい」

ティアはそう言うけど、実際にやれる事は案外少ないんだよね。近くには鉄道の博物館とか、県の体育館くらいしか施設はないし。デイ

○ニーは日帰りは無理な距離だ。

「そうは言ってもね……」

「ん？ なんの話かしら？」

そんな話をしていると、真っ白になったロイドを引きずった姉ちゃんがリビングに戻ってきた。ロイド……お疲れ様なのん。

「明日以降の予定話してたー」

「成る程ね。蒼矢、明日の買い物にこの子連れていってもいいわよね？」

そう言っただ姉ちゃんは真っ白なロイドを指差す。え、ロイドが一緒に来るの？ まあ、私は別にいいけど……

「私もマスターも、特に問題ない」

「少し恥ずかしいけど」

「よし、それなら決定ね」

姉ちゃんが満足気な顔で言う。どうしよう、明日は本当に嫌な予感

しかししない。さつきから見えてる、充電中のデジカメがいい証拠だよ……

「あ、そういうえば今日って、リユートさんとレーナさんってデート出来たの?」

「いや、ロイド君がいたからそんな雰囲気じゃなかったかな」

「ふむ」

なるほど、そういう事なら確か……案外安価で入れるしいい場所があった筈。若干遠いけど?

「それなら」「電車に乗れば、そんなに遠くない場所に水族館があるけど?」「凄い、姉ちゃんと被った」

「どうやら考える事は同じだったようね」

姉ちゃんと、ふつと笑いあう。私も天上院と一回だけ行った事があるけど、結構いいところだったしベストなんじゃないかな?

「それなら行かせてもらおうかな」

「やったれやったれ」

「ティア、もうちよつと感情込めて言おうよ……」

いつもとさして変わらないそんな事を言い終えたとき、ふあと大きな欠伸が出た。流石にいろいろな事をやり過ぎた所為か、私も予想以上に疲れてるみたい。

「ふみゆう……。それじゃあ、私は今日はねるね? おやすみ」

「あーうん。おやすみイオリさん」

そう言って会話を終わらせ、いつも通り二階へと上がっていく。そういえば、自分の布団で寝るのって随分と久しぶりだなあ……って、

「なんで姉ちゃんが一緒にきてるの?」

「蒼矢と一緒に寝ようと思ってるからよ」

姉ちゃんがあまりにも楽しそうに言うので、私も断るに断れなかった。

第13話 再び異世界へ

「蒼矢、これならどう?」

「スカート、寒いのに……」

「マスター、少しはオシャレを……」

「ティアちゃんもよ」

「なん……だと」

ピシリと固まったティアの手を引いて、私は更衣室に入っていく。という事で、私達は今姉ちゃんと一緒に買い物に来ている。

ロイドは最初の10分くらいは近くにいたのだが、今は男物の服が置いてあるところに行ってるみたいだった。

「それにしても、冬場にこんなヒラヒラを着るなんて絶対おかしいよ……」

「もう少し長くても、私は構わない」

姉ちゃんが渡してくれたのは、膝上くらいの丈がある白のスカートとか青と黒のチェックのスカート。着ること自体にはもう嫌悪感なんてありはしないんだけど、冬場に着るのはやっぱりおかしいって。

「そろそろ穿いたかしら?」

「まだー」

そう姉ちゃんの急かす声が聞こえてくるけど、これでもう10着は買いが確定してるんだから、そろそろもういいんじゃないかな?

白い方をティアに押し付けて着てみたけど、いつもと違って下に短パンを穿いていたりはしないから、凄くスースーして寒いし若干の恥ずかしさが……

「よいしょ」

「早いよティア!?!」

開けるか戸惑っていると、ティアが問答無用でカーテンを開く。

うう……絶対これは似合っていないって。銀髪の状態なら兎も角、ティアが今は穿いてるヤツの方がよっぽど似合った気がする。

「姉ちゃん……そろそろ服はいいって。これも多分似合っていないだろうし……」

「似合ってるから大丈夫よ。でも、確かに買いすぎではあるかもしれないわね」

そう言って姉ちゃんは結構な量の服が入ったカートを見る。ここに来る前に買ったスニーカーとかが入ってるけど下着だけは入っていない。一緒にお風呂に入るのはいいいけど、実の姉と一緒に下着を買うなんてただの罰ゲームだもん！

「それじゃあ、私はロイドを呼んでくる」
「ん、わかったー」

私の今の所持金は大体8万円くらいは残ってるし、姉ちゃんのお財布に圧迫を掛けるようなら出す準備はできている。だからもしロイドが結構な量の服を買おうとしても全く問題は無い。

「今日はちゃんと、一日中平和だったなあ……」
「本当に、昨日みたいな事にならなくてよかったわね」

ティアの後ろ姿を見送りながら、姉ちゃんとそんな話をする。実際には、絡んでこようとしていたチンピラ達にお腹を壊す呪いをかけたり、私達を撮ろうとしていたケータイが突然煙を出して壊れたくらいだね。多分あれは中国製だったんだろうね！

「蒼矢、今日はどうだった？」
「ふえ？ どうだったって？」

「ほとんど強引につき合わせちゃったけど、どうだったのかなって」
「楽しかったよ？」

姉ちゃんのその質問に、時間を置かずに答える。元々はあんまり長い買い物は好きじゃなかったんだけど、最近は見て回るのも楽しいって思うようになってきてるんだよね。

異世界のお店とはまた違った楽しさだった。

「それならよかったわ。折角帰ってきてくれたのに、つまらない思いをさせちゃったんじゃない、お姉ちゃんとして失格だもの」

「私は結衣姉と一緒に色々できるだけで、嬉しいもん！」
「ふふふ、ありがとう」

撫でやすい位置に私の頭があるせいか、優しく撫でてくれたその手はやっぱり嫌じゃなかった。

そんな事をしている間にロイドとティアが戻ってきて、日も傾き始めていたのでそのまま私達は家に帰って行つた。因みに、ロイドはほとんど服は買ってなかった。

◇

我が家の普段車が停めてある場所、そこに私達は集合していた。

「本当に今日で帰っちゃうの?」

「うん。こっちに居すぎると、なんか申し訳ない感じになるから」

「私はマスターに従うだけ」

「僕達は、イオリさんが居ないと帰れませんから……」

そのリユートさんの言葉にレーナさんとロイドが頷く。

なんだかんだで地球に来てから4日が経ち、今私達はアヴルムに帰る準備をしていた。リユートさん達はデートを満喫できたみたいだし、私は刀鍛冶の人の作業は録画した映像をゲット出来たから満足だ。

あとは姉ちゃんに抱き枕にされたり、ロイドと軽く模擬戦したり、姉ちゃんに抱き枕にされたり、ティアと魔法戦をしたり、リユートさんに武器を押し付けたり、姉ちゃんに抱っこされたり……まあ、色々偏ってるけどそんな感じの数日間だった。

「つて、あれ? ロイド?」

5人揃って姉ちゃんの目の前に立っていたんだけど、ロイドが1人姉ちゃんの方に歩いて行って、小さな声で耳打ちした。そしてそれに姉ちゃんがサムズアップしたけど、むう……聞き取れない。

「ティア、聞こえた?」

「うん。けど、マスターは聞かないほうがいい」

「ぶー、いいじゃん教えてくれても……」

「ダメ」

にべもなく断られてしまった。こうなったら一旦、しゅじゅー関係をハッキリさせてやろうかあと謎のポーズを取っていると、ロイドが戻ってきてしまった。

「それじゃあ皆さん、向こうの世界では蒼矢をよろしくお願いします」

「勿論です。今まで通り、保護者として頑張ります」

「イオリちゃん、放っておくと何をするか分かりませんから」

「2人とも酷いよお……」

リユートさんとレーナさんからの評価が、思ったより悪かった。うう……私そんなに放っておいたらダメなの？

「ロイド君とティアちゃんは、これからも仲良くしてね」

「もちのろん」

「は、はい！」

ロイドが若干気合を入れて返事をしていただけ、ティアはいつも通りで安心した。いや、言わなくても全部分かってるからかも知れないけど。

「それで蒼矢。いつてらっしやい」

「うん！」

元気よく返事をして、引っぱりだした大鎌をティアの持っている杖と交差させる。途端に足元に巨大な魔法陣が広がり、キラキラと光の粒子が舞い始める。

やっぱりこれは、行く寸前に言わないとね。

「それじゃあ姉ちゃん、行ってきます!! また今度！」

そう言っただけで私達は光に包まれ、異世界へと転移した。

第14話 異世界に帰還

ティアの杖の効果もあってほんの少しはマシンになったが、やっぱり異世界転移は非常にガタガタと揺れていた。

(うう……長い時間いると酔いそう……)

(マスター、我慢我慢)

黒とか金とか色々混じり合った気持ちの悪い色の中、感覚ではすごい速度でまっすぐ進んでるみたいだ。暇なのになぜか口は開けなかったから、念話でティアと話している。

(ん、何かくる)

(な、なにあれ?)

そんな中、前方になにかよく分からない白い光が見えた。転移が終わりの時のとは違うし、女神様の所に転移させられた時とも違う。

「っ！」

どうみても、どこかで見覚えのある人型の生物だった。

(マスター、対シヨック姿勢)

行きは神様に拉致られて、帰りはアニメのキャラと遭遇ってどういう事!? そんな事を思っている間にも、不審な挙動のそれがとの距離は縮まっていき……

「のわああああ!!」

(ぐ、ぬ……)

(ドルベエエエエエエエツ!!)

こんな酷い茶番はあつたけれど、人型を轢いた数瞬後眩い光が私達を包み込み、次の瞬間私達は地球に転移する時に使った小部屋に戻ってきていた。

よし、地球じゃはっちゃける事も出来なかったし第一声は!

「アヴルムよ、私がかあえってきたああ!!」

「帰ってきて第一声がそれ!」

「だって地球じゃうるさくなるから出来なかったんだもん!」

「いや、もん! じゃなくてさ」

私とリユートさんがそんな事を言っている間に、ティアが私のテン

シヨンに悪ノリして叫ぶ。

「アヴルムはいいところだあ！ みんな、はやく戻ってこーい！」

「止めてティアさん！ あなたが言うと、SAN値が削れそうなのが
出てくる未来しか見えないんで！」

そんな風に言っただけでロイドが止める。すっかり地球文化に染まった
ものである。

ちよつと何かの気配が、現在進行形でこちらを見ているのはナイ
シヨだ。

「えつと、とりあえずダンジョンから出ない？」

帰ってきてそうそうちよつとした騒ぎになっていたけど、レーナさ
んのその言葉で落ち着きを取り戻した私達は、とりあえずダンジョン
から脱出するのであった。

◇

「く→うきがうまいい！」

「マスター、私くらいにしか分からないネタは辞める」

「身体が軽い！」

「辞めろ」

「きやん」

ダンジョン脱出直後、ハイテンションのままそんな事を言ってみた
らティアからの全力のチョップを貰った。いいじゃん、どつちも合っ
てるんだし……

「世界が変わっても、あの2人はいつも通りなんだね」

「まあ、イオリちゃん達だから……」

「いつも元気な事はいい事だと思うぞ？」

そういうロイドの声音が今までとは何か違う感じがする。大通り
を歩きながら、やっぱり姉ちゃんに変な事を言われたなって確信す
る。

「それでイオリさん、やっぱり4日くらい休んだら人間界に行くの？」
「いや、色々あるから1週間かな。けどまあ、ロイドを帰してあげたい
し、久々に天上院とも会いたいから行くのは確定だよ」

地球に帰って色々と自分の部屋を漁ったりして、結局懐かしくてみ

んなに会いたくなっちゃったんだよね。因みに天上院から貰った髪留めは、壊れそうだから付けてないけど持つてきてはいる。

「そういえば、なんでイオリちゃんが付いていくの?」

「レーナさん、ロイドの右腕は、マスターを庇ってこうなった」

「そうそう、だから直接謝らないと私の気がすまないもん!」

多分庇ってくれなくても小さな怪我で済んだけど、あの時の私がかもっと早く移動していれば、ロイドがあんな怪我をする事は無かったかもしれない。

「俺はこの腕には満足してるんだが……」

「自分が満足してても、他の人から見たらそうじゃない事もあるんだよ……」

正直なところ、シンデイさんにビンタとかチョップされるくらいの覚悟は出来ている。リクスさんからは逃げる、怖いもん。

「そういえばイオリさん、人間界ってどうやって行くつもりなの?」

「超長距離転移で、頑張ってロイドの両親が拠点にしてるって街の近くまで跳んでみるかな」

「一番確実」

確かにリフンの隣町って話だったし、リフィン辺りに転移すれば多分どうにかなると思う。地球に転移するよりは圧倒的に楽でもあるしね!

「でもイオリさん、気づいてる?」

「ふえ?」

まあ僕達が言えた事じゃないんだけど、と前置きをしてからリユートさんが話し始める。

「大陸をなんの理由もなく自由に行き来できるのって、Sランク以上の冒険者だけなんだよ? それに、魔界に来た時みたいな理由もないから……」

「つまり俺が転移で人間界に行ったら、不法入国になってイオリに迷惑がかかるって事か?」

「とりあえずそうなるね」

特に問題無いんじゃないの? って言おうと思ったら、ロイドがそ

う会話に介入してきた。うーん、ロイドが来たのも私達が獣人界に入ったのも殆どズルだったし今更過ぎる事なんじゃ……

「だったら、ロイド君もSランクになっちゃえばいいんじゃないのかな？ リュートくん」

「え、いや、まあそうなんだけど……」

「それで解決だね！」

「実力は十分」

ウインクとサムズアップをしながらそう答える。私みたいに何か特別な経歴とかは無いけど、Sランクに上がる条件ってペーパーテストと担当の人との模擬戦って事だし。

大鎌使ってる私と二、三回打ち合えるくらいにはなってるから模擬戦は十二分に行けると思う。

「いや、まだ俺は……」

「Sランクだとお揃いなのになー」

シンデイさん達って確か2人ともSランクだったし、そうなるパーティーが綺麗にSランクになるのに……そう思ってたボソツと呟いた私の言葉にロイドがピクンと反応する。

「絶対Sランクの試験、合格してやる」

「マスター、その言い方はズルい」

「え？」

ティアには私のその呟きが聞こえていたらしくそう言われたけれど、何がズルいんだろう？ うーん……あ、そうだ！

「ティアもついでにギルドに登録したら？」

「大昔のがある。Sランクの」

そう言ったティアの手のひらに、古文書みたいな丸まった紙が現れる。大昔って一体どれくらいのこと……

「えっと、だったらこれからギルドに行くって事でいいのかな？」

「そうだね！ それじゃギルドにレッツゴー！」

地球じゃ出せなかったテンションで私はそういうのだった。

第15話 危険なスキル達

「うんっ、なんかすっごく久しぶりに入った気がする！」

私がそんな事を言って、軽く伸びをしながらギルドに入った瞬間空気がガラリと変わる。具体的に言うなら、和やかな雰囲気から第二戦闘配置くらいまで。

その変化に慣れていないロイドの手を引き、冷や汗を流して固まっている受付嬢さんの待つカウンターへみんなで歩いていく。

「すみません。この男の子のランクアップとこっちの女の子のギルドカードの更新をお願いします」

「私は転職部屋を使わせて下さい」

「了解しました……はあ、Sランクへの昇格ですか」

やっぱりかという感じで、頭を抱える受付嬢さん。そしてもう諦めきった雰囲気を出し、能面のような無表情で受付嬢さんは続ける。

「はい、名前は……ロイドさんですね。お二人の推薦という事でよろしいでしょうか？」

「は、はいー」

「気合は十分なようですね、それでは闘技場にてお待ちください。数分後に担当の者が伺いますので。それと【流星群】さんに関しては、この突き当たりの角にあるのでご自由にお使いください」

えっと、その……私への対応冷たすぎない？ 一応私にも迷惑をかけてたって自覚はあるけど泣いちゃうよ？ こ、これでも精神は結構退行……してるもん。

「ギルドカードの更新はランクによつては、再発行となります」

「ランクはS、年代は古すぎて分からない」

そう言つてあの古文書みたいな紙を取り出す。うーん、やっぱりどう見ても再発行のような……

「これは……いえ、ランクはそのまま再発行させていただきませぬ。30分ほどお待ちください」

「了解」

「ううう……じゃあ私は職業見てくる」

「暇だからついてく。リユートさん達は、ご自由に」

トボトボと歩いていく私にティアが付いてきてくれる。いいもん
いいもん、どうせ私は迷惑掛ける系幼女だもん。

「それじゃあ僕達は、ロイド君の戦いを観戦してるから」

「イオリちゃんが応援に来れば、絶対勝てると思うもん！」

「うん、わかったー！」

そう言っ手て手をパタパタと振り、私とティアは一緒に転職部屋に入る。この変わり身の速さはやっぱり、私みたいな小さなこの特権だと思
思う。

「さーて、今回はいい職あるっかなー？」

そのままハイテンション気味で、台座の上の水晶に手を乗せる。い
つも通り大量の職業が表示されると思っていたけど、今回はたった3
個の職業しか表示されなかった。えっと、なにになに？

『ゴブニユ』『ベルゼブブ』『ラジエル』

「ねえティア、これって……」

「うん、確実にスキルの影響」

ゴブニユはいつも通りの鍛冶系職業だからいいとして、他は……

|||||

《ラジエル》

叡智の功を得た者に贈られる聖なる職業。

その者、智の詰め込まれし神の本。世界を暴く者也。

特別職業…この職業を入手すると、種族にラジエルが追加されます。

|||||

《ベルゼブブ》

暴食の罪を犯した者に贈られる罪深き職業。

全てを喰らうその力は、いつか己すらも喰らい尽くすのだろうか？

特別職業…この職業を入手すると、種族にベルゼブブが追加されま
す

いんじゃないの？　っていう頭の悪い考えだ。ほら、よく光と闇が合わさって最強に見えるってあるし。

「二つだけある前例だと、取った瞬間半径10kmを吹き飛ばす大爆発を起こして、しばらく極大の汚染を撒き散らし続けた。因みにバカ転生者」

「やっぱり光と闇が云々は憧れる物なのか……やらないけど」

最高ランクの魔物がうじゃうじゃいるっていう魔物の大クレーター、作られた経緯がまさかそんなのだったなんて……

「それじゃあ七元徳側に移る。こちらは大罪に対応して、《忠実》《節制》《慈愛》《勇氣》《叡智》《正義》《忍耐》の7種類。こちらもちちらでチートスキル」

「それも、この眼で実感してるかな」

そう私は自分の左眼を指差して言う。最近ティアに教えてもらって、叡智込みでのちゃんとした使い方ができるようになってきているのだ。

「こちらはデメリットはなし。けど、ほんの少し対応する感情が強くなる。ただし、対応する職業を取得した場合は別」

「別？」

「そう、極端に強くなるけど、対応する感情に取り憑かれる。あと羽が生える」

「うわあ……」

もしさつき相談しないで取ってたら、叡智だから……ノゲノラのフリーユージェルみたいになってたって事？　もしくはそれ以上……ぶるぶる。

ちよっとした寒気に襲われていると、ティアが最後にと話を続ける。

「最後に。どのスキルも、例外を除き所持者は世界に1人。しかも所持者によって、少しスキルは変質する。詳細は後で教えるけど、正確ではないかも」

「分かった。教えてくれてありがとね、ティア」

「マスターの精霊として、当然の事」

凄く自慢げなティアを横目に、私はもう一度水晶に手を乗せ『ゴブニユ』を選択する。確かゴブニユつてケルト神話だった筈……これはもうゲイボルグ作らないと。

——職業　ゴブニユ　を入手しました——

——マジカル☆スミス☆ハンマーを入手しました——

——条件の達成を確認——

——職業　アルケミスト　が　トリスメギストス　へ成長しました——

「……」

私は無言でマジカル☆スミス☆ハンマーなる物を取り出す。それはピンクと白などの色合いの、なんとというか所謂小さな女の子向け商品みたいな物だった。

「マスター、気にする事じゃない」

「や、優しい目でみるなあああああああ!!」

転職部屋に私のそんな叫びが響いた。

覚がおかしくなつてたみたい。だけど、あの武器が名品っていうならそれはそれで……

「鍛冶師としては、マトモな人に使われない装備が可哀想……かな。ちゃんとした整備がされた様子も無いし。まあ、私らしくない考えだけどね」

「ロイドも、呆れ半分みたい」

そう言われてロイドの顔を見てみるけど、目の前に集中してはいるものの表情から呆れが見て取れる。

全身鎧を着てる相手のせいか、ロイドは思いつきり攻めに移れないでいる。うーん、ちゃんと刃筋さえ立てれば私の剣ならあんな鎧、一太刀で両断できるのに……

「そういえば、なんで普通の武器でやってるの？」

目の前のバトルを見て、ふと思つたことをリユートさん達に聞いてみる。審判みたいな受付嬢さんはいるけど、話しかけに行ける雰囲気でもないからね。

「原理は分からないけど、気絶かHPがなくなつちゃう攻撃を受けたら外に出される結界が張つてあるんだって」

「まあ、よくあるデュエル用のフィールドってやつだよ、イオリさん」
「マスター、そこから結界」

そう言つてティアが指差す場所を解析してみると、確かにそういう効果の結界が張つてあるみたいだった。うーん、でも義手の必殺技はどっちもそれくらい貫通しちやいそうだなあ……

面白いから、とりあえずティアに似たような効果の魔法を作れないか頼んでおいて……精霊使いが荒いつて言われたけど、楽しそうだからいいじゃん。

「これって応援しても大丈夫だよな？」

「お好きにどうぞって言つてたね」

「ありがとリユートさん」

一応そこそこ距離があるので、一旦息を大きく吸い込んで私は言う。元々応援するつもりで来たんだし、やっぱりやっておかないとね！

「ロイドー、やっちやえー!!」

「おうっ!!」

私の声が届いた途端、ロイドの動きが良くなった。私の声には、ワルキューレとかシンフォギアの効果が!? いや、無いよね。

対戦相手がすごく驚いてたから、耳をすませてどんな会話をしてるのか聞いてみる。

「な、お前今まで本気じゃなかったのか!?!」

「当たり前だ!!」

うん、まあそうだよ。ロイド、魔法を一切使ってなかったし。それに義手の機能……スラスターもなにも使わずにやってたもん。

「はあっ!」

「な、なんなんだよっ!?!」

全力で動き始めたロイドの振る剣は、全身鎧を少しずつつ斬り飛ばしていく。ふふん、私の武器はあんな使い手を振り回すような品じゃないのー!! というか、完全にロイド専用になるように2日に1回ずつくらいの頻度で調整してるし!

スラスターも魔法も使い始めたロイドに、元々ギリギリ以下の戦いをしてきたSランク（仮）な人が耐えられる訳もなく……

「ち、ちくしょう……」

そんな小物感溢れるセリフを残して、Sランク（仮）さんは大きくばってんに斬り裂かれて倒れた。血こそ出なかったからいいけど、こういうのを見るとやっぱり怖いって思う。

「勝負あり! 筆記・戦闘の結果から、冒険者ロイドをAランクからSランクに昇格します!」

「よしっ」

剣を鞘に納めたロイドが小さくガッツポーズをする。私とリュートさんの時もそうだったけど、やっぱり嬉しいよね!

私達と受付嬢さんの5人分の拍手が響くなか、結界の外に放り出されていた例の男が何故か鎧が修復された状態で戻ってきた。

「対してダブルスさん、あなたはAランクへと降格です。普段の行動や依頼の怠慢、その結果がこの試合です。言い逃れはできませんよ」

「ま、待ってくれ。ここには他のSランクがいるんだ!!　そ、そうだ、その小さいの!　お前ら両方ともSランクなんだろ?　俺と勝負しろ!」

「え?」

突然巻き込まれた。えっと、小さいのって言ったら私とティアだろうけど、私達と戦ってなにがあるの?

「俺がこいつらに勝ったら、降格は取り消しにしよう!」

そうビシツと決めるダなんとかさん。冒険者に、そんな権力なんてないよね?　クラネルさんクラスならまだしも。なんて事を思っている内に、受付嬢の人が渋々といった様子で口を開く。

「仕方がありません、次は無いと思ってください。勝負はなんでもありの一本勝負でいいですね?」

「いいだろう」

……いやちよつとわけがわかりませんね。いきなりすぎてなにがなんだか……あ、負けるつもりは一切ないけど。

「すみません、私も自分の馘首^{クビ}は惜しいのです。本当にすみません」
そう小声で受付嬢さんが謝ってくれた。そして小声で事情を説明してくれる。なるほど、七光りのバカ息子ってやつか。私達を小さいのってしか言わなかったのもそれなら納得だね!

「大丈夫です、負けるつもりなんてさらさらありませんから!」

「5秒あれば倒せる」

こうしてなんだかよくわからない内に、よくわからない戦いを私達は押し付けられるのだった。よくわからないまま戦うけど……うん、生き物の定めだよね!　(違う)

第17話　ダなんとかさんは玩具

負けるつもりはない。それにさっきの戦いを見る限り京に一つくらしいの可能性でしか負けないだろうけど、決闘デュエルを始める前に一つだけ言っておかないといけない事がある。

「ダなんとかさん。戦うのは別にいいですし、確かにSランクの冒険者ではあるんですけど……私、非戦闘員ですよ?」

ダなんとかさん以外から、こいつ正気か?　って感じの目が向けられてるけど、私の職業だけを見るなら完全に非戦闘員だもん。間違っ
てはない。

「ふん、それなら好都合だ。そして私の名前はダビルスだ!」

「それじゃあ私は2番手で戦いますね」

そう言っただけはリユートさん達が待っている場所まで戻る。そして次の瞬間リユートさんから小声で質問が飛んできた。

「変な物でも食べ……いや、薬でも盛られた?」

「いや、なんでそんな結論になるのさリユートさん」

「だってイオリさん、バチバチするバトルって大好きじゃん」

うん。まあ、バトルとか体を動かすのが好きじゃなかったら、クトウルフと戦ったりなんだからってことしないしね。

「イオリちゃん、熱でもあるの?」

「レーナさんまで……いたって健康だよ!」

レーナさんが私のおでこに手を当ててきたので、手をバタバタと動かして抗議する。むう……一応狙いがあってやったことなんだからね!

「うう……あいつを油断させようと思ってやっただけなのに……」

「いや、イオリ。言っちゃ悪いが、あいつは本当に雑魚だぞ?」

「まあ装備もそあ……いや、みれば弱いってわかるけどさ。さっきの話を聞く限りやり放題してるみたいだし、一回トラウマ刻み込んであげようかなって」

私が本当に小声でそう言うと、みんな納得したように頷いた。

あういう七光りのやってる事って大体碌でもない事だけど、実際に

受付嬢さんから聞いちやったせいでちよつと頭にきてるのだ。あの装備も他の冒険者からの盗品とか……

あの着てる装備はぶつ壊す予定だから、奪われた人には通常の10分の1くらい値段で+10の同じような装備をあげようと思ってる。出血大サービスだ。

「ん。マスター、終わった？」

「終わったー。やっちやえティアー！」

この前渡したばかりのカドケウスの杖持ったティアアが結界の中に入っっていく、奥でバトルアックスを構えているダさんと向かい合う。ダさんって、駄さんみたいで案外いいかも。

「ふ、魔法使いか。知ってるか？ この鎧は「知ってる」ふむ、貴様鑑定スキルを持っているのか」

「そう」

「それなら分かっただろう？ この鎧には魔法を無効化する力が……」

……なんかそんな感じのことを長々と駄さんは話し始める。あんな中途半端なヤツの自慢なんて、聞く気は一切ないけどね。それに、見る限り魔法無効化とか言っても微妙なレベルだし。

「あ、そうだ。Sランク昇格おめでとーロイド」

「いや、毎日イオリ達が戦ってくれたお陰だよ」

さつき昇格したロイドの近くに寄って、とりあえずハイタッチする。流石に抱きついたりちゅーしたりは恥ずかし過ぎるから無しだ。

「そういえばロイドって、好きな食べ物とかある？」

「ハンバーグだけど……それがどうかしたのか？」

「いや、昇格祝いにロイドの好きな物でも作ってあげようかなーって。夜ご飯、それでいい？ リュートさんレーナさん」

ティアアには今もこの心の中が筒抜けだろうからいいとして、残りのリュートさん達に聞く。

「別に僕はいいけど……」

「私もいいけど、そろそろ始まるよ？」

リュートさんから謎の視線を向けられている中、レーナさんがそう

教えてくれたのでティアの方に視線を戻す。まあ、さつきからティアイライラしてるからすぐ終わるだろうけど。

「で、あるからして、貴様は俺には勝てないのだ！
「チツ」

あ、ティアの目が本気だ。結界が吹き飛びそうだから、少しずつ私の魔力で結界を強化しておく。

「それでは、デュエル開始です！」

2人の準備が終わったことを確認した受付嬢さんが、デュエル開始の宣言をした。私の時、滅びのバーストストリームでも撃とうかなあなんて考えていると、ティアが小さく呪文を唱えた。

「行け」

「そのような魔法で、このよ——」

ティアが放った青い炎の弾を見て、駄なんとかさんは何かを言おうとしたみたいだけど、すごい速度で迫った炎弾が当たった瞬間、爆炎に包まれてフツと消えた。

ティアの宣言通り開始5秒で終わったね。

(今のはメラゾーマではない。メラだ)

(それやりたかっただけでしょ)

(もちろん)

ティアと念話でそんな話をしている間に、駄さんが結界の中に戻ってくる。

「つ、次はお前だ！」

「はいはい」

大鎌を引つ張り出しながら、私も結界の中に入る。うーん……なんだろうこの護られてる感。若干気持ち悪いかも。

「そのようなひび割れ壊れた物程度、この俺の敵ではないわ！」

「調整開始。通常モードから特化モードへ。キラー設定。対人型 | 100%、対金属500%」

一度バラけて空中に浮かんだ刃の破片が、綺麗な音を鳴らしながら同じ形に組み上がる。今回はちよつと細かく設定してみた。因みに、この状態だとそこそこ面白ことが起きる。

「そ、それでは。デュエル2本目開始！」

若干冷や汗を掻いている受付嬢さんの宣言が終わると同時に、適当な速度で近づき大鎌を二閃する。クロスするように振ったから、バトルアックスも鎧も巻き込む形だね！

「ぎやあああああああ……あ？ 斬れて……ない？」

「その代わり、しばらく動きませんけどね」

ニコッと冷たい笑みを浮かべながら私は言う。大鎌に斬られたバトルアックスとその延長線上にあった鎧は、許容できるダメージを大幅に超えたせいか細かい破片になってしまっている。けど、それらの後ろにあつた腕には真つ赤な線が走っているだけだ。

「お、お前は非戦闘員じゃなかったのか!？」

「別に戦えないなんて、一言も言っていないですよ？」

「俺の腕に何をした!？」

「教えるわけじゃないじゃないですか」

普通に大鎌で斬っただけなんだよね。キラーを100%くらいにすると、斬つても痛みと斬られた感覚が走るだけでむしろ相手を回復するっていうよくわからない効果の賜物なのだ！

なんて思ってる間にへぼい魔法が飛んできたけど、髪が少し揺れる程度しか効果はなかった。

「ひっ」

「さあどうしました？ まだ腕が動かなくなっただけですよね？ 勝ちたいんらかかってきてくださいよ。もっと強い魔法を！ 武器がないなら肉弾戦を！ その間に腕を治して武器を取ってくださいよ！ 仮にもSランクの冒険者ならそれくらいできるでしょ!? ハリー！ ハリー！ ハリー！」

「ば、化物幼女……」

そう言つて、倒れたままの駄なんたらさんがずりずりと逃げている。全く、こんな若干アーカードさんの真似をしただけで逃げ出すなんて……いや、私もテンションが上がってたのは否定できないけど。

「所詮こんなものですか七光りさん。じゃ、サヨナラです」

「うがっ」

冷たい目になるようにして大鎌を一閃する……んじやなくて、刃の無い方で思いつきりぶつ叩く。

「勝負あり！ 先の宣言通り、ダビルスさんは降格処分となります！」
シンと静まり返った闘技場に、受付嬢さんのそんな声が響いた。

第18話 ようやく人間界へ

地球に行く前に泊まっていた宿、私達は前と同じような大部屋に泊まっていた。そして大部屋の真ん中にある大きめなテーブル、その上には今かなりの量の料理が乗っていた。あ、勿論宿屋の主人さんにはOK貰ってきてるよ？

「それじゃあ、無事にこの世界に戻ってこれた事、ロイドのSランクへの昇格を祝って！」

こういうのを音頭をとるって言うんだっけ？ 私は一旦そこで区切ってテーブルを囲むいつものメンバーを見渡す。見る限りみんな準備はOKみたいだったので、せーのといってタイミングを合わせ……

「「乾杯！」」

暇つぶしに作っていたガラスのコップがぶつかり合いカチンとい音が鳴る。料理用に赤白ワイン、日本酒料理酒は常備してるけど入れてないよ。因みにこれはバレたらリユートさんに没収されるからナイショの事だ。

「ふふん。今日は腕によりをかけて作ってみたよ！」

「それはいいんだけどイオリさん、どうやってこんな量作ったの？もしかしてあの扉の先、精神と時の部屋みたい……」

「なってないよ？ 気合い入れて作りはしたけどね！」

牛乳の入ったコップを置いてからガッツポーズをして答える。ちゃんと私の手で形作ったハンバーグ、お味噌汁にマッシュポテトとサラダ。そして最後に土鍋で炊いたご飯。5人分のそれを、レーナさんに少し手伝って貰いながら一生懸命作ってみた。この前帰った時に読んだマンガの影響とか言っちゃいけない。

他にもおかずとして、大皿で唐揚げとか麻婆豆腐とかも色々作ってある。食べ合わせが悪いとか言っちゃいけない、こっちは私が食べたかったから作っただけだし。

「それは、まあ……お疲れ様」

「ううん。私達がSランクになった時もこんな感じで宴だったから盛

大にやりたかったんだ！」

「そうだったのか？」

この場で唯一、あの場の記憶のないロイドがそう尋ねてくる。ティアは……満面の笑みでハンバーグを頬張ってる。なんたらピツグっていうSランクの豚の魔物の挽肉使ってるし、心を込めて作ったから美味しくない事があるだろうか？ いや、ない(反語)なんちゃって。頭の中でそんな事を考えている間に、そのロイドの疑問にレーナさんが答えていた。

「そうだね、あの時は大変だったんだよ。イオリちゃんが、リユートくんのお酒を間違って飲んで酔っ払っちゃって……」

「酷いからみ酒だったよね」

「ねー」

「そうだったんですか……」

そう言いながらロイドがこつちを見てくるけど、正直記憶がないから首を傾げておく。それにしても、酷いからみ酒か……私何をしてたんだろう？

「^知ひりたい？」

「うわあっ！ ティア!」

ちよつとどんなのだったか考えようとした時に、横からズイツとティアが出てきてそう言ってきた。び、びっくりした……

「い、いや、止めとくよ」

「そう。それなら私は食べる、あむ」

そう言うとティアはご飯を食べに戻った。いや、ご飯を美味しそうに食べてくれるのは嬉しいんだけど。ああ……うん、笑ってくれてるしやっぱりいっか。

後はこの後の行動をどうするかを話せば……そう思ってたリユートさん達の方を見た私は、一瞬で話しかける気が失せた。だって……

「はいリユートくん、あーん」

「ちよ、レーナ、ここ人前だって……」

こんな感じのイチャイチャを見せつけられちゃったんだもん。まあ、私達はあと3日で人間界に行くって決めてはいるんだけど。

リユートさん達とは話せないからロイドを褒めるとして……あ、そうだ。

(あーテストス。ティア聞こえる?)

(問題無い。感度良好)

(あのあーんってやつ、ロイドにやったららご褒美みたいなものになるかな?)

(十二分に)

ティアはそれだけ言っただけで念話をプツンと切ってしまった。でも、とりあえず情報は聞けたしいいか! まあ半分くらい罰ゲームだったとはいえ、昔た……天上院にもやったことあるし今更恥ずかしくは無
いかな。

そうと決まればある程度小さめにハンバーグ切って……

「ロイドロイド、ちよつとこつち向いて?」

「ん、どうかしたかいオリ?」

「はい、あーん」

そのハンバーグを刺したフォークをロイドに差し出すと、顔を赤く染めて口をパクパクしている状態で固まってしまった。あれ?

「食べないの?」

「いや、た、食べる……ぞ」

そしてその真っ赤な顔で一応食べてくれた。間接キス? 大皿一緒に突っついてる時点でもう遅いでしょ?

「私以外から、ラブコメの波動を感じる」

と、まあそんなこんなでちよつとした宴会の夜は更けていくのだった。

◇

そして、特に何かイベントが起きる訳でもなく3日。時折ダンジョンに魔力を充電しに行きながら、超長距離転移の準備をしながら日々は過ぎていき出発の日になった。

「やっぱりお別れは寂しいなあ……」

「準備さえ整えば、イオリさん達なら会いにこれるよね?」

「それでも寂しいものは寂しいんだよ……」

「まあ、そうだよね……。あ、ロイド君ちよつとこつちに」

「は、はい」

街から出て少し行った辺りで今私たちは話している。今回はさすがに街の外から転移だ。かなりかなり戻ってこないだろうし。

少し離れた場所でリユートさんとロイドが話してるけど、今回も聞こえない。くつ、ロイドが音遮ってる……

「寂しくなったら何時でも会いに来ていいからね？」

「うん！……あ、そうだレーナさん」

危うく忘れるところだった。昨日、レーナさんに渡すためにほんの少し打ち直しをしたやつがあつたんだつた。

「はい、これあげる！」

「これって確かイオリちゃんの……」

「マスターが、今まで使っていた太刀」

そう、私がレーナさんに渡したのは最近あんまり使えてなかった緋色之拵声刀だ。このまま使われる機会が少ないよりは、レーナさんに使ってもらったほうがいいかなって思ったんだよね。

「よし、ロイド君ーっていいよ。無い——思——絶対ーみ——にはなら——に注意し——？」

「はいー」

と、そんな事をやっている、清々しい顔でロイドが戻ってきた。最後、途切れ途切れ聞こえてたけど、無い、絶対って言ってるし大丈夫だろう。

内容は気になつたけど、そう割り切つて私はボロボロになり始めている地図を取り出す。本当に初めの頃、リフンのギルマスさんから貰ったやつだ。

「とりあえず、まずはメイさん達と会いたいから……どこに行けば会える？」

「【リフン】の隣町の【エモフ】って街にいるはずだ。基本的に父さん達、あの街から動かないから」

そう言つてロイドは、リフンから少し離れた場所に書いてある小さな街を指差す。ふむ、そこか。場所を確認してから魔法陣を起動さ

せる。

「つていう事だからリユートさんレーナさん。今までお世話になりましたー！」

「ん、バイバイ」

「今までありがとうございます！」

三者三様な言葉でリユートさん達に今までありがとうございますという事を伝える。三者三葉じゃないよ。そしてそう言っている間にも、魔法陣にここ数日貯めた魔力が流れ込んでいき着々と準備は終わっていく。

「イオリちゃん、この刀もだけど今までありがとうね」

「僕達が居ないからつて、やりたい放題やっちゃダメだからね」

「うん！ それじゃあまたいつかね！」

「元気でね」

「ストップパーになれるように頑張ります！」

そしてその挨拶が終わった時、魔法陣が一際大きく光り輝き私たちは浮遊感に包まれた。

「だけどロイド、私達のストップパーになるには少しロイドじゃ足りないと思うんだ……」

第19話 人間界は衰退してました

ほんの少しの間浮遊感に包まれた後、私達はきちんと魔界から人間界の橋への超長距離転移には成功した。けど、それは完全な成功はじゃなくて……

「あいてっ」

「むぎゅっ」

「うわっ」

地面から10mくらいの高さに放り出された私達は、そのまま街の大通りと思われる場所に落下した。ううく……多分これ鼻赤くなってるよ……

とりあえず転移には成功だね！ そう言おうと思つてロイド達にいる方に振り向いた私は、街に尋常じゃない異変が起きてる事に気付いた。

「なに……これ？」

大型の馬車も楽に通れそうな大通りなのに、露店は一個もないし人通りも皆無に見える。そして極めつけに、家とか宿があると思われる場所から真っ黒な煙が立ち上っている。火事じゃ……ないみたいだし、なんだろう？

「どうかしたのかイオリ？ 確かに人が全然いないのはおかしいが……」

「いや、そうじゃないんだよロイド。あの黒い「マスター！」え？」

かなり焦った声音でティアが指をさす。ティアが焦るなんて何事!?! って思いながら指差す方向を見ると、そこには黒い煙に包まれた人型の……多分女の人がフラフラとした足取りで歩いていた。

「ステータス見て！」

「え、うん」

そのティアの半端じゃない焦りようが気になって、私も歩いている人に魔眼で解析を掛ける。

するとそこには、いつだったか見たロイドが片腕を失った時にも見た文字が並んでいた。【洗脳】【催眠】それに【傀儡】とか【精神支配】

なんて物騒な物まで状態異常の欄に書かれている。

「っ！ ロイド、家はどっち?! ちよつとこれは尋常じゃなくマズイ！ ティアはいつでも逃げられるように準備してて！」

「あ、あつちの角を曲がってすぐだ」

「了解」

私はロイドの手を引いて走り出す。そういえばさっきの状態異常は、感染するみたいに移っていくことを思い出し、走っている少しの間に私達全員分のステータスを確認する。するとロイドだけ状態異常の欄にさっきのやつが点滅し始めていたので、回復の魔法でそれを打ち消していく。

「よく分からないけど、大変な事になってるって考えていいんだな？」
「うん！ もしかしたらメイさん達と戦う事になるかもしれないから、戦える準備だけはしておいて！」

「父さんと……？ とりあえず分かった！」

素晴らしいながら私も、地球で拳銃を斬ったナノゴレムを取り出して私の周りに浮かばせる。ついでに《タキオン神経加速》を使うのも忘れずにね。

「マスター、転移場所はどこに？」

「私がこの世界に召喚された時の丘！ できる？」

「造作もない」

足音がしなしなしと思ったら、ティアは空中に浮かびながらついてきていた。って、そうじゃないそうじゃない。今はもうちよつと集中しないと。記憶にあるメイさんとシンディさんになら時間稼ぎは出来るけど、多分あの時は本気じゃなかっただろうから油断は出来ない。

「あそこだー！」

「2人が攻撃してくるかもしれないから気をつけて！」

「え？ わ、分かった」

目に困惑を浮かべたロイドが、そう疑いながらも返事を返してくれる。まあ、ロイドが動けなくても私が最悪どうにかするんだけどね！

そして見えた家は、ありふれた一軒家で黒い煙は他の家と比べると

少ない。

「父さん！ 母さん！」

そう言つてロイドが入つていった家には、誰も人は居なかった。というか、ここしばらく人が住んでないような感じまでした。埃がかなり積もっているから多分それは確実だと思う。

「誰も……いないっばい？」

「マスター、手遅れだったかも」

そう言つて肩を落としてしていると、魔界では某ワンコが強くてOFFにしていた魔眼が反応して、視界に赤い線と文字が現れる。

|| || || 《物理攻撃／威力 低／範囲 小／棍棒／危険度 極低》 ||

|| ||

「《盾》^{シールド}！ カウンター！」

家の奥の暗がりから現れた男の振つた棍棒を防ぎ、カウンターで大きな板状にしたナノゴーレムの塊を叩きつける。ナノゴーレムは、魔力さえ通せば形の変化も硬度も結構自由自在だ。火力はあんまりないけど、対人なら凄いい効果を發揮してくれる。

「殺……すべし」

「ロイドは何か置いてないか探してきて！ 今みたいなのには気をつけてね！」

「分かった！」

その間に私とティアは、周りの警戒と逃げる準備をしておく。オフェンダー||サンみたく、サヨナラーして爆発四散はしたくないからね。それにしても、一体なんなのさコレは。帰ってきてそうそうこんな変な事に……

「イオリ！ こんなのがあつた！」

そんなことを考えてる間に、ロイドが奥から何やら手紙のような物を持つて戻ってくる。えっと、内容は……？

「『いつか戻ってくるだろう息子へ。色々と気になる事は有るだろうが、これを読んだのならリフンへ来い。お前が正気を保っている事を祈る』か」

「父さんと母さん、無事なのかな？」

もう半年は前の事になるのか……懐かしいなあって思っていると、玄関の方からバゴンツという物音が聞こえた。

慌てて振り返ると、無残に壊されたドアの向こう側に、虚ろな目をして鍬くわのような物を持った男が立っていた。そしてその奥には、何かしら物を持ったこの街の住人だと推察できる人達が延々と続いている。

「マスター、転移場所は変更する!？」

「しない! このまま緊急脱出!」

左手を振って《盾》シールドを人混みに叩きつけ、ティアの転移の魔法が完成するまでの時間を稼ぐ。これが魔物なら、攻撃用の魔法を全力全壊で撃てばいいんだけど、人だからそんなのはしたくない。

「イオリ、ティアさん、これって一体どうなって……」

「多分リフィンに行けば分かる!」

「転移準備、完了」

若干呆けているロイドの手を握り、反対側の手でティアの手も握る。これで一応、適当な転移でも逸れることは無い。若干ティアから抗議の念が届くけど、妨害とかがあるかもしれないじゃん。

「《緊急テレポート》」

そのティアの魔法で、私達は本日2度目の転移でこの街から逃げ出すのであった。緊急テレポートだけど、私達はサイキック族じゃないよ。

第20話 勇者PTVS幼女達

命からがらではなかったけど転移で緊急脱出した私達は、懸念してた転移の妨害もなくきちんと転移することができた。

「まさかこんな形で、ここに戻ってくるとは思わなかったよ……」

そうため息を吐きながら周りを見渡す。相変わらずある澄んだ池に、近くには記憶と寸分違わない城門が、街がある。さっきまでいたロイドの故郷の街と違って黒い煙も見えないし安心していいみたいだ。

「マスター、近くに魔物以外の敵影はない」

「ん、教えてくれてありがとうねティア」

よくよく見ると、私がウルフの群れと戦った時の落とし穴も残ってる。池みたいになってるけど……まあやつちやつたものは仕方ない。

「イオリ、エモフの街に何があったか分かるか？」

「ううん、あの黒い煙といい状態異常といい、ロイドが私を助けてくれた時のあの人達と同じってことしか分からないかな」

その他には、多分私を標的にしてたくらいは分かってる。ロイドの時もそうだったし、さっきも私を見て殺すべしって言ってたし。

「黒い煙って、なんだ？」

「え、ロイドは覚えてなかったの？ ティアは？」

「あ、ああ。ただ目が血走ってるおかしな人しか見えなかった」

「私は見えてた」

「そうなんだ……」

休憩も含めて転移した直後の場所に止まって、見えていた私達とロイドの違いを考える。やっぱり転生者？ いや、でもそれにしてもその時リユートさんは黒い煙のこと何も言っていなかったし……

「ねえティア」

ティアにも考えを聞こうとそう呟いた瞬間、今までの戦ってきた経験が尋常じゃない強さの危険を訴えてきて、それに一拍遅れて魔眼が真っ赤に染まり未来から読み取った情報を眼に映し出す。

ⅡⅡⅡ《剣技・武技／威力 推定不能／範囲 極大／グランドクロス 星天十字斬・

最大チャージ／脅威度 即死級》 Ⅱ Ⅱ Ⅱ

全員での転移は今からじゃ間に合わない、相殺も不可。それなら耐えられるか分からないけど！

「祓い給え清め給え」

十字斬の1発目が、眩い光と共に現れる。ティアも反応が少し遅れたみたいでまだ魔法を使えてない。ロイドは今気付いたみたいだ。

まだ私の周囲に浮いていたナノゴーレムで気休め程度の防壁を作りながら、今の私の使える最大の防御の魔法を発動させる！

「寒言神尊利根陀見 つ!!」

私達の頭上に、20個の次元の断層が現れる。ストブラの煌華麟でできるアレと似たような物思ってくれていい。なんて思ってる間に、私の魔法の完成とほぼ同時に放たれた2発目の斬撃が落下してくる。この技の元ネタの変態には及ばないけど、それでも私の総魔力の半分も使ったんだから効果はあるはず！

「くっ、う……」

「はああっー」

それなのに、10枚目までが呆気なく蒸発する。少し威力は弱まったけど、相変わらず直撃したら私達がh a g eするのは間違いない。

バカみたいに私の魔力は消費されていくし、ロイドがルガーランスもどきでバリアを張るけど多分ほぼ意味がない。

Ⅱ Ⅱ Ⅱ 《剣技・武技／威力 推定不能／範囲 大／天墮断／脅威度 即死級》 Ⅱ Ⅱ Ⅱ

更にダメ押しで、極大の一閃が私達に向けて落下してきた。私ももう次元断層の維持に精一杯で他のことが出来そうにない。ロイドのマッキーパンチか理想送りなら全部迎撃出来たかもしれないけど、それももう遅い。

「引裂き、飲み、喰らえ 《暴王の月》」

残りの次元断層が一枚一枚割れていく絶望の音の中、最後にそんなティアの声が聞こえた。

◇

「やった!?!」

「委員長、それ倒せてないフラグ！」

転移で相手の頭上に転移、アルデイトさんと俺の武技に鈴華の忍術、その全てが直撃した砂埃の立ち込める場所を見て、つい俺はそんな事を言ってしまった。

ギルドの闘技場で訓練として模擬戦をしていたら、俺や鈴華、アルデイトさんに山ちゃん先生の持っている七元徳のスキル、その対極のスキルを持っている人物が先生の作った領域内に転移で侵入してきた。

七大罪スキル持ちの人物なんて大体がロクな人じゃない、海堂がいい例だ。という事で先手必勝という事で強襲した次第だ。ここまで考えを巡らせていると、アルデイトさんが大きく舌打ちする。

「おいタクミ、今すぐ防御を全開にしろ!! スズカはタクミの後ろに隠れとけ!!」

「はいー」

「武技・イージスシールド！」

何故そんな指示が出たのか分からなかったが、鈴華さんは空中を蹴って俺の後ろに回り、俺は落下しながら全力で防御の武技を発動させる。大体こういう時のアルデイトさんの言うことはやっておいた方が身のためなのだ。

「来るぞー」

そうアルデイトさんが言った次の瞬間、防御に特化している俺が全力で防御をしなければいけなかった理由が分かった。砂煙の中から光も飲み込んでいるような黒いナニカが俺たちに向けて幾筋も飛来してきたのだ。防御には成功したが、全員大きく弾き飛ばされる。

「何よ、今の」

「アルデイトさん、アレなんだかわかります？」

「さあな、だが連発はできねえようだぜ」

何かがあるのは事前に予測できていたから三人全員事も無げに着地することが出来たが、全てが見えていた俺とアルデイトさんは冷や汗を掻きながら事実を確かめ合う。

「まさか、武技が削り取られるなんてね……」

に記憶が蘇る。蒼矢がしきりに勧めてきたゲーム、もしあの能力がそのまま使えるのなら、聞いた事もない詠唱だったけどどちらにしろ勝ち目は薄くなる！

アルデイトさんがレベルカンスト直前のスピードで迫るけど、届く可能性は殆ど無いに等しい。これは正直、マズイかも。

「武技・イージスシールド！」

Svartalfheimr.Dainsleif
「幻想世界・戦乱の剣！」

せめて自分達だけでも。そう思って使った武技ごと、次の瞬間には銀髪の少女が創造した世界へと飲み込まれていった。

第21話 中途半端な決着

Svartalfheimr.Dainsleif
「幻想世界・戦乱の剣！」

まだ閃光と魔力の使いすぎで掠れる視界の中、聞き覚えのある声で展開された何かを無理矢理押しつぶして私の切り札たる『創造』を発動させる。

ちゃんとティアもロイドも生きている事を視力の代わりに魔力で確認して、警戒はそのままに私は叫ぶ。

「防げてなかったら死ぬところだったぞこんやろー!!」

さっきの街の追っ手だかなんだか知らないけど、ロリシヨタにいきなり即死技重ねくるとかバカじゃないの!?! 鬼! 悪魔! ちひろ!!

向こうが動揺してるみたいだけどそれはそんなことするか! こんにちは死ね! をしてくる向こうが悪いんだい!

「ロイド、ティア、大丈夫?」

「ん、問題ない」

「俺もまあ、問題はないぞ」

戻ってきた視界で2人を確認すると、ティアは言う通りちよつとした擦り傷くらいしか見えなかったしHPもそんなに減ってなかったけど、ロイドの方は全く大丈夫じゃなかった。色んな所の骨にヒビが入ってるし切創に擦過傷に諸々が盛りだくさんでHPも半分くらいまで消し飛んでいる。

「強がっちゃダメ! 《エクスヒール》!」

全力の回復魔法をかけて出来るだけロイドを回復させる。私?

傷自体はもう残ってないかな。HPも7割くらいまで残ってる。

「ティア、私はあの一番おっきな男の人とやってくるからサポートお願い」

「了解」

「イオリ、俺はどうすればいい?」

「安静!!」

いくら回復させたって言っても、すぐに治るわけじゃないもん。け

ど、何もしないままじゃ後々面倒くさい事になるかもしれない……
「体力が回復してちゃんと動けるようになったらティアの手伝いをして欲しいな。もしくはここから砲撃支援かな」

「分かったー!」

ロイドのその答えを確認してから、私も頭を戦闘用に切り替える。それと同時に再集合させたナノゴレムを私の周囲に待機させ、それに紛れていつもの戦闘装束に早着替える。

「アサルト：ジャンプ『《攻性転移》』」

ティアは杖を取り出したけどそれで十分。人の命を挨拶も無しに刈り取ろうとしてきたんだ、腕の一本や二本くらいは覚悟しなよ!! 後で（作り）治してあげるから!

◇

「アルディートさん、後ろです!」

未来視の能力で俺はアルディートさんに情報を伝えただけ、それはいつもと比べると余りにも遅かった。思い当たる理由は一つ。

全く戦う気力が一切湧いてこない。ついさっきまでは戦いの事を優先して考えていた筈なのに、今は少したりとも考えられない。

加えて身体の動きもまるで泥沼の中で動いているように遅い。アルディートさんは地力の差なのか効きが薄いのか動いているけど、それでも普段と比べると明らかに精彩を欠いている。

そこまで考えた時目の前に転移特有の空間の揺らぎが発生し、次の瞬間大爆発を起こしながら2人の少女が転移してきた。この状態を創った少女はアルディートさんに大鎌を振りかぶり突進する。

「斬!」

「なんだと!?!」

銀髪の方が振ったひび割れた大鎌とアルディートさんの持つバスタードソードがぶつかり合った瞬間、バスタードソードが真っ二つになり粉々に砕け散る。そして大きく後ろに飛んだアルディートさんを追って、靴に生えている羽を羽ばたかせる。

「委員長! よそ見してる場合じゃないよ!」

俺の意識はその鈴華さんの言葉によって目の前に引き戻された。

目の前には、多数の複雑な魔法を周囲に侍らせた虹髪の少女がいた。ジャブの様に飛んでくる魔法を逸らしているけど長くは続きそうにない、一旦態勢を整えないと。

「武技・」

一先ず武技を使って防御を。そう思つて武器を構えて瞬間、ドクンと何かが脈打ち強烈な念が頭に流れ込んでくる。

私から平和を奪わないで。平和に過ぎさせて。戦う意味なんてない、みんな仲良くしようよ、そうしたらまた日常を過ごせるんだから。鎮まれ、鎮まれ、鎮まれ。平和たれ、平和たれ、平和たれ。

普段より動きにくい中、更にそんな念で戦意を鎮静化されているせいか余りにも動作が緩慢になってしまっている。そして、相手の本命の魔法が放たれる寸前、

「ふむ、あなたが天上院 匠？」

そんな事を言われ、魔法も杖の動きもピタリと止まったのだった。なんで俺の名前を？

「そうだけど、それで？」

「まずは1発喰らえ」

「え？」

混乱治らない中、僕は落下してきた帯電する氷でできた握り拳に思いつき殴られたのだった。

◇

（うっそでしよこの人!? いっだったか戦ったクラネルさんとか、ミーニャちゃんのパパと同じくらい強いんだけど!?)

大鎌で切り落とすつもりで斬りかかっているのに、そのことごとくが躲される。時折フェイントを入れてみたり、魔法とか斬れる蹴りとかを繰り出しているけど当たってもたいしたダメージにはなっていない。

「おらおら! 最初の勢いはどうした!」

「今だって全力ですよ!」

折角使えるようになってた初見殺しの某馬上槍の宝具の効果も、装備に擦りでもしたら粉々に出来るキラー能力も、当たらなくちゃ意味がない。

多分一個目の能力は、いつだったかリユートさんがこの鎌を王の財宝に仕舞った事があるって言ってたからそれがようやく使えるようになったんだと思う。

「ああもう！ これは使いたくなかったのに！」

「ハッ、出し惜しみなんてしてる余裕があるのかっ？」

私の魔眼でもギリギリで見えない速度で放たれた右ストレートを全力で回避する。けど、空中に浮かびながら戦ってるせいでそのまま吹き飛ばされてしまう。

「無いですよ！ そんなにレベルがあるんだから、絶対に死なないでくださいね！」

大鎌を銃形態に変形させて左手で構え、私は覚悟を決める。これ少しミスすると即死だから嫌なのに、レベルカンストとかしそうな人達はこれだから！

(マスター、ストップ！)

「アルディートさん！ 攻撃を止めてください！」

私が切り札を使う数秒前、そう割り込んできたティアの念話と向こうのリーダーのような男の人によって、私とアルなんたらさんとの戦闘は止められてしまった。

「イオリさん。いや、蒼矢も一先ず話を聞いてくれない？」

若干不機嫌な私にそう振り向きながら話しかけてきたのは、結構血塗れだけど、私のよく知ってる顔で、よく知ってる声の……

「タク、で、いいの？」

「俺としては、蒼矢が女の子になってる方が驚きだったけどね」

私の親友、天上院 匠 その人だった。

余計に許さないけどね！

第22話 いらいらイオリちゃん

完全に気持ちは不完全燃焼ではあるんだけど、今更タクを無視して戦闘を続ける気にもなれないから、大鎌を背負って散布していたナノゴレムを回収する。創造も一応解いておく。

「アルディートさんも、彼女達は敵じゃないです!」

タクは既に少し錯乱してるみたいだ(すつとぼけ)というか、そつちが最初に攻撃してきたんでしようが。そのせいで私達全員少なからず怪我した訳だし。特にロイドは……つて、ロイドは?」

「ん、連れてきたよマスター」

「えつと、これは何がどうなったんだ?」

「私もよくわかんない」

そんなことを思った途端、私のすぐ隣にティアとロイドが転移してきた、流石ティア。なんて思っていると、シュバツという音が似合う感じでティアが戦っていた筈の女子がタクの隣に現れる。むう……

「でもあの子達が、海棠達と同じようなスキルを持つてるのは間違いないんでしょ?」

「それでもだよ。海棠の洗脳には誰もかかってないみたいだし!」

「まあ私にも洗脳関連はされてないって分かるけど! なんで委員長はあの子をそんなに簡単に白沢君だつて信じられるの? あの写真だつて本物つては言えないんだよ?」

「最初から蒼矢かもつて疑つてたじゃん!」

物凄くイライラが溜まっていく中、一つだけ気になるワードが聞こえてきた。あの写真?」

「マスター(女)がマスター(男)つて分かるように、この前地球で撮ってきた写真を見せた」

「あ、あのみんなで撮ったやつ?」

「そうそれ」

まあさっきの話ぶりだと、元々私が僕つて疑われてたみたいだしそれなら簡単に納得出来たのかな? というかなんなの、確か柘とかいうあの女子。タクの隣でたらたらたらたらと……

「そういえばロイド、あのすごく強いおっさんって誰だか分かる？
獣王様と同じくらい強かったんだけど……」

「え、知らないのか？」
「うん」

ロイドが凄く驚いた目で私を見てきてるけど、知らないものは知らないもん。そもそも私が人間界にいたのって、一ヶ月あるか無いかだし。

「人間界最強って言われてる、王都のギルドマスターだよ。確か名前は、アルディートだった筈」

「……私、あの人の剣木つ端微塵にしちゃったんだけど」

若干冷や汗が流れる。どうりで異様に強いし、剣も使い込まれてると思つたよ。獣王様の装備とクラネルさんの家に置いてあつた物を除いて、初めて見た＋19っていう超高品質だったし。

今も柄だけになった剣を見てるし、怒りに任せて凄くマズイ事をやっちゃった気がする。

「えっと、剣、壊してしまつてごめんなさい」

「うちのマスターが、迷惑をかけました」

まだ結論が出るのは先そうなので、言い争つてるタクと柊は無視してアルディートさんに頭をさげる。まあ、人間界最強つて言うんなら、あの化け物見たいな技の火力と、鎮静下でのあの動きにも納得だね。

「まあ気にすんな嬢ちゃん。ここで壊れるつー事は、いつか駄目になる運命だったんだよ」

頭をわしやわしやと撫でられるけど、そんなことより大切な事が今
は一つある。いや、だつてこの人ギルマスなんですよ？

「私、これでも一応鍛冶師をやらせて頂いておりますので、注文して頂ければ最高の一本を作るしよぞんです。なので、ギルドからじよめーする事はご容赦いただけませんか？」

敬語とかがおかしくなってる気がするが、出来る限りかしまつてお願いする。ギルドに加入してないと、お金の収入源が道具の販売し
かなくなつちやうし、それじゃあ若干赤字になると思う。権力には勝

てなかったよ……ペンは剣よりも強い。

「ははっ、そんなに畏るこたあねえよ。まあ剣自体は後で頼むが、こんなくらいで除名なんてしたりしねえよ。隣のその子は精霊か？ 人族で精霊を使えるなんて奴、今まで数回しか見たこと無いぜ？」

「マスターは、命の恩人だから」

退屈は人を殺すっていうし、ある意味命の恩人なのかも。そんなことを考えついた時、いままで平静を保っていたけど私の堪忍袋がポーンって破裂した。

時折チラ見していたけど、タクと柊何某なにかしの話はよく分からない方向に飛んでるし、なんか無性に柊何某自体にムカつく。

「ちよつとスミマセン、流石にあの2人イラつくので怒ってきます。ロイド、ちよつと来て」

「え、ああ」

若干困惑気味のロイドの手を引いて、アルディートさんの前から去って言い争ってる2人の前が出る。目上の人との話を切っちゃう感じで悪いと思うけど、もうプツンしそうだし。

「ああもう煩いっ！」

さつきから散々向こうだけで言い合ってたこっちには何も説明がないし、ふもうなるんぎってやつになってるしなにより！

「あのさあ……こっちは魔界から帰ってきたばっかりであのよく分からない洗脳された人たちに襲われて、それから逃げて馴染みのある街に戻ってきたの！ そんなところをいきなりタク達に、事情説明もなにも無く殺しに来られたんだよ？ まず何かいう事があるんじゃないの!？」

「えっと、そのことは……」

は？ 『そのことは』？

「そのことはって、普通それは一番最初にいう事でしょうが！」

私の怒鳴り声なんてそんなに迫力はないと思うけど、それでも2人は固まっている。うん、やり過ぎないように隣に精神的ストッパーとしてロイドにいてもらってるし、思った分だけ全部言おうそうしよう。

「アレ防げなかったら今頃私達全員、ミンチだよミンチ！ それに私、前にも勇者に殺されかけてるんだけど？ 私も勇者の称号は最近ゲットしたけどなに？ 人間界じゃ、勇者は怪しげな人物は幼女だろうがなんだろうが即殺せって言われてるの!？」

「それは、今の人間界は状況が……」

「あなた達がそんなスキル」

「あんたは黙っててニンジャ！ 爆発四散させるよ！」

柊何某の足を爆発させる。私は今タクに話してるんだ、タクの近くでベラベラベラベラ喋ってるだけの女子は黙ってほしい。魔眼でのゴリ押しでステータスとか色々覗いたから分かるけど、私とさして変わらない平坦め。

「それに！ さっきから散々言われてるこの《暴食》のスキルだって好きで取った訳じゃないしいー！ タク達が持つてるのと同系統のスキルで悪影響は中和してますー！ そっちの事情もある程度分かるけどさー！ それでもさー！」

多分人間界は大変な事になってるんだろうし、今までのタク達の動きを考えるなら街を守ってたとかそんなだろうし、でも一番最初に謝って欲しかったよ……

「まずは2人とも1発殴らせて？」

隣で雰囲気飲まれてポカンとしてしまっているロイドの右腕を見て、まだ仕舞ってなかったナノゴーレムを右手に纏わせる。魔法とスキルによる補助は全開、硬度はMAXで手の保護も万全。

そしてタクに近づいていく中、私の背中に創形されていた3枚の羽のうち一本が消える。

「衝撃のオオオ！ ファーストブリットオオオオツ!!」

「ぐはあっ」

そしてそのまま、後ろの柊何某を巻き込んでタクは吹き飛んでいった。大丈夫大丈夫。軽く150mは吹き飛んだけど、タクの方は同時に回復魔法も叩き込んだから死にはしないさ。

「そんなタクなんて！ だあああああいつ嫌いだあああああ!!」

大声で叫んでから、ふうと汗を拭う。いやー、スッキリした。

「俺、イオリにあんな事言われたら心が折れる自信があるぞ……」
「だからやったんだもん」

　　プイツとタク達を吹き飛ばした方向から顔を背け、アルさんの方に
戻る。いや、でもよくよく考えると謝らなかつたのはあの柊何某のせ
い？

第23話 人間界の今③

「とりあえずここなら、落ち着いて話ができるか？」

タク達を殴り飛ばした後、私達はギルド長の部屋に通されていた。街の中を歩いてる時は、若干のきいの視線？ に晒されたけど、まあそんなのはいつもの事だからあんまり気にしない。

「久しぶりだな、坊主に嬢ちゃん」

「はい！ お久しぶりです、ヒッグスさん」

「お久しぶりです！」

「私は初めまして」

ギルド長室って言うだけあって、かなり久しぶりにヒッグスさんと再会する事が出来た。今この場には私、ティア、ロイドと、アルさん、タク、柊とヒッグスさんの7人が居て少し狭い。

「そ、蒼矢？ 少しは機嫌を……」

「プイッ！」

「はっはっはっ！ 嫌われたなあ、タクミ！」

「あなたねえ！」

「煩い」

ふうんだ、しばらくタクの事は許さないもんね！ あれからもうちよつと八つ当たりしようと思っただけど聖剣は砕けちゃってたし、柊？ ティアに杖突きつけられてるけど知らない。大怪我してたけど、タクが治してたし別にいいよね。

「賑やかなのはいいことだが、そろそろ本題に入っついていいか？」

ゴホンと大きく咳払いしてからヒッグスさんが言う。あ、うん、そうだよな。元々私達がここに通されたの、今の人間界の事情説明って事だったし。

「あ、はい！ よろしくお願いします」

「予想は出来てる、けど、正確な情報が欲しい」

大笑いしてるアルさんとタクは置いておいて、私達はヒッグスさんに向き合う。さつきみたいに頭がこんがらがってないし、ちゃんと礼儀は守らないとね！

「まず、今の人間界の状況だが……はつきり言って滅亡寸前だ」

「はい？」

ロイドがまるで訳がわからないって顔で聞き返す。うーん、改めて聞かされるとビックリだけど、これはティアの予想通りの展開になってたりするのかな？

「何が原因なのか分かりますか？」

「詳しくはわからないが、勇者の1人が暴走した。それも大罪スキルの効果を全開にしてな。他の街に行っただんなら見たろ？ 異常な状態異常が大量に表示されてる街の人たちを」

真剣な目で言うヒッグスさんの説明の後、横からタクが説明を補充する。

「暴走したのは海堂で、今のところ残ってる街はこの『リフン』を含めて4つだけになっちゃってる。他の大陸がどうなってるのかは分からないけど、人間界はもう詰みに近いね。山ちゃんのおかげで街はダンジョン化してて、食料とかもギリギリだけど問題はあんまりないかな」

「魔界で似たような黒い煙を出してる人たちと戦ったし、もう手は広がってるのかも」

山ちゃんには後でお礼をしに……分かってくれなくても行かないとだし、ロイドの腕の件は後でメイさん達に話に行かないと行けないし……

そんな事を考えていると、少し考え込んでいる様子だったティアが口を開いた。

「ふむ。なら予想通り。洗脳は『色欲』、伝染は……変形した『嫉妬』かもしれない」

「そこまで分かるとはな。嬢ちゃん中々やるじゃねえか」

「それほどもある」

どこことなく誇らしげなティアを見て、年の功って思った瞬間足をグリグリされた。真面目な顔を保ってるけど、普通に痛い。心を読まれるって、こういう時は不便だなあ……

「だが、その柙が言うにはもう一つ何か隠し持ってる雰囲気がある

「そうだ」

「そうなんですか……残りは『強欲』『傲慢』『憤怒』のどれか。強欲じゃなければいいですが……」

「その3つの中で、一番厄介なのは『強欲』なのか？」

「はあ……と軽く溜息を吐いた私に、ロイドがそう聞いてくる。いやー、だってその、ねえ？」

「ステータスとかスキルとか、一方的に奪われるんだよ？ 極大の魔法とか、極大の物理的ばうわーよりはよっぽど戦いたくないよ……」

「それは確かに、絶対にやりあいたくないな」

「マスター、それあんまり言える立場じゃ……」

「言っちゃいけない事を口にしそうになったテイアの口を塞ぐ。私の切り札その3くらいのに似たような効果のやつがあるけど、あれはちよつと条件付きですー」。

「ちよつと。情報源私なだけけど、聞くことはないの!？」

「うん。だって隠し持ってる雰囲気があるだけなんですよ？ 実際に見てないなら、意見の参考にもならないじゃん」

「それならまだ、自分達で推理した方がマシ」

「突っかかってきた柊何某をバツサリ切り捨てる。だってアトモスファイアだけじゃ何の判断も出来ないもん。忍者ならもうちよつとこーう、しゅしゅしゅーんって感じで取ってくれば？」

「まあ雑な説明になっちまったが、質問はあるか？ 答えられるやつだったら答えるぜ」

「一応話が終わったのか、アルさんが仁王立ちでそう言う。質問、質問か……剣の長さ重さ素材は後にするとして。1つだけ思いついたことを口にする前に、ロイドが不安に揺れる目で問いかける。

「俺の父さん母さん……ストームブリンガーの人達は無事ですか？」

「ああ。というか、今もこの下の闘技場で教官をやってるぜ！」

「そうなんですか?! 失礼しますー！」

「アルさんがニヤツと笑いながら出した答えを聞いて、ロイドは部屋を飛び出していった。ちゃんとお辞儀をして言ってる辺り、地球で姉ちゃんに色々仕込まれてる感じがする。」

いきなり飛び出ていったのはアレだけど、年齢的にロイドって中1くらいだし仕方ないと思う。見た目幼女の私が言うのは変かもしれないけど。

「嬢ちゃん達はなにかあるか？」

「はいはい！ アルさんのレベルって幾つですか？」

「290だな」

「おおー……時間が空いている時、模擬戦お願いしますー！」

「ああいいぞ」

私の2倍くらいある……ドヤアって感じの顔で言われたけど、本当に凄いからそんな顔でも凄いなあってしか思わない。それにしても強い人がいるとすぐ戦いたくなるって、私バトルジャンキーじゃん。「それじゃあ最後に1つ。あなた達は、今の状況を打破する気はあるの？」

私がバカみたいな質問をして緩んだ雰囲気が一瞬にした緊張に包まれる。なに質問してるのさティア……

「勿論だ。戦力はまだ少し足りないが、生まれ故郷をこんな状態にはしておけねえよ」

「そう。ならいい」

その一言で緊張感は霧散した。ふう……怖かった。もう聞きたいこともないし、私は私でロイドを追いかけないといけなからもう退散しようかな。

「今の状況を教えてくださりありがとうございます。Sランク冒険者のイオリです。鍛冶師をやっているの、どうぞよろしく」

「マスターの精霊、ティア。コンゴトモヨロシク」

なんかティアの発音がおかしかった気がするけど、一先ずはこれで事情説明は終わった。とりあえず私は下にいったロイドを追いかけないと。そんな事を考えながら、私達は部屋を出ていった。

第24話 再会

「はあ……私の服って、ことある毎にボロボロになるんだよなあ。捨てるの勿体無いけどもう着れないし……タク許すまじ」

「仕方ないよ、マスター。作れば？」

「布から作らないと……」

一階に下る階段に向かつて歩きながら、ほんの少し前まで着ていた服の残骸を見て私はため息を吐く。完全に観光気分で来てたから地球で買った服を着てただけど、アルさんの攻撃の余波でボロボロになってしまっている。

「まあとりあえず、今日はメイさん達と会って話をしたら休みたいかなあ……疲れたよもう」

「同感」

《アナザーワールドもう一つの世界》の中にフローは放し飼いか？ にしてるし、後でゴミとか纏めて焼いてもらおうかななんて思いながら、この身体だと大きい段差を下っていく。

いつだったか転げ落ちて頭を打って、泣きそうになったのはいい思い出だね。たしかあの時はラナさんに介抱してもらって……

「あ、お久しぶりですラナさん！」

階段を下りきり、私がここに来た時と比べて活気のかの字もない閑散としたギルドの一階で、暇そうに受付に座ってるラナさんに手を振る。……ラナさんであってるよね？

「えっと、どこかで会いました？」

「え、結構特徴的な会い方だった筈なのに……忘れられてる？」

向こうが覚えてくれてる事を前提に話しかけたから、なんとも言えない微妙な空気になってしまっている。出会い頭に決闘騒ぎを起した訳だし、そうそう転生者が来る訳でもないだろうから覚えてくれると思っただけど……

「マスター、目」

「あ、左眼の色変わっちゃってるもんね」

目の色を幻術で元の蒼色に戻してから、うんうんと悩んでるラナさ

んに聞き直してみる。

「えつと、これなら分かります?」

「うーん、銀の髪に青い眼……思い出した! ギルドに入った直後に決闘騒ぎを起こした……そう! イオリちゃんね!」

「覚えても覚えていて嬉しいです」

にへーと笑いながら答える。正直、今日はもう魔法を使うと全身が痛むから幻術は解除する。暇だったのか、他の受付嬢の人達も集まってくる。

「それにしても久しぶりね! 確か獣人界に行くって言ってたけど、戦争に巻き込まれたりしなかった? それでその子は? お友達?」
「戦争があつたっていう時は、大怪我して寝込んでました。ギルドの中だから言えますけど、獣人のお姫様と友達になつたりもしてきました!」

「私はティア、マスターの精霊。よろしく」

色んな人が集まってきちゃったせいで、一転してギルドが騒がしくなる。大冒険ねーとか、獣人界ってどんな所だったのーとか、誰よこの子に寝込むほどの怪我をさせた奴はとか、ちよつ、抱っこしないでくださいよ!

「最後に会った時は確かCランクだったけど、今はどこまで上がったのイオリちゃん? もしかしてAランクになつてたり?」

後ろから抱っこされながらじゃ威厳もなにもありはしないけど、そう聞いてきたラナさんにどやっとした顔で言う。

「ふふん、今の私はSランクなのです!」

「ついでに私も。最近復帰した」

隣で揉みくちやにされていたティアと未だに抱っこされてる私がそういった瞬間、ザワリとどよめきが広がる。

「え、まさか最年少でSランクになつたっていう【流星群】? でもアレは獣人だった筈……。それに最近つて事は、そっちの子は【古代魔神】?」

「あ、こんな事も出来るからだと思います」

「その恥ずかしい名前は止めて」

えいと力を込めて獣耳と尻尾を私は出現させる。というかティアの二つ名、私より中二感が凄かったんだ……

あっ！ ちよつ、可愛いとか言って撫で回さないで下さいよくすぐったいんですからあ！

◇

「はあ……はあ……ただでさえもう体力無いのに……」

「女子って怖い」

揉みくちやにされること数分、辛くも包囲網から逃げ出した私達は廊下でグツタリとしていた。そもそもラナさん達は女子じゃないでしょとか、私達も女子でしょとか色々言いたい事はあるけど、あんまりロイド達を待たせてもいけないからゆっくりと闘技場へ向かっていく。

「ありや……これは私達はお邪魔かな？」

「マスターと同意見」

妙に音がしないと思ったら、疲れきっていたのかなんだか分からないけど、ロイドはシンデイさんの膝枕で寝ていた。

ちよつと話したい事はあったけど後でいいよねと思い、そのままそつとこの場から去ろうとすると、少し遠くにいたメイさんと目が合った。

「あれは、メイトリックス！ 小銭だ！ 小銭を出せ！」

「マスター、そのネタ分かる人居ない」

そんなネタをかましている間にも、メイさんはズンズンこちらに近づいてくる。あわ、あわわ、怒られる？

「無事だったんだな嬢ちゃん。ロイドから聞いたぞ？ 無事にロイドを連れてきてくれてありがとうな」

「い、いえ、それほどでも無いです。お久しぶりぶりですメイさん」

「はじめまして、マスターの精霊のティアです。マスターの記憶はある、自己紹介はなくて大丈夫です」

私とティアは揃ってお辞儀をする。怒られるにしても、ロイドの手の事を話すにしても態度は正さないと。

「それで？ そんな浮かない顔をしてるのはロイドの右腕が原因か

？」

そう言つてメイさんはロイドの右腕をみる。こつちに来てから隠蔽なんてしてなかったせいで、フォルムは人間だけど明らかに別物な腕が露出している。

「っ、はい。私ともう少ししっかりしていれば、こんな事にはならなかったと思いますし……」

(マスター、うっかり燃やしたからね)

(しっ！)

ティアからの念話は黙らせたけど、ティアが言ってる事は間違つてない。実際くっ付けるくらいなら出来た訳だし、そうじゃなくても私がロイドにある程度切り札の効果を説明しとけば違つたかもしれないし……

そんな事を考えていた私の頭を、ワシヤワシヤと大きな手が撫でた。

「髪の毛ぐちやぐちやになつちやうじゃないですか！」

「ハハハッ、ちびっこはそれくらい元気な方が丁度いいんだよ！」

うがーと吠える私に、メイさんが大きな笑い声をあげて言う。せつかくのシリアスが壊れた……

「大体の顛末はロイドから聞いたが、ありやあロイドの力不足が原因だ。それに無茶した冒険者が再起不能になる怪我を負うなんて事、ちよつと探せばいくらでも出てくるぞ？ そつから俺から見ても高すぎる性能の義手を貰つて、しかもSランクにまで成長できただ？ 十分に恵まれてるじゃねえか」

「いや、でも。ロイドの怪我の原因つて私を庇つた事ですし……」

「惚れた女を庇つて出来た傷なんだから、庇われた嬢ちゃんが気にやむことは無いさ。まあ、正直嬢ちゃんに惚れるとは思つてなかったが」

……ええー。気のせいじゃなかったの？ ロイドが私を好きつて……ええー？ いや、改めて考えると色々納得できる事もあるけどさあ。

「ほらマスター、本当だった」

「いやだつてティア！ 5歳は離れてるし、私こんなチンチクリンだよ？ 普通そんな事真に受ける訳ないじゃん！ 何年後かならまだしも」

「果たしてマスターの胸は、数年で成長するのだろうか」

「な、なにおう!!」

シリアスになりかけた空気が途端に騒がしい物に変わっていく中、異様によく響く咳払いがその空気を凍らせた。

「メイ？ イオリちゃん達？ ここに1人、疲れきって眠ってる子がいるって事忘れてない？」

冷たい風が吹きつけてくる。あ、あわわ、これ、怒った時のレーナさんとかなり似た雰囲気……

「少し静かにしてくれないかしら？」

「イエスマム！」

レーナさんより年季が入ってる分絶対にヤバい。そう判断した私とティアはビシリ背筋を伸ばして敬礼の状態で固まるのであった。

第25話 第5章エピローグ

「ふふふ、そんなに畏まらなくても良いわよ。私とイオリちゃんの仲間じゃない」

「かしこまり！」

私とティアは完全にシンクロした動きで足を揃え、気をつけの体勢になってから敬礼をし直す。k b t e i t との関係なんてないっただけ。女の子の髪の毛は命って言うし、結構前に獣の槍作ろうと思つた時にしか大きくは切つてないんだよね。

獣の槍は作れなかったけど、それっぽい危ない槍は作れた。もう二度とあんな事はやっちゃいけない（戒め）

「いやお前ら、それじゃああんまり変わってねえだろ……」

「だって怖かったんだもん……」

「懐かしい、危険な空気だった」

そう呆れたように言うメイさんの声も、私達の声もさつきと比べてかなり小さくなっている。漏らしたりはしないけど、怖いものは怖いんだもん。

「それに2人とも、ロイドが言つてた通りボロボロじゃない。ゆっくりして貰えないと、こつちが悪い気になっちゃうわ」

「え、ボロボロに見えますか？」

「怪我は治して、服も替えた筈」

見た目は綺麗になつてる筈なんだけど、ボロボロって言われたし髪の毛とかかな？ 魔法を使うと全身が痛むのは関係無いだろうし

……

「所謂魔力回路って言われてるところがよ。一部の人にしか分からないけど、普通の人がそんなにボロボロになったら二度と魔法が使えないような状態になつてるわよ？」

「……え、嘘？」

何それ初めて聞いたんだけど。ティアに確認の為念話を飛ばしてみるけど、そんなのも知らなかったの？ ってしか返事は返つてこなかった。よく考えると魔法陣自体回路みたいな物なんだし、人にもそ

うというのが備わってておかしくないじゃん……

「特にイオリちゃんの方は酷いわね。全体的に壊れてる。初めて会った時とは比べ物にならないほど回路は大きく強くなってるし、何故か治り始めてるっていうおかしい状態ではあるけど、今は魔法を使えないか使おうと尋常じゃない痛みが走るんじゃない?」

「確かにさつき使った時は、全身に痛みが走りました」

魔法関連に明るくないメイさんが会話に入れず困ってるけど、そんな事より自分がそんな状態になっていた事の方がビツクリだよ。自分でも無茶したなあって思ってたけど、まさかそんなに深刻だったなんてね……

相手を強制的にこの状態に出来たら、切嗣の起源弾を受けたみたい
な事出来るんだろうけど、今はろくに魔法使えないし……

「私は?」

「えっと、ティアちゃんもあなたのマスターよりは軽いけどボロボロね。特に魔法に魔力を送る部分にストツパーみたいな物があるんだけど、それが無くなっちゃってるわ」

「それが無いと、どうなる?」

「魔法が暴走しやすくなるわね」

「ふむ、やっぱり。この状態で、相手を解析する魔法を……」

と、私の思ってた事を読み取られたのかティアとシンデイさんが難しい話を始めてしまった。こんな中でもすやすや寝てるロイドにも驚きだけど、私は私でメイさんに聞きたかった事があるので話しかける。今の今まで会話に参加出来てなかったし。

「メイさんメイさん」

「どうかしたか? というか、よく分からんが大丈夫なのか?」

「はい、魔法さえ使わなければ痛くないですし」

その魔法を使った時の痛みも、痛みは危険しんごーってどつかで聞いたことあるから、あんまりよくないんだろうけどスキルのお陰でかなり軽減されてるしね。

「それでなんだ? 俺は魔法とかには詳しくないが」

「えつとですね、ある、ある……アルディートさんとか勇者の人の装備

を作った人って、まだ無事ですか？」

アルさんの剣はそこまで確認する間も無く砕いちやっただけど、タクが使ってた軽鎧は明らかに新しかったし、アルさんの軽めの防具にも明らかに最近直された跡があつた。品質が落ちてる様子もなかったって事は、凄い鍛冶師か修繕する人がいるって事だよな！」

つまり、ミーニャちゃんのお父さんの装備を制作・整備していた亀の獣人のしわ……しわ……うん、確かシワシワさんと色々作った時みたいにか私にもいい事があるはず！」

「ああ、なにせそいつは召喚された勇者の1人だからな。同性で同じ職業なんだ、1回会ってきてもいれればいいんじゃないか？」

「勿論そのつもりです！ ミーニャちゃんのお父さんの装備を作ってた人と鍛冶した時みたいに、何か絶対にいい事があると思うんです！」

起伏なんて欠片もない胸をはって私は言う。ロリ巨乳なんてものはファンタジー世界にもいやしない。あんなものは幻想、よって例の紐のヘスティア様は敵。

それにしても勇者の1人か……元クラスメイトなんだろうけど、正直最後に顔を合わせたのは半年前だし覚えてないなあ……

「その装備を作ってた人は知らないが、王お抱えだった鍛冶師や嬢ちゃんよりは腕は下みたいだがな」

「私なんてまだまだですよー」

えへへ、と笑いながら頭を掻く。そう言われると嬉しいけど、まだシワシワさんに追いつけてないだろうし、ものづくり関係はまだまだ精進あるのみだと思うんだよね。

一応ティアの杖と私の大鎌は今のところの集大成みたいな物ではあるけど、まだまだ頑張らないと。

「でもマスター、明日は絶対安静」

「少なくとも見積もっても、絶対に3日間は魔法を使っちゃダメよ？」

「そんなあ……」

それじゃあ魔法に頼りきってる私じゃあ鍛冶ができないじゃん……料理はできるけど、他の装備も凄く小さい魔法陣を刻んだりして

作ってるからおしやれ以外の物が一切作れない……

「悲しそうな声を出しても、そんな魔法面で大怪我してる子に魔法なんて使わせられないわ」

「そ、それならティアも！」

「私は魔法の制御が甘くなるだけ、問題ない」

「ぶーぶー、不公平だー！ そりゃあ魔法使いタイプと非戦闘員タイプが同じ規模の魔法を使ったら、勿論後者の方がデメリットは大きいんだらうけどさー」。

そんな風に念話でティアに対する文句を短い時間に延々と飛ばし続けてると、ティアがほんの少しだけニヤリと笑い爆弾を投下した。「今のマスターは弱ってるから、ロイドに告白させればコロっといきそう」

「はあっ!?!」

確かに弱ってはいるけどそんな事無いからね!! いや確かに改めてそういう事言われると意識しちや……いやいや私元男だし? そっちの価値観かなり引きずってるし!?

「確かにメイが私にプロポーズしてきた時も、そういう面があったわね」

「そうだったな」

ちよっ、本当に何してくれちゃってやがりますかティア!?! 2人とも何かすっごい乗り気だよ? 私答え出せとか言われても無理だよ!?!

「そうなるよこの3日間がチャンスだな」

「わーわー!! 無理です無理です! ロイドの事は嫌いじゃないけど、いきなり過ぎて無ー理ーでーすー!!」

「ふふ、イオリちゃん顔真っ赤よ?」

こんな風にドタバタ走り回りながら頭の中では、滅びに瀕してるのに日常が続いてるこんな状況が、ひどく愛おしいものに感じられてる私もいるのだった。

滅びに瀕した世界……聖剣^{カリヨン}……うつ、頭が。

第5章登場人物紹介

イオリ・キリノ

種族 人族 銀狼族

性別 幼女

年齢 7

職業 ヘーパイストス・ドヴェルグ・トリスメギストス・スクナヒ
コナ・ウルカヌス・ゴブニユ

LV 140

HP 2305 / 2305 +0 / 13200

MP 6856 / 6856 +0 / 99999

STR 1765

DEF 1721

AGL 1702

DEX 30050

MIND 1623

INT 6846

LUK 75

《戦技》創造 幻想世界・戦乱の剣
《スキル》

職業

ヘーパイストス LV 170 ドヴェルグ LV 164

トリスメギストス LV 10 スクナヒコナ LV 146

ウルカヌス LV 101 ゴブニユ LV 11

EX

家事万能 無詠唱 情報の魔眼 変身

MP消費半減 武芸者の卵 生産者の魂

アナーザード
もう一つの世界 七大罪・暴食 叡智

通常

演算補助	L V	1 9	魔力精密制御	L V	1 4
HP 高速回復	L V	2 5	MP 高速回復	L V	2 8
死神	L V	—	身体能力超化	L V	2 9
龍鱗	L V	—	龍力	L V	—
韋駄天	L V	1 5	—	五感超化	L V
痛覚大耐性	L V	2 4	物理耐性	L V	2 0
魔法耐性	L V	1 9	状態変化無効	L V	—
次元神					
劫火魔導	L V	1 2	豊穰魔導	L V	1 4
1 0			海淵魔導	L V	
暴風魔法	L V	2 1	神聖魔法	L V	2 4
2 8			漆黒魔法	L V	
森林魔法	L V	1 9	氷結魔法	L V	2 3
1 8			雷光魔法	L V	
生活魔法	L V	—			

《称号》

NEW!!

異次元の旅人・ガンスミス・オーパーツ製作者
 姉の抱き枕・死線を潜り抜けし者・反逆者
 加工屋さん・奇跡・邪神を食べた者
 五常 急ノ段・魔道書作家・自称鍛冶師

《加護》

世界神の加護++ 鍛冶神の加護++
 魔神の加護++

《装備》

武器・魔型聖鎌・ヴィターエトモルテ
 マジカル☆スミス☆ハンマー
 ナノゴーレムT4・鎌剣ブリジンガー +30
 オリハルコンナイフ +28・オリハルコンの針 +26
 防具・アインツベルン風コート+30
 朧水晶の胸当て+30・朧水晶の肩当て+30 ×4

契約の腕輪・手編みのマフラー +30
白の長ズボン+29・隴水晶の腕甲 +20
隴水晶の脚甲 +30 技巧の指貫+26
変形可能グラシユ+30

|| || ||

名前 イオリ・キリノ

性別 女

年齢 7

生まれ 不明

ランク S

ゴールド 1,003,210

|| || ||

銀髪ポニテ、紅蒼オツドアイのTS少女。地球に帰って姉と会ってきたためほんの少しだけ男っぽさが戻った。が、精神年齢は低くなつたままである。行く先々でトラブルに遭う主人公。

地球では強盗に襲われ、アヴルムに帰ってきたらSランク(仮)に絡まれ、人間界は終わっていたという散々な目に遭う。

本人はあまり気にしていないが、行動全ての停滞、敵の戦意の消失、ナノゴーレムによる死角からの攻撃、超短距離転移、一撃の火力が大きい大鎌、遠距離からの弾幕と無駄に対人性能が高い。本人曰く、切り札はまだあるとの事。

災害を起こせたり、布を一から作ったり、魔道書を書いたりするが自称鍛冶師である。最近ようやくクトウルフをたこ焼きにする事に成功した。

「大罪スキルって考えものだよね……とところで、あーんしてあげるから、このクトウルフたこ焼き食べてみて?」

ティア・クラフト

種族 元魔族 神族 精霊 ヨグIIソトース 天之狭霧神

性別 幼女

年齢 ??? 歳

職業 ヨグIIソトース・巫女姫・仙人・大精霊・占星術師・天之狭霧神

霧神

LV 134

HP 7081 / 7081 + 0 / 9999

MP 13014 / 13014 + 0 / 9999

STR 2867

DEF 2948

AGL 2764

DEX 3245

MIND 4056

INT 7021

LUK 70

《スキル》

職業

ヨグIIソトース LV 200 巫女姫 LV 197

天之狭霧神 LV 25 大精霊 LV 187

占星術師 LV 188 仙人 LV 195

EX

全てを見通す目 無詠唱 MP消費半減

転身 精霊化 叡智 アナザワールド もう一つの世界

七大罪・暴食

通常

超思考 LV | 魔力精密制御 LV |

HP 超速回復 LV | MP 超速回復 LV 28

五感超化 LV 25 物理超強化 LV 18

魔法超強化 LV 20 確率補正《大》LV 15

龍力 LV | 龍鱗 LV | 身体能力超化 LV |

物理大耐性 LV 29 魔法大耐性 LV 28

金髪に見える虹髪、イオリと逆配置のオッドアイを持つイオリの精霊。着ていた服は、初めこそ至って普通の物だったがティアの魔力に当てられて禍々しい物に変質してしまっている。普段は基本無表情なので、何かと実力の底が見えない幼女。自らのマスターと同じく、幾つか切り札を隠し持っている模様。ステータスの伸びがマスターに釣られて伸びてきてる。っおいよ。

「全く、殺されかけるとか。たまったもんじやない」

フロー

イオリがきやぶたあした幼龍。最近はいオリのもう一つの世界アナザーワールドの中で放し飼いにされている。暇になると、門から顔を出してイオリに構ってもらっている。ちゃんと役割はあるよ？

白沢 結衣

蒼矢ことイオリの実姉。謎の姉パワーに満ちており、全てが変わったイオリを一目で蒼矢ではないかと疑えたり、一般人から見ると超人のロイドを腹パン1発で気絶させることが出来る。強盗に襲われてもほぼ動じないほどメンタルは凶太い。

「サンダーレイジO.D.J……使えるように頑張ってみようかしら？」

リユート・カンザキ

なんだかんだで、2章からずっとイオリちゃんと一緒に旅していたロリコン転生者。地球と一緒に帰ったりもしたが、人間界にはトラウマがあった為離脱。レーナさんにオシクイタダカレテマス。

「ちよつ、レーナ!? イオリさんなんで媚薬なんて置いていったのさあああ!?!」

レーナ・アークライト

なんだかんだで、2章からずっとイオリちゃんと一緒に旅していたリユートの彼女。地球の文化に触れて腐らなかつた何気に凄い女子。人間界には、攫われ奴隷として売り飛ばされると言うトラウマがあつ

た為離脱。結婚式は獣人界に帰ってからの模様。既成事実がある為、本人の性質と合わさって最強である。リユートさんをオイシクイタダイテマス。

「うふふ、我慢しなくてもいいんだよりユートくん？」

ロイド

種族 人族（偽・狐人族）

性別 男

年齢 13

職業 双剣士・エアマスター・拳闘士・ランサー・イタカ

LV 120

HP 1812 / 1812

MP 2256 / 2256

STR 1721

DEF 1341

AGL 3429

DEX 1617

MIND 1386

INT 1335

LUK 64

《戦技》
《スキル》
????

職業

双剣士 LV 100 エアマスターLV 59 拳闘士LV

79

ランサー LV 92 イタカ LV 79

EX

即死回避 豪嵐の守護 詠唱破棄（風）

通常

鷹の眼 LV 24 解析 LV 18 超隠蔽 LV 19

魔力精密操作 L V 5 アイテムボックス L V 5
双剣術 L V 2 3 体術 L V | | 軽業 L V | | 槍
術 L V 2 1

気配感知 L V 2 4 身体能力超化 L V 1 9

五感強化 L V 1 2 速度強化 L V 1 9

韋駄天 L V | | 韋駄天 I I L V | | 韋駄天 III L V

2

状態変化耐性 L V 1 0 物理耐性 L V 9

魔法耐性 L V 1 0

颯風魔導 L V 1 暗黒魔法 L V 3 冷凍魔法 L V 3

迅雷魔法 L V 3 生活魔法 L V | |

《称号》

NEW!!

エアマスター・地獄に耐えた者・Sランク冒険者

風に乗りて歩む者・ミールモドキを宿す者

クトウルフ神話(風)

《加護》

豪嵐の加護 (AGL上昇)

《装備》

武器・シャイニー☆ハーフランス +30

スマイリー♡ハーフランス +30

防具・浪漫式義手 +30・緑狐の腕輪

手編みのマフラー +27

龍皮のグローブ《右》+24

アームガードSein +28

フェストウムアーマー +27

レッグガード《R》ラディカルグッドスピードG S《S》+29

|| || ||

名前 ロイド

性別 男

年齢 13

生まれ エモフ

ランク S

ゴールド 3, 107, 210

|| || ||

第1章初登場の、イオリに突っかかってきた薄緑の短髪少年キャラ。イオリとティアの模擬戦という名の地獄を耐えきったおかげで、もはやパワーレベリングと同じようなスピードで強くなっている。

イオリと地球へ行ったり、昇進祝いの宴会もあつてか完全にイオリに惚れた模様。イオリの姉、リユート達、実の両親から応援されているのでかなりの強カードである。

女神様が慈悲してくれたイタカの職業のおかげで、AGLだけ突出したステータスになっている。そのせいで、脚の装備もスピード特化の物に換えられた。

「(´ーωー、)スヤア。」

タクミ・テンジヨウイン

種族 人族

性別 男

年齢 16

職業 勇者・聖騎士・守護者・魔導騎士・ヒーロー・反逆者

LV 128

HP 2785 / 2785

MP 4576 / 4576

STR 3299

DEF 3215

AGL 1672

DEX 1746

MIND 3246

INT 5320

LUK 81

《武技》魔槌閃 天翔 イージスシールド

《スキル》

職業

勇者 LV 134 聖騎士 LV 133 守護者 LV 1

34

魔導騎士 LV 124 ヒーロー LV 126 反逆者 L

V 119

EX

MP消費半減 全言語理解 詠唱破棄

超解析 忍耐 忠実

通常

無限収納 LV 24 超解析 LV 25 超隠蔽 LV 2

7

魔力精密制御 LV 1 HP高速回復 LV 17

MP高速回復 LV 18

剣神 LV 6 魔法剣 LV —— 身体能力超化 LV 2

1

五感強化 LV 19 防御力超化 LV 21 精神力超化

LV 21

気配感知 LV —— 龍力 LV 5 龍鱗 LV 5

韋駄天 LV 25 不沈要塞 LV 25

物理大耐性 LV 22 魔法大耐性 LV 22

状態変化無効 LV ——

時空魔導 LV 4 極光魔導 LV 10

《称号》

NEW!!

街の守護者・反乱因子・反逆の勇者・逃走者

達人・龍殺し・魔物の天敵・剣神

レインボータンク・殺人未遂・ホモ上院

《加護》

世界神の加護　＋＋　大天使の加護　＋＋（防御力増加）

《装備》

武器・オリハルコンソード　＋　１７

防具・オリハルコンの軽鎧　＋１７・聖剣の欠片

ミスリルの籠手　＋１７・オリハルコンの腰当て　＋　１７

ミスリルのグリーブ　＋１７

黒髪黒目で、クラス委員だったこともあり勇者のリーダー的な事をやっている人物。何気にイケメンだがホモオ。

イオリ達の転移直後に即死攻撃をかましてきた下手人。だが、物資も枯渇しかけており滅亡しかけてる人間界において、安全な生存圏の確保・生き残りの救出・生存圏の防御を行っていた別面から見ればまさに勇者。

イオリには嫌われた模様。

「蒼矢、謝るからー」

スズカ・ヒイラギ

種族　人族・ニンジャ

性別　女

年齢　１６

職業　劍豪・上忍・体術師範・軽業師・ニンジャ・風水師

LV　１２３

HP　１６７５／１６７５

MP　１７８４／１７８４

STR　１６７２

DEF　１１１５

AGL　３１８９

DEX 2756
MIND 2624
INT 3870
LUK 100

《スキル》

職業

剣豪 LV 125 上忍 LV 118 体重師範 LV 1

00

軽業師 LV 112 ニンジャ LV 123 風水師 LV

99

EX

全言語理解 武士道 忍術 一刀両断 勇気

通常

鷹の目 LV 15 超隠蔽 LV 28 暗視 LV MAX

超集中 LV 23

近接戦闘術 LV —— 忍刀術 LV 23 二刀流 LV

身体能力超化 LV 22 暗技 LV 23 未来視 LV

2

アクロバット LV 22 奇門遁甲 LV 29

毒無効 LV —— 支配無効 LV —— 物理耐性 L

V 12

魔法耐性 LV 12 状態変化耐性 LV ——

《称号》

NEW!!

転移者・剣豪・ 勇者・忍者・精霊使い

達人・魔物の天敵・覚醒者・剣客

天上院のパートナー・探索者・忍

ダンジョン踏破者・下剋上・ユニークキラ

居合抜き・忠実・反逆の勇者・疾風迅雷

勇気・人斬り

《加護》

世界神の加護＋＋大天使の加護＋＋

《装備》

武器・黒塗りの忍刀　＋１６

散魔のクナイ　＋１０　×多数

防具・忍装束《上》＋１８・忍装束《下》＋１８

鉢金　＋１２・消音の靴　＋１３

何気に天上院の現在のパートナー的な立場に立っている少女。容姿は整った方と言えるが、天上院にはあまり効果がない模様。ニンジャなのに挨拶が出来ない、もしくはアンプツシユを普通にしている。

イオリがFate／zeroのアサシンの仮面を作りたそうにし始めた原因だが、イオリからは嫌われている。

「危ないわよ、あんな子を街に入れるなんて……」

アルデイト・ガラント

種族　ハイヒューマン

性別　男

年齢　３８歳

職業　剣王・拳王・バーサーカー・ハイヒューマン・ギルドマスター・
守護者・トール・ヘラクレス・鬼神・タイタン・インドラ（空き１）

LV　２９０

HP　５８７９６／５８７９６

MP　２１０５３／２１０５３

STR　３６２５７

DEF　３５７８９

AGL　１９８５１

DEX　１７６９８

MIND 20002

INT 13415

LUK 102

《スキル》

——解析が妨害されました——

え？

「これ以上は見せられないな」

アツハイ。

度々出てきてた王都のギルドマスター。レベルカンスト直前の、灰髪灰眼の人間界最強さん。武技だけで次元の断層を18枚も叩き破った化物。愛剣はイオリに砕かれてしまったが、それでもイオリに對して余裕を持って戦える程の力量の持ち主。

強盗犯達

銀行強盗に入った後、ファミレスに逃げ込んで立て籠もろうとした犯人たち。上手くいけばウハウハだったのだろうが、イオリ達がいたせいで計画も何も無くなってしまった。ちやっかり拳銃を一丁回収されている。

「幼女怖い幼女怖い……」

メイ

一章以来の登場。《ストームブリンガー》のリーダー。見た目はメイトリックス、筋肉モリモリのマッチョマンだが変態ではない。レベルは156とかなり高い。奥さんには頭が上がらない模様。

「ははは、うちの息子がまさかなあ！」

シンディ

一章以来の登場。《ストームブリンガー》の実質的なリーダー。長い緑色の髪のマム。マムはマムでもナターシャ教授ではない（マムなので飛ばます）レベルは147で魔法型。颯風魔導、業火魔法、神聖

魔法が高レベルで使える。

「話を聞く限り、性別がまるで逆よね……」

ラインネット

通称ロリコン課長女神。神様の集まって出来ている会社が完全にブラックなため、イオリの冒険を見ることが癒しとなっている模様。断じてATMではない。

海堂

クズである。以上

第6章 滅びの人間界

第1話 プロローグ

「暇だー、暇なのー、ひーまーでーすーのー」

「マスター、嫌い」

フカフカのベッドの上で、手足をジタバタ動かしながら私は言う。昨日のメイさん達の雰囲気になんて耐えられなくて、半分以上逃げだすように宿に逃げ込んで一晩。懐かしの宿に来てはいるけど、あと3日は魔法を使っちゃダメっていう話だから、私はいつもやっている事すら出来ずにいた。

「だってもうポーション類を作るの飽きちゃったし、そこからバイハのハーブとかポケモンのきずぐすりみたいなものを作ろうにも魔力を使っちゃいけないっていうしきあ…」

「そんなに暇なら、ロイドに会いに行けば？きつと暇じゃなくなる」
「それはヤダ」

私は机に向かって、謎のハードカバーの本を読んでいるティアからの提案をバツサリと切り捨てる。だって恥ずかしいもん。

それとこういう事を話してるから分かるだろうけど、昨日あれからロイドが会いに来たりとかそういうのは一切無かった。

「とうか、なんでティアあんな事言ったのさ…確か結構前、ロイドに「マスターは渡さない」って言ってたよね？」

「あの時とは状況も強さも違う」

「嘘だあ…」

私の心境だって殆ど変わってないし、ロイドは強くなったけどまだ私の方が強いし…あと変化と言えばSランクの試験って聞いたから、私の復習がてら勉強したっけ？リユートさん達含めた全員で。

「嘘じゃない。強さはマスターの考えてる通り。だけど、マスターのお姉ちゃんどリユートさん達からの応援がある」

「Pardon?」

「なぜに英語。まあいい、もう一回言う。マスターのお姉ちゃんと

リ्यूトさん達から、マスターとロイドの関係は応援されてる」

「One more time」

「くどい。マスターはほぼ詰んでる」

……………

「はあ!?!」

ちよつと衝撃的すぎて聞き返し方が英語になっちゃってたけどなにそれ!?ねえほんとなにそれ!?某週間少年雑誌並に!?が多くなってるけど、初めて聞く情報に私の頭は尋常じゃないくらいの混乱の極みだ。うん、自分でもなに考えてるか分かんない。

「ちよつと待つてティア、リ्यूトさん達はまあいいにしろ結衣姉が?嘘でしょ?」

「嘘じゃない。『本人同士の意思が優先だけど、蒼矢の事をよろしくね』って帰り際に言ってた」

「打つ手、無しじゃん…」

本人同士の意思が優先っていう以上最終的な決定権はこっちにあるんだろうけど、姉ちゃんどリ्यूトさん達に応援されてるって事は絶対に答えは出さないといけないじゃん…

そんな風に思つて枕に顔を埋めていると、ボタンと本を閉じたティアが諭すように言ってくる。

「マスター、よく考える。ロイドはかなりの優良物件」

「どこがさあ…」

「マスターの選択肢、ホモかレズかロリコンか普通の4択だよ?」

「ごめん私が間違つてた」

ホモは…タクあたりかな?けど向こうがもうちよつと反省してくれたら仲直りはするけど、恋人関係とかありえない。

レズウは分からないけど、聞いたらよくない感じがするし嫌な予感しかないからパス。

ロリコン…リ्यूトさんは論外だし、クラネルさんは命の恩人だけで無理。もうヤダ怖い。あんまり会いたくない。

こう考えると、普通の感性ならどう考えても選ぶならロイドになる。なんだかんだで私を心配してくれてるし、後押しが凄いいし。

「でもさあティア、今まで旅してきた相手をいきなりそう見ろって言われても…」

「マスターが元男の転生者って聞いて、受け入れてくれる人が多いとでも？それに、多分リインネートを斬ってもマスターの身体は元に戻らない」

「それは分かるし、そっちも薄々分かってたけど…」

1個目は隠し通せない事もないけど、2個目も神様が直に弄ったんだろうから治らないだろうなって最近思うようにはなってたけど、それでもさあ…

「なら、ロイドとデートでもしてくれば？」

「いやちよつと意味が分からないですね」

何故か話の大事な部分が吹き飛んだ気がする。そもそもロイドと私ってまだ旅仲間程度の関係だし。出かけるのは暇を紛らす分には良いんだろうけど、わざわざ一緒に行く理由がないし？

「マスターがデレたら、ロイドの勝ち。デレなかったら、マスターの勝ち」

「そのデート・ア・ライブみたいな言い方だと、精霊なんだからティアが封印されちゃうじゃん…」

一部を見れば平和だけど、全体的に見ると荒れに荒れている。まさに今の人間界みたいな状況に私の心はなっているのだった。これも全部海堂のせいだ。絶対に訴えてやる。

「うう…とりあえず、お外行ってくる…」

「マスター、くれぐれも魔力は使わないように」

「えつと、それなんだけどね！」

昨日の夜いい感じに作り直した、魔力を抑え込む手錠もとい腕輪をたしかここら辺にしまっておいたはずなんだけど…

「あれ？これじゃないしこれでもないし…」

「マスター、ドラえもんは流行らない」

「そんなんじゃないよう…」

例の腕輪だけを呼び出したはずなのに、くっついてきた邪魔な剣やらアクセサリー類を別の門の中に投げ込んでいく。私は別に青いた

ぬきなロボットでも子ギルでもない。

「あつた！これこれ、いい感じに魔力が使えなくなる腕輪！」

「マスター、それ作るのに魔法、使ったでしょ」

「ギクツ」

射抜くような視線でティアが見つめてくる。あは、あはは…

「せ、せんこーとーしってやつだよ？」

「ふーん」

え、う、あう…ティアの視線がすごく痛い…

「い、行ってきまーす!!」

取り出したばかりの腕輪を嵌め、私は外に走り出していくのだった。

い、いやー、滅びかかっているっていうのに、実に平和だなあ…

第2話 勇者側の鍛冶師

「確かここです。下着とか色々服類を買ったんだっけ？懐かしいなあ…」

久々に私一人だけで街を歩いていると、この世界に来てからすぐの頃を思い出す。なんだか懐かしくなつて、髪の毛を最近はしていなかった長めのリボンでポニーテールにしたり、例のピンク色の鍛冶用ハンマーを腰に佩いたり？してみているせいか、色々懐かしい思い出が蘇る。

因みに青いリボンだけ例のヒモとか言っちゃいけない。ヘスティア様は敵。うしやー。

「あとは…そうそう、ここでナイフ作ったんだよね。もう原形なんてないけど、あの時作ったやつを今でも使ってるし」

私はギルド近くの武器屋さんの前で足を止めてそんな事を呟く。結構お世話になったし、挨拶がてら入ってみようかなあ。そう思った私は、入り口のドアを開け放つ。

「お久しぶりでー…って、あれ？お店間違えた？」

扉を開けた先に広がっていたのは私の記憶にあるいかにもファンタジーな装備屋さんではなく、現代のショッピングモール風な雰囲気の内店だった。置いてある武器防具類も、前までは＋2～5だったのに＋10～13と比べ物にならないくらい上質になつてる。

「いらつしやいませー」

カランカランと鳴った音を聞いてお店の奥から出てきた人も、気配の無いあのおじさんではなく高校生くらいの黒髪女子で…って、「なるほど、ここが勇者の1人がやってるって鍛冶屋さんになつたんだ」

「えっと、私がそうだけどうかしたの？お薬とかは隣のお店だよ…」私をお使いかと思つたのか、隣の雑貨屋さんを教えてくれる多分元クラスメイトの人。覚えてない顔の同級生とはいえあくまで元同級生。そんな人に子ども扱いされるのは、なんかムズムズする。

「久しぶりにこの街にきたから、前にここで武器屋をやつた人に挨拶しようと思つてたんです！けどお姉さんに店長さんが代わつ

ちやつてたみたいだから、挨拶はできないなって」

「そうだったのね。ごめんさい、私も前ここでお店をやっていた人がどこに行ったから分からないわ」

「そうですか。それじゃあ、またいつか…」

「ちよつと待つて！」

うーん、あんまり気晴らしにはならなかったなーって思つてお店を出ようとした時、なぜか呼び止められた。

「最近来た銀髪の小さい女の子…あなたって、鍛冶師のSランク冒険者の人よね!？」

「鍛冶師のSランクなんて、多分私しかないと思うけど…」

「私が作ったこの武器、どうかなっ？」

頭の上に？マークを浮かべ首を傾げていた私に、自信満々でアイテムボックスから取り出した一本の鞘に入った剣を見せてくる。とりあえず両手で持つて、鞘から抜いて見てみる。

刃の部分が両刃で長くて細め、結構重めだし柄は長いから、分類はバスタードソード…でいいのかな？使われるのがミスリルとアダマントタイトの合金だから、硬いし魔力は通しやすいけど…

「+が13、特別な効果が乗つてる訳でもない。重心は分からないけど、合金に不純物が混ざつてるし…うーん、普通？多分私が少し前までいた魔界だと、下手な戦い方したらすぐ折れちゃうんじゃないかな？」

なんかガツカリだなあと思いながら、私は思った事をそのまま口にする。私がリユートさんにあげた30分くらいで作ったやつの方がマシだった気がするし、今仕舞つてる剣の中にはこれ以上の奴がゴロゴロあつたはず。

「け、結構自信作だったのに…」

「とりあえず、何か魔法陣でも彫つてみたいらいいと思うよ！ そうしないと、せつかくミスリル使つてるから魔力を通しやすいのに無駄になつちゃうもん」

若干錬金術師とかの仕事になつちやうかもしれないけど、ここにあつたお店で溶かしたミスリル製のモブの剣ですら、スピードが上が

る魔法がかかってたし。

そんな事を思いながら、左手の親指で先つちよから中間くらいまでの場所の刃をなぞってみる。

「ちよつと何してるの!? 血が出てるじゃない!?」

「え、斬れ味の確認ですけど…」

「とりあえず絆創膏って異世界だからないじゃん!」

「だ、大丈夫ですよ治りましたから」

魔力が使えなくてもどうせスキルで傷は治ってるから、出ていた分の血を舐めとってから私は言う。まあ、西洋剣ならいいんだろうけども…

「あと、もうちよつと斬れ味はあってよかったかもです。多分粘液とかを纏った相手だと、この斬れ味じゃ突くくらいしかできないだろうし」

モンハンで言うなら、まだ緑ゲージだから青ゲージくらいにはなってた方がいいんじゃないかなって感じ。私の大鎌? 最高だと多分紫ゲージだと思う。

「こんな小さな子に言われるのは嫌だろうけど、頑張れ! だよ」

笑顔でサムズアップしながら私は言う。多分魔力が使えない今の私でも、これくらいならすぐに作れるしね!

下を向いてプルプルしてる元クラスメイトちゃんだけど、私から見た事実はそうだし…

「うう、そんな事いうならあなたの作った1番凄い物を見せてよ!」

「い、1番凄い物ですか?」

「そんなに言うくらいなら、よっぽど凄い物なんでしょうね!」

顔を上げて、ズイっと詰め寄ってくる。えっと、私の最高傑作って言ったらティアの杖と私の大鎌だけど…

「私の主武器ですし別にいいですけど…食べられちゃいますから、絶対に触らないで下さいね?」

「え、食べられ?」

さつきより速いペースで元クラスメイトちゃんが後退する。実際食べられちゃうし…って、そういえばあんまり見せない方がいいん

だっけ？でも一回見せるって言っちゃった手前ダメつても言えないし…

「見せる前にこれあげます。魔法陣とか色々刻んでるから、これからの参考にでもどうぞー！」

「えつと、ありがとう？」

大鎌を見せる前に、仕舞い込んでいた大量の武具から剣を一本取り出して渡す。あれだけ言っておいて、何もしないなんてただの嫌なやつになっちゃうしね。

いや、今でも十分嫌な子どもだろうけど、売ったら金貨1枚くらいにはなるやつを無料でプレゼントしたしいいよね！

「それで私の最高傑作の方は…」

ごくりと唾を飲む音が聞こえる。えーと、銃形態のまま出したら面倒くさい事になるだろうから中で大鎌に変形させて…

「えいやつー！」

そんな掛け声とともに一気に引っ張り出す。うん、この謎の威圧感、ひび割れた刀身、メカメカしいデザインの柄部分。偶に変な光が洩れてたりするけど、それもなんか呪われてる感じでいいよね！

「うん、これが私の最高傑作の大鎌ですけ…ど……」

「きゆう…」

満を持って取り出した大鎌を見たのか雰囲気当てられたのか、明らかに目が回って気絶してしまっており…

「わわっ！せ、セーフ」

魔法無しの身体能力だけで回りこみ、全力でどうにか支える。

とりあえず、奥の方に寝かせてくるとして…うん、フルーツの盛り合わせと『ごめんなさい』って書き置しておけばいいよね！

第3話 やっぱりこのお店おかし

「やっぱり鎌は見せちゃダメだったか…カツコいいのに」

宣言通り『ごめんなさい』って書いた置き手紙とフルーツ盛り合わせ、ついでにストックしてあったオリハルコンとか適当な金属を積んだ私は、鍛冶屋さんを出て違うお店を目指して歩いていた。

うーん、鏡が水を通して見るならなんとかなるかもしれない。

「後ここでお世話になったお店っていうとシイラさんの所だけど…あむ」

さっきの鍛冶屋さんみたいに、中身は全く別な所になっていて会えないかもしれない。そう考えると結構悲しくなる。馬車に乗せてもらったり、獣人界でずっと付けてた変身の腕輪のお礼とかも言いたいし。

何故か未だにやっていた、焼き鳥みたいな串焼きの屋台で買った串を食べながら道を歩いていく。この甘辛いタレがなんとも…じやなくて！

「シイラさんのお店、さっきのところの隣なら分かりやすかったのに…」

フロアを出すわけにもいかず、話す人もいないからさみしいなあと思つて歩いていくと、ようやくお目当のお店を発見した。外装の変化は…ちよつと新しくなってるくらいか。

「こんにちはー！」

扉を開けながら私は元気に挨拶する。お店が変わつてたとしても、1番最初に挨拶はしないとね。ほら、某名前を呼んではいけないあの人も『お辞儀をするのだ』って言ってたし礼儀は守らないといけない。「いらつしやいって、嬢ちゃんか。懐かしいな、元気にしてたか？」
「はい！この通りピンピンしてますー！」

先の鍛冶屋さんとは違って、かなり久しぶりに再会する事が出来たシイラさんに、手をブンブン振り回して元気なことをアピールする。「先に聞いたこつちが悪いが、魔力回路が壊滅的に壊れてるじゃねえか」

「えっと、見えるんですか？」

「ああ。何をすればそんなになるのかは知らないがな」

シイラさんですら見えてたのに、私には自分がどれくらい大変な怪我なのかは見えないことに少しイラつとする。むう……この魔眼の二元、全てを見通す目つてなつてたし鍛えようかな……どうすればいいのかわからないけど。

「その腕輪で魔力を封じてるのはいい判断だがちよつと待つてろ？確か魔力回路の回復を促進する丸薬をどこかに仕舞つてあつたはずだ」
そう言つてシイラさんは店の奥に行こうとしてしまふ。あ、ちよつ、待つてくださいよ！

「あの、なんでそんな貴重そうな物を私なんか？」

「あのなあ、目の前に超重傷の子供がいるのに見て見ぬふりができる大人がいるわけないだろ？」

「えう、その、ありがとうございます」

叱るように言うシイラさんにペこりとお辞儀をする。よくよく考えたとそうだよ。壊滅的な大怪我をした小さな女の子、見捨てたら人じゃない。私だつてどう考えても助けるし。

「そういえば、ここは変わつてないんだなあ……」

お店の奥に引つ込んでつたシイラさんを見送つて、周りにある商品を眺めながら私は言う。

初めてここに来た時は鑑定すらできなかつたような、何故ここにあるのかわからないレベルの物が所々にあるのに、その周りには至つて普通なポーシヨンが置いてあつたり色々謎なお店だ。

(あ、変身する腕輪売れ残つてる)

流石に口に出すのは失礼すぎるから言わないけど、私が買ったのと同型の変身する腕輪がまだ2つ売れ残つてた。周りにはヘアピンとか髪留めとか、果てには指輪とかネックレスまで置いてある。全部が魔導具だし、やっぱりカオスなお店だ。

「待たせたな」

そんな事を考えていると、お店の奥からその大きな手に小さな袋を持ったシイラさんが帰つてきた。解析を使つてみると、手にあるのは

《魔法回復薬DX》ってふざけた名前だったけど、効果はキチンとした丸薬と表示された。内容量は10個。

「嬢ちゃんの今の状態を考えても、これら貴重品で俺は商売人だからな……これ全てで、ギリギリまで値切って金貨5枚だ。どうだ？払えるか？」

「もちろんです！」

出現させたギルドカードから、お金を取り出してカウンターにどうにか置く。全財産の大体半分だけど、この暇な時間が短縮されるって言うんなら安いもんだね！

「毎度あり。その中に入ってる一緒に仕入れた紙によると、服用は食後のみだそうだ。間違えないように気をつけるよう？」

「わかりました！」

お医者さんごっこ、そんな言葉と同時にクラネルさんの顔が頭をよぎってすごく微妙な気分になる。と、とりあえずお昼はまだだから、今日のお昼から飲めるなあ（現実逃避）

そんなことを考えながら、失くさないようにホクホク顔で開いた門の中に薬を仕舞っていると、目の前のシイラさんが予想外の言葉を口にした。

「で、さっきからそこで固まってる坊主は何がしたいんだ？」

その言葉に振り向くと、坊主……つまりロイドと目がバッチリ合った。

手には四つ葉のクローバーの髪飾りを持ってて、ロイドがそれを付けるのはありえないから誰かへの贈り物で、ロイドのお母さんの場合は髪の色に紛れて意味が無いから、つまり諸々考えると自意識過剰になるかもしれないけど私への贈り物という事になって……

「ひゃう……」

そこまで考えついて、瞬間湯沸かし器のように一瞬で顔が真っ赤に茹で上がる。ちょっと考えるとリボンの色さえ変えれば私に似合いそうではあるし、色々と辻褃が合う。

「なんだ？嬢ちゃんと坊主ってコレか？」

「ち、ちがいますよ！（まだ）」

「なんだ、息ぴったりじゃないか」

小指を立ててそう言ってくるシイラさんに反論したけど、ロイドとぴったり声が重なってしまった。というかまだって何!? まだって!?

そして、昨日みたいに頭がぐるぐる始めて思考が変な方向にまで派生し始めた時、私のお腹がくうと鳴った。

「つつー!」

「とりあえず、飯でも食べてくればいいんじゃないか? 坊主、それは銀貨1枚と銅貨5枚な」

「あ、はい。わかりました」

とくこうが2段階下がった感じの頭のまま、私はロイドが会計を済ます横で目を回しているのだった。

よし、こういう時は素数だ! 1、3、5、7、違うこれ奇数! えと、えと、2、3、5、7、11…

第4話 フラ（イン）グ（ゲット）

「23、29、31、37、41、43…えと、えと…」

「大丈夫か？イオリ。顔真っ赤だぞ？」

「ひゃ、ひゃいつ!？」

素数を数えてたらいつの間にか、不思議そうな顔をしたロイドの顔がすぐ目の前にあった。しかも真っ赤に茹で上がった私の顔の、おデコに手を当てている。

多分顔真っ赤だし熱があるか確かめてくれるアレなんだろうけど、思考が色々女子っぽくなっちゃってる今の私にとっては逆効果で…

「凄く熱いんだが…：…本当に大丈夫なのか？昨日の怪我が響いてるとか…」

「気にすんな坊主。しばらくすりゃあ治るさ」

陸に打ち上げられた魚みたいに口をパクパクしてるだけの私の代わりに、ニヤニヤしたシイラさんがそう言ってくれた。本当にありがとうシイラさん、ちよつとまだ頭がぐるぐるでしゃべれんです。

「でも、昨日の…」

「大丈夫だ大丈夫だ。年の功ってやつを信じろ」

「はあ…」

よし大丈夫だ落ち着いてきた。深呼吸すればいける。はい落ち着いてー、すーはーすーはー。

「嬢ちゃんは腹空かしてるみたいだし、ついては手でも引いて飯屋にでも連れてってやればいいんじゃないかねえのか？」

「わかりませs「手は引かれなくても歩けます!!」

ロイドの言葉を塗り潰すようにして真っ赤な顔で叫ぶ。ふう…こんな状態で手なんて繋がれたら、一体どうなるかわかったもんじゃない！

お、おうってシイラさんが引いてるけど、そんなの知らないったら知らないもん！

「えつと…とりあえず、どっかに食べに行くか？」

「えう、あう…：…うん」

改めて面と向かって話しかけると、私が絞りだせたのはそんな言葉だけだった。うう、これじゃまるで本当に女の子みたい：いや今の私は女の子だけとお！

そしてそのまま、私は向こうも若干赤くなってるロイドの後に付いてお店を出ていくのだった。ずいぶんとしおらしい態度じゃねえか、脈アリか？　なんてシイラさんが言ってたけど聞かないことにする。「そういえばあの店で何を買ってたんだ？」

真っ赤な顔のまま、二、三步後を俯いて進む私にロイドがそんな事を聞いてくる。ねえ、そんな事聞くななら私もロイドが買った髪飾り誰にあげるか気になるだけだ。

「葉」

「なんの？」

「魔力回路の治りを早めるやつ」

「そうか」

………：気まずい。沈黙が凄く気まずい。

髪飾りの事は確かに聞きたいけど聞きにいける雰囲気じゃないし、かといって向こうが言ってくれる訳でもないし…

そんな風に悶々としながら道の端を歩き、ちよつと暗めの路地裏に続く道に差し掛かった時、突然私はそちらの方向に凄い勢いで引つ張り込まれた。

ろくに頭の働いてない状態の私は、そのままなす術もなく地面に足のつかない宙ぶらりんの状態で壁に押し付けられる。全身が押し付けられてるこの感じ、人の手じゃない……魔法？

「よう、久しぶりだなあクソ少女」

そんな疑問の中、暗がりの中現れたのは左手を突き出し血走った目をした大柄な男。ちよつとしたホラーだ。

「えつと…誰です？あなた」

「お前に全てを奪われた、モーブだよ!!」

そんな怒鳴り声と共に、右手で思いつきり顔を殴られる。ちよつ、いきなり何するのこの人!?

今ので頭が完全に戦闘モードに変わったけど、魔法が完全に使えな

い上に踏ん張れない空中じゃ、この全身を拘束してくる魔法を振り解けない。空を飛ぶための靴じゃないし、どうしよう…

「お前を攫う機会を待ってたんだよ、お前が魔法を使えないって聞いてなあっ!!」

「いや、そんなこと言われても知らないですよ」

魔法さえ使えればこのくらいの魔法程度…：念話もなぜか飛ばせないし、口の中が少し切れたのか血の味がする。

「ああそうかよ、トントントン拍子でランクアップしてたお前にとって、俺なんか覚える価値もなかったか。お前がギルドに入った直後のことなんてなあ!」

「ぐうつ」

今度はお腹に右の拳が突き刺さる。あんまり痛くはないけど、胃袋に直撃したのか吐き気がこみ上げてくる。ちくせう、思い出したし色々言いたいことはあるけど気持ち悪くて言えない。

「お前に負けてからの俺の苦労が手前にわかるか? ああっ!」
「うぐつ」

裏拳が顔に入る。さつき出した大鎌をそのままにしておけば良かったなあ…と落ち着いた思考で考える。こんな状況でも落ち着いてるって、私もだいたい頭がおかしいな。うええ…鉄の味がする。

「お前に金も武器も奪われて、ギルドのランクも降格させられて!」
「うつ」

ひざ蹴りが鳩尾に突き刺さる。うわあミシツていったしジンジンする。けどまあ、クトウルフと戦った時に比べればなんてことない。でも骨にヒビでも入ったんじゃないかな? 思った以上にこいつは強いらしい。

「拳句の果てに、ついたあだ名が【雑魚ロリコン】だ!どこまでのし上がってもそのあだ名が付いてくる気持ちかわかるかあ? 【流星群】さんよお!!」

魔眼の情報通り、私の顔面に拳が打ち込まれる。目は閉じたけど、流石に顔は痛い。鼻血でできた…泣きそうになるけど、それを押し殺して血混じりの唾をペツと吐き捨てて言い返す。

「知らないよそんな事。そもそも酔っ払って勝負仕掛けてきて、負けたあなたが悪いんじゃない？」

「その態度が気に入らねえんだよ!!」

そう言ったモーブが磔にされたままの私の胸ぐらを掴み、そのまま引きちぎる。え、は…?服、2着目…

「な…に…を?」

「散々言われてる通り、俺は所謂幼子見性愛者ってやつでなあ…」

その後も何か言ってるみたいだったけど、一切耳に入ってこない。

え、何ちよつと待って?なに、インガオホー?ロリコン?エロ同人?そんな言葉が頭の中を駆け巡る。まだスポーツタイプのな下着こそあるもののそれって…

「え、嫌!放して!誰か!」

「ははっ!もつと泣き喚け!誰にも聞こえねえだろうがなあ!アヒヤヒヤヒヤヒヤ!!」

全力で魔法から脱出しようともがくけど、若干魔法が軋む感じがするだけで脱出はできない。ちよつ、これはシャレにならないって!ロリコン(悪)とかバカじゃないの!?

そんな事を思ってる間にも、私の身体にモーブの手が伸びてくる。流石に初めてがこんなのはやだ、絶対やだ。本当に、誰でもいいから助け…

「イオリに何してんだお前っ!」

私に手が届く寸前、一陣の緑風が通り抜けた。

モーブが裏路地の奥に吹き飛ぶ。それにより謎の拘束から解放され、どしやりと落ちた私が見たのは、この寒い中汗だくで右手を振り切った体勢で息を切らしている…

「へ、あ…ロイ、ド?」

「はあ…はあ…、間に合った」

ついさっきまで隣を歩いていた、仲間だった。

どうしよう。何か、ロイドが凄くカッコよく見える…

第5話 ラブフラゲ

「何か変なことかされてないか!？」

「え、う、うん。されそうだったけど」

地面にへたり込んだまま、今さっきまで忘れていた《^{アナザーワールド}もうひとつの世界》の中からコートを引つ張り出して羽織る。中にいるフローから抗議の念が飛んでくるけどそうだよね…門さえ開けばどうにかできたもんね…

「何邪魔てくれてんだ…死ねえ小僧っ!」

そう私とロイドが話している隙に、吹き飛ばされたモーブが魔法を…多分私を押さえつけてたのと同じ見えない何かを飛ばしてきた。

怖さとか照れとか色々混ざって魔眼の情報を読む暇はないけど、それはロイドに当たる寸前、一瞬だけ嵐のような風が吹いて魔法はかき消されてしまった。多分これが豪嵐の守護ってやつなんだろうね。

「チツ。小僧、テメエどつから入って来やがった。ここは高い金払って買った魔導具で隔離した筈だ」

「そんなの知るか、手当たり次第に探したただけだ!!お前こそなんの目的があつて襲った!」

暗がりから戻ってきた大きめの剣を持ったモーブに対し、徒手空拳のロイドが右手でモーブを指差して答える。私も不意打ちで参加したいけど、腰が抜けてるっていうのかな?足に力が入らなくて立てない。うう、情けないし恥ずかしい。

「手前にいってやるギリはねえが、冥土の土産に教えてやるよ。復讐だ。俺から全てを奪ったそいつになあ!」

そういつてモーブが、その巨体に似合わないスピードでロイドに斬りかかる。ように見せかけて、謎の見えない力…多分《無魔法》で砂埃を起こし、ロイドじゃなくて私に斬りかかってくる!?

「ふ、ふろー…ファイアブレ」

「見え見えだつてんだよ!」

私がフローにファイアブレスを頼む数瞬前、目潰しの砂埃を吹き散らしたロイドの回し蹴りがモーブの鳩尾付近に直撃する。バキバキ

と鈍い音が鳴り、再度モーブは暗がりには吹き飛んで行った。

「イオリ、さつきあいつの言ってた復讐って？」

「さ、さかうらみー！」

殴られてる間に言われた事を思い出し、思った事そのままを私は言う。だいたいあれって、そーほーのごういを得た上での賭けだったはずだもん。向こうがどうなったって知るもんか！

「私も戦わないと…あと、なんでロイドは剣を使ってるの？」

コートに袖を通し、取り出した大鎌を支えにどうにか立ち上がる。ぐぬう、魔法が使えないのはやっぱり不便だ…あと足ガクガクする。

「イオリは休んでろよ。そんな状態じゃろくに戦えないだろ？」

「いや、でも」

「それにあんな剣を抜く価値もないやつ、すぐに片付けてくるから。安心してくれ」

そういつた瞬間、ロイドの姿が掻き消えた。吹き付けてきた風の感じだと暗がりの方に行ったみたいだ。風圧に負けて女の子座りにもどる。伏兵とかがいるかもしれないから念のため、フローを門の中からこつちに呼んでおくけど、これって…これって…

「うう…これじゃ私完全にヒロインじゃん。腰も抜けちゃってるし、ねえフロー？」

「きゆう？」

久しぶりに外に出たからか、キョロキョロしていたフローに話しかけてみたけど、何を言ってるの？って念しか返ってこなかった。その間にも、奥の方からドガツとかバキツとかグシャツて生々しい音が聞こえてくる。やりすぎてないかな？ロイド。

「とりあえずこれかけといてね、フロー」

「きゆう」

なんにしろ暫くはフローを召喚しておかないといけないから、変な誤解をされたりしないようにしないといけない。という事で、今取り出したこつちの世界の文字と日本語で『ぺつとです』って書いた木札をフローの首にかける。

「へ、ペットなのか…」

そんな事をしている内に、右手でモーブを引きずったロイドが戻ってきた。多分出てた鼻血を拭きながら、それにどこか安心してしまった自分にびっくりする。

「まあ、それより大丈夫なのか？本当に怪我とかしてないか？」

「う、うん、治ったから…」

「いつつも気づけばいなくなつて、一人で何かに巻き込まれて…心配するこつちの身にもなつてくれよ…」

心底安心したといった顔でロイドがそう言う。う、戦闘脳から戻ってきてるせいかな若干恥ずかしさが戻ってきた…

「今回の例外だよ！いきなり攫われたんだから！」

「それでも心配したのは変わらないんだからな」

女の子座りのまま、ポカポカと腕を振り回して抗議する。心配してくれるのは嬉しいけど、今までのだって結構不可抗力だし？そんな風にジタバタしている中、ロイドが言った。

「…立てないのか？」

「うっ。うん、腰抜けちゃった」

あははと笑いながら私は言う。未だになぜか足に力が入らないんだよね、すごく怖かったのと安心したのが原因なんだろうけど…そんな事を考えていると、ロイドが完全に予想外の行動を起こした。

「よつと。軽いな、ちゃんと飯食べてるのか？」

「ちよつ、ロイドこれはダメ！恥ずかしい、おろして！せめておんぶにしてー」

ロイドがモーブを捨てていきなりお姫様抱っこしてきた。うん、大事なことだから二回言うけど、いきなりお姫様抱っこされた。ついさつきまで色々な感情がごちゃ混ぜだったのに、今はもう羞恥と恥ずかしさで全部埋まってしまつてる。

「おーろーせー！」

「分かったから。分かったから暴れないでくれ！落とさふべっ」

力こそこもってないけど、暴れてた私の手がロイドに直撃した。あつ。そしてそのまま落ちていった私は、待機していたフロアにキャッチされるのだった。

◇

「それで、これからどうするんだ？ やっぱりギルドか？」

「うん。一応色々問い詰めないとだし」

リユートさんと比べると小さい背中におぶられながら、私はそう言う。モーブは保管してたアダマンタイト製の鎖で縛ってフロアが啞えている。とりあえず背負われてるからコート一枚だけで密着する事にはなるけど、真っ赤な私の顔が見られないから安心だ。

「色々って何があるんだ？」

「どうせ私怨でのほんこーだけど、Sランクとしての権限とか全部使ってギルドから除籍させてやる！ それに…」

しよっけんらんよーみたいになるかもしれないけど、暴行傷害罪に強姦未遂だし地球でもこっちの法でも投獄確定だもん。気にしちゃいけない。それにしても、安心する暖かさとお：なんでもない。

「それに？」

「ギルドは除くけど、どこか組織にぞくしてたりしたらね、部下の罪は上司の…会社の罪だもんね！ いしやりようぶんどつてやる…」

「今のイオリがそんなこと言っても一切怖くないけどな」

「あう…」

普通にいい負けて、私はおとなしくロイドに運ばれて行くのだった。とかいつ着替えよう？ イリヤっぽいコートだから大丈夫だけど、まだ下は破られたままだし…

第6話 蹴り上げは痛い

ロイドにおんぶされて移動する中、私はさつき念話ができなかった理由と思われる腕輪を外す。一応証拠とか言われた時のために、過去の記憶を映し出せるティアを呼ばないとだしね。間違っても旧支配者とかモーブ以外に見せちゃいけない。

「痛い…」

「怪我でも触っちゃったか？」

「ううん、大丈夫」

念話を使った瞬間全身に刺すような痛みが走ったが仕方ない。というか、念話を使い続けてる現在進行形で痛いけどどうにかティアに繋がる。

（もしもしティア、聞こえる？）

（問題ない。頼みたいのは、さつきの事の証人？）

魔法が繋がった直後に、あの場になかった筈のティアからそんな答えが返ってきた。えと、何コレ以心伝心？いや苦痛の時間が減るからしいんだけど。

（似たようなもの、念話が繋がれば心は読める。あと、全部見てたから）

（それならなんで助けしてくれなかったのさ!!すつごく怖かったんだよ!?)

（イベントに介入するなんて、無粋極まる事。事実、マスターはロイドの事）

（わーわーそれ以上なし!言っちゃダメ!とりあえずギルドに来て!）

（むう、了解した）

ティアのその返事を聞いてすぐに、私は念話を切って腕輪を嵌め直す。ううっ、全身が痛い。早く薬飲みたいけど食後だし…

「ギルドに着いたんだが、降ろしてもいいか?流石にこのままギルドに入るのには恥ずかしいんだが…」

「うん、コレから助けってくれたりおぶってくれたりありがたいとうね。フ

ローももう戻ってて?」

ロイドに笑顔でそう言い、ギルド前でおんぶから降りしてもらおう。それでロイドの手が空くからフロアにも門の中に帰ってもらったけど、不満気な念が伝わってきたから、後でまた外で鬼ごっこでもしようと思う。

「足は大丈夫。服もコートを脱がなきゃ大丈夫。よし、アルさんにじかだんぱんしてやる」

「幾ら何でも、さっきの事は犯罪だからな」

「私も混ぜる」

気分を引き締めロイドと顔を見合わせた時、後ろからそうティアの声が聞こえた。振り向いてみると、何故か足を一切動かさずホバー移動しているけどとりあえずそれは置いておく。よし、この布陣なら勝てる。何にかは分からないけど。

「どうかしたのか?お前ら。そんなもん引きずって」

受付嬢の誰かに掛け合ってもらおうと思ってたけど、ギルドに入つてすぐのロビーにアルディートさんは居た。少し疲れてるように見えるし、多分訓練でもしてたんだと思う。

「ちよつとこの人に襲われて、強姦されそうになったので突き出しに来ました」

「俺が間に合わなかったらって思うとゾツとします」

「私は証人」

私はロイドの引きずっていたモーブを蹴り飛ばしながら、ロイドは真剣な表情で、ティアは相変わらずの無表情でそう告げる。最初はいきなり言われたそんな事に戸惑った様子のアルさんだったが、すぐに真面目な顔をして言う。

「それが事実だとしたら投獄は確定なんだが、マズいな」

「何がマズイんですか?」

即座に聞き返した私に、アルさんは何やら難しい表情をして答える。なんか後ろの方で受付嬢の人達がザワザワし始めた。

「今この人間界で洗脳されてない街は、ここを含めて4つしかないってのは知ってるだろ?」

「はい、一応」

「それになんの関係があるんだ？」

「黙って聞く」

若干突っ掛かっていったロイドがティアに制される。うん、まあそうだよ。絶対あとに重大な事が続く感じがするし。

「嬢ちゃんに手を出したって言うコイツは、一応街の代表の護衛をしてる奴でな。証言だけで、何も伝えず牢に入れたら面倒な事になる」「うむむ、確かにそれだと面倒な事になっちゃいますね…」

「こんなクズを護衛って、どんな趣味してるんだ…ですか？ その街の代表って言う人は」

「間違いなくコレと同類」

そう言ってティアも気絶してるモーブに蹴りを入れる。ティアのパワーでそれをやったら大変な事になるじゃ…そんな事を思ったけど、次の瞬間ミシツという音がしてティアの足がモーブにめり込む。そして幾ら気絶してるとは言っても、そんな事をされたら目を覚ます訳で…

「手前今すぐ鎖を解きやがれクソ幼女！殺すぞ！つーかどこ連れてきやがっ…た」

「ほう、俺の前でそれを言うのか」

鎖に縛られたまま暴れ出そうとしていたモーブの動きが止まり、みるみるうちに顔が青くなっていく。それに合わせて受付嬢の人達からサイテーとかクズねとかヤジが飛んでくる。

「ち、違う。今のはちよつとした脅しで…」

「ほう、殺意を剥き出しにした脅しか。大人が子供に対してやってるんだ、それ相応の理由があるんだろうな？」

アルさんが殺意全開で、ニイツと笑いながら言う。モーブの元々青い顔が更に青くなっていくのを見るのは笑えるけど、私としてはナニを斬り飛ばしたいくらいキレてる。

「暇してる奴を呼んできて、コイツを地下に拘束しておけ。さっきは問題があるつつつたが、コレはアウトだ」

「あの、地下にコイツを連れてくの、ちよつとだけ待ってもらってもい

いのですか？」

私としても、ロイドに任せっぱなしだったせいで最後に1発だけ返しがしたい。ティアと顔を見合わせ、お互いにやりたい事は同じだって事を確かめる。

「別にいいが、どうかしたのか？」

「はい、ちょっと仕返しがしたくて。やるよティア」

「相手のゴールに、ボールを、シューウウウトー！」

私はスキルとかでブーストをかけた右足で、ティアも同じように左足で、倒れたままのモーブの息子がある辺りを思いつき蹴り上げた。

「あがつー！」

「超！エキサイティン！」

何かを蹴り潰した気持ちの悪い感触と共に数mある天井付近にまでモーブは打ち上がり、白目を剥いた状態で床に叩きつけられた。本当はナニを踏みつけた状態で轢き潰す完全に再起不能にする方をしたかったけど、こつちの方が楽だから仕方なくこつちにした。

「嬢ちゃん達、随分とえげつない事をするんだな」

「コレでもまだ足りないですよ！全く」

「マスターの慈悲に感謝するがいい」

青い顔のロイドが苦笑いしてるけど、まあ今回ばかりは許す気なんて毛頭ないから仕方ない。私は怒ると怖いんだぞーがおーって感じだ。

そんな事を思っている間に、ようやくきたギルドの職員さん(男)がモーブの腕と足を掴んでそのまま地下へと連行していった。

「とりあえずスッキリしたし、後は私たち3人でご飯食べて薬飲んで休むのが1番いいかな？」

「いや、マスターとロイドの2人で行くといい。私は買い食いしながら帰る」

「切り替え凄く早いよな、イオリ達って…」

そういえばお昼ごはん食べてないからお腹空いてるしということ、そんな他愛もない話をしていると、入り口の方から全く聞き覚え

のない声でした。

「この騒ぎはなんなんですか？折角この私が出来たというのに…」

振り返るとそこには、いかにも性格の悪そうな顔をした色白のひよろりとした男が立っていた。うわあ…面倒ごとこの予感。

第7話 今回私は悪くない

いきなりギルドに入ってきた明らかに面倒ごとにつながりそうな男。魅力の無いシユピ虫さんという印象の男を見て、念話すら使わないで考えが一致した私とティアが起こしたのは…

「あ、はいティア薬。飲むタイミングは食後だっけさ」

「了解。マスター達も、存分にイチヤイチャしてくるといい」

「い、イチヤイチャなんてしないよ…けど行く？ロイド」

何か面倒事に巻き込まれる前に、自然体を装って速やかにこの場を離れることだった。だっけそうじゃん。さっきモーブ^{クズ}の玉を潰しちゃったし、私達が街に入った経緯とかを考えると、絶対に何か言われる気がするもん。ロイドにも、合わせてって視線を向ける。

「あ、ああ。どこに行くんだ？」

「結構前にあつた、美味しかったところー」

一刻も早くこの場を離れたいので、多少の恥ずかしさは我慢してロイドの手を握って引っ張っていく。うん、元々そこに行くこうとは思ってたから不自然さは無いはず！

「その子供達、少し待ってくれませんかね？」

「げっ」

そう内心自信満々で歩いて行き嫌な男の隣を通り過ぎようとした時、そのまま通り過ぎたいと私は思っていたけれど、呼び止められてしまった。

『げっ』とはなんですか。この私が話しかけているというのに…」

「えっと、私達になんのようですか？」

「その髪や眼の色、あなた方が新しく街に入った子ども達ですね？」

多分180を超えてる高さから見下ろされて威圧感を覚えるけど、ティアもロイドも隣にいるし、さっきのモーブ^{クズ}と比べたら全く怖くない。一応、私が代表してこの人の質問に答える。

「えっと、多分私達がそうだと思いますけど…？」

「そうですね。ならば率直に言わせてもらいましょう、街から立ち去

りなさい」

「はい？」

いきなり言われたそんな言葉に、私は思わずそんな言葉を漏らしてしまう。何言ってるのこの人は？ ポツとでてきた癖に、私達に消えろって言ってるの？というかそもそも誰？

「何、私も鬼ではありません。その脳筋や化物共と戦ったせいのできた傷、それが治るまでは滞在は認めましょう。もちろん、拘束はさせていただきますが」

「嫌ですよ。というかそもそも誰ですかあなた」

そういかにも自分が正しいという顔で話すこの人に、私はすぐに質問を返す。一応話せる人ではあるみたいだけど、何も知らないままっというのは納得がいかない。

「確かに名乗っていませんでしたね。私の名はアンジエロ。誇り高きセントシュタイン王国の貴族です」

「アンジエロ…」

どうしよう、すごく心を覗いてみたい。それでもって、自滅してもらって天狗道に堕ちていつてほしい。なんか生理的に受け付けられないだよね、この人。香水みたいな何かが臭うし。

「でも、出て行くことは拒否する。理由がない」

「そうだ！俺たちが何をしたって言うんだ！」

やっぱり貴族ってこういう奴が多いのかなあ…なんて私が内心ため息を吐いていると、ティアとロイドがそう反論する。全くだよ、私達がやったとこなんてアルさん達と戦ったくらいじゃん。

「やれやれ。こちらが下手に出てあげているというのに、これだから子どもは…」

左手を額に当て、芝居がかった動きでアンジエロさんがそう言う。無性に腹の立つ動きにプツンしそうになっていると、今まで黙っていたアルさんが会話に入ってきた。

「ちよいと待てや代表。そいつらが街にいる事は俺もここの代表だとして認めてる。いきなり来たあんたがこいつらを追い出す権利はない」
「やはりギルドマスターは頭の中まで筋肉のようですね。聞くところ

によるとその子どもは、あなた達と対等に渡り合ったというじやないですか」

「それがどうした」

額に青筋を浮かべたアルさんがそう言う。そーだそーだ、それがどうしたー！ 私は正直アルさんに遊ばれて気しかしないけども。

「ギルドカードに表示されている出身地がおかしく、なおかつ今この人間界をおかしくしているスキルと同系統のスキルを持つ幼女が2人。加えて片腕が異形と化している少年、これを密偵や危険分子と疑わないあなたはどうかしていますよ」

「こんな子どもが、その役を果たせるとでも思っているのか？」

「いいえ。けれど、あらかじめそのような魔法が仕込まれている可能性はある」

ジロリとこちらを睨みながらアンジェロさんが言う。魔界から転移してきたばかりだったのに、そんな魔法を仕掛けられる暇なんてなかったよ…

「それが理由で、私達に帰れって言ってるんですか？」

「ええ、そうです。撤回するつもりなど毛頭ありません」

そう睨み返しながら、私はティアに念話を飛ばす。こっちの世界で意味があるかはわからないけど…

(Sランクの冒険者って、どれくらいの権力あるんだっけ?)

(たしか下級の貴族と同じくらい)
(ん、分かった)

よし、それなら多分私のやりたい事はやっても大丈夫だね。そんな事を思った瞬間、こちらを睨みつけていたアンジェロさんの顔に見慣れた手袋が直撃した。

「なんのつもりです？少年」

「あんたが意見を撤回しないって言うんなら、俺の意見を通すならこうするしかないだろ？」

そんな私の考えを先読みしたような行動をしたのは、案の定ロイドだった。というか、こっちの世界でもこれで決闘する事になるんだ…
「やはり冒険者というのは野蛮な生き物ですね…ですが、今回のコレ

は合理的ですね。確かに私の意見を曲げさせるには一番早い」

最近ロイドが左手に着けていた、市販品の手袋を拾い上げながらアンジェロさんが言う。白い手袋じゃなかったんだけどいいのかな？
これって。

「そちらに合わせて武力方式でいいですね？ 決める日程は2日後辺りが丁度いいでしょう。今日は私も、護衛はモーブしか連れてきていませんし」

「ギルドの闘技場を使えば、死人は出ないしな」

「あ、でもモーブなら今さつき強姦未遂で投獄されましたよ？」

いい感じに決まりそうだった雰囲気、私の漏したその言葉でピシリと固まる。周りから何言っちゃってるのさ…って雰囲気、ビシビシ伝わってくる。

「ふん、まあいい。ならばモーブはそれまでの奴だったということだ。日程は2日後、貴様ら3人心して待つがいい」

そう言ってアンジェロさんはクルリと踵を返し、ギルドから出ていった。…あれ、いつの間にか私も戦うことになってる？

第8話 外堀なんて埋まってた

「という訳で。さつきロイドが思いっきりやらかしちゃったから、作戦会議をしたいと思います！」

「どんどんパフパフー」

「いやティア、やるならもうちょっとやる気だそうよ…」

お昼過ぎ、まだあと2日はあるけど私達は宿屋に戻ってテーブルを囲んでいた。ロイドと2人で食事とか、恥ずかしさとか緊張が混ざって絶対におかしな行動になる自信がある。例えば告白されたらOK出しちゃうとか。

「さつきは巻き込んだりやってゴメンな、2人とも」

「別にいいよ、私達に関わることだし」

「それにあいつ、ムカついた」

全くもってティアの言う通りだった。今まで会ってきた王族とか貴族の人はいい人達ばかりだったけど、やっぱりあーゆーやつはいらって事だね。解析は使ってないけど、強い人特有の気配見たいのが一切しなかったのにあんな態度なんでもん、あの人。

「で、作戦だけど私とティアは多分魔法使えないんだよね…使えても普段の半分くらい」

「マスターの買ってきた薬込みでそうなる」

「それって結構ヤバいんじゃないか？」

「んー、流石にSSランクとかタクくらいの人が大勢だったり、Sランクが沢山来たらマズイかもね」

「けど、たかが数名のSランクになら負けない」

多分あのSランク（仮）さんと戦ったのと同じ場所でやるんだろうから、人死にが出ない分手加減する必要はないしね。私に関しては、やる気になれば10人程度なら即刻退場させられるし。

「けど、一応あのお貴族様と戦うのはロイドの役目だね」

「手袋投げつけた本人、責任は取る」

「ああ、それはこっちからも頼もうとしてたから大丈夫だ」

私もこれに関しては、本人同士には何もするつもりは無い。だって

騎士道精神とか横合いからなんたらーって言われたら面倒くさいし、1対1の闘いは見ても楽しいしね。

「それで、確かここの闘技場ってちよつとした体育館くらいの大きさはあるよね？だから多分、どうせ物量で押ししてくると思うんだよね」「まあ、貴族ならそれくらいはしてくるだろうな」

「Aランク程度の実力者なら、いくら来ても問題はないけど、その前に一つ質問」

「ロイドのスキルにある豪嵐の守護って、どんな効果なの？」

私は首をコテンと傾げながら尋ねる。モーブの魔法を掻き消したのは見たし、私達との訓練中にも偶に出てたけどよくわからなかったし。他人のステータスを覗くのはタブーらしいから、何気にこの話は始めてだったりする。

「それって関係あるのか？」

「うん、大アリ。私の考えてる効果と違ったら、ロイドを即死技に巻き込んだじゃうもん」

「私は防げるけど、ロイドが防げなきや意味ない」

「んー、まあイオリとティアさんだからいいか。ある程度の魔法の無効化と強い魔法の効果を減らす事、それと飛び道具の完全な無効化だな。それと、気休め程度だが速くなる」

若干誇らしげな顔でロイドが言う。それに一瞬テンペストが思い浮かんだけど、すぐに私も使える《風纏》が凄く強化されたやつなんだなと思ひ直す。

「えっと、それっていつも発動してる？それとも使おうって思ってる？」

「いつも発動してる感じだな」

「ん、分かった。教えてくれてありがとうね」

とりあえずそうロイドとの会話を切って、慣れてないけど作戦を少し考えてみる。とりあえずロイドと私が切り込み役で、ティアは魔法使ってもらうしかなくて…

「とりあえず私は色々やらからあんまり近寄らないほうがよくて、ロイドの防御面は不安だし…できればティアにはそっちのサポ―

トをお願いしたいかな」

「了解」

「俺はどうすればいいんだ？」

「私と一緒に切り込んで暴れよー！」

やっぱり戦うって言ったら近接戦闘が一番華があるし、ロイドのステータス的に一撃必殺か一撃離脱ヒットアンドアウェイな戦いの方が一番やり易そうだしね。え、私？ 全距離対応型の近接戦闘大好きな感じかな。ティアは多分、砲撃とか広域殲滅型？

「そんな簡単な作戦で大丈夫なのか？」

「うん！だって地力が違うもん。どうせ装備も頑張ったって粗悪ひ……こほん、もとい名品程度でしょ？そんなんじゃないよこっちの防御突破できないしね」

私が全力で自重もなく作って整備と調整も受け持つてる装備だもん、よっぽど荒い使い方をしなきゃ壊れるわけがない！ ドヤ顔でえへんと（無い）胸を張るけど、途端に恥ずかしくなってアワアワと取り乱してしまう。

「マスター、こんな間近でのラブコメ、ご馳走様」

「あ、ちよっ、いや、ラブコメじゃないし!? 付き合ってるんかないし!?」

ニマニマとした笑みを浮かべたティアが言ったそんな事を、顔をリングのようにしながら私は否定する。そ、そうだし。私別にロイドから告白とかされてないしー!?

「よしロイド、マスターに告白しよう」

「はっ!? な、なananんで今ここで!? それに心の準備が…」

「だって、その方が面白そうだから」

「面白そうとかでそういうの決めるなあっ！」

もしそういう事するなら、ほら、その、こう…多少はロマンチックな感じがいいし…って何考えてるの私はあ!! ティアのニヤニヤとした顔が妙にウザい。

「へー、やっぱりマスター」わー！無しなし！薬も飲まなきゃだからお昼食べないと！ね!？」

「あ、ああ。そうだな！」

リユートさんもレーナさんもないけど、やっぱりこのドタバタした雰囲気はいいなあ…と思うのだった。

あーお茶がおいしいなあー!!ん?あれ?なんだろう、この会話前にもした事あるような…まあいつか!

第9話 速さが足りてた

「ようやくきたか貴様ら。そちらから決闘を申し込んだのだ、よもや逃げたりはしないだろうな？」

「はあ…やつぱりこうなつちやつたか…」

「逃げる訳がない」

作戦会議をしていた2日後のお昼、ゆつくりと休養した私達はギルドの闘技場に來ていた。え、間の日？何してたからヒミツだよ？そして闘技場で待ち構えていたアンジエロ達はやはり…

「イオリって、未来でも見えてたりするのか…？」

「ひーふーみー…だいたい60人弱。レベル平均83だよ、マスター」
「一応、数秒先の未来なら見れるかな…でも、まさかここまで予想どおりになるとは思ってたよ」

ティアの言う通り、こちらが3人なのに対し大量の戦力を用意してきていた。見たところ1番前にいるのが戦士タイプの人達で、その後ろに魔法使いっぽい人達と騎士甲冑が居座ってる。私たちはレイドボスか。

「どうした貴様ら、武器を構えよ。決闘を始められんではないか」

「決闘が始まったら抜くのでお構いなく」

「同じく」

全身キチンと武装しているのに、武器だけ持っていない私とティアを見て、1番奥で所謂騎士甲冑の中からアンジエロさんが声を響かせてくる。いやそんなこと言われても…多分大鎌も杖も、見た瞬間何人かは強制退場だろうし、それで難癖付けられたくないし。

「えっと、こっちが勝ったら私達の滞在を認めて」

「そっちが勝ったら、わたしたちは出て行く。それでいい？」

「ああ、その条件で構わん」

よし、言質は取った。これでもう、こっちが勝てばなんの文句も言われなくなるね。

「それじゃあアルサーン、合図お願いしまーす」

「おう！ 任せとけ」

「蒼矢ー、負けても便宜は図ってあげるからー」

なぜかいるタクの応援は無視して、門に手を突っ込んでいつでも大鎌を取り出せるように構える。実はもう私の攻撃の下準備は始まっているけど、ティアしか気づいてないから問題ないよね。

「そんじゃ始めるか」

そう軽く言ったアルさんの言葉で、場の雰囲気が一気に引き締まる。治ってきてるとはいえ、やっぱり魔法は大体本気の半分くらいでしか使えないか…まあそんなの気にすることじゃないけどね！

「デュエル開始ー」

その言葉が聞こえた瞬間、私は門山札の中から大鎌カードを引ドつ張り出ローしながら、小さく呟く。

「Yetzira^形hah^成l^生Falce^と vitam^死ortem^大」^鎌

今回は私の周囲に止まってるけど濃い血の匂いが漂い、大鎌の刀身のひび割れが怪しく光る。中二感溢れるけど、まあ斬魄刀の解号みたいな感じだと思ってもらえればOKかな。同時にティアも杖を取り出したせいで、プレッシャーに負けてか予想通りバタバタと6人くらいの冒険者が倒れた。

「ロイド、とりあえず行くよー！」

「おうー！」

そんな返事が聞こえたと思った瞬間、隣で二刀を構えていたロイドの姿が風となって掻き消える。もう金属音が聞こえるからやり合い始めてるんだらうね…私も負けないようにしないと！

ロイドより2秒くらい遅れて、私も敵の冒険者の中に突入する。確かこういう時って、乱戦に持ち込んだ方がいいってどつかで聞いた覚えがあるしね。

「全砲門解放、いくよフローー！」

そう合図をした私の背中に、某海賊のガンダムのスラスターのようゲイトオブパピロンにX字に門が開く。私とティアの《もう1つの世界》アナザーワールドは《王の財宝》アトモスみたいな中の物を射出する事は出来ない。けど、ちよこつと顔を出させるくらいまではできる。

それがどうしたのかというと、こうやって強盗から奪った銃を改造

して量産した物の銃口を飛び出さして、中でそれらを操作できる生き物があるなら：？ってことだ。アルさんとの戦いの後、一応ゴム弾は作ったけど今回は実弾！

「2c○とY○uTu○eにニコニ○……地球の暇人の力を見るがい！ フルファイアツ!!」

前方で盾を構えていた数名を盾ごと斬り裂き例の結界から弾き出し、私を狙ってたと思いき男は眩いマズルフラッシュの中に消えた。因みに体調が万全なら、空中から魔法と銃撃の雨を降らせる事ができる楽しい技だね。

とりあえず、これでロイドがやつつけた分も合わせて、前衛は残り30後半！

「まだまだ！原作再現、災輪・TテイiNン渦カーあBベルエル！」

使わないって言っておきながらも、なんだかんだで使ってたこの技。今までと違って、肩当からじゃないけれどちゃんと射撃まで再現してコマのように回転しながら、人が纏まっている所に突撃しようとしたけど……

「危なあ!？」

後ろから迫ってきていた、煙を上げている黒い氷の礫を回避するために大きくジャンプする。もちろんこれはロイドの方にも迫っていたけど、余裕を持って回避していた。さっすが私の……やっぱりなんでもない。

「ちよっ、危ないよティア！ 普通にここじゃ、ふれんどりーふあいやあるんだから！」

「面倒くさいから、全部片付けた。それに、マスター達なら安心」

そんなティアの宣言と一緒にパキンと何かが凍るような音がしたと思ったら、ついさっきまで私とロイドが戦っていた人達が全員氷漬けになっていた。そして次の瞬間には、結界から弾き出される。

「むう……もう誰も残ってないじゃん」

「マスター、ちゃんと前見る」

「ふえ？」

そう言われて振り返ると、アンジェロさんの前に立っていた魔法

使いつぱい人達が4人と、アンジェロさん本人は残っていた。薄紫の壁が見えるから、多分結界でも張って守ったんだと思う。他にもかなりいたのにそこまで削られちゃってるけど。

うーん。これじゃ一騎討ちやるにも邪魔だし…あの人達、ナノゴレム結構吸い込んでるみたいだし、せつかく準備したしやっっちゃうか即死技。

「ぐらすぶはーとー」

そう私が軽く言っただけで左手をぎゅっと握った瞬間、残っていた魔法使いつぱい人達はドサリと崩れ落ちた。原理は、ナノサイズのゴレムを吸い込んでるから、ちよつとそれに「魔力を暴走させろ」って指示を飛ばす↓血中のナノゴレムが爆発↓死 って感じ。

一応ゴレムって武器扱いみたいだから、結界外に飛ばされれば吸い込んでた分は体内に残らないから問題ない。

「い、一騎討ちだ！ そちらの少年とー」

そんな事を考えていると、なんとなくテンプレ感溢れる台詞をアンジェロさんが言ってきた。うん、まあそういう事なら大鎌は仕舞っちゃっても問題ないね。

「あー言ってるけど、どうする？ ロイド」

「折角イオリ達が場を整えてくれたし受けてくるよ。負けるつもりは無いから安心してくれ」

「ん、とりあえず頑張れ。私たちは後ろで見てる」

「いってらっしゃーい」

そんな戦場には全く似つかわしく無い声と共に、ロイドとアンジェロさんは前に、私達は後ろに下がる。ロイドは私特製の二刀を、向こうはピッカピカの剣と盾を構えている。どっちも準備は万端みたいだし…

「いぎ尋常こ」

頭の中に某奇策師のキャラを思い浮かべながら、右手を上げる。シーンと静まり返った闘技場に私の声が響き、ピリピリとした空気が漂い始める。

「はじめてー」

私が腕を振り下ろした途端、またもロイドの姿が消えて、キンツという金属音が響いた瞬間、アンジエロさんが結界外に転送されたのだ。た。

というか、魔眼でもロイドが見えなかったんだけど……

第10話 現状の再確認

「イエーイ。ハイ、ターツチ」

「い、いえーい」

「ハイタツチ」

二刀を仕舞ったロイドと、近くにいたティアと3人でハイタツチする。やっぱりアレだね！ クーガールの兄貴の言ってる通り、速いっ
てのは正義だね。

「勝負ありだ。これでアンジエロもタクミも納得したか？」

「え、はい。こんなの見させられたらもう認めるしかないです」

「決闘に負けた以上、仕方あるまい。目を瞑ろう」

そんな事を考えてる時、結界の外からこう声が聞こえてきた。認め
てもらえたのは良いけど、さっきのアンジエロさんとはかくタクは
何を反対してたんだろう？

「つーわけでご苦労だったなお前ら！しばらくは攻め入る予定もねー
し、多少不自由な場所ではあるがゆつくりしてくれていいぞー！」

「はーい、わかりました。ゆつくりさせて……ってわかれませんよー！」

「マスター、ナイスノリツツコミ」

最近、うちの子の私^{精霊}いじりが酷い気がする。まあそんな事は置いて
おいて、ちよつと気になっていた事を尋ねる。

「なんでそういえばタクがいるの？とか、認めるしかないですって
言ってたけど何を？とか色々気になる事はあるんですけど」

「俺も、攻め入る予定って言うが何なのか気になります」

私とロイドで真剣な目をしてアルさんを見て聞くけど、肝心のアル
さんはすっごく面倒くさそうな顔をして、2、3回頭を搔いてから
言った。

「何故あなたが説明しない？」

「そこに折角本人がいるんだから、そっちに聞いてやれよ…俺は説明
とか得意じゃねーし」

「そうですね。この脳筋に話を聞くのはオススメしません」

「はあ…」

あーうん、アルさんならなんとなくあり得る。とりあえずアンジェロさんには後で面倒くさい事にならない様にOHANASHIするとして、まだ許してないけど 仕方なく タクに話しを聞く事にする。

「むう…じゃあ気は進まないけど、説明してもらえる？タク」

「分かったけど、多少長くなるしお昼でも食べながらにしない？」

「ええ…」

「面倒」

「まあ、俺はいいですけど…」

「そんなに露骨に嫌そうにしないでよ…」

そのタクの提案に正直言っただけ全く乗り気ではないけど、まあ話を聞けそうなのはタクくらいだから、仕方なく同意する。べーっだ、まだまだタクの事なんて許してあげないもんねー!!

そう心の中で思いつきりあつかんべーしながらも、私達は4人でご飯どころに向かって歩いて行くのだった。

◇

「えっと、それでなんの話だった？」

テーブルの向こう側に座ったタクがそう言う。席の都合上、向こうにタクとティアアこっちに私とロイドって並びで座っている。ティアアには悪いと思ってるけど、まあいいよね。

「なんでタクがわざわざ決闘見に来てたのか、認めるってのは何をとなのか。それと攻め入るってのは何なのかだね」

「早めの説明を求め」

私と同じで、むすつとしたティアアとそう言う。まだ私達を殺しかけて全然経ってないんだ、仲良くなんてしてあげないもん。

「説明するのは問題ないんだけど、何で2人ともそんなに不機嫌なの？」

「まだその鈍感さは治ってないんだ」

「あの、俺でも分かりますよ？」

「ええ…？」

(困惑)って付きそうな顔してるけど、そっちの命令で殺されかけた方

の気持ちも考えてって話だよ。昔っから無駄に鈍感なんだから…女子から贈り物されても？って顔してたし。端から見てたら告白っぽかったのに…

そんな事を考えると、隣にいるロイドを意識しちゃうから一旦その考えは置いておく。

「まあいいから、早く説明おねがい」

「うん、納得いかないけどそうさせてもらうよ。まず、俺が決闘を見に来てた理由と、認めるって言った事は一緒に説明できるかな」

料理はまだ来てないけど、タクがゆつくりと話し始める。

「人間界が今滅びかけてて、海棠を討つかどうにかして元に戻そうとしてるって言うのは、アルディートさんが言ってたから分かるよね？」

「まあそれくらいは分かります」

「話してもらったしね」

「普通」

タクの顔が心に何かが突き刺さったみたいに一瞬歪むけど、とりあえずあんまり気にはしないでおく。そっちが気づかないのが悪いんだもん。こっちの事情も考えてよ。

「それでまあ、取り返すための作戦を練ってるんだけど、俺としては蒼矢達を作戦には組み込みたく無かったんだよ。こっちで町を守って貰おうって思ってたね」

「なんでさ。むしろ殺されかけた分、殴らないと気が済まないんだけど」

「こちらに相談もなしにやるなんて、問題」

「う、でも俺なりに心配してのことだったんだけど…人と人との戦場に出たことは無いだろうし、そんな小さくなっちゃってるし…」

確かに体が大きい方が良いこともあるけど、小っちゃい方が良いことだってあるんだぞ！余計な御世話だ。ん？でも認めるしかないって…？

「まあそんな感じで俺は反対してたんだけど、実際に戦ったアルディートさんから、一回蒼矢が戦ってるのを見とけて言われてきて

「たんだよ」

「それじゃあ、認めるってのは？」

「洗脳に対抗できて、あんな戦いができるんなら一緒に行くしか無いじゃん…お願いできる？」

「もちろん！」

私とロイドとティアの声が重なる。全く、街に放置とかされたら気付いた時に転移で強襲かけるところだったよ…どうせ敵地なんだろうから、ドゥーム・レディラ壊毒の流星で壊毒撒き散らしながら。

「えつと、次はアルディートさんの言ってた攻め込むって事だっけ？」
「はい」

そうロイドが返事をしてるのを聞きながら、そういえば聖剣を好き勝手改z…もとい打ち直すのがまだだったなあと思いつく。攻め込む…侵略…クラゲとビーム砲でも搭載しようかな？あとバリア。

「そっちはもっと簡単だね。色んな街に行って、洗脳されてない無事な人を探してくる事だよ。まだ俺の転移魔法が未熟だから、距離が離れすぎてる場所には行けなくて最近は行って無いね」

「そうなんですか…」

「へえー、タクも凄く苦労してたんだ」

「あの時の転移は、あなたが使ったのか」

今の人間界の現状を考えると、中々にキツそうな事だっけ事が分かる。うーん、それなら不審者の私達に攻撃してきた理屈は分かるかなあ…許さないけど。

「それで転移魔法を使ってる身から言わせてもらおうと、やっぱり大陸間を転移で移動なんてバカげてるよ…本当なの？」

「まあ、普通に転移したしね？」

「地球に行くよりは大した苦労じゃない」

「イオリ達が、余りにも普通に使ってたから分からなかった…」

「ちよつと待って、今何か聞き捨てならない事が聞こえたような」

「気のせい」

ふふん、次元魔法がカンストしてるDEXの化物と神様をなめてもらっては困る。そう、2人でなら翼になれる。地球に帰る時、髪の毛

がバサって羽根みたいになったから間違いない。でも急に歌ったりはしない。

「あ、そうだ。魔法の調子戻ったし、明日聖剣打ち直すから宿屋来てね。魚の尻尾の看板の所」

「アツハイ」

そこまで話したところで、注文していた料理がやつときた。

久しぶりのオムライス、異世界だけどどんなだろう？

第11話 魔改造

「えっと、イオリ？　これまで終わらないのか？」

「うん、まだちよつと待ってね。ここの部品をこれに変えて、魔力の配線がこうなるからここが変わって…」

そう言つて私は、開いたロイドの義手いじりを続ける。かれこれこのもう1つの世界の中で30分くらい2人つきりで恥ずかしいけど、偶にはこんな感じで完全分解整備しないと、幾ら私製の義手つて言つても壊れちゃう。

一応義手本体にも修復機能はあるけど、戦闘で使つてる分傷むのは早いし。それにこれを作つた時と今とじゃ、ぎじゅちゅ…技術力が違いすぎるし。

「それに確か、今日はあの勇者の聖剣を打ち直すんじゃないのか？」

「ん…それはそれで楽しみだけど、こつちを直して改良してる方が楽しいし」

そう言いながら、アダマタイトとオリハルコンの合金で出来ていた芯になってるパーツを、新しく色々混ぜて圧縮したパーツに交換する。後は必殺技をカートリッジ式に変えるからここを変形させて、強化パーツの呼び出しをできるようにパーツを追加して…あ、流石に感覚はシャットダウンしてるよ？

「あ、ロイドのアイテムボックスって容量の空きある？」

「ああ。基本的に装備品しか入れてないからな」

「ふむふむ、それじゃあ完成したらあれは渡すとして…」

既に魔眼でも見えないのに、更に早くなるパーツをなんで渡そうとしてるんだろう？　そう考えながらも義手を改装しながら、高速で組み直していく。

「よしっ！　これで完成！」

最後の装甲板を付け終えて、魔力を叩き込んで義手の機能を再起動させる。魔力の回路よし、通りよし、関節部の駆動よし。カラーも見た目も前と変えてないけど、解析する限り強化されてる。

「やっぱり腕があるのとないのとじゃ大違いだな」

「そうだね！それで、義手の調子はどう？」

「ちよつと重くなつたけど、前より反応が良くなつた気がする」

「ふふん、そりゃあ性能上げましたから」

右手で汗を拭って私は言う。素材を変えて強化したり、今までと違って関節部にナノゴーレム使つて動きやすくしたり、新しいパーツ詰め込んだりしたから、これで強くなつてなきやおかしい。

製作者も使用者もOK出してるなら問題は一切ないね。

「そういえばロイドって、これから用事ってある？」

「いや、特にないけどどうかしたのか？」

「それなら、新しい装備に慣れてもらうついでにフロアと遊んで貰おうかなって。試作品のだけど、ここって広いし」

そう言つて飛んできた羽根型パーツを追つて、フロアもこつちに飛んでくる。デザインは某白い猫のゲームの英雄リアムの羽根だね、デザインはカッコイイしもん。効果？ 勿論速度UPがメインかな。

「ああ。いきなり渡されて使えなくちや意味がないからな」

「名前はまだ付いてないから、着装つて言つて展開されて飛べるようになるから」

「分かった。着装」

さつき仕込んだ義手のパーツがキチンと作動したみたいで、ロイドの背中にメカメカしい羽根型一対展開される。これは直接ついている訳じゃなくて、次元魔法でそうたいきより？ を固定して付けてくるようにして…うん、まあなんやかんまで浮遊してるってこと！

（マスター、天上院が来たよ）

（りようかーい）

そこまで話してロイドが飛び始めた時、ティアからそんな念話が届いた。因みにティアはまた本を読んだけど、名前にルルイエって書いてあったから私は読みたくないかな。

ロイドに手を振ってから、一旦門から宿の部屋に戻る。

「とりあえず来たけど…なにその門？」

「私の工房？ とりあえず入りなよ」

半分門に入りながらタクを手招きする。一応、私の生活空間の場所は遠くにずらしたからまあ問題ない。そんな事を考えながら再び門の中に入り、いつも鍛冶をしている所に行こうと思ったのに後ろでタクが立ち止まる気配がした。

「どうかしたの?」

「ちよつとここ、ツツコミ所が多すぎるんだけど…」

「そう?」

周りを見渡してみるけど、特にいつもと同じで変わりはない。別に突っ込まれる所はないと思うんだけど…

「そんな不思議そうな顔されても…そもそもこの空間は?」

「私のスキル」

それにはそう答えるしかない。うん、確かにそこは不思議か。私も初めて来た時はビックリしたし。だってまだ、私だつてこの広さも高さも分かってないもん。そう思ってたなら、タクは遠くにある魔物素材の山を指して言う。

「じゃああつちにある、SSSランクも混ざつた魔物の山は?」

「9割私が倒した、素材だつたり食材だつたりだね」

「あそこの木が積み上がってるのは?」

「素材だね。キリから黒檀までなんでもあるよ」

8割くらいが魔法で作つたやつだけど、ユグドラシルの枝とか黒檀とかは魔法で作れないからちゃんと買ってる。私の個人的な出費は、結構ここが大きかったり…

「うわあ…それじゃああの金属の山は?」

「鉄からヒイロカネまである鍛冶の素材だね」

今度タクが指差したのは私の金属のストック。こっちはまあ、全部魔法で作つたやつだね。よく使うから、在庫確認必須の所。

「えつと、面倒だから先に説明するよ。あつちが剣とか近接武器の保管庫で、その隣が銃とか弓とか爆弾とかの遠距離武器の保管場所。その向こうに防具が置いてある場所があるよ」

「あんな量を全部……自作?」

「うん」

1日50本くらい作ってるだけなのに、何がおかしいんだろう？
まあそれは置いておいて、次の説明に移る。

「あそこがポーシヨンとかのアイテムが置いてある場所で、その隣が
普段の私の生活空間。近寄らないでね」

「流石に武器を作ってくれて頼んでる身だし、そんな事はしないよ」
「ふーん。で、ここが鍛冶場だね」

いつも使ってる炉や金床が置いてある場所に立って、タクの方を振
り返りながら言う。

「さて、それじゃあ話し合いを始めよつかタク」

「話し合い？」

そういうタクは、さっきの私みたいに頭の上に？マークが浮かんで
いる。むう…一応私はこれでも鍛冶師、仕事と私情は切り離さない
と。

「幾ら何でも、素材だけ渡されて作られて言われても無理だから、どん
なのにしたいのか聞かないと。できる限りの要望は聞くよ」

「なるほどね。それじゃあやっぱり日本と「却下」なんでさ…」

できる限りの要望は聞くって言ったけど、いきなりそう来るとは思
わなかった。いやね、レーナさんは最初っから刀みたいなのを使って
たから作ったけど…

「うーん、まあ見るのが早いか。えい！」

武器の山から、折れてもいい適当な日本刀を二本持つてきながら、
目の前に鉄柱を二本生やす。

「私はタクよりステータスは低いけど……」

一山いくらの刀だけど私が作った武器、ある程度他の武器も使える
私が降り下ろした刀は、鉄柱をキレイに斜めに切断していた。

「こんな感じで斬れるんだけど…やってみて？ 完全に同じ性能の刀
だから」

「え？ それなら普通に俺だって…」

そうほざいているタクに日本刀を渡して、私は少し離れる。ゴメ
ンね日本刀さん、多分君折れちゃうから…

「せいっ！ って、あれ？」

そう内心刀に謝っていると、私の予想通り刀は鉄柱にぶつかった瞬間ぴしりとヒビが入り、そのまま折れてしまった。あーあ。お金請求ですわ。

「円運動とか刃筋を立てたりとか色々あるけど……これでもまだ刀が正しい?」

「……素直に今までと同じタイプにします」

「それがいいよ。で、大きさとか重心とか刃渡りとかだけ……」

「それについては、一応この剣を参考をお願い」

そう言つてタクは、一本の直剣を渡してきた。えつと、持ち手が20cmくらいで刀身が大体100cm。特に装飾はなくて、手元付近に重心が来てる両刃……やっぱり西洋剣的な?

「うん、了解。とりあえず聖剣の欠片を溶かしてインゴットにして、剣に再構成するとして……流星に完成は明日になるかな?」

「また随分と早いね……」

「勿論、プロですから」

タクが凄く驚いた顔をしてるけど、異世界な目線で見れば普通なんじゃないの? あ、そうだそうだ。

「多分メインウエポンでしょ? その片手剣」

「そうだね。劣化版なら幾らでもあるけど……」

「はい、じゃあこれ貸してあげる」

こつちに持つてきていた片手剣の鞘を右手で掴んで、タクに差し出す。代車みたいな感じだから……代剣?

「え、何これエリユシデータ?」

「モドキだね。壊したらお金請求するから」

「まさかの有料……?」

「当たり前じゃん。あ、さつき折った刀も別料金だから」

「えっ」

そんなやり取りの後、粉々になつてる元聖剣を受け取つてタクには帰ってもらつた。さて、まずは溶かしますか。

第12話 魔改造魔改造

「うーん、まずはこの聖剣の欠片を溶かさないとただけど…：なーんか意思みたいなのを感じるっていうかなんというか…」

サンプル用の剣をさっきの適当に作った鉄柱に立て掛けてから、麻袋に入った聖剣の欠片を見つめる。カチャカチャ鳴っててなんか嫌な予感がするし、大鎌背負っておこう。あ、音収まった。

「とりあえず、御開ちよー!」

そう言っつて私は麻袋をひっくり返す。初めて見た時は光つてて分らなかったけど、金色に薄く緑とか赤とか青っぽい装飾のされていただろう欠片がカチャカチャと落ちていき…

「あぶなあつ!」

その欠片全てが私に向かって飛んできて、当たる寸前で大鎌の気配に当てられてカランカランと落下して行った。ふう、大鎌が無ければ即死だった…まあ当然だよな、私だつてこの大鎌とかティアの杖に所有者以外が持つたら…つて仕掛けを仕込んでるし。

ちなみにこの鎌の場合、私とティア以外が力を使おうとすると大鎌に食べられて、ティアの杖は魔力を通した瞬間全部が増幅逆流して爆発四散する仕掛けになってる。

「えつと何々、材質はオリハルコンにミスリルにアダマンタイトがメインで、そこにヒヒイロカネが微量に混ぜつてて、刃の部分には綺麗な紋様が出てると…流石聖剣、カッコいいね」

空での追いかけてこの音を聞きながら、粉々になった欠片を元の剣の形に並べてみる。ふむふむ、多分この柄尻の宝玉が魔力のタンクになってて…：ダメだ、回路が木っ端微塵になってるから何が何だかわかんないや。一体どんな使い方すれば、ここまで壊せるんだか。

「とりあえず元々できてたビームは当然搭載して、確かバリアも貼つてたし、持ち主の認識機能もある。うーん、あと搭載するなら私の鎌みたいな…：じゃ魔剣になっちゃうか」

私の大鎌のエネルギー吸収、斬った物から文字通りエネルギーを吸収するから役に立ちまくりなんだけど、お揃いとか嫌だしなあ…

「とりあえず、MPの吸収機能はつけるとしてファンネルは……出来ないことはないけど、面倒くさいから付けなくていいか」

ロイドのあの羽根だって、調整が面倒でまだ完成してないんだし。そう思いながら、もう溶かしちゃおうと思つて破片を集めて炉に入れようと思つた時に、1ついいことを思いついた。

「これ、1個くらいネコババしても何も言われないよね？」

ほら、私の大鎌の刀身つて聖剣は聖剣でもカリヨンがベースだから、色々な魔法が刻まれた欠片が集まってできてるやつだし。そう思つた時、丁度手に持っていた大きめの欠片がブルブルと動き始める。魔力を当てて動きを無理やり黙らせる。潔くしなさい。

「材質は覚えたけど、なんか歴史とかの強さがありそうだから貰っちゃえ」

聖剣の欠片をポケットにしまい、見た目と素材こそ完璧に一致した金属片をその他の欠片と共に炉に投げ入れる。さて、後は熱が漏れないように風の防壁を作つて中は全力でファイヤー。

「鑄型は用意したからインゴット化は問題ないとして、後は何をするにしても溶けて固まつてからか」

それまでは魔法を制御しないといけないからここから出られないし、そこまで離れられない。ロイドは……今いい感じにバレルロールしてるからいいか、本はこの前SAN値が削られたから読みたくないし……

「私の大鎌、強化ついでにちよつと本格的に整備してみようかな」

空の追いかけてここに混ぜたい欲求を振り払つて、さつきポケットに入れた手のひらくらいの欠片を取り出す。途端にビクツて魚が跳ねるみたいに動いたけど気にしない。だつて物作りには犠牲が付き物だもんね！

「いつつもお世話になつてるしね」

いつの間にか私の暴食のスキルまでゲットしていた大鎌を下ろし、私も座つて撫でてみる。獣人界でも無茶から果てには邪神まで斬つたり撃つたりしてきた、ある意味相棒だもん。今ちよつと光つたのは置いておいて、これからも大切にしていかなきゃね。

「さて、整備なんだけど……するところが無いんだよなあ」

大鎌の状態に変形させ、魔眼の透視と魔力を見る力。更には解析まで使って隅から隅まで眺めていく。

変形する場所が沢山あるし、銃撃とか刃を構成してる部分の制御装置とか、吸収したエネルギーを私に供給するための部分とか、挙げればキリがないくらいめんどくさい機構が詰まってるうえに、いつも振り回してて強い衝撃が加わってる。それなのに、どこにも壊れてたり疲労してたりする部品がない。普通に見ても細かい傷しかないから使い込まれてるなあ……くらいにしか思えない。

「私とクラネルさんとでそう作ったけど、明らかに尋常じゃないよなあ。いや、いい事なんだけどねってうわわっ!!」

そう大鎌に話しかける幼女というシユールな光景を晒していると、左手で握っていた聖剣の欠片が大きく跳ねて大鎌の上に落下した。

「え、あ、うん。まあそうなるよね」

聖剣の欠片は大鎌に当たる直前、謎の黒い渦に飲み込まれていった。心なしか大鎌のオーラが強くなつたし、十中八九大鎌が原因って分かるけど……うん、まあいつか!

「でとそうすると、やる事が無くなる……ん?」

そこまで呟いた時、ふとよく分からない考えが頭をよぎった。聖遺物だから、大鎌は私の魂的部分と接続してる。さつきから見えて分かる通り、多分意思を持つてる。斬魄刀と似通った所もあるし……

「ダメ元で刃禅でもやってみる?」

よく二次小説のオリ主さんとかがやってたし。多分成功しないだろうけど、強くなれるかもしれないんじゃないややる価値はあるかも。

「よし、そうと決まれば!」

熱が届かないギリギリの所で座禅を組んで、そのうえに大鎌を膝に乗せる。明らかにみ出てるけど、始めますか!

◇

「……い、い………:きろー」

「むにや……もう、だめえ、お腹いっぱい……えへへ」

「きゅうっ!」

「うにやつ!?!」

夢の中で誰かとお菓子を食べていた筈だったけれど、私は突然背中に衝撃を受けて現実に戻された。多分このままじゃ地面に激突……しない?

「うみゆ……」

というか少し汗くさいし暖かい? という事は……寝起きの頭で、目をこすりながら前を見上げると……

「いたた……あいつなんて勢いで突進してるんだよ……」

10センチくらいの所にロイドの顔があった。あう、やばい、ちかい、顔があつつい。

「わわっ! あわわわわ!! いてっ」

なんだか無性に逃げ出したくなって後ろに下がろうとするけど、手を付いた所に大鎌の柄があつたせいで滑ってしまった。頭を打って涙目になってる中、視界には満足気なフローがホバリングして……

「ふふふ、やってくれるじゃん。聖剣なんて後回しだこんにやろー!」

どうせ半自動操縦だから、インゴットまでは勝手に出来るんだ。それならまずは、こつちが先だよねえ!

靴から羽根状の力場が発生し、逆さまに私は浮く。スカート? 今は穿いてないから大丈夫。

「待てええ! フロオオオツ!!」

「きゆう〜♪」

それからしばらく、無駄に機嫌の良いフローを私は追いかけるのだった。いや、途中からロイドから逃げてたりもしたけど。

第13話 精霊として

「ふう…っし、ここからは気合入れますか!」

ラキスケもどきの事件も終わり、ついでにお昼も食べ終わった後、私はさつきまでと違い1人で赤々と燃え盛る炉の前に座っていた。せっかく造らせてもらえる聖剣なんだし、言った通りここからは気合を入れないとね!

「聖剣は見た通り西洋剣だから、普通造るんなら鍛造じゃなくて鑄造なんだろうけど…」

それじゃ正直微妙な性能の剣しか造れない。いや、他の人から見れば十二分に名品なんだろうけど、私から見たら微妙も良いところだ。じゃなきや、わざわざインゴットにしないしね。

「この頭おかしいハンマーのおかげで、そこら辺はある程度どうにかなるしね」

そう呟いて、腰に佩いたピンク色のハンマーを右手で抜く。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

マジカル☆スミス☆ハンマー

DEX 150%

【属性】 神

【重量】 1kg

【耐久】 破壊不能

《スキル》

武器修繕 《極》 武器作成 《極》

製作武器性能上昇

《装備制限》

Lv100以上・DEX25,000

《備考》

職業 ゴブニユを持ち、なおかつDEXの値が25,000を超えている者に贈られるスミスハンマー。持ち主のベスト以上の力を引き出し、武器の作成と修繕の時間が大幅に短縮される。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

装備してるだけでDEXが1.5倍になるとかいうキチガイ性能
 だけど、なんか凄く手にフィットするし、地味に暖かいし何でできて
 るんだろ。SAOのアニメみたいに、この前インゴットが勝手に変形
 して剣になったし。

「そんじゃあまあ、初めは叩いて行きますか!」

金箸っぽいもので熱した例のインゴットを取り出しながら、今更す
 ぎるけど、全身白い服で白い三角巾までしてるからまるで給食当番だ
 なあとと思う私だった。

◇

「……遅い」

今まで読んでいた本を閉じ、私は閉ざされた門を見て呟く。マス
 ターが『じゃあ鍛冶してくるから』と言って入ったのが午後1時付
 近、それから6時間も籠っているのはやり過ぎだ。

そろそろ時間は夕飯時。マスターの彼は近くの1人部屋にいるが、
 マスターが出てこない事には何事も進まない。ご飯を作るにしろ、食
 べに行くにしろ。

そう思っ私は本を仕舞い、たったそれだけの動作でギシツと軋ん
 だ椅子から立ち上がる。部屋全体に随分と埃が積もってる、私は本を
 読んでいただけだが、マスターはキレそうだ。

「やっぱり、綺麗にしてから開ける」

どうせ一瞬で終わる。そう考えながら自らの大元に根ざす霧を解
 放する。マスターの部屋にあった小説、アレに出てきた魔獣の力を、
 完全には無理だけど再現してみるのもまた一興だ。

「喰らい尽くせ、暴食」

アレと違い、存在を喰らうのはリスクが伴うが今回は塵掃除だ。そ
 こまで力を使う必要はない。そして部屋に立ち込める霧が晴れたと
 き、塵と一緒に数個ランプなどが消えてしまっていた。

「……ここまで、マスターに似なくても良いのに」

私たち精霊は、少なからず契約したマスターに影響される。私も前
 はここまで考えを巡らせなかったし、ウツカリもなかった。特にマス

ターは色々とおかしいから、先のウツカリの様に変な影響も出て
いる。

「まあ、それも含めてマスターか」

無くなった物は、マスターにどうにかしてもらおう。明らかに戦に
は向いてないのに、それでもいつも戦ってきたマスターの顔を思い浮
かべ、私はマスターの門を強制的に開く。

「マスター、夜ごはん」

いつもと変わらずそう言って入った世界で目に映ったのは、空中に
幾重にも重なり煌めく黄金の剣閃だった。

僅かに紅の混ざった金色をベースに、中心の溝に青色でルーン文字
が彫られた両刃の刀身。同じ金色に緋色で装飾されたガードと、金属
製だがなんらかの魔物の皮が巻かれたグリップ。柄頭の部分には魔
力が込められた透き通る宝玉が嵌め込まれた宝剣と、マスターの持つ
銀色の髪が舞うコントラストがとても美しい。

いや違うそうじゃない。

「その人形は、なに？」

「へ、あ、ティア？えと、これは…チユートリアル人形みたいなの？」

私の目線の先を見て、隠し事がバレた様な顔でマスターが言う。こ
のマスターは、また変な物を作って…

「ほ、ほら、ロイドと斬り合いしても、実際には斬れないじゃん？だつ
たらナノゴーレムで名前通り人型のゴーレム作って、それと斬り合い
すればいいんじゃないかなあって。スキルの強化もできるし！」

そうマスターがアワアワと言いつつと連動して、隣に立つマス
ターの影の様な人形も同じ様に動く。お互い抜き身の剣を持ってい
るせいで、かなり危ない。

「はあ…まあいい、とりあえずもう夜。ごはんの時間」

「ふえっ!?! もうそんな時間？ ……疲れたからどっか食べに行こつ
か」

剣を鞘に収め近くに置き、人形が黒い液体に還る。そしてそのま
ま、マスターは服が透けてるのにも気づかず、外に出ようとして…
「マスター、自分の格好を確認する」

「へ？つて、これ…うわあ、ススだらけだし半分くらい透けてるじゃん…」

「顔もススだらけ」

「え、ほんと？」

「うん」

うわあとマスターが顔をしか擷める。やはりマスターは、自分の状態をロクに認識していなかったらしい。

「ごめんティア、ロイドにもうちよつと待ってって伝えてきて？私はちよつと片付けてシャワー浴びてくる」

「了解、出来れば早めにね」

「うん！」

やはり私がしつかりしないと。マスターの精霊として。

閑話―16 勇者として

「はい、頼まれてた聖剣の打ち直し。終わったから色々強化して持ってきたよ。代剣返して」

ギルドの1室で、私の目の前に立つファンタジーな少女が委員長に向かつて剣を突き出す。これは見た目は変わってしまったているが、砕け散った委員長の聖剣を打ち直した物らしい。

「まさか本当に1日で完成させてくるなんてね…はい、借りてた剣。色々ありがとうね蒼矢」

「毎度ありー。代金は弁償代とか諸々込みで…本当は白金貨1枚まで行きたいけど、聖剣の打ち直しなんて貴重な事に任せてもらったし半額でいいよ！」

委員長から受けた長剣を恐らくアイテムボックスにしまい込み、指折り数えてそう言う自らを白沢君と名乗る幼女。大体、なんでこんな怪しい子達を街に入れて安心できてるのよ…

「ちよつと待ちなさい、幾ら何でも代金が高すぎるわよ！ それに1日で仕上げた？ そんなのじゃ使つて安心出来ないわよ！」

「えっと、柊さんだっけ？ 代金は妥当だよ。半ば私が仕掛けたって言つてもいいけど、これと同じ日本刀を1本ダメにされたし、ついでに言えば手数料込みだし」

そう言つて、白沢君は刀を無造作に放つて渡してくる。受け取ったズシリとした重みのある日本刀には、驚愕の+16という表示が出ていた。

「それに、たった1日で作った物じゃ安心出来ないわよ？ ふぎけないでよ。幾ら私はまだ殺されかけた事を根に持つて言つても、自分の仕事の手を抜く訳ないじゃん。それに、そう言う文句はちゃんと能力を見てから言ってもらいたいよ」

一度投げて寄越した刀を私から奪い取り、冷たい眼を向けながら白沢君が言う。何よ、そんなこと言うなら見てやろうじゃない。

|| || ||

そう思うと同時に、この目の前でコテンと首を傾げている幼女が、本当に白沢君なのか疑わしさが増していく。ここ数日調べてもこの街に現れた時からしか記録がないし、あの写真1枚で　信じられるほど私は純粹じゃない。

「えっと、こんな聖剣もらっちゃっていいの?」

「あ、やっぱり性能低いつて思った?　でもこれ以上性能あげるとなると、どうしてもデメリットがでて…」

「違うわよ。こんな尋常じゃない性能の剣、金貨5枚で売るとか裏があるんじゃないの?」

うまい話には裏がある、よくある話だ。ましてや私達は自分を殺しかけた相手だ、何か変な事を仕込んでいてもおかしくはない。そう思つての言葉のだったけど、それに対する返事は非常に面倒くさそうなたため息だった。

「ほんつとうに面倒くさいな…タク、代金。あとこれ渡すから説明おねがいね」

「え、あ、これって!」

「証明楽でしょ?」

差し出された金貨の代わりに、委員長の手にか何か小さな物を置く。そしてそのまま、部屋を出て行こうとする。

「待ちなさいよ」

「ヤダよーだ。せつかくこつちが善意で色々やってあげてるのに、それをぜーんぶ悪い意味でしか捉えない殺人鬼と一緒に部屋になんて、もう1秒たりともいたくないですー。時間の無駄だし、下でアルさんと剣の話でもしてきますーだ!」

さすがにその言い方には私もカチンときた。子供っぽい言い方だけど、逆にそれが凄く気に触る。

「好き放題言つて…私達が今までどれだけ苦労してきたか分かつてるの!?!」

「分からないよ、勇者としての苦労なんて教えてもらってないもん。でも、そんなこと言うならさあ…そつちだつて分かつてるの?」

振り返つた白沢君の顔は、私でも分かるくらい完全にキレていた。

そして泣きそうな声で反論してきた。

「タク達勇者と違って、身寄りも！知り合いも！お金も！後ろ盾も！戦えるステータスも無くって！性別も！年齢も！見た目も！全部全部全部全部全部神様のイタズラで変えられた私の気持ちが！自分を自分だって信じきれない怖さが！」

そこで一呼吸挟んで、まだ白沢君の反論は続く。私は多分、逆鱗に触れちゃったのかもしれない。涙目になって、もう震えた声のままなのに止まる気配はない。

「なのに事あるごとくトラブルに巻き込まれるし！出来ることが少ないから死にそうになるし！！そっちの今までの苦労？そんなの知るわけないじゃん！もしそんなのを言っていていいならこっちだって聞くよ。自分の身体に力が入らなくて、血が抜けて冷たくなって命が失われてく感覚がわかる！！ 奴隷商人に捕まって売られそうになる怖さとか、自分のせいで大切な人が一生ものの怪我をした時の悲しさとが！！ ロリコンに強姦されかける怖さとか分かるの！？ ねえ！わかんないでしょ!？」

しんと静まり返った部屋に、白沢君の荒い息の音だけが響く。そして、目に溜まった大粒の涙を拭いて言う。

「ちよつと言い過ぎたけど、こっちだって色々抱えてるんだよ…それなのに、そっちの都合だけを押し付けてくる人というなんてやですよーだ」

最後にそれはもう見事なあつかんべーを繰り出して、ドアをバタンと閉じて白沢君は出て行ってしまった。

「大体、疑われるような事ばかりしてるあなたが悪いんじゃない…」
「はあ…アレだけ言われてそんな事言えるって、相当だよ？ それにさっき貰ったのも俺にしか分からないし…」

ガシガシと委員長が頭を掻きながら言う。なんかこういう所、アルディートさんに似てきてない？

「さつき剣と一緒に貰ったのって何なの？」

「ん？これだよ」

委員長の手のひらにあったのは、多少古びた小さな花のついたヘア

ピンだった。これが一体どうしたって言うのだろうか？

「昔蒼矢の誕生日にあげたやつでね、売ってた物じゃなくて俺が作ってみたやつだから、間違いなく偽物じゃないよ」

「男に何あげてるの委員長…もしかしてホモ？」

「いやそれはない」

別に私はあの子達と仲良くしようだなんて思っていない。何も考えてないにしても、いつの間にか街の日常に溶け込んでるあの子達を私だけは警戒しておこうと再確認するのだった。

勇者として…なんて事は言えないけど、今を生きる私達が物語の勇者のような働きをしなければ人間界は滅んでしまう。それを防ぐ事くらいはしたいから。

第14話 迫る刻限

目まぐるしく移り変わる視界の中、風を纏いながら俺は空中を蹴り更に加速する。死角や隙を探して相手の周囲を縦横無尽に駆け、翔けているが、頭上に回つても攻撃した瞬間斬られるイメージが湧いてくる。

「おらどうした坊主！ 速く動けるだけで攻撃しねえんじや、なんの意味もねえぞ！」

「分かってます！」

イオリの物作りの才能とも、ティアさんの魔法や父さんの力とも違う俺の速いというか個性。それは確かに良いし凄い物なのだが、今戦つて：いや、稽古をつけてもらっているアルディートさんの言う通り、ただそれだけで何もしないならそれは宝の持ち腐れだ。

(こうなったらヤケじゃないが、一か八かだ！)

いくら安全な結界の中とは言え、イオリからもらった義手の必殺技は使えない。1つ目は当てたらどうなるかわからないし、2つ目は単純にタイミングが合わない。だから今の俺の最高速度で以って、真上から二刀を振り下ろし強襲したのだから：

「狙いがバレバレだ！」

「がつ！」

どうやら読まれてしまっていたようで、剣を抜いてすらないアルディートさんに殴られた俺は、そのまま結界の端まで吹き飛ばされてしまう。

「もう一本、お願いします」

「おういいぞ。けどお前、ここまでずっとボロクソにやられてるが嫌になんないのか？ 武技はまだにしるお前は十分強いし、焦る必要はないと思うが」

「これくらいじゃまだ、イオリと並んで戦えませんか」

俺はついこの間の襲撃を思い出しながらそういう。俺が1番攻撃に気づくのに遅れて大怪我をして、どっちかと言えば魔法使いよりな2人に近接戦をさせてしまった。

いつまでも守られてるんじゃないやなくて、俺だってイオリを守りたいんだ。

「そうか？戦ってみた感じ底は見えなかったが、正直お前よりは楽に倒せそうだぞ？」

「ほぼ全部の職業が鍛冶とか物作りに関係する物なのに、アルディートさんと戦ってる時点でおかしいんですよ…」

本人が聞いたらきつと「おかしいってなんだおかしいってー」って感じで怒りそうだと思うと、なんだかおかしくて少し笑ってしまう。

「そーいや件の嬢ちゃん、今日は見かけたって話を聞かないがどうしたんだ？心当たりがあるにはあるんだが」

「朝部屋を出るとき「今日は一日中引きこもってやるー」って言ってましたから、宿屋にいると思います。それと、始めないんですか？」

「少し話したい事もあるし休憩だ休憩。お前もそっちの方がやり易いだろう？」

「まあ、そうですね…」

そう曖昧な返事をしている間に、アルディートさんはどかつと地面に胡座をかいて座る。手でお前も座れとやってくるので甘えさせてもらう。

「話したい事って、何かあったんですか？」

「俺は昨日もここにいたから聞こえてきたんだが、どうにもこっちの1人が嬢ちゃんの逆鱗に触れる…じゃ足んねえか、逆鱗を斬りつけたってレベルだな」

なるほど、だから今日は朝から機嫌が悪かったのか。というか誰だそんなことしやがったの、探し出して殴ってやる。アルディートさんの話を聞きながらも、頭は怒りに染まり始める。

「まあ待て、そんな殺気出すんじゃないやねえよ。流石に今までの行動が余りにも目に余ったからな、数時間説教して今は営倉だ」

「それでもっ」

「自分の惚れた子を傷つけた奴は許せないってか？はっ、青春してんなあ！」

「ちがつ」

凶星だった。そしてそんな事を言われたせいも、ほんの数日前の初めてマトモにイオリを助けられた時の事を思い出してしまう。いつもと違って凄く力は弱々しくって泣いてて、おんぶしてる時は何かいい匂いはしたし暖かくて……って違うそうじゃない。

「まあ何を想像して顔を赤くしてるのは聞かないが、告白とかプロポーズをするつもりなら戦いが始まる前にやっつけよ……」

「えっと、なんでです?」

「詳しい理由は知らないが、俺が見てきた限りでも戦いの後に何かをするって約束した奴から死んで行ったからな……まあ年上からの忠告ってやつだ」

「わ、わかりました!」

イオリとかりユートさん達がよく言ってた死亡フラグってやつか?それなら確かに回避しないとだし、元々覚悟は決めたんだ。

「そんじゃまあ、休憩は終わりだ。武技の訓練でもやるか?」

「え、いきなりですか!」

「おう、習うより慣れろって事だ!」

いきなり話は変わったけれど、こういう人だし仕方がないかと思う。それにしても武技、必殺技か……イオリのやつは参考にならないし、どうするべきか……



「へくちっ……うう、誰か噂でもしてるの?」

「ロイドだったりして」

「うう……ただの寒さだよ」

ベットの掛け布団に包まってるから、案外ティアの言うとおりののかも知れない。けど別にいいもん、今日の私はニートだもん。誰か私をやしなえー!

「ところでマスター。ずっと気になってたけど、何作ってるの?ソレ」
「んつとね、私っていつも準備が終わんないままバトルが始まるでしょ?一々着替えるのは無理だから、一瞬で装備できるようにするやつ」

いやあ、アルさんの攻撃で死にかけた時からちよつと危機感がね……

私の強さってかなり装備品に依存してるのに、いざって時に使えな
きや意味ないもん。武器や防具はちゃんと装備しないと効果がない
よってやつだね。

「そのシンフォギアみたいな形は、趣味？」

「うん。鍵の杖の代わりに下げとこつかなーって」

あと私の創造の名前がダインスレイフだし。イグナイトモジュール
積まなきや（使命感）でも急に歌ったりはしない。歌いながら喋
るってあれどうやってるんだろう？

「本当は今回みたいに魔法が使えなくなる事が無いように、肩当あた
りを魔改造しようと思ってるんだけど、ロイドの羽根の調整が思っ
たより長引いて……」

「まあ、マスター装備が無いと弱いしね」

「その事はあんまり言わないでよお」

確かにレベルは上なのに、DEXとINT以外ロイドとそこまで変
わらないけどさ……結構これでも気にしてるんだよ……まあ、戦闘職1つ
も取ってない私が悪いんだけどさ……

「そこでロイドが出てくるあたり、やっぱりマスター意識してる？」

「ばっ、なっ、いやそうだけど………モーブから助けてくれた時、その、
すごく、かつこよかったし……」

言ってる顔が赤くなるのを感じる。でも仕方ないじゃん！あんな
ヒーローみたいな登場の仕方されたら、流石に意識しちゃうよ……前み
たいにロイドを弄れる自信もうないもん。

「でも、なんでいきなりこんな事聞いてきたの？ まさかロイドに何
か変な事吹き込んだとか？」

「違う。マスターの幸せを願うのは、精霊として当然」

「ティア、熱でもあるの？ 風邪薬ならあるけど……飲む？」

「失礼な」

え、でもあのティアがこんな事言うわけがないって言うか、どこか
おかしいって言うか……

「ただ、すごく嫌な予感がしてきたから。マスター、何かやりたい事が
あるなら、今の内にやっておいた方がいい」

「ティアが言うど、それって凄く怖いんだけど…」

どこか遠くを見つめながらそういうティアには、何が見えているんだろう？一応神様だし、私の見えない何かが見えてるのかもしれないけど、要するに悔いは残すなって事かな？

「うーん…じゃあ、明日から色々やり始める事にするよ。まだ先生にも会ってないしね」

「明日からなんだ」

「だって今日は何もやりたくないだもん、タクとは仲直りしても終なんて知らないもんねー」

布団に包まりつてゴロゴロしてる私は、あんな勇気の意味を履き違えてる奴の事なんて知らないもんねーと、誰もいない方向にあっかんべーとするのだった。

とりあえず明日、装備は全部完成させて、先生に会いに行つて少し話してみるかなあ…

第15話 しにがみと魔女っこ

「と、言うわけで！ 昨日あんなにティアが急かすから、元気ドリンク飲みながら徹夜で装備は完成させました〜ふうー☒？」

「マスター、キャラ壊れてる」

仕方ないじゃんか。こちらら昨日ティアにあんな事言われたから、時間が惜しいって思ったからもう1つの世界に籠アナザーワールドって未完成だった諸々を全部完成まで持ってきたんだから。

それにしてもやつぱりアレだね、疲れた身体に冬の朝の身を着るような寒さとキンツキンに冷えた空気は効くね。そう、つまり…

「く→うきがうまいい！」

まだ在庫があつた元気ドリンクを飲み干し、大きく深呼吸をする。バツチリ眠気も覚めて、いい感じだ。

「身体が軽い！」

「それは止めろって、前にも言ったよ？」

「これが、残業の消える感触というものか！」

「…お疲れ、マスター」

某ガンダムを売ろうとした人の台詞でも飛び出すのかと思つてたけど、ティアは両手を広げて笑つてた私の頭を撫でてくれた。ん、あ、あれ？なんか調子狂う…

「それで、さつきからその後ろに浮いてるそれは何？ 新しい物でも作つたの？」

「ううん！ これは魔改造した肩当だね！」

「もう一回お願い」

そして冷たい目でそうティアが言う。しょうがにやいにやあ…ティアだったら。ロイドは私が出てきた時にはもういなくなつたから、こんなテンションで騒いでも問題ない。

「これは、肩当だね！」

「はあ…百歩譲って、その肩の丸い蓋みたいなのは肩当と認める」

ならいいじゃん、そう反論しようと思つたけどティアの有無を言わせない目力で黙ってしまう。それを見届けたティアは、一呼吸おいて

から言い放つ。

「けど、それから鎖で繋がってる7個の棺桶を、私は肩当なんて断じて認めない」

「えー、いいじゃん別に。性能は折り紙付きなんだからさー」

そう言つて私がジタバタすると、繋がった鎖がカチャカチャと音を立てる。因みにこの鎖、ティアを封印してた奴が少し紛れ込んだから、無理やり複製してみたやつである。

「マスター、流石にそれ、ファンネルとかにはなつてないよね?」

「そりゃ勿論。流石に戦つてる最中にファンネルとか、ニュータイプでもイノベーターでもコーディネーターでもない私には無理無理」

だってこの目的、純粹に防御面と魔法面の強化に重点を置いたやつだし。動いてもついてくるのはまだ渡せてないけどロイドの羽根と同じ原理で、昨日完成させた瞬間装備アイテムにも登録は完了している。

「それなら一安心だけど、なんで聖女のレリーフじゃなくて、私の紋章?」

中に浮かぶ黒い7個の棺桶の正面から見て上半分に付いている、何本かの矢印とキリル文字が幾つも組み合わさったような紋章を指してティアが言う。下? 何個も丸を集めたような感じのレリーフをくっ付けてあるけど? まあ、ティアの質問に答えるとするならば…「だって著作権とか考えないとだし…あと、これ見るだけでSAN値減るじゃん? それにティアと契約してるじゃん? 当たり前じゃんよ」

「少し納得はいかないけど、まあいいや」

そう言うティアの顔は少し緩んでいる。なんだかんだで私とティアの関係がある物つて、この契約の腕輪だけだったもんね。私もなんかそれって寂しかったんだよね。

「それじゃあ、私の新しい装備とかってあるの?」

「もっちゃん」

「どやあ! とキメ顔を作り、門の中に両手を突っ込む。でも、ティアの装備つて本人から希望が無かったから、勝手に用意したやつなん

だよなあ…

「じゃーん。とりやつ！」

「んむっ、ありがとうマスター」

そう言っただけで私がティアにかぶせたのは、所謂魔女っこ帽子ってやつだ。そして一緒に白い手袋も渡す。前々から魔法使いなのに何か足りないなあって思ってたんだよね。

「あとは一応、接近されたとき用に斬鋼線クロールテールと自殺志願マインドレンデルも作ってみたけど…要る？」

「後者の方だけ貰う。流石に斬鋼線なんて、マスターの記憶を見ても使えない。あと、普通にナイフとして使う」

「あう…ぎょんねん」

因みに自殺志願マインドレンデルっていうのは、両刃の長さの違う2振りのナイフをネジ止めた大鋏だ。零崎じゃないから、私だつてある程度しか使えない。けどロマンの塊でいいと思ったんだけど…

「それに、釘バットと楽器に比べれば1番いいでしょ？」

「なんで普通のナイフにしなかったのか、甚だ疑問だよマスター」

そう言いながらも、きちんと受け取ってくれるティアはすごく優しいと思う。よし、これでもう装備関連はロイドに渡せばいいだけなんだけど、それは帰ってきてからでも十分間に合うでしょ。

「マスター、そういうえばアルさんの剣はどうなったの？」

「ふえ？ 聖剣渡してきた日に、闘技場でそのまま作ってきた」

「仕事、早いね」

「勿論です、ぷろですからー」

なんだか楽しくなってきたクスクスと笑ってしまう。なんだろう、流石徹夜テンション。これから先生に会いに行こうっていうのに、コレはちよつとマズイ気がする。

「って、そうだティア。今日私、僕の頃の担任の先生に会いに行くんだけど…一緒に来てもらっていい？」

「ん、別にいい」

「ありがとうー！」

そのままハイタッチの形に手を持っていくけど、完璧にスルーされ

てしまった。う、やっぱりこのテンションをどうにかしなきゃ…

「マスター、それなら一回くらい戦ってみる？」

「了解だー!!」

この後メチャクチャガチバトルした。

第16話 清算

屋根の上を飛び移る。一步一步、確実に目的地に近づいて行き、開いていた窓からクトウルフらしく進入する。ああ！窓に！窓に！なんて言う暇は与えさせない。タクはまあ起きてたし別にいいでしょ。

「戦ってる最中に後ろから撃たれたくないから仲直りに来たよタク！

ついでに先生に挨拶してきたいから場所教えて？」

「なんで窓から!?! それになんで朝っぱらからこんなテンション高いのさ…あとどこことなく2人ともボロボロだし」

「少し、戦ってた」

あの後落ち着くために、私はティアと組手をし始めたんだけど結局途中から熱が入ってきてガチバトルに変わり、アドレナリンがドバドバ出てこうなった。だけど元々の予定を崩す気はないし、徹夜テンションのままタクのいた部屋に突入したのだった。

「とりあえず柵さんは大っ嫌いだけど、まだタクは信頼できるしね。主戦力っぽいから戦うんなら仲直りしておかないと」

「後ろから撃たれたら、堪ったもんじゃない」

「と言うわけで、はい握手ー!」

「あ、え、あ、うん」

若干タクが引いてるけど、有無を言わずその手を握ってブンブンと振る。咄嗟に思いついたのがこれくらいしか無かったけど、抜けきらない徹夜テンションのせいでそんなに気にならない。

「それで、先生って今どこにいるのか知ってる?」

「ええ…まあいつか。第3の街…って言っても分からないか。でも街の中央に転移のための門があるから、そこから行けるよ」

「ん、分からないけど分かった! じゃあね!」

「バイバイ」

そう言っただけは、特にこれ以外の用もないので押しかけた部屋から出て行った。帰り際に「まるで、タイヘイヨウノアラシ…いや違う」なんて聞こえたけどまあいいや…けど、絶対にそれは違う。ヤマトダ

マシー！！（米国製）

なんて事を思って、本当に街の中央にあったゲートを潜って転移したんだけど…

「うーん、詳しい場所を聞いてなかった…」

「マスターの、バカ」

あれから1時間弱、どの街にいるかしか聞いてなかった私達は、夕ク曰く第3の街を放浪していた。うーん、ギルドに行っても知り合いがいないから聞けないし…

「私とティアが次元魔法使うのは…」

「無し、無駄に混乱を招く」

「だよねえ…」

はあ…と2人揃ってため息を吐く。特に何かいい考えもないし、さつきからお腹空いてきたし…一旦休憩にする？

「そうする。マスターとガチバトルしたせいで、オナカスイタ」

「ん、了解！ 私もお腹ペコペコだよ…ってむむむ、主菜のストックがない」

ちよつと行儀は悪いけど食べ歩きでもって思ってたストックを漁ってみるけど、深夜帯に食べてたせいか1つもなくなっていた。…最近二の腕がプニプニしてきたから、ちよつとは運動しないと。

「という事は、お店か自炊？」

「なんだけど、お店も自炊出来る場所も分らないんだよなあ…」

そう言ってるリフンと比べて緑の多い街をぐるりと見渡す。獣人モードに成れば、匂いで色々判別できるんだけどここじゃ無理だし…

「大丈夫？ あなた達。この街に来たのは初めて？」

「あ、はい、そうなんですよ先生。私達先生を探してて…って、先生？」

項垂れていた顔を上げると、そこには懐かしい先生の姿があった。あるえ？ なんて結構探したのに見つからなかったせんせーが？

「確認する。あなたが勇者達の先生？」

「そうだけど、私に何か用かな？」

「はい！ 色々と聞きたいことがあったのと、挨拶をと思つて」

話を聞いてみた限り街をダンジョン化させたって話だから、何をどうやったらそんな事が出来るのかとか、柊さんの評判がどんなものなのかとか。そこら辺の事を考えて言おうと思つた瞬間、ひとときわ大きくお腹がぐうと鳴つた。

「それよりも前に、まずはご飯を食べましょう？ それとも、そんなに急ぎの話なのかしら？」

「はい…お言葉に甘えさせていただきます」

「まずはご飯」

今の私と先生は他人。それを改めて意識するけど、正体を明かさなままじゃ話聞けないよなあ…まあ、ご飯食べてから考えるか！

◇

「ごほん。これで、私に聞きたかつた事は全部でいいのかな？」

私たちの反対の席に座つた先生が、そう咳払いをしてから言う。いやー聞きたい事は聞けたし満足満足。柊何某は、色んな人から調子乗つてるとかウザいみたいな印象が強いっぽいしやつたぜ！

「はい！ ありがとうございます」

「感謝」

正体を明かさないようにしようと思つていたけど、普通に伝わつてたんだよね…いや、その分話はしやすかつたからいいんだけども。あと、やつぱりダンジョンマスターつているんだね…

「それじゃあこつちからも質問していいかな？ 白沢君」

「え、はい。答えたくない事以外なら」

「白沢君つて、地球に戻れるでしょ」

そう真剣な目で先生が言つた瞬間、空気が凍つた。うーん、これ言つていいのかな？ どつちにしろ戦いが終わつたら言わなきゃだけど…

「…情報を広めないなら答える」

「そう言つてる時点で、もう出来るつて言つてる様なものね。でもい

いわ、広めたりしないから話してくれる?」

確かに今のティアの答え方じや、出来るって言ってる様なものだよね…まあいつか、どうせ広められても出来やしないんだし。

そう覚悟して、小声で私は言う。

「一応できますよ。制限だらけですけど」

「その制限って言うのは?」

「最大人数5人、消費MP片道最低10万、安全性を確保するならインターバルに2日程」

「ここ最近で魔力回路なんて物を知っちゃったから、ティアの言う通りそれくらいにはなるよね。それで40人割る5人で8グループだから、全員生きてると仮定して終わるまで約2週間か…」

「凄い事だけど微妙ね」

「仕方ないじゃないですか、元々団体での移動なんて考えてなかったんですから」

「頼まれても、すぐには出来ないとだけ覚えておいて欲しい」

そう、私だつて神様殴つたりみんなを帰したりしたいけど、完全にMPが足りない。貯めてはいるけど、アルさんとの戦いでかなり削れちゃったから片道分しかない。せめて往復分は集めないと。

「ダンジョンコアから魔力を供給すればできそうだけど、今やったら街が敵に落ちるわね」

「ですよー」

「今の状況で、戦力は減らすべきじゃない」

私にだつて情も愛着もあるから、人間界を見捨ててーって選択はしたくない。このまま放置しておく、他の大陸にも飛び火しそうだし。

「それね…なら転移はこの戦いが終わってからという事で、最後に1つ質問。白沢君、あなたはどうするの?」

「こつちに私は残りますよ。地球の戸籍もないし、姉ちゃんに時々会いに来てくれれば良いって言われましたし」

それに…

「ロイドもいるっ?」

「フア!? ちちち違うよティアなに言ってるの!! それにロイドなら一緒に転移すればいいだけってちーがーうー!!」

心を読まれた訳じゃないけどこれ深層心理とかそういうのかもしれない。つまり私はロイドが嫌いじゃないからイコール好きかもって事になってつまりはそういうことになってイコールあれなにこのループ?

「元々女の子みたいだったけど、もう完全に女の子になってるのね…好きな男の子、絶対に逃しちゃうダメよ?」

「せんせーまでなんでコレに乗ってくるんですかー!!」

昼間のお店屋さん、私のそんな声が虚しく響くのがあった。

閑話―17 営倉の中で

ピチャンピチャンと、薄暗い中に水が滴る音だけが響く。朝夜に普通のご飯は運ばれてくるけど、牢に掛けられてる魔法のせいか自分が出す音以外先の水音しか響かないこんな空間にいと、気が狂いそうになる。

私、終鈴華は今、ギルドの地下にある営倉の中にいた。

「なんで私がこんな所にいなきやいけないのよ…」

薄暗くてジメジメしてるし、寝る所はあるけどベットは硬いし毛布もペラッペラだ。営倉だから仕方のない事ではあるけど、近くの牢に例の強姦未遂をやらかした奴がいるらしいのは気に入らない。

いつも食事を持ってきてくれる青いツナギの男の人が、なぜか時折とてもツヤツヤしてる事とその犯罪者に何らかの関係はありそうだけど、暇つぶしに暴いてしまったら死ぬ気がする。

「それは私だって、感情的になりすぎたって言えなくもないけど…」

それに白沢君が、言っていた通りの異世界生活の始まり方をしたのなら私達勇者と違って野宿とかも普通にしていたんだろうし、文句を言ったとしても負ける気がする。

「仕方ないから、やっぱり、謝った方がいいのかしら？ 気に入らないけど」

『キミは本当にそれでいいの？』

そう思った瞬間、暗闇の中からそんな奇妙なエコーのかかった声が響いてきた。なに…この凄く気持ち悪い気配。

「あなたは誰？ いや…なに？ どうやってここに入ってきたのよ!？」

『そうだね…わかりやすく言えば海堂君と契約した存在かな？』

「あんたが！」

その言葉を聞いた瞬間、私が魔法の代わりに使える忍術を全開で発動した。声のした方向に炎や水や風を飛ばすけど、一切の手応えがない。

『酷いなあ、危ないじゃないか』

「あんたが今の人間界をおかしくした奴に加担してらっていうなら、

「どうなろうが知ったことじゃ無いわよ！」

「そう言つては見るものの、気配には何の揺らぎもない。いつそこうなったら、拘束される期間が延びること覚悟で牢を壊してでも…」

『ふーん、僕の契約者が色欲と嫉妬に塗れた憤怒なら、君は差し詰め勇気を履き違えた傲慢かな』

「誰が傲慢よ！」

「なにを言つているのかよく分からないけど、途轍もなく良くないことを言われたことは分かる。それに、私は傲慢なんかじゃない！」

『君の心を覗けば、一目でわかるさ。ついこの間の暴食の少女達にした行い、それなんか最もたるものじゃあないか』

「私の心を覗くなあああつ！」

「牢を壊す勢いで遠心力を乗せた回し蹴りを放つけど、形容しがたい不快な感覚が足首を包んだだけで、気配の主にも牢にも何の変化も訪れなかった。」

『それに、件の白沢君とやらがいなくなつてせいせいとしてたんだらう？愛しの天上院くんを取られることが無くなるから』

「違う！」

『違わないだろう。戻ってきた暴食の少女の意見を聞きもせず、あんな事をいえるんだからねえ』

「あれは！ あの子がどうしても信用できなかつたから!!」

「そうだ。あんな何もかも変わった子を白沢君だなんて信じられないし、他のみんなは気にしてない風だったけど目の前のコイツと似通つた：つまり大罪スキルの雰囲気も漏れていた。おまけに私達と同じような元徳のスキルも持つてるみたいだし：そんなわけわかんない子を信じるなんてどうかしてるわよ!!」

『ほらその考え方だよ』

「ピシヤリと冷水を浴びせられたような言葉に、思考が停止してしまった。いや、違う。私は海堂なんかと同類じゃ…」

『へえ…なんか、ねえ？　ますますらしくなってきたじゃあないの』

「あつ…」

「一瞬途轍もない殺気を浴びせられ固まっちゃってしまい、その後の手叩き

でも聞こえてきそうな声音での発言に顔が青くなるのを感じる。

『ふーん、へえ。なんだ暴食の子って、キミの命の恩人なんだ。その様子だと、忘れてるみたいだけどねキミは』

「なに…を」

『迫るオークキング、いきなり現れた炎の鎖と光の輪、その首を斬り飛ばした銀色の流星。本当に覚えがないなんて言うなら、ああ、なんてあの子は不憫なんだろうか』

ケタケタと笑う声まで聞こえてくる。確かにその記憶には覚えがある、けどあの時の子は特に変なスキルもないごく普通の女の子だったはずだ。あの頃から私達を騙していた？ いやそれはない、という事はつまり私達は命の恩人を殺しかけた上に、向こうの善意を邪推して拒絶していた？ そんなの、そんなのって…

『いい顔をするじゃないか。それに素晴らしい絶望の味だよ！ やはりキミには、この《傲慢》のスキルを授けよう』

「い、いや。来ないで！ うっ」

呆然としてへたり込んでしまっていた私に、暗闇から滲み出てきた黒い煙の様なナニカが纏わりつき、喋るために開いた口から無理やり体内に進入してくる。口を閉じようとしても何故か金属でもあるかのように閉じれず、確実に何かが書き換えられ…違う、書き加えられていく。

そして、そのナニカが書き換えられる直前、

『ちっ、時間切れみたいだね。でも種は植え付けた、キツカケも作った。キミがこれからどう変わって行くのか、僕は楽しみで仕方がないよ』

そう言い残して、謎の気配はすうと消えていってしまった。私の中に、よく分からないどす黒いモヤモヤを残して。

「違う、私は傲慢じゃ…あんな、海棠とか白沢君みたいな奴じゃ…」

今言ってる言葉が先程となら変わりのない事に気付かず、急いでる風の足音が聞こえる中、私は意識を闇へと落としていくのだった。

第17話 「私」として

「あんもうやーだー、アレ以外の暴食の制御とかでーきーなーいー」

「マスター、そんなこと言ってるよ、また死ぬかもだよ?」

「それはそうなんだけどさあ…」

私とティアしかいないもう一つの世界アナザーワールドの中で、汗だくで大の字に転がった私は言う。あーもう、なんでこの床はこんな暑くも冷たくもないのさ…

「ティアみたいに攻撃を喰らうって言うのは、なーんか出来ないって言うかさー」

「私には、マスターのやり方がぶっ飛んで見える」

「あれは、真正銘最後の切り札だから。紛い物だけだ」

私のアレは、私が唯一暴食のスキルを変形させて使えるやつだけど元ネタがある紛い物。だけどその元ネタが凶悪すぎて、不完全な再現でも頭のおかしい性能になってるヤツだ。

そこら辺の木っ端みたいな魔物に試して使ってみてから、即死技じゃないけど人間相手には使わないって決めたヤツだけどね。

「だから、ちゃんと暴食での防御くらいは出来るようにしないと、せつかく制御出来てるのに勿体無い」

「うう…叡智の方だってまだ完璧じゃないのに」

というか、こっちの方がどうすればいいのか分からない。まだ使い方が定まってる暴食と比べて、鑑定と情報の最上級スキルなんてどう応用すればいいのかわからない。すべての式を解く者みたいな使い方も頑張っても無理だし…

「ねえティアー、なんかショートカットとか楽な道って無いの?」

「死の淵まで追い込んで欲しい?」

「遠慮しておく」

女の子座りに戻り、大きく私はため息を吐く。私ってつくづく戦闘には向いてないよなあ…魔法が上手く使えるのと道具を上手に作れるだけで。

「まあ少しは慣れてきてるし、新しい職業も馴染んだからいつか。

強者よ…」

「マスター、それ天目一個」

というわけで、いつの間にかレベルが150を超えてたから取ってきた職業というのが《天目一筒》だった。ここまで来てようやく日本神話の神様の名前が出てきてなんだか嬉しかった。

念のため言っておくけど私、炎もよく使うしお宝は沢山抱え込んでるけど、ミステスじゃないよ？ 零時迷子作らなきゃ（使命感）

「それじゃあマスター、無理してもよく無いし、休憩する？」

「え、いいの！」

「そんなに嬉しそうにされたら、もう引つ込められない」

そうやれやれといった雰囲気ティアが言うなか、私は自分の門を開けて取り出したタオルで汗を拭う。そう、色々物がありすぎる私の門の中じゃ流れ弾の被害が怖すぎるから、ティアの方の中で私達は特訓していたのだった。

「ただの休憩じゃつまらないし、マスターの抱えてる問題を一つ」

「ふえ？ 何かあったっけ？」

「マスターは、ロイドの事は結局どうするの？」

その言葉に、不覚にも私は固まってしまう。確かにそれはどうにかしなきゃいけないけど、戦いが始まる前にどうにかしないと死亡フラグがロイドに立つ事になるけど…

「また言うけど、マスターは元の身体には戻らない。精神的も、身体に引っ張られている。そしてロイドは、そんなマスターでも好きと言っていた」

「それはそうだけど……」

もし告白とかで今の関係が変わるのは、どっちかっていうと嫌だ。けど、早計かもしれないけど、こんなある種歪いびつな私を好きだなんて言ってくれるのはロリコンを除けばロイドくらいしかないし…

「それじゃあ、マスターはロイドの事が嫌い？」

「それはない！」

私は思わずそう即答してしまった。ロイドの事を嫌いって言うちやうと、今まで一緒に色々やって来た事とか、否定する事になりそ

うで…

心にまだ、男の部分が残っているのにこんな風に思っちゃう私なんかがその、そういう、彼氏とか彼女とかの関係になっていいのか分からないし…

「ちえりおっ!」

「いたあっ!」

ちよつとネガティブな考えになっていた所に、ティアから頭に強めのチョップを入られた。うう……なんなのさ、一体……

「そんなに、ウジウジ悩んでるのはマスターらしくない。あと、そんな悩みを抱えた状態じゃ、特訓は上手くないかない」

「え、それってまさか」

「そのまさか。ロイドとの問題、片付けるまで特訓は無し」

叩きつけられる残酷な宣告。いや、意味は分かるけどそんな事ってひどいよ……はっ、まさか!」

「か、鍛冶とか物作りはしちやダメなんて言わないよね!」

「それを見ると、マスターがおかしくなるからしい。中毒者みただし」

「中毒者ってひどいなー、ただのけんぜんな鍛冶ですー」

時折爆発したり、凍ったり、剣が暴れ出したりするだけでいたって健全ですしー。この前作った蛇腹剣が魔力を込めすぎたのか暴走して、R18の3歩手前くらいの触手プレイされた事なんて覚えてませんしー。あれはフロアが居なかったら大変な事になってた…

「それが普通じゃないと……まあいい、いつそもうデートでもしてくるといい」

「ちよちよ、ちよつと待った!」

某禁書庫の扉渡りを使う大精霊みたいに、門の中から吹き飛ばそうとしてきたティアにタンマを入れる。は、話してくるのはいいけどその前に!

「シャワー浴びてきたい」

「…それもそう」

私もティアもなんだかんだで汗だくなせいで、服も髪の毛も肌に張

り付いてるし気持ち悪い。流石に恥ずかしいから、シャワー浴びて着替えたい。

髪の毛の長さの問題でティアと一緒にお風呂に入ったけど、弄られ続けたせいでこの時ばかりは凄く恥ずかしかったのだった。

◇

「ふう、さっぱりしたしこれでようやく…あつ」
「あつ」

シャワーを浴びたせいでサラサラのフワフワに戻った髪を下ろしたまま、背伸びをしながら門から出ると、そこには目的だったロイドが立っていた。

お互い、なぜか顔を少し赤くしながらピタリと動きが止まる。う、うう…どうしよう。

「あ、あの」

意を決して喋り出したつもりが、セリフまでロイドと被ってしまった。えう、あう、そうだ！

「そ、そつちが先でいいよ！」

「お、お先にどうぞ！」

…何コレ気まずい、というかラブコメ。ああもうこうなったら！

「ロイドが先でいいよ！ わ、私のは大したことじゃないし」

「あ、ああ」

ふう、コレでようやく話が進むし、門の中の笑いを堪えてるみたいな気配もどうにかなるでしょ…

「そ、それじゃあ、明日一緒に出かけないか？」

「う、うん」

その落とされた特大の爆弾に、私はついうんと頷いてしまうのだった。ふ、服とか私センスないしどうしよう!?

第18話 最初で最後

「あうう、いざとなったら…」

少し肌寒い気温の中、待ち合わせ場所で私はマフラーに顔を埋める。初めて街に来た頃たこ焼きを食べてたベンチのある木の下、若干お互い用事が残っていたからそこで待ち合わせする事になった。

(というか、ティアと一緒に服は選んだけど大丈夫なのかなこれ？似合ってなかったりしない？)

一応、ティアに勧められた通り地球で買ってきた服を組み合わせて、その上に異世界産の白っぽいコートを羽織った感じだ。長めの黒いリボンで髪をポニテに纏めてあって、首からは例の紅いペンダントをかけているけどそれはコートに隠れている。だから、白をベースに所々青と黒で纏まってる印象で、雪の精…にはならないか。左眼紅いし。

(えと、髪の毛は跳ねてないし、見た目はちよつと背伸びしたロリだけどおかしくはないし…)

持っていた手鏡を仕舞い、服装の最終確認を終える。というかなんで私はこんな事をしてるんだろう？ うん、デートもどき。理由、わからない。分からないって事は怠惰デスね！ 愛に、愛に報いるのデス!! 違うそうじゃない、まだ好きかも程度だからー!!

そういう感じに頭が混乱し始めた時、ようやく待っていた気配を感じて振り返る。

「その…待ったか？」

「そ、そんなに待ってないかな…」

何か知らない事を言い出しそうな口を、マフラーに更に押し付けて言う。うう…なんで咄嗟に返した返事がこれなのさ…コレじゃマジもんの恋人みたいじゃん…うう。

そう言いながらみたロイドの格好は、私達が地球に帰った時の格好だった。なんだか同じような思考回路なせいかな、隠れてるけど少し笑ってしまう。

「えっと、何かおかしな所でもあったか？」

「ううん、ちょっと私とロイドって似てるなーって思ってた」
「なあっ」

その言葉を聞いた瞬間、ロイドの顔が真っ赤に染まる。まあそんな事を言ってる私も真っ赤なんだけど。いやなんで私こんな事言えてるの？ 本当にもう女の子なの？ いいえケファイアデス！（違）

ああ、脳が震えるううう！（超違）

「と、とりあえずお店でも回ろうぜ？イオリや俺がいた時と比べて、色々が増えてるみたいだしさ！」

「あ、うんー！」

そう言ったロイドの左手を恥ずかしいけどぎゅっと握って、2人揃って歩いていくのだった。えへへ、偶にはこういうのも良いかなーなんて思ってみたり。

◇

「ふふふ、ちゃんとマスター、女の子してる。録画しなくちゃ。これが多分、最後の日常になるから」

距離の離れた宿からその様子を覗く、その手にビデオカメラを携えた1柱の邪神せいらいがいるという事を知らずに。そしてその目が見通す、不吉な未来の事を一切知る事もないままに。

◇

「すまんなタクミ、今日は訓練は無しだ」

「分かりました。何か、あったんですか…？」

ここ数日、終さんが営倉に入ってからアルディートさんと特訓していたのだが、今日は無しらしい。それもアルディートさんの険しい顔を見れば、なんとなく何かがあったとは察せる。

「上手く説明は出来ないんだがな、とてつもなく嫌な予感がしてな。俺の独断で、各街にそれぞれSランクの戦力を回したんだが、それでも収まらねえ」

「それって、まさか」

「ああ。確実に今日何かが起こる。お前の未来視だったか？そのスキルで見えないのか？」

「すみません」

未来視とは銘打ってるけど、このスキルじゃせいぜい数秒先が見える程度だ。戦闘中ならそれは大きなアドバンテージだけど、未来予知には全く向いていない。

「そうか。俺は今から、戦力が足りてない街に行って待機しなくちゃなれねえからな。リフンは頼んだぞ」

「はい！…柊さんはどうします？」

今までの行動が、余りにも行き過ぎていた部分があったから営倉に入れられている柊さん。反省が足りてるかは分からないけど、猫の手も借りたい状況になるとしたら…あのモーブとかいうのは論外だが。「手が足んねえから仕方ない。本当は出したくねえが、まあ緊急事態になったら良いだろう」

「分かりました！」

そう言い残して、戦争の時以降見る事のなかったフル装備のアルデイトさんはギルドから出て行った。本当に今日、何が起こるって言うんだよ…

「そうだ、蒼矢達にも知らせておかないと」

「それは不要」

そう考えて足を一步踏み出した瞬間、ギルドの入り口にティアさんが転移で出現していた。一応、俺も転移は出来るんだけどあんなに突然現れるのはできる気がしない。ってそうじゃない。

「不要ってどういう事？蒼矢達は少なくとも俺より上か同じくらいの強さだから、何かが起こるなら気をつけて貰わないと」

「初めてのデートくらい、満足にさせる鈍感」

「ええ…」

こんな時に…いやそれなら流石に邪魔するわけにはいかないかって、マジか。相手が誰なのかは少し気になるけど、蒼矢がデートか…「邪魔しようとしたら、ティンダロスが出ると見え。何度も未来を見てるお前は、十分に標的になりうる」

「そんなに本気の警戒態勢なの…？」

まああわよくば覗こうってくらいの気持ちだったから、そこまでやられるなら何もしないけれども。ティンダロスってクトウルフ神話

とかに出てくるティンダロスの猟犬だよね…何それ怖い。

「アレが始まるまでに、マスターのデートが終わるかは不明。だけど、2人ともすぐに戦えるから問題ない」

「それなら俺が出張る必要はないけど、アルディートさんとかティアさんの見えてるアレって言うのは何なの？」

俺はアルディートさんの予想と、この子の言ったアレが一緒の物と考えて聞く。流石に守る事が得意でも、何が起きるか分からないなら対処がし辛い。

「そう、やっぱりあの人も気づいてたんだ」

そう言つて一呼吸おいた後、しっかりとこちらの目を見据えてティアさんが言う。

「私の占いで見えたのは、崩壊して燃える街、逃げ惑う人々、街を蹂躪する魔物の群れと、悲鳴と血。準備はしておいて」

そう言った瞬間転移の光に包まれて、ティアさんはどこかへと消えてしまった。

「何が何だか分からないけど、準備は…しておかなきゃ」

逃げ込むとしたらギルドか。元々結界とかで防御されてるギルドだけど、そこに俺のスキルと…先生にも協力を頼まなきゃ。

第19話 終わりの始まり

冬の冷えた空気が、私の茹で上がったように赤い顔を冷やしている。ロイドが何か説明みたいなのをしてきてくれるみたいだけど、正直心臓はバクバクだし色々意識しちやってるせいか頭に入っていない。

(この前も手は繋いだけど、今は義手じゃなくて生身だからゴツゴツしてるのに柔らかくて暖かいし…)

私もハンマーとか大鎌を振ってる以上どっちの手にもたこはあるけど、それとは違った感じの男の子って感じの手だ。元は私もそっちに近い手だったのに、今は何故か繋いでるだけで恥ずかしい。

「ーで、あのお店には色々な物が売ってるんだけど…って、大丈夫かイオリ?」

「え、うん。ただ、ちよつと恥ずかしくって」

私は照れた顔のまま笑う。服はこの前地球で買ったばかりだし、一緒に回るとしたらそこら辺かな…って、小物?

「小物って言えば、この前ロイドが買った髪留めって何だったの?」
この前薬を買いに行った時、同じ場所で四つ葉のクローバーのヘアピンみたいなやつを買ってたけど、アレってどうなったんだろう?

「アレは…本当はイオリにプレゼントしようと思ってたんだが、あの後すぐにモーブの事があっただろ? だから、何とか渡すタイミングを逃してな…」

「それって、今も持ってたりする?」

私のその問いにうんとロイドが頷く。私も多少慣れたから変な対応する事も無くなったし…

「それならさ、前髪伸びちやって少し邪魔だし今欲しいな」

「プレゼント感とか何もないんだけど…いいのか?」

「うん!それでも私へのプレゼントなんですよ?」

ロイドからのプレゼントっていうだけで嬉しくなってる私がいるんだ。この感覚に間違いはないし、それなら何の問題も無いだろう。

若干納得いってないロイドからヘアピンを受け取り、若干左目にか

かり始めていた髪の毛を邪魔にならないように留める。

「ど、どうかな？」

「選んだ俺が言うのも何だけど、凄く似合ってるし、か、かわいい…ぞ」
「あう…あ、ありがとう」

自分で聞いたという情けないけど、慣れたと思ったのに恥ずかしさでそんな答えしか返す事が出来なかった。道端で赤面して俯く男女1組、リア充爆発しろ。いや私たち爆発効かない。ロイドに抱きつけば完全無効。

「……………」

「……………」

それをきりに、私達の間は何だか気まずい雰囲気が漂い始めた。な、何か言うかしないと…そんな風に私が思った瞬間、くうと私のお腹が鳴った。

羞恥心が最早どこぞの神セイクリッド・ギアの効果並に毎秒跳ね上がっていくけどナイス暴食。食費は増えたし、リゼロでは許せない働きをしたけどナイス暴食！

「この前はモーブのせいで行けなかったし、お昼にするか？」

「う、うん！ 行ってみたい所あったんだ！」

幸いにもここから場所はあるまり離れてない。あそこはまあ、どっちかかっていうと甘味処だけど、珍しくケーキがあつたからお腹には溜まるから問題無い。それにこっちの世界特有の料理でも無い限り、クックパツ〇を可能な限り書き写してきた私に死角は無い。

そんな謎の優越感を覚えながら、私がロイドの手を引いていくのだった。

◇

そして到着した何故か洋風な店内の窓際の席、こんな世情なせいかほぼ人がいないからそんな良い感じの席は普通に空いていた。多分このお店、クラスメイトの誰かがやってるんだろうけど今は気にしない。

「ん、やっぱり自分で作ってないやつだとおいひい…」

「それなら別にいいんだが…イオリは本当に良かったのか？」

「ふえ？」

頬張ったショートケーキを飲み込んだ私に、心配そうな顔をして口イドが聞いてくる。良かったのかってなんだろう？

「お腹空いてるみたいだったのに、大丈夫なのか？」

「うん！ケーキって結構お腹に溜まるからだいじょーぶ」

因みに私が頼んだのは生クリームと苺の乗ったショートケーキ、ロイドが頼んだのはレアチーズケーキだ。正直ロイドのも美味しそうなんだよなあ…

「信じられないなら、ほら！食べてみ…る…」

そう言っ自分のケーキを切って、ロイドの方に差し出してから気づいて赤くなる。え、これあーんってやつじゃ…それに結構乗り出しちやってるから引くに引けないし、これさつき私が食べたフオークだし…

「お、おう」

「あっ」

そう私が固まっていると、出したままだったケーキはロイドの口の中に収まり、つまり間接…あう。確実にこれ頭から湯気出てるけど…ああもう吹っ切れた!!

「わた、私のケーキあげたからロイドのもちよーだい！　ほら、あーん」

そう言っ目を瞑り、口を開けてから私の記憶はお店を出る辺りまで途切れてるけど、口の中に甘い味が広がったのは覚えている。

◇

「もうちよつとなのに、間が悪い。間に合うかは五分…かも」

全力で私は魔法を行使する。マスターの杖のお陰で何倍にも膨れ上がった魔力での魔法だけど、これでも何時まで保つか分からない。でも、そろそろいい雰囲気だから間に合うかも…

「頑張っってね。マスター、ロイド」

◇

あいにくと外は曇りになっていたし、最後の方の記憶はないけど食事を終えてお店を出た頃、ようやくオーバーヒートしてた私の頭が再

起動する。

「うーん、曇っちゃったね。このあとどうする?」

なんだかねで、いつもより楽しかったからこれからどうなるのかなあと思っ、再起動したばかりの頭で隣のロイドに聞いてみる。

「本当はもうちよつと色んな所を回りたいけど…えつと、これを逃したらまたズルズル引きずりそうだし…よし!」

何やら迷う様にそう言った後、何やら覚悟を決めた目線で私を見つめてくる。

(え、う、これってまさか…別にタイミングは私は気にしないけど、実はもうちよつとロマンチックなのがいいなあって思ったりもするけどえとえと)

絶賛大混乱に陥った私に構わず、目を逸らさずに、しっかりと私を見てロイドが言う。狙いすましたかの様に人通りは0だし、えつ、ちよつ、心の準備が。

「魔界で再会して助けられた時から、今までずっとイオリの事が好きだった!」

付き合うとして、今と何が変わるんだろう? 今でも一緒にご飯は食べてるし、色々してるし…ほんの数瞬の間に、今までの事や言われた事が頭を巡る。

「俺と付き合ってくれ!」

「……………私、こんなに背ちっちゃいよ?」

悩んだ末最初に出てきたのは、どっちかって言うか否定のことばだった。ロイドだったら、案外もつといい人を見つけるかもしれない。

「それでもだ!」

「年も結構離れてるし…」

「たった数年だ!」

自分で気にしている事を、この際だから全部ぶつけちゃおう。もうあんまり残ってないけど、これはやっておかないといけない気がする。

「元男だよ?」

「今のイオリと話してたら、そんな事は気にならない！」

「胸もちっちゃいし」

「そんなの気にするもんか！」

「鍛冶が趣味の変な女の子だし……」

「そうじゃなかったら、きつと俺は今頃死んでた！」

「これからも多分、危ない事に巻き込まれたりするよ？」

「そういう時は、俺と一緒に戦って守ってやる！」

「本当に、本当に、私なんかでいいの？」

最後の最後に出た言葉は、自分でも驚くくらい不安で震えていた。

「違う、イオリがいいんだ」

その言葉を聞いた瞬間、胸がそのなんというかキュンとしたって言うか、少女漫画のトウUNKって気持ちがあった気がした。そっか、私もロイドの事、多分……好き、なのかもしれない。

「こんな私でいいなら、喜んで」

半分泣きそうになりながらも、満開の笑顔で私は言う。そしてこのまま、もうなんだかよくわからないテンションで一步を踏み出した瞬間、

「すっごくいい雰囲気だけど、ゴメン、マスター。抑えきれなかった」
すぐ隣に転移してきたティアが、荒い息で膝をつく。そしてそれと同時に、空を覆っていた雲が……否、雲のように見えていた異常なまでに濃い霧が晴れていく。

そして、霧が晴れた時に見えたものは……

「何、あれ？」

視界を埋め尽くすほどの魔物魔物魔物魔物魔物。ランクもバラバラ、中には死んでいるものもいるけれど、その圧倒的な物量で街を覆う結界が軋みをあげている。

「そして結界も、私の迎撃が無くなったからもう終わり。本当にゴメン、2人とも」

そんなティアのセリフが終わった瞬間、上空から大量の魔物が街に降り注ぎ、街にサイレンが鳴り響いた。

地獄が、始まる。

第6章登場人物紹介

イオリ・キリノ

種族 人族 銀狼族

性別 幼女

年齢 7

職業 ヘーパイストス・ドヴェルグ・トリスメギストス・スクナヒ

コナ・ウルカヌス・ゴブニュ・天目一箇

LV 154

HP 2589 / 2589 +0 / 15400

MP 7914 / 7914 +0 / 99999

STR 2029

DEF 1976

AGL 1926

DEX 38100

MIND 1847

INT 7924

LUK 77

《戦技》創造 幻想世界・戦乱の剣

《スキル》

職業

ヘーパイストス LV 190 ドヴェルグ LV 181

トリスメギストス LV 89 スクナヒコナ LV 163

ウルカヌス LV 139 ゴブニュ LV 91

天目一箇 LV 4

EX

家事万能 無詠唱 情報の魔眼 変身

MP消費半減 武芸者の卵 生産者の魂

もう一つの世界 七大罪・暴食 叡智

通常

演算補助 L V 2 5 魔力精密制御 L V 2 0

HP高速回復 L V | | MP高速回復 L V | |

死神 L V | | 身体能力超化 L V | |

龍鱗 L V | | 龍力 L V | | 五感超化 L V | |

韋駄天 L V 2 5

痛覚大耐性 L V 2 9 物理大耐性 L V 5

魔法大耐性 L V 5 状態変化無効 L V | |

次元神

劫火魔導 L V 1 8 豊穰魔導 L V 1 7 海淵魔導 L V

1 4

星雲魔導 L V 1 0 暴風魔法 L V 2 6 神聖魔法 L V

2 8

森林魔法 L V 2 4 氷結魔法 L V 2 7 雷光魔法 L V

2 5

生活魔法 L V | |

《称号》

NEW!!

スウィートドリーム・ロイドの彼女

エクストリーム鍛冶師・機動要塞

モト劇場・メギドラオンでございます

あなたはそこにいますか？

《加護》

世界神の加護++ 鍛冶神の加護++

魔神の加護++

《装備》

武器

魔型聖鎌・ヴィターエトモルテ

マジカル☆スミス☆ハンマー

ナノゴーレムT4・鎌剣ブリジンガー +30

オリハルコンナイフ +30・オリハルコンの針 +30

防具

叡智の副王の棺桶 ×7

戦闘用黒コート+30・武器召喚ペンダント +10

朧水晶の胸当て+30・契約の腕輪

朧水晶の腕甲 +30・幸運の髪留め +5

朧水晶の脚甲 +30 技巧の指貫+30

変形可能グラシユ+30

|| || ||

名前 イオリ・キリノ

性別 女

年齢 7

生まれ 不明

ランク S

ゴールド 1, 543, 800

|| || ||

銀髪ポニテ、紅蒼オツドアイのTS幼女。今章で見事にラブコメをやらかしロイドとくっ付いた。しかし、次の瞬間魔物が襲来し涙目である。

素のステータスは同レベル帯の人と比べると何段も下だが、身につける装備が全て狂った性能のためレベルカンスト勢とも戦えるという、よくわからない状態になっている。また死にかけてせいで、さらに防御が硬くなりついでに攻撃性能も上昇した。その中でも、魔法は最早手がつけれないレベルである。

最近武器の性能が+30で打ち止め、それ以降がユニーク装備になる事に気がついた。

「海堂死すべし慈悲はない」

ティア・クラフト

種族 元魔族 神族 精霊 ヨグIIソトース 天之狭霧神

性別 幼女

年齢 ???? 歳

職業 ヨグIIソトース・巫女姫・仙人・大精霊・占星術師・天之狭霧神 (空き1)

霧神 (空き1)

LV 154

HP 7311 / 7311 + 0 / 9999

MP 13584 / 13584 + 0 / 9999

STR 3087

DEF 3158

AGL 3014

DEX 5245

MIND 4256

INT 8471

LUK 73

《スキル》

職業

ヨグIIソトース LV 210 巫女姫 LV

天之狭霧神 LV 100 大精霊 LV 197

占星術師 LV 199 仙人 LV

EX

全てを見通す目 無詠唱 MP消費半減

転身 精霊化 叡智 アナザワールド もう一つの世界

七大罪・暴食

通常

超思考 LV 魔力精密制御 LV

HP超速回復 LV MP超速回復 LV

五感超化 LV 物理超強化 LV 23

魔法超強化 LV 26 確率補正《大》LV 20

龍力 LV 龍鱗 LV 身体能力超化 LV

物理大耐性 LV 魔法大耐性 LV

金髪に見える虹髪、イオリと逆配置のオッドアイを持つイオリの精霊。なんだかんだでマスターの事に対しては気がきく精霊。今回は、関係を引つ掻き回したりデートを盗撮していたが、最後はきちんと働いた。

精神的にもステータス的にも確実に自らのマスターから悪影響を受けている。暴食分のHPMPは中々満タンまでたまらない模様。

愛読書はS A N値を削る系の本である。

「さあ、今宵の恐怖劇を始めよう」

フロー

イオリがもう一つの世界の中アナザーワールドでも放し飼いにしている幼龍。銃火器の引き金を引く担当。鬼ごっこが好き。

ロイド

種族 人族（偽・狐人族）

性別 男

年齢 13

職業 双剣士・エアマスター・拳闘士・ランサー・イタカ・（空き1）

L V 1 4 1

H P 2 2 4 3 / 2 2 4 3

M P 2 8 7 6 / 2 8 7 6

S T R 2 1 9 1

D E F 1 6 5 6

A G L 4 7 0 4

D E X 2 8 1 4

M I N D 1 7 4 3

I N T 2 1 3 3

L U K 6 9

《戦技》 ????

《スキル》

職業

双剣士 LV 125 エアマスター LV 96 拳闘士 L

V 100

ランサー LV 100 イタカ LV 124

EX

即死回避 豪嵐の守護 詠唱破棄(風)

通常

鷹の眼 LV 29 解析 LV 19 超隠蔽 LV 20

魔力精密操作 LV 10 アイテムボックス LV 9

空間把握 LV 15

双刃双翼 LV 1 体術 LV —— 軽業 LV —— 槍

術 LV 27

気配感知 LV —— 身体能力超化 LV 23

五感超化 LV 1 速度超化 LV 1 縮地 LV 7

韋駄天 LV —— 韋駄天ⅠⅠ LV —— 韋駄天Ⅲ LV

5

状態変化無効 LV —— 物理耐性 LV 13

魔法耐性 LV 14

颯風魔導 LV 7 暗黒魔法 LV 5 冷凍魔法 LV 5

迅雷魔法 LV 5 生活魔法 LV ——

《称号》

NEW!!

スウィートドリーム・イオリの彼氏

チートな彼女・音速・速さが足りない

…一撃だ

《加護》

豪嵐の加護

《装備》

武器

輝く蒼穹の半槍・笑顔の蒼穹の半槍

銀緑の鋭刃翼×2

防具

浪漫式義手・右腕【改】・緑狐の腕輪

手編みのマフラー +28

龍皮のグローブ《右》+30

アームガード Sein +30

フェストウムアーマー +30

レッグガード《R》ラディカルグッドスピードG S《S》+30

|| || ||

名前 ロイド

性別 男

年齢 13

生まれ エモフ

ランク S

ゴールド 3, 175, 720

|| || ||

第1章初登場の、イオリに突っかかってきた薄緑の短髪少年キャラ。最後の最後で見事にイオリとくっ付いた。

素の能力に加え、イオリの本気の悪ふざけが混ざったせいでスピードが尋常じゃない事になっている。その速さは、イオリの魔眼でも見えないほど。周りがチートだと、それに引き摺られて常人もおかしくなっていく事を実証してくれた。

「なんでこんな時に…」

タクミ・テンジヨウイン

黒髪黒目で、クラス委員だったこともあり勇者のリーダー的な事をやっている人物。何気にイケメンだがホモオ。ホモ上院である。

ほとんどレベルは変動していないが、イオリ作の聖剣(魔改造)のおかげで強くなっている。現在地ギルド前。

イオリとは仲直り「は」できた模様。

「コレが、2人が言っていた…」

スズカ・ヒイラギ

何気に天上院の現在のパートナー的な立場に立っていた少女。

容姿は整った方と言えるが、現在営倉に入れられている。

ある意味人間らしいキャラだったが、読者からのヘイトを溜め込み爆弾を抱えた。傲慢。

「・・・」

アルデイト・ガラント

度々出てきてた王都のギルドマスター。レベルカンスト直前の人間界最強さん。戦闘に全振りしたイオリみたいなバグキャラである。

現在地は他の街。

「オラオラあ！ そんなんじゃ足んねえぞ！」

メイ

髪は茶、筋肉モリモリマッチョマンなロイドのお父さん。このまま進めばイオリのお義父さん。現在他の街で奮戦中。

シンディ

長い緑色の髪のマム。このま進めばイオリのお義母さん。現在他の街で救護中。

アンジェロ

ザウパーではない。話の通じる街の代表、態度が悪いのは貴族なせい。

モーブ

イオリとロイドの関係を進めただけのモブ役。再登場したけどモブはモブ。所業はクズ。

海堂

ゴミ屑である。以上。

最終章 幼女で鍛冶師な異世界転生 第1話 ぷろろーぐ

落下しながら、数多の魔獣が餌を見つけたと雄叫びをあげる。私達冒険者にとつてそれは見慣れたものであるけれど、街の中にいる人に限ってはそうとは言えない。普段の日常からは乖離した野生の暴力、例え片鱗であつてもそんなものを突然浴びせられてしまえば勿論…
「そりゃあ、こつとなつちやうよね…」

街中から悲鳴が上がる。デートが終わつちやうのは悲しいけど、落ちてきてる魔物をどうにかしないと少なくともこの街は終わつちやうのは確実だ。

その為にも私がしなきゃいけない事は…

「ティアは休んでて！私は迎撃に出るからロイドは避難誘導ど…ううん、やっぱり一緒に来て？守ってくれるんでしょ？」

魔物と悲鳴のおかげで、一瞬にして非日常の状態に切り替わった頭で2人をお願いする。一応これが最善の筈…そう思いながら、デート用の服装から戦闘装束にペンダントの効果で変身する。

「了解。避難誘導が終わり次第、私も戦う」

「ああ！勿論だ！」

「それじゃあ行くよ！」

同じく一瞬でフル装備になつていたロイドと顔を見合わせ、2人揃つて一気に空へと翔け上がる。このままじゃ間に合わないから、詠唱無しの略式だけど！

「創造 幻想 世界・戦乱の剣！」
Briahl Svarthalfheimr Dainsleif

大鎌を一閃した後広がるのは、術者以外全ての事象が強制的に鎮静化させられる空間。そんな中でもロイドは余裕で私の速度についてくる。頼もしいし安心する。

「総て、滞れっ!!」

無理やり出力上げて範囲を広げ、落下してくる魔物全ての行動を鎮静、停滞させる。それでも、勿論重量級だったり高速移動する魔物は

いるわけで…

「ロイド！ちよつとだけ任せた！」

「任された！」

私を狙う魔物を少しの間だけロイドに任せて、私は少しだけ獣化を使った眼で視界を埋め尽くす魔物を睨みつける。

「マカカジャー！マカカジャー！マカカジャー！」

獣の眼光を以って睨みつけながら、さらに自身に強化魔法をかけ続ける。ロイドが守ってくれてるから、幾ら私が狙われても大丈夫。安心して最大火力を撃てる。

「マカカジャー！マカカジャー！」

マルチロック完了、後は最大まで溜めた魔法を解き放つだけ！

「ロイド、私の後ろに！」

巻き込まれたら堪ったもんじゃないからロイドに避難を促した1秒後、既に私の背後にロイドの気配が移動してきたのを感じる。結果最大展開、対シヨック体勢。

「メギドラオン・七重奏^{セブテット}!!」

魔法を解き放った瞬間、世界から音が消え視界は白に染まった。私とロイドを守るために張った結界が軋みをあげ、割れる寸前となってようやく耳と目が元に戻る。結界は割れてないし、一先ずはみんな無事と。

「嘘、まだ残ってるの…?」

「これは…流石にヤバイんじゃないか？」

モト劇場を喰らつてもなお、落下してくる魔物の群れは半分近く残っていた。正直、地对空用の魔法なんて殆どないよ…メギドラオンなんて連発できないし、銃じゃ致命傷にならないし…ああもう迷ってる暇ないじゃん！

「とりあえず、2人で手分けしてできる限り殲滅…かな？」

「やるしかないみたいだな」

そう言ってお互い頷きあう。やる事も方針も決まったし、後は実行するだけなんだけど…

「あ、ちよつと待ってロイド」

そういえばと思い、ロイドを呼び止める。さつきは邪魔されちゃったし、恥ずかしいけど…ね。

「ん？どうかしたのんむ!？」

「頑張つてね、ロイド」

顔を真っ赤に染めて固まってしまったロイドから、私も恥ずかしさが限界になって逃げ出す。あう：初めてじゃないけど、やっぱりすごく恥ずかしいっていうか…保険は掛けたから安心というか…

大鎌を一旦門から手の形にしたナノゴーレムに握らせ、ほっぺをペチペチと叩いて気合を入れ直す。

「行くよフロー！命令はただ一つ、見敵必殺だ！」

サーチ&デストロイ

「きゆるああつー！」

普段と違って、紅蓮の燃え盛る炎のような形の鎧を纏ったフローが門から飛び出してくる。最近どうにも戦いたそうにしてたから軽く作った鎧だけど、性能は折り紙付きだから問題ない。

「さてと、私も本気出しますか」

風となつて敵を切り刻むロイドと、一条の火矢となつて暴れるフローを見ながら、私も力を練り上げる。暴食の力を本来とは違う方向に捻じ曲げ、対魔物用に意味を無理矢理拡大させ効果を書き換える。

「《かつて何処かで、そしてこれほど幸福だったことがあるだろうか》」
目の前に広がるは、未だ圧倒的な物量を誇る魔物の群れ。いいねえ、中々に絶望的な状況じゃん。範囲はロイドとフローを巻き込まない程度まで広げるとして、切り札その3くらいの詠唱を終える。

「擬似・創造！」

聖遺物解放中に広がる血の匂いが、尋常じゃないほど濃くなり、そして…

◇

「皆さん！ギルドか教会まで避難してください！そこは安全です！」

そう言いながら俺は、裏路地から飛び出してきた魔物を斬り捨てる。まだ街はそんなに壊れてないし人死にも目にしてはいないけど、何故か薄暗いし、ここままで予言どおりになるなんて…念のため、ギルド以外にも教会も避難場所にしておいてよかった…

「ぎやあああつ!!」

そんな事を考えてる内に、家を壊しながら金色の恐竜のような魔物が現れる。それは俺が今いる場所からは遠く、どうしても間に合いそうにない場所で…

「全く。勇者なら、もうちよつとしゃんとする」

そんな声が聞こえたと思ったら、恐竜の首が落ちて次の瞬間には残った身体も頭もどこかに消え去った。この声って…

「マスターからのお願いにより、私も避難誘導と護衛に参加する」

そう言いながら空から降りて来たのは、蒼矢が契約した精霊のテイアさんだった。

第2話　なんで私ばかり

「天上院、一つ質問。この街の近くに、龍脈が通っている場所はある？」

「は？龍脈…ですか？」

「そう。早く答えて」

何度目になるかわからない護衛中に飛び出してきた魔物を斬り倒した後、見るからに疲れ切った様子のティアアさんがそう聞いてくる。

えっと、龍脈って所謂大地の気の流れってやつでしょ？確か似たような話をいつだったか聞いたような…

「確かここみたいな辺境の都市って、防衛都市も兼ねてるから王都と同じ仕組みの結界を張ってて、その動力源が地面の中を通る大いなる魔力の流れとか言ってた気はするけど…」

「それで十分。この避難が終わったら休ませてもらう」

「もしかして、魔力切れとか？」

普通そんな所から魔力を回復しようなんて思わないだろうけど、もしかして俺もそういうのができたりするのかな…？

「そう。元々私はMPが少ない状態で、避難の護衛に参加したから。マスターとロイド、あとマスターのペットはまだ保ってるけど」

「騎竜演舞、壱の舞ー浄化の蜜雨アムリタあー！」

ティアアさんがそこまで言い終わった時、ようやく慣れてきた蒼矢の声が響き、魔物の減った空に浮かぶ大きな紋章から光が降り注ぐ。

その光を浴びた途端、少なからず追っていた怪我が消えて溜まっていた疲労も打ち消されていく。むしろ、心なしか身体が軽くなってるような…

「こう下を気にしてばっかりだと集中力が保たないし、魔力もじき底をつく。少しは休ませないと」

「確かに、ここで戦力が減るのは痛いしね」

降ってきた魔物の骨を、俺は結界で防ぎティアアさんは門の中にしまいなながら会話を続ける。

「それと、龍脈から力を吸い上げるのはあなたじゃ無理。死ぬことに

なる。私とマスターが特別なだけ」

「それって、例の暴食…?」

それなら、あんまり俺としては勧められない。制御はできてるみたいだけど、もし失敗とかをしたらとんでもない事態になるかもしれないし…

「確かにMPを貯めるのは暴食だけど、吸収はマスターが作った武器。だから問題ない」

「そうですか、それなら良いんですけど…」

「それじゃあ話は終わり。キリキリ働け」

言葉の一つ一つが辛辣だなあと思いながらも、今がまだ非常事態な事を思い出し、空から降ってくる肉塊や襲ってくる魔物の撃退に戻るのだった。

◇

「せいやああああっ!!」

自分に気合を入れ直すように叫び、目の前の魔物を両断する。そのおかげで少しMPが回復したから、自分の疲労の回復に当てる。そして身体が少しポカポカする感覚に足を止めた瞬間、さつきから私が戦ってる魔物の群れが私を攻撃する。

「ああもう鬱陶しいなあ!」

何匹も残る空飛ぶ蜘蛛の群れ。しかもその脚はファンネルみたいに飛び回るし、今みたいに捕まえた相手を白く粘ついた糸でぐるぐる巻きにして拘束しようとしてくるし…

「リジエクトッ!」

背負った棺桶の効果で、今まで吸収した衝撃を全方位に解放する。さつきから何回か同じ事を繰り返してるけど、今回はMPがあるから一味違う。

「ファイアリー炎・大文字一面獄炎色!!」

カウンターで放った私の魔法は空間を縦横無尽に燃え広がり、30秒ほど経った途端跡形もなく消え去った。建物への燃え広がり…なし、敵性魔物の影…なし。

「よし…あとはロイドとフローの援護に…ってあれ?」

援護に向かうために空を飛ばうとして中を蹴ったのにいつもの何かを踏みしめる感覚が無くて、なんとも情けないポーズで二階建ての民家の屋根に落下する。

「いつて」

ゴンツと鈍い音を立てて落下した私は、さっきのカウンターで空を飛んでる分のMPも使い切っちゃった事を、靴から生える消えかけの羽根を見て察する。

「という事は…飛んでる敵もそんなにいないし、しばらくは地上戦かな？」

大鎌を担いで空を見る限り、フロアが相手をしてる敵は残り数体だしロイドは…今全滅させた。私？さっきの蜘蛛で最後かな。

なんて事を思っていると、私の背負っていた棺桶が民家の屋根に鈍い音を立ててめり込んだ。完全な魔力切れ…やっぱり機能詰め込みすぎるとダメだね、要改善っと。

「とりあえず棺桶は全部仕舞って、回復しつつ後は屋根の上から探るのが良さそうだね！」

合計350kgの棺桶なんて邪魔でしかないから門の中に放り込んで、少しずつ増えてきてるMPを怪我と疲労の回復に当て、隣の民家の屋根に飛び移ろうとして…

「きゃっつ！」

下から伸びてきた生暖かい植物の蔓が右足に巻きつき、石畳の上に叩きつけられた。うう…いくらDEFが高くつても、痛いものは痛いんだよ！つて、

「ちよっ、まっ、離して！動かすな！」

左足にも蔓が巻きつき逆さまに釣り上げられ、何が楽しいのが足を広げられた状態の私をブンブン振り回してくる。大鎌は落としてちやったし、おかげで、この！適当な剣も届かないし、ナノゴレム（切断）は自分を斬っちゃいそう使えない。

それに、なんだか媚薬を被った時と似たような気分…しかも身体に力が入らないし。私は女騎士じゃないって！

「ひゃんっ！ちよっ、や、そっちはやめっ」

暴れてた手にもなんかヌメツとした蔦が巻きついてきて、段々上に登ってくる。そののせいかすごく甘いにおいがしてきて、よくわかんないけどあたまがぼーっと…

「武技・神風ー」

「アル・シヤマク」

ぼーっとした頭で、下から伸びていた何本もの蔦が輪切りになって、本体も黒に吞まれて消えるのが見えた。えっと、このままじゃ私落ちちやうんだけど…

「よつと。やつぱり軽いな」

そんな事を思っていたら、私は見事にロイドにキャッチされた。お姫様抱っこで。でもなんだろうこの、こう、ロイドを見るとムズムズするっていうか…

「ん、ろいどお…」

無意識に自分がそんな事を甘えたような声で言っただけが伸びた瞬間、私はまだ正常を保つてた演算補助の一つを無理矢理動かして、毎度お決まりナノゴーレムで自分で自分の意識を落とす。あ、危なかつた…

第3話 現状は最悪

「はあ、はあ…やつと追いついた」

「あんたは見るな」

「ひどいっ！」

ようやく追いついてきたマスターの元親友の視界を、残り少ない魔力を使って塞ぐ。こんなマスターを、見せるわけにはいかない。

上気した頬に心底安心し切った顔、そしてお姫様抱っこをされたままロイドの服をぎゅっと握った手。ぐったりしてるし服が装備ごと肌蹴て肌色が見えていたりもする。他にも良くない部分が色々あり、悪い妄想が捗るこんな姿を見るのは私とロイドで十分だ。どうか他の奴が見たら記憶を消す。

「とりあえずロイドは、マスターを私の世界の中に。その方が、多分色々都合がいい」

「あ、ああ。流石にこんな状態のイオリをそのままにする訳にも行かないからな」

そう言っ、私の開いた門にマスターを抱いたまま入って行こうとする…む、一つ忘れてた。

「ロイド、そのままちよつとこつちに来て。マスターごと」

落ちていたマスターの大鎌を拾って担ぐ。この大鎌はどうにも意思があるみたいだから、マスターとイチャイチャするなら、登録しておいた方が色々都合だ。

「何するんだ？」

「半分勝手だけど、大鎌にロイドが喰われない様にする」

長居するのも良くないから、大鎌から登録用の魔法陣を展開する。この武器、本当にマスターの生命線だから大切にしなきゃいけない。

「これはどうすればいいんだ？」

「ちよつと血を貰う」

そう言っ私は、マスターを抱えたロイドの手の甲を軽く斬る。じわりじわりと治り始めた傷から血が一滴落ち、それを吸収した魔法陣が赤く光る。

「これでいい。マスターを、これからよろしく」

「勿論だ」

「門は開けておくから、早めに出てくる」

ロイドの足元に門を開いて、大鎌とマスターごと私の世界に叩き込む。まあ、とりあえずこれでいいだろう。さて、後は…

「あの一、ティアさん？そろそろこの魔法解いてくれませんか？」

「まあ、もういいか」

掛けていた魔法を解除して、その魔力をリサイクルするために回収する。正直雀の涙程度の回復だけど、無いよりはマシだ。

「私としては、次は現状の把握と街中の魔物の殲滅を優先するべきと思う。そっちはどう？」

「俺も似た様な考えだな。外からの攻撃には十分強いけど、中から崩されたら意味が無いからね」

「なら、ギルドに戻って魔物の殲滅は緊急クエストとして発行、残ってる冒険者を総動員。金さえ払えばどんな冒険者でも一応働く。次いで他の街と連絡を取り合い転移の門を奪還して救援。守りを天上院の忍耐のスキルで強化した後、街の周りの魔物の数を減らし安全の確保。これでOK？」

「ティアさんって頭良かったんだ…」

「当たり前」

そんな風に思われてたなんて心外だ。マスターと違って私は、長年この身体で過ごしてるし叡智のスキルも持ってる。それで頭が悪かったらお笑いだ。

「ロイド、まだ働いて事になるけど問題は？」

「特に何も無いぞ。流石に少しは休憩させて欲しいけどな」

門から出てきたロイドに聞いてみるけど、特に異論は無い様だった。それなら私とマスターはもう、休んでもいいか。パチンと指を鳴らし、上空を旋回していたフローを呼ぶ。

「フロー、ギルドまでお願い。ロイドは、付いてくる」

「きゆうー！」

「分かった」

フロアに乗った私の隣に、機械式の羽根を広げたロイドが浮かび上がる。はつきり言ってもう戦闘はしたくなかったからの行動だったのだが…

「え、何でみんな飛べてるの？俺飛べないんだけど」

空を飛ぶ程度もできない勇者がいた。MPそんなザコに有り余っているなら、自分で飛ぶくらいして欲しい。

「チツ。フロア、掴んで持つてく」

「きゅっ」

「ちよっ、ま」

「待たない。フロア、GO」

「きゅるるうー！」

下で何か騒いでるけど、そんなのは無視して私たちはギルドへと向かった。

◇

ペチペチとほっぺを叩かれる。そうだ、確か私は触手Ⅱサンに襲われた後ロイドに助けられて…

「ろいど？」

そう寝起きの頭で言いながら起き上がろうとして、鎖の鳴るジャラリという音がして起き上がるのに失敗する。え、鎖？周りが真っ白だからティアの世界の中なんだろうけど…

「おはようマスター。ロイドじゃなくてゴメンね」

「ん、おはよーティア。私、なんで拘束されてるの…？」

私のお腹の上に乗っかってるティアと目を合わせながら手足を動かしてみるけど、ジャラジャラ音が鳴るだけで満足に動かせない。

「ん、媚薬効果は抜けてるみたいだね」

「…やっぱり、あのぼーっとしてキュンキュンしたのってソレ？」

「間違いなく」

なるほど、あのまま意識を落とせなかったら、私はレーナさんと同じことをしてたのか…いやほんと危なかった。

「それじゃあ鎖解いて欲しいな、問題ないんでしょ？」

「ん、襲われる心配も無さそうだしいいよ」

その言葉を合図に、音を鳴らして鎖はどこかへ消えていった。鎖、鎖か：『刈り取る者』っぽいゴーレムでも後で作ろっかな。

「良い知らせと悪い知らせがある。どっちを先に知りたい？」

「うわあテンプレ。うーん、じゃあ悪い知らせからで」

私は好きなものは後に取っておきたい主義だからね。とりあえず大鎌もそこに落ちてるし、私の命に直接関わるような事じゃ無さそう。

「マスターが気絶してから今は大体30分。まだ街中の魔物の殲滅は終わってなくて、外から第二陣が迫ってる。現在転移門の機能は停止中で援軍はない。他の街も似たような襲撃を受けて、余裕は0だつて」

改めて聞くととんでもない被害だね。しかも第二陣かあ、こんなMPすっからかんの状態じゃどうなるものか：

「それじゃあ良い知らせて？」

「これだけの襲撃だったのに、死者は確認できてる限りでは0。街の結果は強化修復済み。マスターが考えてた魔力は、ほぼ無限に補給可能」

「その、ほぼ無限にっていうのは？」

確かにどれも良い情報だけど、最後のが妙に気になる。絶対それメリットだけじゃないでしょ。

「龍脈から直接魔力を吸収する。やり過ぎるとどっかで天変地異が起こるけど、私たち2人だしおそらく大丈夫」

「具体的にはどれくらい？」

「私とマスターが、5回MPを満タンまで補給したらもうダメ」

最高5回までリチャージが可能か：十分すぎるじゃないの。

「よし、それじゃあ私もMP補給してから出撃を…」

「まだしなくて良い」

「ふえ？」

その言葉に門を開けようとしていた手が止まる。でも、他の人はずっと戦ってるんでしょ？

「自分の功績を考える。少なくとも、あと30分は休んでて良い」

「ほんとう？」

「本当」

うーんそれなら…

「ちよつとだけやりたい事あるから、手伝って！」

「そうくると思つた」

ニヤリと笑つたティアには、何から何までお見通しにされてる気がした。

第4話 【流星群】

「マスター、あんなのいつ作ったの？」

「地球から帰ってきてからかなー。ロマンだし強いし」

あれから30分キツカリ。私は棺桶やらなんやら調整を終え、棺桶を除いたフル装備で門から出る。ティアが何を見たのかは秘密だけど、後はMPさえ補給すれば何時でも出撃出来るね！

「よし、とりあえず外に出て地面に触れて…」

「イオリちゃん！あなた無事だったのね？」

「ふえ？」

とりあえずギルドから出て、第二陣とやらにティアと一当てしようと思っていた私を、すごく心配そうな声が止めた。確かこの声は…

「ラナさん？」

「どうかしました？」

振り返ると、受付嬢のラナさんが疲れた顔で私達を見ていた。何かあったのかな？

「他の冒険者の人達は依頼を受けに来たりしてるのに、イオリちゃんだけ帰ってきた情報もクエストを受けて行った様子も無かったから心配で」

「あ、そういうことでしたら大丈夫です。色々あつて気を失ってましたけど、今はもうピンピンしてますもん！」

「それについては、私も保証する」

手をバタバタさせて元気をアピールしてる私に、ティアから援護射撃が入る。これは勝ったね。

「でも、イオリちゃん達つてあの空から降ってきた魔物をずっと相手にしてたんでしょう？それなのにたった1時間休んだだけでまた戦うなんて」

「魔力があれば怪我も疲労も治せますし…あんまり問題ないですよ？」

「それに、元々のスキルのおかげで怪我も少なかった」

やっぱり「やったか!」の法則は実在するんだね。一応事実を言っ

てみたけど、まだラナさんの顔は晴れない。

「そうじゃないのよ。イオリちゃん達みたいな小さな女の子が、戦いに出るのを見てるしかできない私が情けないのよ!」

「えっと、それは」

「それに、一部の冒険者とかギルドからイオリちゃんがなんて呼ばれてるか知ってる?不幸を運ぶ死神よ?」

え、何それ初めて知った。でもそうか、死神かあ…今まで街による度に何か問題とエンカウントしてるか起こしてるから、あながち間違っていないのかも。

「ついさつき、この騒動も死神の所為じゃねえのかって言ってた冒険者の人に何も言えなかったし、自分が本当にダメな人間なんじゃないかって思ってる…」

「うーん、そんな事言われるの慣れっこだしなあ」

「それに、今教えてくれたからむしろいい人?」

全くもってティアの言う通りだと思う。むしろそういう妬みとか恨みとかがないと人って感じがしないし…って、あんまり時間がないんだった。

「だからそんなに気にする必要はないと思いますよ!」

「それに、戦う力があるなら戦わないといけない」

役割分担ってやつだね。私は何かを作ったり戦ったりは得意だし好きだけど、会計とか受付嬢みたいな事はできる気がしない。できて家計簿くらい。

「それに、ただ後ろに守られてるなんて嫌ですし」

「え、何か言った?イオリちゃん」

「別に何も言ってるじゃないです!それに、一応私達Sランクの冒険者なんですよ?こういう時こそ働き時です!」

「だから何の問題もない」

頭の中でティアにやりたい事を伝え、せーのと声をかける。

「いってきます」

2人してクルリと背を向け、今度こそギルドから出る。さて、後はMP補給をしなきゃだけど…

「マスター、大鎌で地面を突き刺す。一瞬だけ繋げるから、奪い取って」

「りょーかい！」

私は大きく振りかぶって、刃を地面に突き立てる。私が両手で握ってる柄をティアも握り、カウントが始まる。

「5、4、3、2、1、0！」

「っ!!」

ティアが繋げたのは本当に一瞬だけだったのに、自分が内から爆発するんじゃないかってくらいに魔力が流れ込んできた。うえっぶ、これ色んなところに流さないと死ぬ…

「はあ…はあ…うわキツ」

「お疲れマスター」

肩で息をする私の肩を、ティアがポンと叩いてくれる。よしっ、MPもこれで全回復してるし…一丁私の2つ名の本領を見せてやりましょうか！

「ティアはどうする？」

「マスターと一緒に殲滅」

「ふふ、りょーかい！それじゃあやりますか！」

ギルド内では出す訳にはいかなかった棺桶を装備し、ティアと一緒に空へと駆け昇る。

「第二陣って、またあんなに多いんだ…萎えるね」

「経験値だと思えばいい」

まだ遠いけど、トカゲの様な龍達が先頭を走る魔物の大群が迫ってくるのが見える。それに嫌気がさすけど、そう思えば確かに気が楽かも。

「さーて、ティアしかこれは聞かないし…久しぶりに詠唱でブーストかけますかあ！」

「録音しようか？」

それだけは止めて。そう思いながら、大鎌を横に構えて私は詠唱を始める。

「《命吹かぬ煉獄に 遺る熾火は再燃する》」

私を中心に、正七角形状に巨大な魔法陣が同時に展開される。

「《焚べるは毒 禁を侵した者共に 誅を下す破壊の病》^{やみ}」

紫色に染まった魔法陣が、最初の7つからドンドン増殖していく。ここでティアが、私の魔法の制御に入ったのが分かる。そうだった、まだマカカジャの効果切れてないんだった：

「《毒霧と共に厄災は 海原の如く広がりゆく》」

中二くさい詠唱をした方が火力が出るって、やっぱり何かおかしいと思う。いや、こんな詠唱をパツとできる私も相当だけど。

「《祖なる紅雷迸り 大地の怒りが噴き上がる》」

街の空一面を覆い尽くして余りある量の魔法陣が一斉に光り、私とティアの目の敵の群れを完全にロックする。1万ちよいMPが消えるけど、さっきまでの八つ当たり！

「滅びろ《??》」

ティアと同時に謎の言語での詠唱を終え、最後に魔法の名前を告げて溜め込んだ魔力を解放する。次の瞬間、蒼穹の彼方から直径3mはある隕石が大量に魔物の群れに殺到する。因みに、今回は本当に大気圏辺りから降らせた。

砂煙の中50を優に超える流星群を受けてもまだ残る魔物の群れが、次の瞬間地面から湧き出た紫色の氷柱に巻き込まれ更に数を減らす。

「もってけダブルだあああつ！」

「ダブル？」

今まで発動を待機させていた魔法陣が一つ一つ収束し、《熾凍の咆哮》^{デイス・ファイ・ロア}と同じように途中で砕けた氷に乱反射しながら着弾する。元の魔法なら、ここでできるのは炎と氷の竜巻なんだけど…

「いやー爽快爽快！」

「やったぜ。」

赤熱して地面が大噴火を起こして火山弾などの火山噴出物を撒き散らし、紅い雷光が迸る場所を眺めながら清々しい気分が街に降りる。風向きはこつちじゃないからへーきへーき。

「ねえティア、私の2つ名って【流星群】だけどき…」

「災害とか天災とかの方が、似合ってる気がする」
すっかり静かになってしまった街に、私達のそんな言葉だけがよく響くのだった。

第5話 恋する乙女

召喚されたタナトスみたいなポーズでゆつくりと地面に降りている中、ガチャガチャと音を鳴らしながら道の向こうからタクがこちらに向かってくる。

「あ、やつほータク元気ー？」

「さつき振り」

「いや、元気ではないけど…さつきの魔法は蒼矢が？」

手を振って見たら、思ったより早く近づいてきたタクがそんな事を聞いてくる。流石に目立ったかな…アレ。

「そうだよ？あ、第二陣の敵は殲滅しておいたから」

「あ、うんそれはありがとう。でもあんな大魔法…蒼矢って本当に鍛冶師なの？」

「マスターは、キチガイ鍛冶師だから気にしても無駄」

キチガイだなんて酷いとティアに目線で訴えてみるけど、そもそもこつちを見てくれないから意味がなかった。そもそも、MPとDEXとINTを除けば平均より私って弱いらしいし。

だから、モーブみたいなのが二度と出ないように牽制するみたいな意味もあつたけど。

「まあ私の魔法の話なんて置いておいて、街の中の敵は今どうなってるの？」

「一応俺とロイド君を筆頭に、かなりの冒険者の人達が出てるけどまだ全滅させるには遠いかな」

「やはり、マスター達が取りこぼしたやつだから？」

確かに戦ってた感じからすると、Aランクは少ししかない代わりにあの蜘蛛みたいな大量のSランクモンスターと、リーダー的なSSランクの魔物がいた。SSSも数体いたけど、それは全部責任持つてコロコロしたから落ちては無いはず。

「因みに、出てる冒険者の人達ってランクは？」

「CからAが殆どで、Sランクが蒼矢達を含めて6人」

「どうりで、終わらない訳」

「取りこぼしの大半がSランクだからね…」

あはは…と私は苦笑いを浮かべる。私のところで30は取りこぼしてるから、ロイドとフロアの担当も含めたら100は少なくとも街に潜んでることになる。

「正直休みたかったけど、こりや休んでる暇無いね…」

「私とマスターも、街中の敵の殲滅に移る」

私は大鎌を握り直し、ティアは杖をしまつて大鎌を取り出す。あ、ちゃんと鋏状態で使ってくるくれるんだ。嬉しいからあとで釘バツトとマラカスもあげよ。

「一応言っておくけど、さっきみたいな魔法は街中じゃ使わないでね？」

「当たり前」

「使わないって決めてるから、魔物が降ってきた時にあんな程度の魔法しか使えなかったんだよう」

頬を膨らませて半眼でタクを睨む。流石に私だつてそこまで馬鹿じゃあーりーまーせーんー。フロアは今回は出したら一緒に攻撃されそうだから出せないって事だつてちゃんと分かってますー。

「あとタク。あの私に突っかかってきた忍者っているじゃん？」

「うん、今は確か地下の営倉にいるね」

「手は足りてるから、早く何とかしてこないとダメな気がする。私に突っかかってきた時点で色々壊れて…じゃないか、不安定になってる部分があったから自分の好きな人にまで敵対されたら多分狂っちゃうよ?」

思い出すだけでムカつくけど、アレでも一応元クラスメイト。私だつてれでいなんだから、あれ位は大目に見ないとね!多分おかしくなっちゃったのは、こんな状況にいつまでもいたせいでしょ!

「それに、あなたはどちらかと言えば何かを守る方が良さそう。攻撃はアタッカーに任せる」

「2人がそう言うなら行くけど…なんでそんな事予想できるの?」

「誰も味方がいない1人の状況になった事があるし、暗い牢屋に入れられた経験もあるもん。それに…私も好きな人いるし」

空いてる左手で、奇跡的に無事だった四葉のクローバーの髪留めを撫でる。流石幸運の魔導具だね。正直頑張ればロイドの現在地も分かったりするけど、べ、別に私ヤンデレじゃないし。私と深く関わってる以上、どんな危険に巻き込まれるか分からないから心配なだけだし！

「お、おう。とりあえず、助言通り少し話に行ってみるよ。けど、俺の事を好きとか信じられ無いんだけど…」

「タク、昔からおもってたけどさ…いい加減自分が『え、なんだって?』が常用できるレベルの鈍感だって気づきなよ」

「はよ行け」

私のため息と一緒に、ティアの回し蹴りがタクにヒットする。ズドムって音をたてて吹き飛んで行ったけど大丈夫かな…

「よしっ、それじゃ楽しい楽しい素材狩りの時間と行きますか!」

「マスター、そう言えば私も結構素材あるから、あとであげる」

「ヤッター! ありがとティアー!!」

後に、髪留めを触ってた時のマスターまじ乙女とティアは語ってくれた。映像と音声付きで。恥ずかし過ぎるからやめて、ほんとやめて。て。

◇

ガチャリと入り口の鍵を開け、水の滴る音のみが響く薄暗い地下に俺は踏み込んでいく。物理的に尻を叩かれたから一応来てみたけど、正直今もまだ信じられない。

「というか、ここって営倉って言うより普通の牢屋だよね…」

それに確か、暗いところに閉じ込めて水の音だけ聞かせる拷問があるってどこかで聞いたような聞いてなかったような…

「っと、確かここだっけ」

牢に架かっていた錠に魔力を流して開け、まだ暗闇に目が慣れてない俺にはほぼ真っ暗に見える牢に入る。実際何も見えないけど…間違っていないよね? 場所。

「鈴華さん、いる?」

「天上院…くん?」

とりあえず呼びかけてみると、奥の方から半分くらい目からハイライトが消えてる鈴華さんがフラフラとしながら現れた。だけど、なんだろう、何か…物凄い違和感を感じる。

「鈴華さん、何かあったの？」

「ええ、少しね。でも天上院くんの事を思っていたら特に苦じやなかったわ」

「ふあっ!？」

何かがおかしいと思つて解析を使うけど、ステータス上は何も変な部分はない。いや、本当にこれどうなってるの？

「それで、何か地上で起きてるみたいだけど私は何をすればいい？私、天上院さんに頼まれたならなんでもできる気がするわ」

え、ちよ、ほんとどうなってるのこれ（2回目）ちよつと凄く…怖いです。コツソリ太腿を抓ってみるけど普通に痛い、夢じや無い、生きてる証拠だよ！（混乱）

「と、とりあえず今はまだここにいてくれるかな？俺の独断じや鈴華さんを出してあげる事はできないし…」

「分かったわ。天上院くんがそう言うならばらくここで待つてる事にするわ。他の奴らなんて、全て滅べばいいのに」

「そ、それじゃあまたね」

最後のボソツと呟かれた言葉を聞かなかつた事にして、できる限り動揺を押しえ込んで返事をして牢から出る。もう一度鍵をかけておく事も忘れない。

…ほんと何あれ？（3回目）

第6話 一先ずの収束

「さて、次の素材はどこでしよなーっと」

ティアやタクと別れてから1時間程、新たに数体のSランク素材を確保した私は、ルンルン気分で探査のための魔法を発動させる。いやあMPがあるっていいね！

「えっと、残りが19匹で内10匹が戦闘中。ロイドとティアが新しい目標に向かって、私から1番近いのは…ってこっち来てるう!？」

魔法を切って慌てて私は戦闘態勢をとる。まだ魔法で見た限り距離はあったけど、右の方からバキバキと建物を壊す音と何やら咆哮の用な音が聞こえてくる。

反応からしてSランクだし、大鎌を大上段に構えて咆哮の主が出てくるのをじっと待つ。

「私を狙ったのが運の尽きだね。美味しいなら夜ご飯に、無理なら素材にしてやる」

私の右前に立っていた建物を踏み壊しながら現れた魔物に、ろくにその姿を見もしないままギロチンの様に大鎌を振り下ろす。特になんの抵抗もなく大鎌を振り切り、血の雨というかなりスプラッターな光景の中私は気付く。

「オリハルコンティラノって、懐かしいなあ」

結界に守られた私以外が赤に染まっていく中、チョンパしたオリハルコンティラノの首を見つめる。とりあえず全身のオリハルコンはあとで回収させて貰うとして…

「確かかなり美味しかったし、魔眼を持った魔物って私あんまり知らないんだよね」

私ってこの眼を食べたおかげで今の魔眼になったけど、ロイドもこれ食べたらか何か目覚めたりするのかな？シヨゴス丼く旧支配者の切り身を添えてく的な冒瀆的な料理を作ろうと思ってたし、ついでに出してもバレないよね？

み、見た目は普通の海鮮丼だし出来るだけ美味しくつくるよ！シヨゴスは焼きます（重要）

「つて、こんな事考えてる場合じゃなかった。早く血をどうにかしないと魔物が寄って……あれ？このままでよくない？」

とりあえず頭は仕舞っておくけど、血抜きと敵集めが同時にできるって素晴らしいくない？どうせ街はほぼ壊滅してるから、被害も土壌くらいしかないし。

「よしやろうそうしよう」

◇ こうは言っても、待つ事しかできないけどね！

「ふっふーん、大量たいりよー♪」

魔法から反応が全部消えたのを確認した私は、鼻歌交じりにギルドへ戻っていく。さっきの触手みたいな事があっても嫌だから、ギリギリまでフル装備で移動する。

「これで一応この街は落ち着いたとして、復興なんてしててもまた襲われるだけだし……これからどうするんだろう？」

「さあ。でも私は、早急な原因の排除が最適だと思う」

「うひゃあ!?!いつからいたのティア？」

突然隣から聞こえてきた声に驚きながらも、一応ティアに聞いてみる。ま、まあティアが突然隣に出てくるのはよくある事だし。

それにしても原因の排除か……いいかもしれない。

「少し前から付けてた」

「アツハイ」

ティアのストーカーめいた行動は一旦置いておいて、棺桶と大鎌だけは装備解除しておく。普通の人が発狂するとかシャレにならないしね。

なんて事を思ってる間に、私達はギルドに到着する。

「あ、ロイドー」

「はあ…」

続々と戻ってきてる冒険者の中にロイドを見つけた私は、手を振りながらパタパタと駆け寄っていく。ティアの呆れ返った用なため息なんて知らない。

「お帰りー。怪我しなかったー？」

「ああ。今更あんな奴らに負けはしないさ」

「えへへ、よかった」

「イチヤイチャNG」

そんないつも通りの、けどこの場にはふさわしくない光景を作り出してた私たちにティアから喝が入る。うう…

「むう、じゃあタクかアルさんじゃない方のギルマスさん見なかった？ちよつと提案というか聞きたい事あるんだけど…」

「いや、俺も今戻ってきたばかりだから分からないけど…今ギルドから天上院さんは出てきたな」

「ふえ？」

そう言われたから振り返ってみると、確かに今タクがギルドから出てきているところだった。何故か凄く疲れた顔をして。原因は…まあいいか。

「ロイド、今から私この状況をどうにかするちよつとした作戦を提案しに行くんだけどね。もしそれがOKされたら、私の作戦に乗った人はみんな下手したら死んじやうくらいに危険な目に会うんだけど、一緒に来て…：…くれる？」

自分の声が不安に揺れているのを感じながら、恐る恐るロイドに聞く。一応コレってロイドがいるのを前提にした作戦だから、もし嫌って言われたら一から練り直しだけど…

なんて事を思ってる私の頭にポンとロイドが左手を置き、優しく撫でてくれる。あうあう…

「今更行かないなんて言うと思ってたのか？それに恋人だけ戦いに行かせて、自分は何もしないなんて男じゃないだろ？」

「えう…あ、ありがとう」

「だから、イチヤイチャNG」

私とロイドの間にティアが割って入って、その両の手でズイと私達を引き離す。た、確かに沢山人がいるしこっちの方が良かったよね！「野生のナデポとか初めてみた…で、ラブコメしてるところ悪いけど作戦ってなんだったの？蒼矢」

「な、なななナデポちゃうわ！」

とりあえずジタバタして否定してみるけど、傍目から見たらのれただの照れ隠しだね…うん、事実そうだから何も言えないけど。

「ふう…うん。作戦、作戦ね。まあ多分、タクとかティアならすぐ分かるだろうけど」

私の考えた作戦はティアが言っていたのを基にしてる。つまり、私が知ってる限りの、確実に《色欲》っぽいスキルの効果を受けない人全員での相手の本拠地への強襲。

「作戦名はズバリ『鋼鉄の七人』だね!」

ズビシツとタクに指を指して言う。ん?でも確か原作だと…

「あ、やっぱり死亡フラグがすごい事になっちゃうから作戦名はなしで」

なんだかんだでいっつも、良い所では決まらない私なのだった。

第7話 戦力集結待機中

「まあ作戦名はいいとして、大体内容は予想できるけど内容は？」

疲れ切った顔がさらに酷くなったタクが、頭を押さえながらそんな事を聞いてくる。どんな作戦かって、そりやあ勿論…

「確実に《色欲》のスキルの効果を受けない人を集めて、私かティア、もしくはタクの転移で原因の海堂がいるって言う王都を強襲。そのまま邪魔は全部蹴散らして海堂を無力化だね」

「無力化っていうのは…？」

「可能なら、私かティアが記憶を全部喰らう。無理なら…分かるよね」
希望論で言えば、全員で海堂を腕なり足なりを腕いでも行動不能にしてティアが暴食で記憶を食べちやつて地球へ強制送還が目標になる。もしそれが出来ないようなら…地球に帰れる人が減るだけになる。

「まあそうだろうとは思ってたけど…誰がやるの？俺は誰かを手にかけた事なんてないんだけど？」

「大丈夫、私も直接はない。だからそれはアルさんとかに頼む」

ティアは考えるまでもなくてロイドはどうか分からないけど、相も変わらず私は直接誰かを手にかけた事はない。誰かを斬り裂く感触も、怪我のせいで血もグロいのも見慣れてるけど徹底して人には手を出してない。勝手に大鎌を触って自滅した誘拐犯は知らない。

「大鎌使ってる上に、血生臭くてあんなに躊躇ない攻撃が出来るのに蒼矢って…」

「なに、文句あるの？」

「いや、ないかな。でも強襲するメンバーがなあ…」

はあ…とタクは大きいため息を吐く。あれ、もしかしてこれ仲直りできなかったパターンとかだった？そう思って頭にハテナマークを浮かべる私に、結構重大な変化を教えてくれた。

「柊さんがヤンデレ化してた。何があったのかは分からないけど、目からハイライトが消えてヤンデレ化してた」

「…やったね！タクの言うことならなんでも従ってくれるよ」

「マスター、白目剥きながら言っても説得力皆無」

そんなティアの声で私はハッと現実に戻ってくる。ち、違うし。ロイドが違う女の子と話してるのを見たりするとイライラするけど、私ヤンデレじゃないし。色々振り回すタイプだし。

「で、その作戦は誰が伝えるの?」

「勿論タクだね」

私は今他の街がどうなってるかも分からないし、信用もないから提案とかはタクの方がいいに決まっている。というか、結構人がいる中でしていい話だったかな、これって?

「はあ、了解」

「いてらー、がんばー」

タクから疲れ切った人特有のオーラが出てるけど、そんなのは知ったことじゃない。トボトボとギルドに戻っていくタクなんかより、自分のお腹の減り具合とさつきから聞こえてくるお腹のなる音の方が重要だ。

「ふあう…疲れた。でもコレやらないと寝るに寝れないし…あ、そうだ。ロイドロイドー、ちよつとこつち来てー?」

「えつと、もう大丈夫なのか?」

眠いことを意識しちゃったせいか、寝ぼけ始めた頭でロイドの事を呼ぶ。まあ、多分ここには奥様方がいるから私が倒れても大丈夫かな。

とりあえず、しばらく魔物も来なそうだし戦装束から普段着に戻る。

「えへへく枕確保。じゃなくて、多分私倒れるからそしたら布団までよろしくね?」

「えつと、何するんだ?」

大型のコンロっぽい何かの上に、私2人分はある太さの寸胴鍋を置き、隣に適当な食材を出しながら私は言う。

「お肉も野菜も腐るほどあるし、調味料は戦いが終わったら報酬金で買い占めればいいとして。炊き出しだね!!流石に1人じゃ出来ないので、出来る人は手伝ってくれませんか?」

私が作るのは勿論豚汁…とりたいけど、味噌は高いし量があんまりないから嫌だ。だから、具沢山つながりで適当にポトフでも量産しようと思う。何故かコンソメはあるからね。

そんな適当な事を考えてる内にも、今まで黙っていた奥様方が結構集まってきたくれる。

「あ、ロイドもティアも手伝ってね？」

「えっ」

◇ お昼時は少し過ぎちゃったけど、頑張るぞーおー!!

「すう…んう…」

「まさか本当に倒れるなんてな…」

「仕方ない。今日は、色々あり過ぎた」

宣言通り寝てしまったイオリを背負っている俺に、イオリの世界への門を開こうとしているティアさんがそう答える。宿とかも無いから道の隅っこだから、邪魔にはならないだろう。

「確かに、イオリは働いてる量が異常でしたね…」

「そう、だからマスターは休むべき」

降ってきた頭がおかしい量の魔物を半分吹き飛ばし、その残りの1/3も倒している。その上、取りこぼした魔物の殲滅戦に参加してさつきまで料理をしていた。これはもう、地球で言うカロリーシって奴になってもおかしくないと思う。

俺がもう少し頑張れば負担を少しは減らせたのかもしれないけど

…

「大丈夫、ロイドは十二分に働いた」

「そう…ですかね？俺としてはまだ働けたと思うんですが…」

「マスターも私も、ロイドが残党狩りで1番働いてたのを知ってる。だから、褒める事はあっても貶す事はない。それに」

俺の背負ったイオリを見ながら、ティアさんが言う。

「ロイドは、マスターがそのままでいれる数少ない1人。だから、そういう事をする奴は私も許さない」

「そうなんですか」

残りの人はリユートさん達かなと思っていると、空中にパチリと稲妻が走って小さめの門が顕在化する。

「入る」

「えっと、はい。了解です」

そう言つて入つていくテイアさんに続いて、俺も幾度となく潜つた門の中に入つていく。そして相変わらず庄巻の光景の中に、かなり場違いな生活スペースがあるのを確認する。

「とりあえずイオリはここに寝かしておくとして…」

生活スペースの中に、案の定敷いてあつた布団にイオリを降ろす。これでやる事は終わったし立ち去ろうとした時、右手の裾をイオリがギユツと握つて離さないことに気づく。

「やあ…」

「仕方ない、マスターが満足するまで諦める」

俺のちよつとした疑問に、先回りしたような答えがテイアさんから返ってくる。そういえば、確かこの人って心を読めたんだっけ。

「どうせ明日辺りから、生きるか死ぬかの事ばかりになる。今の内にゆつくり休んでおくといい」

「それじゃあお言葉に甘えますけど…テイアさんは休まないでいいんですか？」

「私は精霊、魔力さえあれば大抵どうにかなる。ロイドは、手でも握つてあげてればいい」

そうテイアさんと話をしていると、手をグイと引っ張られイオリに抱きかかえられてしまった。色々問題なので、義手の触覚を急いでOFFに変更する。

「訂正。私が見張ってる、ロイドもそこで寝るといい」

そう言つたテイアさんの声と、謎の魔法陣を最後に、俺の意識は眠りに落ちていった。

第8話　ねえどんな気持ち

「ねえどんな気持ち？マスター、今NDK？」

「恥ずかしくて死にそう」

さつき目が覚めたら布団にいたのはいいんだけど、ロイドの手を抱っこしてたせいですごく顔が近かったし、寝てたし、同じ布団だったし！

「「恥ずかしさの余り、起きたロイドをまた気絶させてNDK？」」「
「分身作って回りながら、3人で言うのとかやめてよお…」

気絶させたロイドを布団の上にそのままにして、武器庫のあたりで体育座りして顔を埋めてる私の周りで、3人のティアがぐるぐる回りながらNDKしてくる。あくまで幻影だからいいんだけど、声とかは三重に聞こえてくるからたまつたもんじゃやない。

「それに、ロイドを離さなかったのは、他ならぬマスター。私が怒られる筋合いはない」

「うう、それは多分そうだけどさあ…」

「大丈夫、寝顔は幸せそうだった」

そう言っつて顔を上げた私の目の前に、幸せそうな寝顔を晒してる私の写真が差し出される。明らかに空中からの撮影だし現像が早すぎるけど、そんなのはいつもの事だから気にしない。けど、

「ファイアー！」

「残念、それは幻影。燃やしても無意味」

今までのならいいけど今回は流石に許しちやおけない。こんな写真、残しといてたまるか！

「サンダー！」

「それも偽物。当たらないってNDK？」

「う、うう！フリーズドライブ！」

「ふっ、データは別の場所にある」

とりあえず適当な魔法を乱打して写真をどうにかしようとするけど、やっぱり意味がなかった。本物は撃破したけど、ふえ…

「ぐすっ、うう、ひっく」

「ちよ、マスター、何で泣く。謝るから泣くのはやめて。ついでに私への魔力カットしないで、死ぬ、死んじゃう。ギブ」

「そうだよ、ティアって忘れそうになるけど邪神だもんね!!人の心に土足で踏み込んで遊ぶの大好きだもんね!!どっかの霸道神、sとか魔神よりはマシだけどね!!」

「そう心の中で毒突きながら、私はキリキリとティアに供給する魔力を絞っていくのだった。泣きながら。」

◇

「あのまま泣き疲れて武器の山で眠った翌朝、私は揺すられる感覚で目を覚ました。」

「起きてマスター、魔力のない私じゃ、どうやってもここから出られない」

「流石にここを壊す訳には行かないからな」

「そだね、ここ壊したら中身が溢れ出て確実に圧死するからね」

「多分私が死んじやったりしてもそうなるんだろうけど、ここにある武器防具素材食材その他諸々が溢れ出て、大災害が起こること間違いなしだと思う。自主規制して封印中の諸々とか、解放されたら実際危険。」

「マスター、ロイドいるのに落ち着てられるんだ。あと魔力p1z」

「うん、一周回って落ち着いたから」

「ティアに魔力を送りながら頷く。だってティアが見てたから変な事にはなっていないだろうけど、その、い、一緒の布団で寝てたわけだし。開きなおんなきや落ち着くわけあるか! (マジギレ)」

「それに、とりあえずまあ多分そろそろおそろくきつとタクが、作戦関連の話をつけ終わってるだろうから外に出ないとねメイビー」

「深呼吸でもして一旦落ち着いた方がいいと思うぞ?イオリ」

「うん、そうする」

「ちよっと思いだしただけで言ってることが支離滅裂になってる辺り、本当にどうにかしないとイケないかもしれない。という事で、一旦大きく深呼吸する。五感超化なんて切ってる、当たり前。」

「ふう……よし!それじゃあ行きますか!」

ほっぺをペチペチと叩いてから、召喚した門をバーンと開け放つ。うん！まだ恥ずかしさは抜けないけど、普通に話せるくらいにはなった！

「で、ようやく出てきたけど、こっちが幾ら呼びかけても反応しなかった理由はちゃんとあるんだよね？蒼矢」

そう思っただけで門を開いた場所に待っていたのは、額に青筋を浮かべて仁王立ちしたタクだった。ちよ、ちよと怖いから隣に立ってるロイドと手を繋ぐ。

「勿論！何てつたって、寝てたから！」

背後にドンと効果音が出そうな感じて私は言う。だってしようがないじゃん、幾ら私だって疲れるんだもん！

「俺が他の街に連絡をとって、アルさんとかに作戦の説明をしてOK貰って、そのための準備に駆けずり回ってた間寝てた理由は？」

「理由なんて決まってるじゃん、ただひたすら疲れたからだよ。ロイドはまあ…うん、私が巻き込んだみたいなものかな」

「まあ、あれはそうとしか言えないよな」

うんうんと2人で納得する。タクは何というか、諦めたような顔をしている。この私の言い分だと、ティアは何も理由がない事になるけど…

「私はマスター達の護衛。不埒な輩が出ないとも限らない」

「あーうん、まあいいや。とりあえずさつきも言ったけど、作戦はOKを貰ってきたよ。次こんな事されたら、多分耐えきれずに街は全滅しちゃうだろうからね」

「よかった、その意見は一致してて」

そう呟いて私は廃墟というか、ほぼ全てが瓦礫の山になってしまってる街を見渡す。最善…だったかはわからないけど、あの時の全力を尽くしてこれなんだから、絶対に次は保たないと思う。

「それで決行日なんだけど、」

「その前に少し聞いていいか？」

タクが決行日の事を移そうとした時、隣のロイドが話に割り込んだ。聞きたいことってなんだろう？

「他の街の被害ってどうなってるんだ？リフンは全員が即座に反応出来たから、死んだ人も洗脳だったか？それにかかった人もいないが」
「アルディートさんが担当していた街はここと殆ど同じ状況だったけど、他の街は死者・重傷者多数。それ以外の人達も軽傷者とかトラウマになった人が多いし、寝る場所と食料が不足してて不満の声が聞こえてきてるそうだよ。魔物の殲滅はどこも辛うじて終わってるらしいけどね」

うわあ何その状況。予想通りだって言えばそうだけど、流石の私もそこまで配れる程の食料は無いからなあ…：竪穴式住居みたいなのがいいなら幾らでも作れるけど。

「あと、各街の防衛の中核を担っていたSランクの人達は、大なり小なり怪我はしてるみたいだけど全員生きてるらしいね。だから、ロイド君の両親は元気だと思おうよ」

「それなら安心しました」

「よかったね、マスター」

「なんで私に振るの!？」

ニヤニヤとしたティアに、即座に取り出したハリセンを振り下ろす。そんな私達を見てタクが丁度胃がある辺りを手で押さえる。

「はい、胃薬」

「ありがとう蒼矢、なんだか受付嬢の人達の気持ちがあつた気がするよ。で、決行日とか参加者とかの話に移っていい?」

「もちろんいいよー」

サムズアップする私を見て、タクの手に込める力が強くなる。いまふと思っただけけど、シヨゴスってお薬飲め〇ねみたいに使えないかな?

「で、決行日だけど明日だね。まあ、これは蒼矢達が寝てたのが悪い」

「私はいつでも戦えるよ?」

「マスターに同じく」

「俺も特に問題は無いな」

「みんな戦闘狂かよ…」

寝たから疲労も回復したし、私製の武器防具はかなりの割合で自動

整備の機能が付いてるし。まあ、本人の手で手入れするのが1番なんだけどね！あと、私は断じて戦闘狂なんかじゃないよ。

「それで参加者は探してみたけど合計7人になったよ。元ネタと同じ人数だから正直不安だから、1人残って貰うけど」

「それで、メンバーは？」

「俺、鈴華さん、アルディートさんの元々の人間界組。蒼矢、ティアさん、ロイド君の転移組の6人だね。先生には念のため街に残ってもらう」

「……ん？今何か聞き捨てならない事が聞こえたような気がする。」

「質問。あの先生は戦えるの？」

「持つてる七元徳のスキルが防衛向きだから、防衛戦なら凄く強いよ」

「そう、ならいい」

先生って強かったんだ…かなり前から無闇矢鱈に解析は使わないようにしてたから分からなかった。

「他に質問はある？」

「作戦始まる前の、集合場所と時間は？」

「元転移門前に、夜明け頃に」

「ん、了解っ！」

なんとなく敬礼をしてみる。なんだろう、ごっこ感がしてワクワクする。

さてと、他の街のそんな状況を聞いちゃったからご飯食べるのは門の中として…そしたらやる事は隠し玉の調整くらいかな？

第9話 開戦の号砲

あれから1日、諸々の調整とか準備とかをしていたらあつという間に時間は経って、あつという間に決行日になっていた。

「かなり重大な作戦だつづうのに、参加者の半分は子どもつてのはどう言う事だよ」

「それ、私も見て言ってますよね？」

1番被害が少なかったらしいリフンの転移門前、集まったメンバーを見て笑いを堪えながらアルさんが言う。見送りとして来てくれている先生は、子どもの範囲に自分も入っていて不服そうだし！

身長でみるなら、私・ティア・ロイド・先生は完全に小中学生レベルだし、タクとその隣に立つてる柊何某も高校生だ。みんなフル装備だからか、コスプレしてるだけの様にも見える。

見た目も中身も大人な人がアルさんのみってどう言う事だつてばさ。

「アルデイトさん、これでも私は20歳は超えた大人ですよ？」

「それは分かってるんだが、どうにも身長のせいだな」

そう言う先生の姿は、最初期の私みたいにかなり軽装だ。このメンバー、ティア以外まともな後衛がないけど大丈夫なのかな？

「確かに私の背は低いですけど」

「まあ、全員実力は確かなんだ。気にする事はねえよ」

ガハハと言った感じでアルさんが笑う。そのおかげで、緊張しきつた空気が少し和らいだ気がする。

「で、まあ緊張も解けたようだし本題だ。まずはこんな荒唐無稽な作戦の為に集まってくれた事、感謝する」

誰も口を挟まず、ジツとアルさんの話を聞く。もしかして先生とアルさん、こういう状況になるのを狙ってたりした？

「やる事自体は王都に転移、全ての元凶を倒すつてだけの簡単な作戦だがいかんせんこの人数だ。幾らお前らが強かろうが、全員が無事に帰つてこれる確証はない」

改めて他人の口から言われると、なんだか結構怖くなる。自分の考

えが元になつてゐる戦いで、ロイドとかティアとかが死んじゃつたらつて思うと……ううん、そんなの想像もしたくない。

「ねえロイド」

「どうかしたか？」

小声でロイドの事を呼んで、その手をきゅつと握る。握り返してくれたし、やっぱり手を繋ぐのつて凄く安心する。

「私から巻き込んだりした事だけど、一緒に帰って来ようね」

「むしろ巻き込んでくれなかったら怒るぞ？ それに一緒に帰って来るのは当たり前だ」

「えへへ」

一旦布団の事は水に流して、生き死にかかった戦の前に最後の日常成分を補給する。これで私はあと10年は戦える（確信）

「で、そのバカツプルは話聞いてたか？」

「勿論です！ これからタクの転移で王都の近くに行つて、私とロイドが防衛用に二重になつてゐる結果を破壊、そのままカチコミですよね？」

「まあ、簡単に纏めるとそんな感じだな」

ふふふ……思考を2、3個分割するくらい、本気の私には造作もないのだよ。多少アホさ加減が上昇するけど。

「それじゃあお前ら、準備はいいか!!」

「「「はい!!」」」

みんなの声が重なる。改修した装備にこういう仲間っぽい行動。それらのお陰か、私は感覚が今までの中で1番鋭くなつていくのを感じる。

「タクミ、行くぞ!!」

「はいー」

「ティアはサポート入つて！」

「了解」

集まつた6人の足元に、大きな魔法陣が二重に広がる。自分が溶けていくような感覚に若干SANを削られながらも、段々と視界が街中から草原へと切り替わつていき、今完全に切り替わつた。

「どうやらここは、王都からほんの少ししか離れていない高台らしい。」

「あれが王都、あと結界……」

そこから見えるのは、よくある様なファンタジーなお城とその城下町。そしてそれらを守る様に展開されている透明な結界。それらが私の左眼には、何もかもが黒に染まった汚物の溜った爆発寸前の風船の様に見えるのに、右眼にはただの日常の風景にしか見えないせいで、凄く気持ち悪い。

でも、ちゃんと役割は果たさなきゃね！

「アルさん、ティア、結界の核になってる部分はどこかわかりますか？」

「知らん。だが、一度結界をぶち壊せば最低1時間は復旧しねえ！」

「瘴気が濃すぎてわからない。でもこの人と意見は一致」

「了解です!!」

そう返事をしながら、私は背負った棺桶をパージして地面にめり込ませる。そして全ての棺桶に付いてる窓の内、一つだけ開いて光が溢れ出て私が作った中でもとびきりヤバイ装備の一つを形作っていく。

「つくづく嬢ちゃんは規格外だな……」

「規格外じゃない、キチガイ」

そんな事を言われながらパージした棺桶の代わりに顕現したのは、サブアームなどの付いたバックパック。そこから左右に巨大な物が形成されていく。

左肩付近に私の背と両手を広げた幅ほど下を向いたの巨大な円柱型のジェネレーター。右肩付近には、折りたたまれてなおジェネレーターと同程度の大きさを持つ、銀色のタンクが沢山付いている長大な主砲。

詰まる所、全てを焼き尽くす暴力オーバードウエポンの1つだ。弾は作りたくないから核弾頭じゃないけどね。

「あんまり関係なさそうな私だけどさあ、1回海堂に殺されかけてるから仲間外れはやだよ。私も入れてもらわないと」

私の魔眼に酷いノイズが走り、普段なら攻撃予測などが表示される

部分に全く別の文字が浮かび上がる。

「『不明なユニットが接続されました』」

「『魔力回路システムに深刻な異常が発生しています』」

「『直ちに使用を停止してください』」

折りたたまれていた砲身が組みあがり、バイポッドつて言うのかな？ その部分が地面に深く減り込み、銃身を支えていた巨大なアームが今度はバランスを崩しそうな私を支える。さらに、左肩のジェネレーターが上向きになり、銃身と一緒に展開してチャージを始めて……

「蒼矢、本当にそれを撃つ気!?!」

「いや、ちよつと私も不満が溜まっててね」

獣人界じゃ殺されかけた上に魔物の大群が襲ってきたし、多分魔界でロイドが右手を無くした原因もそうだし、デート邪魔されたし。控えめに言っただけ死ね。

「マスター、海堂以外は殺っちゃダメ」

「大丈夫、それくらいは分かってる!」

青白い光を纏っていた主任砲(仮)が、黒い煙を吹き上げる。チャージ完了、最初にパージした棺桶の内側には誰もいないし、ずっとハイライトのない目でニヤニヤしながらタクの隣に立ってる柊何某が怖いだけで何も問題は無し!

「これが開戦の、号砲だあああつ!!」

私が引き金を引いた瞬間多葉室砲が火を噴き、装填していた弾が閃光と化して王都に向けて発射された。

第10話 王都突撃

私が放った青い閃光と化した砲弾は第1の結界をそんな物は元々無かった様に粉碎し、第2の結界に当たった瞬間想像を絶する大爆発を起こした。

「あちちっ」

いつの間にか異常に熱されてたグリップから手を離す。すると、視界のノイズが消え去り機械的な音を立てながら再びこの馬鹿げた武器が折れたたまれていく。というか、こんな状況なのに誰も驚いてない事にビックリだよ。

「…王都、壊れてないよね？」

大爆発の所為で発生した爆煙と元々のその場に漂っていた気持ちの悪い黒煙が立ち込める中、1番最初に声を発したのはタクだった。

「こんなので壊れる様じゃ、王都としてやって発したのは行けねえよ」
「まだ見えないけど、多分壊れてないよ」

そんなタクの楽観的な意見に、アルさんと私が即座に否定する。全力で撃ち込んだにしては試し撃ちをした時に比べて爆発が小さかったもん。

「それに、ここからが本番。気を抜かない」

「な、なんだよこの、気配」

ティアの言う通り、黒煙の中私の吹き飛ばした結界の穴からあのレプリカクトウルフと同じくらいの気持ち悪い雰囲気、こちらを見つめているのを感じる。それも単体ではなく、大量に。

装備した時と逆回しの様に元の装備に戻った私は、少し下がってティアと一緒に後衛に回る。持ってるのが杖じゃなくて大鎌なのは愛嬌として許してほしい。アタッカー1人タンク1人遊撃2人だからね、今回は私が近接戦しに行ったらティアでもサポートが追いつかないもん。

「《エナジーバリア》《ライフフォース》《ビーストスピリッツ》《マジックフォース》《プロテクトマインド》《マジックバリア》《ピオリム》《スクルト》《リジエネガ》、そしてめに《ゴッドブレス》！」

「来るー！」

私が滅多にやらない強化魔法の乱発を終えた途端、ティアの忠告が終わるより速く王都の方向から極大の毒々しい紫のビームがこちらに飛んできた。

因みに魔法の効果は、前から物理被ダメ1/4・HP上限上昇・STR上昇・MP上限上昇・MIND上昇・魔法被ダメ1/4・AGL上昇・STR上昇・DEF上昇・リジエネ・命中率&回避率上昇だ。「そんな見え見えの攻撃、効くかよっ!!」

「武技・イージスシールド！」

魔法で攻撃を逸らそうと思った瞬間、アルさんが剣を振り下ろして光線が真っ二つに別れ、その別れた光線をタクの武技が完全に左右に逸らした。そのせいか王都の方向から感じる異様な雰囲気はグッと増し、自慢の攻撃を無傷でやり過ぎされたのに怒りを感じたのか、この攻撃を行ってきた主が姿を現す。

未だ晴れぬ黒煙からまず見えたのは巨大な眼、こちらを敵意を込めて見据える魔眼。次に見えたのは杖状の大量の触手。すなわちその魔物は…

このロリコンどもめ
「バックベアードって…狙ってるの?」

「マスター！アレだけじゃない!!」

ティアからの叱責でほんの少し緩んだ私の気持ちに戻った。瞬間王都を覆っていた黒煙が内から弾け飛び、現れたのは数多の魔物。桁違いな大きさのムカデ、骨だけの龍、明らかな悪魔、ちくわ大明神、それら全てが私達に向かって殺到する。ちよつと待って誰だ今の…まあいいか。

この人数でこの場所なら、例えこの前街に降ってきたよりも多い、人間界の魔物を全部持ってきたんじゃないかって勢いの魔物でも時間さえあれば殲滅手段は用意できる訳で…

「ロイドお願い!!」

「頼んだよ鈴華さんー！」

飛び出すロイドと柊何某を見ながら、背負ったままの棺桶から1つの武装を呼び出す。6つあるうちの、まさか作ってみたただけだったこ

れを使う羽目になるなんてね。

「ティア、準備は？」

「完了」

「アルさんからokは？」

「貰った。寧ろ推奨」

ティアからの返事を聞き終わると同時に、私の眼に再び酷いノイズが走り例のアナウンスが流れた。頭痛がしてきたけど、今回ただだからいいでしょ。

「タク！ロイド達がやった後、私を先頭にして王都に突っ込むよ！」

「私が魔法で、みんなを加速させる。結界維持」

「げっ、了解」

タクの返事と同時に、飛び出していった2人が大きく動いた。ロイドの伸ばした右手から巨大な影が伸びて魔物の群れに重なり、柊何某は両手で気功砲の様な構えを取る。双方武器は一時的に仕舞ってるみたい。

「新たな天地を望むか？」

「イヤーツ!!」

あくまで本物じゃないけど、ロイドの手の影に重なっていた部分がどことも知れない空間に飛ばされ、義手の肘辺りから小さな薬莢が1つ落ちる。

柊何某の方は、真っ白な閃光が発射されて後には何も残っていないかった。ニンジャだしてつきり塵遁でも使うのかと思ったけど違うんだね。

「アルさん、私が撃ち漏らした分は宜しくお願いします！」

「任せとけ！」

「回収完了。発射まで2」

ロイドと柊何某がタクの張り続けている結界に入ったのを確認して、私とアルさんが前に出て、ティアは魔法のカウントダウンを始める。

「マルチプルパルスチャージ完了」

「発射まで1」

「イオリ！全員準備完了だ」

倒しきれなかった魔物が私達に迫るけど、全員の準備が終わったんならもう何も迷う事はない。

棺桶の周りを覆う様に、扇状に広がる13門×5列のパルスキャノンユニットが2つ、詰まり計130門の砲門。元々ネタで作ったやつだけど、真上と背後以外は完全にカバーしてるこれを受けて耐えられる奴なんていない！

「発射!!」

「射出」

グンと加速する感覚と共に、全てを焼き尽くす暴力というキャッチコピー通りの火力で敵が蒸発していく。使ってられる時間は短いけど、ティアの加速のお陰で砕け散っていた城門にまで辿り着いて…

「おらアッー!」

振り返って剣を一閃したアルさんによって、残った瀕死の魔物群は真っ二つにされた。

左眼はOwを使うのをやめたのに視界が安定しない上、街中に入つたせいで一層濃くなった黒煙のせいではぼ何も見えない。だけど、突入した6人が全員無事なのは半分の視界でも十分確認できた。

「つとと」

倒れそうになった身体を大鎌を杖代わりにして支える。いつの間にか流れてた鼻血も拭つていつも通りのスタイルに戻るけど、やっぱり足はフラフラするし頭も痛い。まあ見ての通り私は無事じゃない。

「無茶しすぎだ」

「えへへ、ごめん」

それを見たららしいロイドに怒られてしまった。でも仕方ないじゃん、2回目の方はアレが1番手っ取り早かったんだもん。

元々の私のスキルと大鎌の呪いレベルの回復力、装備のブーストとついでに掛かっているリジエネのおかげで1分もあれば再起動出来る。それまで、みんなかなり近くに寄つてることだしロイドに肩を…そう思った瞬間、それぞれの足元に魔法陣が広がる。

「マスターっ」

「え?」

誰かが私をロイドの方に突き飛ばすのを最後に、私の感覚は途切れ
た。

第11話 双剣士と鍛冶師

「ぎやあつー！」

「うわあつー！」

転移特有のふわつとした感覚がした瞬間、私達は突然石畳の地面に叩きつけられた。主任砲（仮）の余波を吸収したせいで棺桶の結界は切れてるけど、まだ力が上手く入らないから転がったままにいるしかない。だけど…

「あの、ロイド。ちよつとこの体勢、恥ずかしい…！」

お互いの息が届くレベルの近さにロイドの顔があつて、なんでこうなってるのか分からないけど押し倒された格好だ。ちよつと、こう言うのつて早過ぎると思うんだ…

「あ、その、すまん！」

「偶然だろうし、今は戦闘中だから気にしないよ！敵も来ちゃったし」私の上からロイドが飛び退いて、自由になった私はまだフラつく足で立ち上がる。段々慣れてきた左眼に、黒煙の向こう側に光る多数の赤い目が見えたからね。右眼には、血走った目をした住民みたいな人達がそれぞれ農具や武器を持ってこちらを見る光景が映っている。

「殆ど洗脳された一般の人だけど、ステータスはBランクの冒険者並にあるから気をつけてね。致命傷を負わせちゃったらダメだし」

「それなら大丈夫だけど、イオリはまだ動けないんだろ？」

「うん、もうちよつと」

一応大鎌を銃形態にして構えるけど、使える魔法が劣化してる上にまだ足とかはプルプルしてる。うん、オーバードウェポン O Wの連続使用なんてするんじやなかった。あたまいたい。

「とりあえずこれで、どうだ！」

ロイドが左右の剣を振り抜いた途端、こちらに幽鬼のような足取りで歩いてきてた住民達が一気に潰れた。グシャツとじゃなくて、地面にビターンって感じだけど。

「イオリのソレ、確か麻痺させる弾も撃てたよな？」

「うん。あ、そういう事ね！非殺傷形態ノンリーサル・麻痺弾パラライザー！」

ロイドが魔法で押さえつけてる人達に、私は麻痺弾を連続して撃ち込んで行く。確かに私が大鎌で斬つたり、ロイドが峰打するよりは圧倒的に早いね!

「目視の敵影なし、魔法にも敵影なし。にやあ…」

銃を降ろし一度大きくため息を吐く。せつかく全員で突撃したのにいきなり分断されちゃったし、頼みの綱の転移も感覚的に目に見える範囲しか無理そうだし…

「怪我とかしてないか?」

「うん、ちよつと頭が痛いだけ」

不幸中の幸いだったのは、ティアが私を突き飛ばしてくれたお陰でロイドが一緒にいる事だ。どこかの大通りらしいここだけど、最初の満足に動けない状態じゃ、確実に襲ってきた人がミンチになってた。「それならいいんだが、分断されちゃったけど何か策はあったりするのか?」

「うーん、ラスボス気取ってるなら王城にいるだろうし…私としては敵を蹴散らしながら王城に突撃したいけど、他の人がどう動くか分からないし…どうしょ?」

花火みたいなのを打ち上げても、街の反対側にも飛ばされてる人が居たら見えないから意味ないし。かと言って連絡が付きそうなのは、ぎりぎりティアだけだし…

そう思つて首を傾げて数秒、索敵のために広げていた魔法に突然敵の反応が現れた。

「いつまでも人前でいちやいちやいちやいちやいちやいちやいちやいちゃ!見せびらかしてんじやねえぞリア充共があっ!!」

そんな男の怒声と共に飛んできたのは、Cave製ゲーム並の大量の黒い何かによる弾幕。それに当たった石畳が、見る間に削り取られていく。

「排撃!!」
リジエクト

その黒い何かに言い知れぬ悪寒を感じた私は、棺桶に貯めてあった衝撃を解き放ち一部を吹き飛ばし、ロイドを巻き込む形で結界を再展開する。

「ロイド、早くこっち来て！」

「こいつらを斬るつてのは…」

「触っちゃダメ!!」

結構無理して広げてる結界を狭めながら、ロイドの手を引いて一気に私の近くまで連れてくる。よく分からないけど、この黒いのに触ったらダメなんだよ！

|| || || 《 # % ? · # / 威力 不明 / 範囲 大 / 七大罪 · 強欲 / 危険度 極大 》 || || ||

こうやって魔眼の表示を見てる間にもゴリゴリ結界が削れてつてるし、強欲なんて大体ロクな効果じゃない！

「寄おおお越せえええっ!!」

「ロイド合わせて！ 《盾シールド · 密集防御》!!」

一面の黒の中から現れた白い物：どう見ても人間じゃない手の骨が私の張った何重もの盾を破り：否、奪い吸収しながら私達に迫る。このままじゃ、棺桶の結界も意味をなさなくなるけど…

「最大加速!!」

結界の中に風の結界という謎の状態になった瞬間、私達は凄まじい勢いで後方に飛んだ。そのお陰で黒の中から脱出する事が出来た。

「アイツ、なんだか分かるか？」

「ううん。予想でしか分かんない」

黒に染まった大通りの一角を見ながら、ロイドの質問に警戒しながら答える。だってわかってる事なんて、さっきの表示の通りなら強欲のスキルを持つてる事と、聞き覚えがある気がするから多分クラスメイトって事だけだもん。

「異世界召喚だろ？チートだろ？それならハーレムが普通だろうがよ！そうじゃなくてもヒロインがいねえとかおかしいじゃねえかよ！」

辺り一面の黒が収束していつて、1つの人影を形作る。黒い髪に白目が黒・黒目が緑の目、浅黒く変色した顔に背中には蝙蝠の様な羽根が生えている。

だけど何よりおかしいのは、両腕と両足が白骨化していることだ。しかも爪が生え、人よりも何回りも巨大なそれらは先程見たとおりの普

通に動いている。

「寄越せよ…寄越せ！寄越せ寄越せ寄越せ寄越せ寄越せえええつ！！」

「狂ってやがる…」

意味もなく暴れまわってる元クラスメイト（仮）の化物に、魔眼の解析をかけ終わる。これが大罪系の職業を取った末路なら、こんなものだろうもないじゃん。

どうにも辺り一面変な毒塗れみたいだし、強欲なら何かを奪うつて力だろうからこのままじゃマトモに戦えないし…

「ロイド、こっち向いて」

「え？」

私の呼びかけにこっちを向いたロイドにキスをする。ぜ、前回の時の繋がりの強化とかあれはあれで別だけど…あんもう面倒くさい！要するにリユートさん達にあげた指輪と同じ原理で、私とロイドの耐性を一部共有する。

「え、あ」

「来るよ！」

なんだか緊急時ばかりだなと思いつつ、ロイドから離れて大鎌を構える。一瞬の後ロイドも剣を構え直し、今まで無意味に暴れまわっていた化物がこちらを見た。

「女を寄越せええええつ！！」

「Svartalfheimr Dainnsief
幻想世界・戦乱の剣！」

化物がこちらに来るために飛び出したのと、総てを鎮静する私の世界が広がったのは同時だった。

第12話 勇者と邪神、時々…

「全く、この私に転移トラップとか、やってくれる！」

とても巨大な図書館の中、何人めになるか分からない洗脳された住人の頭部をマスターから貰った杖で殴りつける。マラカスとか釘バットとか鋏とか、使えないから仕方ない。

「ティアさん、それさつきから何回も聞いたんだけど」

「うるさい」

マスターの元親友の言葉は無視する。転移はできないが、マスターもどうやら今戦い始めたようだ。ロイドが一緒の筈だから問題は無いだろうが、一刻も早く合流したい事に違いはない。

「そんな事言う暇があるなら働け。馬車馬のように」

「ティアさんって、言う事に1つ1つが辛辣だよ」

「貴方が嫌いだから」

例えマスターが許しても、マスターを殺しかけた人物を許しはしない。あのギルマスは百歩譲って許すとしても、この2人は許さない。

「さつきから黙って聞いてれば、天上院くんになんて事言ってるのよ？ 殺すわよ？」

「自分を殺しかけた人をすぐ許すマスターが異常」

殺気を軽く受け流し、先ほど倒した人を適当な光の輪で拘束する。でも、怒りのせいか私にしては珍しく力加減を間違えたようだった。死なないしまあいいか。

「もしかして怒ってます？」

「怒ってはいる。けどそんなのは重要じゃない。まずは分断された状況の打開が優先」

「まあそれはそうだけど…他の人がどこに居るのかは分かるの？」

どうやら元親友の方も拘束が終わったらしく、大図書館の中に静けさが戻ってくる。

「当然、マスターとロイドはここと王城を挟んで反対の大通り。ギルマスは、王城北側付近の建物。つまりここから見て右前、恐らくギルド。どちらも、全力で戦闘中」

「アルディートさんが全力つて、一体どんな相手なのさ…」
「知らない。でも近づかないことを推奨」

臆げに覚えている全盛期の私ならまだしも、零落し、封印され、弱体化に弱体化を重ねた今の私が全力のあの人に相對しても、良くて5秒程度しか保たないだろう。あくまで「今の」ではあるけれど。

「転移はできなそうだし、それじゃあ合流は難しいんじゃない？」

「ついでに、禍々しいというか気持ちの悪い反応が王城にある。多分海堂。マスターもここを目指すだろうから、合流はゲーム宜しくラスボス前になりそう」

「まあ、そうなりそうだよな」

本当に分断なんて面倒な事をしてくれる。思わずそう呟いた瞬間、私の背後から毒塗りのクナイが飛んできた。

「なんのつもり」

が、勝手に門の中から出てきた冒瀆的な触手。つまりシヨゴスが壁となつて、クナイは私には届かなかった。この中でクナイなんかを使う人物は決まつてる。

「ちが、私はまだこんな事するつもりじゃ」

「全く、自分の彼女の手綱くらいちゃんと握る」

「え、俺ってそんな扱い…」

おおよその原因を予想し問い詰めていると、魔法での索敵範囲に敵影を確認する。場所は…真上！

「ちっ、受け流して」

動きの遅い天上院は使えない為、仕方なくシヨゴスを門の中から呼び出して防御の為に使う。どこか可愛らしくもあるてけり・りとと言う鳴き声が幾重にも重なり盾代わりになつて貫つた途端、天上を打ち抜いてドリルのように回転しながら敵が突入してきた。

SAN値チェックに失敗したのか固まつてる勇者2人を横目に、私は私で防御の為の魔法を貼る。

「クエエエエエッ！」

「っ！」

魔法が展開された瞬間突破は不可能と見てか、突入してきた黒い炎

を纏う鳥は進路を変え、図書館の出口を塞ぐように床に降り立った。きちんと働いてくれたシヨゴスを門の中に帰し、私は長杖を構える。

「堕ちた神獣。フェネクス、つまりフェニックス。堕ちた原因は…大罪スキル」

「クケエエエエツ」

私の言葉に反応してか、一際フェニックスが大きな鳴き声を上げる。それによって、私には大した影響は無かったが後ろで2人が崩れ落ちる音が聞こえた。という事は、恐らく怠惰。

「しかも使い魔。厄介な」

殆どのシステムは私達精霊の契約と同じだけど、魔物若しくは幻獣などが人と契約した場合、どんな鳥頭でも、少なくとも成人並には頭が良くなる。要するに非常に厄介だ。

「全く、後衛1人でレイドボスとかおかしいよ…なんて、マスターは言ったりして」

そう言いながらも、なんだかんだで討伐して素材に変えるマスターが予想できて、やはりマスターはキチガイと再認識する。

「そつちで仲良く倒れてる2人、戦えるなら参戦して。無理なら退いて、邪魔」

「ぐつ、う」

「俺は大丈夫だけど、鈴華さんは無理みたい」

「そう。じゃあどっかに運んできて」

門としての効果を持つ霧を散布、無限連鎖^{アルファサイクル}反応起動、次元及び龍魔法起動。叡智による制御完了。

「似た者同士、仲良く殺り合おう？不死鳥」

「キエエエエツ！」

炎を纏い飛んできた羽根と歪んだ空間がぶつかり合い、ここでも戦いが始まった。

◇

「全く…いきなり転移させられて懐かしい場所に出たと思ったら、随分と久しぶりじゃねえか、团长」

「もう昔のように、名前で呼んではくれないのですね」

「そりゃあ、お互いもう歳だからな」

2つの戦いが始まる少し前、ギルドの闘技場でも一對の男女の邂逅があった。

方や筋骨隆々の身体に魔物の皮の鎧を纏い、片手で自身の髪と同じ色の片手半剣を持つ大男。

方やその金色の髪をポニーテールに纏め、長剣を鞘に収めた凛々しい女騎士。しかし本来は眩い銀だったのだらうその鎧は黒に染まり禍々しい意匠が追加され、それに相応しい気配を発している。

「そういやお前、フェネクスはどこ行ったんだ？確かフェニって呼んで可愛がってだろ？」

「あの子は…今は私の言うことを聞いてくれないんです。それに、今私がこうなってる原因でもあります」

そう言って、金髪の女騎士が自らの鎧を見せつける様に動く。

「それにしても、あなたは今の私を見ても何も言わないんですね」

「ガキの頃からの付き合いなんだ、望んで手にした力じゃない事くらいは分かるさ。それに、他の奴らみたいにおかしくなってるワケでも無さそうだしな」

「これでも、実は気がおかしくなりそうなのを抑えてるんですよ？はあ…何事に対しても、やる気という物が無くなってきましたし」

ふう…と大きいため息を吐いた瞬間、静かな闘技場内に衝撃波が吹き荒れる。次いで、鏢迫り合いの音が響く。

「でも、いい事もあったんですよ。遠くに行ってしまったアルと、また斬り合える様になったりね」

一度双方距離を取り、灰と黒の剣を突き付けながら会話は続く。特に苦もな下げに受け止められたことは、特に気にしてない様だ。

「それがお前の、大罪スキルって奴の効果か？」

「アルと斬り合いをするのに、そんな小細工は使ったりしないですよ。フェニから力は逆流してきてますけどね。それに…いえ、ここからは剣で語った方が早いでしょう」

「そういう所、昔から変わらねえよな。お前は」

双方の剣気が爆発し、ギルドの建物が震え始めた。そんな一触即発の空気の中、覚悟を決めた表情で女騎士が言う。

「セントシュタイン王国騎士団長、メリツサ」

「ギルド人間界本部ギルドマスター、アルデイト」

「いざ尋常に、勝負!!」

剣と剣のぶつかる金属音と雷が落ちたような爆音が轟き、3つ目の戦いが始まった。

第13話 VS 強欲

「女を寄越せえええつ!!」

Svarthalfheimr Dainssieir
「幻想世界・戦乱の剣!」

総てを沈静化させる私の世界が広がり、私とロイド以外の全てが傍目には遅くなったように感じる。これで少しは戦いやすくなる筈…
「しやらくせえつ!!」

動きはほんの少しだけ遅くなつてはいるが、私の予想は大外れだった。創造を破られてないだけマシだけど、なんでこんなに動けるのさ…

「まずはテメエからだ!」

「こつちか!」

そしてそのまま、その巨大な骨腕を振り上げ私に突進してきた。そんな一直線の殴りなんて、タイミングさえ合わせれば格好の的!

そう思つて大鎌で迎撃しようとした瞬間、言い知れぬ悪寒が全身に走った。コレはやつちやいけない!

「《煙幕》!」

大鎌を振り抜こうと構えた体勢のまま、足にはいた靴から生える羽を操作して無茶なバックステップを敢行する。少し腰が痛くなつたけど、あいつの攻撃が当たった場所を見て考えが間違つてなかつたことが分かつた。

「嘘…だろ?」

「防御は不可つて事か…面倒な」

骨腕の当たつた石畳は、砕けるでもなく斬り裂かれるでもなく、ただ静かに粉塵と化して空気に流れていった。時間稼ぎとして放つた煙幕も、その四肢に段々と吸い込まれていき…今完全に消え去つた。
「そうだ、この全てを奪う力が俺の授かつた強欲の力。テメエら如きじゃどうする事も出来ねえんだよ!」

「だつてさ、どう思う? ロイド」

確かに私かロイドが1人だつたらそうだつたかもしれない。でも、今の私達は1人じゃない。そう思つて隣を向くとロイドと目が合つ

た、なんだか以心伝心みたいで嬉しい。

「決まってる」

「そんなこと、2人でならありえない!!」

「目障りなんだよリア充がああっ!」

無駄に大きな踏み込みの音がして、また腕を突き出し突進してくる。理性侵食のせいかわンパターンだね。そんな一回見せた単純な攻撃、2度は通じないよ!

「ロイド、適当に撒くからかき混ぜて」

「分かった」

まだ確信は持てないから、突進をロイドとは逆方向に避けながらさっきの煙幕と同じナノゴーレムを散布する。さっきと違って魔法は使っていないけど、そこはロイドがカバーしてくれる。

強欲さんを中心に濃く立ち込める煙幕、これで流れが見れば:

「これでどうっ?」

「効くかあああっ!」

そう言った強欲さんが煙幕を吸収していくのは、完全に露出している骨腕と流れから見てボロ切れになったズボンの内側だから、これまた骨と化している両脚。という事は、能力の起点は骨の部分!

「《風刃・5連!》」

「だから効かねえんだよっ!」

「《ライトニング・ピアス》!」

ロイドが放った魔法が吸収されているうちに、がら空きとなった肉体のありそうな胴体に速度最優先の雷撃を撃ち込んでみる。

「ぐ、があ、効くカアッ!」

すぐにスキルで回復されたけど、ちゃんとダメージは入ったみたいだ。という事は腕と脚は攻撃しても意味がないけど、頭と胴体にはちゃんとダメージが通ると。

「その厄介で邪魔な手、落とさせて貰うよ」

辺りにまだ漂うナノゴーレム、吸収された分は流石に機能してないみたいだけどころかなり大量に強欲さんは吸い込んでいる。そう、今も散布し続けている私の指示通りに形を変えたり、色々できるナノゴーレ

ムを。

「《解放、リリース斬撃》！」

「なっ」

攻撃も防御もやり辛くしていた例の両腕を、ナノゴーレムで肩口から斬り飛ばす。地面に骨腕が落下し、強欲さんから驚愕の声漏れた。何が起こってるのか分からないって顔をしてるけど、説明してあげる義理なんてない。

「武技・神風！」

動揺して動きが止まった強欲さんに対して、踏み出したロイドの姿が掻き消えた。技名からして私を助けてくれた時のかな。そう思いながら、私もロイドに合わせて突撃する。

そんな事を考えていたせいで突撃のタイミングが少し遅れちゃったけど、そのおかげで気づいた。飛び込む私達を強欲さんがニヤつきながら待ってるという事に。

「ロイド避けてええ!!」

「ハッ、もうオセエ」

そんな嘲りを込めた言葉と私の悲鳴が交差し、切り落とした骨腕が大きく円を描いて薙ぎ払われる。

「くっ」

「お前の命は貰ったぞ！」

私の頭上に、途中で無理に軌道を変えたのか回転しながら、まだ動きの止まっていないロイドが現れる。けど、強欲さんの言う通り私はロイドみたいに速くないし、突撃中だからこのままじゃ右前から来ている骨腕に当たっておしまいだ。

「《フラッシュ・ブリンク》」

それでも、攻撃の回避方法なんて幾らでもある。

例えばこうやって、相手の頭上に転移するとかね！本当はもつと離れたかったけど、実は急いで使ったからこれ位の移動距離が限界だったりする。

「《裂空刃》」

幾ら大鎌が長物とは言っても、だいたい5mは空中にいるから普通

は刃は届かない。だけど、高度な次元魔法を使えるなら話は別になる。

今思い出したばつかりの技だけど上手く成功したみたいで、振り抜いた私の大鎌から刀身が消滅する。

「かはっ」

トラップ・オブ・アルガリア
「触れれば転倒！、あと喰らい尽くせ暴食！」

そしてその消滅した刀身は、喰らって発現した宝具もどきの効果で転倒している強欲さんの胸を貫く形で出現する。

本当はあんまり使いたくないけど、血に濡れた刀身が《暴食》のスキルと本来の性能を組み合わせ発揮し、強欲さんの血も、魂も、ステータスをも喰らい吸収していく。

「ヴオアアアアアッ!!」

「きやつ」

ある程度喰らった所で、最早人の物では無くなった声に吹き飛ばされ、突き刺していた大鎌も抜けてしまう。

「ごめん、俺が不用意に突撃したせいで…」

「特に怪我はしてないし、大丈夫だよ…ゲホッ。へ？」

体勢を立て直し、戻ってきたロイドの隣に浮かび息を整える。そうして話し始めた瞬間、私は口から血の塊を吐く事になった。

暴食にはなんの異常も無し、そもそもアレで食べた物はエネルギーとステータスにしかない。攻撃も毒ももらってないし…そう思った時、ピシリと微かな音が大鎌から響く。

傍目には見えないけど内部で亀裂が入った事は明白で、聖遺物としての大鎌を使ってる以上あり得ることだけど、さつきも確認した通り私には異常は一切ない。つまり、他の要因で私の魂と直結してる大鎌が傷付いたという事になる。それが指し示すことは…

「嘘でしょ？…ティア」

ティアとのパスはしっかりと繋がっているし、私の杖があるけれど…それは、ティアが力尽きたという事に他ならなかった。

第14話 あなたはそこにいますか？

燃えていた。

壁が燃えていた。

天井が燃えていた。

床が、本が、照明が、観葉植物が、倒れた人が。元々この場にあつたであろうあらゆる物が、黒い炎に包まれ勢いよく燃え盛っていた。

その下手人は無論、私とこの不死鳥である。

「クケエツ！」

「それはもう見た」

飛んできた黒炎を纏う羽根が、私の前で突如進路を変えて壁に突き刺さる。そこからまた火災が広がるが、私には関係のない事だ。この身は精霊、零落したとはいえ神。結界を張り、倒した人々を脱出させてる勇者と違って、酸素なんて有ろうが無かろうが活動に支障は出ない。

「キエアツ！」

「だからそれも、無駄」

周囲を焼け焦がす炎が怠惰の力を伴って私に殺到するが、直撃する寸前、その全てを暴食で喰らい尽くす。先程から何度も繰り返している光景だ。

「これで、7回目」

世界が一瞬だけ斜めにズレて、その異常が元に戻った時にはフェニックスの首は地面に落ちていた。マスターにはまだ出来ないようだけど、本来のカンストした次元魔法ならこんな事は造作もない。

「そしてこれから、8回目」

「キエエエエツ！」

即座に灰と化した頭と胴体から、一回り小さくなったフェニックスが現れ私に突撃してくる。これも、一度は見た事がある光景だ。

「いあ、くとうるふ」

突進するフェニックスのすぐ上に門が開き、大量の水と共にぬらぬらした鱗に覆われた巨大な鉤爪状の手が落ちた。

「クケ、カッ」

貫かれたフェニックスが苦しそうな声を上げるが、私の限界が来てクトウルフの腕が消滅する。それを見届けながら、私は杖を持っていない方の手を握りこむ。

「ふっ飛べ」

私がアツパー気味に振った手に合わせて、炎の消えたフェニックスが大きく打ち上がる。その姿には力が入ってるようには見えず、気絶しているであろう事が容易に想像できる。

今まで繰り返した中ではここで上手く気絶しなかったり、したとしても数秒で立ち直ってしまったが、今回は復活による劣化が響いてか目が覚める気配がない。

「それなら、これで最後」

落下を始めたフェニックスのすぐ側に転移し、その身体に手をかざす。同じ契約をしてる身としては、滅さずに主人の元に帰してあげたい。

「深く、深く眠れ。《ヒュプノス》」

以前なら迷わず滅していたのに、帰してあげようなんて思う自分に驚きながらも、散々ハメ殺して消耗させたフェニックスの意識を深い闇の中に沈めていく。それこそ、私の承諾が無ければ2度と目覚める事はない所まで。

「次、目が覚めたら、あなたのマスターが目の前にいる。私のマスターもいるから、その狂気も消せるかもしれない。だから、安心して眠るといい」

落ちてくフェニックスを門の中に？み込む。これなら万が一起きたとしても、シヨゴスとかがなんとかしてくれるだろう。

「となれば、やはりマスター達との合流が最優先。でも、その前に」

今までの戦いのせいでかなり燃えてしまっているが、戦ってる際に探知に引っかけなかった書庫までは火が回っていない。このまま焼失させてしまうには勿体無いし、それならば…

「私が回収しても問題無いはず。後で返せば」

勿論写本は作るけど。なんて気を抜いてしまった事が、最大の取り

返しのつかない失敗だった。

「ティアさん逃げて！」

パリンとガラスの割れるような音が聞こえ、殺気を感じて振り返ると、そこにあつたのは光。引き伸ばした時間感覚で見る限り、王都に突入した際ニンジャが放った物と同質。

元親友の方の勇者が貼ったらしき結界は、まるで薄い飴細工のように砕かれていた。全く使えない、雑魚め。

「門よー！」

私が緊急措置として呼び出した防御用の2つの閉じた門も、片方は秒と持たずに砕け散った。もう片方も恐らく長くは保たない。転移の魔法を組む時間は無いし、となると気は進まないが防御しかない。

「祓い給え清め給え」

普通の魔法では壁にならないだろうという考えから、マスターの使った魔法を模倣する。障壁は斜めに配置すれば、耐えることは出来るだろう。

なんて思い魔法を組み上げた瞬間、私の胸から刃が生えてきた。

「気を抜いたわね？あなた」

ストックしてあつた分のHPごと私の命が失われていく。間違はなく私の心臓を刃は貫いてて、血が溢れてきて…見えはしないけど分かる。犯人は…

「エセ、ニンジャ」

「正解」

その言葉と共に、刃は捻られ私から抜けていく。口の中が鉄の味で満ちる。このHPの減り具合じゃどうやって助からない、よしんば生き残ったとしてもあの閃光に消し飛ばされるのがオチ。

「情報、送信」

最後にマスターとのパスを經由して今の光景を送る。

不意打ちだなんて正直不服ではあるけれど仕方が無い。神様だってダメージロールには勝てない。死ぬときは死ぬ。出目がクリティカルしたりしたら特に。

「でも、あなたは道連れ」

マスターから貰った杖を大きく上に投げ、空いた両手で逃げようとしていたエセニンジャの腕を掴む。指を腕に突き刺したから、そう簡単には逃げられない。

「っ、離しなさいよー！」

「やだよ、バーカ」

マスター風に馬鹿にして、私は残りの魔力を暴走させる。「私」は死ぬわけじゃないけど、個人としての「私」は多分これで終わり。マスターのアレが机上の空論だったらだけど。

そう思った意識を最後に、全てをゼロ次元に捻じ切る巨大な黒い巨大な球体が顕現し、遅れて閃光が全てを灼いた。

第15話 暴走

左眼にノイズが走る。懐かしい砂嵐の音が頭に響き始め、魔眼に映る世界が段々違う物に変化していく。

「ごめんロイド、一時撤退…《ミラージユコロイド》」
「分かった!」

大鎌は致命的な部分が損傷して修復中、左眼にはここじゃないどころかが映っているなんて状況じゃ戦いなんて出来ない。と言うわけで、ロイドを結界の中に取り込み手を引いてもらう。透明化して高速で私達は移動する中、ボヤけた視界に違う場所の映像が映る。

黒い炎が燃え盛る多分図書館。SAN値を削りそうな意匠の門の向こうに迫る破滅の光、見慣れたワイシャツとブレザーから生えている短めの刀。霧散する魔法の気配と、口が裂けたように笑う^{エセニンジャ}ゴミ屑の顔。金属製の軽鎧が凹み倒れているタク。刺さった刀が抜かれ、服が血で赤く黒く染まっていく。謝罪のような、感謝のような、期待みたいな念が、伝わって来て…:…それで、最後に杖を上^{エセニンジャ}に投げ捨てて…
ゴミ屑を巻き込んで、次元魔法を暴走させて、それで…

「……リーイ……!!イオリ!!」

「ふえ…」

どこだかは分からない屋根の上、浮遊した棺桶にもたれかかっていた私の顔をロイドが心配そうに見つめていた。

「さっき血を吐いてたのもそうだし、今もそんなに泣いてそれにその目も…全然大丈夫じゃないだろ!」

「でも、だって…ティアが」

幾ら何が起こるか分かっていっても…ん、ちよつと待って。目? 涙声での反論をしながら、ロイドが言った一言に疑問を覚える。本当は抱きついて泣きじやくりしたい所だけど、それが本当なら一刻も早く離れないと。

「ロイド、目って?」

オナカスイタ

「イオリの左目、今は右と同じ蒼色になってるぞ?」

「これは…」

足元で小さな音がなったので、仕方なく視線を元に戻す。するとそこには真つ黒なナニカで出来たワンピースのような物を着て、同じく材質に見える腕甲脚甲を付けたイオリが立っており、俺の足元には四つ葉のクローバーの髪飾りと赤いペンダントが転がっていた。

狙って投げた訳じゃなかったんだろうけど、俺の所に転がってきた幸運に感謝してポケットの中に仕舞う。それと同時に、あの強欲の叫び声が聞こえた。慌てて辺りを見渡すと、腕はくっ付き屋根の上を跳ねながらこつちへ向かってきている!!

「ヴァルルルル…」

「あんたもあんただよ強欲さん。たかがスキル程度に自我を塗りつぶされるとか馬鹿なの？死ぬの？」

獣のような眼光をしたイオリが、普段はほぼ言わないような口調で喋り始める。いつもの天真爛漫な感じとは全く違う雰囲気、例えるなら地球に行った時に触れた闇墮ち？って奴が近いかもしれない。

「ヴァルラアアアッ！」

「いいよね、そんなに力のままに暴れられて。思う存分力を振るえて、私はお前が羨ましいよ」

ぞくりと背筋が凍るような感覚が走った。今、確実に何か入っちゃいけないスイッチがONになった。それは多分、普段のイオリなら絶対に使わない系統の力で：背後に現れた4つの黒い塊も、なのごーれむ？とは違った禍々しさを感じる。

「私の《暴食》とお前の《強欲》。奇しくも似た様な効果だからね、寄せ寄せ寄せ言ってそんな無意味な破壊しかばら撒けない層なら…」

「ヴルラアアアッ！」

「私はオナカガスイテルんだよ。せめて私の糧になって死ぬ《暴食》」
突進する強欲の人に黒い4つの塊が殺到する。それはあの骨の手足を通過し、その全てを喰らい尽くしていた。あんな手の打ち様が無かった物を一瞬で。

そして骨の手足を無くした胴体はそのままイオリに向かって飛んでいき：いつの間にか手にしていた黒い剣によって上半身と下半身

に断ち切られていた。

「ふんっ、不味い。毒にしかならなそうだね」

そして断ち切られた物は黒い剣に吸収され、まるで汚い物でも触っているかの様にそれは投げ捨てられた。

「さて、それじゃあ邪魔者もいなくなった事だし。殺し愛、しよっか、私のローイード？」

新たにどこからか出した剣を、イオリは俺の隠れている場所へ向けて来る。正直何をしたら良いのかは分からないし、どう戦えば良いのかも分からない。だけど、逃げ出す事が間違いなのだけはなんとなく分かる。

「ああ、このままじゃ話も聞いてくれなそうだしな！」

正直怖いけど、俺はそう言っただけで透明化を解除した。

第16話 いあ！いあ！

全てが過ぎ去った後、そこには深い半円状の穴だけが残されていた。そしてそこに、落ちてきた長杖が墓標のように突き刺さる。

「く、そ…」

何があつて鈴華さんが攻撃してティアさんを殺したのかは分からないけど、何が起るか予想できて守る力も持ってた俺が全面的に悪い事は分かる。幾らよく分からない力で痺れてる状態でも、こんな体たらくじゃ雑魚とか温室育ちってバカにされても仕方ないじゃないか。

そう自分を責める俺に、ベチャベチャと生温かい液体が降りかかる。それは鉄臭く赤い…つまりは血液だという事がすぐに分かる。

「最後の最後にやってくれたわね…でも、邪魔な《叡智》を殺してやったわ！この私が！」

その声に不穏な気配を感じ、動きの鈍い身体に鞭打つてうつ伏せの状態からどうにか仰向けになる。そこに居たのは、満身創痍だということに狂った様に笑う鈴華さんだった。

左腕は根元から無くなり大量の血が流れ、右腕はミイラのように乾いていたり火傷が出来ていたりする。左の足は膝あたりまでが白骨化しており、頭の上には光輪が浮かび背には黒い3対の羽が生えている。

「《勇氣》は無くなったけどどうでもいいわね、あんなゴミスキルよりもこの《傲慢》の方が圧倒的に強いんだもの！」

そう両手を広げ高笑いする鈴華さんの傷がどんどん塞がっていく。俺の身体の痺れも取れてきた。友達で、これまで戦ってきた人を殺すなんて俺には出来ない。

聖剣を、痺れの取れた手でしっかりと握り込む。

でも、蛮勇かもしれないけど戦わなくちゃいけない。こんな俺にだって戦ってきたプライドがあるし、周りから見たら雑魚でも仲間を殺されて黙ってられる程お人好しじゃない！

転移の準備完了。

奇襲だから声を出さなくて馬鹿のする事。魔法に関しては、さっきのティアさんの置き土産のおかげで魔力が探りにくいからばれてない。鈴華さんは…いや、柊さんは今からは敵！

「シッ！」

身体の麻痺も完全に消え、柊さんも回復に専念しているのか空中に静止している。そんな隙を狙い、背後に転移して羽狙いで振り下ろした俺の剣は…

「狙いがバレバレなのよ天上院くん。防いでくれて言ってるみたいだよ。それとも防いで欲しかったのかしら？」

その羽に受け止められ、その上ボロボロの右腕で俺自身も吹き飛ばされてしまった。飛ばされた先はティアさんの作り出した大穴で、俺はロクに受け身も取れずゴロゴロとそこに向かって転がり落ちていく。

「ちくしょう…！」

杖が刺さっている場所の付近まで落ち、未だに浮遊している柊さんを睨みつける。人っぽい生物には特効の筈なのに効かないってなんですか…

とりあえず徒手空拳じゃ話にもならないから途中で落とした聖剣を取りに行こうと起き上がった時、すぐ近くでドクンと音がした。何かと思っただけで見渡していると、次いで空間が絶叫する様に軋む怖気の走る音が響きだす。

「死んだってのに、しつこいのよおおお!!」

俺と同じく、その音が長杖から響いていることに気がついたらしい柊さんは、あの極大の閃光をこちらに放ってくる。焼け石に水だけど、忍耐と忠実の合わせ技の結界を貼ろうと思った瞬間、透明な障壁にその全てが吸収された。

「はい？」

心音の様な響きも、空間の絶叫も止まらない。惚けてしまう俺を嘲笑う様に、劇的に状況は変化していく。

地面に突き刺さっていた長杖が浮かび上がり、それに呼応するように辺りに霧が漂い始め、銀色の精緻な細工の施された門がノイズ混じ

りに顕現する。

「ふざけるんじゃないわよ！そんな棒つきれが私の攻撃を防ぐなんて、あっていい訳がないのよ!!」

ドンドン砲撃が撃ち込まれるけど、一切透明な障壁はビクともしない。何かの花の香りが漂い始め、霧が門に収束していく。これ以上は見てはいけない、そう頭では思っているのに体は言うことを聞いてくれない。

霧の収束が終わり、代わりに銀の門から湧き出たのは神々しいけれど悍ましい、正気を消し飛ばす気配。

「来る…の?」

空間の絶叫と心音が止まり、浮かぶ長杖に一瞬だけ揺らめく影絵のような姿が重なる。

「全く、マスターの演出好きも困る」

門の扉が弾け飛ぶ様に開く。聞き慣れた声が聞こえるが、門の向こうに見えた光景…いや、見てしまった光景のせいで思考が纏まらな

い。
果てのない無限の領域、銀河が見える。時の流れすら狂っているその空間では一が全で全が一。そこで泡立つ眩い玉虫色の球体から目を離せず、自分の認識が段々と曖昧になっていき…

「でも、Acta et c. fabula.とは言い得て妙」

そんな中、門から現れ視界に映り込むのは、無風の中たなびく虹色の髪。何処と無く現代風の格好に薄いベールの様なものを纏い、美麗な長杖をしかと握り締めている。その幼い体躯や顔つきと反する様な神気を纏い、その深紅の双眸で宙に浮かぶ墮天した使いを睨みつけて言う。

「私を殺した報い、受けてもらうぞ? 《傲慢》」

銀色の門が碎け散り、自分に向けられていないのに震えが来るほどの敵意と殺気が噴出する。自分?あれ、自分ってなんだっけ?

それを見て、堕ちた使いが叫んだ。

「ティア・クラフトオオオオオオオオオツ!!」

「お前程度が、その咒を口にするな」

ヨグIIソトースは、本来時空の制限を一切受けない「外なる神」の副王とされる最強の神性。時間と空間の法則を超越しており、全ての時と共に存在し、あらゆる空間に接しているという。

つまり、対象を始まりから無かった事にするのも可能である。

「Ab ovo usque ad mala。」

怒りをあらわにしながらも、紡ぎ出されるこの世界の言語とも日本語とも違う詠唱。本来なら使えない規模の力の筈だが、黄泉還り直後の今なら問題なく使える様だ。

「Omnia……ちつ、逃げたか」

おそらく本人の意思とは無関係に黒い霧もやに包まれて消えた■ ■ ■ から視線を外し、虹髪をなびかせこちらに向かって歩いてくる。

「正気に戻る。私はやらなきゃいけない事がある」

「ハッ！俺は今まで何を」

銀色の門が現れた辺りから記憶がない。アイエエ!? ティアさん!? ティアさんナンデ!? なんてボケてる場合じゃないか。うん。正直何が何だかよく分からないけど頑張るしかなさそう。

「戻ったみたい。それじゃあ今から少し私を守る、早急にやらなきゃいけない事がある」

「はい…?」

「せっかく雑魚から気持ちだけの勇者に変えたのに、また元に戻りたい?」

「やらせてもらいます。でも、そのやらなきゃいけない事ってなんですか?」

とりあえず結界を展開してから俺は尋ねる。そんなにすぐやらなきゃやって事は思いつかばないけど…

「私の強化は長く保たない。マスターが暴走してる、私から再契約して抑え込む。その間私は身動き取れないから守れ」

ティアさんがそう告げた瞬間、遠くで黒い柱が立つのが見えた。

第17話 継承

「ほらほらー！そんなんじや私は倒せないよー？」
「分かつてる！」

狂気的な笑顔を浮かべながら、イオリが横に薙いだ黒い剣を急降下する事で回避する。それに合わせて右手の剣を峰を向けて振るけど、それは容易く弾かれてしまった。

「それとも、こういうのが気になって集中できてないのかな？」

とても短いスカートを、そのまま中が見えるんじゃないかって勢いでイオリが持ち上げる。反射的に俺はその光景から目を背けてしまった。

「ふふ、イタダキマス」

そんな声が耳元で聞こえた瞬間、首筋に生温かく湿った物が這う感じがして、もう一度急加速して離脱する。が、その速度はさつきまでと比べて少しだけ遅くなっている。

「やっぱり、美味しい。ねえ、もっとやろうよ？」

舌舐めずりをしてイオリがそう言う。

空を飛ぶ為の靴を履いてない筈なのに空を飛べてる理由は、多分それに繋がっている。《暴食》のスキルで、俺の能力を食べて自分の力にしているらしい。俺が目映る速度まで落ちているのも、最初にかなり食べられたせいだ。

「とりあえず、今のイオリとはやりたくないな！」

(回線繋がりました。ハローロイド、生きてる?)

そう言って再び突撃しようとした俺の頭に、突然ティアさんの声が響いた。ナニカサレタ? いや、これが念話って事でいいのか?

(そう。喋らないでも伝わる。そっちの状況を教えて)

「あれ? どうしたのロイド。いきなり止まっちゃって」

「少し色々あってな」

不思議そうに首を傾げたイオリを見ながら、熱くなっていた頭を冷やしながらか今の状況を見つめ直す。イオリが《暴食》でおかしくなつて暴走、俺はステータスを喰われて絶賛苦戦中。どうすれば戻って

れるのか分からなくて、今やってるのは時間稼ぎ…中々に絶望的だな。

(大体認識した。今からマスターを元に戻す方法を教える)

(俺は何をすればいい?)

(まずは撤退して。それから伝える)

「了解した!」

不思議そうな顔のイオリと俺の双方に姿を隠す為の風を纏わせ、一旦民家の中に隠れる。とりあえず、俺に出来ることがあるって言うならどうにかしてイオリを元に戻したい!

「ローイードー、出てきてよー!」

そんなイオリの声を聞きながら、念話に集中する。というか、風を破るの早過ぎるだろ…

(それで、俺に出来る事ってなんだ!?)

(キス)

即座に帰ってきたその答えに、俺は警戒も忘れて固まってしまった。それはあの、口と口で?

(勿論。1番動揺を誘える。そしてなにより、昔から眠り姫の目を覚ますのは、王子様のキスと相場は決まってる)

(いや、でも…俺が?それだけですか?)

確かにイオリと戦いながらキスするなんてことは難しいけど、それだけなんてあまりに呆気なさすぎないか?

(正確にはもう1つ。マスターの大鎌を、マスターに突き刺して。それで、私が強制的に再契約できる)

「みーつつけた。あむ」

「っ!!」

耳たぶを甘噛みされる感覚に、今ので更に遅くなったスピードで転がり逃げ出す。予想よりかなり早く見つかってしまった。えっと、確か大鎌だったか?

「もう休憩も終わったでしょ?早くやろうよー」

そう不満気に言うイオリに苦笑いを返しながら、ティアさんとの会話を続ける。

(大鎌、多分ペンダントの中に入ってるんですけど)

(念じれば出る。そしてモード変更。対人型―100%にする。そうすれば傷付かない)

(分かりました!)

やる事は決まった。大鎌なんて使った事ないけど、やらなきゃいけないのなら使うしかないだろう。両手に持った剣を自分の収納の中に放り込み、ポケットから出したペンダントを首からかける。

「あれ?もしかして諦めちゃったのロイド。そしたらツマンナイナー、食べちゃうよ?」

「いいや、使う武器を変えるだけだ!!」

来いと念じると、確かに手の中に重みが生じた。ほぼ毎日斬り結んでいたから分かる。この気配は間違いなくあの大鎌。

《聖遺物 Falce vitamortem 起動しました。ユーザー認証、ロイド 使用許諾確認、適正ユーザーです。一部機能は使用不能です》

「ふうん、私の大鎌を使うんだ。でも、それを上手く使えるの?」
「使ってみせるさ」

イオリの言ってる言葉と、頭に響く変な声が重なって意味が理解できない。でも、とりあえず返事はしておく。

《ユーザーの大鎌システムスキルの未所持を確認、一時的に《大鎌術 LV――》を付与します。現在の特効設定は通常です、最大500%まで変動可能です》

途端に普段双剣を振っている時と同じ様に、大鎌が手に馴染んだ。つくづくイオリの装備って規格外だよな…

「モード変更、対人型―100%!」

幾重にも鐘のような音が重なりながら、大鎌の刃が解け、再構築されていく。これでおそらく、例の特効が変更されたんだろう。

「うーん、ティアの入れ知恵かな?2人揃って相手してあげるよ!」
(私は声だけだね)

黒い剣を構え、とても嬉しそうな顔でこちらに飛んでくるイオリを、大鎌の柄部分を使って迎撃する。躲されたけど。

初めて使う筈なのに、今まで使い続けていた様に動かせるという気持ち悪さを感じながらも、それを振り払いイオリと向かい合う。

「やっぱりその大鎌やり辛いね…まあ、関係は無いけど!!」

「はあっ!」

天上を蹴り、屋根ごと吹き飛ばし頭上から強襲してきたイオリに対して大鎌を振り上げて迎撃する。なんでイオリは、こんな戦い辛い武器であんなに戦えてたんだよ…そう思った時、さっきの大鎌ともテイアさんとも違った声が頭に響いた。

「ー条件を達成しましたー」

「ースキル 勇気 を継承しますー」

瞬間、食べられたステータスが元の値付近まで上昇した。なんだかよく分からないけどこれなら…

(問題なく戦える。よろしく)

「言われなくても!」

「もう!」

別に俺が狙ってるのはイオリを倒す事じゃない。それなら、元に戻ったステータスで俺がすべき行動は!

「ふえ?」

大鎌を高く放り投げ、俺は突撃してきたイオリを抱きしめた。

第18話 全部ティア様が悪い

「ふえ？」

大鎌を高く放り投げ、突撃を受け止めた瞬間ふわりと広がる所謂女の子の匂い。「何がなんだか分からない」そんな表情で固まってるイオりに、心の中で1度謝る。

「大好きだぞ、イオリ」

「やん、ロイドったらだ・い・たんむ」

今までの2回ともイオリからされた仕返しで、言っていた事を遮ってこちらからキスをする。これで動揺してくれたなら、今も上で待機させている大鎌を使えば終わりなだけけど…

「んっ…」

剣を手放し、俺の首に手を回して更に顔を近づけてくる。超至近距離で目を瞑ったイオリの顔とか一気に増大した甘い匂いで、こっちが動揺しておかしくなりかけた瞬間、頭に念話の音が響いた。

（全然動揺してない。ロイド、役得なんだから遠慮しないでやる。もっとマスターを滅茶苦茶にする感じで。舌入れるとか、どことは言わないけど触るとか）

……ああもう！でも後者は論外です！！

「んう…んんっ!？」

この状況に理性とか羞恥心とかが吹き飛んで、それでも最後の1線だけは踏み越えない。そんな状況でイオ리를貪り続ける事数分。

「はあ…はあ…んう」

荒い息のまま、虚ろな視線でぐったりと寄りかかっているイオりに、風で待機させていた大鎌の刃を俺ごと突き刺した。痛みは感じないし、これなら大丈夫だろう。

（接続確認。ハッキング、強制再契約を開始する）

そんな声が頭に響くと同時に、大鎌が怪しく光った。

◇

オナカスイタ。クワセロ。そんな圧倒的な感情の本流に飲まれて落ちた真っ黒で昏くて暗い中、私は一人で蹲っていた。

「うう、魔法も全然使えないし、大鎌もないし、力も初めてこつちに来た時くらいしか出ないし……どうすればいいの……ぐすつ」

パンチもキックもしてみたけど、手が赤くなつて痛くなつただけで何も起こらなかつた。ロイドは突き飛ばしたけど無事か分かんないし、強欲の人もいただろうし、心配だけど何もできない自分が嫌になる。

いつ元に戻るのかも分からないし、いつまでこの弱々しい魔法で黒いのを防いでいられるかも分からない。それに、

「寂しいよ……誰か助けてよ……1人は嫌だよ……うう」

「全く、マスターはいつからそんなに弱くなつた？」

体育座りで泣いている私の隣に、突然出現した気配がそんな事を言う。死んじやつてたし、幾ら私の杖が発動してもこんなに早く来れる訳が……

「全く、最強の神様を舐めないで欲しい」

「ほんとにティアなの……？」

「立つてマスター、約束通り私は来た！外にはロイドも待っている、立て！」

その叱責の声に顔を上げると、今まで私たった1人だったこの空間にティアが立つていた。普段の足して2で割つた服に薄いヴェールを纏つた格好で、私を見下ろし仁王立ちしている。

「でも、ティアがいてもここからは」

「私を舐めすぎ。こんな程度の力、全く問題ない」

私が何をしても晴れなかつた暗闇が、ティアの腕の一振りで半分くらい吹き飛んだ。うそん、あれだけ私が色々頑張つたのにこんなに簡単に……

「けど、あくまで私はまだ部外者。ここまですかできない」

こちらに手が伸ばされる。でも、私が掴んでいいのか？他の人に色々言っておきながら、自分もスキルに飲まれちゃつた私が……

「再契約を。そして、こんな所はおさらば」

その目には有無を言わさない光が湛えられている。むしろさつさと手を取れマスターって言われてる気がする。今はまだ、マスターと

精霊って関係じゃ無くなっている筈なのに。

「じれつたい。マスターらしくない、とつとと決める!」

「ええ…うん。そう、だよね!でもどうやって契約すればいいの?」

「手を取って。私の名前がティア・クラフトである限り、この身は永遠にマスターと共に在る」

ふっ、とニヤリとしながらティアが言う。そう、だよね。外がどうなってるのかは知らないけど、いつまでもこんな所でうじうじしてるのは良くないしね!

「それじゃあ、改めてよろしく!」

「勿論」

伸ばされた手を取った瞬間周りを漂っていた闇が晴れ、私の意識が現実世界へと戻っていく。ティアを殺したエセニンジャも、全部の元凶の海堂も、それ相応の報いは受けてもらわないとね。

◇

大鎌が貫通して2秒。たったそれだけの時間で、イオリから黒い煙が噴き出して消えていく。

「う…あ」

髪が綺麗な銀髪へ戻り、薄く開いた目にも光が戻り紅蒼のオツドアイに戻っている。次いで、纏っていた黒いワンピースや落ちていた黒剣がビビ割れ消えていく。

それを見て慌てて目を瞑って横を向くけど、寄りかかれてる上に押し退ける事も出来ないためどうしても意識してしまう。

「うひゃあっ!なんで刺さってるの!」

刺さっている大鎌を見てか、すごく慌てている声が聞こえる。とうか、俺も刺さってる以上動けないんだよな。そう思った瞬間、役目は終わったばかりに大鎌が光の粒となって解けていく。

「それに裸!?しかも何か身体が怠い、これって多分…」

好奇心に負けて薄っすらと目を開けると、顔を真っ赤にした後青く染め、最後に涙目になったイオリが確認できた。そして最後に、運が悪く目が合ってしまう。

「ろ、ロイドのばかああああああっ!!!」

次の瞬間俺は、ジャーマンスープレックスのように投げられ床に突き刺さった。これは、不可抗力だろ…

第19話 強欲討滅

「うう…ロイドのばか、えっち、へんたい、ろりこん」

ロイドから剥ぎ取ったペンダントで棺桶を除いた戦闘装束に身を包んだ私は、涙目でロイドを睨みつける。多分これだと顔も真つ赤になってるだろう。因みにロイドには正座させてる。

「いや、でもやれって言ったのは」

「やったのはロイドだもん」

そこら辺の話も含め、ティアから状況とこれからの向こうの予定とかも全部聞いたからそれは分かっている。でも、それでもやったのはロイドだもん。いやじゃ、ないけど。

そうして睨み合うこと数秒、ロイドが折れた。

「えっと、ごめん。俺もなんというかやり過ぎた」

「謝ってくれたからいいよ。許す」

気まずい沈黙が続く。私は私で何を言えればいいのかわからないし、ロイドも何か話題を探してる風な顔をしている。なんだろう、物凄くティアがニマニマしてる気配がする。そんなティアなんて一回ニヤル様にアツヘアへにされちゃえばいいんだ。

「うう…そ、そうだ。強欲の人を真つ二つにしたらしい剣って、どこに落ちてるか分かる？」

「あ、ああ…それなら」

「ヴアアアアアアアツ!!」

そう話がつづくと思った瞬間、下の階から咆哮が轟き私とロイドは家ごと衝撃で吹き飛ばされた。棺桶&結界を展開、何が起きてもいいように備える。

「やっぱり手遅れだったか…あ、ロイド手出して？生身の方」

「手遅れって、あいつが出てきてるのとどんな関係があるんだ？」

そう言って、空に浮かびながら2人で足元にいる化物を見下ろす。

骨腕が再生し頭は鳥のような骨で覆われ素顔は見えない。最早人語を解しているかも分からないけど、そこにいるのは強欲さんだった。

「えつとね、聞く限り私は闇魔法で造った剣に《暴食》で食べたアレを封印してみたんだから、もしかしたら封印解かれてるんじゃないかなって思ってる」

「案の定だったって訳か。それで、手の方は？」

そして、私の《暴食》について少し説明しておく。なんでも食べられるし、お腹も壊さなくなるこのスキル。それこそ相手のステータスとかのデータみたいな物も食べて吸収出来るんだけど、そつちを喰らうときは1つだけ条件がある。それは、簡単に言えば口を介する事。

「私が食べちゃってたロイドのステータス、全部返すね」

まだこちらを見失ってるらしい強欲さんの上空で、私は差し出されたロイドの手を持って、その人差し指をパクリと啜える。

「ちよつ、イオリ!？」

「あむつ、ちゆる…ちゆ…ふえ…ふへーはふはえひへるはへはよ？」

水っぽい音を響かせながら、ロイドの指を咥えたまま舐めてみたり吸ったりしてみる。戦闘モードの頭ですら顔が赤くなるこんな事をしてるのは、1番ステータスを返すのが早いから。あと、真つ赤になつて動くに動けないロイドが見てて楽しいからかもしれない。

「ぷはあ、これで元に戻ったかな？」

「へっ、あ、ああ」

「ジニ、ヤ、ガレエエツ！」

そう叫びながら、私たちに気づいた強欲さんが飛び上がってくる。けど、腕だけのこいつなんて正直どうとでもなる相手で…赤くなってるロイドの前に出て、大鎌を取り出す。

「私には元に戻してあげるの出来なし、そんな方法も多分ない。だから、元クラスメイトだし空気を壊す事にはお世話になったし…」

棺桶に備わった断鎖術式を起動。私の背負う棺桶全てに、陽炎のような揺らめきが発生する。けど、それは熱によるものじゃなくて空間が圧縮されるというありうべからざる現象によるもの。

正直機構自体は、地球で Wikipedia 〇見ながら作ったから、説明は詳しくなつちやうからカット！

「せめて安らかに眠れ」

そう言い終わった瞬間、私は地面にひびを入れながら着地していた。そして勿論突進を躲しただけじゃない。

「ぐ、が」

「ごちそうさまでした」

ビュンと振り抜いた大鎌に、既に強／欲になつた強欲さんの弓とムと虫辺りに分かれた破片が吸収されていく。あれ？という事は色んな意味で欲の部分の方がいてもおかしくない気が…

「イオリ、上だ！」

流石に静止状態から動くのは難しかったのか、ロイドから忠告の聲が飛んでくる。急いで上を向くと、そこにはオウガテイルならぬボーンレツグ…ちゃんと言うと強欲の欲の部分降ってきた。

「ふう…」

地震やバネの様に、歪められた物が元に戻る際の力は元の歪みが大きければ大きい程巨大な物になる。私の次元魔法をベースにしたこの機構で歪められた時空間が元に戻る際の力は、ロイドと同じくらいの速度を出せる。

「まだまだ猿真似程度とは思うけどっ！」

私程度がそこまでの速度を出せる様なエネルギー、それを直接相手に叩き込んでそれを粉碎する術。ゲームの技を現実で再現するのはロマン！

「アトランティス・ストライク!!」

私の回し蹴りが腰あたりに直撃、そして爆発して粉微塵と化した。カッコいいし好きだけど、MP効率悪いからあんまりやりたくないんだよねこれ。そんな事を思っていると、飛んでいたロイドが降りてきた。

「ごめん、本当なら俺がどうかしないかとダメだった」

「ううん、別に気にしてないよ。あの状況じゃ動けなかつただろうしね」

そうニコッとロイドに笑いかける。後はもう、王城まで行ってティア達と合流、その後で海堂をどうにかして終わり…そう気を抜いた瞬間だった。

コツン

私の棺桶が張っている結界に、小さな何か当たる音がした。疑問に思いながら見渡すと、近くに石が落ちている。そしてそれを投げたと思しき小さな男の子が見えた。

「ゆうしやさまを殺しやがって！この化物！」

慌てて建物の中から出てきた親っぽい人がその子を取り押さえようとこちらに向かってくる中、別の方向からも石が投げつけられる。

「このばけもの！まぞくーあっちいけ！」

私と同じくらいの女の子が、目に涙を溜めながら石を投げってくる。その隣には、直剣を持ちこちらを睨みつける父親が。そして石を投げるのをやめさせた母親が立っている。

初対面の人の感情なんて詳しくは読めないけど、いい感情を持たれていない事だけは分かる。それは、なんだなんだと出てきた民間人の人にも言えることだった。

「あんたら……」

「いいよ、ロイド。行く」

飛び出しそうだったロイドの手を引いて止め、王城に向かって走りみち歩いていく。化物って合唱は響いてくるけど、一旦意識から締め出す。

そして、人が一切いなくなり静けさが戻った頃。

「ごめんロイド。ちよつとだけ、ちよつとだけでいいから、このままでいさせて」

私はロイドにぎゅっと抱きつき泣いた。ティアが死んじゃったイメージが送られてきた時から、もう結構限界だったんだよ……

第20話 ちよつと訳わかんないです

「そういうえば、確かに殺されてた筈なのにティアさんはどうやって復活したんですか？やっぱり神様だからとか？」

王城へ向かつて：正確にはアルさんが戦っていた場所に走る中、俺は無表情で飛行しているティアさんに聞いてみる。俺が覚えてない間に何かあったのかもしれないが、ちゃんと聞いておきたかったのだ。

「まだ遠いし別に構わない。けど、無駄に長くなる」

「あ、はい」

移動速度が少しだけ落ち、ティアさんが説明を始める。

「まず、この私っていうのは、本体の私の極一部、言わば触覚という事を理解できなきや、話が進まない」

「えつとそれは…神座万象シリーズ的な？」

「そう。知つての通り私の本体はヨガⅡソトース、本来世界には入れない存在。理由は分からないけど、私はこの世界で活動する為に生み出された分身」

冗談のつもりで言ったことが認められ、サラッととんでも無い事を無表情で口にされた。やっぱり様とか呼ぶときにつけた方がいいのかな。

「さんで構わない。それより、理解はできた？」

「はい、一応は」

「ならいい。ここからは復活出来た理由の説明に入る」

そう言つて、ティアさんはあの長杖を取り出して構えた。アレを見るだけで、ナニカを思い出しそうになって頭痛がするけどまあ今はいい。

「そして、この身体は色々な部分に分けられるけど、今回重要なのは、私を私たらしめている意識と記憶」

「その他の部分はいいんですか？」

「どうでもいい…らしい。そこで登場するのがこの杖」

眉を顰めながら、ティアさんが杖を睨み付ける。俺としては、确实

に蒼矢の影響でカドケウスにしか見えない杖だ。

「なんでも、その私たらしめる部分を情報としてコピーして、この杖とそれを起点に、私本体に接続、肉体を召喚させる…らしい」

「はい？」

「しかもそのままじゃ、死の記憶を持つてるから云々らしくて、この羽のパーツがまたおかしな働きをする」

そういつて、大きく広げられた羽状のパーツを指差す。もう正直何を言ってるのかよく分からないけど分かった！（錯乱）

「ここに使われてる金属は元々、マスターが自らの命を燃やして焼き入れた槍。それを鑄つぶして作られている」

「は、はあ」

「マスターは転生させられて、1度体を根本から作り変えられている。下手人は女神。そのせいで若干の神気が全身に浸透している」

ちよつと待つて。蒼矢に嫌われてるとはいえ、その女神は1発殴らないと気が済まない。

「それは後で私達がやる。そんな身体で、命とも言える髪を焚べ鍛えられ血で焼き入れされた槍。やっぱり頭のオカシイ効果を持つてた」

「えつと、その効果つていうのは？」

「刺したモノの強制的な変質。相応の魔力は消費するけどね」

「それつて、際限は」

「確かめる前に鑄つぶされてたから不明。けど、おそらく際限はない」

何そのチート武器。本当に色々とシャレにならない性能じゃん。

一撃必殺な上にほほ何でも書き換え可能つて…

「だから『あれ？これ抑止力とかに殺されない？』つて思つて鑄つぶしたらしい。性質は鑄つぶした時に消えたらしいけど、神様を脅して復活させたらしい」

「何やつてんだよ蒼矢…」

「長くなったけど、私本体からの極大の魔力供給によつて、私自身を死の寸前まで書き換えて、死んだという結果を無かつた事になっているらしい」

そんな事を考えつく蒼矢の頭がおかしいのか、作る蒼矢の腕がおか

しいのか…いや、それじゃどつちにしろ蒼矢がおかしい。

「因みにデメリットってあるんですか…？」

「その認識で間違つてないし、デメリットは勿論ある。性質上、安全に使用するなら、一月は間隔を空けないといけない。失敗したら私は消えていなくなるし、無理に使い続けても変質は避けられない。最悪本体が召喚されて滅亡」

」

「白目、剥くな」

もう考えるのがバカらしくなった頃、今まで続いていた道が…というか街が急に無くなった。これは、一体？

「ふむ、やっぱりあの人の戦闘は規格外」

「あの人って事は、アルディートさん？」

「当たり前。それに、そつちにも探せば見える筈」

そう言われて慌てて辺りを見渡す。すると、結構離れた場所に大の字で転がっている大柄な男の人と、そこから更に離れた場所で倒れている女の人を発見した。

「両方とも消耗が酷い。パスの繋がりから見て女の人あるじが不死鳥の主」

「こちらからどうするんです？」

「マスターが来るまで待機。私は誰かを癒すと言うのは苦手だから、回復はそつちに任せる」

そう言うと、例の長杖をむき出しの地面に突き刺し、ティアさんはそれによりかかり何処からか取り出した本を読み始めてしまった。深い緑色の表紙に見慣れない文字が刻まれたその本からは、ラノベ程度の大きさなのに名状し難い気配が漏れ出ている。

ああうん、クトウルフだもんね。

「とりあえず合流までは待機するしかないか…《ヒーリングサークル》」

俺自身の回復魔法も大した物ではないけど、とりあえず魔法を発動させる。蒼矢ならもっと上手くやれるんだろうけど…あれ？なんで俺はこんな事知ってるんだ？蒼矢が回復魔法を使ってるのなんて今まで見たことないのに。

「まあ、そんなに気にする事じゃないか」

もしかしたら勘違いかもしれないし、もし本当でも不都合はない。合流が何時になるかは分からないけど、警戒しながら待つ事にしよう。

第21話 ラストバトル前

「えと、さつきはごめんね。いきなり泣いちゃって」

「いや、気にしてないぞ」

さつきみたいな事にならないためにも、民家の屋根付近を並走…いや、並飛？しながら私達はそんな話をする。向かっている場所は、聳え立つ王城近くに広がるクレーター…もといアルさんの戦闘跡。そこにティアとタクの気配を感じるから、予定通り合流しようと思う。「それにしても、アルさんってつくづく規格外だと思うよ…あんな跡みると」

「俺から見ると、イオリもティアさんも同じなんだが…」

「そかな？」

多分物理技だけであの被害を起こしてるアルさんと、魔法で天変地異を起こす私達を同じにしてもらいたく…他の人から見たらあんまり変わらない気がしてきた。

「まあそんな事より、私としてはコレをロイドが拾っててくれて本当に嬉しかったよ」

そう言ってる私は、にへへと笑いながら戻ってきた四葉のクローバー型の髪飾りを触る。これと一緒に大鎌入りのペンダントも回収したらしいし、ほんとに幸運のアイテムだね。

「って、なんでロイド赤くなってるの？さつきとか、助けて貰った時とか色々シタリされたのに…」

「それとこれとは話が別なんだよ…そ、それより、なんか手を振ってる勇者が見えたぞ！それにアルさんと誰かが倒れてる！」

「むう…もうちよつとロイドと2人きりで居たかったのに…」

文句を言いながらも、アルさんが倒れているのは大事だし着陸して話を聞く事にする。タクももうちよつと強い回復魔法使ってあげればいいのに…あとなんでティアは読書してるのさ。

「それで、これはどんな状況？ティア」

ジト目で見ていたタクから目を逸らし、ティアに聞いてみた途端ロイドまで芸人ばりにズッコケた。

「ちよつと待つて！今の明らかに俺に話を聞く雰囲気だったよね!?」
「流石に俺も酷いと思つたぞ」

「だって、あのまま話を聞いたら無駄に堅苦しい雰囲気になりそうだったんだもん…」

2割くらいは邪魔された私怨も入つてるけど、ちゃんとそれくらいは私にだつて分かる。シリアスは嫌いだもん、そんな雰囲気を壊したつて別にいいじゃん。

ぷくーとほつぺを膨らませて無言の抗議をしていると、はあ…とため息をついてからタクが話し始めた。

「ティアさんから大体は聞いてるらしいから省くけど、柊さんが逃げた後合流地点のここに来たらアルさん達が倒れてた。合流を待つ間、とりあえず回復魔法をかけておいた。つて感じかな」

「ふむふむ、こ→こ←に…」

「ちよつと待つて蒼矢凄く嫌な響きを感じるんだけど」

タクのツツコミを受け流し、寝かされてる2人の様子を観察する。双方とも大きな怪我は治つた跡しか無し、疲労困憊で十全に戦えるかは不明。HPはタクの魔法でほぼ回復してるっぽいし、疲労を回復させる魔法をかけていくけどどこまで効果が期待できるか…

「つまり、一時的な『膝に矢を受けてしまつてな…』つて事か。アルさんをサポートしながら、圧倒的なぱうわーで叩き潰すつもりだったのに…はあ」

「それつて、結局はどうなるんだ？」

一回考えた計画が破綻した以上、もう一回どうするか考え直さないといけない。えつと、こうなつた以上全員の危険が跳ね上がる事になるけど…

「勇者が前衛。ロイドとマスターが遊撃。私が後方支援とか？」

「俺からも、そうしてくれろとありがてえな」

ティアが首を傾げながら出した答えに、目を開けたアルさんがそう同意する。やっぱりそうなるのか…

「俺が万全ならともかく、ついさつきまでの戦いで随分消耗しちまつたしな。大した戦力にはならねえだろうし、こいつも放つておけない

しな」

起き上がったアルさんが、隣で未だ倒れたままの女の人を見ながらそう言う。そういえば、この女の人って誰？

「私達を襲った不死鳥の主。加えて、おそらくギルマスと戦っていた人物。怠惰のスキルの関係者」

「そして、俺の幼馴染だな」

「幼馴染と殺し合い…」

タクがそう呟きながらこつちを見てくる。いや、私達もやったでしよ？殺し合い。そう思ってる私に、ティアがちよいちよいと手招きをしてくる。

「ふえ？どうかしたのティア？」

「前やった方法で、大罪スキルを奪って欲しい子がいる。あと、そんなに時間はかけられない」

改めて言われると、確かに時間をかけてなんていられない。今は攻撃とかされてないけど、いつまでこの状況が持つか分からないもんですね。

「あれ結構痛い筈なんだけど…まあいつか、誰？」

「私達を襲った不死鳥」

その言葉に私は抜こうと思っていた大鎌をピタリと止める。それって間接的には言え、ティアが死んでタクも怪我した原因でしよ？

「やってくれたら、そこに落ちてた職業に就くための水晶玉をあげる。ギルドマスター、別にいいよね？」

「…まあいいだろう」

「それじゃあ、もうやるしかないよね!!」

「イオリって、結構単純なところがあるよな…」

ロイドが何か言ってたけどそんな事は知らない。ティアからもらった水晶玉を仕舞った後大鎌を抜いて、そのまま指差す門に突き入れる。何か生き物に深々と刺さった感触がして気持ち悪いけど…

「喰らい奪え、《暴食》！」

半分程吸収した強欲の力も上乘せして、ドロドロとした雰囲気のス

キル：多分これが《怠惰》なんだろうなって思う物を大鎌で喰らう。
よいしょと門から抜いた大鎌の刃の内、1つだけ真つ黒に染まつて
いる破片をパージして新しい破片を補充。黒い破片も回収して、これ
でよしと。

「取れたみたい。《ヒュプノス》解除、マスターの元へ帰れ」

ティアがそう言うのと、開いたままだった門から炎が溢れ、倒れてい
る女の人に吸い込まれていく。その炎の色は、ティアの記憶にあった
黒ではなく赤やオレンジの混じったもので安心する。

「よし、これで用事も終わったし…」

そう言っただけで周りにいるみんなの顔を見渡す。私が心配するまでも
なく、みんな覚悟を決めた顔をしている。

「城の外の事は俺とこいつに任せろ。存分にやって来い」

「はい！」

アルさんもそう言っただけでいる。休憩も十分にではないけど取
れたし、士気も十分！

「正直こんな事をやってる海堂と戦いに行くから、みんなどうなっ
ちやうかは分かんない。けど、一個だけ言いたい事があるんだ」

すうと大きく息を吸ってから、一拍置いて私は言う。

「みんな絶対生きて帰ろう!!」

そう言い終わって、なんで私がリーダーっぽい事してるのか考え
ている私を、人数こそ少ないが意思は伝わり過ぎるほど伝わってくる
声包み込んだ。

第22話 ロボットつてロマンだよ

みんな絶対生きて帰ろう。そう言っただけで気合を入れたのは良かったけど、私は1つ大変なことに気がついた。それは、時間が足りないという事。

王城に突入するメンバーの内、私・ティア・ロイドは飛べるしかない高速で移動する事ができる。けどその中で、タクだけが飛べないし移動速度が遅い。と、いうことで

「首級を上げよ！」

「魔族を滅せ！」

「うわあああああつ!!」

アルさん達が戦っていたクレーターを抜け、余波で倒壊した街を抜け、私達はまだ無事だった街を壊しながら城に向かって突撃して行く。各々手頃な武器を持った住人を薙ぎ倒し、余りの速度に叫び声を上げる主はタク。

まあ簡単に言えば、1番耐久力のあるタクに作ってみただけだった

ヴァンガード・オーバード・ブリスト
V O B を無理やり装備させて突撃させている。コジマは使っていないから安心していいと思う。大きな盾も持たせたり、作戦的にも見た目的にもシンプルイズベストだね!

「全砲門解放。いくよフロー、全弾一斉掃射!!」

フリーズアウト
「凍結解除、非殺傷魔法掃射開始」

「《暴風壁》！」

結界を張り超高速で突撃しているタクの後ろで、私達はそれぞれの攻撃で群がる一般人を気絶か酷くても骨折にさせて駆け抜けていく。私はゴム弾やらロックソルト弾をばら撒き足を止め、ティアの非殺傷魔法（ ）で行動不能にし、ロイドの魔法で吹き飛ばす。

ナイスコンビだねーしよんって奴だね!

「後ろで何か楽しそうにやっているとこ悪いんだけどこれ止まらない!!
とかどうかどう止めるのこれ!?むしろ止まるの!?!」

「大丈夫、止まらないよ！」

「いいいやあああああつ！」

悲鳴を上げながら、さらに加速したタクを追って移動する間にぐんぐん王城が近づいてくる。城ならあつて当然の、完全に閉められこちらを進入させる気など微塵も無い巨大な門も例外では無い。

「スラストアーパージ!!」

「了解、本体を転送する」

門が見えた辺りで、盾付きVOBからタクを抜き取る。一応（搭乗者の）安全策は考えてあるのだ。でも勿論そんな事をすれば…

「はあ…はあ…はあ…し、死ぬかと思っ」

転移させたタクを3人で掴み運ぶようにする。体勢は良くないけど、それでも安心したらしいタクの声を遮るように私は叫ぶ。

「たーまやー!!」

「かーぎやー」

「へ?」

また加速したVOBは閉じられた門に直撃、貫通し、ほんの少し進んだ場所で大爆発を起こした。

「コジマは、まずいって…」

「大丈夫、問題ない」

撒き散らされる大量の緑の粒子がここからでも確認できるけど断じてコジマじゃない、ないったらない。あくまで回復魔法の光だから、ティアの言う通り全く問題ない。

「でもこれは本当に、賠償金とか大丈夫なのか…?イオリ」

「1発だけなら誤射かもしれないんだよ、ロイド」

「いや、でも流石に」

「誤☆射。OK?」

なおも食い下がるロイドに、笑顔で私はそう言う。そう、なにせまだ1発だもん。きつと誤射に違いないんだ。あ、賠償金は海堂に押し付けるからそこんところ宜しく。

「お、OK」

「酷いごり押しを見た」

べ、別にミーニヤちゃんを守った件で懸賞金でも掛けられてそうだから何でもやっちゃえなんて思っていないし。心の中でそう言い訳し

ている内に、内から爆散した門に辿り着いた。

「ティア、王族の人探知して！終わるまで他のみんなで警戒！」

「了解！」

正直なところ、ただ海堂を倒すだけならそもそも私達は敵の本拠地たる王都に進入なんてしていい。街の外から主任砲とか流星群とか大噴火とかの圧倒的な火力で殲滅すればいいだけの話だ。

私が大量殺人の咎を負うだけで済むこの作戦が実行されてないのは、誰も認めないだろうって事以外にもちゃんと理由がある。日本とは違ってこの人間界は王制、つまり王様やその一族が生き残ってないと国の復興なんて出来ないのである。戦国時代したいなら別だけど。

つまり、全力全壊で戦って洗脳されてるだろう王様とかを巻き込んだら実質失敗って事だ。何でも特別な魔力を持つてるらしくって、ティアなら問題なく分かるかもしれない。

「探知完了。地下に成人男性が1人、上階に年頃の娘が1人。他に王族と思しき反応は無し」

「ありがと。それでタク、人間界には王女様だけで王子はいないの？継承権は？ロイドもそう言う話聞いた事ある？」

獣人界とか魔界を旅してきて人間界の事情には疎いから、そこをよく知ってそうなタクとロイドに聞いてみる。獣人界の事情ならそこそこ良く分かるんだけどなあ…

「継承権とかは知らないけど、俺が知ってる王族はその2人だけだよ」「俺はそう言う政治の話には全く興味なかったからな…力になれなくてごめん」

「ううん、それを聞いて私は安心したかな」

隠し子とかの危険性はまだあるけど、とりあえずその2人を巻き込まないようにすればいいんでしょう？でもそう考えると、もしかしたら勇者召喚って…

面白い仮説が頭をよぎった瞬間、今まで沈黙していた王城から多数の騎士や魔法使いと思われる人達が飛び出してくる。

「ここからはみんなそれぞれの判断で動いて。目標は海堂の打倒!!」

そう叫ぶと同時に、両手や棺桶の間からの銃撃で敵さんを薙ぎ払

う。一拍遅れて魔法の嵐が吹き荒れ、道が開けた。

「全員突撃いいいい!!」

こうして私達の城攻めが始まったのだった。

王様は地下に居るらしいし、後回しでいいよね？

第23話 降り立てなかつた墮天使（一）

「ごめんなさいー！」

ガンダムハンマーではなく大鎌を振り抜き、意識を刈り取った騎士っぽい人を全力で蹴り飛ばす。

王城に突入してから10分くらい、開けた場所では騎士っぽい人達が、隠し通路からはニンジャナンデ!?という事が多発しており、タクの案内で進んでいるけど私達はあまり進めずにいた。

「タク、次はどっち!？」

「右に曲がって真っ直ぐ!無駄にデカイ扉!」

「了解!!」

無防備にも兜を被って居なかつた人にゴム弾のヘッドショットを決め、走る方向を変えるがてら背負った棺桶を当てて吹き飛ばす。私ヒーラー兼遊撃手だった筈なのに、ポジション的にはアンヘル・デイオナだった筈なのに…

そんな考えがよぎった時、後ろから強い風と磯の匂いを感じた。少し気になり魔法で確認すると、少し離れてはいるけれど2人とも無事。これなら進んでも問題は無さそうだ。

「タク、Go!!」

「俺は犬でもポケモンでもないって」

そう言いながらもちゃんと私達より先に進んでくれた。大丈夫、私が誰かを犬扱いするなんて多分ない。犬…首輪…チョーカー?成る程私が犬か!飼い主は結衣姉で。

そんなくだらない事を考えながら、石造りだけど何らかの魔法によつてがそうと感させない謎の通路を進む。我ながらなんでこんなに余裕があるんだろ?

「……」

考え後をしてる間に迫っていた扉が開け放たれ、タクとほぼ同時に部屋に進入する。無駄に広いつて話だし敵はどこだ!

「…あれ?」

私は首を傾げる。確かに無駄に広い部屋ではあつたが、敵影どころ

か調度品一つない。照明はギリギリあるけど窓もない、勿論ここまで上がるのに使ってきた階段も。

「むっ」

「どういう、事だ？」

後から入ってきたティアとロイドもおかしいと感じた様で、すぐにここに案内したタクに「どういう事か？」と目を向ける。私？

「あの、蒼矢？大鎌引いてくれない？凄く怖いんだけど」

隣に立っていたタクの首元に大鎌の刃を突きつけている。疑わしきは罰せずって言うけど、故意にやった事だったら言い逃れを許す気はない。

「ちゃんと説明できないと、このまま下に引くことになるんだけど」

「ひえっ。こ、ここはエレベーター的なサムシングですはい」

そんな対応で良いのか勇者。そしてタクがそう言った瞬間、部屋の中心に青い魔法陣が生じ青い光が立ち上り始めた。

なるほど、今の対応はこれを出すための鍵みたいな…そう思った私の考えは、タクが発した言葉によつてすぐに否定された。

「ちよつと待って、俺まだ魔法陣起動させてない。でもここから上に行ける奴なんて…」

そして青い光の中から、黒い羽の様な物が見え始めた。こんなのが該当するのは、ティアを殺したアイツ以外ありえない。魔法陣を挟んで反対側にいる2人に目配せして叫ぶ。

「ロイドー個目ー！」

(ティアは万一があつた時の援護を！)

こういう時は先手必勝一撃必殺。相手が認識出来ない間に最大火力をぶつけて刈り取る！私も大鎌をタクから外して構える。完全再現なんてしてないけど、ロイドの奴が本気で怖いからまだ近寄りはない。

「自由をー！」

そう言って双剣ではなく右の義手をロイドは振りかぶる。その硬い鋼鉄の腕に変化は無いけれど、そこには今排出された薬莖に込めた絶対的な死が宿っている。

擬似・幕引きの拳が転移途中の柊何某に直撃する。本来ならこの時点で、終わらされた柊何某は塵も残さず消え去る筈だったんだけど：まるで身代わりの様に、羽が1つ消え去った。

「まだだあっ!!」

動こうとした私の目の前で、ロイドの義手から薬莖が5つ連続して排出された。それに合わせ、柊何某の羽が全て消滅し転移陣から本体が血に濡れた状態で弾き出された。そして、

「まずっ」

その代わりとでも言うのか、魔法陣の中に進入していたロイドの転送が始まった。ここで1人だけ別行動なんて危険度が高すぎるけど、ティアを1度殺したコイツを放っておけるほど私は優しく無い。

「行ってタク！」

「必ず追いついてよ！」

これだけで伝わるのはちよつと癪だったけど、私の意図を察したタクが魔法陣に突っ込みそのままロイドと転送されていく。これ少しは安心できるだろう。

「さて、さてさて。出落ちした気分はどんな物かなあ？傲慢さーん」

「ころ、してやる…」

多分奥の手だったのであろう羽を消しとばされて、頭上の光臨も明滅してる状態で言われてもなんの説得力も無いんだけど。ドラえもん的に浮いてるけど、怪我自体は一切治ってないし。

「そうは言うけどさ、こっちだって同じ気持ちなんだよな」

「マスターに同意する」

タクだけを行かせたのは、決した私達が間に合わなかったからなんじゃない。私もティアも、コイツに対して正直怒り心頭だからだ。

「私の可愛い、大事な大事な精霊かぞくを殺した報い、受けてもらおうよ」

「さつきは取り逃がしたけど、今度は容赦しない」

背後のティアから強烈な殺気が放たれ、ぞくりと寒気を感じた。ティアがガチギレしてる…コワイ！なんて思ってる中、一瞬だけ殺気が消えて言葉が続く。

「でもマスター、そんな事言われると照れる。家族だなんて、恥ずかし

い。そう思ってくれるのは、嬉しいけど」

振り返ると、ティアが頬を赤らめながらそんな事を言っていた。ほんの少し表情が緩んでるし、何この可愛い生き物。

「ふざけるなああああっ!!」

そんな絶叫と共に放たれる謎の光。(意味深) じゃない破壊力を伴ったその光は、私の突き出した大鎌に近づいた瞬間消え去った。

「全く、敵のお巫山戯を待てないとか失格」

「ほんとティアの言う通りだよ…それじゃあ、戦い始めよつか?」

そう大鎌を引き戻してから言うけど、1つ間違っていた事に気がつく。

「ああ、ごめん間違えちゃった。これから始めるのは戦いじゃなくて、ただの一方的ないじめ^{食事}だった」

第24話 墮天使○を墮とそう

「私は、人間よ！断じてあんたみたいな奴の餌じゃない！」

羽は消え、光臨も明滅した満身創痍の体で、柊何某が私に飛びかかってくる。けど、そんな明らかに精彩を欠いた動きじゃ私達には届きはしない。

「確かに、人っていうのは心の在りようって聞くけどさ」

「自らの好いた人を、躊躇なく殺しかける奴は、人間って言える？」

攻撃を大鎌で受け流しながら、左右に分かれた私とティアで問いかける。心が人って言うなら、幾ら外見が変わっても人だって言えない事も…少なくとも好意的に接する事は出来るけど、

「小さな子供を殺して、高笑い出来るまで変わっちゃった心と」

「そうなる原因となったスキルを、制御しようとしな精神性」

「それはもう、人じゃなくて鬼とか悪魔じゃないの？」

「黙りなさいよおおおおっ!!」

絶叫しながら、柊何某が両手から例の極大の閃光を放ってくる。単体でもティアの防御を抜いて、ここに突入する時は魔物の群れを灼き尽くしたそれが二本。魔法なんて間に合わない距離だけど、私があるの対策も考えてないとでも？

「喰らい、奪え《暴食》」

「喰らい尽くせ《暴食》」

私の大鎌を中心に広がった光の反射しない黒い傘が、迫る閃光を一片の例外なく吸い込んだ。契約者と精霊が一緒にいる時点で、そんな雑な攻撃が通る訳ないじゃん。要するにT（ティア様）M（マジ）J（邪神）。

「なっ、嘘よ」

「そんな応用も何もしてない、ただ撃ってるだけのスキルが届く訳ないじゃん」

「精霊とその主は一心同体。いるといないとじゃ、天と地ほどの差がある」

ティアがドヤアとした顔で、残酷な真実を言い放つ。流石にそこま

での違いがあるかは分からないけど、本当に実力は変わる。肝心な時に参戦できない。パックとは違うのだよ、パックとは。

「マスター。風評被害はその辺にして、ちゃんと構える」

「あい」

気がつけば、柊何某が多分憎しみを込めた目でこちらを睨みつけてきている。それじゃあまあ、ここからは本気でやりますか。

「最初はね、私も怒りのまま貴女を斬り刻んでやろうって思ってたんだけど」

「それじゃあ、貴女とさして変わらないことに気がついた」

非殺傷状態の大鎌で柊何某の両手両足の根元を切り裂く。実際に斬れもしないし、今は痛みもカットしてるけど1日はこれで動かせない。

そんな状態になった柊何某の周りを、ティアと2人で某麻婆神父が受けてた様にぐるぐる回りながら話しかける。勿論、念のため拘束用の魔法は掛けている。

「かと言って、私が作ってみた拷問器具じゃ自分で手を下さない分、ティアの怒りが収まらない」

なんだろう、このグルグル回りながら問い詰めるの楽しくなくなってきたかも。戦いの最中にもこんな余裕を持てたらいいなと思いつつながら、スパートをかけてく。

「それじゃあ呪う？」

「そんなのじゃ、殺された怨みは晴れない」

「なら、発狂させる？」

「そんなの、私はもう見飽きてる」

ようやく頭が追い付いたのか、口から悲鳴の様な声を上げ始めた柊何某の前で止まり、声を合わせて続ける。

「だったら『害』は与えなければいい」

「でも、メンタルはボロボロにする」

そうやって私は門から、いかにもなピンク色の液体が入った丸底のフラスコを。ティアの門からは、よくウスⅡ異本に出てきそうな触手が現れる。

「というわけで。この知り合いからレシピを教えてもらったハイパー媚薬を貴方にかけて後、触手Ⅱサンに任せて私達は2人を追いかけるから」

「忘却と回復が使えるから、狂えないし死ねない」

実はこのハイパー媚薬。正式名称は恥ずかしくて言えないけど、勿論クラネルさんに教えてもらったやつでレーナさんにあげた物なんだけど……実は結構前に作った時、調合に失敗して私も一回頭から被っている。あの時はうん、ほんと1人部屋でよかった。

そんな私だから断言できる。自分が絶対にやられたくない事をつてコンセプトで始めたこれだけど、多分やり過ぎた。やめないけど。

「えいつー」

「行け」

私がへたり込んでる柵何某の上で媚薬ビーカーを爆発させ中身を撒き散らし、ずるりと門から出てきた触手Ⅱサンがゆつくりとした動きで迫っていく。

「ねえティア、何メートルくらい転移すれば『いしのなかにいる!!』にならないかな？」

「ん、大体6mくらい?」

後はもうごゆつくりどうぞだから、魔法陣の代わりに自前の転移で飛ぶ事にしてティアと相談する。まあ、石の中に転移しても顔さえ出ればどうとでもなるんだけどね。

「ひっ、なんで、なんで動けないのよ!魔法も使えないのよ!」

あんまり聞いてて気持ちのいいものじゃないから、やっぱりすぐに転移しちやおう。それに、そろそろクラネルさん特製の媚薬が効果を発揮し始める時間だし。魔法が使えないのは私達関係無いから別にいいよね!

「助けなさい!いや、助けてよ!」

そんな懇願の声を聞いて私達は揃って振り返る。反省はしてるけど、勿論許すつもりもやめるつもりも無くって……

「あつかんべーだ」

ティアと揃ってあつかんべーを繰り出し、結果の確認もせずロイド

達を追って上階へ転移したのだった。わたししーらない。

第25話 先行した者達

転移直前までとは打って変わって、異様な静けさに包まれた廊下の一本道を勇者と駆けていく。

ちゃんと効果は出たとはいえ、擬似・幕引きの拳の方を限界まで使ってしまったのはマズかったかもしれない。そんな事を考えている中、隣を駆ける勇者が話しかけてくる。

「ロイド君、そういえばさっきのパンチってなんだったの？」

「あれはまあ…簡単に言えばとっておきの切り札ですよ。もう使えませんけど」

半日経つかその時間で溜まる分の魔力を注ぎ込めば回復できるが、今更そんな事をしてる暇なんてない。暴発したら危険すぎるからこっちのカートリッジは作ってないらしく、理想送りの方しか満足に使えないため若干不安ではある。

「まあ、元々あんまり頼るなって言われてるしいいか」

「ん？何か言った？」

「ただの独り言です」

そう言って、外から見た印象からすると明らかにおかしな長さの廊下を再び駆けていく。『造った私が言うのもなんだけど、こんなただの《力》なんかに飲まれないでよね』そうイオリが言っていた理由が今ならよく分かる気がする。

イオリと一緒に戦った《強欲》のスキルで狂った誰か。ティアさんの死がきっかけで《暴食》に飲み込まれて暴走したイオリ。つい先程拳を交えた《傲慢》のスキルに身を委ねた斥候風の人。話に聞いた《傲慢》の人を含め誰もがマトモな思考では無くなっていたし、ワガママになっていた。ああいうのが力に飲み込まれたって言うんだろう。

「気を付けないとな…」

「やっぱり何か言ってるよね？」

「独り言です」

「さっきから独り言多くない…？」

困惑したような声を発する隣の勇者も持っている、七大罪とは真逆

の位置に存在する七元徳のスキル。違和感はないし使いこなせてる訳じゃないが、デメリットが殆ど無い代わりに例に挙げた3つと比べると弱すぎる。

長すぎる廊下に嫌気がさしてきたのか、そんな事を考えいた俺に勇者が爆弾発言を投げつけてきた。

「そういうえばロイド君って、蒼矢のどこを好きになったの?」「んなっ!?!」

スキルの弱さに答えが出かけていた瞬間、その質問によってそれは何処かに霧散した。《強欲》と戦っていた事を思い出していたこともあってか、頭の中に風に踊る銀色と肌色やら、抱きしめた時の感触やらが思い出される。いや違う思い出しちゃいけない。

「俺は一応元親友だからね。見た目こそ変わってたけど、一応悪い男に引つかかってないかとか心配だったんだよ。この分だと心配なさそうで安心したけど」

どこか我慢したような表情で勇者の人が言う。一応、イオリのお姉さんとかりユートさん達にも後押しされてたからな…告白できたのはつい最近だけど。

「で、でも今話すような話題じゃないでしょう!?!」

「いや、今だからこそだよ。勿論そんな気はさらさらないけど、1番死んじやう可能性があるのは俺だからね。正直悔しかったし妬みもしたけど、最後くらいは応援しようと思って」

あははと苦笑いしながら勇者の人が言った。普通なら応援してもらったから喜ぶべきなんだろうけど、元親友って聞いていたから許せない。

「応援してくれるのはありがたいですけど、死ぬつもりが無いならそんな諦めた見たいな事言わないでくださいよ。あなたが死んじやつたら確実にイオリは悲しむだろうし、俺はそんなの御免です」

「悲しんでもらえるかはともかく、確かにこれから戦いに行くって言うのにマイナスな考えはよく無いよね…で、蒼矢のどこを好きになったの?」

「ぶいぶいおっ」

一転してニヤニヤとした顔になった勇者の人が、とても楽しそうな顔で聞いてくる。話を交えようと思っていたのに、全くそれは出来ていなかったらしい。敵の影も形もないからいいものの。

「そりゃあ色々ありますけど…」

「うんうん」

そんな期待した目で見られても…いつも明るくて元気な性格とか、偶に頼ってくれる時見せてくれる弱々しさとか、ありきたりなところで言えば顔とか本当に沢山ある。

「けど、好きになった今どれか1つだけなんて言えないです」

「身長とか年齢の差も別に気にならないの？」

「お互い気にしてませんよ」

「本物…だと」

本気で驚いてるみたいだけど、そんなにおかしかっただろうか？俺とかイオリくらいの歳で婚約なんてありふれた話なんだが。

「まあいつか、これからも蒼矢を…いや、イオリさんをよろしくね。未長く爆発してどうぞ」

「？」

意味はよく分からないが、一応良いことを言われた？そんな疑問が頭に浮かんだ瞬間、そんな浮ついた気分を吹き飛ばすドロリとした霧囲気が場に満ちた。

「この気持ち悪い気配は…」

「間違いなく海堂だよ」

そう呟く俺たちの目の前には、絢爛豪華な…という訳ではないが今までとは明らかに雰囲気も意匠も異なる大きな門が見えていた。

本来なら玉座のある場所に繋がるのであるところには、元は神聖であつただろう物が歪められ邪悪さを感じさせられる物に変質している。

「合流するまで待ちます？」

「ここで待つにしろ一旦逃げ出して合流するにしろ、襲撃は免れないと思うけど？」

それなら決まりだ。たった2人だから心許ないが、着いちやつたも

のは仕方ない。顔を見合わせた後剣を抜き放ち、《勇氣》のスキルで補助効果を数多重ねて発動する。

「行くぞおおおっ!!」

多分イオリ達が追いつくまでさして時間はかからないだろう。それまで戦えれば全く問題はない。

覚悟を決めて、俺たちは海堂の待つ玉座の間に入行した。

第26話 激突

「はっ、辿り着けたのはお前ら2人だけかよ」

扉を開け放ち玉座の間に進入した俺たちを迎えたのは、そんなこちらを馬鹿にしたような言葉と嘲笑だった。

本来国王が座るべき玉座に座っているのがおそらく海堂。隣の勇者と同じように中肉中背、黒髪黒目なのだが何かがおかしい、何かが狂っている。肉体の異形化は無いように見えるが、雰囲気は異質な物に変質している。それを打ち消すように頭には絢爛たる王冠を乗せているが、行儀悪く組んだ足の隣には凄まじい存在感を放つ闇色の長剣が立てかけられている。

「残りはどうした、雑魚だから切り捨てたのかあ？強欲に飲み込まれた藻部島でか？あの柵とかいう傲慢でか？それとも鳥公に分けてやった怠惰に汚染された女騎士か？」

その言葉が指し示しているのは、イオリ達と明らかに今まで戦ってきた人達の事だと分かる。敵であるこちらをそう見なすのは仕方がないだろうが、俺たちが相手してきた人達すらこいつはまともに見てはいなかったらしい。

「まあ何にせよ、あんな化物共がくたばってくれて俺としては清々してるがなあ！」

「くたばるべきなのは、お前の方だあっ!!」

その馬鹿みたいな笑い声に、堪忍袋の尾が完全に切れた。

加減も躊躇も一切しない。無言で武技を発動。最速で、最短で、補助魔法の効果もあり己の限界すら超えた速度で、高笑いを続ける海堂に斬りかかる。

「どれだけ速かろうが」

普段から高速移動をしている俺でも認識しきれない速度で接近し振り下ろした必殺の剣は、どういう方法を使ったのかは知らないが火花と共に闇色の長剣によって受け止められていた。

剣を交えた感覚がおかしい。イオリが鍛え上げ調整してくれた頭のおかしい能力値の剣の筈なのに、鏝迫り合いが続くだけで斬れる気

配が全くない。

「来ると分かっているものに、むぎむぎ当たってやるわきやねえだろうがよおっ!!」

「っー」

そんな事を考えていた俺は、一瞬たりとも拮抗する事が出来ず吹き飛ばされてしまった。いくら空中だったと言っても、普通ならこんなあっさり力負けなんてしない。という事は、

「こいつ、今までのやつらと比べちゃダメだ。強い」

「ああもう、1人で飛び出すから。頭冷やして!」

半分程キレている勇者の人が、結界を展開しながら俺に回復魔法をかけてくれた。それと同時に、いつの間にか熱くなっていた頭が急速に冷やされていく。

「すみません、助かります」

「俺だって、蒼矢が泣くところは見たくないからね」

「ちっ、折角《色欲》に上手く嵌りかけてたっつーのに」

不快そうに顔を歪め、舌打ちをしながら海堂が玉座から立ち上がる。剣を持った右手をダラリと下げ、気持ちの悪い笑みを浮かべながらこちらを見据えている様からは殺気などを感じる事は出来ない。

何もないはずなのに。まだ危険性は低いはずなのに。鍛えられた感覚が、警鐘を鳴らし続けている。

「んなツマンネーことしやがって、ざけんじゃねえよ糞共があああつ!!」

「次元操^{ディ・ガランテイ}りし破邪の剣!!」

海堂の振り上げに追従して、何もかもを塗り潰す様な黒い斬撃がこちらに向かって振り上げられる。全身が総毛立つ気配のそれを迎え撃つのは、燦然と輝く聖剣の光。大上段から振り下ろされた恐ろしさの中に確かに暖かさのある極光は、闇色の斬撃とぶつかり合い衝撃波を撒き散らした。

「おおおおおっ!!」

「破ああああつ!!」

周囲に破壊を撒き散らしながら、鏢迫り合いは続く。お互い周りに

注意がいつてない分、俺は自由に動ける。両の手に持つ双剣を槍に合体させ、床に突き刺した槍を持ち吹き飛ばされないようにしながら右手から伸びる影で狙いを定める。

「新たな天地を望むか？」

「ちっ」

肘から葉莢が排出され、全てを違う世界に消し飛ばす力が発動する。性質上狙いがバレバレなこと力、余裕を持って回避されてしまった。

そしてその事によって解放された2つの斬撃が、玉座の間に致命的な破壊を齎したのだった。

◇

「あうあう…」

「マスター、ちゃんと歩く。いちいちあれ位で狼狽えない」

「でも男同士だから本音だろうし、えへへ…」

玉座の間的な場所に向かっている筈の一本道。敵の本拠地だといふのに恥ずかしいような嬉しい様な気分になって、無意識にニヤけてしまう。今は仕舞っているけれど、尻尾が生えてれば私の身体が揺れるくらいにブンブン振られる事だろう。

「私この戦いが終わったらロイドと旅行行きたいなあ、獣人界辺りに。あ、勿論ティアも一緒だよ？」

「嬉しいのは分かるけど、盛大な死亡フラグを立てない。それと、もし行くとしても私は実体化しない」

まあ、緊急時は別だけど。と、隣を飛行しているティアが付け加える。ふふん、どこ行こつかなー。綺麗な所沢山あつたしなー。

「覚^g」

そんな幸せな妄想の中杖を構えたピンク色の何かが見えたので、輪切りにする勢いで大鎌を回転させて斬り裂き、蹴りで壁に叩きつける。ん？この魔力って…

「マスター、この人王女」

「デスヨネー」

白目を剥いて口の端から血を垂らし、気絶して脱力しているこの国

の王女様がそこには倒れてた。どうしよう。生きてはいるけど、着たドレスを斬り刻んじやったせいでボンキュッボンな体が丸見えになってる。

「もげればいいのに」

「同感」

特にその牛みたいに成長してるところかとかどこかとかどこかとか。ティアも同意見らしいし、いつそ大鎌で喰らえばティアくらいなら…「なんか虚しくなったら止めよう…適当なマントでもかけて簀巻きにしておこう」

「了解。フロアに、ギルマスの所まで持って行ってもらおう？」

「そだね。それが良さそう」

それにしてもあれだよね、ピンクの髪って…淫。ピン王女とも呼ぼうかな？そんな事を考えながら、適当に取り出した白い布で包んだ後荒い縄でぐるぐる巻きにしていく。

「む。マスター、衝撃注意」

「はえ？」

自分のと比べて遥かに豊満なそれを揉んで悲しくなってる中、ティアがそんな事を言った。衝撃注意？私が首を傾げた瞬間、上の方から爆発音が轟いた。

「もう、始まつてるみたい」

「あわわ、急がなきゃ。フロア！この人をアルさんの所まで届けて。その後は別命あるまで城の上空で待機！」

「きゆうー！」

開け放った門からフル装備のフロアが飛び出し、脚で王女を掴んで飛び去っていく。よし、これでもう地下の王様以外暴れちゃダメな理由はなくなった。

「ティア、今の爆発があつた場所は？」

「この1つ上階、斜め前」

「ありがとう」

短くお礼を言い、頭を戦闘モードに切り替える。まずは、今まで散々やってくれた海堂をどうにか無力化しないとね。少なくとも再

起不能レベルまで痛めつけるとかして。

第27話 ミンチより酷えや

「くっ」

広めの室内に、攻撃が直撃したことで舞い上がった粉塵が満ちる。その所々黒い粉塵は、俺の持つ《豪嵐の加護》のお陰で吸い込む事はないが視界が不十分なのは確実に良くない。

「先ずはてめえだ!!」

「っ!」

不十分な視界の中、殺気と声の下方方向に向かって合体させた槍を振り抜く。そしてそれは、案の定金属音と共に弾かれた。なんなんだよコイツの馬鹿力は。

「見ものだったぜ、街でのお前らのデートはよお。けどなあ、年の差なんて関係ない、背が低くても気にしない。そんなのはただのロリコンだろうがよ」

「ふ、ぎ、けるなあ!」

俺はこんなに怒りやすかったか?そんな疑問が一瞬頭に浮かぶが、圧倒的な怒りの奔流にすぐに流され塗り潰されてしまう。まあいいやそんな事、目の前のコイツを切り刻めば済む事!

「だから落ち着いてロイド君!」

「うぐっ」

槍で突き刺そうとする体勢のまま、おそらく勇者の人の結界で吹き飛ばされた。一体何を、そう思った瞬間ついさっきまで俺がいた空間を闇色の剣が薙ぎ払った。なんで俺はこんな攻撃すら見えてなかったんだよっ…

「ああもう!俺がちよっとだけ稼ぐからステータス見て!」

「はい?」

そう叫びながら、聖剣を手に勇者の人が海堂に突っ込んでいく。あよ馬鹿力相手になんて無茶な…そう考えたらながらも、言われた通り自分のステータスを開き確認してみる。

「思考誘導〈怒〉?」

という事は、俺の今の考えは何か誘導されて歪められている?そ

う気付いた瞬間、ステータスに刻まれていたその文字列は溶けるように消えていった。

「ちっ、これだから元徳スキルは気に食わねえ！」

「イージス・シールドV！」フェイス

粉塵も巻き込み巨大化した剣を振り下ろそうとする海堂に対して、勇者の人が光を纏った聖剣と五重の結界で迎え撃つ。このまま撃たせちゃ確実に勇者側が負けると、今まで積み上げてきた経験が警鐘を鳴らす。

「撃ちぬけええっ！」

槍を右手に持ち替え構えると同時に、手の部分を緑色の結晶が覆い尽くす。演出だから害はないらしいし、あまり気にせず2つに割れた槍から極太のびーむ？を放つ。

闇色の剣と光を放つ結界を纏う聖剣、そして俺の放った青い光線。それらが空中でぶつかり合い混じり合い、何故か大爆発を引き起こした。

「ぐわあああ」

「うわあああ」

「ちいっ」

全力の攻撃を放っていた俺たちは、全員が全員受け身も取ることが出来ず衝撃波をマトモに食らってしまった。誰もが吹き飛ばされる中、誰よりも早く立ち直ったのは海堂だった。

「灼き尽くせ《憤怒》おおー！」

火系統の魔法とは絶対に違う原理で生み出された真つ青な炎球が7つずつ、まだ体勢を崩している俺たちに放たれる。勇者の人は元々防御に特化してるから迎撃できるだろうけど、俺は速度が速いだけ。初速はそこまで速くはないから回避は出来ない。

だからって諦める？そんなのは冗談じゃない!!

「Can^吹ite, fi^荒unt hor^れrida, Mor^死s
Vent^風us」

イオリ曰く『詠唱する必要がなくても、カッコいい詠唱をして技名を叫べば魔法は強くなるんだよ！半分受け売りだけど』って事だか

らイオリから詠唱に使っていた言葉を習って、最後にティアさんのア
ドバイスで完成近くまで漕ぎ着けた魔法。

ぶつつけ本番だけど、これを使う位しか生き残る方法がパツと思
つかない。加えて途中までしか発動できないけどやるしかない。

「ところがぎつつちよん!!」

後はもう魔法を撃つだけといった時にそれは起こった。聞き慣れ
た声と共に、床を爆砕しながら現れたのは一言で言うなら超巨大な建
築資材。噴き出すブースターによって無理やり加速させられたそれ
は、俺たちに迫る炎を掻き消し海堂に叩きつけられた。

「やつちやえティアー!」

「合点承知」

貼つてた結界を全て削り取られた勇者の人が顔を真っ青にしてい
るのを横目に見ながら、姿を現したイオリがティアさんに指示を飛ば
す。

どこにいるのか見渡すと、海堂がよく分からない叫び声をあげて飛
んでいく方向の壁に、豪炎を撒き散らしながら凄まじい音を立てて大
回転する何かを構えたティアさんが立っているのを見つける。

「滅・尽・滅・相」

そしてそのまま、空中に燃える二本の線を走らせながら唸りを上げ
る右腕のソレを飛んできた海堂に向けて突進して…

「うぷっ」

「うええ…」

俺とイオリは揃って顔を背ける。あのキチガイ武器が直撃した瞬
間海堂は、それはもう色々グチャグチャでバラバラで飛び散ったりし
て見てられない無残な姿に変わり果ててしまった。建築資材はいつ
の間にか消えている。

「抹殺完了」

『抹殺完了』じゃないよティアー! やれって言ったしそれを渡したのも
私だけどやり過ぎだよ!!」

「私は貰った武器を使っただけ」

涙目になってティアさんをポカポカ叩いているのを見ると、ここが

戦場だという事も忘れそうになってしまう。やっぱりイオリは色々規格外だな。

「あれ？そういえばタクは？」

「言われてみれば」

「いや、絶対下の瓦礫の中だと思うぞ？イオリ」

そんな事を言い合える全てが終わった雰囲気当てられた俺は、もう戦いが終わったと錯覚してしまっていたのだった。

第28話 ラスボスが復活はテンプレ

何かがおかしい。

それが私の、海堂との戦いを終えての感想だった。それは服が所々燃え尽き、肌色が見えてしまっているティアを叩いてる間も一切変わる事のない感覚だった。

「ねえ、ロイドにティア。もう戦いつて終わったんだよね？」

「海堂はさつき死んだし、その筈だぞ？」

ロイドの言葉を聞いても、やっぱり違和感は無くならなくて大鎌を手放す気にはなれない。勿論ずつとこの部屋を覆い尽くす位の索敵はしてるし、そこに反応はない。

「索敵範囲内に敵性反応なし。マスター、気にしすぎ」

「うーん…まあいつか」

自分の索敵だけじゃ不安だけど、ティアが言うなら本当に何も無いんだろう。まあ、何時でも戦えるようにしておけばいいか。そう自分を納得させて、とりあえず瓦礫の下にいるであろうタクに呼びかける。

「タクー、生きてるー？」

「死ぬかと思ったよ…って、何この雰囲気？」

瓦礫の中から【A・コロンビア】みたいなポーズで出てきたタクが、空中に浮かんでいる私達3人を見上げ、文句を口にしようとして首を傾げる。

「この雰囲気って？」

「みんなは分からないの？この、なんて言えば良いのか分からないけど気持ちの悪い雰囲気」

そう言つてタクも聖剣片手に周りを疑いの目で見渡している。タクと私だけが分かるつてことは、異世界人限定で分かる何か？なんて思うと同時に、背筋が凍るような感覚が走った。

Svartalfheimr Dainsleif
「幻想世界・戦乱の剣！」

反射的に広げたのは《強欲》には相性が最悪で聞かなかつたけど、私が絶対の信頼を置く創造。強制鎮静の世界。ティア以外完全に逃れ

る事のできない静止した世界の中、振り向いた私が見たのは…

『なーんだ、気づいたんだ』

奇妙なエコーのかかった声でそんな事を言う、いつの間にか近くにいた人型の黒い靄だった。ノイズが走っているように、人型なのは分かるけどそれ以上の事が分からない。今目視するまで一切魔法の探知に引っかからなかったし、《叡智》を使った解析でも全く情報が読み取れない。

「ぱんつぁー!!」

『あ、ちよ』

何が何だかよく分からなくて怖いのはあるけれど、この妙な雰囲気の大元がコイツだという事は何となく分かった。

だからとりあえず、ネタで作ってあつたパンツアーフアウスト100本程を全弾、門から発射したのだった。

◇

「全員戦闘たいせー!!」

背後から爆音が轟き、イオリ曰く強制鎮静の結界の中そんな声が響き渡った。何事かと納刀していた双剣を抜き放ち振り返ると、大鎌を構えたイオリがこちらに後退してきていた。

「ティアどう？殺れた？」

「マスターのせい、その可能性は消えた」

「敵か？」

爆煙を横目に、後退してきたイオリとティアさんに話しかける。一応聞くまでもないことだけど、確認しておきたかった。せつかくここまで生き残ったんだ、全員無事に凱旋したいと思うのは当然だろう。「えつとね、とりあえず敵!」

『いきなりだなんて酷いじゃないか』

返答とほぼ同時に、爆煙を吹き飛ばして黒い靄が出現した。妙な響き方をするその声は、簡単に言えば気持ちが悪かった。さつきまでイオリや勇者の人がソワソワしていたのは多分こいつのせいだろう。

『こういう戦いは、まず互いに名乗りを…』

「俺は何をすればいい?」

「物分りが良い、ロイドは頼りになる」

「それじゃあ、足りない魔力は私が供給するからさっきの魔法お願い」
「分かった！」

とりあえずアレは敵と判断した上イオリがサポートをしてくれる
と言っている。そんな状態で、敵の話に耳を傾けてやる必要なんてあ
りはしない。

「Canite^吹 , fiunt^荒 horrida^れ, Mors^死の
Ventus^風」

俺の尽きかけていた乏しい魔力の代わりに、イオリ達の莫大な魔力
が義手から流れこんでくる。彼女との共同作業と言うだけでやる気
が天元突破する、ミスなんて許されない。

「マスター、ソレを発動したままじゃロイドの魔法は失敗する。つい
でに勇者も動けない」

「む、そっか解除。来てフロー！タクを乗せて」

天井に空いた穴から、見慣れた幼龍が侵入してきて一直線に下降し
てくる。多分勇者の人を回収するのだろう。それなら俺がやる事は
ただ1つ。魔力を練り上げ、術式を構築し、いい感じの詠唱をして、最
強だとイメージして、気合と根性でぶっ放す!!

「It^イha^タqua^カ・Aerospa^果ce^ての^蒼」

風と次元の魔法が唸りを上げて駆動し、組み上げた魔法を正常かつ
円滑に発動させる。中途半端な状態、即ち俺の風の魔法だけで発動さ
せた場合全てを凍らせる竜巻というよく分からない物になるこの魔
法だが、次元魔法が混ざると効果は一変する。

「正直この魔法、私の《槍》と同じで抑止力が働きそうで怖いけど…」
凍える様な風が荒れ狂い、果ての無い蒼のみが広がる世界がここに
は在った。地面なんて物は無く、眼下に広がるのは雲の海。

輝く太陽の光が、イオリの持つ大鎌の刀身に反射する。

「加減なしの全力を出すには、ここ以上に適した場所を私は知らない」
簡単に言えば、異空間の創造。リアリティ・マープルとかいう物に
近いらしい。手にした杖から虹のような光を放つティアさん曰く、サ
ポート込みで俺じゃあ保って30分程度らしい。

「それに時間制限はあるけど、ここなら邪魔は入らないし入れさせない」

あわよくばこの魔法で…と思っていたけれど、例の黒い霧はさも当然かの如く空中に浮かんでいる。最後の敵と戦う主人公達が特別な場所で死力を尽くす、実際にそんな状況になってみると燃えるな。

「流星群」イオリ・キリノ

「その精霊、ティア・クラフト」

「天風」ロイド

大鎌、長杖、双剣を突きつけられた黒い霧が、ニヤリと笑った気がした。ここまでこっちがやったんだ、勿論乗ってきてくれるよな？

「魔神」名はない

黒い霧がキチンとした人型に固まり始め、手に持った黒い何かをこちらに向けて宣言する。

「『いざ尋常に、勝負！』」

よく分からないハイテンションのまま、俺たち3人と自称魔神との最終決戦が始まった。

フロアに乗っている、勇者の人だけを置いてけぼりにして。

第29話 龍明姉さんリスペクト

突きつけた大鎌を引き戻しながら、今のこっちの戦力を確認する。近接・速度特化のロイド、後衛・大火力のティア、ある程度自由に色々できる私と、動ける硬い盾フローとタク。

自称魔神の戦力がどれ位だか分からないから正直対応に困る。けど何時までもそんな風に手を拱いてる訳にもいかない。

「だったらまずは小手調べ！」

私は左手を天に掲げ、色んな種類の魔法を組み合わせて1つの幻想ロマンを再現する。僕が生活していた時代にも理論しなくて、けれど私の好きなゲームのラスボスが使っていた物。

運動エネルギー弾、カツコよく言うとKinetic energy penetrator。衛星軌道上から音速の十倍もの速度で金属の棒を叩きつけるとか言う、流星群とは違った超兵器。

「ロッズ・フロム…ゴオオオッド!!!」

ロイドの速攻やティアの魔法よりも速く、私の放った神の杖が魔神へと迫った。周りの被害を気にしなきゃいけない地上とは違って、真正銘全力全壊。撃墜するにしろどこかへ飛ばすにしろ相殺するにしろ、ある程度の実力は測れると思っていたのだけど…

「へ？」

ボツという空気を切り裂く音の後には、ほんの数秒前まではあった人型の姿はなく、ただ散り散りに四散した黒い靄が残っているだけだった。危機感は無くならないから死んではいないんだろうけど、拍子抜けかも。

『全く、あんなのを最初から撃つだなんて』

『やっぱり君の頭は』

『狂ってるよ』

そんな事を思っていると、私をバカにする事を言いながら黒い靄が集まって形を成していく。その人型の数は3つ。フローとタクがティアのサポートに入ってる現状、丁度同じ数と言える。

というか、私頭狂ってなんかないし。

『さて、それじゃあ始めようか』

黒い霧がそれぞれの元に飛んで行く。フロアがない分実は落ちるけど、門から機銃を掃射して足止めして大魔法で殲滅：そんな事を考えていた私の思考は、突如ロイドの姿へと変身した魔神（自称）のせいでどこかへ消え去った。

『おおおっ!!』

「ちよっ!?!」

慌てて大鎌を回して、私が作った物と寸分違わない双剣を弾く。しかもロイドの動きまで真似てるのか、本物には二、三步劣る連撃を繰り出して来る。

『これが本来の大罪スキルの使い方。色欲で相手の心を覗き見て、強欲で芯を形作り、憤怒で肉を作り出す。強欲は半分、暴食も怠惰も君のせいで無いけどね』

説明してくれる事には感謝したい。なるほどそういう理屈で真似なんて事してくれてやがるのね？

ロイドと同じ綺麗な緑色の髪、解析を使えば贋作って分かるけど見た目は完全に私製の装備類。唯一目だけは本来と違って白目が黒・黒目が黄色なジエノス目だけど、色々と腹が立って仕方がない。

「お前なんかが…お前程度が、私のロイドを穢すなあ!」

魔力放出を真似た一撃でロイド（偽）を弾き飛ばす。同時に魔法、《タキオン神経加速》を発動。

ナノゴーレム及び砲門最大展開。OW：ヒュージミサイル展開、デイス・ワイ・ローア熾凍の咆哮からメギドラオンまで5つずつ並列展開。魔眼と次元魔法にリンク、ロックオン。

そしてそれら全てを一旦凍結。

「この身は悠久を生きし者。ゆえに誰もが我を置き去り先に行く。追いつきたいが追いつけない。才は届かず、生の瞬間が異なる差を埋めたいと願う。ゆえに足を引くのだ——水底の魔性」

こちらに再度突撃しようとしていたロイド（偽）に、上から散々と照りつける太陽のお陰で出来ている私の影が伸びていく。私が自分の作品の贋作を、自分の彼の偽物を、存在自体許すわけ無いじゃん。

「波立って遊べよ、拷問城の食人影」
チエイテ・ハンガリア・ナハツエーラー

あくまで偽物紛い物。それでも、私の広がった影に触れた物は総じてその動きを止められる。前使った時ですらクトウルフとか神話生物の動きを止めた魔法で、ロイド（偽）の動きが完全に停止する。

『この身体は、君の彼氏の物と同一だ。本当に君にそんな事が出来るってのか!? 「やめてくれ、イオリ!」』

魔神（自称）が、最後だけロイドの声も真似して言ってくる。へえ、やめてくれねえ…? ロイドの声真似でそんな事を言われると、そんな情けない事を言わせられてると思うと、ただでさえプンプンがおーな感じだった怒りが、天元突破してグレンラガンしそうになる。

それに、龍明姉さんが言ってた。

「真に愛するなら壊せ!!だよ」

本当にそこまではしないけど、喧嘩とかお互いの意見をぶつけ合えない様じゃ、依存とかそういう悪い方向に向かって行っちゃうと思う。そんなのは嫌だし、だからこそだ。

フリーズアウト Abyssus abyssum invocant
「凍結解除・灰燼に帰せ我が怒り!」

良さげの格言を思い出したから叫び、それと同時に止めていた物を全て開放する。まず最初に門から顔を出した、アハト・アハトを筆頭とする馬鹿らしい近代兵器群が火を吹く。第二陣として、溜めに溜めた様々な魔法の数々が爆煙立ち込める場所な着弾して行く。

そして止めとばかりに、核の代わりにタナトニウムを積んだ超巨大ミサイルが直撃する。

「やった…かな?」

色々な装備類が門の中に仕舞われていく。SLBはロイドの固有結果もどきが壊れるから今回は無しだけど、あれだけの数の諸々を直撃させたんだ、何かダメージは負ってくれたはず…

そう期待しながら、爆煙を警戒して私は見つめるのだった。

第30話 魔神、死すべし

「やった…かな？」

言っちゃってから、これが倒せてないフラグだという事を思い出した。数多の兵器が門の中に帰っていく中、私は気を引き締め直して大鎌を握る。私の装備作品の贗作を纏うロイドの偽物、そんなのは許しておけない。

「《デイメンション》」

追撃のために探知の魔法を広げた瞬間、頭に割れそうな痛みが走って何か致命的な部分にパキンと罅の入る音が聞こえた。

「っっ！」

魔力をほんの少し動かしただけで、全身を切り刻まれたみたいなの、焼け付くような痛みが走る。原因なんて分かりきってるから、弱みを見せないように声は出さない。涙はポロポロ流れてるけど。

「けほっけほっ。っほっ」

不意に出てきた咳を抑えた左手を見ると、私の血で真っ赤に染まっていた。短時間の間にデメリットまで再現しているOWを連続使用、限界ギリギリの魔力操作で銃火器を操作して、その上加減無し魔法を多重発動…こんな幼い身体で、病み上がりの魔力回路で、そんなバカな事をして耐えられる訳がない。

「まあ、まだまだ戦うけどね」

シイラさんの所で買った物より効果は劣るけど、片手間に複製してみた魔力回路修復薬（仮）を噛み砕いて飲み込む。スクナヒコナなんて薬とかお酒の神様の名を持つ職業を持ってるからね、複製くらいなら簡単に出来る。

「私だって、前とは違うもん」

アルさんの攻撃を防いだ時には、回復まで凄くかかって大変な目に遭った。だから、大鎌の回復能力をバランスが崩れない程度に拡張したし、今から自分を更に強化する。

「職業、選択」

そう宣言すると、大鎌と私の間地点辺りに見慣れた選択画面が展

開された。やっぱり貫つておいて正解だったね。

そして今の私のレベルは、魔物を殲滅したりなんざりしていたおかげで201まで上がっている。つまり職業の選択欄が2つ空いていて、その分自分を強化する枠は残ってるって事になる。

「インストール、ディアン・ケヒト」

選ぶ1つ目は、ケルト神話辺りの神様の職業。元が医療や生命、技術の神様だけあって回復速度が上昇する。

そして選ぶもう1つ。今まで私は鍛冶とか物作りに関する職業だけを取ってきたけど：最近の酷いトラブルの巻き込まれ方のせいで、このままじゃいつか死んじゃう気がしてきた。

「だから1回だけ、ほんつつつつつとうに嫌だけど主義を変えてあげる」

聞こえてないだろうけど、爆煙の中から脱出した魔神（仮）に語りかける。勿論物作り系以外の職業を取るつもりはないけど、絶対戦闘能力を持つてる頭のオカシイ神話に1つだけ心当たりがある。

「インストール、ヴィシユヴァカルマン」

ケルトはケルトであれだけど、インドほどぶつ飛んでる神話を私は知らない。ガネーシャとかほんとどうなってるのあれ。ん、ちよつと待つて？私がこんなに戦闘大好きっ娘になったのって、ゴブニュ（ケルト神話）の職業を取つてから：

「まあいつか。塵と消えろ！梵天よ、^{ブラフマ}地を覆えアアツ!!」

折り畳まれ銃の形に大鎌は変形し、普段撃つ銃弾や魔力弾と違って巨大なビームの様な閃光が発射された。^{Dies irae}怒りの日出来そうな位の私の怒り、これくらいで収まる訳が無いと知れ!!

◇

『やあああー!』

「ちいっ!」

幾度となく剣閃が交じり合い、金属音が連続する。高速移動しながら俺と斬りあってるのは、魔神が変身したらしいイオリ。目は黒と黄色の禍々しい物に変容しているし、持っている武器も大鎌ではなく薙刀。最近ずつと装備している棺桶も無いけど、声や姿は完全にイオリ

そのものだった。

そしてそれが、この本人とは比べ物にならない程弱い魔神を倒せずにいる原因だった。

「破あつー！」

『きやあつー！』

この短い時間の中で、2回目の薙刀を弾き飛ばす事に成功する。普段魔物や盗賊と戦うときの様に、後はこのまま左手の剣で首を薙いでしまえば終わりになるけれど…

『いやあ、助けてロイド…』

そんな泣きそうな弱々しい声が聞こえて、振り抜くのを一瞬だけ躊躇してしまう。無論真剣な戦闘の中で、そんな隙を晒してしまえば…

『君は本当に甘くてやりやすいねえ』

「くそつ」

魔神の放った黒い魔法が俺に直撃し、なす術もなく弾かれる。思った以上に威力の無い魔法に首を傾げると同時に、裂けたような笑みを浮かべる魔神かポツリと呟く。

『そのまま死んじやえ』

そんな言葉が聞こえた途端、寒気と同時に常時展開している結界に亀裂が入った。そして結界を超えて進入してきたお陰で、それが何なのか即座に理解することができた。

それは、簡単に言うなら見えない斬撃。風を支配下に置いてる今、それが俺を取り囲んでいる事も分かる。

「リミッター解除ー！」

今まで一度しか使ったことのない翼のリミッターを解除。更に速度を上げ、装甲が展開して光の刃を発生させた刃翼も含め全身の武器を使ってこの刃の檻を迎撃する。

「シッー！」

斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って斬って、時折蹴って斬り続ける。そうやって、過密な程周りに存在する見えない斬撃に対処しているせいで魔神から少しだけ意識が外れてしまい…

『ほら、こんなにも隙だらけだ』

背後から突き出された薙刀に、大きく右の脇腹を抉られてしまった。即座に傷口を緑色の結晶が覆い尽くし、砕け散って傷は治ったけど痛みは消えない。

「うぐっ、本っ当にやり辛いな…」

最後に一回転して見えない刃を全て蹴散らし、邪神を睨みつける。ほんの少しだけの躊躇は消えそうにないし、この場所の全力も出すに出せない。そんな事を思っていた瞬間、完全にキレているイオリの怒声が轟いた。

「真に愛するなら壊せ!!だよ」

次いで尋常じゃない爆音。真に愛するなら壊せ…か。そんな事考えた事もなかったけど、そう言う風な考えもあるんだろう。

「イオリもああ言ってるし、そうだな。踏ん切りが付いたよ」

『はあ?』

俺の周りで風が吹き荒れる。ただイオリの姿なだけで躊躇してるなんて、悪いよな。

「発動《風に乗^{ウエ}りて歩^{テイ}む者》」

第31話 風に乗りて歩む者

「発動、《風ウエに乗りて歩む者テイゴ》」

この空間の力を使って、俺は1つの魔法を発動させる。傍目にはただ吹く風が強くなった様にしか見えないうけど、これでちゃんと完全に発動している。問題はない。

『何も変わらないじゃないか、もしかして虚仮威しなのかなあ?』

「そんな訳、あるかつ!!」

そう言い切った瞬間、俺は二刀を振り上げた状態で魔神の背後に移動し終わっていた。限界速度を振り切った移動のせいで翼の結界が砕け散るけど、あいつが気付く頃にはもう何もかもが遅い。

「破あつ!!」

自分の制御出来る限界を超えた風で加速させ、勢い良く二刀を振り下ろす。まだこれは基本的な使い方、ただ加速しただけ。ザツクリとX字に背中を斬られて距離を置く魔神を睨みつけながら、集中する。

風を操作、空気中にあるらしい水分を生活魔法で補いながら凝結。

『痛いよ…どうしてロイドはこんな事するの…?』

「もうその手には乗るか!」

パキパキと音を立てながら俺の周りに作られていた氷柱。圧縮した風でそれらを紛い物に発射する。イオりに撃つても一切意味のない攻撃だけど魔神にとってはそこそこの脅威だったらしく、薙刀で次々と氷柱を迎撃している。

勿論これで終わりなんかじゃない。なめぶ?つてヤツは嫌われるらしいから、迷う必要のない今はもう始まりから終わりまで全力を尽くす。

「《ストームブリンガー》!」

元々俺が父さん母さんと組んでいたパーティーの名前を借りて、二刀を挟み込む様に振る。発生するのは真空の刃を孕んだ2つの大竜巻。氷柱に手間取ってる魔神にそれを避ける何て事が出来るはずも無く…

『ああああああつ!』

竜巻に巻き込まれ、切り刻まれボロ雑巾の様になっていく。幾ら割り切ろうとしたとは言え、あくまで見た目も声も自分の彼女とほぼ一緒。そんな魔神に攻撃していくのは、どうあっても最悪な気分になるし手を緩めてしまいそうになる。

「だからもう、これで終われよ!!」

合流し巨大化した竜巻の上に、この蒼穹を汚す様な真つ黒で放電を起こす雲が発生している。それは今の俺の心の内を表すかの様で、とつとと振り切つてしまいたい。だからほんの少し魔法で誘導した瞬間：

「《トニトルス》！」

俺の叫んだ魔法名も、魔神の叫び声も掻き消す爆音を轟かせ竜巻の中心に落下して行つた。真つ黒に焦げた何かがパラパラと落下して行くのを見て、込み上げる吐き気を無理やり押さえ込んで発動中の魔法を解除する。

「くそっ、うえっぷ…」

もうやつてしまった事とはいえ、本当に最悪な気分だ。悲鳴とか苦痛の叫びとかが頭にこびりついて離れない。自分で自分の彼女を殺させるとか、魔神汚いマジ汚い。

『うふ、ふははは、あはははははははははは——!』

心の中で魔神を馬鹿にして落ち着こうとしている俺の周りに、どこからか黒い靄が滲み出てきた。そして反響しているような、爆発するような嘲笑を響かせる。

「新たな天地を望むか？」

振り切れて逆に冷静になった頭で、擬似・理想送りを放つ。斬つても焼いても無駄なんだつたら…そう思つての行為だったけど、一部分を削り取っただけであまり意味は無かったようだ。ああもうイライラする。

そう一度冷えた頭が沸騰しそうになった瞬間、風に吹かれて黒い靄は流されていった。倒せた感じは微塵もしないし、流れて行つた方は…

「イオリが戦つてる方か」

そう言つて見る先では、尋常じゃない大きさの火球に俺の使つた魔法とは比べ物にならない程巨大な雷が発生している。いや、それだけじゃない。雲海からは極太の氷柱が発生しては砕け、何処からか発射され続けている光線を乱反射させ、その先では竜巻が荒れ狂っている。上空からは一定間隔で光の柱が堕ちて来て、俺の姿で逃げる魔神に殺到している。

集中して探すと、銃砲火器の飛び出した棺桶の後ろに、幾つもの黒い逆さの十字架を浮かべたイオリが、大鎌片手にとっても楽しそうな笑みを浮かべながら何かをしている。飛んでくる破片やら何やらは境界とその周囲を回る黒い液体が全て弾いており、怪我はしてないように見える。

「まだ行かなくていいよな。うん」

不思議な事に一定の範囲を超えると何の影響も出していないが、あんな中に飛び込んだら10秒と経たずに死んでしまう未来しか見えない。

だからいつでも駆けつけられる様、ポーションで回復しながらしばらくは様子見に徹しようと思う。

◇

「さて。あなたには選択肢が3つある」

全身を拘束したマスターに化した魔神。もう何も出来ないそれに杖を向けけながら、私は選択肢を突きつける。勇者？良い盾として使っていたら、フロアの上でいつの間にか動かなくなっていた。酔つたらしい、使えない。

「1つ、素直に情報を吐いて本体に戻る。2つ、情報を吐かされて本体に戻る。3つ、記憶ごと全てを喰われる。さあ選べ」

『はっ、そんな』

「答えは聞いてない」

よくよく考えると時間をかけるのは得策じゃないので、頭に旧支配者・旧神の名状し難きイメージを送り込んで速やかに精神を破壊、人形にする。

「さて、洗いざらい吐いてもらおう」

その前に、このレイ○目のマスターの顔を保存しないと。

第32話 ロマンの分かるラスボス

保存は終わった、気を取り直して情報を吐いてもらう。勇者からうわあ…って目を向けられてるが、そんなのはどうでもいい。

「まず、あなたの名前は何」

『無い』

そんな最初と変わらない答えが返ってくるけど、そんな訳が無い。パツと見、あの砕け散った元勇者と契約していた。それならば必ず名前があるはずだ。

「邪神でも魔神でも、本来の名前か契約時の名があるはず」

『木っ端な神である僕に、名前は無い』

「ならば、この事態を引き起こした目的は」

名前に関しては他の情報に比べ優先度が低いので、この際置いておく。次はまだ人間界のみだけど、世界を掻き回す様な事を起こした理由を問う。

本体と接続した事により戻ってきた記憶によると、大罪スキルは元々はかなりの悪行を行った者に送られる、そんなスキルだったはず。

『人が墮落し争い合うのを見るため。それを鑑賞するのは、何にも代え難い娯楽だ』

「そう、なら次はあの勇者を選んだ理由」

『都合が良かったから。時折行われる異世界からの誘拐は、壊しやすい人物が多い』

確かに、平和ボケした世界から召喚された人は諸々に耐えられる可能性は低い。マスターやそこでグツタリしてる勇者が異常なだけだ。『だからわざわざ、リインネートからの干渉を人間界のみ跳ね除けている。異種族は、精神が強くてツマラナイ』

そしてこれが、この世界で人間だけが勇者召喚なんて大規模な拉致の出来る理由。リインネート然り、この魔神然り、なぜこうも神は自分勝手な理由でしか動けないのか。私とて言えた事じゃ無いのは自覚しているけど。

「俺達は、お前の欲を満たすための道具なんかじゃない」

『そんな事は知らない。なぜ神が人の意見なんて聞かなければいけない。人はただただ神の掌の上で踊ってればいい』

青い顔をした勇者の発言を、魔神は即座に切り捨てた。その理論は全くもって気に入らない。不愉快だ。神と人：つまり信仰とは切り離す事なんて出来ない。リインネットにだって信仰はあるし、非常に不本意ながら私の本体にもある。

神とは祀り、鎮め、拝跪し、畏れ、敬うもの。無論それらを受けるなら、生きる者が重要になってくる。それを受ける側としては言い方がおかしいけど、生きる者を軽視しているならば名前が無いのにも納得だ。

「なるほど、納得した。差し詰めお前の正体は、中途半端に神になってしまった何か」

そしておそらく、リインネットもいるあの会社にでも就職したのだろう。謳い文句と金払いだけ良い、あの真つ黒な会社に。そして逃げ出したと。そして現在、自分の欲望のままに活動して限られた資源を貪っている。

「差し詰め、悪い側面のみを目を当てた、現実から逃げ出したヒキニート。いや、命を弄んでる以上、それ以下」

「ティアさん、幾ら何でもそれは酷い…」

絶対零度の目で魔神を見つめる私に、隣の勇者がそんな事を言ってくる。確かに、こんな奴と比べるなんて理由のあるニートの人に失礼か。

『そして1番の目的は、1番の目的は…』

そんな事を思ってる間に、魔神の目に意思の光が戻ってきてしまった。早くどうにかしないとマズイ。

『リインネットの管理するこの世界を、メチャクチャに壊してやる事だ!!』

「喰らい貪れ、《暴食》オーバーイート」

小型の門から溢れ出た白い霧が魔神を包み込み、魔神を喰らっている。同時に暴食の力で、意思を無視して記憶などを消化する容量で読

み取り：

「まずい、マスターがピンチかも」

「へ？」

少しだけ食べ切れなかった黒い靄が、楽しそうにドンパチやってるマスターの元へと飛んで行った。

◇

「空気がうまい！身体が軽い！私は今、生きている！！」

両手を広げてそう叫びながら、数多の銃火器や魔法を逃げ回る魔神に向けて乱射する。本当はクラスのみんなを帰すのに使うはずだった魔力まで使ってるけど、何にも気にせず全力を出すのがこんなに楽しいとは思わなかった。

「オン・コロコロ・センダリ・マトウギ・ソワカ」

増幅兼制御の背後に浮かべた逆十字が鳴動し、一気にMPが削れる。想像上可能だったけど、地上じゃ被害が大変な事になるので使えなかったこの物真似、今こそ放とう！

「六算祓エヤ、滅・滅・滅・滅、亡・亡・亡！」

解き放ったのは、同心円状に広がっていく振動。どうにも使い勝手の悪い地属性の魔法、それで出来てしまった地震の再現が何倍にも増幅されて世界を軋ませる。

『うおおおおっ！！』

勿論あの元ネタの空亡さんとは違って常時発生させる事なんて出来ないから、振動が直撃して分解された弾をすり抜け、ボロボロになって血だらけだが五体満足の魔神（ロイドフォーム）が私に突撃してくる。

「いらっしやーい」

大鎌に《暴食》を纏わりつかせ、某神喰いの捕食形態みたいな形を形成する。ふふん、ロイドの力ならこれ位抜けられるって信じてたもん。対抗策は容易済み！

「いただきますー！」

『あ、がっ』

魔神（ロイドフォーム）には左腕を犠牲にして逃げられてしまった。

けど、そろそろ貼ってる結界に跳ね返った振動が返ってくる頃の筈。『ぐ、があああああ！』

「あーあ、やっぱり」

自分の所まで帰ってきた振動を、棺桶で吸収・放出して中和しながら錐揉み回転で落下していく魔神を見る。まだまだやりたい事あったのに、私が終わらせるとでも？

「超新星——雄弁なる伝令神よ。汝、魂の導者たれ」

魔神が纏っていたのは紛れもなく金属。自分の技じゃないし、詳しい部分までは覚えていない技だけど名前がかっこいいから採用。磁力を操作し、魔神をこちらに引き寄せる。

「必殺ー！」

大鎌を門の中に投げ捨て、右手を大きく天に突き上げる。金属の生成と錬金術をフル活用して顕現するのは男の浪漫。雄々しく回転する、身の丈の何倍もある超巨大ドリル。私は今は女の子だけど、男の浪漫は忘れてなんかない!!

「ギガああ、ドリルうううう、ブレイクうううううう!!」

超巨大なドリルと一体になって、私は魔神に突進する。螺旋力なんて無いけど、それでも浪漫の塊は魔神を貫通? うん、微塵になっただけこの際貫通でいいや。魔神を貫通した。

空中でカツコつけてドリルを振り抜き、無理矢理作ったドリルは光の粒子になって空気中に溶けていった。

「ふう、かんっぺきである」

なんでだろう、すつごくエレキギター鳴らしたくなってきた。後で頑張ってみよう。出来なかったらamazonで買おう。

そんな必殺技後の余韻に浸る私の視界内で、散った黒い靄が他の2方向から集まってきた靄を取り込んで巨大化していく。

「倒してからの巨大化って、なんて定石を踏んでくれる敵なんだろう…」

「マスターは、そういうの嫌い?」

靄を追って戻ってきたティアに聞かれた。フロー(と、その上で青い顔をしてるタク)も元気そうだし何より。あとね、

「ううん！大好き!!」

「さっきのを見てると疑問なんだが、俺たちに来ることってあるのか?」

同じく戻ってきた妙にソワソワしてるロイドがそう聞いてくる。超巨大ドリルなんて溢れる浪漫だからね、ソワソワするのも仕方ないね。

「大有りだよ！なんてったって、ラスボスはみんなで団結して戦って倒すのが1番だもん！」

この世界がゲームじゃないって事は十二分承知してるけど、やっぱりラスボス戦っていうのはそういうものでしょ！

いつぞやのクトゥルフ位まで巨大化した魔神を見ながら、私はそんな事を思うのだった。

第33話 変身中の攻撃はルール違反

『もういい、雰囲気に乗って同じ土俵で戦うのはやめだ』

ただの黒い人形の靄だった魔神が、段々それっぽいな姿に定まっていた。腕には三本の斬れ味の良さそうな爪が生えていて、太さは大体私の身長のお二倍くらい。所々鎧のように甲殻が付いていて硬そうだし、当たったらどうなるのか分かったもんじやない。

足に関しても似たような物で、爪と甲殻が光を飲み込んでるみたいな黒と紅ラインで形作られていく。

「ねえティア、見るからに怒ってるけど何か言ったの？」

「最悪のヒキニート以下って」

「あと、戦ってる時には散々煽ってたよ蒼矢…」

「精霊はマスターに似る」

それならあんなに怒ってるのも不思議じゃないかな。ふむふむと領きながらそう考えてる間にも、変身は続いている。あ、長めのデインバルドみたいな尻尾生えた。

「むう、私そんなに酷い性格じゃないのに……ロイドの方では何かあった？」

「俺はイオリに変身したあいつと戦ってただけだが……いいのか？攻撃しなくて」

「絶対だめ」

即座にロイド以外の全員が反対する。変形・変身は華だもん。それを遮るなんて事をしたらどっかの誰かさんと同じだし、やりたくないもん。というか、なんかロイドの雰囲気が沈んでるっていうか良くなさそうっていうか……

「私に変身した魔神と戦ってて、無事に戻ってきてくれたって事は魔神を倒すなり殺すなりしてきたって事だから……」

殺すって言った辺りでロイドの肩がピクリと動いた。ヒヤッハーしてた私と違って、あんな手段を取られたら多分……よし、なんとなく予想できた！

「はい、ぎゅー」

「へ？」

胸当てを外してロイドの事を抱き寄せる。もし想像が間違ってた
ら、赤面フアイヤーでデデデースな事案だけどやるからにはやり
切っちゃおう。

「ロイドが倒してきたのは私じゃないし、凄く元気だから。もし気に
してるなら泣いちゃってもいいよ、私なんかの胸で良いなら貸すから
さ」

「今の蒼矢に貸す胸なんt!？」

余計な事を口走ろうとしたタクに砲門から威嚇射撃をして黙らせ
る。こ、こつちだつて言つてて恥ずかしいし多分心臓の音とか……う
ん、気にしない事にしよう。

「なんでバレたのかは分からないけど、流石に今はしないぞ。後から、
その、頼むかもしれないが……」

「う、うん。分かった……」

私の腕の中から出て行つてしまった真つ赤なロイドと目が合い、防
波堤が決壊したかの如く羞恥心が溢れ出す。えう、あう、私はなんで
こんな事言えたのさ……

「ねえティアさん、砂糖吐きそう」

「これでも食べてるといい、それよりもマスター！」

「ふえっ!？」

突然のティアの大声にビックリして振り返ると、口に薬草を突っ込
まれてるタクの隣でティアは真面目な表情をしていた。

「イチヤイチャは良いけど、変身、終わる」

「そうだった!!」

甘い空気になっていたけど今は戦闘中も戦闘中。そう思い直した
瞬間轟いた咆哮で、その認識を強める。

さつき言ったような手足に、7つの大きな目が強烈な印象を与えて
くる胴体。デイノバルドみたいに刀の様に鋭い甲殻が並ぶ尻尾、そし
て……もろドラゴンな頭と、背中から生える一対の竜っぽい翼。捻れ
た角とか系八つの目とかラスボスっぽい。

「竜神、だったんだ……」

『そうだ！この姿を見た以上、魂ごと消し飛ばしてやる!!』

「みんな散開、たいひーたいひー！」

魔神の口元に集まっていく濃密な魔力。見た目どうりならブレスであろうそれを見て私は一番防御の薄いロイドと、ティアはさつきと同じ組み合わせで左右に逃げる。

「ロイドお願い全速力で動いて！何があっても付いてくから！」

「わかった！」

門の中から大鎌を取り出しロイドとの距離を固定する。防御は私が担当すればいいからなんとかなるけどその前に、

「光を屈折させてる青い光がスレイン君、手の平クルーテオ卿!!」

ブレスを撃つのはまだ待たれよってこの事で、適当に色々詠唱っぽい事をして魔法を発動させる。その内容は、幻術やら光の屈折(○)を利用してのデコイ。あのブレスは本当マズイ気がするから、生存率は上げるに限る。

『グガアアアアッ！』

そして次の瞬間、そんな努力を嘲笑うかの様な極太のブレスが横薙ぎに放たれた。何時ぞやのリュートさんの精霊術の複製・発展・強化版で生み出した幻影が次々と紅蓮に呑み込まれていく。

「ロイドは抜ける事だけ意識して!!」

「ああ!!」

棺桶の結界を私とロイドをギリギリ包むレベルまで縮小、その分余ったリソースで強度を強化！負荷を無視して排撃を後方に1秒感覚で設定、風と水と氷の魔法で私達にかかる熱を軽減！私の考え付く限りの対抗手段、その半分程を実行し終えた所で私達は紅蓮に包まれた。

「うっ、くう…んっ」

じつくりと甦るような、10秒か1分分からない時間を耐えきりブレスを抜けた時には私の展開した幻影は綺麗さっぱり無くなり、私の髪の毛の先っちょが少しだけ焦っていた。許さない、消費者センタ―に訴えてやる。

「こっからどうするんだ？もしかしてさっきのドリルとかを…」

「ごめんロイド、しばらくあのドリルは出さないかな」

だって火力が足りそうにないんだもん。目に見えてロイドがしゅんとしちやったから……よし、いい感じで切り札を使おう。ティア達
が耐えきるきっかけになるかも知れないし。

「調整開始。不殺モードから特化モードへ。キラー設定。属性：
神・龍」

久し振りに真面目に大鎌の設定を弄る。2つ以外の属性にマイナスの
数値を設定してキラー威力を上昇。一度解けた刃が綺麗な音を
鳴らし組み上がっていくのはいつ見ても綺麗だと思う。そして準備
は出来た！

「邪悪なる竜は失墜し、世界は今、落陽に至る。撃ち落とす、大鎌だけ
ど、——」

『幻想大剣・天魔失墜』！」

特効1000%という限界ギリギリまで跳ね上げたキラー値で放
つ、黄昏の波動もとい斬撃の壁。それを私は、ドヤ顔で魔神に放った
のだった。

第34話 気合と根性を大切に

満を持して私がドヤ顔で放った

『幻想大剣・天魔失墜』は、確かに狙い通り魔神の喉元に直撃した。そう、直撃はしたんだけど…

「嘘だろ…」

喉元を大きく抉り取ったものの、現在進行形で傷が再生していつてる。今まで何度も助けられた自動HP回復、ラスボスがそんなの持つてるのは反則でしょう…

『アハハハハハハハハハハ、そんなの物が効くとも思っていたのかい？神であるこの僕に!』

ブレスを中断した魔神が、その八つ目の内幾らかをこちらに向けて高笑いをする。

削りダメージが通らないから負けを認める？多分最大火力の攻撃だったバルムンクですらあのダメージだし、他の攻撃じゃそれこそ無駄撃ちに終わるだろう。大魔法を組む隙なんて与えて貰えないのは目に見えてるし、このまま蹂躪されるだけで終わる？

「まだまだよ!!」

|| || || 不明なユニットが接続されました || || ||

そんな今日1日で聞き慣れた音声を右から左に流しながら、自分の中の大切な何かが一部完全に砕けた音を感じた。それに伴う激痛を気合と根性でねじ伏せ、最後のオーバードウエポンを展開する。大鎌はそれによつて門の中へ。

1番再現が難しくって、使い勝手も他のものと比べると悪すぎる装備。左肩には青白い炎の噴き出すフジツボチツクな大型パーツ。振り上げた右手には、太くて長い筒から発生する先が見えないほど長い光の刃。

「斬!!」

それを全力で袈裟斬りつぽく振り下ろす。光の刃は魔神の右腕・翼を斬り落としたけど、このままじゃ再生されちゃうだろう。

核とかに手を出す気は無いから、ガンマレイでの再生妨害なんて真

似は出来ない。けどその代わりに私には壊毒がある。

「アサルトジャンプ攻性転移、術式コピー&ペースト！」

衝撃波でなぎ払いながら転移した魔神の翼付近で、アイコンタクトでロイドにやる事を伝える。まだ反動が来てない今が、最後の最大火力での攻撃チャンス！

そして黒紫色の結晶化した物質が私とロイドの周囲に出現し、私達は巨大な2つの流星となった。

「ドウム・レディラ『壊毒の流星』！』」

私が斬り飛ばした肩口、ロイドが翼の根元付近にそれぞれ着弾し、女神様が直々に死ぬって言うてくれた壊毒を傷口に撒き散らす。

ただここで私に反動が追いついた、無茶な装備と魔法の行使で口の中に血が満ちる。

『ギヤアアアアアアアアアッ!!』

「ごほっ、来てロイド！」

「しっかり掴まってるよ！」

口周りの血を拭く火傷のある右手じゃなく、左手でロイドと手を繋いで次元魔法で距離を固定。絶対に離れないようにした瞬間、さつきは気にならなかった殺人的な加速が私を襲う。

「くうっ」

無理を重ねて使ったせいかわ魔法がグラつき、繋いだ手も離れそうになってしまう。離れちゃったら取り残されて大変な事に…そう思った瞬間、慣れ親しんだ感覚が身体を包み見える風景が変わった。

「ありがとマスター、少し休むといい」

「流石に俺も、ずっとこのままじゃ示しがつかないからな…うえっぷ」
「きゅきゅうー！」

ボスンとロイドにぶつかる中、カツコつけたティアの声と全く格好の付いてないタクの声が聞こえて、元気に鳴くフローも一緒に魔神へ向かっていった。

「でも、どうしよう…」

光となって消えていくOWの代わりに、大鎌を取り出しながらそう呟く。とりあえず斬り飛ばした腕と翼は門で回収するとして…

「こんなの、どうやって倒せばいいんだよ…」

ロイドの言う通り、聖剣が少し魔神を削り飛ばしティアの魔法が腕とかを切断するけど、数秒でそれは再生されてしまっている。幸いにして、壊毒をぶち込んだ右手右翼の再生はしてないみたいだけど、ジリ貧なのは変わりない。

「倒すだけなら、禁じ手を使えばあるいはって感じだけど…：：：かなりの高確率でみんな死んじゃうし…」

私とティアが協力して出来る範囲でも、ぶつちやけリトルボオオオイ！とか、ツアーリーリ：ボン→バツアアアア!!とかの核の光を創造したり、無茶に無茶を重ねて暗黒天体ブラックホールを発生させれば勝つだけなら出来ると思う。100%みんな巻き込まれてアウトだし、『多分』勝てるだから絶対にやらないけど。

「製作者権限で強制発動、新たな天地を望むか？」

「あ、ちよっ」

ロイドの右手を勝手に照準し、タイミングを見計らって魔神の翼の付け根辺りを次元の彼方に消し飛ばす。これが効いたなら、他に色々手段もあつただけど…

「やっぱり効かないか…」

あくまで傷は傷と言わんばかりに、じわじわと再生していつてしまっている。私の大鎌のキラーもダメ、OWは可能性があつたけど全部冷却中。この分だと魔法でもただの傷だとダメだろうし、次元ごと消し飛ばしてもダメ。ティアが首を斬り飛ばしたけどくっついたし、今から有効な方法を考えてたら手遅れ。

壊毒は有効だったけど、毒だからいつ耐性が作られてもおかしくない。

「ねえロイド、私どうすればいい？倒せるって意気込んでたけど現実には勝ち目が見えないし、助けてもらう当てなんてないし、こんな幼女がリーダーだなんて間違ってたのかな？」

傷は塞がってきたし火傷は完全に引いた。だけど、普段ほとんど言わない弱音を言いだしちやっせいか、次から次に不安が溢れてくる。

「色んな事をやれる力があるのに、勝てる方法をダメなやつしか思いつけないし、やっぱり私が自分かティアの門の中で禁じ手を……きやつ」

最後に半自爆なんて最悪の手段を思いついたところで、ペシリと私の頭にチョップが入った。

「イオリはイオリの出来るだけの事をやってるんだから、そんな暗い考えになるなって。イオリがいなくなったら、悲しむ人は沢山いるんだぞ?」

「うう……」

叩かれた部分を抑えながら、涙目で唸る。でも、それ以外の手段が思いつかないんだからしょうがないじゃん……魔界のクレーターを作るみたいな魔火力は禁じ手以外無いし、ロイドに掛けた魔法みたいな延命とかの系統なら色々あるけど……ん?

「ねえロイド、なんかこうい言う方だとすつごく恥ずかしいけど……私のために命、賭けられる?」

大切な物を無くす事になるけど、もしかしたらいい案を思いついたかもしれない。

第35話 自分にとっての勇者

「対神特化、次元操りし破邪の剣！」

「キュアアツ！」

少し前口の中に突っ込まれた薬草が効いているのか、特に酔う事も無くフローって名前らしい竜に乗って空を駆ける。同時に今の俺の最大火力の攻撃と、フローが火炎を吐くけど即座に再生されてしまう。

『あはハハ！痒い、痒いぞ勇者!!そんな力で僕は倒せなんてしないぞ！』

「さつきから煩いんだよニート以下!!掲示板にカキコしてるノリで話されてもウザいんだよ！」

『ダメアレエエツ！』

俺のやつすい挑発に乗った邪神が、陽光を反射してギラつく尾を薙ぎ払ってくる。子供レベルの精神で助かる。

それに少なくとも今、俺に火力は必要ない。ロマン廃火力で殲滅とかは懂れるけど、こうやって敵を釘付けにする事が今の俺にできる一番役に立つ事だから。

「きゅー！」

そして振り払われた尾は、圧倒的な機動力を持つフローが危なげなく回避する。剣を持つ右手を除いた全身でしがみつき、回避しきった所からが俺の出番だ。迫る鋭い爪付きの裏拳、迫り来る壁にしか見えないそれをどうにか対処する！

「展開時間及び範囲を最小に設定、代わりに強度を限界以上まで上昇。結界展開！」

戦ってる中で思いついた砕かれ続けていた結界の1番良い使い方。それは結界を極限まで細く薄く展開し、動かせないそれを相手の動きの先に配置する事。

『ガアアアアア！』

先程から何度か試してる手に魔神はまたも引つかかった。手首辺りに配置した結界に直撃した裏拳は、見事魔神の拳を切り離し赤い血

を噴出させる。

「風と氷と炎と土よ、撃ち落せ!!」

闇と次元を除いた全ての魔法が纏まったらしい極光魔法。それで発生させた風が、斬り飛ばした魔神の拳を俺のアイテムボックスの中に叩き込む。こうしないとすぐくっ付くから、かなり減ってきた魔力を使つてまで斬つた意味がなくなる。

「それに…血が出るなら、殺せる筈だ! 虹よ刻め!」

「きゅっ!」

傷口を抑えるもう片方の手が肩から無いせいか、滅茶苦茶に暴れだした魔神の計8つ目に俺が放つた複合魔法・紅蓮の中に黒を内包した弾のようなブレス・おそらく龍特有の見える飛ぶ斬撃が直撃して視界を奪う。

どうせ1分保たないだろうけど、それで他のみんなが攻撃する時間を稼げれば十分だ。何度目になるか分からない魔力回復の丸薬を噛み砕いて嚥下しながら、今の自分の状態を再確認する。

「体力魔力共に半分弱、装備は剣以外ガタがきてるし疲労は凄く溜まってる。フローちゃん?の方は俺よりマシだけどそれでも消耗は酷いか」

「きゅきゅう…」

同意する様な鳴き声が聞こえるけど、アイテム類がもう心許ない以上分けられない。第一人間用のアイテムじゃ回復量が全然足りないし。

そんな事を思ってる俺の近くに、鋭い風切り音を鳴らしながらロイド君が現れた。苦虫を噛み潰した様な表情をしてるけど何があったんだろう?

「イオリから伝言です。『ちよつとロイドとティアを借りるよ。その間少しかだけ魔神を抑えてて欲しいな。起死回生の一手つてヤツだね。あと、今までありがとう。ごめんね』」

「ちよつと待った! 一応了解するけどごめんねって」

「まだ終わってません!! 『それと、もしもの時はティアの杖を回収するか、魔界のエスイルトの街のダンジョンに行つて』だそうです」

本当に待って、それって死ぬかもしれない時に言う様な言葉じゃん。それに、魔界のエスイルト？なんでわざわざそんな事を…

「あと『半分づつ貰ってくね』だそうです」

疑問に思ってる俺の腕に突った破片が刺され、ゴツソリと力が抜けた感じがする。これは…多分七元徳スキルを半分づつ盗られた？

「俺だってまだ認めて無いですよ、これからやる事は…でも、それこそ俺の命に代えてもイオリは守ります。急いでるんで、それでは宜しくお願いします！」

俺が質問を返す前に、一瞬でロイド君はいなくなってしまった。振り向いてみると、巨大な魔法陣の重なった球体の中に3人は立っていた。蒼矢とティアさんは両手を忙しく動かしていて、ロイド君も何かに集中している様だった。

「どつちにしろ、俺がやらないといけないのか…」

『アアアア!!』

再生が終わり始めている魔神がばら撒くブレスが、偶然こつちの方向に飛んでくる。背後の蒼矢達を巻き込む軌道で。こちらを試す様なタイミング、いいじゃんやってやろうじゃないか。

「俺にとつての『勇者』は決して『英雄』じゃない」

英雄みたいに目的のために敵を殺戮して称えられる者じゃなくつて、俺にとつての勇者って言うのは自分の大切な者を守りきる事の出来た者。何が違うのかって言われると、具体的な説明は出来ないけどそういう者だと思っている。

迫るのは極大のブレス、今までのどの手段でも防げないだろう極大の破壊。だけど勇者って呼ばれてて、守りに特化した力を持つてる俺なんだ。

「大切な人を守れずして、何が勇者だっ!!」

——条件を達成しました——

——七元徳スキルの干渉が始まりました——

——職業：勇者が勇者（真）に進化しました——

——新しい武技を習得しました——

…

その他諸々アナウンスが流れたけど、簡潔に言うのと護るための力が手に入ったって事みたいだ。それならやる事はたった1つ。

「貫き目指す我が信条、理想をここに！」

『グロリー・オブ・ザ・ブレイバー
「勇ある者の誉れをここに」!!』

顕現したのは剣の納まった、巨大な光の盾。それはブレスの直撃に微塵も揺るぐ事はなく、今までどう頑張っても使えなかった《忠実》スキルの反射を発動させた。

《忍耐》と《忠実》が半分づつ混じり合った力、分不相応だった俺にとってはこれで充分だと、そう思うんだ。

第36話 決着つけるは破滅の雷炎

「えへへ…」

重なり合い球形になっている魔法陣の中、幾つもの作業を並列して行いながらさっきの事を思い出してにやけてしまう。

「マスター、どうかした？」

「ううん、残りさつきとやっちゃおう」

命を賭けられる？って私の質問に、ロイドがいいぞって即答してくれたからね。なんでこんなに好感度が振り切れてるのかは分からないけど、すっごく嬉しかった。そんなに思われてるって考えちゃったりしたせいで……その、ね？

そんな甘い思考を振り払って、目の前の作業に集中する。

「ここを書き換えて一方通行からどっちにも行くようにして、少し書き足して魔法自体を強化…」

私がロイドにちゅーして掛けた魔法。今まで発動の機会は無かったけど、その効果は『対象のHPが0になるダメージの半分を肩代わりする』って物だった。

だけど私が魔神を倒すのに使うのは半分自爆技。私1人で使ったら75%、ティアと一緒に50%くらいでh a g eする事になる。そこにロイドが入れば25%くらいに下がると思うから、ダメージ分散の為にちよつと魔法を書き換えてる。

「ティア、大鎌の方どうなった？」

「言われた事は概ね完了。でも、本当にやるの？マスター」

「もちのろん、だって今はこれが1番早いだろうしね」

簡単に言うと、人格っぽい物があるらしい私の大鎌に、ロイドに取ってきてもらってる七元徳スキルと回収してある《怠惰》を封じ込めた欠片をセットして、無理矢理職業を取得。魔界の大穴を作ったのと同じ原理で魔神を消し飛ばす作戦だ。

勿論大鎌を全部使ったら、私の魂兼ティアとの契約の媒介でもあるから本当に重要な部分を残して、溜め込んでる魂ごと半分を暴走させる。

「洗うのが面倒だったけど、今までありがとう」

魔法の掛け替えを終えた私は、自分の風になびくとても長い銀髪を拘束魔法の応用で纏めて固定する。

そして風の魔法で、肩口位の長さになる様に一気に切断した。

「さてと、もう2度と作るまいって思ってたけど…《大錬金》！」

「せいや」

50%も部位を失って、もう武器の体をなしていない大鎌を補完するのは抑止力とかが怖くて封印する事にしてた槍。

それを創り出す為に、門から呼び出したオリハルコン、ヒヒイロカネ、アダマンタイトなどの大量の希少金属を少しずつ。そしてそこに性質は消えてるけど槍だった金属、ティアが投げた元大鎌、そしてキーとなる私の髪を合わせて錬金する。

この土壇場で失敗なんてありえない。できるだけ早く正確に、私は性質はそのままに槍として形を整えていく。

欠けらを取り込むように変質した巨大なやり。その切っ先は鋭く、持ち手に欠片をセットする部分を作って、石突き辺りにはブースターを使える様に魔法を刻印している。略式だけど完成させた、私の身の丈を超える、宙に浮かぶ眩い銀色の長槍を掴み取る。

「それが、切り札なのか？」

「そうだね、正直とつとと撃って終わりにしちゃいたい」

戻ってきたロイドにそう答えてる間も、明らかに頭のおかしい武器を強化復元したせいとか、全身にザワザワとした圧力っぽい何かを感じる。というか前の時よりひどい、消される前にどうにかしたい。

「はい、マスター」

「ん、ありがとティア」

ティアが投げってきた一見ガラクタにしか見えない破片の数々、それに魔力をぶつけて1つに纏め上げる。本当は武器の形にしたいけど、そんなに余裕は無いので雑に棒状に成形するに留めておく。

「貫き目指す我が信条、理想をここに！」

『グロウリー・オブ・ザ・ブレイバ』
『勇ある者の誉れをここに』!!

そして、気がつけば暴れまわってた傷だらけの魔神。そのブレスが

タクのいい感じにオサレな詠唱で発生した光の盾に防がれた。守ってって頼んだけど、なんかこんなに凄い事になるって予想外……

「ティア、最終防壁お願いね」

「承知」

それでも安心な事には違い無いので、最後の準備を始める。棒状に成形した元大鎌にティアが光となって吸収されていく。最悪私の魂ごと記憶が消える可能性もあるから、ティアにはバックアップ的な役割をしてもらう。

「そういえばティアさんって精霊だったな……」

「いっつも実体化してるけどね」

棒を背負い話半分以上聞き流しながら、今の周りの光景を目に焼き付ける。それが一番私らしい。

眼下には雲海の広がり、頭上には透き通った大空に燦然と輝く太陽。がむしやらに暴れる魔神と、光る巨大な盾でそれを防ぎそこに収まっていた同様の剣で応戦する、タク^{友達}。その足元を支える私の可愛いペットであるフロ^{幼龍}ー。ティアの姿は見えないけど存在は感じられるし、隣には大好きなロイド^{恋人}もいる。

「うん、今日は死ぬにはいい日だ」

「何か言ったか？」

「ううん、何にも」

私の小さく呟いた言葉は、風に流されて消えてしまったみたいだった。けどどまあ、ちよつとカッコよく気合を入れただけだから聞かれなくて良かったかもしれない。

「ロイド、渡してた欠片返して？」

「本当は、イオリが死ぬかもしれないから嫌なんだが……」

「大丈夫、だいじょーぶ！」

そう言いながら、ロイドから返してもらった元徳スキルの封じてある欠片、門から取り出した怠惰を封じた欠片、最後に職業を選択するための水晶の欠片を槍の持ち手付近に収納する。

「それじゃあ、始めますか！」

槍を硬く握り締めて、タクが光の盾を展開している付近まで空を駆

ける。最善は尽くせたか分からないけど、やれる事はやった。あとはちゃんと決めきるだけ！

「そいやー！」

「…今の子供、酷くないか？」

「だって話聞いてくれなそうなんだもん」

そしてタクの意思を完全に無視して、私の門の中に放り込んだ。ロイドは魔法の都合上近くにいて貰わないとだけど、正直タクまで守りきれぬ自信はないし、あの光の盾じゃ秒と持たず蒸発する。

『勇者は、勇者はドコだあああつ！』

8つもある目を血走らせてタクを探す魔神を、なんとなく哀れだなあと思いながら、ロイドに聞く。私達がアウトオブ眼中になつて今、タクを封印したのは正解だったのかもしれない。

「ねえロイド。今から私のやる攻撃って2度と出来ない必殺技だから、やっぱり名前が欲しいけど…何かいいの無い？」

「名前か…神殺しだし、フェンリルとか？」

「よし！それでいこう！」

別に私達がやっているのは、英雄譚でも逆襲ザエンデツタでも復讐劇でもない。恐怖劇でもないし、途中参戦の私達にはこれといった大義があるって訳でもない。

だからと言って、ロイドと話した最後の言葉がシリアスじゃ死んでも死に切れない。

『お前らカアあああつ！』

ようやく魔神がこちらに気づき、その憎悪の込められた目線で私たちを射抜く。その口腔には空気が歪むほどの魔力がこめられているけどもう遅い。魔力は十分過ぎるほど槍に込めたし詰みだ。

『ガアアアアアアアアアッ！！』

「ロイド行くよー！」

闇が濃縮されたようなブレスが私達に迫る。さっきまで私達の安全を保ってくれていたタクの光の盾はもう無い。代わりに手にあるのは必滅の最終兵器。それをロイドと一緒に握りしめると、なんだか心まで繋がってる様な感じがしてくる。

「天地を揺らし、神をも喰らえ」

それだからだろうか。お互いの声が一致するのも、槍を投げるタイミングも寸分の狂いもなく一致した。

「《フエンリル》！」

2人で投げた銀色の槍は、手を離れた瞬間さらなる加速を齎す魔法を起動。未だ繋がった私とロイドから魔力を吸い上げながら、魔神のブレスと激突した。

「はああああああつ!!」

何もかもを呑み込んで消し去っていく印象を受けるブレス。それを無害な光に書き換えながら、伸ばした2本の腕の先を飛翔する槍は突き進んでいく。大部分を私が負担してるとは言え、ロイドだったかかなりの魔力を消費している。これが決まらないと…

『アハはハハハ、僕の勝ちだあ!!』

そんな中絶望を告げる様に、魔神の顔や胴体にある眼から禍々しい紫の怪光線が発射され、槍の勢いが押しとどめられ…今ついにこちら側に押し返され始めてしまった。

どう腐っても神。ここまでやってまだまだ足りない…そう思ってしまった時、頭の中に二重の声が轟いた。

(まだだあ!!)

瞬間、槍に流れ込む魔力が倍加する。その流れを辿ると、どちらも慣れ親しんだ、優しい魔力だった。

(マスター、この程度で諦めるなんてだらしない。チートの名がなく、命くらい削る！)

そうだよ。やりきるって行ったんだから、最後の最後まで諦めたりなんかしちやダメだよね!

そんな私の頭の中に、ロイドに向けられたタクの声が轟いた。と言うことは、多分私のも聞こえてただろうけど知らない。

(俺は今ほぼ何もできないけど、お前だって男だろ!隣にいる彼女くらい、自分の力で守り切って見せろよ!)

(言われなくなっ!)

限界を超えた魔力供給で、私もロイドも毛細血管が切れたのか手が

血に染まっていく。その代わりに、槍は強化されたブレスの書き換えを再開。油断していた魔神に向かって、光の尾を引きながら直進していく。

「これが私達」

「俺たちの」

「全力だああ!!」

4人の声が重なり合い、槍が完全にブレスを書き換えて魔神の剛腕に突き刺さる。そして、完全に甲殻に阻まれそこで停止する。

『ハッ！だからその程度の攻撃、効くわけが…あ？あああああつ!』

普通ならそこで止まるはずの槍は、自前の溜め込んだ魔力を放出して加速。槍に使った金属の触れてる全てを任意の物に書き換える力も惜しみなく発揮し、刺さっている部分グズグズに変質・壊死させながら、かけた呪いによって生き物のように魔神の中心を目指していく。

「ニロケラス、展開」

それを見届けて私は、魔神の敗北と消滅を確信する。魔神の断末魔の声をBGMに、余波を完全に防ぐため物理的な最終防衛線たる結果を展開する。もし不具合があった時のために、最後まで発動しないけど。

そしてふと思いつく。ああ…：そういえばまだ、私からはきちんと一回も言ってなかったっけ。あんなに大切な事なのに。

「ロイド、大好きだよ」

隣の最愛の恋人にそう告げた瞬間、魔神の胸の辺りで小さな光球が生じて作戦の成功を確信する。半径10km位を消し飛ばす力場の発生する兆候は見て取れたし、ならばもうやる事は1つだけ。

「閉じよう」

完全に魔法を発動。音も光も何もかもが遮断され世界から私達を隔離した瞬間、全身がバラバラに砕け散った様な感覚が全身を突き抜け、私は、あれ？僕だっけ、そ、もそも、私僕って、なん、だっけ、？

第37話 後始末

「閉じよー！」
セグッア

そんな掛け声と共に、吹き付ける風の音も青々とした大空も魔神の姿も、何もかもが黒に塗り潰された。そして直前の言葉に動揺している俺に、全身がバラバラに砕け散る様な感覚が走った。

「あ、がつ…」

隣のイオリが何も声を出していない以上、醜態を晒したくは無いので声を押し殺す。というか、あくまで軽く分配されたダメージだけでこれって事は…

最悪の想像が頭をよぎり歯を食いしばったまま隣を向くと、よく分からない文字や模様の動き回る球体の中、イオリはグツタリと浮かんでしていた。無事ではあるんだろうけど、心配で手を伸ばそうとして…

（ストップロイド。魔法陣の中に入ったら、マスターが死ぬ）

「はあっ!？」

頭の中に響いた声に、伸ばしかけていた手を慌てて引っ込める。ちよつと待ってくれ、なんでいきなりそんな事になってるんだ!?

（マスターの魂を無理に切り離して暴走させたから、反動でバラバラになりかけている。修復中）

「ちゃんと、大丈夫なんだよな?」

（もちろん、と言いたいのが現状じゃ五分。ロイド、固有結界は発動したままっ…）

「あ、ああ。念を押されてたからな」

この結界が解除されたら王都が蒸発するなんて言われたら、絶対に解こうなんて思えない。真つ暗なこの世界の中でも、魔力が消費され続けているからおそらくキチンと発動しているだろう。

（それじゃあ、しばらく発動し続けて。開け）
ライター

その言葉が鍵になっていた様で、次の瞬間には周囲の黒い壁が消え去った。途端に黒に変わって広がった視界に写っていたのは…

「なんだよ、これ…」

眼下に広がっていた雲海は見渡す限り何処にも無く、強く吹いていた風は止んでいる。景色自体が時折ブレる中、こぶし大の小さな黒い何か意外見渡す限りには何も無い。そんな、とても寂しい世界だった。

1つだけある異物と言える黒い何かから凄まじい悪寒を感じる以外、この世界には何も残っていないなかった。

(要求、この固有結界を安定させながら段々縮めて)

「それになんの意味が…」

(いいから早くやる。時間との勝負)

なんだかよく分からなけど、広がっていた固有結界を段々小さくしていく。そしてこぶし大の黒い何か、それが立方体の結界の中に取り込まれ、イオリの胸辺りに引き寄せられる。悪寒はそれで消えたけど、なんでそんな物を…?

「何をやってるんですか?」

(マスターの、飛び立った魂の回収。出来る限り回収して、足りなければ私の魂を削ってマスターを治す。後、反動で砕けた魂の修復)

「でもそれって、ティアさんが駄目になるんじゃ…」

さっきのイオリの状態を聞くと、ティアさんまでそうなってしまおうんじゃないかと思ってしまう。

(一応私は神。人とは作りが違う)

「それならいいんですけど…」

目的ははつきり分かった、だけど自分がやれる事は他には無いのか? やつと隣に立つ事は出来る様になったけど、今だってまだ俺は守られる側だった。そんな自分が、情けなくてカッコ悪くて…

(気にする事は無い。そんな機会、これから沢山ある)

「そうだったら、いいですけどね」

結界を安定させ狭めながら、はあとため息を吐いて答える。肝心な時に役に立たない俺なんかが、このまま隣にいて良いのか? また無茶をするのを止められなかった俺が? そんな疑問が頭をグルグルと回る。

(結界は、もう縮めなくて大丈夫。後、マスターの隣に入れるのは寧ろ

ロイド、君以外にはありえない)

可能な限り縮めた結界の中、黒い球体に半透明な何かが集まってい
き、カタカタと震える長い棒にそれは吸収されていく。半透明な物が
飛び散ってしまった魂の欠片で、ティアさんを通してイオリを治して
いるのだろう。なんで俺、元々は魔法には全く詳しくなかったのに分
かるんだろう…

(治してる限り、マスターの中でロイドの存在は大きい。それに他の
人だと、マスターには付いてけない。それに、本音は誰かに盗られる
のはイヤじゃない?)

「確かに、誰にも譲りたくは無いですけど…」

(それなら良い)

そんな声が頭に響いた瞬間、目まぐるしく動いていた魔法陣が急激
に収束して消え去った。そしてそれと同時に門の中から勇者の人が
フローと一緒に空中に投げ捨てられ、入れ替わる様に謎の黒い球体が
門の中に収納された。

ゆつくりと落下していくイオリを抱きとめ、心臓も動いてるし息も
している事を確認して安堵のため息が漏れる。

(治しはした。無事に目覚めるかは五分)

「五分って、そんなに低いんですか?」

(それでも、十二分に高い方。あんな無茶をしたなら、本来は死んで当
然)

そんな風に聞こえてくる声が、段々と雑音が混じって聞き取りづら
くなっていく。やっぱりティアさんの方にも何かが合ったんじゃない、そ
んな心配はすぐに否定された。

(力の使いすぎ、流星に少し休眠する。後は頼んだ、英雄)

「俺は、英雄なんて器じゃないですよ…」

愚痴をこぼしながらも俺は、結界を解いてフロー(とその上に乗っ
てる勇者)と共に地上へと降りて行った。鈍色の雲が空を覆い尽く
す、廃墟の様な王都へ。

自分の物とは思えないとても虚しく軽い勝利の実感と、この手に抱
いたイオリのあまりにも軽い、けれど大切な重さを感じながら。

エピローグ 前

自分が何者なのか。ここがどこなのか。右も左も上も下も、そういうのが全然分からない状態になっていた事だけはハッキリと覚えている。

自分がバラバラに砕け散って、身体感覚も何もかもが消えていく凄く怖い感覚。捕まえられて集められてその感覚はすぐに消えたけど、未だに私は目を覚ませないで、暗いこの世界で彷徨っていた。

魂の世界的サムシングだろうここじゃ声は出せないし、意識だけハッキリしてるけど視覚以外の五感は中途半端にしか機能してない気がする。こんな発狂しそうな状況の中私が狂わずに居られるのは、ひとえに遠くに見える光が理由だ。

よく分からないけど安心して、帰らなきゃって思うその光。それを目指して歩く…多分歩いて行ってた私は、どれくらいの時間が経ってるのかは分からないけど今、ようやくその光の目の前に着いた。

なんか凄い引力を感じるし、私のゴーストが早く早く急かしてる。ここが黄泉だったとしても何も食べてないし、後ろを振り返っても無い。そんなしようなない確認をした後、私は白い光に飛び込んだ。

別に山並みが萌えてたりはしなかったけど、夢から覚める時特有のフワツと上昇する感じに包まれて、そして…

ああ、やつと目を覚ませるんだ。

◇ 「知らない天井じゃ無い……だと」

正確には石造りっぽい天井も見えるんだけど、その前に見えるのが所謂天蓋って言われてるアレ。パキパキと音を鳴らす重い身体に鞭打って、五感の素晴らしさを感じながら自分の周りの状況を確認していく。

私が今いるのはフワフワで豪華な天蓋付きのベッド。石造りっぽい部屋の壁には色々旗が張られていたり、近くにはトロフィーが並ぶ台もある。外の景色は真っ暗で、音が殆どしないから深夜だと思う。

今着てる服は、それこそお姫様が着てる感じのドレス。そして最後に見つけたのが、私が今まで寝ていたベッドに凭れて寝ているロイド。

「そっか…私、ちゃんと戻ってこれたんだ…」

「マスターにしては、遅かった」

「これでも急いだんだけどなあ…」

いつの間にか、ベッドの上で女の子座りをしてたティアにそう返す。出そうになってた涙は引っ込んじゃったけど、話を聞くならこっちの方がよかったね。

「ねえティア、あれからどの位経った？」

「大体1ヶ月。身体の世話は私がしてけど、1月も寝たきりだったから動き辛いはず」

「みたいだね。多分魔力で無理矢理じゃ無いと、しばらくはロクに動けないかも」

起こしていた上体を、正直もう疲れちゃったからベッドに預ける。魔力で動かす以外にも、ちゃんとりハビリしていかなきゃね。

「そして報告。マスターの半自爆攻撃のせいで、20%くらいマスターの魂は消滅した。私のヤツを削って補完したけど、少しはステータスが下がっている。欠片を集めて繋ぎ合わせて、色々試したけど、マスターが戻ってこれるかは賭けだった」

「そっか…アレが1番早いと思ったけど、そんなに無茶だったんだ」
転がったまま右手を上には伸ばしてみるけど、相変わらず小さくて柔らかさうだけどハンマーだこのある普通のおてでだ。というか本当に、自分の身体を認識できるって素晴らしい。

そして私の予想通り、あの暗い世界は魂の世界？らしい。言い換えれば三途の川近辺。渡ってたら手遅れ（意識）だったらしい。

うーん…こんな風にちよつと考えが硬くなってるのって、ティアの魂が混ざったからだったたりして。

「下手をしたら即死、しなくても本来なら夜都賀波岐ルート。今は今で、凄いことになってるけど」

「ふえ？何かなってるの？」

「マスターは今、半分、私達の同類」

そんなティアの言葉を聞いて急いでステータスを開く。そこには全体的に少しだけ下がったステータスと、カンストしたDEX、そして種族の欄には堂々と半神の文字が記されていた。某運命風に言うなら多分神性：Bくらい。

「なんで…?」

「それだけ職業を神職で固めて、神を2柱も殺したんなら当然。そして、私の魂を取り込んだ事が決め手。他にも言いたい事はある。でも、そろそろ私はお暇する」

「なんで…?」

今までのツケを払わされた感じではんやりとしていた私は、全く同じ言葉でティアに聞き返してしまう。私だってまだ、気になる事色々あるのに。

「感動の再会に水を差すほど、私は不粹じゃ無い。そういうのは、ナイアの仕事」

そう言っただけで窓から飛び出して行ったティアを見て呆然としている私の意識に、下の方からガサゴソとした音が届いた。と、とりあえず起き上がっておこう。

「ふあ…イオリ、なのか?」

「ん、おはよーロイド」

もぞもぞと私が起き上がっている間に、ロイドも目を覚ましたみたいだった。そして目を擦って、震える声で私に聞いてきた。まあまだよく状況を理解してる訳じゃ無いけど、満面の笑みで私は答える。

「だけど、ロイドは固まったままなんの反応も返ってこない。不思議に思っただけ、無駄に広いベッドの上をロイドに向かって近づいていく。」

「もしかして熱でも?」

風邪でも引いたのかと思っただけ、ベッドに腰掛けおでこに手を伸ばした瞬間、私はロイドにギョツと抱きしめられていた。

「良かった…本当に、良かった……」

「ちよ、ロイド痛いって」

固く強く私を抱きしめる手は、本気で抵抗してるわけじゃ無いのも

あつて振りほどけなかった。むしろ更に込められてる力が強くなつてる。

「私病み上がりだからそろそろ」

「もう、置いて行かないでくれよ…」

そろそろ本気で脱出しようと思つた時、耳元で聞こえたそんな言葉と右肩に感じた暖かな液体の感覚で、行動も言葉も詰まってしまった。

「俺が頼りないのも、力不足なのも分かるけど、せめて隣にくらい居させてくれよ…」

「え、あ、私は…」

「魔界の時も1人で先走つて、俺じゃどうやったって届かない所に行つて。今回だつてそうだ！」

耳元で響いたロイドの私を責める声に、無意識にビクツとしてしまう。でもどっちの時もそれが1番良いかと思つて…

「あんな意味深な事を言つて、戦いが終わつてから、待つても待つても目が覚めなくて。もう、2度と会えないんじゃないかって」

「……」

「俺が、いやみんながどれだけ心配したと思つてるんだよ…」

尻すぼみしていくロイドの言葉に、何も言葉が出てこない。行動で示そうにも、魔力で無理矢理動かすしかない現状余り動きたくはない。けど、やらないわけにはいかないだろう。

「私はもう、どこにも行つたりしないよ」

そんな私に出来ることは、抱きしめたままなら暖かいしロイドが寝るまで安心させてあげるくらいな気がした。

私まだ子どもだし！そういうえちい方向の事は早すぎると思うんだ!!

エピローグ 後

「んう…お腹すいた…」

チウンチウンと鳥が鳴いてる声と空腹感で、私は目を覚ました。寝惚け眼に移るのは、お互いの息が届くくらいの至近距離にあるロイド人の顔。

ステイ。思い出せ私。昨日は確かロイドの抱き枕になるのもいっかなって思ってた、私も私で眠くなつたから離れないロイドと一緒に布団に入って寝た。うん、どつかの並行世界の私みたいにえちい事はしてない、自分の身体をスキャンしたから間違いない。

「よし、そうとなれば先ずは朝ごはんだよね」

魂の世界みたいな場所で会った、トリコの食霊的ゴーストから教わった料理を試してみるのも良いかな。そう思ってたベッドから降りたのと殆ど同時に、荒々しく部屋のドアが開け放たれた。

「あなたが白沢君で良いのよね!?!」

「私達を地球に帰してくれるんでしょ!?!」

息も絶え絶えといった様子で部屋に飛び込んで来たのは、どこかで見た事ある気がする女子が4人。多分クラスメイトだったんだろうけど、正直覚えてない。まあ、気持ちは分からないでもないけど…

「あの…私昨日目を覚ましたばかりだから、しばらく大きな魔法は使えないよ?今だって魔力で支えてないと立ってる事すら出来ないし」

「そんな…」

女子が崩れ落ちるけど、そんなに地球に降りたかったのかな?どうせ悪用する人が出るだろうし、タクとか先生とかの一部を除いてタダで返す訳なんてないのに。

そう言えば誰にもこれは言っていなかった。頭に?を浮かべながら首を傾げる私の前で、何か鬼気迫った表情になった女子がゆらりと立ち上がる。

「あ、コレって脅されるパターン?やだなあ…」

そもそもレベル差が150はあるんだけど…呆れてため息を吐い

た瞬間、部屋に一陣の風が駆け抜け女子達を部屋の外に蹴り飛ばした。

「ふん、ご主人様の気分を不快にさせた罰よ。大丈夫でしたか？ご主人様」

「え、あ、うん」

そう何かヤバイ物に目覚めちゃってるとしか思えない顔と表情の、エセニンジャ事終なんとかさんだった。

いきなり現れた真意が分からず、若干怯えた目で柀なんとかさんを見てるうちに気がついてしまう。なんだか頬を染めてモジモジしてる彼女のおそこが濡れてる様に見える事に。おい魔眼、そんなの分かるなくて良いから。

「ああ、私というものがご主人様を怖がらせてしまいました。この不甲斐ない私に、どうか罰をお与えくださいまし。はあ…はあ…」

「ひっ」

完全に思い出した。あの時、後先考えず人格破壊R18コースをやって放置してたからだ。ジリジリと迫ってくる百合ニンジャから逃げようにも、そんなに部屋にスペースはない。多分ベッドなんて行ったらアウトコースでレイジビヨンドしちゃうから逃げ場はない。誰かたすてけ。

「ぐふっ」

「全く、なんで少し目を離しただけで、こんな大騒ぎになる？」

どうしようもない悲劇が訪れる直前、フルスイングされた杖がドMニンジャの頭に直撃して意識を刈り取った。勿論そんな事をしたのは…

「おはよう、マスター。昨晚はお楽しみでしたね？」

「な、なんもやってないよ！」

小脇に何枚もの紙を抱えたティアだった。ちゃっかりドMニンジャを部屋の外に捨ててくれる辺り、言ってる事は茶化しててもちゃんとこつちを考えてくれているっぽい。

「恋人と、同じベッドで、抱き合って、寝てナニもしてない……不能？」

「いや違うから！そもそも私達の年齢アレだから！」

普通に反応はあったし……ってそうじゃない!! さっきのニンジャとか、その手の凄く嫌な予感がする書類って何? というか私が起きたの昨日なのに、なんでこんなな情報が出回ってるの?

「ニンジャに関しては、マスターの予想通り。アレを放置したから、目覚めた。目覚めた話を振り撒いたのも、こいつ」

「と言うことは、さっきのは自作自演……?」

「おそらく」

ティアの目は真剣だった。もうヤダ……なんで起きてすぐなのに、こんなに厄介事が舞い込んでくるのさ。

「そんなマスターに良い追い討ちがある」

そう言っただけティアが広げた書類に、泣きそうな頭で目を通していく。何枚かは感謝状で、表彰みたいなのからギルドから報酬金みたいなのも来ている。嫌な予感のする後半のヤツは……

『貴殿を正式にセントシユタイン王国の貴族に』、『領地与えたい……』、『しかし身分が身分なので、どこかの貴族の養子に』。ねえティア、この大量にある紙つてもしかして……

「予想通り。無能貴族どもからの、養子縁組しませんかって書類」

それを聞いて私は倒れそうになる。そんな立場とか要らないし。1冒険者で私は十分だもん。よし、ちよつと名残惜しいけど決めた。

「もうヤダ逃げる。すぐ地球に帰す装置作って、獣人界行く」

「そう言うと思ってた。だから、丁度いい物も回収してきた」

ティアの取り出したのは、今までの紙束と違って綺麗な紙に蠟印の押された物で……

「結婚式の、招待状?」

「大正解」

おめでたい事だし、丁度良い口実にもなる切り札だった。多分結婚式があるのは2〜3ヶ月後。

「ティア、養子縁組とかの期限は?」

「特になし出来るだけ早く、とは言ってた」

「よし! それなら……あと1週間で最低限動かせるようにして、リフンあたりに転移。ロイドのご両親に挨拶して、ロイドも一緒に獣人界に

エスケープすれば…」

「王都に戻らない限り、問題はなくなる」

算段はついた。あとは私がどれくらい回復できるかなかってるけど、回復魔法＋おーばーうあーくで頑張れば問題ないだろう。

「と、いう予定だけど…ロイドはそれでいい?」

ベッドに座り直した私は、明らかに寝たふりをしているロイドに話しかける。

「バレてたのか…俺としてはそれでいいぞ? 父さんにも母さんにも、まだ恋人関係になった事をちゃんとは言っただろう?」

「だね。うう…でも、正直魔神と戦う時より緊張する」

ラスボスはやっぱり両親か…そう思いながら、私もベッドに倒れこむのだった。あれ? 結衣姉にバレたらこの状況って…：ううん、今は忘れよう。

◇ 身体を本調子に戻すのが最優先!!

「マズイよね? 下手したら終わっちゃうよね?」

「イオリが、あのドラゴンと戦い始めたせいだろ?」

「だって明らかにシャルフに直進ルートだったんだもん!!」

「言い合って無いで、速く」

私が目覚めてから2ヶ月。私達3人はシャルフの大通りを全力で駆けていた。リユートさんとレーナさんが結婚式を挙げるって言うから、色々用意したり頑張ったんだけど最後の最後にあつたトラブルで良い場面を見逃しそうになってしまっている。山みたいな巨大のドラゴンが襲いかかってくるって、なんでさ…だよもう!

「確かその角を右!」

「了解!」

礼服って言われても分からないから、私とティアは適当な白じやないドレス、ロイドは私が僕として通っていた学校の制服を作ってみたものを来ている。そんな3人が揃って空中を蹴って走っているんだから、私の透明化を見破れる人がいたなら笑う者になると思う。

「私は来た! 私は見た!」

十字架があるわけじゃ無いけど教会と分かる建物が見え、外に待機する大勢の人がその扉が開かれるのを待っているのが見えた。

ロイドだけ置いてけぼりのテンションだけど、ほんの30分前まで全力で戦ってたから仕方ないよね。

「勝った！」

言っちゃったからには後で《ケロケア・モース黄の死》造らなきゃ。そんな事を考えながら静かに空中で静止、透明化の魔法を完全解除する。

「ロイド、ネクタイ曲がってる」

「ごめん。こういう服今まで着た事無くて…」

「そのバカップル、出てくるよ」

バカップルじゃないし、ネクタイ締めてただけだし…そう思いながらも教会の方を見た時、ゴーンゴーンと鐘が鳴り響きドアが開かれた。そして、そこから現れたのは……

「やっぱり、キレイだなあ…」

「リユートさんも、かっこいい…」

ウエディングドレスに身を包んだレーナさんと、その隣に立つタキシードを着たリユートさんだった。いつの間にかロイドと手を握りあっているけど、それよりもなんか、見惚れてしまう。

「ティア、録画は？」

「勿論してる。他愛なし」

歓声や指笛のような音に包まれる中、それなら私がやる事はただ一つ。ご祝儀は…金欠だから後で別の白金貨5枚分くらいのものを渡すとして、森林と神聖の魔法を合わせて…

《《フラワーシャワー》》

周りと合わせてとっておきの魔法を使う。不自然じゃないお花と、光系の魔法による禍津払い的な魔法。それに気付いたのか、こつちを向いた2人に手を振ってみる。

「後で、この大遅刻の理由ちゃんと説明しないとね」

「そうだな…」

「許してもらえればいいけど」

そんなこんなで残り幾ばくもなかった結婚式は進んで行き、二次会

にでも移行するのか分からないけど周りの人が移動し始めた。大勢の人の流れから脱出したところで、ふと思い出したようにロイドが聞いてきた。

「あの2人が貴族だって事で思い出したんだか、本当に良かったのか？」

「ふえ、何が？」

「本当の貴族に成れるって話があったんだろ？領地とか諸々付いた大貴族に」

2人を見て貴族って凄いなって気持ちもあつた。反対に人間界で見えてきた腐った貴族とか、いぎって時に役に戦えない貴族も見えてきた。全体的な印象の悪さは置いておいて、私があのお話をスッパリ断って脱走したのにはちやんと理由がある。

「まああつたけど、私は自分の手に余る物なんて要らないもん。権力を握るなんて柄じゃないし」

そう言つてティアとロイドの手を握り、満面の笑みを浮かべて言う。

「しばらくはこうやって、自分の家族の手を握って居られれば十分だよ」

自分にとっての大切なものは、そういうお金とか名誉じゃなくて、この繋がりに他ならないと信じて。

異世界に転移したと思ったら転生者で、鍛冶師の幼女で。女神様を恨んだ事もあつたけど、この幸せをくれた事にだけは感謝したいと思う。後で壊毒テロはするけどね!!

〈Fin〉

最終登場人物紹介&あとがき

イオリ・キリノ

種族 人族 銀狼族 半神

性別 幼女

年齢 8

職業 ヘーパイストス・ドヴェルグ・トリスメギストス・スクナヒコナ・ウルカヌス・ゴブニュ・天目一箇・ディアンケヒト・ヴィシユヴァカルマン・(空き1)

LV 223

HP 3175 / 3175 +0 / 22300

MP 13089 / 13089 +0 / 99999

STR 3271

DEF 3218

AGL 3030

DEX 99999+10498

MIND 2951

INT 13237

LUK 119

《戦技》創造 幻想世界・戦乱の剣

《スキル》

職業

ヘーパイストス LV 261 ドヴェルグ LV 253

トリスメギストス LV 180 スクナヒコナ LV 234

ウルカヌス LV 210 ゴブニュ LV 170

天目一箇 LV 100 ディアンケヒト LV 79

ヴィシユヴァカルマン LV 80

EX

家事万能 無詠唱 情報の魔眼 変身

MP消費半減 武芸者の卵 生産者の魂
もう一つの世界 アナーザールド 叡智 七大罪・暴食
通常

演算補助 LV | 魔力精密制御 LV |
HP高速回復 LV | MP高速回復 LV |
死神 LV | 身体能力超化 LV |
龍鱗 LV | 龍力 LV | 五感超化 LV |
韋駄天 LV |
痛覚無効 LV | 物理大耐性 LV 19
魔法大耐性 LV 24 状態変化無効 LV |
次元神
劫火魔導 LV 28 豊穰魔導 LV 27 海淵魔導 LV
24
星雲魔導 LV 21 颶風魔導 LV 10 星光魔法 LV
12
樹界魔導 LV 11 零度魔導 LV 14 霹靂魔導 LV
13
生活魔法 LV |

《称号》

NEW!!

ケルト・インド・鍛冶神代行・抑止力の監視
書き換える者・神殺し・フェンリル・欠魂
魔導の極み・半反魂者・半神・カンスト
自由人・混血・混魂・わがまま廃スベック
極限の到達者・カミカゼ・神のお気に入り
成長停滞・贗作者・真作者・無限の糖製
バカツプル・未長く爆発しろ

《加護》

世界神の加護++ 鍛冶神の加護++
魔神の加護++

《装備》

武器・魔型聖鎌・ヴィターエトモルテ（半壊）
マジカル☆スミス☆ハンマー
ナノゴーレムT4・鎌剣ブリジンガー +30
オリハルコンナイフ +30・オリハルコンの針 +30
防具・叡智の副王の棺桶 ×7
戦闘用黒コート+30・武具召喚ペンダント +10
隴水晶の胸当て+30・契約の腕輪
隴水晶の腕甲 +30・幸運の髪留め +5
隴水晶の脚甲 +30 技巧神の指貫+30
変形可能グラシユ+30

名前 イオリ・キリノ
性別 女
年齢 8
生まれ 不明
ランク S
ゴールド 3,652,100

銀髪セミロング、紅蒼オツドアイのTS少女。最後の最後まで暴走してくれたこの小説の主人公。

側から見れば人間界を救う為に尽力し、自らの身すら犠牲にして黒幕を倒した勇者。けれど本人曰く、自分の彼氏の地元を壊されない為自分の家族を守る為に戦っただけとの事。

勇者に関しては、先生・タク・ドMニンジャを除き全員のステータスを暴食で喰らい尽くしてから返した。

偽物じゃない神殺しを達成してしまった事や色々な要因が重なり半神へと成ったが、その際魂を半分欠損。のちに欠損した部分は回収され契約していた精霊の魂で補完されたが、そのせいでおかげで不老不死ではなくなっている。ただし成長してもロリの呪縛からは流れる事は出

来ない模様。

彼氏との関係は良好。今でもイチャイチャしたり殺し愛をしたりしながら、獣人界を中心に旅をしている模様。最難関の姉を突破し、ロイドとは両家公認で婚約者である。

「将来の夢?お嫁さ……コホン。どこかで鍛冶屋さんかな?勿論ロイドと一緒に!」

ティア・クラフト

種族 元魔族 神族 精霊 ヨグソトリス 天之狭霧神

性別 幼女

年齢 ???? 歳

職業 ヨグソトリス・巫女姫・仙人・大精霊・占星術師・天之狭

霧神(空き3)

LV 223

HP 8898 / 8898 + 0 / 9999

MP 17517 / 17517 + 0 / 9999

STR 4605

DEF 4607

AGL 4739

DEX 20045

MIND 5636

INT 18476

LUK 120

《スキル》

職業

ヨグソトリス LV 279 巫女姫 LV |

天之狭霧神 LV 181 大精霊 LV |

占星術師 LV | 仙人 LV |

EX

全てを見通す目 無詠唱 MP消費半減

転身 精霊化 叡智 ア
ナ
ザ
ー
ワ
ー
ル
ド もう一つの世界

七大罪・暴食

通常

超思考 L V | 魔力精密制御 L V |

HP 超速回復 L V | MP 超速回復 L V |

五感超化 L V | 物理超強化 L V |

魔法超強化 L V | 確率補正《大》L V |

龍力 L V | 龍鱗 L V | 身体能力超化 L V |

物理大耐性 L V | 魔法大耐性 L V |

状態変化無効 L V | 飢餓大耐性 L V 17

痛覚無効 L V |

時空神

海淵魔導 L V | 暗雲魔導 L V | 零度魔導 L V

21

颯風魔導 L V 18 星光魔導 L V 19 龍魔法 L V

17

爆炎魔法 L V 11 迅雷魔法 L V 11 怨嗟魔法 L V

24

《称号》

NEW!!

神殺し・半神の契約者・砂糖空間の被害者

魂の導き手・擬分霊箱・気配り

《装備》

武器・カドケウスの杖・自殺志願 マ
イ
ン
ド
レ
ン
デ
ル

魔改造ビデオカメラ +30

防具・邪神の白衣 +30・白ワイシャツ《門》+30

守護のブレザー《紺》+30

時のリボン《黒》+30

チェックのスカート《太陽》+30

黒薔薇のニーソ +30

焦げ茶のシューズ《夢幻》+30

ロイド

種族 人族(偽・狐人族)

性別 男

年齢 13

職業 双剣士・エアマスター・拳闘士・ランサー・イタカ(空き3)

LV 201

HP 3473 / 3473

MP 4646 / 4646

STR 3535

DEF 2556

AGL 8346

DEX 6234

MIND 2763

INT 4413

LUK 132

《戦技》神風

《スキル》

職業

双剣士 LV | エアマスター LV 156 拳闘士 L

V |

ランサー LV | イタカ LV 186

EX

即死回避 豪嵐の守護 詠唱破棄(風)

七玄徳・勇氣

通常

鷹の眼 LV | 超解析 LV 1 超隠蔽 LV 24

魔力精密操作 LV 16 アイテムボックス LV 14

空間把握 LV 20

双刃双翼 LV 23 体術 LV | 軽業 LV |

槍術 LV |

気配感知 LV | 身体能力超化 LV 29

2
五感超化 L V 1 2 速度超化 L V 2 0 縮地 L V 1

韋駄天 L V | | 韋駄天 I I L V | | 韋駄天 III L V
1 9

状態変化無効 L V | | 物理耐性 L V 1 6

魔法耐性 L V 1 7

颯風魔導 L V 1 2 暗黒魔法 L V 1 0 冷凍魔法 L V

1 5

迅雷魔法 L V 1 4 生活魔法 L V | |

《称号》

NEW!!

固有結界・抑止力の監視・果てなき蒼穹

音超え・神殺し・勇気の継承者・雲耀

隻腕の勇者・神速・速さが足りない!!

無限の糖製・バカツプル・未長く爆発しろ

《加護》

豪嵐の加護 + 鍛冶神代行の寵愛 E X

《装備》

武器・輝く蒼穹の半槍・笑顔の蒼穹の半槍

銀緑の鋭刃翼×2

防具・浪漫式義手・右腕【改】・緑狐の腕輪

手編みのマフラー♡

龍皮のグローブ《右》+30

アームガードSein +30

フェストウムアーマー +30

レッグガード《R》ラディカルグッドスピードG S《S》+30

|| || ||

名前 ロイド

性別 男

年齢 1 3

裏切ったニンジャ。そして傲慢で覚醒したけど、即座にいき地獄に送り込まれて性格が書き換えられた。全部ドン千のせい、イオリは悪くない。作者も悪くねえ！

容姿は整った方と言えるが、書き換えられた性格が全て台無しにしている。イオリやティアからの命令には忠実な模様。そのおかげでステータスは残された。

#書く気が無いのでステータスはカットされました#

先生

イオリ達が全力バトルしている間、全力で街を守り続けていた裏の功労者。その割には作者の扱いが雑だった可哀想な人。

地球に帰るの際、ステータスを残った最後の1人。先生なので、長い間行方不明になっていた生徒の事や、生徒のメンタルケアなどに奔走している。実は1番苦勞人。

アルデイト・ガラント

途中まで出て来ていた王都のギルドマスター。レベルカンスト直前の、イオリの鍛冶性能をバトル性能に振ったような人類最強のバグキャラ。

騎士団長と相打ち。その後は洗脳され狂化した住人を峰打ちして回っていた。実は街の破壊の便宜をはかってくれた人。

メリツサ

騎士団長、だが女だ。とバグキャラを止める為だけに登場したキャラ。チートスキルや不死鳥からのバックアップがあったとはいえ、上記のバグキャラと相打ちになれるほどのハイスペックな人。

魔神戦後、街の修復など諸々忙しい状態ではあるが、アルデイトさんとくっつきそうな雰囲気になっているらしい。

メイ

髪は茶、筋肉モリモリマッチョマンなロイドのお父さん。思いつきり進展したのでイオリのお義父さん。帰って来た成長した息子とそ
の彼女には、好印象の模様。魔神戦をしてる裏で、街の防衛戦を続け

ていた。

シンデイ

長い緑色の髪のマム。思いつきり進展したのでイオリのお義母さん。息子が連れて来た彼女には、ちよつと厳しめの模様。魔神戦をしてる裏で、夫と共に街の防衛戦を続けていた。

モーブ

牢獄ナウ。

海堂

ラスボス感漂わせていた中ボス。全てを焼き尽くす暴力に呑み込まれて蒸発。余りにもあつけなく死んだ。

魔神

今作品のラスボス。実はティア様の見立ては凶星。女神様のいた会社に就職、ブラック過ぎる環境に病んで世界を滅ぼそうとし始めたヒキニート。本来なら世界1つを滅ぼして余力ある力を持っていたが、イオリやティア等のバグとしか思えない戦力の人がいる時点でどっちみち不可能だった。

イオリの半自爆技によって、魂すら一片残らず消し飛んだ。転生とかの可能性は微塵もない。

ラインネート

蔑称ロリコン課長女神。実は元魔神の上司。諸々の事情を承知だったため勇者召喚なんて事を許してみた。本来ならチートはホモ上院に一点集中させる予定だったが、別に気に入った子がいたので変更。更に自分のために幼女化させた、自分の趣味を優先させている女神様。

そのイオリが元自分の上司と契約、魔神を討滅、半神まで上り詰めた事によって一気に部長まで昇進した。これまでのイオリに対するお節介も、それによってお咎めなしとなっている。が、それによって力を増したイオリ達による壊毒テロがいつ起こるかビクビクして過去しているらしい。

一体どんな会社なのかとても気になる？多分世界の修正でもしてらんじや無いですかね？

番外話

番外話 日常風の話

それは工程を破壊的なまでに短縮してない旅の途中、街でしばらく泊まる宿を探している時の事だった。雪の降る夕暮れ時の獣人界は、寒いけど綺麗だと思う。

「そういえば、なんだか」

「ん？」

「何か欲しい物ってないのか？イオリ」

隣を歩くロイドが、ふとそんな事を聞いてくる。正直私としては、おんなじマフラーしてて手も繋いでるから満足なんだけど…

ティアはあれから若干霊体化してる事が多くなつた。大鎌は直してる最中だけど、やっぱり元の完全な姿にはほど遠いから疲れるらしい。後少しだし早く直さないと…って、それは置いておいて。

「いきなりどうしたの？」

「いや、ちよつとな」

そう言うロイドの視線を追うと、彼氏らしき男の人に何かを買つたとねだる女の人…つまりカップルがいた。あつ、なるほど。だから欲しい物は？っていう事だったんだね。

「うーん、欲しい物って言ってもなあ…戦闘関連のは自作が1番だし、薬とかも自作か地球産が安心。ロイドからのプレゼントなら、変なものじゃない限り嬉しいけど……」

となるとアクセサリだけど髪留めは一個で十分だし、ゆ、指輪はまだ早いでしょ？腕輪は私としては装備品認識だからなし。壊れた主武器メインアームは欲しいって言えるけど、大鎌に代替品はない。

「やっぱりそうになると、美味しいご飯？」

「ちよつと待つマスター、これは見過ごせない。色気より食い気か」

「だって事実なんでもん…こうしてるだけで私、結構満足だし」

そう言っつて、例のカップルがしてるみたいにロイドの腕を抱き込んでみる。なんかこうしてると暖かいし、ポカポカした気持ちになる。

…今気づいたけど、この大通りに入ってから地味にロイドに車道？側をキープされてた件。

「それなら、手伝って欲しい事とか、マスターは出てこないの？」

「言ってくれば、出来る限り手伝うぞ？」

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、いや、うーん…」

手伝って欲しい事って言われて、即座に思いつくのはやっぱり大鎌の強化修復。けどアレ、絶対に心配されそうな造り方しかしてないから何か言われそうだし…

「マスターは、後で大鎌を直すのを手伝って欲しいと考えてる」

「あ、ちよつとティア！」

「俺に出来る事があるか分からないけど、少しくらい手伝わせてくれないか？…ここ最近、夜中までやってただろ？」

「バレちゃってるし…」

手を繋いでなかったら所謂orzな体勢になりそうな勢いで、私がつくりと項垂れる。これ以上変なことをティアにバラされても困る…困らないけど心配かけちゃいそうだし…

「うう、じゃあ宿とつご飯食べた後手伝いに来て欲しいな。場所は言わなくても分かるよね？…って、みんなで食べるから関係ないか」

「それもそうだな」

「ねー。あ、ティアは強制参加だから」

「解せぬ」

怒られるのを覚悟して、私はロイドに手伝いをお願いするのだった。ティアは絶対に強制参加です、慈悲はない。あとは言っておくとしたら、

「ロイド、今夜は寝かさないよ？」

出来るだけからかうように、使ってみたかった言葉を言ってみるのだった。成功するにしろ失敗するにしろ、寝させないし寝れないのは確定だもん。

◇

そんな流れがあつて俺は今、

「今更だけど、ようこそ私の工房へ」

イオリのスキルで出来ているらしいこの世界に、満面の笑顔で迎えられていた。相も変わらず真っ白な空間に頭が痛くなる量の魔物が積まれてたり、武器防具が森のようになってたりと常識では見られない光景が広がっている。

それだけならば正直見慣れてる光景だけど、その中に普段と違って全く見覚えの無いものが一箇所だけあった。

「えっと、俺って確かあの大鎌を直す手伝いに来たんだよな？」

「うん、重要だけど重要じゃない役割を任せる事になるけど…」

「それじゃあ、あれってなんだ…？」

「直す大鎌だね！」

どうせマトモじゃないと予想はできていた。だけど、物を直しにきた筈なのに何か脈打ってる赤く所々が黒い大きな球体を大鎌って言われるのは、流石の俺でも完全に予想から外れていた。

「俺にはどう見ても大鎌には見えないんだが…」

「えっと、その事なんだけどね？」

俺の疑問にそう前置きしてから、モジモジと指をツンツンする可愛らしい仕草をしながら話し始めてくれた。

「あの浮かんでるのは、私の血とか魔力とか諸々が溶け込んだ液体の中に大鎌のパーツがバラバラに浮かんでる状態の奴で…うん！簡単に言うと、私が潜って直して再起動するんだよ！」

「マスター、なるべく早くね」

イオリの言う通りならば、血とかが溶けている球体の下で杖を構えているティアさんからそんな声が飛んでくる。おそらく省かれた所は俺が聞いても理解できない部分だろうからいいけど、何をすればいいのか全く分からない。

「それでね、私がロイドに頼みたいのは私の身体を任せるのと、失敗した時に最低1分間逃げ回ってもらおう事だね」

「逃げる…？」

「うん、最大最速で逃げて欲しいな。私を抱えて」

なんで武器を直すだけの筈なのに、なんでそんな事になるんだろうか？頭が痛くなってくる。そんな俺の様子を見てか、手をパタパタと

振りながら説明を続けてくれた。

「だ、だってロイドにもティアにも必殺技があるのに、私だけ使い勝手のいいやつがないじゃん。だからちよつと新機能を追加したんだけど、それが暴走したらとんでもない事になるから…」

「それで、追加した機能って言うのは？」

「私の所持してる作った全ての武器の性能を、1分間だけ大鎌の性能に上乘せする必殺技…かな？」

えへへ…とでも言えそうな感じで笑っているけど、あの武器の山が全て上乘せされるって、明らかに過剰な力だと思う。俺も言えた事じゃないが。

「まあそういう小難しい話は置いておいて、早くやつちやお！」

「はあ…分かったよ」

何かに巻き込まれるのはいつもの事だし、諦めて手を引かれるままに球体の近くへと進んで行く。近くにいると、微かに血の臭いが漂ってくる上にゾワゾワとした感覚が全身に走る。

「それじゃあ、改修した大鎌の第1回起動実験を始めます！イエーイ！」

「イエーイ」

「い、いえーい」

そんな漂う負の雰囲気とは正反対の雰囲気がたった一言で形成されて、なんだか心配とかがどうでもよくなっていくのを感じる。魔神だってどうにかなったんだ、物事やれば案外どうにかなるだろう。

「それじゃあティア、魔法の補助と命綱よろしく。ロイドは私の身体を…えちい事しないでよ？」

「了解」

「分かったけど、そんな事するか！」

若干言葉を間違えたかと思つたが、ただ単にからかわれていただけのような。そんな短い会話が成されて秒と経たずに、俺達を中心に魔法陣が幾重にも重なり合いながら展開される。

「没入」

それに見とれている間に、ドサリと糸が切れた人形のようにイオリ

が崩れ落ちる。身体を任せるって話だったから、さして驚く事じゃない。

「それで、結局どんな作業をしてるんです？これ」

イオリをおぶりながら、杖を構え球体を見上げるティアさんに聞いてみる。

「簡単に言えば、大鎌の修復。具体的な内容は、悪霊の調伏、魔法の再構成、パーツ同士の連結、再契約」

「悪霊って…」

「元々吸収していたモノ。一度暴走自爆させたせいで、制御不能に陥っている。そこに精神だけで飛び込むのは、大時化の海に小舟で出るような事。いわば灯台の役割を果たすのが、私達」

「色々納得出来ました」

ついでに魔神から出てきた球体とか危ない素材もわんさか放り込まれてるとか言われたら、やっぱり後で一回怒らないといけない気がしてくる。…え、達？

「俺もそんな重要な役割を？」

「勿論。マスターと寝ておきながら、自覚がないとは許せない」

「ちよつと待つて下さい。それじゃ勘違いされます、誰もいないけど！！」

あれは俺が泣き疲れて安心して寝ちゃっただけだ。その、一緒のベッドで寝たのは結果論であって俺から望んだわけじゃなくて…つて、俺は一体誰に言い訳してるんだ？

そんな疑問に頭を捻っていると、背負ったイオリがピクリと反応した。さつき書いた通りならもつと時間がかかりそうな物だけど、何かトラブルでも起きたのだろうか？

「どうしようどうしようよし閃いた！私のカウントに合わせて1個目の必殺技をまっすぐ撃つてロイド！」

背中から飛び降りたイオリの声があまりにも切羽詰まっていたので、言われるがままに必殺技を撃つ体制を整える。

「さん、に、いち、今！」

「自由を！」

俺の突き出した一撃必殺の拳と、球体から発射された見覚えのある黒い靄が衝突し、後者が一瞬で霞と消えた。それと全く同じタイミングで、浮かんでいた球体が急激に萎んでいく。

「危なかったあ…まさかあの欠けらに魔神の怨念がいるとは」

「危なかったじゃないだろ」

ペしりとイオリの頭を軽く叩く。鍛冶を禁止された時のイオリを見ちゃってるからやらないけど、毎度毎度こんな事になるのなら我慢してもらいたい。ただの心配しすぎかも知れないけど。

「あう、ごめんなさい」

「マスター、反省してる？」

「…ここなら、負ける要素無かったんだもん」

やっぱり我慢してもらった方がいい気がしてきた。それか、少なくとも俺かティアさんのどっちかが、すぐに助けに入られる状況にいるとか。

「よいしょっと。こほん、これで一応終わりだねー」

球体の中心から落下してきた大鎌をキャッチしたイオリが、作業の終わりを告げた。始めてから10分も経ってない気がするんだが……

「その大鎌、銘は？」

「ふえ、銘？」

そんな風に発生した沈黙を破ったのは、ティアさんのそんな質問だった。確かに使い続ける武器なら、すぐに名前を確認しないといけない気がする。少し前までの俺の武器みたいに、ふざけた名前かも知れないし。

「うーんとね、うわあ…」

「どんな名前なんだ？」

前までイオリが持っていた大鎌、その色に深みが増した他には真っ暗な鎖が追加された大鎌。それを見てなんとも微妙な表情しているイオリに聞いてみる。

「《刈り取る者》だって…メギドラオン撃ったからかなあ」

じやらんと独りでに鎖がなり、勝手に大鎌が畳まれていく。刃や柄

の部分が格納されていき、ほぼ毎日見ていた銃の形に。そして鎖は背負って下さいとでも言わんばかりに垂れている。

「マスターなら、いつかこうなると思ってた」

上手く言葉には出来ないけど、ティアさんの言うことには全面的に賛成だった。

番外話 その後の勇者達

キーンコーンカーンコーンと、もう聴き慣れてしまったチャイムの音が鳴り響く。言わずもがなそれは、学校の授業が終了したサインだ。

地球に帰ってきてからはや半年。検査やら取材やらマスゴミやらで身動きが取れなくなったりもしたが、俺たちは今冬休みを完全に取り潰した補修に……簡単に言えば学校日替に戻って来ていた。

「ふう……やっぱり1年もやってないと、全然分かんなくなってるなあ。y l l t a n θ のグラフとかなんなのあれ」

「そんな事を言える地球に帰ってこれた事、ご主人様に感謝するのね」隣の柊さんからそう声がかけられる。まだご主人様呼びつて……うん、何があつたのか聞いたから分からないでもないけども。

「……そのご主人様って止めない？柊さん」

「無理ね」

「ええ……」

こんな風ななんでもない会話が出来る事から分かるだろうけど、俺達元勇者は全員……ではないがほぼ全員が地球に帰って来ることができている。

勿論帰って来ていないのは、蒼矢と藻部島と海堂の3名。そのどちらも、あまり言いたくはないが地球側の記録としては死んだという事になっている。事前に本人と姉から説明されている蒼矢の家の人と違って、海堂の家族は悲しんでいたけど俺には何も、言えなかった。加えて、その事に関してマスゴミが騒いでたりもしたけど長くなり過ぎるから割愛させてもらう。

話をもどすけど、帰ってこれた事に関しては、このクラスの誰もが蒼矢……今はもうイオリさんの方がいいのかな？まあ蒼矢でいいか。このクラスの誰しもが、地球に帰してくれた事に関しては蒼矢に対して感謝している。だけど……

「あーあ、こんな事魔法が使えればすぐなのになー」

「そんな事言っても仕方ないじゃない、あの娘に全部盗られちゃった

んだから」

そんな事をうっかり眩いてしまった男女が、隣の机にいる柊さんから放たれた殺気で固まる。

こんな風な言葉が今尚聞こえて来るのは、俺たちを地球に送り帰す時に蒼矢がやらかした事に起因している。

「つくづく規格外だとは思ってたけど、まさか先生と俺達以外のステータスを全部奪ってくなんてね……」

「私やあなた先生と違って、確実に悪用する輩はいるでしょうしね。それでも常人よりは遥かに動けるのだから、ご主人様の温情に感謝する事ね」

そんな事を話しながら、とても最近だった筈なのに遠く感じる記憶に思いを馳せる。休み時間という短い時間だし、それくらいはしてもいいだろう。

◇ 向こうの世界で蒼矢達は、今何をしてるんだろうか？

蒼矢が目覚めてから大体2ヶ月。あらゆる事を投げ捨てて、さらに自分が獣人だと明かして逃げた蒼矢達のせいで半ば王城に拘束されている俺達に、その元凶から一通の手紙が送られて来た。

正確に言えば、俺の部屋に突然手紙が現れたのだが、まあそれほどでもないだろう。その肝心の内容はこんなものだった。

|||||

8時だよ、全員しゅーごー!!

地球への大規模転移の準備が整ったから、今から1週間後に「リフン」の街に勇者を全員集めて居る事。ただの1人も残さない。1人残さずアヴルムから旅立ちであり、1人残さず地球へと帰還する始まりである。参集せよー!!

PS : 私の正体は秘密にしておいてね。適当に、美少女☆鍊金術師とでも紹介しておいてくれればいいから。

|||||

「ドリフと漂流者^{ドリフ}を混ぜちゃダメでしょ…あとサラツとカリおっさん」

無駄に女の子っぽい丸い字で書かれたそれは、書き方こそ巫山戯ているけれど俺達が地球へ帰る事が可能になったという報告に違いなかった。

俺と柘さん、先生は全て計画を承知だったけれど、他の人からすれば尋常じゃなく嬉しい情報に違いないだろう。

「まあ、少し怒るくらいは許されるよね」

そう1人眩きながら、俺はみんなへとこの事を伝えに行くのだった。

蒼矢も其れ相応のデメリットを受けた筈だけど、パーティーとか養子縁組とかその他諸々の事後処理を押し付けられたこっちの気持ち、分かってるんだらうね？



「改めて来てみると、そんなに経ってないのに懐かしく感じるなあ…」
あの手紙が来てから丁度1週間。約束通り俺は、クラスメイトに事情を説明してリフンの街に来ていた。とは言っても、いつだったかのオークの時と違い魔神戦の末期に実用化された転移門のおかげで、移動に殆ど時間は取られていない。

なんて言ってみただけけど、そもそも俺達が今いる場所は街中ではない。丁度魔神戦の時に貼っていた結界、その外縁部辺りにある丘のような場所だ。何か文字の刻まれた大きな石が置かれている様は、ストーンヘンジを想起させる。

「さてと、どうやら全員揃ってるみたいだし話し始めてもいいかな？」
目の前で、例のタナトスが大鎌を持ったような戦装束を身に纏った蒼矢が言う。隣にはティアさんも控えていて、なんだか懐かしい気持ちになる。

「手紙に書いた通り、私がみんなを地球に帰す魔法を使うイオリです。今後会う機会があるかどうかは分からないけど、よろしくね。詳しい説明はタクか先生から聞いてるだろうからカットするけど、1つだけ訂正があるんだ」

ザワザワとしていた他のみんなが、一瞬だけ放たれた桁違いの殺気でしんと静まりかえる。ティアさんが一言も喋らないのが、俺としては不気味でならない。何か大切な事をはぐらかされているような感じがする。

「もしこの中にアヴルムに残りたい人、あとはこっちの人とお付き合っている人がいるなら先に言って。その仲を引き裂くほど私はヤボじゃないから」

そりやあロイド君と恋人になってるもんね、なんて思いつつも蒼矢を警戒し続ける。迂闊に返事は出来ない、そんな隙を晒したら即座に狩られると俺のゴーストが囁いている。

少しだけ魔法を使い周りを確認するけど、誰一人としてそんな関係を持った人はいないようだ。

「誰もいない…と。それなら良かった」

花の咲くような笑顔でそう呟いた後、一拍おいて蒼矢は言い放った。

「心置き無くやれる」

そんな言葉が聞こえたと思った瞬間、蒼矢の姿が書き消えた。やっぱり何か隠し事をしてたか。そう思いながら感覚を研ぎ澄ませている間にも、1人また1人とクラスメイトが倒れていく。

このままではマズイと思い収納していた聖剣を取り出した瞬間、再び蒼矢が目の前に出現した。

「あーもう疲れた！ かたっ苦しいのはやめやめ！」

「お疲れマスター」

「害意はないんだろうけど、みんなに何をしたの蒼矢？」

大鎌を担ぎ、とてもリラックスした表情になった蒼矢を問いたです。

「えー…先生とそのドMには説明したし、タクに言ったら絶対反対されるんだもん」

「そりやあこんな惨状を見せつけられたら…って、説明？」

「うん」

こくりと頷く蒼矢。それを見て振り返ると、まさに死屍累々といっ

た様子だが先生と柊さんは倒れてなんていなかった。寧ろ、倒れたクラスメイトをストーンヘンジ風のサークルの中に運び込んでいる最中だった。

「あれ？ 天上院君は何も聞いてなかったんですか？」

「委員長が聞いたら、確実に邪魔するでしょうし当然でしょう。ご主人様の慧眼には感服いたします」

なにも聞いてなかったのは俺だけって事か。でもそもそも止められたか分からないし、言ってくればこれくらいの事なら止めなかったんだけど…

「言ってくれば、なんて顔をしてるけど、それはマスターがしでかした事を理解してないから」

「はい？」

心の内を見透かされたようなその言葉に、若干ギクリとしたあと頭に疑問が残った。マスターがしでかした事？

「えと…簡単に言うとな、タク達3人を除いた全員からステータスを強奪して、追加で呪^{のろ}ったんだよね。一生解けないレベルの」

「その理由は？」

しでかしたって言うだけあって、とんでもない事をやらかしていた。何を思っってそんな事をやったのか、理由だけは聞いておかないといけない。

「レベルが低い方が転移させやすいのが最近試してて分かったし、こんなファンタジーぱうわーなんて地球に戻ってから大々的に使ったら解剖ルートまっしぐらだよ？ どうせひけらかす様な頭の足りないバカはいるだろうし。一応、20位までしか奪ってないから自衛程度ならできるんじゃないの？」

「そりやそうだろうけど…なんか冷たくない？ 蒼矢？」

「そもそも地球に帰してあげるだけでも破格の優しさだと思うんだ、私は。それで呪いだけど、みんな消費MP倍加の状態にしたから、地球に帰ってもロクに魔法は使えないと思うよ？」

そこから、まあと前置きして蒼矢の話は続いた。なんだか警戒するだけ無駄だし、出していた聖剣をアイテムボックスに仕舞う。今更だ

けど、これって銃刀法に引つかかるような…出さなきゃ問題ないか。「タクと先生からはそもそも奪える可能性が5割以下だし、変態ニンジヤは言い方は良くないけど、私にとって使える手駒だから取りはしないし安心していいよ!」

「まあ、そこは別に良いけど…」

一応は筋が通ってるし、反論がすぐには思いつかない。そうしている間にも続々とクラスメイトはサークルの中に運び込まれていき、遂に全員が地面に寝かされた状態になった。

「それじゃあ先生、地球に行つた後のことはよろしくお願いします」「勿論よ。全員無事に帰す事は出来なかったけど、それくらいは任せたいわ」

先生に礼をしてそう行つた後、俺と柊さんに向かつてもう一回礼をして蒼矢は言った。

「タクも柊さんも、元気でね」

「蒼矢はどうするの? これからもずっとこつちの世界に?」

「うーん、お盆と正月には結衣姉に会いたいし地球に帰るかな? でも、誰かをこつちの世界に連れてくるなんてことは頼まれてもしないから」

「一人暮らしを始めた学生かよ…」

思わずそんな事を呟いてしまった。隣で駄犬と言われた柊さんがビクンビクンしてるけど、俺はそんなの見てない気付いてない。

「マスター、準備終わった」

「ん、りょーかい。タクも柊さんもサークルの中入つて入つて」

背を押されて、倒れたクラスメイトで足の踏み場もないサークルの中に入れられた。これって本当に大丈夫なんだろうか?

「転移する場所は学校の屋上、時間は向こうもお昼」

「色々面倒な事はあるだろうけど、頑張つてね」

周囲から空に煌めく光が立ち昇り始め、丘一帯が幻想的な光景に包まれる。

「今はいないみたいだけど、そつちこそロイド君と元気にね」

「言われなくても分かつたますよーだ」

そんな会話が終わった頃、魔法陣が地面に浮かび上がり蒼矢とテイアさんがそれぞれ大鎌と杖を掲げた。

「それじゃあお達者で」

「『《異世界送還》』」

光が弾け、視界が極彩色に染まり飛行機に乗っている時のような振動が襲いかかってくる。だがそれもほんの数瞬で…

◇

「委員長、次移動教室ですのにに呆けていて良いですか？」

「えっ、次はなんの授業だっけ？」

「日本史よ。ご主人様に力を残してもらえたのだから、しっかりしなさいよね」

そういつて柊さんは立ち去っていった。どうやら深く思い出し過ぎていたらしい。

「これ以上思い出してもしょうがないか」

こうして無事に地球に帰ってこられたのは間違いないし。死ぬ気で練度をあげれば俺の次元魔法でも異世界に行けるかもしれないけど、そんなのを試してる暇は今はない。

未だに騒いでるマスゴミもいるし、集団幻覚って事にされそうな気もするけどやらなければいけない事が他にも沢山あるのだ。

異世界とは違った生き方で、未来に進んでいくために。

番外話 ステンバーイ ステンバーイ

「ティア、そっちどうなってる?」

私は今までわちゃわちゃと動かしていた手を止め、色んな数値を観測してもらったティアに聞く。これでダメならまた一から作り直しになっちゃうから、出来るところなら成功してほしい。

「問題ない。全数値オールグリーン」

「安定は?」

「してる、問題ない。事故が起こる可能性は、限りなく低い」

ティアからそうお墨付きを貰って、私は手に持っていた工具を投げ捨て大の字で寝っ転がる。頑張ってきて2週間、ようやくその努力が実を結んだ。

「それじゃあこれで竣工ー!!」

「お疲れ様、マスター」

そう言う私達の目の前にあるのは、簡単に言えば超巨大な鋼の球体だった。それには1つの巨大な主砲が鎮座し、表面に小さな副砲がズラリと並び、装甲は職人技の光るオニオン装甲。動力には発電効率が核融合炉を大幅に超える「J P l e e v e l M H D 動力炉」を採用し……つまり推進装置こそないけれど、それはどこからどう見てもヘヴィーなオブジェクトだった。具体的には第三世代くらいなの。

そう、私は今の今まで、自分の門の中の世界にオブジェクト^{発電所}を作っていたのだった。ついでに色々便利そうだから魔力⇄電力に変換できる装置も一緒に。今まで^{木材}^{資源}大きな森とか^金^属極大のピラミッドとか、^魔中天に輝く改造ダンジョン^源コアとか^水^{資源}空中の巨大水球とかそれを利用した水力発電所とか色々作って来たけど、久々の大仕事だった。

「後は電力を魔力に変換して貯めとけば、年末には地球に帰れるね」
「ん、両親にロイドを紹介できる」

「べ、べつにそんなじゃない事もないけどそれだけじゃないし……」
それも無いことはないけど、この姿になってから両親とはまだ会っていないし。それに、せめて年末年始は帰らないとお姉ちゃんに何されるかわかんないし!!

そんな事を言いながら、これを作り始めた時の事を私は思いだすのだった。

◇ 「全っ然魔力が足りない!!」

元クラスメイトの勇者達を地球に送還してから1週間と少し、私は全力でそう叫んでいた。宿の他の部屋の皆さんごめんなさい。

「えっと、なんの魔力が足りないんだ?」

「うんとね、私達3人が地球に行くための魔力。前一緒に行こうって言ってたけど、勇者を送還したせいで貯めてた魔力がスツカラカンでね…」

ロイドの質問に、私はため息を吐いて答える。

実は、今まで神様への復讐とか異世界旅行のために貯め込んでた魔力を勇者を送還するのに使い切っちゃったから、魔力貯蓄がもう0になっちゃってたのだ。今は1万近く貯まってるけど、どう考えてもこのままじゃあと2ヶ月ほどでくる年末までに往復分の60万は貯まらない。いや、安全性を考えれば80万かな? まあどつちにしろ、今からじゃ間に合わなくて計画してた里帰りは出来ないことになる。違う私はまだ結婚してない。

「だから、早々に対策する必要がある」

「まあ、実際にはもう始めてはいるんだけど…」

ティアに少なくともはない魔力を使って本体にアクセス、超弩級の動力炉の設計図を取り寄せて貰っている。私は私で素材を集めてパーツを作ってる最中だったりもする。けど、私は基本物作りには魔力を使うわけで…

「そのせいで魔力の消費と供給の効率が悪くなってまして、ちよっとロイドに手伝って欲しいなーって思ってる」

一応動力炉が完成すれば1週間で片道分は貯まる(予定)と言っても、念には念を入れるに越したことはない。

「まあ別にいいけど、俺に何か手伝える事ってあるのか?」

「うん! セツかくこの街にはダンジョンがあるから、何かのついでとか暇になったらいいから、しばらくこれをダンジョンに突き刺し

「ておいて欲しいな」

「そう言つて私は、自分の半身とも言える大鎌をロイドに手渡す。鎖がカチャカチャ鳴ってるし、暗いオーラも見えるけどそんなの気にしちゃいけない。」

「呪われないか？」

「むうー…かなり呪詛化してるけどあくまで私の魂なんだから、絶対ロイドに危害は加えませんー」

「ほつぺを膨らませて私はロイドを見る。まあ確かに女神様も呪えるくらいの呪詛だし、基本私とティア以外は触れないよ？ けど、直接的な意味じゃないけど私と契りを結んだ以上、ロイドには絶対効かないもん。そんな事を思いつつ、ふと時計を見て気づいた。」

「引き止めちゃった私が悪いんだけど…時間、大丈夫？」

「昨日確か、ロイドから何かパーティーを組んでやる依頼を受けてきただって話を聞いた気がした。それで、確かその集合時間まであと30分もない。」

「え？ あつ」

「『あつ』じゃなくて早く行かないと遅れちゃうって！ はいお弁当」

「ありがとうないオリ。それじゃあ行ってきますー！」

「いってらっしゃい」

「慌てて出発するロイドにお弁当を渡して、パタパタと手を振って見送る。うん、これでよし。」

「これが、夫婦？」

「ち、違う、多分違うから!!」

「私は顔を真っ赤にしながら必死にティアに弁明するけど、多分絶対信じてもらえてなかった。」

◇

「と、いうのがこれを作り始めた最初の頃の記憶。目の前にあるゴウンゴウンと音を立て起動してるこれは、それからうよきよくせつを経た完成した。」

「ねえマスター、マスターはどこまで行くの？」

「ふえ？…どこまでって？」

大の字で寝転がってる私に、ティアがそんな事を聞いてきた。どこまで行くってどういう事？

「既にマスターは、私から見ても尋常じゃなく強い。けれど、マスターは進むのをやめない。私は止めないけど、一体マスターはどこまで進む？」

「んー…とりあえずの目標は、f g oに聖槍の殻だったかな？ 最果ての塔が出てきたでしょ？ とりあえずはあれを壊せるくらいかなー」

「いつかF a t e時空とか神座…は無理だけど、3人で色んな世界を回ってみるのが今の夢だったりする。だったら、少なくともそれくらいの力が無いといつか死んじゃうと思うからね。」

「マスター、過剰火力って知ってる？」

「えっ、なにそれ食べていい？」

「お腹壊すからダメ」

「はーい」

こんな話が出来る日々は、誰が欠けてもダメなのだ。そんな日常になるのは絶対に嫌だ。だから、少しくらい過剰でも力はないとね！

番外話―大晦日

「はふう…」

下半身を包む暖かき、テレビから流れるのは年末特有の特番の番組、手を組み顔を伏せている私の目の前には定番のミカンが鎮座している。

「コタツには勝てなかったよ…」

私は普段と違って、完全に気を抜いて意識を夢の世界に飛ばす。漂ってくるのは懐かしい匂い、感じる気配は大好きな人達だけ。

そう、私は今地球に…つまり実家に帰ってきていた。

◇

「すうーはあー」

地球に転移で戻ってきてから数十分、私達3人は白沢家…まあ私の実家の前にきていた。勿論見た目は前来た時と同じで偽装している。

「いきなり深呼吸吸なんてしてどうしたんだ？」

「だ、だつてさー！ い、今の私とロイドつて、その、恋人同士、な訳だし…：…なんというか、結衣姉に絶対弄られるだろうし、嬉しいけど恥ずかしいっていうか…」

「俺の父さんと母さんにはあんなに堂々としてたのにな…」

「あれは別なの！」

本当にあれは別なのだ。シンデイさんには命を助けられてるし、メイさんとは共闘したからなんとなく平気だったけどパパとママに言うのは理屈が違う。

「行方不明だった息子が、帰って来たら娘になって、砂糖を吐きたくなる程イチャイチャしてる彼氏を紹介してくる。なおかつ、向こうの世界を救った英雄の1人で、私という邪神と契約してる。ロイド、理解できた？」

ティアが端的に私の置かれた状況を説明してくれた。改めて考えると酷いね。精神病院紹介されるレベル。

「はい、これ以上ない程に。なあイオリ、ご両親卒倒するんじゃないか？」

「結衣姉から説明してもらってるだろうから、信じてはないだろうけど卒倒は……どうだろう、分かんない」

パパは2次元感全開でパパって呼べば多少は落ち着いてくれるかもしれないけど、ママの方はなあ…凄く、すっごく心配かけちゃってただろうから叩かれるくらいの覚悟は出来ている。勿論、違うって、否定される覚悟も…ないことは、ない。

「とりあえず、当たって砕ける」

「そうだね！　いつまでもここで話してるのもおかしいし」

心が壊れてしまいそうな想像を振り払い、ロイドの手をぎゅつと握る。うん、少しは落ち着けた。大好きな人達が隣にいる、恐れる必要は一切ない！

そう鼓舞しても若干震える手で、私はインターホンを押す。するとそんなに時間は経たずにドアがガチャリと開いた。

「あら、お帰りなさい蒼矢。寒かったでしょ？　ゆっくりしていくといいわ」

「うん、ただいま！　結衣姉」

「後でゆっくり、ロイド君との事も聞かせてね？」

「あう…」

「お邪魔する」

「お邪魔します」

優しく出迎えてくれた姉ちゃんに涙しそうになり、ロイドと繋いだ手を見られてそんな事を言われ私はほっぺが熱くなるのを感じた。多分顔真っ赤なんだろうなあ…

うう、そんなにニヤニヤしないでよう…

「それで、今回蒼矢達はいつまでこっちにいる予定なの？」

随分と来たのが前に感じるリビング、みんなでそこにある炬燵に入りながら姉ちゃんはそんな事を聞いてきた。隣にいるのがロイドだから、正直凄く落ち着かない。密着してるし顔から火が出そう。

「やる事もなくなっちゃうだろうから、1週間と少しかな。パパとママにも会いたいし」

「ロイド君はそれでいいの？　折角のお正月なのにご両親といなくて

寂しくない?」

「はい。向こうの世界にはお正月っていう風習はありませんし、こっちにくる前に少し一緒にいましたから」

ロイドが言う通り、私達はここ何日かメイさん達と一緒にいた。正確に言うなら、多分私達が来たせいで起きた問題を一緒に解決してただけだけどそんなに意味は変わらないと思う。

地球に来るのが大晦日当日の朝になっちゃった原因もそれなんだけど、詳しい事は割愛する。昨日のお昼頃、もう面倒になって更地にして焼却してきただけだし。病を振りまく巨大ネズミ及び小型の眷属とか、戦うのも説明も正攻法でやってたらいつまでも続いちやうもん。

「ねえねえ結衣姉、大晦日だからいると思ってたんだけど…パパとママは?」

「買い物に行ってるわよ? ほら、お正月だから伊達巻とか紅白蒲鉾とか色々あるじゃない」

「あ、そっか」

そういえばそうだったなあと思い出したのとはほぼ同時に、車がバツクする音が聞こえてきた。むう、地球だからって気を緩め過ぎてたかもしれない。

「それじゃあ、私の事は説明してあったりするの?」

「ええ、私も天上院くん、それに檜山先生だったっかしら? 3人で説明したわ。公式の情報であなた、海棠くん、藻部島くんの3人が死亡者って公表された直後にね」

「そんな事になってたんだ…」

そっか…私、もう死人扱いかあ。仏壇に私の写真とかあったりするのかな? 自分で自分にお線香をあげる…不思議すぎる気分になりそう。

「ママは信じてくれなかったけど、多分あなたを見れば一発だと思うわ。何もかも変わっちゃってるけど色んな癖はそのままだし…何より、姉である私が見抜けた事を親が間違えるわけないじゃない」

「ただいまー、知らない靴があるけど誰か来てるのかしら?」

姉ちゃんがそう自信満々に断言して、リビングのドアが開かれた。現れたのは、会う機会こそ少なかったけど見間違えようもない私の両親。大量の荷物をビニール袋を携えたパパと、カバンしか持ってないママ。

コタツから出て私は服装を整える。そして、惜しげなく銀髪も晒し、明らかに困惑の表情を見せる2人の前に立って、恐怖心を押し殺して言う。

「他のみんなと比べるとすっごく遅くなっちゃったし、あり得ないほど変わっちゃったけど……ただいま、パパ、ママ」

そのまま最後まで言い切ろうとしたけど、平気な顔が保てない。やっぱり怖くなってパパとママの顔が見れない。堰を切ったように涙が出てきて視界が滲む。そのせいか声は震えてきた。うん、でもこれだけは絶対に言いたいんだ。

「別に信じて、くれなくたって、いいし、幾らでも、違うって、偽物って、拒絶して、否定したっていい、けど！ それでもっ、帰ってきたって、それだけは、どうしても、パパとママに、伝えー」

そこから先は私は何も言う事が出来なかった。だけどそれは、涙で喋れなくなった訳じゃない。

遠く遠く、忘れそうな程昔の記憶にあつた匂いが私を包み込んでいた。本能的に安心する温もりに涙が止まらない、とても強いけど優しい力で抱きしめられるだけで心がとても安らいでいく。

だけど、それでも私の心から恐怖の感情はこびりついて剥がれない。前の姉ちゃんと同じ様に、抱きしめてくれるママの背に手を回しているのかが分からない。

「馬鹿ね」

迷い迷っている私の耳元で、涙ぐんだ声でそう言葉が呟かれた。けどそれは決して否定するような声じゃなくて、私の事を安心させる様な柔らかく穏やかな声だ。

「幾ら一緒にいられた時間が少なくても、まるで別人になっても、泣いてる自分の子どもの事を間違えたり、まして拒絶も否定もするわけないじゃない」

「う、うあ…」

「お帰りなさい、蒼矢」

もう限界だった。言葉に出来ないくらい、もう、なんか、アレなのだ。

恥も外聞も投げ捨てて、私は泣き囁るのだった。

◇

「……オリ、おーい、イオリ！」

「ふえ…？」

体を揺らされる感覚に、私は目を覚ました。

「年越しするんじゃないかなかったのか？ 眠いなら眠いで、ベッドで寝てきた方が良くと思うぞ？」

「らいじょうぶ、おきてう」

そうだった。確か年越しまで起きてようと思って、炬燵の魔力に負けて寝ちやっただった。んみゆ、起きたばっかりなせいか呂律が回らない。とゆーか、頭もまだよく回らない…

「それならまあ構わないんだが…ああもう、涎垂らしっぱなしにして」
そんな私の微睡んだ思考は、ロイドが私の口を拭った事により一瞬で切り替わった。

妙にゆっくりと流れる時間の中、涎が垂れていたであろう私の口を拭ったロイドの指が、そのまま口に運ばれていくように見えた。実際には違かったと思うけど、この時の私には確かにそう見えた。

「あむ」

「おわっ!？」

私は即座にその指に食らいついた。生身の方だし痛いだろうから歯は立ててないけど、これでどうにか阻止できた。ふふん、暴食の名前は伊達じゃないのだ。

「なめひゃへるもんへふか」
舐めさせるもんですか

そう言って安心していている私と対象に、ロイドは顔を真っ赤に染めて横を向いている。そしてようやく起動しきった頭で、私は自分をじつと見つめる視線を感じた。……あ、

「あらあら、お熱いわね」

「話に聞いているより、なんか甘いわね…」

ぼつちりママと姉ちゃんが目があった。もう確認しなくても分かる、秒と経たずに私の顔はリングゴみたいに真っ赤になってるだろう。しかも、この状態で固まってしまっただけ動けない。

「パ、パパはそんな事許しませんよー!!」

「ちよ、ちよつと待ってパパ！ 目が、目が絶望的にグルグルしてるから!!」

「大体息子じゃなくて娘にそんな歳から彼氏がいて」

「^{アルト}制止！」

超高校級な絶望の残党な感じで目がグルグルし始めてるパパを抑えるために、咄嗟に魔法を使って動きを止める。それを見て感心してるママと姉ちゃんも、ニヤニヤするのやめてよ…あう。

「これにて、おしまい？」

「ティアもお茶飲んでゆっくりしてないでよお！」

年越しも間近だと言うのに、どんちゃん騒ぎが始まる。忙しいし疲れるけど、何よりこう言う時間が…：大好きなみんなと笑いあえる時間が、私にはどうしようもなく愛しく思えるのだった。

「」「」「新年明けましておめでとぅございます！」「」「」

番外話―お正月

ガヤガヤと色んな言葉が飛び交い、所々にある屋台からは何やらいい匂いが漂ってくる。お年玉が意味を成さなくなった私は今、姉ちゃんと私とロイドで初詣に来ていた。勿論私と姉ちゃんは着物である。ティアがいない？ 何かよく分からないけど、家でパパとママと話しをしてるらしい。

「凄い人混みだな…本当に行くのか？ イオリ」

「うん、お正月だもん！」

近所…というほど近くはないけれど、毎年来ている神社。そのいつもと変わらない人混みを見て、ロイドはうんざりしている。まあ、あつちだとこんな人混みは見ないしね。でも行くのだ。

「それじゃあ行ってくるね結衣姉」

「蒼矢を頼んだわよ、ロイド君」

「はい！ 行つてきます」

軽く姉ちゃんに手を振つて、ロイドの手を握つて私は人混みに突貫する。とは言つても全力を出したら人死が出るから、人の流れに乗る程度だけだ。

「そういえばなんだが…髪、隠さなくていいのか？」

一緒に歩くロイドが、ふと私にそんな事を聞いてきた。まあそれも不思議じゃない、だって私は今銀髪を一切隠してないのだから。そのせいでさつきから注目されてるのも分かってるけど、今は隠したくない理由がちゃんとある。

「うん。黒髪にしてたらこの着物も、ロイドがくれた髪飾りも似合わないでしょ？ 折角2人きりになれたのに、そんなのは嫌だから」

「っ！」

繋いでる手をギュツと握り、笑顔で私は言う。実は地球に帰ってくる少し前から、全然2人つきりになる事が出来てなかったのだ。私は昼夜問わず病気の人を魔法で治してたし、ロイドはロイドで原因を狩りに…って、今考える事じゃないか。

何が言いたいのかというと、結局私は言い逃れようのない程に興奮

…じゃ言い方がおかしいし、ワクワクドキドキしてるのだ。誰がなんと言おうとも、好きな人と一緒にいるのは楽しいのだ！

「それで結局、俺たちは何をする為に並んでるんだ？」

「んーとね、ティアとか駄女神じゃない神様にお祈りする為…かな？」

新年の無事と平穏を祈ったり、1年間の感謝を捧げたりって意味だった筈だよ」

そういう文化のない人に説明するのが、凄く難しい事を今実感した。日本人ならなんとなくで分かるだろうけど、改めて説明してって言われるとどう言えばいいのか分からない。でも、駄女神に祈っても意味がない事だけはなんとなく分かる。

「後は、個人的なお祈い事とかもだね。実際に叶うかどうかは分からないけど」

「へえ、向こうの世界まで効果があればいいな」

言われてみればそうだと思って、クスクスと笑ってしまう。それと私も半分神様らしいし、神様が神様に願い事って何それ。多分お正月の空気が、こんな感じでポワポワとさせるのだろう。

「お願いは今のうちに決めておいた方がいいかもね」

「イオリは何かあるのか？」

「うん。今年1年、誰も死なずに元気でいられます様になってお願いするかな」

多分今年も私は、色々な問題に巻き込まれて死にかけたり無茶をする事になる。主に駄女神の嫌がらせとかで。

そんなつまらないししょうもない事で、今の幸せが崩れるなんて断固反対だからね。願わくば駄女神の上司の神様な通じる事を祈る。

「ロイドは？」

「秘密だ」

「ぶー、けちー」

私はほっぺを膨らまして抗議する。いいじゃん教えてくれたって…って、確かお願い事って他人に言っちゃ駄目なんだったっけ？

そんな事を思い出しながら、久しぶりの他愛もない話しを続ける間に私達の番になった。

「二礼二拍手一礼」

お賽銭を入れ、鈴を鳴らしてから二礼。パンパンと手を叩き、最後
に一礼。出雲大社だと四礼とか聞いたけど、ここは普通にこれでオツ
ケーの筈。

(今年1年リインネートの無駄な邪魔に遭わず、家族みんなが元気で
過ごせますように)

目を閉じ、少し変えた願い事を心の中で言う。向こうに帰る私達だ
けじゃなくって、パパとママ、姉ちゃんにも元気でいてほしいって思
うのは欲張りだろうか？

(その願い、聞き届けた)

そう思った時、頭の中に直接声が響いた。男か女か、若いのか高齢
なのかも分からないけど、不思議と神様と思える声だった。

「ねえロイド、今の聞こえた？」

「何がだ？」

「ううん、それじゃあ気の所為だったみたい」

「そうか？」

後ろが問えるのはマズイので、詳しく話すことはせず退却する。で
も、聞き届けたって言うてくれたし今年は少しマシになるかもしれない。
い。

「偶には、こう言う風にゆっくりするのもいいな」

「そうだねー」

また人の波に乗って、さつきとは逆方向に歩いていく。いつまで続
くか分からない平和だけど、殺伐としてる毎日よりは圧倒的に良いの
は確かだ。

「えいつ」

姉ちゃんの所に戻るまで後少し、つまり2人きりでいられる最後の
時間になったところで、私はロイドの腕を抱える。パパママには見せ
たくない、ちよつと本気の甘えだ。

「歩き辛くないのか？」

「うん、今はこうしてたいんだもん」

「はあ…まあ、それなら良いか」

ロイドも許してくれたし、姉ちゃんとは合流するまで私はそうやって歩いていくのだった。後やりたい事は、おみくじと絵馬とー。

家に帰ってから、ティアがこれをいつも通り見ている、しかもパパママにまで見られていたなんて知らずに。散々弄られ、根掘り葉掘り色んな事を聞かれるだなんて知らずに。

たかな。ほんといつ撮られたんだろう…まあ、この話はどうでも良いので放置する事にする。

「それで、ここに来たって事は私に用でもあるの？ ティア」

「うん。ちよつと相談があつて来た」

そう言うティアの雰囲気はちよつと気まずそうで、手には便箋が握られていた。まさかラブレター？ いや、流石にないか。

「分かったー。でもちよつと待って、このチョコレートだけは作っちゃいたいな」

「了解。そこまで急ぎの要件でもない、ゆつくりやるといい」

「ありがとー」

そうお礼を言った後私は、暫くチョコレート作りに勤しむのだった。最近気が抜けすぎてる気がしないでもないなあ。偶には本気のバト…もとい、ギルドのお仕事を受けなきやダメだね。お金も稼がなきやだし。

◇

「それで、相談つて？」

とりあえず、トリユフへと姿を変えたチョコを食材を積んである所に置いて、それっぽいテーブルと椅子を呼び出しティアと向かい合つて座る。チョコの方に、ちよつと期待して洋酒を使つてるのは秘密だ。

「お茶会の招待状が来た。だから、1ヶ月くらい暇が欲しい。いい？」
「うん、いいよ。ちよつと寂しくなっちゃうけどね。あ、はい紅茶」

ティアに紅茶を渡すと同時に、ケーキスタンドも呼び出してお菓子を配置する。きつと、結構様になつてるんだろなあ…足が地面についてれば。このままじゃ、どう見てもお茶会（笑）で悲しい。ナーサリー呼ばなきや（○）

「それにしても、ティアがどこか行きたいなんて初めてじゃない？どこ行くの？」

「場所は地球。南緯47度9分、西経126度43分の海底。みんなが集まるらしい」

その言葉に、紅茶を飲もうとしていた私の手が止まる。え、ちよつ

と待ってその座標つてももしかしくなくても…と言う事は、お誘いしても
しかして。

「多分、マスターの想像通り。場所はルルイエで、来るのは大体神格。
封印されてたから、久しぶりに行ける」

「えっと、そのみんなって？」

「主催者はクーちゃん。来るのは、ナクアちゃんにイッチャン。
シューちゃんに、ハスくん。後はニヤルさんとか、ウタちゃんとかも
が来るらしい。あと、創造主も」

「うわあ…」

名前だけ聞くと可愛く思えるけど、察するにクトウルフ、アトラク
||ナチャ、イッチャンは分からないけど…イタカ？ シュブ||ニグラ
スとハスターも来そう。最後のは間違いなく這い寄る混沌さんと
クアチル||ウタウスだろう。創造主…アザトースかな？ まあどう
足掻いても、クトウルフ神話勢がごっちゃごちゃだしSAN値がゼロ
になりますわ。

「マスターが心配するような事はない。みんな、私みたいに分体か触
覚。ついでに、何故かほぼ全員ロリかショタ。マスターも来る？」

「謹んでお断り申し上げます」

多分偽物とはいえクトウルフ消し飛ばしてるし。ニヤル様には見
事な出オチをさせちゃったし。あと、曲がりなりにもティアを1回死
なせちゃってるし…マインドクラッシュ間違いなしな気がする。

「そんな事は無いと思うし、させない。寧ろ自慢する。でも、来ないっ
て言うなら分かった。楽しんで来る」

「うん、いつてらっしやい！」

席を立ったティアが、本気の時の装備で出口に繋がる門へと歩いて
行く。そして、そういえばと呟いてこの異界から出る直前、私の方を
振り返る。

「滅多にない、本当のロイドとの2人きり。存分にイチャイチャする
といい」

「え、うあ、うん…」

確かに、一応世界線自体が変わるからティアの覗き見もなくなるだ

ろう。そうになると、確かに誰にも見られず2人つきりになるわけ：
えへへ…

「別に、私はいないからそれ以上の事をしてもいい。????
か、△レとか」 ××××
いと、××と

「ひゃう…あううう…」

気を抜いていた私の耳元で囁かれた言葉に、ボツと私は一瞬で赤く
なってしまう。そしてそのままポカポカと、ロクに力の入ってない腕
でティアを叩く。そ、そそそういうえちいのはまだ早いの！ ふしだ
らNGなの!!

「ふふふ、マスター可愛い。ああそうそう、この世界だと、バレンタイ
ン当日には特別な魔物が出現する。デートがてら、倒してくるとい
い」

「ティアのばかあー!」

麻婆を進呈してあげなくなるような笑顔のティアが去った後も、私
は暫くその場に蹲り1人で悶々として過ごすのだった。

番外話―バレンタイン（2／2）

トンデモナイ爆弾を残してティアが旅立った翌日、結局私はロイドと2人でギルドでクエストを受け、その特別な魔物とやらが出没する場所へと来ていた。

「てつきりティアのお巫山戯だと思ってたけど、まさか本当になってるなんて…」

「来る途中、去年の俺はこれで路銀を稼いだって言ったろ？」

「うん。でも、実際見てみると凄くビックリなんだよ…」

獣人界の一角であるここには、物凄いチョコレートの香りが漂っていた。それもそのはず、今私の視界に写っている物は9割型チョコレートなのだから。

生い茂る木々は、全部お菓子の○こりの切り株みたいになってるし、草もなんか茶色で白い花が咲いている。遠くで噴火してる火山からは、なぜかドロドロと溶けたチョコレートが流れ出している。挙げる句の果てに、魔物までチョコレート化している。全くもって意味不明である。

「そういうえば、魔法は通じるタイプが限定されてるって話だったよね」「焼くか冷やすかしかないって話だもんな」

そのチョコレート化した魔物は、この時期になると無限に沸く上に耐性がキツイらしく処理が面倒なんだとか。戦闘力はそこまで高くないそうだけど、物理ダメを半減して魔法も焼いたり冷やしたり以外は微妙なダメージしか通らないらしい。

因みにかなり汚れるって話だったから髪は下ろしてるし、装備もほぼ普段着に大鎌だけの超軽装だ。些か以上におかしな火山だけど、それがあるおかげでそこそこあつたかいしね。

「よいしょつと。うん、普通にチョコだね」

好奇心のままに近くの木を大鎌で一閃し、切り落とした部分を食べてみた。結果は、中にクツキーの詰まったチョコレートだった。普通に美味しい。

「ほら、行くぞイオリ」

「うん、分かったー」

とりあえず残りを大鎌にプレゼントして、少し離れてしまっていたロイドの元へ走って行く。服装も相まって、なんだか本当にデートに思えてきたのは、恥ずかしいから秘密だ。

それ以外にもう1つ、私がドキドキしてる理由がある。

(このクエストをクリアしたカップルは、その相手と幸せになれる：ねえ)

ギルドの受付嬢さんがコツソリ教えてくれたこの迷信。ありがとうだなあとは思ったけれど、やっぱり嬉しいものは嬉しいのだった。あ、去年ロイドは1人でやってたんだって！

◇

「カカオーツー！」

ドラクエのどろにんぎょうみたいなチョコレート^の魔物。言うなればチョコにんぎょうが、いかにもな奇声を上げて変態的な軌道で襲いかかってくる。この魔物は、さつき食べて見たけど不味かった。カオの%が高いんだろうきつと。

「これでラスト！」

そう叫びつつ振った大鎌が、一挙に6体の魔物を両断した。そして見渡す限り、一個連隊規模で森から出てきたチョコにんぎょうも、残念ながら今で打ち止めのようだった。

それくらいなら魔法で一掃すればいい？ 時折チョコをつまみ食いしてるんだよ？ 運動した方がいいに決まってるじゃん！

「それにしても、全身がチョコ塗^{まみ}れになっちゃってるなあ…」

一息ついて自分の格好を見てみると、返り血ならぬ返りチョコで服も髪もベツタベタになっていた。汗とチョコが混じって中途半端にドロっとしてるから尚のこと気持ちが悪い。

「えつと…たしか…《クリーン》！」

随分と使ってなかった生活魔法の呪文。存在を忘れかけてたそれを使い、一気に汚れを落とす。これって確か返り血とか落ちにくかったはずなんだけど、一気に全部落ちたって事は判定は完全にチョコなんだね…

「悪いイオリ、1匹抜けた!」

「はいはい。シッ!」

汚れも落ちたし心機一転。特に抜けてきた魔物を見ず、両手で持った大鎌を横に薙ぐ様に身体を回転させて振る。そして、私の自慢の大鎌は敵を抵抗無く両断し…

「ふべっ」

振り切った所で、全身に生暖かくドロリとした物が降りかかった。うわ、服の中まで入った。むせ返る様なチョコの匂いで危険は低いと判断して、とりあえず目元だけを拭って視界を確保する。

「えっと、その…大丈夫…みたい、だな」

戻った視界では、義手に槍状態の双剣を保持したロイドが顔を赤くして目を逸らしていた。なんでか分からず手を持ち上げて…即座に理由が分かった。

私の全身は白濁した粘性の高い液体でベトベトになっていた。

直前までの運動で身体は火照っていて、手からボタボタ落ちるチョコレートが何か卑猥な物に見える。念のため魔法で自分の姿を確認してみるとチョコは全身にかかっており…更に今日の前で、つーと私の脚の付け根から太ももを伝って、ホワイトチョコレートが地面に流れ落ちて行った。

「つー」

その場面をしつかり見てしまったらしきロイドは、こちらをチラチラと確認しながらも真っ赤な顔を必死に背けている。視力が良いのも困りものだね。いつも一緒にいるからわかる、若干前かがみになってきてるよロイド。後、一押しかな?

「もう、ロイドのせいでベトベトだよ…」

「流石にそれは狙ってるよな!」

私の巫山戯た言葉に反応したロイドがこつちを向くけど、首を傾げる私を見た瞬間凄い勢いで顔を逸らす。なにこれ楽しい、可愛い。でも流石にこのままの格好でいるのは気持ち悪いし…

「《クリーン》って、あれ? これは落ちないんだ…」

さつきと同じ魔法を使って見たけど、ホワイトチョコレートは落ち

なかった。判定が厳しい。指に付いてるのを舐めてみる限り、ちよつと気分がふわふわするだけでただのチョコみたいなのに。

「うーん…ロイド、ちよつと向こう向いてて」

「あ、ああ」

そう言つてロイドは私とは反対側を向く。うーん…なんかキュンキュンするし、もうちよつとイタズラしたい。

と言うわけで、軽く魔法で壁を作ってから下着を含め、チョコ塗れの服を全部門の中に投げ入れる。そして地面に散らばるチョコを水の魔法で操作し、いつだったか見た童貞を殺すセーター状に形成し身に纏つて壁を撤去する。因みにこの間5秒、誰にも見られはしない。

「ねえねえロイド、こつちを向ーいてー!」

「もういいのか?」

「うん!」

探知の魔法には、ここら一带に人間の反応はない。それなら安心してできる。

不思議そうに言うロイドがこつちを向くのに合わせて、私も背伸びをして高さを合わせる。そして完全に目と目が合い…

「えいつ」

「んっ…」

不意打ちで、本能の赴くままにチューしてみた。子どもっぽい言い方だけど、1番これがしっくりくる。今更だけどチョコ塗れだし…うん、言うなればチョコか。3倍返しは婚姻届?

ほんの数秒だけその状態で固まり、私の方が恥ずかしさに負けてロイドから数歩距離を取る。

「え、えつとね、用意はしてあるけど…本命だし一足先にあげる!」

「…」

顔を真っ赤にしてロイドがフリーズしている。赤いのにフリーズとはこれ如何に。でもまあ大チャンス。いつそこのまま私自身がプレゼントって事に…だめだ、リボンが足りない。

「いえーいー!」

流動するチョコレートという見た目以上の効果が無い服装で、放心

するロイドに正面から私は抱きつく。そしてそのまま頭をマーキングでもするかのようにグリグリと押し付ける。誰にも渡さないもん。「ちよ、ちよっと待て！ それ服じゃなくてチョコだったのかよ！ 当たってる、当たってるから！」

「あててんのよー、がぶー」

チョコの付いていたロイドの首を甘噛みし、ペロペロと舐めてみる。なんだか楽しくなってきた。気分はふわふわするし、なんだか暑くなってきた気もする。

「噛まれるのって、ちよっとしたトラウマなんだからな！」

「ひゃんっ！」

私を引き剥がそうとジタバタするロイドの右手が、私の服を貫通しおへソに当たった。その予想外の刺激に、ついロイドの耳元で変な声を出してしまった。

「ロイドのえっち…」

「謝るけど今のは事故、事故だから！」

体勢をだいしゆきホールドに移行、全身をロイドに押し付けつつ首元に顔をうずめる。なんだかぼーっとする頭のまま、安心する匂いに包まれていく。

「これ以上は本当にマズイから！ なんで酔ってるのかは聞かないからとりあえず服、まともな服を着てくれ！」

「んもう、ぬがしたいだなんてしかたないにやあ…ちやくそー、ふだんぎー」

胸にかけたペンダントから魔力が溢れ、チョコレートにセーターを弾きながら私に装備されていく。そして、普段着の格好に戻ってすぐ、

「ろいどー、だいすきー。えへへ…」

私はそう言っつて、ロイドに抱かれたまま意識を夢の世界に飛ばしたのだった。

後から聞いたのだが、この時私にぶっかけられたのは少しお酒の成分が混じっただけのホワイトチョコレートだったらしい。普通の人なら何も問題はない程度のアルコールだったのだが、パッシヴに発動

してるスキル群の所為で敏感に反応しちやったらしい。

そして翌日、完全にこの時の記憶が残ってたせいで、ロイドとまともにも顔を顔を合わせる事が出来なかった。というか、この日から暫く赤くなってロクに話す事も出来なかった。

番外話―ホワイトデー…？

すう…すう…という、小さい寝息が聞こえる。

視界一杯に映るのは、安心して眠っている寝顔と時折動く狼の耳。

腕から感じる感触は柔らかくて温かい。

銀糸のようなサラサラの髪からは、何か甘くいい匂いがして…

「どうして、こうなった…」

目が覚めたら婚約者とベッドで添い寝していた事実には、ロイドこと俺はそのまま固まる事しかできなかつた。

鼻根目を抜きにしても、こんな可愛らしいイオリの寝顔を崩すのは余りにも悪いから起こすのは却下である。

「いやでも、本当どうしてこうなった…」

「んう…ろいどお…えへへ…」

寝てるイオリが寝言で、なんだかとても気持ち良さそうにそう言った。その顔は、やっぱり凄く幸せそうで…

「……………」

拜啓、隣の人間界にいるお父さんお母さん。もしかしたら、そういう事をしちやつたのかもしれない。

いや違うちよつと待て俺。どれだけ掘り返してもそういう事をした記憶が一切ない。もし本当にそういう事があったんなら、覚えてない俺は余りにも失礼過ぎるゴミ屑だ。よし、思い出せ、思い出すんだ俺…

◆ そうだ、確か俺は夜の分の鍛錬を終えて、部屋に戻って来たんだつた。そしたら珍しくイオリの部屋の光が消えてたから、軽くお湯とタオルで身体を拭いて寝ようとして…

◆ 借りて来た桶などを返し、俺は自分の部屋に戻って来ていた。そして眠気が来ないのいい事に、寝転がりながら魔法の練習をしてる時だった。

コンツコンツ

と部屋の扉がノックされた。こんな時間に訪ねてくるなんて誰だ

ろうか？ 今は平和だし、まあ別に悪い輩じゃないだろう。

「いいぞー」

キイ…と扉の軋む音を響かせ、返事も無くその人物は部屋に侵入して来た。怪しさを感じそちらに目を向けると、果たしてそこにいたのは…

「ん、どうかしたのか？ イオリ」

髪を下ろして目をこすり、着崩れたパジャマという目に毒な格好をしたイオリだった。いつもは可愛らしくも頼もしい婚約者の目が、珍しく恐怖に彩られているのを見て、俺はそう問いかけずにはいられなかった。

「…すつぐくこわいゆめ、みた」

「どんなだ？」

「わたしもろいどもしんじやうゆめ」

目に涙を一杯に湛えて、夢の内容を言ってくる。あり得ないとは思ったけど、確かに怖い夢のようだった。人間である以上、ちよつとしたミスでそれが現実になる可能性も0じゃないだろう。

「…いっしょに、ねよ？」

抱きつかれて、涙目で、上目遣いでそう言われて拒否なんて出来るはずもなかった。

◆ そうだ、確か俺はそうやって了承して…

「よし、思い出した。俺は何もしてない。セーフセーフ」

イオリを起こさないように小さな声で、けれど身の潔白を確信した俺は内心ガッツポーズをする。

記憶を思い出して見てみると、俺の腕を枕に寝ているイオリの顔には確かに涙の跡があるし、よつほど怖い夢だったんだろう。

「んっ、ふう……」

思わずイオリの頭を撫でていた手を、そんな声が聞こえた瞬間引き戻す。ふわふわでサラサラで、こう、なんていうか止まらない感じだった。それはこう、このままいっそ……いや静まれ煩惱。

「よし、寝よう」

このままイオリが起きるまで煩惱と戦うよりは、鍛錬をサボってでも寝た方が精神衛生上いいだろう。そう自分に言い訳し、俺はイオリを抱き寄せて目を閉じた。

◇

!?

あ…ありのまま、今起こった事を話すぜ！

私は自分の部屋で寝ていた筈が、起きたら婚約者と抱き合ってた…な、何を言ってるか分からないと思うが、私も何があったのか分からない。頭がフットーしそうだよお！

「あうう…」

ごめんなさい嘘だけどホントです。ちゃんと寝惚けた自分が何したのかくらは覚えていてあります。で、でもでもこんな超至近距離で抱きしめられて、一緒に寝てるとかそんなの予想外というかなんというかわー！わー！わー！

ベットの外に出していた尻尾が、私の意思に反してバタバタと狂ったように暴れまわっている。船のスクリューみたいにブンブン振り回されている。

「えと…えと…」

ちよつとゴツゴツした手とか、男の子っぽいがっしりした腕とか、私のじやないのに凄く安心する匂いとか、温もりとか、すっごい違い顔とかもうやばい。何がかは知らないけどやばい。この状況にどこがとは言わないけどキュンキュンする。瞬間湯沸かし器並みに顔が赤くなつていくのを感じる。そろそろ湯気も出てくるかもしれない。うなーっ!!

「ひゃうっ」

心の中の大暴走が終わらない私を、寝ているロイドがグイッと抱き寄せた。うあ、これマジイ。顔更に近いしあわわわ!!

でも、凄く落ち着く。昨日見た幸せが壊れる夢を思い出すと、もつとロイドとこうしていたいって気持ち膨れ上がってくる。別にえちい事に繋がらなくても、暫くはロイドをこうして感じていたい。

「少しは、いい…かな」

「顔に書いてあるし、尻尾とかが分かりやすいからな」

自分には本来ないケモミミ付近を撫でられて、ピリピリズムズムズとした感覚が伝わってくる。これは誘われて…いや、私が誘ってる…？いやでも、こんな事して嫌われたら…私は…

「大丈夫、嫌いになつたりしないよ。」

それに俺だつて、誘惑に堪えるのつて辛いんだぞ…？」

…今までの私の頑張りには、どうやら無駄ではなかったらしい。

それに、言つてしまえばさつきからずっと当たっている。ナニとは言わないけど。そのせいで全身に走る甘い疼きが、私の頭から正常な思考を奪つていく。

「う、うう…」

幾多もの選択肢が頭に浮かんで消えていく。あーでもないこーでもないが無駄に高速回転する頭で考えて…結局、私は全身に込めていた力を抜いた。

「いいよ、ロイド。私がロイドのものだつて事、刻み込んであげる！フフ、怖いかな？」

そうして、意を決して私は言うのだった。力を込め直しグルリと体勢を変え、ロイドを押し倒した格好へと移行する。

「いいや、可愛いよ」

「ツ~~~~!!」

ほっぺたを触られて、凄く嬉しくて恥ずかしくて顔が熱くなる。いつから私は、こんなにもチョロい女の子になつてしまったんだろうか？でも、ロイドにだけはこうでいいし、狼さんをなめたロイドが悪いのだ。

「責任、とつてもらうんだからー」

私の大切な人と初めて過ごしたホワイトデーは、ホワイトデー（意味深）になつたのだった。

番外話 エイプリルフル

「マスター、今戻った」

日課の鍛冶をしていると、なんだか随分と懐かしい声が聞こえた。1ヶ月くらい言って言ってたのに、結構時間が伸びたみたいだね。

「おかえりー、ティア。どうだったー?」

「楽しかった。かなり久しぶりの、全員で集合する……………」

こちらに近づいてくるティアの顔が、無表情から段々と驚愕の表情へと変わって行く。その事に首を傾げていると、ニヤリと愉悦スマイルを浮かべて言い放った。

「そういうマスターは、もうユニコーンには乗れない身体になった。まさか、本当にやるとは」

カーンカーンと鉄を打っていた手が止まる。なぜ、バレた。

「な、ななななな!?!」

「ふむ、添い寝からの発情。勢いのまま襲って、食ったと。マスターが、まさか肉食系だったとは」

「見るなー!!」

真つ赤に焼けた、未だ成形も終わっていない直剣を振り回す。というか見たのか、過去を覗き見したようちの精霊_子! プライバシーの侵害だ! よく見たら目に魔法陣が浮かんでるし絶対そうだ!

「ふむ、見事にアh「メ テ オー!」

これ以上喋らせちゃいけない。そう確信して隕石での攻撃を実行する。どうせこれくらいじゃティアは怪我しかない。なら問題なんてない、イイネ?

「全く、初めてが獣っ娘とは業が深い。因みにマスター、ここに首輪と鎖があるんだ」

「衝撃の、ファーストブリットオオツ!!」

無傷で流星群を消し去ったティアに、私はススだらけの手で殴りかかる。私のおててはティアのほっぺにクリーンヒット。結果、ティアは錐揉み回転しながら金属の塊に突っ込んだ。

「はあ…はあ…はあ…」

「マスター、そう怒らない。だって、マスターが日本人で、えちい事に興味しんしんな事は、私が一番よく分かっている」

「撃滅の、セカンドブリット」

「落ち着け」

「ふぎゅっ」

2発目のパンチを繰り出そうとした時、足払いをかけられ転んでしまい、馬乗りされる事を許してしまった。ちくせう、やっぱりセカンドブリットは当たらないか。いやちよつと待て。この体勢つてもしかして…

「た、食べないでください！」

性的に

「食べないよ」

いや、そんな愉悦スマイルを浮かべられたままじゃ信用できないです。

そんな事を思っていたら、驚くほど簡単に私の上から退いて、身体についたゴミを払ってティアは立ち上がった。

「確認は取れたし、これでよし。マスター、今日がなんの日か知ってる？」

「今日…？」

少し前にほ、ホワイトデーがあつて、それからだから…

「エイプリルフル？」

「そう、今日は四月一日。こっちの世界にもある、嘘をついても許される特別な日」

愉悦スマイルを浮かべたままのティアが、邪神としての本領を發揮した。

「それじゃあ、ロイドを騙しに行こう」

「えっ」

◇

「あの、その、ね、ロイド。調べてみたら、この間の、その…あれで…ね？ できちやった」

宿に帰ってきた俺を出迎えたのは、そんな途轍もなく衝撃的な発言だった。頬を染めて、そう言ってくるイオリを見て固まってしまったのも事実だ。

「……………いや、今日が嘘をついてもいい日だって言っても、流石にそういう洒落にならないのはやめような？ まあ、多分ティアさんが言わせただろうけど」

けど、それを信じるかどうかは別の話だ。

イオリが1人なら、きつと信じてしまっただろう。だけど、奥の方にビデオカメラを構えるティアさんがいたので、騙される事はなかった。いや、訂正する。ティアさんを見つけるまでは騙されていた。

「ちつ。バレた、つまらない」

「いやいや、流石につくならもうちょっと小さな嘘の方が信じれると思うぞ?」

真つ赤な顔をして俯き、プルプルしているイオリの頭を撫でつつ、ティアさんの事を咎める。流石にこれは、不謹慎だ。

「甘いね、ロイド。もしも、バレたと言ったことが嘘だったら?」

「なん、だと。いやいやまさか」

まさか、だよな…?

「うん、全部ティアの嘘だよ。もしそうなら、私こんなに落ち着いていられないもん」

「そうだよな、良かった…」

ティアさんの性格の悪さが、邪神と言われてる理由がよく分かった気がする。本当に、心臓に悪い……

「はいマスター、ここで本心をどうぞ 《オーネスト》」

ティアさんが手の中のコインを握りつぶし、そこから発生したキラキラとした光がイオリに向かって飛来し包み込んだ。

「別にそう言われても…私はロイドとの子供、欲しいけど?…ハッ!?」

イオリが何でも無いように答え、驚愕し、顔を蒼褪めさせた。そして、ギギギと油の切れた機械のようにゆつくりとこちらは顔を向けて

出て来た腕を組んだ女神様が、宿の部屋ごとティアさんを吹き飛ばし大爆発を引き起こした。

宿代をかなり払うことになったし、部屋自体を作り直す事になったけれど後悔はしていない。巨悪は滅びたのだ。

Die | u t | d i e c o n t i n u e d b e
a t u s e s t

チュンチュンと雀の様な鳥がお喋りをし、暑くなってきた風が頬を撫でて通り過ぎていく。そんな地球の暦で言うなら6月の中頃、私は正真正銘自分の家で寛いでいた。縁側はいいものだ。

「♪♪♪♪」

「マスター、今日は随分と機嫌が良い」

「そりやそうだよー」

小声で会話する私の膝の上、そこには眠っているロイドの頭がある。縁側に座って、大好きな人の寝顔を眺められて……今の私は、世界で1番幸せだ。勿論大切な相棒^テと一緒に居なくちゃ、この幸せは成り立し得ないけどね。

そんな事を思いつつ、ロイドの頭を撫でてみる。少し固い髪の毛が私の手をチクチクと刺激し、それが気になったのがロイドが若干身じろぎする。起きては……ないみたいだね。

「なんせ、あれから3年。そこまで酷い問題も起こらず、平和に生きていられてるんだから」

「私としては、少し、刺激が足りない」

「それが平和って事だよ、ティア。でも今度、どつかのダンジョンにでも遊びに行こっか」

返事がないけれど明らかに嬉しそうな顔に変わったティアと共に、自分が整備している庭を見ながら、私はこの平和な日常を私は満喫するのだった。

ここは獣人界【獣王国・シヤルフ】の一角、そこに構えた私のお店兼自宅。あの激動の1年とは違いこの国に根を下ろした私は、今年で11歳になった。背は全くほぼ伸びてないけど。

そして大きな変化が1つあった。既成事実でロイドをがっちりと捕まえていた私は、最近ようやく結婚する事ができた。大丈夫、異世界だから合法だよ！

「……寧ろ、マスターはよく2年も結婚を我慢した」

「ナチュラルに心を読まないでよ……もう」

軽くティアをこずく私の手とは反対の左手、そして寝ているロイドの左手薬指には同じリングがキラリと光っている。

私を超える腕の職人さんがいなかったから、ロイドと一緒に作ったそれは、色々と細かな装飾を施した銀色の台座に綺麗にカットしたエメラルドが嵌め込んである。

ちよつと洒落にならないほど思^いいや概^み念を凝縮しすぎて、情報の密度が頭おかしな事になってるけど気にしちゃいけない。私の大鎌が弾かれるくらいだけど気にしちゃいけない、イイネ？

「マスター、ニヤニヤしてる」

「いいじゃん、それでも」

そう色々と意味を込めた「いいじゃん」を言ったのとはほぼ同時に、私の耳がチリンチリンというお店のドアが開く音を捉えた。

「ん、行ってくる」

「ありがとね、ティア」

こうやってティアが代わりに行ってくれるのも、いつもの光景、いつもの日常。私のバーサーカー気質は抜けてないし、鍛冶キチ具合は悪化の一途を辿ってるから仕方ないね。

私はここで趣味と仕事をしつつロイドの帰りを待つて、ロイドはSランクの冒険者として色々な所で所謂塩漬け依頼を解決している。偶に私も同行してるけど。

そういう依頼の中には、長期間拘束される物も間々ある。そういう時は同行したりするのだが、こうしてロイドとこうしてられる時間はそこそこ貴重だったりする。だからこそ、全力で甘えて、全力で甘えてもらうのだ。

「♪♪」

そんな小難しい考えは一先ず頭から追い出し、私は再び優しい鼻歌を歌いながら、ロイドの頭を撫でるのだった。

◇

「あなた達は、お互いを、その健やかなるときも、病めるときも、喜び

のときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか」

「はい、誓います」

そんな唐突な始まりに、これは夢だと私は確信する。ロイドはタキシードだし、私はウェディングドレスだし、細部がモヤモヤしているし、前後の繋がりが全くない。

その、結婚式をあげたのは、実はほんの一週間程前だ。異世界式（人族・獣人族）と地球式が混ざり合って、ある種混沌としていながらも神聖だったこれの事を、私は生涯忘れる事はないだろう。……実際、今も夢として思い出してるんだし。うう、思い出したら恥ずかしくなってきた。

一応明晰夢に分類させるであろうこの夢は、けれど私の意識とは別に進行していく。今更だけど、私とロイドの身長差って今の時点で40cmはあるんだよね……凄く凸凹だ。

「新婦となる私は、新郎となるロイドを夫とし、良いときも悪いときも、富めるときも貧しきときも、病めるときも健やかなるときも、死がふたりを分かっまで、愛し慈しみ貞節を守ることをここに誓います」

よく、あの時の私はこんなに長い言葉、恥ずかしながらに言えたよね……そんな事を思いつつ、何故か動く視界で周囲をぐるりと見渡す。

私の人生の晴れ舞台とも言うべき時だったけれど、以外にも参列してる人数は少ない。ロイド側はメイさんとシンディさんしかいないし、私の側も家族しかいない。いや、結婚式自体初めてだからわからないんだけどね？ 他にはリユートさん夫妻やタクはいるけど、暴走したクラネル師匠を止めてもらってるから鈴華さんはいない。

そこまで考えて、なんとなく気がついた。これは多分、ティアの記憶だ。と言う事は犯人も見えたとし、ここから脱出する方法も見えた。だけど、最後まで見ていたい。ティアから見た私たちを。

そのまま神父さんの進行によって、順当に式は進んでいく。

今の私も指輪を交換する時の私も、顔を真っ赤に染めて、けどとても幸せそうで、自分で見ていて頬が熱くなってくる。隣にいるロイドも、惚気だけどすごくカッコいいし。

「では、ベールをあげてください。誓いのキスを」

神父さんの宣言によって、私の視界を覆っていたヴェールがロイドによって持ち上げられ……

◇

「あふ……」

欠伸をしながら、私の意識は現実世界へと引き戻された。けど何やら体勢がおかしい。身体にかかる重力的に、この体勢だと……

「おはよう、イオリ」

まっすぐ見上げた先に、ロイドの顔が存在していた。つまり私が膝枕をしてもらってる体勢だ。……十中八九ティアの差し金だろうね、あんな夢を見せて、こんな体勢にしていくなんてそうとしか思えない。

「んっ……」

成長の兆しが存在せず未だ幼女としか言い表せない長さの手では足りないなので、魔法の力も使ってロイドの顔を引き寄せそのままキスを実行した。

夢の中で直前まで見せられたせいで、言っちゃえば欲求不満だったんだから仕方ない。そのままたっぷり数秒その体勢を維持し、満足がいったので顔を話して私は満面の笑顔で言う。

「おはよ、ロイド。……それとも、あなたの方がいい？」

「いや、名前で呼んでくれた方が嬉しい」

「そっか、わかったよロイド」

そのまま私は、頭を元の位置に戻し膝枕を満喫する。無意識に出た獣耳がピコピコと動き、尻尾がパタパタとし始める。「別に良いじゃん、まだ子供なのだから」と自分に言い訳をしつつ、勝手に夢の埋め合わせを敢行する。

「ねえロイド。これからどうしよつか？」

「どうって？」

「また、どこかを旅したりしたい？」

必然的に上目遣いになるけど、そのまま私は質問してみる。今のこの日常も十二分以上に満足なのだけど、そこは人間。もつと、もつと欲望は際限なく溢れてくる。要するに、女の子の面とか鍛冶師の面だけじゃなくて、私の冒険者としての面もどうかしたくなってくる……というのも本音だけど、実際はもつと簡単に言い表せる。新婚旅行したい、以上。

「そうだな……まだ行ったことのない場所はあるにはあるけど、所謂秘境で超危険地帯だしな……いつかイオリが言ってた『異世界群を旅行する』なんてのも良いかもな」

「そっか、えへへ……」

その言葉を聞いただけで、胸の奥がぼかぼかして、顔がにへらあと緩んでしまう。我ながらチョロいとは思うけど、これが私。カレス・オブ・メドゥーサ女神の抱擁は撃てないけどね。……ちよつと待った、深刻なキヤラ被りを感じる。これはちよつと第七特異点に行く必要が出てきたかもしれない。

「それじゃあ、旅行中のお店は任せて。2人でゆっくり、楽しんでくるといい」

「ティアア！」

ふらりと戻ってきていたティアアが、そんな事を言ってくれた。ナチュラルに心を読まれてたみたいだ。

余談だが、愛すべき我が家は核の連打でも揺らがない結界で護られるし、地下に作ったダンジョンによって食料事情も問題なし、ダンジョン内に作った動力室から供給される魔力で動く整備用の機械／魔法もあり、特殊な磁場が発生してるから人理焼却にも理論上は耐える事が出来る。その他諸々、随時設備は追加中だ。

はい、どこからどう見てもやりすぎですありがとうございます。

「まあ、流石にしばらく忙しいだろうから、行くとしたら結構先になるだろうな」

「私はそれでも十分だよ」

そう話す私たちを、チュンチュンと鳥が話しながら見つめ、夏の匂いを漂わせ始めた風が、祝福するように駆け抜けていった。

これより紡がれていくのは、最大の役目を果たした英雄達の物語。

或いは、少し大人ぶった女の子と、その女の子にいつも寄り添っていた男の子の紡ぐ物語。

いつかの未来、夫婦はこの世界の神様に仲間入りする事になるのだが、それはまた別の話。